九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集　第１集

大宰府学研究

九州国立博物館

大宰府学研究

九州国立博物館

序　　文

九州国立博物館は、平成17年（2005）10月16日に、東京・京都・奈良に次ぐ４番目の国立博物館として、九州・太宰府の地に開館しました。当館は、国（独立行政法人国立文化財機構）と福岡県（福岡県立アジア文化交流センター）が連携協力して管理・運営を行っている点でも画期的な、新しい国立博物館です。

太宰府の地は、「西都」とも称された古代都市・大宰府が置かれた要地であり、古くから日本の玄関口として国内外との文化交流の中心地でありました。このような縁もあり、九州国立博物館は「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」ことをコンセプトに掲げ、博物館活動の一つとして、福岡県立アジア文化交流センターを主体に「大宰府学研究」事業を実施しています。本事業では、関係機関や地元市民と連携しながら、大宰府に縁のある資料・民俗文化財等を調査研究し、その成果の公開・活用に務めてまいりました。

この度、大宰府史跡発掘50年を期にこれまで実施してまいりました大宰府学研究の成果を、『九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集』として取りまとめました。本論集は、これまでに蓄積してきた研究成果をより広く発信し、活用いただくことを目的としたものです。また、「平成」最後の年となる平成31年（2019）に刊行する本論集が、次の時代の学術的基盤として、更なる前進の弾みになることを期待しております。

最後になりますが、大宰府学研究の実施に際し、ご協力を賜りました関係機関・市民のみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成31年３月31日

九州国立博物館副館長
福岡県立アジア文化交流センター所長
小　川　　諭　吉

例　言

1．本書は、平成17年（2005）から平成31年（2019）にかけて、九州国立博物館及び福岡県立アジア文化交流センターが、関係機関と連携して実施してきた「大宰府学研究」の成果を収録した論集である。

2．本書の執筆者は、次のとおりである（五十音順・敬称略）。

赤　司　善　彦（大野城心のふるさと館館長）
赤　沼　　潔（東京藝術大学教授）
石　木　秀　啓（大野城市教育委員会）
井　上　信　正（太宰府市教育委員会）
今　井　涼　子（九州国立博物館）
入　佐　友一郎（福岡県教育庁）
上　田　龍　児（大野城市教育委員会）
大　高　広　和（福岡県世界遺産室）
岡　　崇（宗像市世界遺産課）
岡　寺　　良（九州歴史資料館）
小　田　富士雄（福岡大学名誉教授）
小　田　和　利（九州歴史資料館）
川　村　佳　男（九州国立博物館）
楠　井　隆　志（九州国立博物館）
小　嶋　　篤（九州国立博物館）
酒　井　芳　司（九州歴史資料館）
笹　生　　衛（國學院大學教授）
佐　藤　　信（東京大学名誉教授）
重　藤　輝　行（佐賀大学教授）
下　原　幸　裕（福岡県教育庁）
菅　谷　文　則（奈良県立橿原考古学研究所所長）
杉　原　敏　之（福岡県教育庁）
長　　直　信（大分市教育委員会）
松　尾　尚　哉（宇美町役場町誌編さん係）
松　川　博　一（九州歴史資料館）
松　﨑　大　嗣（指宿市教育委員会）
森　　弘　子（太宰府発見塾塾長）
南　　健太郎（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）
向　井　一　雄（古代山城研究会代表）
森　　公　章（東洋大学教授）
矢　野　裕　介（熊本県教育庁）
山　村　信　榮（太宰府市教育委員会）

3．本書の執筆分担は、目次に記すとおりである。なお、収録した論考の初出資料は、「序論 第3章 本書の構成」で整理している。

4．大宰府学研究にご協力頂いた関係機関は、次のとおりである。

（1）関係機関

宇美町
大野城市教育委員会
九州歴史資料館
熊本県教育委員会
財団法人古都大宰府保存協会
財団法人太宰府顕彰会
太宰府市教育委員会
太宰府市文化ふれあい館
太宰府天満宮
宝満宮竈門神社
歴史公園鞠智城 温故創生館

（2）個人

木　村　龍　生
栗　原　隆　司
毛　利　清　隆

5．本書の編集は、各関係機関・執筆者の協力を得ながら、小嶋篤が行った。

目　次

序論　大宰府学研究の目的と経過

第１章　研究の目的　赤司　善彦　小嶋　篤 …… 3
第２章　研究の経過　赤司　善彦　小嶋　篤 …… 5
第３章　本書の構成　小嶋　篤 …… 9

第１部　大宰府の器と編年

第１章　西海道の土器編年研究　長　直信 …… 13
第２章　西海道北部の土器生産　石木　秀啓 …… 41
第３章　西海道南部の土器生産　松﨑　大嗣 …… 61

第２部　大宰府と古代山城の年代論

第１章　大宰府と古代山城の誕生　赤司　善彦 …… 85
第２章　大宰府造営の年代論　杉原　敏之 …… 97
第３章　日韓古代山城の年代論　向井　一雄 …… 105
第４章　有明海沿岸における古代山城の年代論　矢野　裕介 …… 129
第５章　瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代　南　健太郎 …… 139

第３部　筑紫の大城

第１章　古代山城とＧＩＳ　赤司　善彦 …… 153
第２章　大野城の研究成果　赤司　善彦 …… 165
第３章　糟屋屯倉と怡土城からみた大野城　重藤　輝行 …… 169
第４章　文献史料からみた大野城　松川　博一 …… 173
第５章　大野城の土木技術　入佐友一郎 …… 177
第６章　大野城と古代日本の戦争　小嶋　篤 …… 181
第７章　大野城と宇美の歴史的繋がり　松尾　尚哉 …… 185
第８章　大野城築城と新羅　上田　龍児 …… 189

第４部　大宰府の官衙と諸司

第１章　大宰府の機能と律令国家　佐藤　信 …… 195
第２章　大宰府の官衙　森　公章 …… 203
第３章　大宰府の諸司　松川　博一 …… 211
第４章　大宰府史跡出土の付札木簡　酒井　芳司 …… 217
第５章　前面官衙跡の調査研究成果　小田　和利 …… 223
第６章　蔵司地区官衙跡の調査研究成果　下原　幸裕 …… 229
第７章　鉄から見た大宰府官衙　小嶋　篤 …… 235

第５部　大宰府の客館と響銅

第１章　新羅王子がきた時代　小嶋　篤 ……243
第２章　「西の都」大宰府と外交施設　井上　信正 ……247
第３章　輸入陶磁器と喫茶文化　井上　信正 ……259
第４章　大宰府出土の響銅　井上　信正 ……263
第５章　響銅でつながる大宰府と東アジア　川村　佳男 ……267
第６章　現代の鋳金作家からみた極薄青銅器　赤沼　潔 ……271

第６部　山岳信仰と宝満山

第１章　山岳信仰の考古学　菅谷　文則 ……279
第２章　考古学からみた宝満山信仰の始まり　小田富士雄 ……283
第３章　宝満山の歴史と信仰　森　弘子 ……287
第４章　宝満山と古代大宰府　酒井　芳司 ……291
第５章　宝満山の最新発掘調査成果　山村　信榮 ……295
第６章　宝満二十五坊の姿　岡寺　良 ……299

第７部　大宰府管内の信仰

第１章　宗像・沖ノ島と胸肩君　小嶋　篤 ……303
第２章　宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果　小田富士雄 ……311
第３章　宗像・沖ノ島祭祀の実像　笹生　衛 ……321
第４章　巨岩と社殿　小嶋　篤 ……331
第５章　沖ノ島祭祀と遣唐使の航海　大高　広和 ……337
第６章　御長手神事と沖ノ島　岡　崇 ……343
第７章　マツリの記録　今井　涼子 ……349

終論　大宰府学研究の成果と展望

第１章　研究の成果　小嶋　篤 ……357
第２章　研究の展望　楠井　隆志　小嶋　篤 ……367

序論

大宰府学研究の目的と経過

万緑の大宰府政庁跡

序論　大宰府学研究の目的と経過

第１章　研究の目的　　赤司　善彦・小嶋　篤 …… 3
第２章　研究の経過　　赤司　善彦・小嶋　篤 …… 5
第３章　本書の構成　　小嶋　篤 …… 9

序論では、大宰府学研究の目的と経過を記す。大宰府学研究は、九州国立博物館のコンセプトである「地域と連携し、相互に協力しながら行う」活動の一つである。第１章では、大宰府学研究の定義を記し、研究の指針を明らかにする。第２章では、九州国立博物館が実施してきた事業のうち、とくに大宰府学研究に関わる事業の実施状況を整理する。第３章では、本書に掲載する論考（講演会・シンポジウムの当日配布資料含む）の初出資料を明示する。

大宰府政庁跡と四王寺山（大野城跡）

第１章

研究の目的

赤司　善彦　　小嶋　篤

１．九州国立博物館と大宰府学研究

九州国立博物館は、アジアとの文化交流の歴史をテーマとして、九州・太宰府に設置され、平成17年（2005）10月16日に開館した。開館に至るまでには官民挙げた誘致活動の歴史があるが、設置場所の選定に関しては、様々な各県の思惑があるなかで最終的にこの太宰府に決定している。それは地理的な福岡県の太宰府市ではなく、古代より対外交渉の拠点であった大宰府という歴史的役割が決定打となり各県が合意した経緯がある。つまり、九州国立博物館は、大宰府という文化遺産を母にして産み出されたといってよい。国も大宰府史跡の長きに渡る保存運動の一つの到達点として、九州国立博物館を位置付けたのである。こうして、大宰府史跡という野外ミュージアムと対をなし、新しい活用を探るミュージアム九州国立博物館が開館した。

以上をふまえ、九州国立博物館は開館以来、市民との共生･協働を念頭に置いた事業を展開してきた。その事業の一つが「大宰府学研究」である。大宰府学研究の目的とは、市民とともに大宰府を基点に形成された歴史的環境を研究し、その成果の公開・活用を考えることにある。

では、大宰府学研究が研究対象とする「大宰府を基点に形成された歴史的環境」とはなんだろうか。

本環境を象徴するのが、現在の大宰府政庁跡の景色である。大宰府政庁跡の中央から北を望むと、まず正面に基壇と礎石が目に映る。これらは天慶４年（941）の藤原純友による焼き討ち後に再建された正殿跡であり、地下にはさらに古い正殿跡や古代以前の遺跡が眠る。この正殿跡の中央で、存在感を一際放つのが太宰府三碑とも呼ばれる石碑群である。これらは福岡藩の儒学者、貝原益軒や亀井南冥にも縁のある石碑群で、大宰府顕彰のために明治・大正年間に建立されたものである。次に正殿跡の背後に目を向けてみよう。緑色の山林が四王寺山山頂まで途切れることなく広がっていく。この四王寺山に、大宰府守衛の要である古代山城･大野城は築城された。山頂から続く尾根線には､城壁である土塁が延々と伸びる。また､山の中腹、平野に突き出るように伸びる尾根線には、中世山城の岩屋城跡も存在する。このように、大宰府政庁跡の景観には、太宰府が歩んできた歴史の累積そのものが眼前にある。

加えて重要なのは、この景観が漫然と存在してきたのではなく、先人が考え抜き、今日まで守り続けてきた「文化的景観」であるという事実である。大宰府政庁が置かれた四王寺山山麓は、1963年に大規模な宅地造成計画が立案され、国・県・町・住民を巻き込んだ開発と遺跡保存のせめぎ合いの舞台となった。この議論は国会でも取り上げられるなど、遺跡保存問題の象徴的事案として展開した。大宰府史跡の調査研究は、住民への理解・協力を求めていく根幹事業として始まったのである。つまり、現在の景観は、人々が学術的研究成果も素材に、大宰府を基点に形成された歴史的環境について考え、問い続けてきた結果の姿と言えよう。九州国立博物館が実施する大宰府学研究も、太宰府の歴史的環境を学び問う過程を通じて、当地の「新たな文化的景観の形成」に寄与することが期待される。

２．大宰府学研究の視野

大宰府学研究が研究対象とする歴史的環境の範囲を確認する。まず時間的範囲を見てみよう。遺跡としての大宰府史跡は、当然、大宰府官衙・古代山城を中心とするが、弥生・古墳時代の集落、さらに古くは旧石器・縄文時代の狩猟痕跡も内包する。遺跡は、これらの各時代の営みが古代都市・大宰府の存

立基盤であることを物語っている。つまり、大宰府学研究の時間的範囲は、人類史と同義であり、自然地理学においては先史以前も範疇に含むと定義できる。

次に空間的範囲を把握する。西海道には都からの派遣官人のみならず、東海道・東山道の人々も防人や俘囚として、多数滞在していたことが判明している。彼らを認識するためには、日本律令制内のみならず、その外域の把握が必要であることは多言を要さない。南に目を向けると、奄美群島で生産されたカムィ焼は大宰府でも流通しており、古代の流通を把握するための体系的研究が求められる。より遠隔地からの輸送品としては、シルクロード経由でもたらされたイスラム陶器やガラス類、東南アジア原産の香木類等があり、これらは日本の玄関口とも言える大宰府に集積された。つまり、物質資料のみに着目しても、大宰府学研究の空間的範囲はユーラシア大陸および周辺諸島群の全域におよぶ。あわせて、文化人類学的視点からの比較研究を加えると、大宰府学研究が対象とする空間的範囲はさらに広がる。

最後に研究対象範囲を確認する。大宰府学研究の第一の研究対象は歴史資料であり、上記で述べた遺跡や文字史料はその筆頭である。これら歴史資料にあわせて、今日の歴史的環境を別側面から把握すると、さらなる対象資料の拡大がもとめられる。なぜならば、大宰府の存在は、当地の芸術・文化・信仰・民俗面でも根幹的要素となってきたためである。大宰府官衙の整備と併行して進められた観世音寺は、「天下の三戒壇」の一つとして、西海道における仏教界の中心的役割を果たしてきた。同寺伝来の梵鐘は日本最古級の作例であり、今日でも現役で音色を響かせている。また、宝蔵に安置されている仏像も、仏教美術の優品というのみならず、大宰府羅城門に安置されていた可能性もある資料を含む。都から派遣されてきた大宰府官人も当地に大きな足跡を残してきた。文化面では万葉筑紫歌壇が象徴的で、大伴旅人、山上憶良らが当地で詠んだ歌は万葉集に収められ、今日でも親しまれている。そして、当代一の文化人でもあった菅原道真は大宰府で没し、太宰府天満宮の御祭神として、全国各地の人々の崇拝を集めてきた。天満宮で執り行われる「神幸式大祭」や「鬼すべ神事」等は、太宰府を彩る風物詩にもなっている。また、大宰府の鬼門（北東）に位置する宝満山は、古代からの霊峰で、最澄・空海も同山で祈祷を行ったと伝わる。後に宝満山は修験道と結びつき、英彦山とともに九州山岳信仰の双璧をなした。

これらの文化面に加えて、大宰府は自然環境とも強い繋がりをもつ。大宰府は玄界灘と有明海を繋ぐ地理的回廊に位置する。その防衛を担う、大野城・基肄城・阿志岐山城の土塁は尾根線に沿い、水城は二日市地峡帯の谷地形を利用して築かれた。また、大宰府の運営には、水源や燃料の確保といった都市基盤の整備がもとめられる。つまり、気候・地質・植生等の自然地理分野も、大宰府学研究の射程に入ろう。二日市地峡帯という自然環境は、現代生活も規定する要素であり、谷底に雨水が急激に下るという特質から、今日でも水害に悩まされ続けている。その一方で、用水・飲料水の確保にも苦慮してきた歴史があり、山麓のいたるところで貯水池が営まれている。

以上のように、大宰府学研究の研究対象は、歴史資料を基軸としつつも、その関連分野にも及ぶ。むしろ、研究の進展に伴い、研究対象は随時拡大する。個別研究をさらに掘り下げるとともに、細分化が進む研究成果を再統合することが、大宰府学研究の真髄である。その成果は、太宰府の歴史的環境に対する答えであり、さらなる問いでもある。大宰府学研究は一連の学問的営みにより、太宰府の「新たな文化的景観の形成」の一助となることを目指している。

第２章

研究の経過

赤司　善彦　　小嶋　篤

１．九州国立博物館の開館準備

九州国立博物館は開館準備段階より、展示公開を念頭に大宰府の調査・研究を進めてきた。特に「文化交流展」を視野に入れ、大宰府の対外交流機能に重点を置いた。

大宰府は国境警備に伴う軍事機能を強化し、また、外交使節の応対など対外交渉の拠点を維持する財政基盤を整えるために、西海道を統括した側面もある。とりわけ、海外の使節は直ちに都へ迎え入れるのではなく、一旦、大宰府に留めて事情聴取を行い、その結果によっては大宰府で応接した後に帰国させるなど、二段階の外交システムを採用していた。その直接の窓口となったのが、博多湾に設けられた鴻臚館である。港湾機能を兼ね備え、使節の応接といった外交の場であると同時に、国境管理を兼ね備えていた。つまり、海外の使節を受け入れるだけでなく、遣唐使や遣新羅使などの我が国から出国する使節船団の発着地も兼ねた。そのため大宰府は遣唐使が運んだ文物の点検も担っていた。

当館４階文化交流展８室では、大宰府が点検した遣唐使船交易品を取り上げている。この展示では、ユニバーサルデザインを見据え、視覚・触覚・嗅覚・聴覚で体感できる展示構成となっており、大宰府を行き交った文物を魅力的に紹介している。遣唐使の性格を「中国へ輸出した文物」と「中国より輸入した文物」を対比させることで、その実態を展示で表現したのである。船上から見える状景は博多湾という想定で、古代の対外交流を体感してもらおうというのがコンセプトであった。

２．開館後の大宰府学研究

開館後の大宰府学研究では、大宰府史跡の調査に携わってきた九州歴史資料館との研究の役割分担を前提に、韓国との共同研究がやりやすいテーマを重視した。まず取り組んだ事業は古代山城の調査研究である。開館翌年の平成18年（2006）には、国際シンポジウム「日韓の古代山城を掘る」を開催した。本シンポジウムは、福岡県教育委員会・九州国立博物館誘致推進本部が1986年より行ってきた、大韓民国国立文化財研究所との相互交流20周年を記念して実施したものである。その趣旨において、「研究成果を展示等の博物館諸活動に活かす」という大宰府学研究の主要目的の一つを明示した。

以後、本目的にも沿う形で、九州国立博物館は古代山城の航空測量を継続的に実施してきた。その詳細は、第３部１章「古代山城とＧＩＳ」にて紹介するが、山林に覆われた古代山城跡の微地形を広範囲でデータ化することに成功し、研究水準の底上げを図った。また、本データは調査研究に加え、教育普及でも活用を進めている。特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶余―」では、微地形を反映した白色模型を作成し、プロジェクションマッピングによる展示を企画した。航空測量は、古代山城跡のような広大な遺跡を把握する上で有効な手段であり、今後も調査研究とともに博物館諸活動でのデータの公開活用を模索していく。

九州国立博物館では、上記の航空測量事業と併行して、（１）研究員の調査研究、（２）講演会・シンポジウム・イベント、（３）展示公開も継続的に実施してきた。以下では、項目ごとに大宰府学研究の成果が、とくに反映された事業に絞って列挙する。

（１）研究員の調査研究

・「ＧＩＳを活用した古代山城の研究基盤の創設」
　事業内容：平成22 ～ 24年度科学研究助成事業　基盤研究（B）課題番号2132155
　研究代表者：赤司善彦
・「大宰府の軍備に関する考古学的研究」
　事業内容：平成25 ～ 27年度科学研究費助成事業　若手研究（B）課題番号25770290
　研究代表者：小嶋 篤

（２）講演会・シンポジウム・イベント

・「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」[1)]
　開催日程：平成22年（2010）10月30日
　参加人数：260名
・「百済文化と古代日本―百済研究の新展開―」
　開催日程：平成24年（2012）３月10日
　参加人数：263名
・「新羅王子がみた大宰府」[2)]
　開催日程：平成27年（2015）11月３日
　参加人数：128名
・「大城（大野城）の謎に迫る！」[3)]
　開催日程：平成28年（2016）２月27日
　参加人数：308名
・「神宿る島と祈りの記憶」
　開催日程：平成29年（2017）１月21日
　参加人数：229名
・「徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生」[4)]
　開催日程：平成29年（2017）２月18・19日
　参加人数：383名
・「知られざる沖ノ島祭祀」[5)]
　開催日程：平成30年（2018）１月20日
　参加人数：227名
・「大宰府史跡ものがたり」[6)]
　開催日程：平成30年（2018）11月11日
　参加人数：103名
・「響銅でつながる大宰府と東アジア」[7)]
　開催日程：平成30年（2018）11月23日
　参加人数：90名
・「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」[8)]
　開催日程：平成30年（2018）12月15日
　参加人数：277名

「展望・大宰府研究　蔵司跡の調査から」の現地解説

「知られざる沖ノ島祭祀」の開会式

（３）展示公開

①特別展

・「国宝　天神さま」

期間：平成20年（2008）９月23日～11月30日
入場者数：174,698人

・「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶余―」
期間：平成27年（2015）１月１日～３月１日
入場者数：59,629人

・「宗像・沖ノ島と大和朝廷」
期間：平成29年（2017）１月１日～３月５日
入場者数：75,966人

②特集展示・トピック展示

・「大野城と四王寺」
期間：平成20年（2008）10月15日～平成21年（2009年）１月18日
入場者数：154,952人

・「祈りの山 宝満山」
期間：平成21年（2009）11月13日～12月20日
入場者数：51,569人

・「国指定史跡 牛頸須恵器窯跡とその世界」
期間：平成22年（2010）１月１日～１月31日
入場者数：51,569人

・「斉明天皇と飛鳥」
期間：平成23年（2011）７月20日～８月28日
入場者数：57,465人

・「山の神々」
期間：平成25年（2013）10月22日～12月１日
入場者数：70,263人

・「新羅王子がみた大宰府」
期間：平成27年（2015）９月22日～11月29日
入場者数：127,485人

・「太宰府天満宮の地宝」
期間：平成28年（2016）１月１日～２月28日
入場者数：55,741人

・「大宰府研究の歩み」
期間：平成30年（2018）９月12日～12月23日
入場者数：89,860人

「大宰府研究の歩み」展示風景

「（１）研究員の調査研究」は、各員の専門性を活かして進めている。その成果は多岐にわたるが、とくに注目できる成果には、広範囲におよぶ古代山城跡の微細地形データ蓄積があり、今後の研究基盤を整えた。加えて、大野城跡太宰府口城門出土木柱の調査研究が挙げられ、築城時期の具体的論拠となる資料も新たに見出した。その詳細は第２部第１章、第３部第１・２章で紹介する。また、大宰府の軍備に関する考古学的研究では、生産・流通・消費という鉄器のライヒヒストリーを検討し、大宰府保有兵器の備蓄過程といった実態に迫った。その成果の一部は、第３部第６章、第４部７章で紹介する。

「（２）講演会・シンポジウム・イベント」と「（３）展示公開」では、各時節で市民の関心が高いテーマを中心に展開した[9)]。とくに重点をおいてきたのは、太宰府周辺の市町（宇美町・那珂川市・春日市・大野城市・太宰府市・筑紫野市）との連携である。地域の文化財における「国史跡指定」や「特別史跡

追加指定」の新規指定に際しては、関係機関と共に特集展示やシンポジウム等を企画して、国内外への周知に努めてきた。また、鞠智城を基点に古代山城研究を推進する熊本県との連携も進めてきた。平成30年（2018）には大宰府史跡発掘50年を迎え、一年を通じて関係市町とともに連携事業を実施した。九州国立博物館では、特集展示「大宰府研究の歩み」とともに、講演会「響銅でつながる大宰府と東アジア」、シンポジウム「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」、記念ウォークイベント「大宰府史跡ものがたり」を併せて実施した。

市民の関心が高いテーマを取り上げる一方で、九州国立博物館では新しいテーマの提案も行ってきた。トピック展示「新羅王子がみた大宰府」は、一般的に知られている遣唐使ではなく、あえて新羅使・遣新羅使に焦点を当てた。当館のコンセプト「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」に沿い、多角的視点から大宰府を紹介することが目的である。本トピック展示には、127,485人もの来場者が訪れ、大変盛況を博した。

市民ボランティアとともに制作した展示解説

特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶余―」では、市民ボランティアとともに展示解説をつくりあげた。本展では、古代日本と百済の交流を象徴する人物として、百済王「武寧王」に焦点を当てた。武寧王は、日本への渡航中の「各羅嶋」にて誕生したことが『日本書紀』に記載されていることから、ボランティアを中心にその有力候補地である佐賀県唐津市加唐島を訪れ、現地調査を実施した。その調査成果を基に、展示解説の充実を図った。

註

1）本シンポジウムは、九州歴史資料館・（財）太宰府顕彰会・（財）古都太宰府保存協会との合同で開催した。
2）本シンポジウムは、太宰府市教育委員会と合同で開催した。
3）本シンポジウムは、宇美町と合同で開催した。また、本シンポジウムは平成25～27年度科学研究費助成事業「大宰府の軍備に関する考古学的研究」（若手研究（B）、課題番号25770290、研究代表者：小嶋 篤）の成果を含む。
4）本シンポジウムは熊本県「古代山城に関する研究会」との合同で開催した。
5）本シンポジウムは、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議との合同で開催した。
6）本イベントは、大宰府史跡発掘50年記念ウォーク・イベントの一環で、古都大宰府保存協会を中心に関係機関が連携して実施した。九州国立博物館では特集展示「大宰府研究の歩み」のミュージアムトークも併せて開催した。
7）本シンポジウムは、平成30年度科学研究費助成事業「極薄青銅器と響銅を対象とした製作技術の比較―東アジア金属工芸史の再構築―」（基盤研究（B）、課題番号16H03379、研究代表者：川村佳男）の成果の一部である。
8）本シンポジウムは、平成29～31年度科学研究費助成事業「古代大宰府の部内諸司に関する基礎的研究」（基盤研究（C）、課題番号17K03088、研究代表者：松川博一）の成果の一部である。
9）特集展示・トピック展示の入場者数は、4階文化交流展の入場者数で集計している。

第３章

本書の構成

小嶋　篤

本書は、九州国立博物館が過去に実施した講演会・シンポジウム資料、展覧会図録に掲載した論考を再構成した内容を中心とし、一部に新稿を含む。これらのうち、講演会・シンポジウム資料は当日配布数が限られることから、本書の刊行を通じて、より利便性の高い研究成果の公開を図りたい。

以下に、各章の初出原稿を列挙する。

〈序論　大宰府学研究の目的と経過〉

第１章　研究の目的（新稿）／第２章　研究の経過（新稿）／第３章　本書の構成（新稿）

〈第１部　大宰府の器と編年〉

第１章　西海道の土器編年研究（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を一部改変）／第２章　西海道北部の土器生産（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載）／第３章　西海道南部の土器生産（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を一部改変）

※シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」は、平成29年（2017）２月18・19日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同開催した。

〈第２部　大宰府と古代山城の年代論〉

第１章　大宰府と古代山城の誕生（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載）／第２章　大宰府造営の年代論（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載）／第３章　日韓古代山城の年代論（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料に一部加筆）／第４章　有明海沿岸における古代山城の年代論（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載）／第５章　瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代（シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載）

※シンポジウム「徹底追究！　大宰府と古代山城の誕生」は、平成29年（2017）２月18・19日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同開催した。

〈第３部　筑紫の大城〉

第１章　古代山城とＧＩＳ（新稿）／第２章　大野城の研究成果（シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」当日配布資料を再掲載）／第３章　糟屋屯倉と怡土城からみた大野城（シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」当日配布資料を一部改変）／第４章　文献史料からみた大野城（シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」当日配布資料を一部改変）／第５章　大野城の土木技術（シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」当日配布資料を再掲載）／第６章　大野城と古代日本の戦争（シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」当日配布資料を一部改変）／第７章　大野城と宇美の歴史的繋がり（シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」当日配布資料を一部改変）／第８章　大野城築城と新羅（講演会「新羅王子がみた大宰府」当日配布資料を一部改変）

※シンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」は、平成28年（2016）２月27日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・宇美町が合同開催した。

※講演会「新羅王子がみた大宰府」は、平成27年（2015）11月３日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催した。

〈第４部　大宰府の官衙と諸司〉

第１章　大宰府の機能と律令国家（シンポジウム「展望・大宰府研究　蔵司跡の調査から」当日配布資料を再掲

載）／第２章　大宰府の官衙（シンポジウム「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載）／第３章　大宰府の諸司（シンポジウム「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」当日配布資料に一部加筆）／第４章　大宰府史跡出土の付札木簡（シンポジウム「展望・大宰府研究　蔵司跡の調査から」当日配布資料に一部加筆）／第５章　前面官衙跡の調査研究成果（シンポジウム「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載）／第６章　蔵司地区官衙跡の調査研究成果（シンポジウム「展望･大宰府研究　大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載）／第７章　鉄から見た大宰府官衙（シンポジウム「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載）

※シンポジウム「展望・大宰府研究　蔵司跡の調査から」は、平成22年（2010）10月30日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・九州歴史資料館が合同開催した。

※シンポジウム「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」は、平成30年（2018）12月15日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・九州歴史資料館が合同開催した。

〈第５部　大宰府の客館と響銅〉

第１章　新羅王子がきた時代（講演会「新羅王子がみた大宰府」当日配布資料に一部加筆）／第２章　「西の都」大宰府と外交施設（トピック展示「新羅王子がみた大宰府」解説図録より転載）／第３章　輸入陶磁器と喫茶文化（トピック展示「新羅王子がみた大宰府」解説図録より転載）／第４章　大宰府出土の響銅（シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」当日配布資料を再掲載）／第５章　響銅でつながる大宰府と東アジア（シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」当日配布資料を再掲載）／第６章　現代の鋳金作家からみた極薄青銅器（シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」当日配布資料を再掲載）

※講演会「新羅王子がみた大宰府」は、平成27年（2015）11月３日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催した。

※トピック展示「新羅王子がみた大宰府」は、平成27年（2015）９月22日～11月29日に九州国立博物館文化交流展示室で、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催した。

※シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」は、平成30年（2018）11月23日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館が開催した。

〈第６部　山岳信仰と宝満山〉

第１章　山岳信仰の考古学（トピック展示「祈りの山　宝満山」解説図録より転載）／第２章　考古学からみた宝満山信仰の始まり（トピック展示「祈りの山　宝満山」解説図録より転載）／第３章　宝満山の歴史と信仰（トピック展示「祈りの山　宝満山」解説図録より転載）／第４章　宝満山と古代大宰府（トピック展示「祈りの山　宝満山」解説図録より転載）／第５章　宝満山の最新発掘調査成果（トピック展示「祈りの山　宝満山」解説図録より転載）／第６章　宝満二十五坊の姿（トピック展示「祈りの山　宝満山」解説図録より転載）

※トピック展示「祈りの山　宝満山」は、平成21年（2009）11月13日～12月20日に九州国立博物館文化交流展示室で、九州国立博物館・財団法人太宰府顕彰会が合同開催した。

〈第７部　大宰府管内の信仰〉

第１章　宗像・沖ノ島と胸肩君（新稿）／第２章　宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果（講演会「神宿る島と祈りの記憶」当日配布資料を再掲載）／第３章　宗像・沖ノ島祭祀の実像（シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料を再掲載）／第４章　巨岩と社殿（シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料に一部加筆）／第５章　沖ノ島祭祀と遣唐使の航海（シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料を再掲載）／第６章　御長手神事と沖ノ島（シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料を再掲載）／第７章　マツリの記録（新稿）

※講演会「神宿る島と祈りの記憶」は、平成29年（2017）１月21日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議が合同開催した。

※シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」は、平成30年（2018）１月20日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議が合同開催した。

〈終論　大宰府学研究の成果と展望〉

第１章　研究の成果（新稿）／第２章　研究の展望（新稿）

第1部

大宰府の器と編年

大宰府官衙建設期の土器群

第１部　大宰府の器と編年

第１章　西海道の土器編年研究　長　直信 …… 13
第２章　西海道北部の土器生産　石木　秀啓 …… 41
第３章　西海道南部の土器生産　松﨑　大嗣 …… 61

第１部では、歴史研究の基盤の一つである土器編年を対象に、７～８世紀における西海道の土器（須恵器・土師器・成川式土器）に関する研究動向を整理する。とくに焦点を当てるのは、大宰府と古代山城の建設期にあたる７世紀（663年前後）の様相で、基準資料や方法論の妥当性を再検討し、最新の編年案を提示する。

なお、第１章～第３章の掲載論考は、いずれも平成29年（2017）２月18・19日に九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同で開催したシンポジウム『徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生』の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

『徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生』当日配布資料表紙

第１章

西海道の土器編年研究

長　直信

はじめに

考古学の年代　考古学の年代には相対年代・交差年代・暦年代の三者がある（武末2002）。

相対年代　一つの地域において、ある考古資料が別の考古資料よりも古いか新しいかという相対的な位置づけである。それらはその地域で得られた一括遺物や、新旧の関係がわかる事例を中心に、層位学的検討と型式学的検討を加えて決定し（図1−1、1−2）、これらの手続きでえられた一連の大系がいわゆる考古学的な編年である。本報告の対象となる７世紀の土器の編年を例にすれば図１−３のようにも表現できる。

交差年代　それぞれの地域で樹立された相対年代を結びつけ、横の連結をとることで決定する。異なった地域の考古資料の編年との併行関係を確定していく作業である。そのためには、「Ａ地域のⅠ期の型式の遺物がＢ地域のⅡ期の一括遺物に含まれ、Ｂ地域のⅡ期の型式の遺物もＡ地域のⅠ期の一括遺物の遺物にある」（図1−5）という関係成立が肝要である。Ａ・Ｂ両地域の考古資料を、異なった地域の編年の中で交差した状態で確定することから交差年代決定法の名がある。

暦年代　絶対年代・実年代ともよばれ年紀が示されたり年紀を推定できる資料を含む一括資料を用いて相対編年の各分期に付与されるものである。

これらを導く手続きはそれぞれ別個の作業であるが、相対編年の設定を第一に行う必要がある。以下では上記の定義に基づき報告を進める。

なぜ７世紀の土器編年が重要か　対象とする７世紀の土器編年は前後の時代と比較して編年観・年代観の２点について研究者によって少なくないずれがある。このずれがなぜ問題かというと、西暦601年から700年までの７世紀は日本史では概ね古墳時代後期・終末期とされる時代から奈良時代直前の時期に相当し、定型化した原理やシステムが未確立な古墳時代的な様相の中に律令的な様相（たとえば大化改新における諸政策、近江令・飛鳥浄御原令などの法整備やこれに伴う官僚制への移行など）が「段階的」に浸透していく時期であり、列島における律令国家の成立がどの時点でどのように行われたかに直結する日本史上でも極めて重要な時期にあたる。

７世紀の考古資料は、律令国家体制確立に向けさまざまな支配機構が列島各地で顕在化する。古墳時代後期から終末期古墳研究、地方官衙研究、集落研究のなかでの土器編年の意義はすこぶる高く、すべての前提といっても過言ではない位置にあり、土器の年代観しだいで７世紀から８世紀初頭の遺跡の評価が大きく変わるのである。代表的な考古資料をあげれば前方後円墳や群集墳の終焉と大化薄葬令（646年）の実態、評衙の出現と大化改新の関係、郡家・国府の認識、西海道では筑紫大宰・大宰府との関係や朝鮮式山城・神籠石の評価などあまた存在し、年代観の変化が遺跡の評価を変え、これが集積されることで列島の国家形成史全体を書き換えかねないほどの問題を内包する。

本報告の目的　西海道における７世紀の土器編年研究の現状報告が報告者に課せられた題目である。類似したテーマで2009年に発表した内容（長2009）と重複する部分もあるが、①宮都の置かれた飛鳥・近江・難波地域と西海道３国を対象に（図11−2・3）７世紀に使用された土器様相の内容を提示し、②両地域の編年手法の差異や土器組成の差異の有無や地域性を確認する。最後に③西海道における暦年代推定資料の現状と今後の編年論に関する若干の問題提起を行いたい。

１．７世紀土器編年研究の現状

７世紀の須恵器編年研究史については長2012aでまとめているので割愛するが、2000年を前後する時期に７世紀という社会を土器からいかに読み解くかという問題を背景に、編年観・年代観の２点について全国的な議論がなされている。これには前述した律令体制の整備と古墳時代的社会がどこまで残存するか、換言すれば推古朝・孝徳朝・天智朝・天武持統朝に代表されるそれぞれの施策の実効性の度合いに関する評価と密接であり、結果として従来の編年観に対して各土器形式が予想以上に漸移的に変遷すること、具体的には坏Ｈ・坏Ｇ・坏Ｂ（図1-3）の共伴関係を一部許容し、飛鳥編年の年代下方修正に伴い土器の年代観についても下降する可能性が高いとの結論をもって終息したかのように見えるが、西海道をはじめ地方においてはどこまでその年代の下降させるかについての定説はなく、依然としてさまざまな編年観・年代観をもとに歴史像が構築されている。

７世紀の器種構成　対象とする７世紀に使用された土器類を確認しておく（本報告の土器形式名については奈良文化財研究所分類を元に、便宜的にではあるが図３－１・３－２に示したものを使用する）。図３－１は飛鳥を中心とする宮都周辺の様相を、図３－２は筑前を中心とした西海道北部地域の様相を図示してみた。図３－１のＡに示す石神遺跡より出土した巨大な鉢や蓋（飛鳥Ⅰ）の存在は特異であり、図６－２の254に示す難波長柄豊埼宮期の台坏鉢と蓋も含めて周辺地域にはみられない宮都における饗宴等にかかわる特注品と考えられるが、須恵器については概ね類似したものを受容・消費していることを確認しておく[1)]。土器編年の構築にあたっては、これらの各土器形式が、どのような組成（セット関係）を構成しながら、いつ出現・盛行し、消滅するのかを地域ごとに明らかにしていく作業が必要となる（表４参照）。なお、宮都周辺の土師器供膳具形態は、暗文を多用した特徴的な調整をともなっており、後述する地方における畿内からの搬入品として識別が容易であり、交差年代の手がかりとなる。

モノサシとして土器編年　報告者はこれまで土器編年を精度の高い歴史像を構築するためには不可欠なモノサシと考え、須恵器を中心とした編年的検討を進めてきた。具体的には土器における暦年代比定方法の問題点を整理するなかで、様相比較から交差年代への移行を目指した旧国単位での相対編年（地域編年）構築とその地域性の抽出（長2012a・2013a）と、地域編年に基づいた集落論や官衙論、土器からみた地域間交流の様相について検討を行ってきた（長2012b・2013a・2013b・2014）。こうしたモノサシとしての土器編年は、複数の時期にまたがる遺跡の一時期における遺跡景観を復元したり、その変遷を検討するうえで必須のものであり考古学における一般的なあり方といえる。

土器様式変化の意義　近年、小田裕樹氏は律令体制成立期における礼式・服装面などの視覚的な部分での唐風化にともなって、儀式の場での食事に関わる礼式の整備も進められ、伝統的な食事様式から東アジア世界に共通する食事様式（図2-7）の採用が図られたとの考えから、７世紀の土器様相の変化の歴史的意義について具体的に整理した。この時代の前半の土器群を「飛鳥時代前半期土器様式」に、後半の土器群を「律令的土器様式」とに大別し（図2-6）、東アジアにおける土器様相の影響と倭国における独自色を整理（図2-7）、食器における階層性についても踏み込んだ提案を行った（小田2016b）。図２－６や図４－１に示すように「律令的土器様式」が確立する飛鳥Ⅲ（天智・天武朝初頭）以後、集落や官衙遺跡などの遺跡の性格差に、大型供膳具を上位器種とする食器による階層性が反映された可能性を提示したのである。７世紀は図１－３に示されるように100年足らずの期間に主体となる須恵器が坏Ｈ→坏Ｇ→坏Ｂへとダイナミックに変遷する日本史上でも類をみない時代である。先にみたモノサシとしての土器編年の設定作業を通して、このような土器変化を生みだした歴史的特質を明らかにしようとした視点といえる。

氏の一連の見解については賛同する点が多々あり、当該期の土器研究上、今後欠かせない視点となると考えるが、土器編年を編んでいく上でも重要な問題を提起しているように思える。すなわち、これまでも尾野善裕氏（尾野2001）を始めとする古代の土器研究会において提起されてきた「遺跡の性格差に

よる土器の使い分け（作り分け）」の議論に関わると考える。小田氏は宮都とその周辺集落の比較を行うなかで、食器法量の複雑性や台付食器の多さは「上位要素」として位置付けられると想定したが、地方の土器において従来「時期差」ととらえられていた土器群の「一部」が、同時期の「階層差」として還元される可能性をもつからである。これには7世紀後葉から8世紀に特有の「律令的土器様式」が地域社会においてどの程度受容されているかという問題や、旧形式の残存を混入物とみるか否かという基準となる資料の一括性に関するよりシビアな資料論的な再検討へも波及する問題であり、当該期の土器編年理解がさらに豊かに（同時に複雑に）なる可能性を有する。これについては西海道の土器様相を俯瞰した上で後述する。

編年の目的　ところで編年は「何のために」構築するかでその精度は変わる。現実的に可能であるかはわからないが、目的によっては10年単位に細分する「細分派」の編年もあれば（図1−6）、あえて大きな枠組みの設定にとどめる「大別派」の編年などさまざまである（森川2015）。編年の細分は客観的な手続きの上であれば否定されるものではないが、旧国単位の編年を試行する場合、数点の土器に対して細分化した土器編年を照合させることは困難であり、編年対象エリアの規模や内容にもよるものの、基本的には適度な区分が求められると考える。その場合、可能な限り当時製作・使用された須恵器の全器種の総合的な変化を検討すること、そのためには各土器の「形式」が型式学的にどのように消長するかを重視する必要がある。すなわち、遺跡から出土する土器一形式のみでは時期の詳細を確定できることは稀で、土器様相全体のなかでどの程度の存続幅がみこめるか、その出現・盛行・終焉のプロセスを把握することが重要と考える（図2−4）。

2．宮都周辺の土器編年研究の現状

近年の宮都周辺の編年研究　発掘調査の蓄積や報告資料の増加から、①飛鳥Ⅰ・Ⅳの資料が増加した点（森川2015、小田2014）、②飛鳥Ⅲの基準資料が公開された点（西口・玉田2001、小田2012aなど）、③尾張産須恵器の認識が進み既存報告資料（飛鳥Ⅱの基準資料であった水落遺跡等）にあらたな評価が加えられた他（尾野他2016）、④難波地域において前期難波宮期前後の土器様相が明確になり飛鳥Ⅰ後半からⅡにおける宮都の土器組成が明らかになった点（佐藤2000、市川2016）、⑤列島最大規模の須恵器窯陶邑窯跡群における編年の再構築が行われた点（佐藤2003）、⑥畿内地域に特徴的な暗文土師器（いわゆる畿内産土師器）の編年的な研究が本格的に開始された点（森2016）（図15−6・7）などがあげられる。また、これまで問題にされてきた坏Hの存続幅は、飛鳥Ⅰ〜Ⅱの約70年間（600年〜660年代後半）にわたり宮都周辺でも「消費」され続けているという事実についても変更はない。同時に飛鳥Ⅲを境に宮都では出土しなくなる点は重要である（表4①）。ここでは主として小田裕樹2014、佐藤隆2000・2003の整理によりながら7世紀において宮都がおかれた飛鳥地域・難波地域・近江地域の土器様相を確認する。

（1）飛鳥編年（表1・図3−1・図4−2）

飛鳥Ⅰ（想定年代：600年代〜640年代）　金属器を志向した土師器である土師器坏Cの出現が画期。土師器坏Cは出現当初より法量分化が見られる。須恵器坏Gも存在するが坏Hが主体である。蓋の形態が傘形に直線的な形態をとっており、坏身の形態も深手である（坏G1・坏G蓋1と便宜的に分類　図3−1参照）。飛鳥Ⅰは型式学的に3つの段階に細分されているが、新相を示す飛鳥池遺跡灰緑粘砂層、甘樫丘東麓遺跡SK184（図5−1）では新たな器種である土師器皿Aが少量ながら出現しており、列島における皿型食器の出現期ととらえることができる。新相の段階は前後の土器様相からみて640年代に中心があると考えられる。なお、図5−1左下のSK184出土土器の外形トレース図に示されるように、極めて規格性のとれた供膳具類を受容しており、一般的な集落遺跡との質・量的な差異を明瞭に伝える資料である。

飛鳥Ⅱ（想定年代：640年代〜660年代）　土師器坏Cの法量縮小化、ヘラミガキの粗略化、ラセン暗文を

主とする暗文が発達。坏Aが出現するがごく少量のようである。須恵器坏Gと坏Hの比率が同程度となり、坏Gに小型化、蓋の肩が張り、器高が高くなるなど型式変化がみられる（便宜的に坏G２・坏G蓋２と分類)。供膳具類の小型化が顕著となる。

飛鳥Ⅲ（想定年代:660年代後半～ 670年代） 土師器坏A､須恵器坏Bが成立し､一定量存在するようになる。須恵器坏Gと坏Bは併存するが坏Hは消滅している。土師器坏Cのみにみられた法量分化が須恵器・土師器に波及する（図5-2)。

飛鳥Ⅳ（想定年代：680年代を中心とした670年代は～ 680年代後半） 土器の器種数が著しく増大し、須恵器坏Bの蓋にかえりをもつ坏B蓋１、この時期に出現するかえりをもたない坏B蓋２とが共存し、須恵器坏Gは坏A、坏Bと比較してごく少量出土する。

飛鳥Ⅴ（想定年代:690年代前後～ 710年） 前段階の型式的発展があるものの大きな様式変化はみられない。須恵器坏B蓋１が消滅し、坏B蓋２で占められる。

（２）難波編年（図6-1～6-3・表2）

近年の難波編年研究 図６－１～３は佐藤隆氏が示す難波編年の基準資料である。概要は表２に譲るが、難波Ⅲ中段階～新段階が652年に宮殿完成記事がみられる難波長柄豊碕宮段階（前期難波宮）に相当し図６－２・３に示す土器の内容は王宮における土器様相の一端を示す。坏Bの祖形となるプレ坏Bともよべそうな長い高台をもった坏が特徴的である。列島における７世紀中葉の最新の土器様相を示すものとして重要である。

（３）山ノ神遺跡　窯跡資料の様相（図8-3）

天智元（667）年の大津宮遷都に関連する須恵器窯といわれる。大津宮本体の実態解明にはまだ時間を要するようだが、本窯出土須恵器の供給地の主体が大津宮（667 ～ 672年）であったことは大方の賛同が得られている。図８－３は４基の窯跡より形成された灰原の上層資料出土資料を図示した。坏G・坏B・坏Aを主体に少量ながら坏Hも認められる。その他、長頸壺・多様な形態の平底の鉢や皿・盤、金属器を模倣したと考えられる大型の坏、高盤とよべる大型の高坏など饗宴にともなうような大型食器が目につく。同時に後述する陶邑の様相と同様、生産地では古墳時代的な器種が少量ながらも生産されている点は注目される。ちなみに筑前牛頸窯跡群中にある宮ノ本４号窯と本資料の様相は非常に類似しており、中島恒次郎氏は同一様相として年代推定のための資料の一つとして例示している（中島2000)。

（４）陶邑窯跡群の様相（図7-1～3、図8-1～2）

佐藤隆氏は、陶邑窯跡群出土資料を再検討した結果、時期判定上重要な指標とされてきた坏Hの法量が７世紀以後、時期が下るにつれて徐々に縮小していくといった事象は陶邑周辺地域では指標足り得ないことを提示した（佐藤2003)。氏の検討結果では、坏Hは時期が下っても縮小しないものがあり、縮小する系譜と大形のままの系譜の存在を想定している。そして、これら坏Hは、坏Bが安定して出土する７世紀後葉（飛鳥Ⅲ併行期）まで残存していることを陶邑の数々の窯跡資料で提示した。つまり、この段階まで伝統的な古墳時代的丸底土器である坏Hを需要する人々と、金属器を志向した律令的な食器である平底高台付食器である坏Bを需要する人々とが併存していたこととなる[2)]。このような性格の異なる２系統の土器群を生産することで、幅広い需要層の要請をまかなっていたという点で全国最大規模の陶邑窯跡群に新しい性格付けが可能である。この検討は図２－５の生産地と消費地のイメージそのものであり、地方窯のあり方においても十分留意すべきであろう。

宮都周辺の土器資料・土器編年上の注意点 これらの地域は暦年代推定資料が豊富という土器編年上最大のメリットをもつことは間違いないが、編年指標とした場合、以下の点に注意が必要である。①宮都周辺は物資が集積する場であり複数産地から須恵器・土師器が搬入されるため、産地分類を意識した編年上の位置付けが必要となる（尾野他2016)。これと関連して、宮都は「基本的には」列島における土器モードの先進地であり、地方の土器編年を行う上で参考になるのは間違いないが、甘樫丘東麓遺跡SK184や大官大寺SK121出土資料にみるように、宮都とその周辺という特殊な性格の遺跡から出土する

遺物によって組まれたものであるため[3]、地域編年においては宮都地域との単純な様相比較による年代比定がどの程度有効であるのかの見極めが必要である（尾野2001・小森2005など）。②型式学的な検討をふまえつつ箱を積み重ねるように一括遺物をタテに配列する「一括遺物」配列型編年であることから（図2-1）、当時使用されていた土器の実態をどの程度反映したものであるかの判断が難しい[4]。基準資料の全容提示とその他の資料の正式報告を重ねながら、一括性の高い基準資料をもちいた、存否や頻度のセリエーションの検討（図2-2）を踏まえた「期」の設定が求められる[5]。

3．北部九州周辺の土器様相

長2009や2012aなどで示してきた内容であり紙幅の都合上各地の様相は形式消長図と各編年図に譲り、対象地における須恵器の地域色について若干の補足を行っておく。

（1）各地の様相

筑前南部（図9-1・表4②）、豊前（図9-2・表4③）、豊後（図10-1・表4④）

（2）筑前II-2期～III-1期併行期における須恵器の特色

筑前Ⅱ-2期～Ⅲ-1期様相下において、八女窯跡群の塚ノ谷4号窯出土資料を代表に（長・中島2013）九州各地で小型高坏の地域性が顕著となる（図11-1）。当該期は豊前の伊藤田窯跡群でも坏類以外の器種において特徴的な形態の須恵器が出現する（長2013a）。当該期の交差年代を行う上での基礎作業として各地域の特徴的な形式・属性の抽出は重要である[6]。

（3）各地域における小田編年Ⅴ期様相の状況

図12-1～7は従来問題となっていた小田富士雄氏の須恵器編年（小田1996など）におけるⅤ型式坏（以下、坏G）の単純期に関連する一括性の高い資料を提示した。坏Gの単独出土遺構は図示した土坑墓資料や墳墓資料が基本であり、集落遺跡は図2-3にて例示するように、単独出土にみえても共伴遺物の在りかたからみれば坏B出現時期である筑前Ⅲ-1、-2期（図12-4・6）、豊後Ⅲ期（図14-8）などの様相に位置付けられる事例が多い。安間拓巳氏が広島県内の資料状況から明らかにし（安間2002）、大林達夫氏も強調するように（大林2015）、坏Gは食器というよりもそれ以外の目的をもつ祭祀的な遺物で、数量の少なさからみても遺跡の性格によって選択的に生産・使用された可能性を改めて検討すべきではなかろうか。こうした観点からみると筑前南部Ⅱ-2期や豊前Ⅴ期の様相については遺物の全体組成を見直す中で改めて検討の余地がありそうである。

4．地域間の交差年代について

つぎに、宮都周辺との交差年代を検討するにあたり畿内産土師器、畿内出土九州島産遺物の検討を行う。資料は増加しているが近接した時期相互での遺物の搬入・搬出関係を見出せる資料はなく、変形交差年代となっている（図1-4）[7]。

（1）畿内産土師器の様相（図13～15-5）

近年の調査研究状況より筑前・筑後・豊前・豊後の中での分布差や一定の遺跡への偏りなどが明らかになっている（神保2016・井上2015・長2016など）。

筑前・筑後　①筑前では共伴する遺物の様相は筑前Ⅲ-2期を中心に飛鳥Ⅳの坏Aの搬入が確認される。形態的にやや古相を示す大宰府条坊跡第98次SX005（図14-1）は飛鳥Ⅲの後半からⅣ頃と評価されている。飛鳥Ⅲ～Ⅳの過渡的な様相とすれば筑前南部Ⅲ-1期の年代の一点が670年代後半頃（7世紀第4四半期初頭前後）になる可能性がある。その他の資料からみれば飛鳥Ⅳの畿内産土師器が筑前南部Ⅲ-2期の様相下で搬入されている。天武7年（678年）の筑紫地震後に形成された掘立柱建物に切られる上岩田遺跡G区25号住居（廃棄土坑か）（図13-1）は、筑前南部Ⅲ-2期の様相を示し飛鳥Ⅲ＜Ⅳの坏Aが

共伴する。これを地震後の片づけにともなう土坑とした場合678年直前の土器様相を示す可能性が高く、筑前南部Ⅲ−２期の上限が７世紀第４四半期初頭前後に相当する可能性が高い。

なお、８世紀代に入っても博多遺跡群・大宰府条坊跡・大宰府政庁周辺官衙跡で平城期の搬入品が確認されており、紀年銘記載木簡との共伴事例も増えることから、筑前南部の様相（山本編年Ⅲ期（山本1992））の年代的位置付けは概ね定まっていると考えられる。

豊後　下郡遺跡群第120次SX0075（図14−６）は８世紀代の遺物が混入しており資料等級に問題があるがその他の資料は豊後中部Ⅲ期の様相を示し、飛鳥Ⅲ×Ⅳの坏Ａの搬入が確認される。同じく同次数のSX1095（図14−７）からは口径指数からみて飛鳥Ⅲ頃に比定できる坏ＣⅢが出土している。豊後では坏Ｈを含む土器群が飛鳥Ⅲに併行する可能性がある。なお、臼杵市野村台遺跡田ヶ迫地区の包含層（図15−２）より飛鳥Ⅲごろの土師器高坏Ｃが出土している。遺構に伴わないため資料等級は低いが包含層中の７世紀代の遺物は図示した須恵器坏Ｈ・坏Ｇ主体の様相である。

日向・壱岐　日向では日向国府跡（寺崎遺跡）より飛鳥Ⅲ〜Ⅳの坏Ａが（図15−５）、壱岐カジヤバ古墳から飛鳥Ⅱとされる坏Ｃが出土している（図15−４）。それぞれ共伴資料の特定が難しく地域編年上での位置付けが課題である。

（２）近畿地方出土の九州系遺物

前期難波宮整地層から北部九州系須恵器甕が出土している（寺井2008）。甕の体部側面に同心円文の当て具が用いられた後、底部に平行文の当て具を使用したもので 福岡市鋤崎古墳群Ａ群１号墳・９号墳（７世紀前葉〜中葉）、羽戸古墳群Ｎ群８号墳（６世紀末）等で出土例がある。甕であるため時期決定に幅を持たせざるをえない点が惜しいが、これまで知られていなかった九州から近畿地方へ搬入された遺物の存在が認識されるようになってきたことは極めて重要であり、難波地域での出土遺物の動向が注視される。

大阪府富田林市新堂廃寺SD01からは７世紀末から８世紀前半の須恵器・土師器とともに牛頸産獣脚硯が出土している（白井2004）。この獣脚硯と同工品（同工品Ａ）と考えられる製品が福岡県春日市御供田遺跡４号住居（図12−４）において須恵器坏Ｇ単純様相の筑前南部Ⅱ−２期様相下において出土した。硯という遺物の性格上、消費地における長期の使用による結果ともとれるが、獣脚硯Ａの成立過程から７世紀中葉を遡らせることは難しいとのことである。共伴した強く屈曲する「く」字口縁の土師器甕の編年的位置付けの検討が必要であるものの、先にみた階層性の議論と集落遺跡という性格から、筑前Ⅱ−２期的様相が７世紀後葉から末まで残存しているとみることもできる。

（３）西海道北部における交差年代の検討

以前に行った筑後地域からの搬入品の分析等を踏まえると北部九州内での各様相はほぼ同一に変遷している可能が高い（長2009）。問題となる近畿地方との併行関係については以下の暦年代資料も参考に図10−２のように整理した。なお、７世紀中葉以前については不明な点が多く様相比較（同一様相比較＝同一年代）となっている点が課題である。

５．西海道における土器の暦年代比定

飛鳥地域を代表とする宮都周辺では、①飛鳥寺下層の資料に代表される文献記載遺跡の出土資料や年代の分かる寺院の創建瓦を生産した瓦陶兼業窯資料からの須恵器の年代推定を行なう方法、②被葬者が推定できる古墳の出土遺物から年代を割出す方法などが採用され、暦年代資料の少ない地域では、①近畿の編年資料や暦年代推定資料を対象に同一型式＝同一時期として時期認定を行う方法（高橋・小林1990）、②近畿と同一の土器様相に同一時期を付与する方法（中島1997）、③杯Ｇや杯Ｂ、平瓶などの新しい器種の出現を全て畿内にもとめ、畿内での出現期をそれぞれの遺物の上限年代とすることで地方編年での土器の上限を決める方法（大林1999）、④編年対象地域内で暦年代推定資料を抽出し、そこから年

代を付与する方法（山村1995）などが取られている。これらの年代論については中島（2000）において、厳密な資料批判が行われているが、以下にあげる資料は筑前地域の暦年代を考える上で一定の意味を有するものと思われる[8]。

文献記載遺跡出土資料（図16） ①水城西門 ②大土居水城 ③大野城跡百間石垣 ④古宮古墳 ⑤筑紫大地震関連遺跡（筑後国府跡・上岩田遺跡（図13-1））

紀年銘記載資料（図16） ⑥牛頸窯跡群　ハセムシ窯跡群12地点出土「和銅六年」（713年）銘甕

文献記載遺跡出土遺物の利用上の注意点として「限りなく直前･同時･かなり前の遺物」の解釈が必要であるが、文献記載年代と同時であると証明できる事例は非常に少ないなか、図16①・④はこれに準じる資料と考えられる。結論としては７世紀後半から８世紀初頭の資料に偏るものの、７世紀中葉に関する図16①・③の資料は一点のみではあるが年代定点資料として共有しておくべき資料と考える。

６．土器編年の現状―西海道における天智朝の土器はなにか

暦年代について　西海道独自の暦年代推定資料を元に検討してみたが、現状の結論としては宮都周辺の暦年代と土器様相は西海道北部（主に大宰府周辺）では大きな齟齬はないようである。近年の西海道北部の大宰府・博多・鴻臚館などの国家施設やこれに準じる遺跡において、飛鳥Ⅳの土師器坏Ａや平城Ⅱ～Ⅲ期の皿Ａなどの出土事例が増加しており、７世紀第４四半期～８世紀第２四半期ごろの年代比定においては、参考となる資料が揃いつつある。ここまでの手続きを基に、曖昧な部分も残るが宮都周辺地域の年代観と土器組成、本報告で再検討した併行関係及び先行研究成果の整理を試みると図17−１のようになる。

西海道における７世紀の遺跡を理解する上で重要な天智朝の土器とは筑前南部Ⅱ−２期からⅢ−１期への移行期にまたがる様相が考えられる。具体的な遺物組成については図９・10・17−１及び表４を参照頂きたい。

遺跡性格差と土器編年　ここまで見てきたように、畿内産土師器が出土するような公的な施設（博多遺跡群・大宰府周辺・上岩田遺跡）の土器様相と飛鳥地域の土器様相（飛鳥Ⅲ・Ⅳ）とには年代的な齟齬は見られないのに対して、問題とした集落遺跡[9]である御供田遺跡４号住居（図12-4）では、筑前Ⅱ−２期的な様相（坏Ｈ・坏Ｇの共伴期で坏Ｂ出現以前）の一部が７世紀後葉まで下降する可能性がある。ただしこれまでの坏Ｈ残存論争のように「一律に」地域編年全体の様相を下降させてしまうのではなく、宮都周辺の様相で確認したように遺跡の性格によっては、これまで考えている以上に旧形式の残存は長期に及び、西海道の中心たる大宰府周辺では消滅したかにみえる坏Ｇや坏Ｈが図２−５に示すように周縁部の集落では継続して使用されていた可能性は検証すべき点ではなかろうか。そうすると宮都よりも形式の残存を多くみつもる山村編年（山村1995・1999）も飛鳥地域とほぼ同時期に筑前の土器様相も変わると考える中島編年（中島1997）もある意味ではそれぞれ正しく、また、飛鳥の土器様相の反映は地方では遅れるという空間差≒時間差という図式も（大林1999）空間差というほど単純ではなく「空間差＋遺跡の性格差（ランク差）」が作用している可能性がある。生産地においては、まだこれらの実態を上手く説明できる資料は認識できていないが、消費地の実態からすれば、新相の須恵器生産期に古相の製品を生産する窯（図２−５における須恵器窯Ｃ）も存在していると考える。

今のところ、問題提起にとどめるが、上記の理解を進めた場合、大宰府周辺の編年とは別に周縁地域用の消費地編年構築が求められる。こうした資料状況は古墳時代前期における比恵・那珂遺跡群のような先進的な土器形式を受容する中心的な遺跡と、旧形式の残存著しい縁辺部の遺跡との関係性を想起させる。近年の古式土師器編年研究では、いまや福岡平野全体の資料から一律の編年を構築し一律に土器の時期を比定していくのは難しく、那珂・比恵遺跡や博多遺跡群などの博多湾沿岸の遺跡で組まれた編年が周辺地域ではそのまま対応できない状況である（このような遺跡性格差と遺物様相の差異について

は中世においても同様である)。どの地域のどのような性格の遺跡から出土した土器であるかを十分に見定めた上で、それぞれに構築するという丁寧な手続きが必要になっている。上述した「遺跡の性格差による土器の使い分け」の議論は、宮都の様相に近似する大宰府の土器様相が周縁部より先に明らかにされていたという背景もあり、西海道ではあまり活発ではなかったが、以上の点を踏まえると7世紀の土器編年研究においてもこうした視点が要請されているように感じる。

おわりに

本報告は現状と課題の整理にとどまり何かを明らかにしたたわけではなく、また本来個別に論じるべき部分も多く散漫な内容となっている。また、遺跡の性格差がおよぼす相対編年構築時における問題提起を行ったが、十分な検証資料の提示までにはいたっておらず今後の課題も多い。こうした状況を鑑みると、やはり現在の須恵器編年は「たちどころに年代のわかる「魔法の杖」」(佐藤2003)ではないのであろう。いま取りうる態度としては、自身が立論する考古資料への解釈に小さくない幅があることを認識し、増加した資料群との対峙を怖れず地道に地域編年を確立し、これを更新しつつ、土器の地域色や図15−8・9に一例を示す搬入品を抽出しながら交差年代の検討を進めるべきである。本報告にて縷々述べてきたように、これからの土器編年研究においては、複数の形式の資料を対象に形式・型式分類を行い一括資料を基に組列を検討した上での、量的変化の検討に加えて抽出資料の遺跡の性格に配慮した様相把握が肝要である。

本報告をまとめるにあたり井上信正、今塩屋毅行、小田裕樹、木村龍生、久住猛雄、下原幸裕、竹中哲朗、坪根伸也、津曲大祐、山口祐平の諸氏に御教示を賜った。また、九州歴史資料館には遺物の実見・実測をおこなうにあたり便宜を図っていただきました。あわせて感謝申し上げます。

註

1）宮都ではこれに黒色土器・白鳳緑釉・北斉隋唐陶器・新羅土器・百済土器・ガラス容器・銅食器が加わる。

2）図8−4に示す山田邦和氏の編年も年代観がやや異なるが坏H・坏G・坏Bに重複を認める案をとる(山田2011)。

3）飛鳥Ⅰは土師器坏Cの出現を画期としているように両編年とも土師器含めた時期区分を行っており、地方の須恵器編年との併行関係を行う際には編年区分の基準がそもそも異なっている点に注意が必要である。

4）報告者の「期」の考え方を示しておく。土器編年の時期区分については「○○式」「△△期」「○○段階」などさまざまな呼称がある。これらの編年時期呼称は当時の土器様相を最もよく示すと推測した「一括資料単体」を基準資料とし、これをそのまま「○期」と設定する「一括遺物」配列型編年が多い(図2−1)。が、「かりに、過去に同時に用いられた状態をよく残す一括土器群があっても、ある一形式についてみた場合、一型式しか含まれていないとは限らず、その時期の主体をなす型式に新古の型式が加わることがありえる」(岩永1989 p51)のであり、「歴史的に意味のある一時期」(横山1985)を土器編年における「期」としてとらえた場合、その設定は「一括資料」を用いて、想定される時間的前後関係に基づく資料の配列を行いながら、複数の形式の出現・消滅を確認する手続きをもって行うと考える(図2−2)。これは中島恒次郎氏が述べる手法と同様のものである(中島2005他)。よって交差年代を検討するにあたっては、「期」の設定手続きを揃えた上での比較が望ましいと考える。なお、近年三好玄氏は近畿ではめずらしくこれまでの須恵器編年における方法的な問題点を端的に指摘し、須恵器編年を再考されている(三好2016)。氏の示す方法論的な課題は報告者の問題意識と重なる点もおおく、今後この種の検討が進むことが望まれる。

5）奈良文化財研究所第二研究室では現在基準資料の再整理と報告が進められており(尾野他2016他)、将来的には現在の編年を再構成した体系的な編年が提示されると思われる。

6）どの地域でも出土する一般器種である坏Hの法量変化の地域性について触れておく。豊前においては坏A(本報告坏H)の法量の変化は、12㎝前後から10㎝前後へと縮小化へ向かう点は間違いないが、法量の変遷自体は各期をこえて緩慢であり、技法についても坏身・坏蓋の底部・天井部調整が回転ヘラケズリから底部ナデ調整へと変化する時期は、豊前北部の天観寺窯跡群と豊前南部の伊藤田窯跡群とで異なる(図17−2Ⅲ−2期参照)。これらが消費地においてどのような有効範囲をもちえるのかは未検討だが、現状では坏Hの口縁部が1点出土したのみでは最大Ⅲ−3期〜Ⅴ−2期までの都合70年間の幅を見る必要がある。坏Hの法量については図6−4や図17−3にも示すように近畿地方の消費地によっても様々であり単純な法量のみによる年代決定が困難であることを示す。

7）したがって、以下に示した年代はあくまで搬出先の様相の上限年代（○○年を遡らない）となる点をお断りしておく。

8）西海道では国内唯一の高句麗土器をはじめ、新羅土器を中心に朝鮮半島からの搬入資料も多く出土している。資料は増加しているが古墳資料が主体で、遺物の共伴関係の整理に限界がある点、集落遺跡では良好な一括資料に恵まれない点、新羅土器の編年と暦年代の統一見解が提示されていない点などからみて暦年代資料からは割愛したが、新羅土器の研究動向は朝鮮半島との交差年代資料としても宮都周辺以外からの暦年代の比定資料として重要である。なお、百済土器は、堤ヶ浦12号墳（福岡市）出土資料について長2009にて寺井誠氏による検討（寺井2009）を紹介した。層位関係や須恵器様相からみて、筑前南部Ⅱ－２期の様相下において７世紀第２四半期～中頃（百済滅亡直前？）の百済土器の壺が出土しており、筑前Ⅱ－２期の年代を考える上で参考となる。

9）集落といってもそのあり方は多様である。牛頸窯跡群周辺の集落には工人集落も含まれており、一般には出土しないような須恵器が出土したり須恵器の比率が非常に高いアンバランスな土器組成をもっている。７世紀における集落遺跡の性格類型についても今後活発に議論すべき点であろう。

引用文献

安間拓巳 2002「広島県における古代の土器の様相－７世紀を中心として－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』

市川創 2016「難波地域とその周辺の土器様相」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所

井上信正 2014「特論　大宰府条坊研究の現状」『大宰府条坊跡44－推定客館跡の調査概要報告書－』太宰府市教育委員会

井上信正 2015「成立期大宰府関連遺跡調査の現状」『第175回九州古文化研究会』発表資料

岩永省三 1989「土器から見た弥生時代の社会の動態」『生産と流通の考古学』 横山浩一先生退官記念事業会編

大林達夫 1999「周防国府成立の土器の年代観・序章」『瓦衣千年』

大林達夫 2015「防府平野の土器資料が提起した問題、そのメモ２」『山口考古』第35号　山口考古学会

小田富士雄 1996「九州地方の６世紀後半の須恵器・九州地方の７世紀初頭の須恵器」『日本土器辞典』雄山閣

小田裕樹 2012a「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢』Ⅳ奈良文化財研究所学報第92冊

小田裕樹 2012b「２．都城の土器と東アジア世界」『花開く都城文化』飛鳥資料館

小田裕樹 2014「４　土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ－歌姫西須恵器窯の調査－』奈良文化財研究所

小田裕樹 2016a「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質』考古学研究会関西例会

小田裕樹 2016b「古代宮都とその周辺の土器－「律令的土器様式」の再検討－」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所

小田富士雄 1996「九州地方の７世紀初頭の須恵器」『日本土器辞典』雄山閣

尾野善裕 2001「飛鳥時代須恵器編年の問題点」『古代土器研究』３　古代の土器研究会

尾野善裕・森川実・大澤正吾2016「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要2016』奈良文化財研究所

久住猛雄 2001「出土須恵器の編年とE－２・３号墳の築造・追葬の年代について」『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房

佐藤隆 2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一

佐藤隆 2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築に向けて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号

佐藤隆 2015a「難波地域から出土する土器の特徴とその暦年代」『季刊　明日香風』134古都飛鳥保存財団

佐藤隆 2015b「さまざまな形、大きさが表す古代国家」『大阪遺跡』創元社

白井克也 2004「筑紫出土の獣脚硯」『九州考古学』第79号

白石太一郎 2012「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館　館報16』

神野恵・森川実 2010「１．土器類」『図説　平城京辞典』柊風社

須崎雪博 1998「北大津遺跡・横尾山古墳群・山ノ神遺跡」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編』古代の土器研究会

神保公久 2016「７世紀の土師器－筑後－」『第178回九州古文化研究会』発表資料

高倉洋彰 2011『箸の考古学』同成社

高橋徹・小林昭彦 1990「九州須恵器研究の課題－岩戸山古墳出土須恵器の再検討－」『古代文化』Vol.42

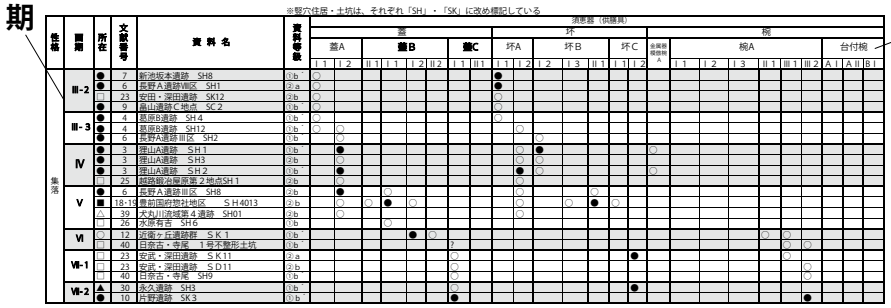
武末純一 1991『土器からみた日韓交渉』学生社

武末純一 2002「弥生時代の年代」『考古学と暦年代』ミネルヴァ書房

長直信 2009「九州島における７世紀の須恵器－九州北部周辺の土器様相とその並行関係－」『第12回九州前方後円墳研究会　終末期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会

長直信 2010「豊後国における７・８世紀の土器様相－旧大分郡・海部郡を中心に－」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一先生　還暦記念献呈文集・研究集

長直信 2012a「豊前地域の土器様相と須恵器生産」『古文化談叢』第67集　九州古文化研究会
長直信 2012b「豊後地域」『第61回　埋蔵文化財研究集会　集落から見た７世紀』埋蔵文化財研究会
長直信 2013a「須恵器からみた地域間交流－豊前・豊後地域を対象に－」『第16回九州前方後円墳研究会　古墳時代の地域間交流１』九州前方後円墳研究会
長直信 2013b「豊後国における官衙関連遺跡の基礎的研究－旧大分郡・海部郡を中心に」『福岡大学考古学論集２』福岡大学考古学研究室
長直信 2014「九州における長舎建物の出現と展開－７世紀代を中心に－」『第17回　古代官衙・集落研究会報告書　長舎と官衙の建物配置』奈良文化財研究所研究報告　第14冊
長直信 2016「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所
長直信・中島圭 2013「福岡県内出土の八女系須恵器について」『第16回九州前方後円墳研究会　古墳時代の地域間交流１』九州前方後円墳研究会
筒井崇史 2016「南山城地域における官衙と集落の土器様相について」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所
寺井誠 2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第83号
寺井誠 2009「古代難波における２つの瓶を巡って」『大阪歴史博物館研究紀要』第７号
中島恒次郎 1997「七世紀の食器－九州消費地－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東７世紀の土器－』古代の土器研究会
中島恒次郎 2000「大宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会
中島恒次郎 2005「聖武朝の土器－九州（大宰府と周辺）－」『聖武朝の土器様式』古代の土器研究会
中島恒次郎 2015「土器から考える遺跡の性格－大宰府・国府・郡家・集落－」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１－宮都・官衙と土器－』奈良文化財研究所
中西武尚 2011編『平成23年度　特別展　大分の君　飛鳥と豊後をつないだ人』大分市歴史資料館
西口壽生・玉田芳英 2001「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究書紀要2001』
林部均 1998「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の検討」『橿原考古学研究所論集』第13集　吉川弘文館
菱田哲郎 2011「②後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学１』同成社
舟山良一 2008「（２）編年案」『牛頸窯跡群　総括報告書Ⅰ』大野城市教育委員会
三好玄 2016「古墳時代須恵器編年にかんする方法論的検討 － 田辺編年の今日的理解から－」『古代文化』第68巻第１号
森暢郎 2016「暗文土師器の編年の規範」『纒向学研究センター研究紀要纒向学研究』第４号桜井市纒向学研究センター
森川実 2015「飛鳥の土器と「飛鳥編年」『季刊　明日香風』134　古都飛鳥保存財団
山村信榮 1995「八世紀初頭の諸問題－筑紫における須恵器の年代観－」『大宰府陶磁器研究』
山村信榮 1999「筑紫における７世紀土器編年と実年代の諸問題」『飛鳥・白鳳の瓦と土器』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
山本信夫 1992「まとめ」『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡篇－』太宰府市の文化財　第10集
山田邦和 2011「須恵器の編年　①西日本」『古墳時代の考古学１』同成社
横山浩一 1985「型式論」『岩波講座　日本考古学』１　岩波書店



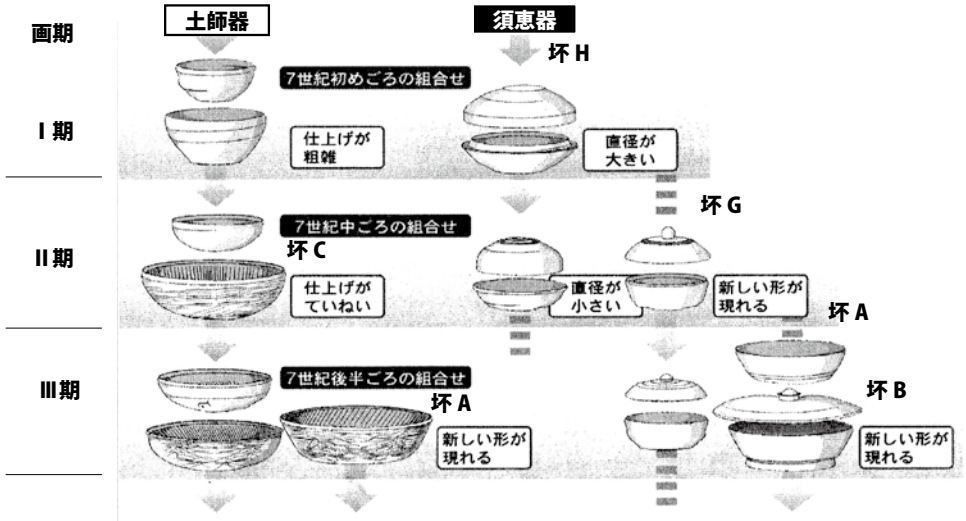
（長　2012a　表１より一部抜粋）

図 1-1　形式出現頻度検討例（豊前地域の集落遺跡）

→ 編年図として具象化

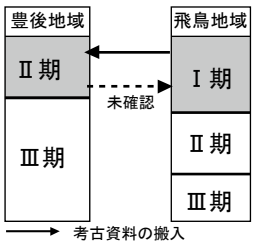
（長　2012a　表３より一部抜粋）

図 1-2　形式出現頻度モデル例（豊前地域の集落遺跡・須恵器窯・墳墓資料からみた様相を総合化）



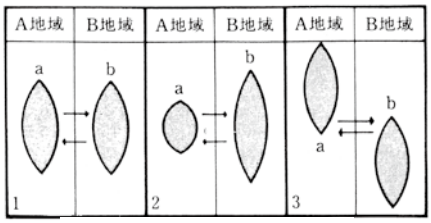
※太ゴシック文字は報告者が追記

図 1-3　難波地域における飛鳥時代の土器の変化　（佐藤　2015b　p197 より）



飛鳥地域のⅠ期中の遺物が豊後地域Ⅱ期の遺構より確認できた場合、豊後地域のⅡ期は飛鳥地域Ⅰ期の年代に一部接点をもつところ（具体的には上限年代であるⅠ期以降）までしかいえない。豊後Ⅱ期の資料が飛鳥地域Ⅰ期の遺構中より確認された場合のみ、豊後Ⅱ期と飛鳥Ⅰ期とが「一時期併行していた」ことが証明できる。
なお、この場合でも下図（図 1-5）のような場合が考えられる。

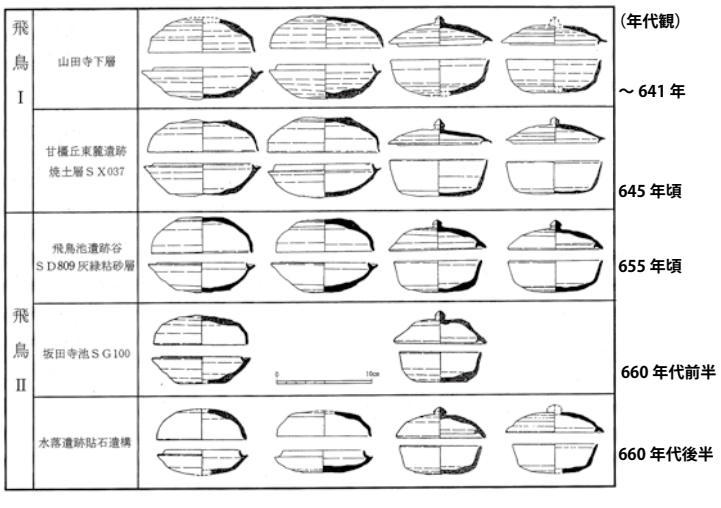
図 1-4　変形交差年代の例



a・bはそれぞれの地域の遺物の存続幅を示す。

遺物同士の存続幅が一定ではない場合（２）や、搬入物が出現時期の搬入か終焉時期での搬入か（３）などの時間差による「幅」が生じる場合もあり、二地域間の併行関係の認定には複数事例の積み重ねが必要である。

図 1-5　二地域間の併行関係モデル（武末 1992 より）



※太ゴシック文字は報告者が追記

図 1-6　飛鳥編年の細分案
（白石 2012　図７より）

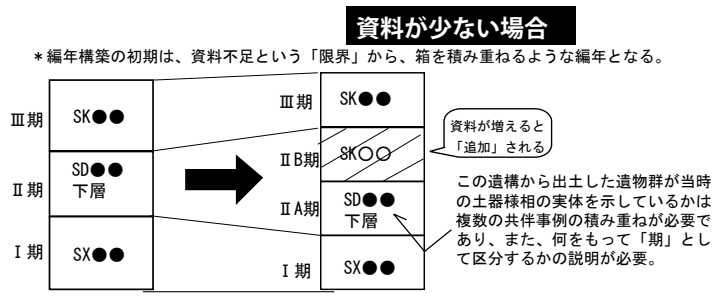
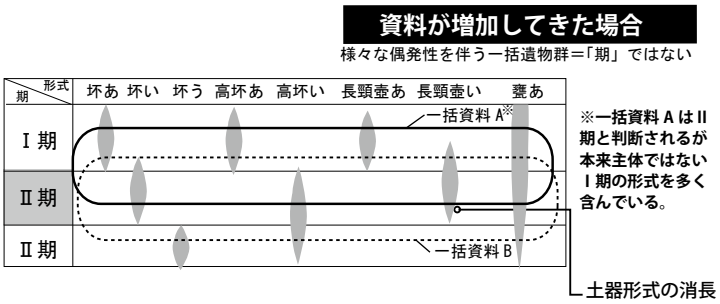
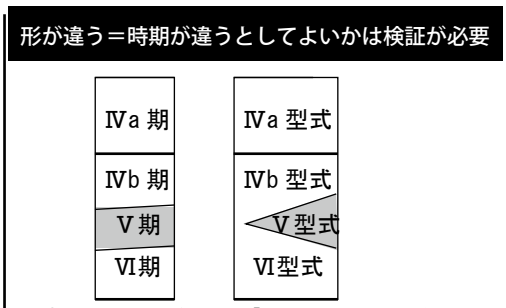


図 2-1　一括遺物配列型編年の問題点（長　2012a　第２図より）



「期」の設定は「一括資料」を用いて想定される時間的前後関係に基づく資料の配列を行いながら複数の形式（本報告では概ね「器種」に相当）の出現・消滅を確認する手続きをもって行う。

図 2-2 頻度のセリエ―ションの検討の必要性



北部九州では小田編年のⅤ「期」（小田 1996 など）の存在の有無について長らく評価が分かれていた。小田編年のⅣ・Ⅴ期をそれぞれ坏の型式と読み替えた場合、近年の資料状況からは右図のような関係として理解される。

図はⅤ「期」の存在を否定しているものではなく、Ⅴ「期」はⅣ型式（坏 H）の残存、Ⅵ型式（坏 B）の出現期の様相として左図のようにⅤ型式坏（坏 G）の出現という画期をもって存在している。

図 2-3 「期」と「型式」

図 2-4　土器形式の消長

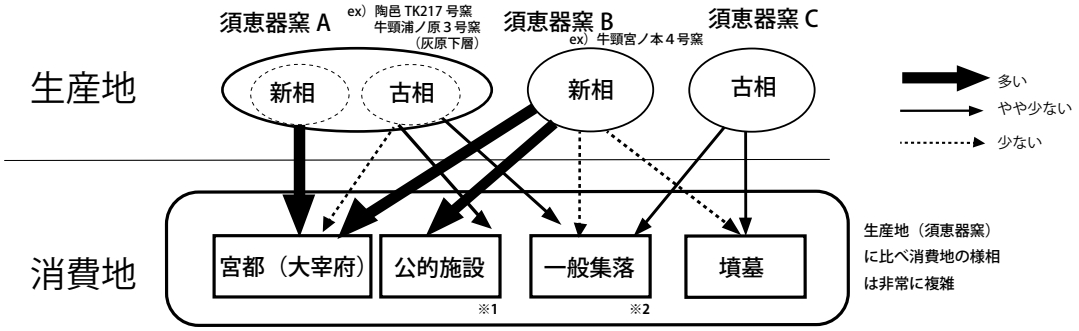


図 2-5　７世紀後葉頃における須恵器生産と消費のイメージ

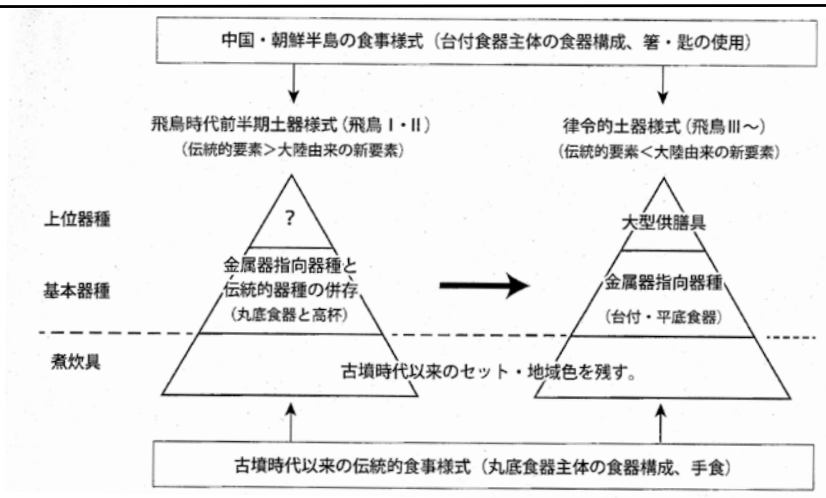


図 2-6 「飛鳥時代前半期土器様式」から「律令的土器様式」へ

（小田裕樹 2016b　図 33 より）

図 2-7　置食器・箸・匙のある宴席

（敦煌莫高窟 473 窟）（高倉 2011 より）

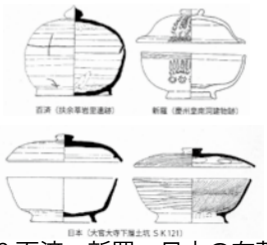


図 2-8 百済・新羅・日本の有蓋台付椀

（小田裕樹 2016b より）

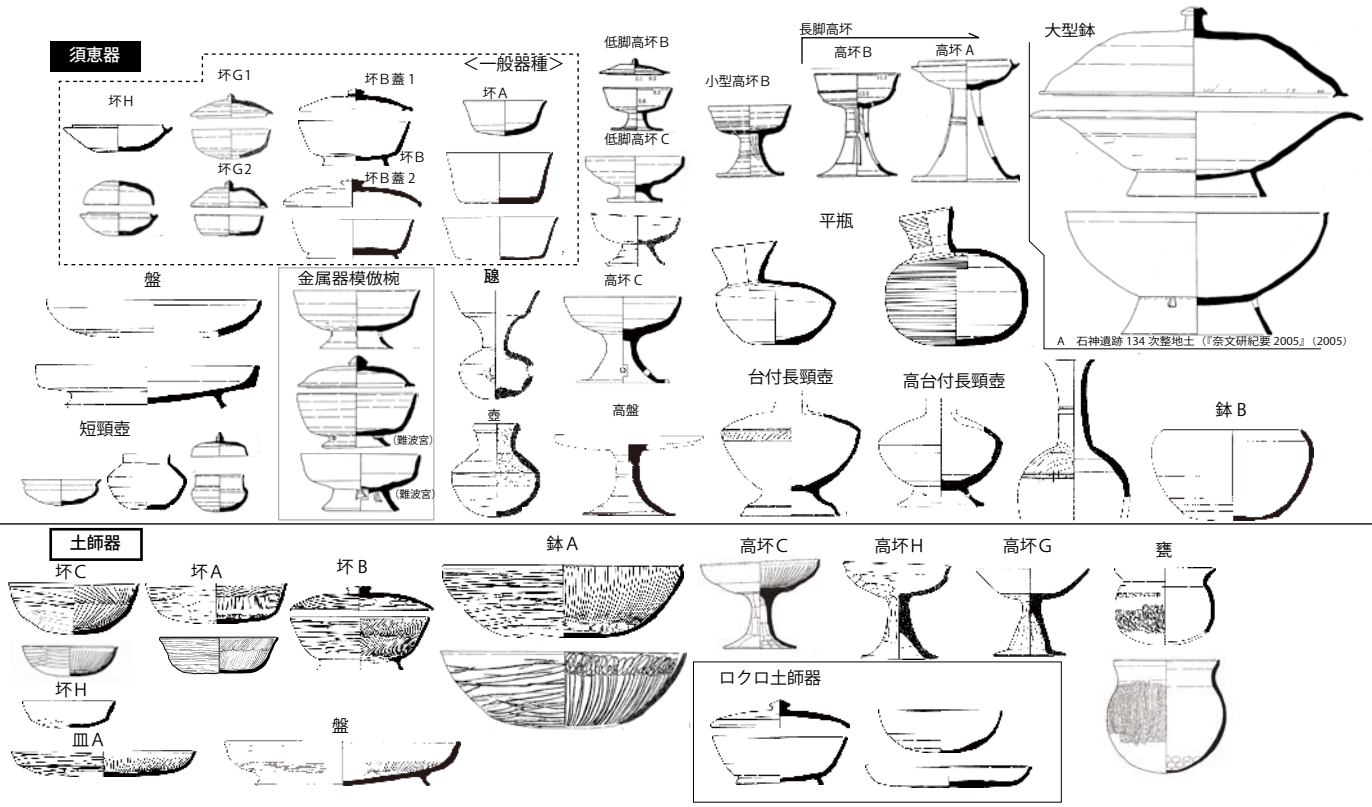


図 3-1 宮都周辺の土器形式（1/10） ※（難波宮）以外はすべて飛鳥周辺出土資料

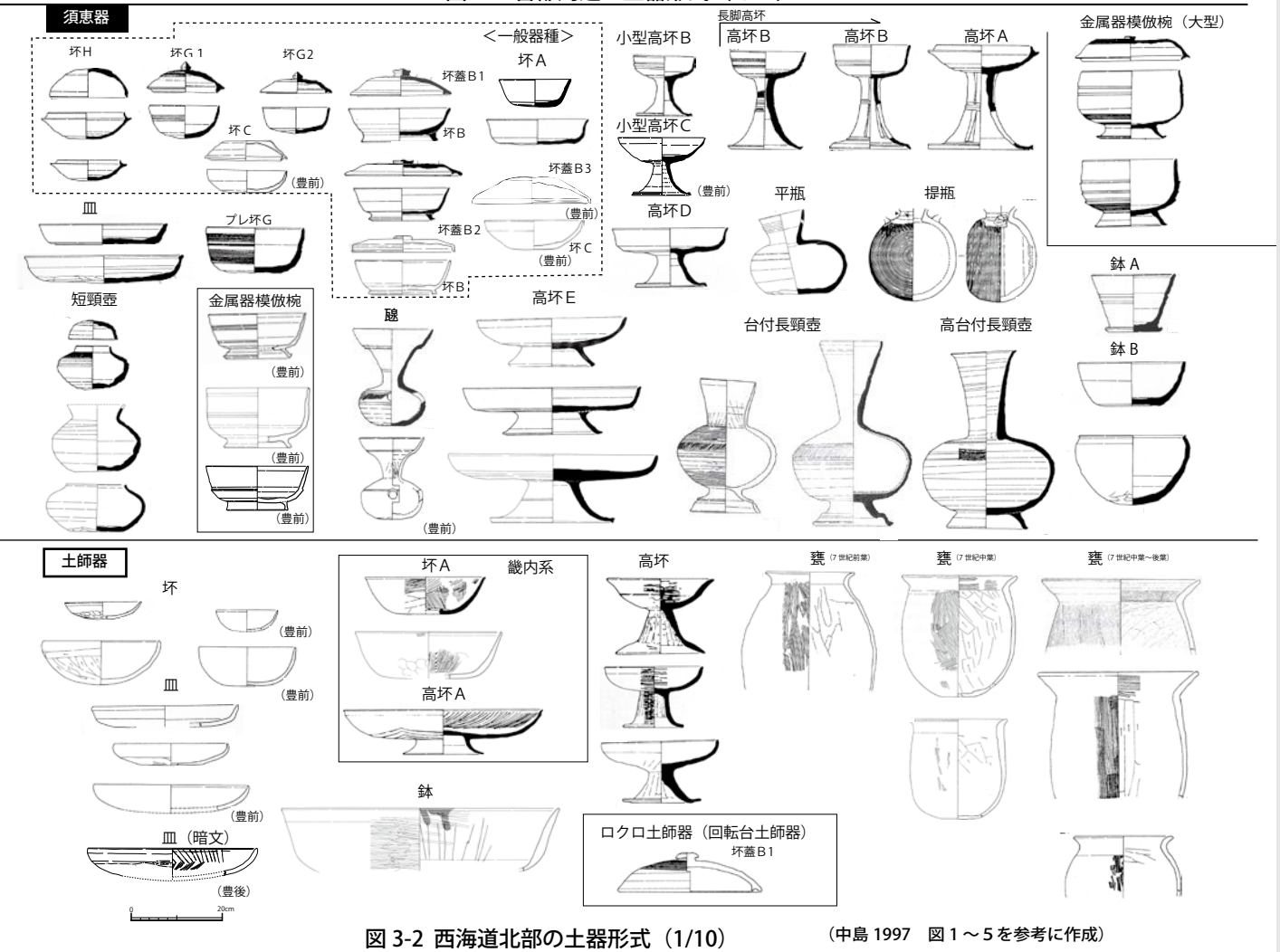


図 3-2 西海道北部の土器形式（1/10） **（中島 1997　図 1 ～ 5 を参考に作成）**

※（豊前）（豊後）以外はすべて筑前南部周辺出土資料

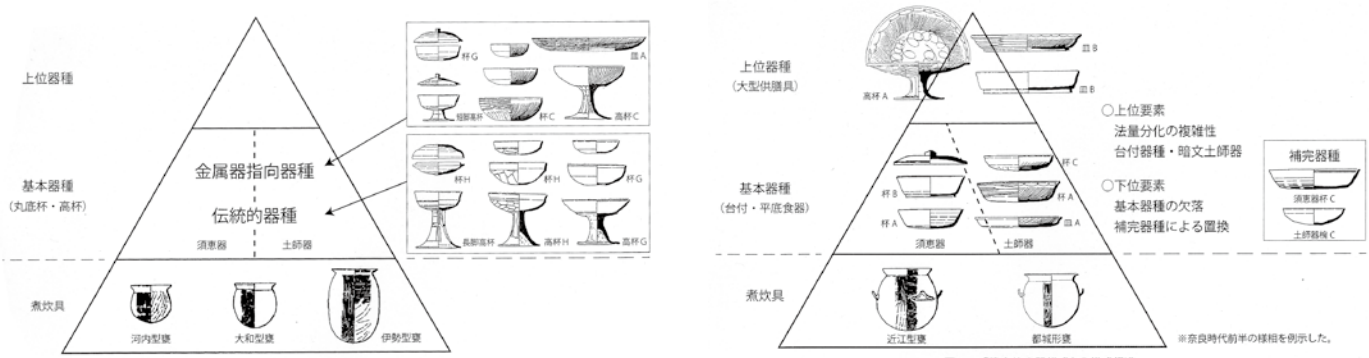


図31 「飛鳥時代前半期土器様式」の様式構造　　図30 「律令的土器様式」の様式構造

「律令的土器様式」の器種構成概念

「律令的土器様式」＝食膳具（基本器種＋付加的器種＋補完器種）＋煮炊具類＋・・・

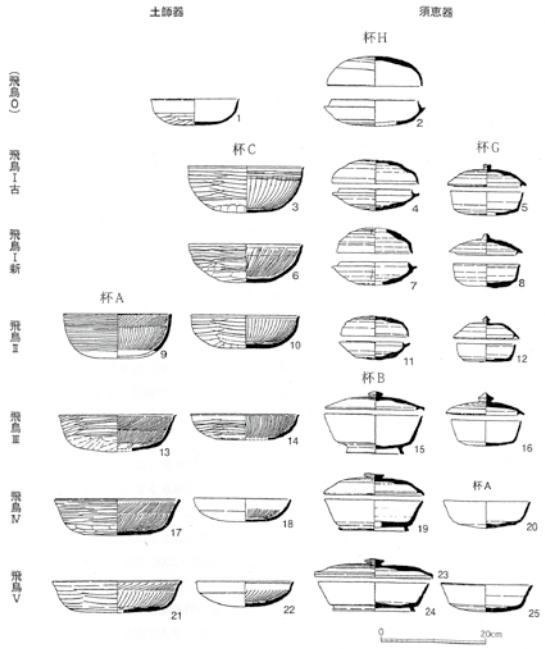
基本器種：宮都・周辺遺跡共に出土する杯・皿・椀形態の器種。
付加的器種：基本器種と共に出土する。単独で出土することは少ない。
　　このうち宮都に特徴的な大型皿・高杯を「上位器種」とする。
補完器種：基本器種の欠落を補完する。基本器種の形態的模倣や粗製品が多い。

図 4-1　７世紀の土器の様式構造とその階層性（小田裕樹 2016b　図 29・30・31 より）

時期区分	出土遺跡・遺構	文　献	備　考
飛鳥Ⅰ以前	飛鳥寺下層	年報1999-Ⅱ	飛鳥寺造営開始588年以前
	山田道第3次　黒褐色土層	年報1999-Ⅱ	
飛鳥Ⅰ※ 【600 年代 ～ 640 年代】	古宮遺跡　SD050・SD124	報告Ⅰ	**土師器坏 C 出現**
	川原寺下層　SD02・SD367	概報10、年報1997-Ⅱ	**須恵器坏 G1 出現**
	山田寺下層　SD619・整地層	概報20、山田寺跡	山田寺造営開始641年以前
	石神遺跡　SD4260	紀要2008	
	甘樫丘東麓遺跡　焼土層SX037	概報25	
	飛鳥池遺跡　灰緑色粘砂層	概報22	**土師器皿 A 出現（少量）**
	甘樫丘東麓遺跡　SK184	紀要2010	
飛鳥Ⅱ 【640 年代 ～ 660 年代】	坂田寺　SG100	概報3	**土師器坏 A 出現（極少量）** **須恵器坏 G2 出現**
	水落遺跡基壇周辺	概報4・12、報告Ⅳ	斉明朝漏刻660年
飛鳥Ⅲ 【660 年代後半 ～ 670 年代】	大官大寺下層　SK121・SE116	概報6、紀要2001・2002	天智朝（近江大津宮）
	藤原宮西方官衙　SK1366	報告Ⅱ	**須恵器・土師器坏 B 出現** **土師器坏 A 量増加**
	藤原京左京六条三坊　SE2355	概報9・小田2012	
	石神遺跡SE800	概報15、年報1997-Ⅰ	
飛鳥Ⅳ 【680 年代を中心に ～ 670 年代後半】	雷丘東方遺跡　SD110	報告Ⅱ	**須恵器坏 B 蓋 2 出現**
	藤原宮下層運河　SD1901A	概報8・紀要2009・紀要2012	天武末年木簡、694年以前
	藤原宮西方官衙南地区SE8061	概報24	
	藤原宮西方官衙南地区SK8471	概報26	
飛鳥Ⅴ 【694 年 ～ 710 年】	藤原宮内裏東大溝　SD105	報告Ⅲ	藤原宮期(694～710)
	藤原宮西方官衙　SE1105	報告Ⅱ	**須恵器坏 B 蓋 2 主体化**
	藤原宮東面内濠　SD2300	概報9・紀要2012	

※坂田寺SG100出土資料より古い様相をもつ資料については、飛鳥Ⅰの中に含めた。
概報：『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』　年報：『奈良文化財研究所年報』
報告：『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』　紀要：『奈良文化財研究所紀要』

表 1　７世紀の土器の大別と略年代（小田裕樹 2014 より）
※太ゴシック文字は報告者が追記



1：山田道整地土下層（黒褐色土）、2：飛鳥寺下層、3～5：小墾田宮推定地 SD050、6～8：山田寺下層 SD619 整地土、9～12：坂田寺 SG100、13～16：大官大寺下層 SK121、17・18・20：藤原宮 SD1900A、19：雷丘東方遺跡 SD110、21：藤原宮 SD105、22・23：藤原宮 SE1105、24：藤原宮 SD2300、25：平城宮 SD1900

図 4-2　飛鳥編年（菱田哲郎案）（菱田 2011　図 1 より）

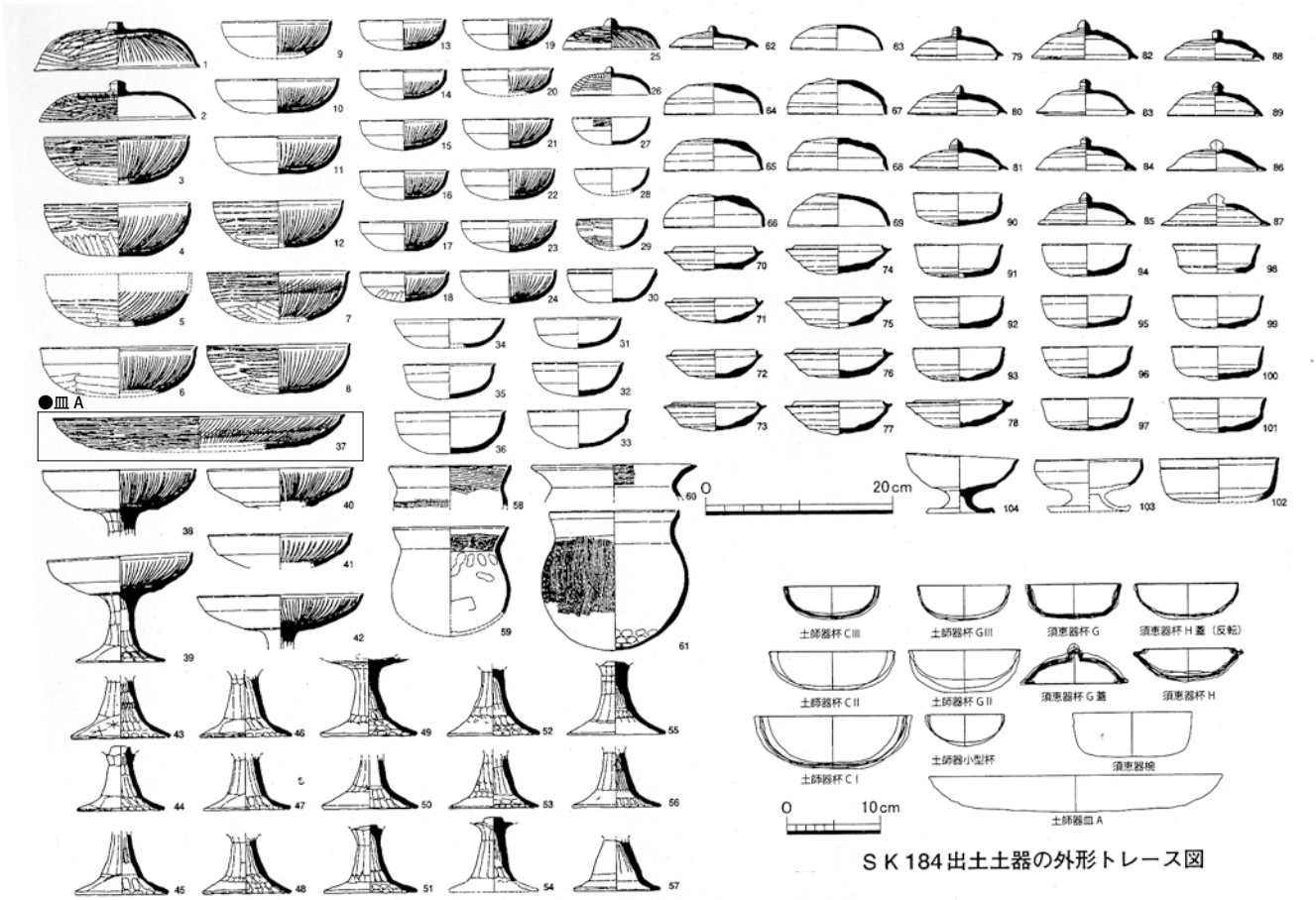


図 5-1　甘樫丘東麓 SK184 出土土器（飛鳥Ⅰ後半～Ⅱ）（1/8）（小田 2016b より）

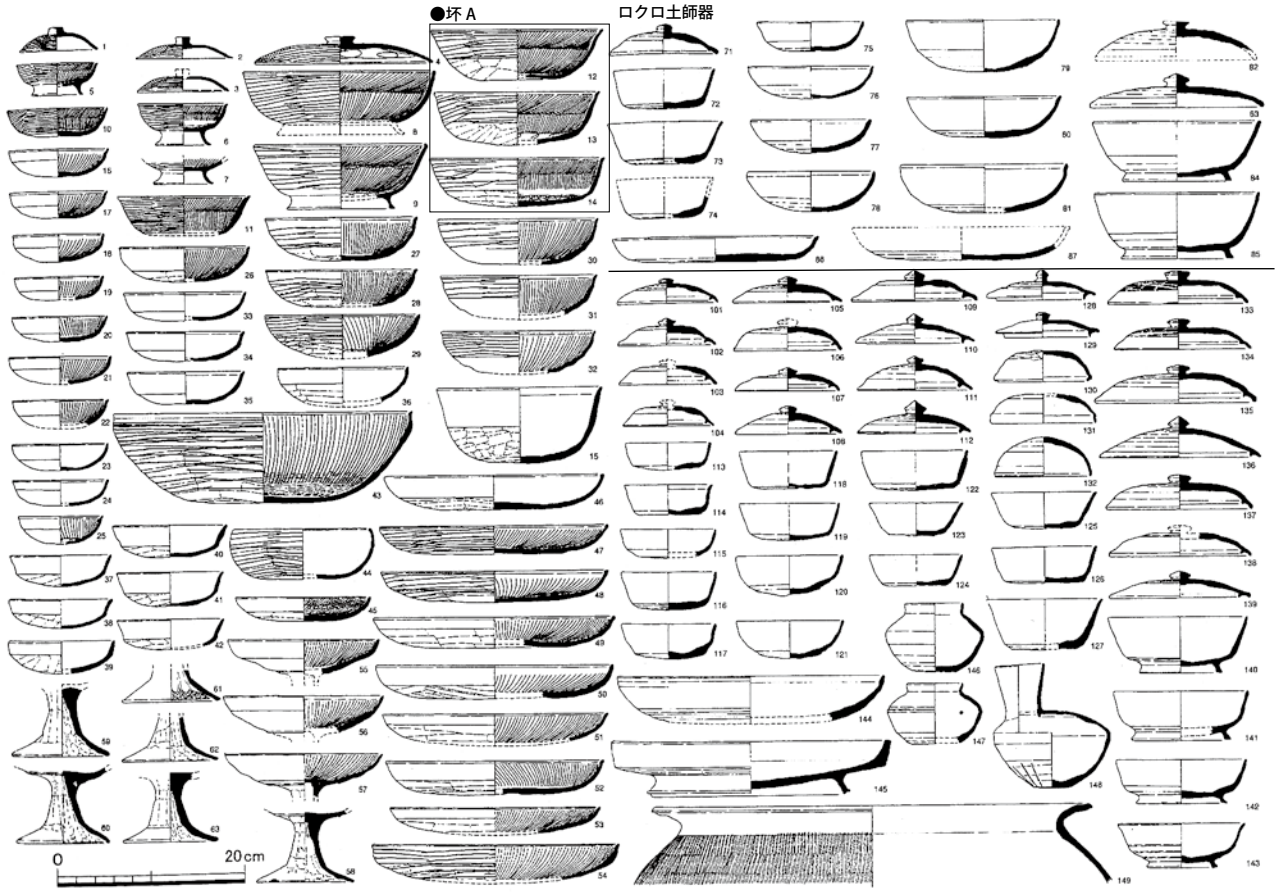


図 5-2　大官大寺 SK121 出土土器（飛鳥Ⅲ）（1/8）（小田 2016b より）

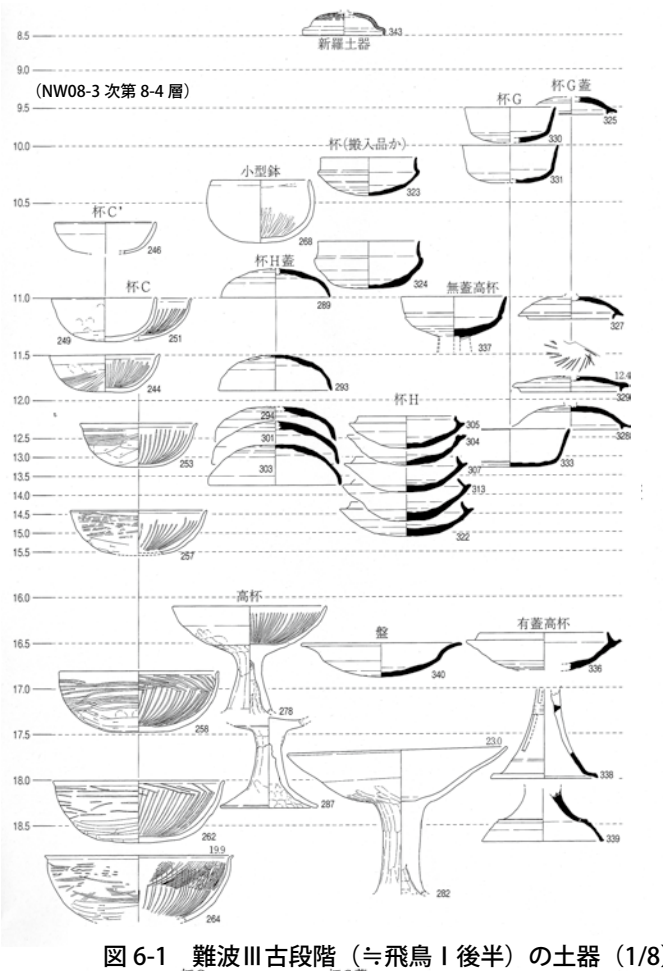


図 6-1　難波Ⅲ古段階（≒飛鳥Ⅰ後半）の土器（1/8）

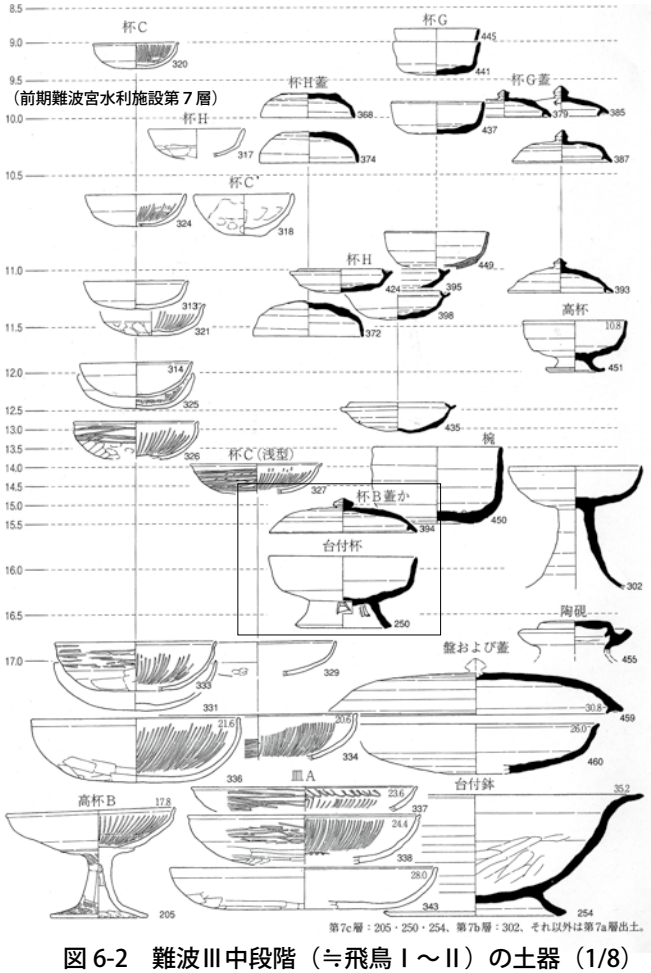


図 6-2　難波Ⅲ中段階（≒飛鳥Ⅰ～Ⅱ）の土器（1/8）

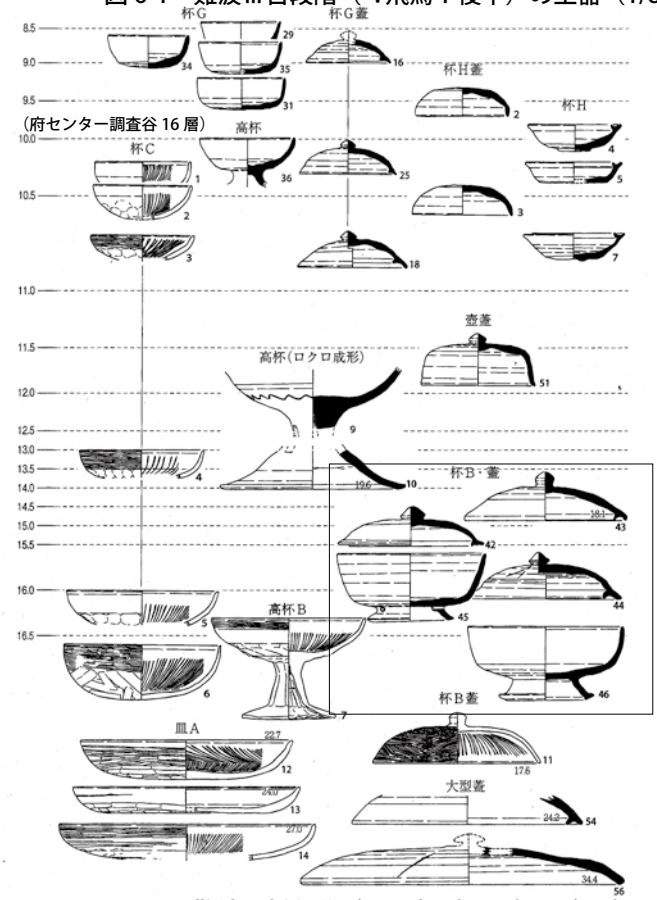


図 6-3　難波Ⅲ新段階（≒飛鳥Ⅱ）の土器（1/8）
（※図 7-1 ～ 3　市川 2016 より）

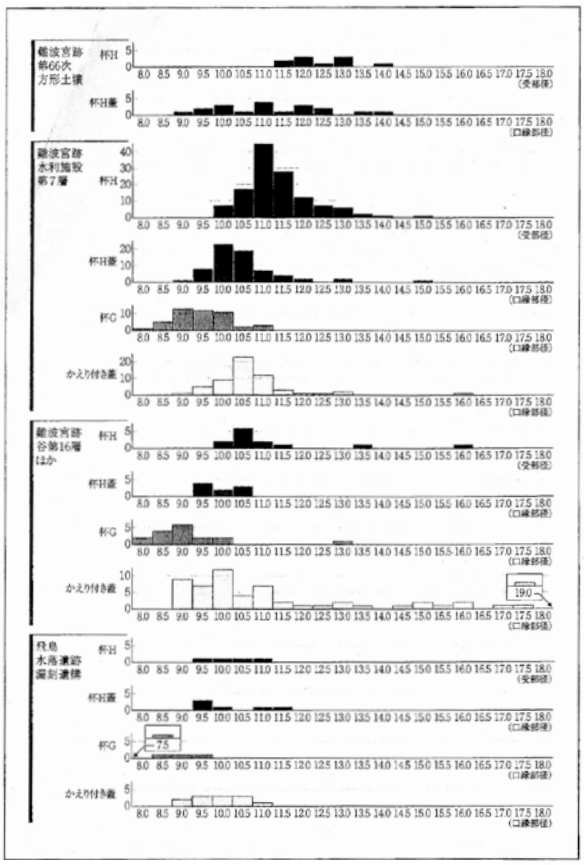


図 6-4　7 世紀中葉における須恵器食器類の法量比較
（佐藤隆 2015 より）

時期区分		他の都城編年ないし標識資料との対応	暦年代	土師器の特徴	須恵器の特徴
難波Ⅲ	【概要】			■暗文やヘラミガキを施された精製の食器類やハケ調整の器壁の薄い甕が現れて主体に。 ■食器類のほとんどは杯C。	■杯Hは法量が縮小。身の底部、蓋の天井部はヘラ切り後不調整のものがほとんどを占める。 ■杯Gが出現し、次第に杯Hを凌駕する。 ■杯Bが出現する。
	古段階	山田寺下層	7世紀前半（620年代～640年代）	・定型化した精製の杯Cが主体となり、その径高指数は30代の後半にほぼ収まる。 ・煮炊具もハケ調整のものが現れる。	・杯Hは受部径11～12cm代のものが中心。底部・天井部はヘラ切り後不調整のものが主体。 ・杯Gが現れるが、まだ少数。
	中段階	飛鳥池谷資料～坂田寺跡SG100	7世紀中頃（650年代が中心）	・食器類はヘラミガキ・暗文のものがほとんど。 ・杯Cの径高指数は30代の前半。 ・器種に皿が加わる。 ・煮炊具はハケ調整のものが主体となる。	・杯HとGの比率は前者が少し多い。 ・杯G蓋には口縁部径がひとまわり大きなものがあり、法量分化が認められる。 ・脚台の高い杯Bがみられる。
	新段階	水落遺跡貼石遺構	660年代が中心	・杯Cは器高が低くなる。 ・定型化する前の形態をもつ杯A、および杯B・同蓋がある。 ・甕はハケメのものがほとんどで、他には南河内地域の製品が少量含まれる。	・杯Gが大半を占め杯Hはわずか。いずれも法量がもっとも縮小している。 ・ひとまわり大きな杯G蓋がここでも存在。 ・典型的な低脚の杯Bが確実に存在する。 ・杯Aがみられる。
難波Ⅳ	【概要】			■定型化した杯Aが現れる。 ■杯Cの径高指数が減少する。	■杯Hがほとんど見られなくなり、初めは杯G、次いで杯A・Bが主体となる。 ■杯B蓋は「かえり」のないものが増えていく。
	古段階	飛鳥Ⅳ	7世紀第4四半期	・杯Cは径高指数が30を下回るものが多い。 ・定型化した杯Aが現れるが、まだ杯Cが主体。	・杯Gの他に定型化した杯A・Bが確認できる。杯Hはわずかに残る程度。 ・杯B蓋は「かえり」をもつものがほとんど。
	新段階	飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）～平城Ⅱ	8世紀第1四半期	・杯Cに替わり杯Aが主体となる。 ・杯Aの暗文は放射2段のものと1段のものとがある。 ・杯Bには連弧状暗文が認められるものがある。	・杯A・Bが主体で、杯Cは減少する。 ・杯B蓋は「かえり」のないものがほとんど。

表2　難波地域の土器編年の概要　（市川 2016 表2より一部抽出）

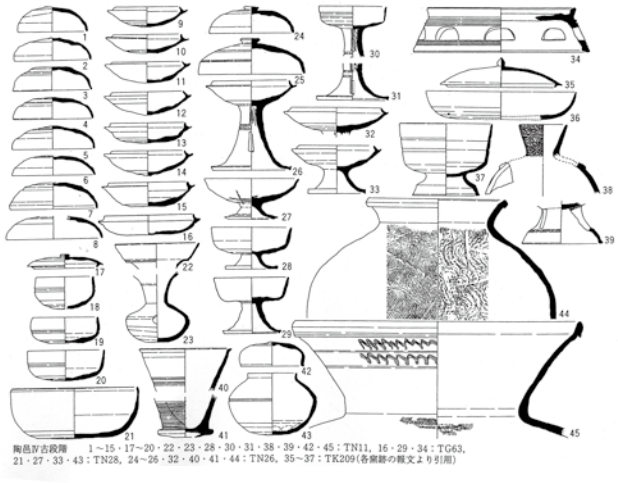


図 7-1　陶邑Ⅳ古段階（1/12）

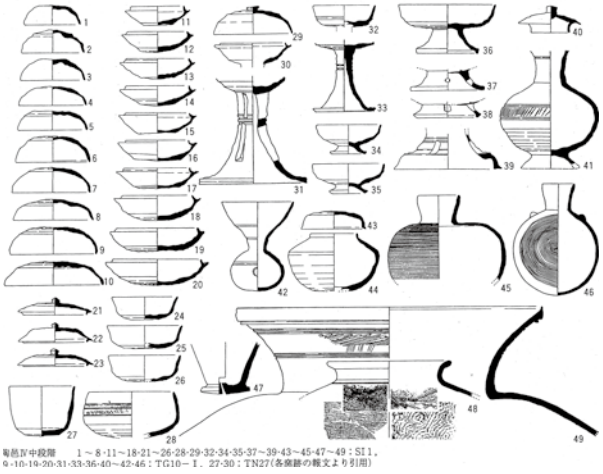


図 7-2　陶邑Ⅳ中段階（1/12）

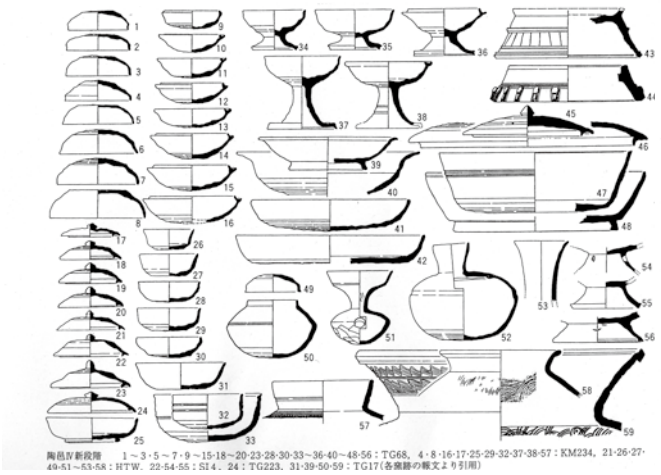


図 7-3　陶邑Ⅳ新段階（1/12）

（図 7-1 ～ 3 佐藤 2003 より）

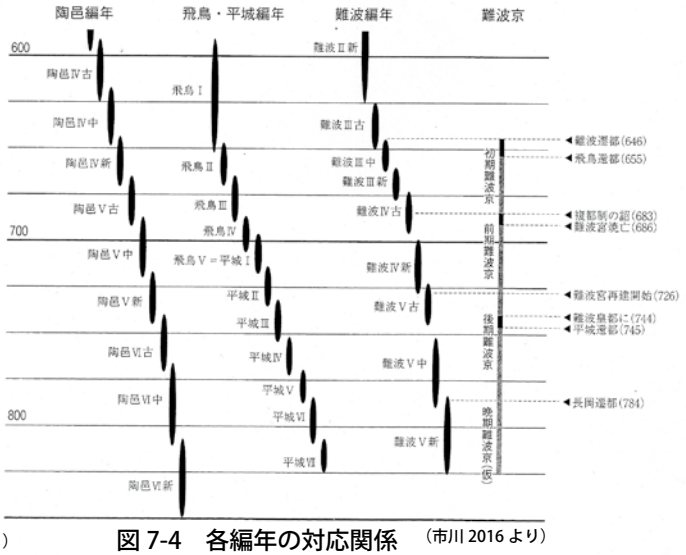


図 7-4　各編年の対応関係　（市川 2016 より）

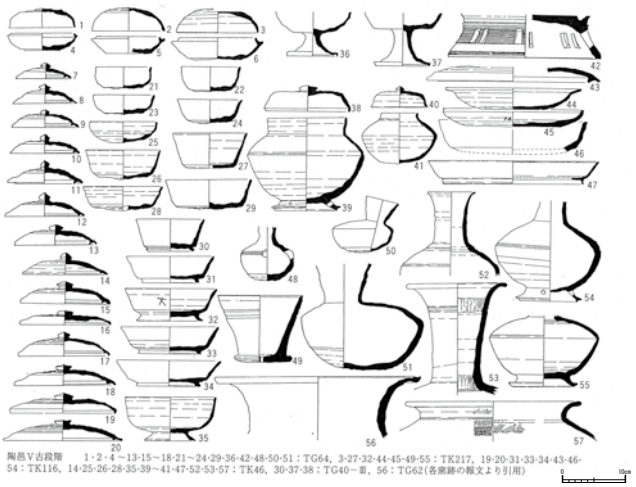


図 8-1　陶邑Ⅴ古段階（1/12）

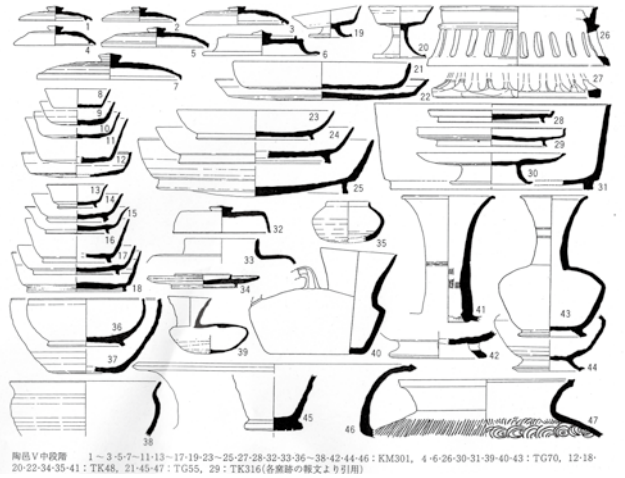


図 8-2　陶邑Ⅴ中段階（1/12）（図 8-1 ～ 2　佐藤 2003 より）

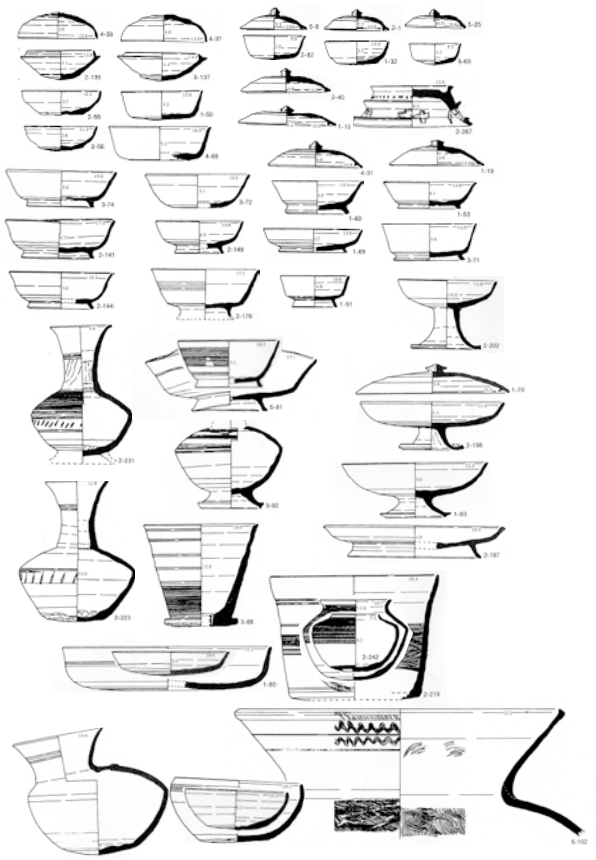
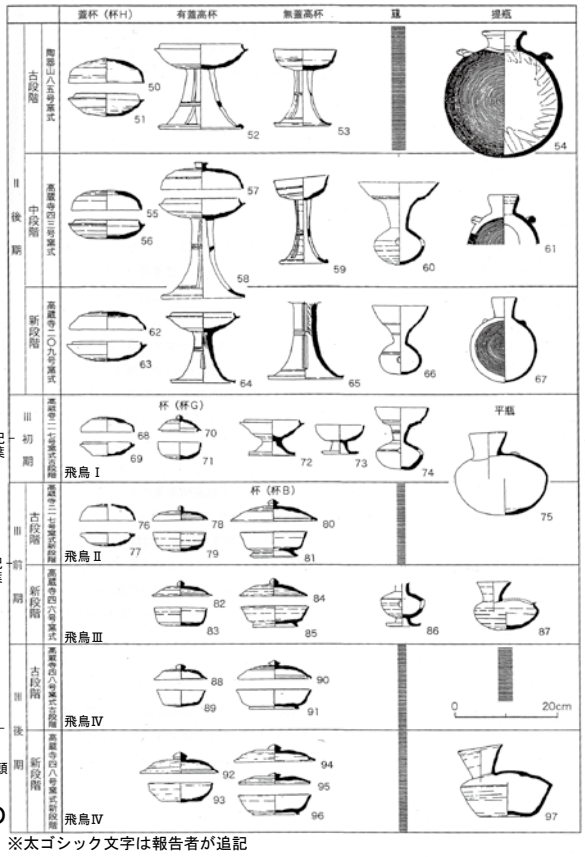


図 8-3　山ノ神遺跡灰原上層（近江朝期＝飛鳥Ⅲ）（1/12）
（須崎 1998 より作成）

山田邦和案			森浩一案		田辺昭三案（1966年案）		田辺昭三案（1981年案）			中村浩案（2001年案）		
先Ⅰ期												
Ⅰ期	前期	古段階	Ⅰ期	前半	Ⅰ期	TK73型式	Ⅰ期	高蔵73型式	古段階（一須賀2段階）	Ⅰ型式	1段階	前期
		新段階							新段階			後期
	中期	古段階		中期		TK216型式		高蔵216型式			2段階	
		新段階						高蔵208型式	古段階（大野池46段階）			
						TK208型式			新段階		3段階	
	後期	古段階		後半		TK23型式		高蔵23型式			4段階	
		新段階				TK47型式		高蔵47型式			5段階	
Ⅱ期	前期	古段階	Ⅱ期		Ⅱ期	MT15型式	Ⅱ期	陶器山15型式		Ⅱ型式	1段階	
		新段階				TK10型式		高蔵10型式	古段階		2段階	
	後期	古段階		前半		（未確認型式）			新段階		3段階	
		中段階	Ⅲ期	中葉		TK43型式		高蔵43型式			4段階	
		新段階				TK209型式		高蔵209型式			5段階	
Ⅲ期	初期			後半		（未確認型式）		高蔵217型式			6段階	
	前期	古段階	Ⅳ期	前半	Ⅲ期	TK217型式	Ⅲ期			Ⅲ型式	1段階	
		新段階				（未確認型式）		高蔵46型式			2段階	
	後期	古段階		後半		（未確認型式）		高蔵48型式			3段階	
		新段階										

表３　陶邑窯跡群の須恵器編年対応表　（山田 2011　表３より）



※太ゴシック文字は報告者が追記

50・51・53・54：陶器山85号窯址、52：光明池128号窯址、55・56・61：高蔵寺43号窯址、57・58：高蔵寺41号窯址、59：槇尾塚原9号墳、60：高蔵寺43-Ⅰ号窯址、62・63・66・67：栂10-Ⅰ号窯址、64：谷山池26号窯址、65：高蔵寺209号窯址、68～71・73：栂206号窯址、72：栂68号窯址、74：光明池234号窯址、75・78～81：高蔵寺217号窯址、76・77：栂11-Ⅱ号窯址、82～85・87：高蔵寺46号窯址、86：高蔵寺116号窯址、88～91：栂40-Ⅱ号窯址、92～97：高蔵寺48号窯址

図 8-4　大阪府南部窯址群（陶邑窯）の古墳時代須恵器編年図
（山田 2011　図２より一部抽出）

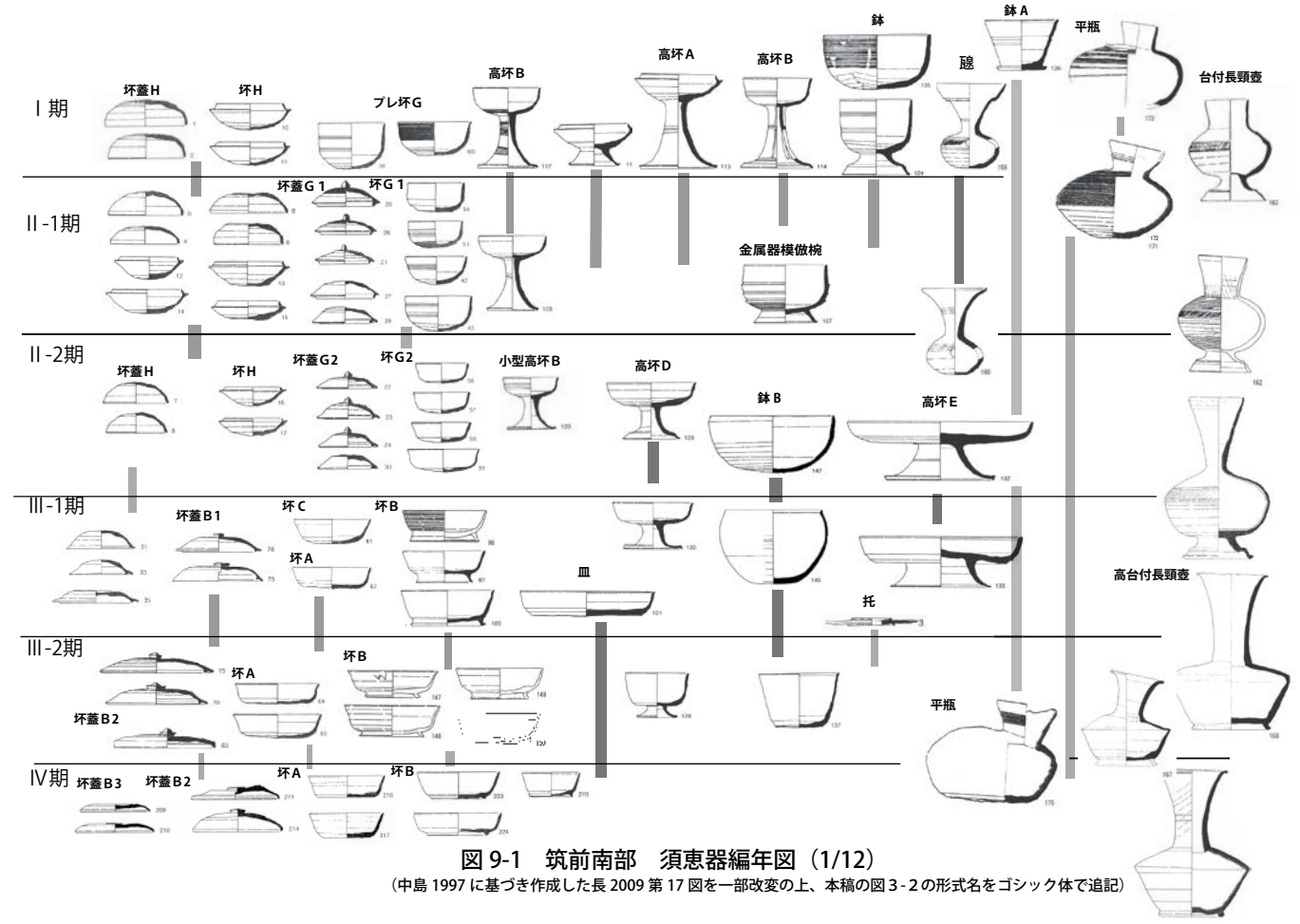


図 9-1　筑前南部　須恵器編年図（1/12）

（中島 1997 に基づき作成した長 2009 第 17 図を一部改変の上、本稿の図 3 - 2 の形式名をゴシック体で追記）

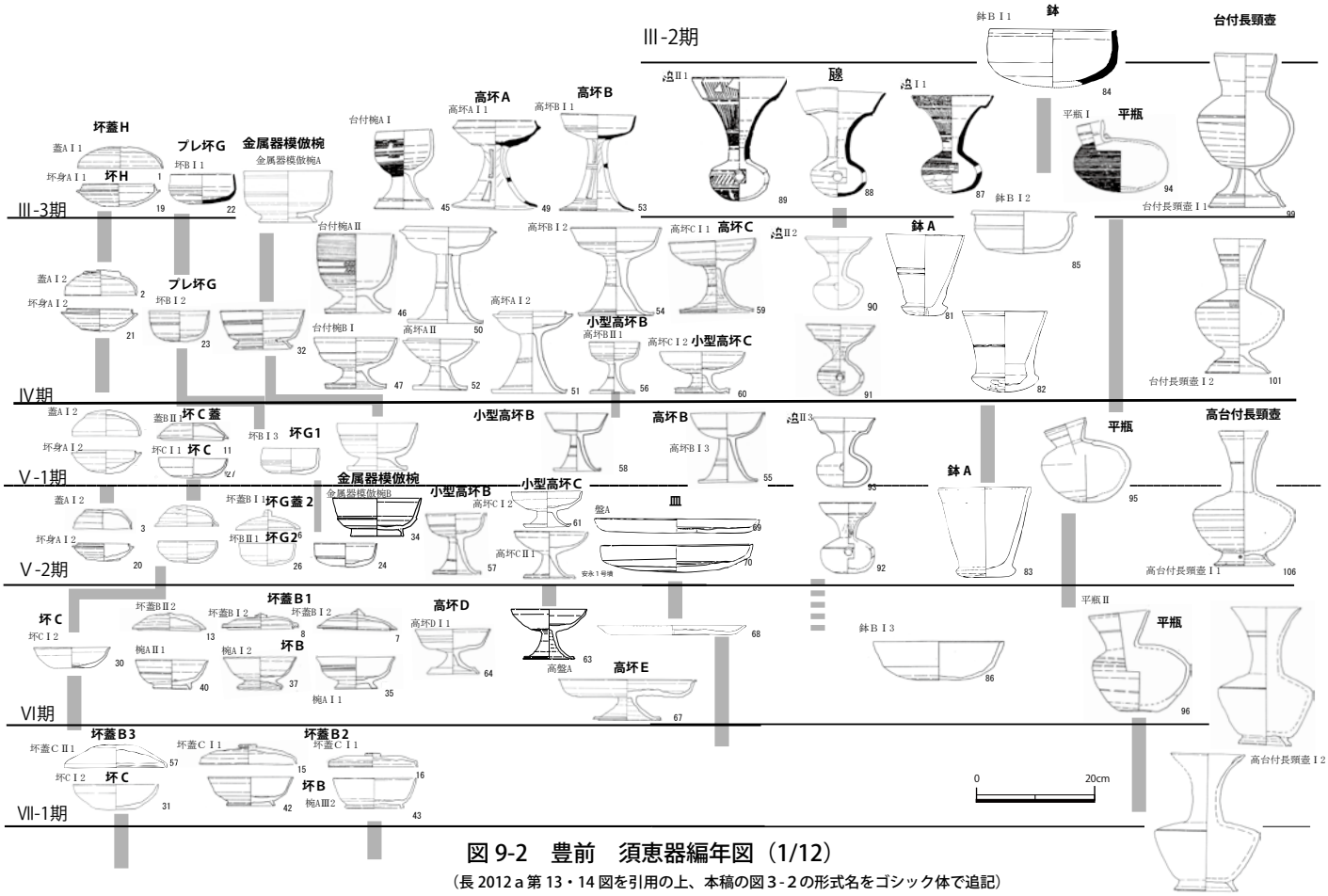


図 9-2　豊前　須恵器編年図（1/12）

（長 2012 a 第 13・14 図を引用の上、本稿の図 3 - 2 の形式名をゴシック体で追記）

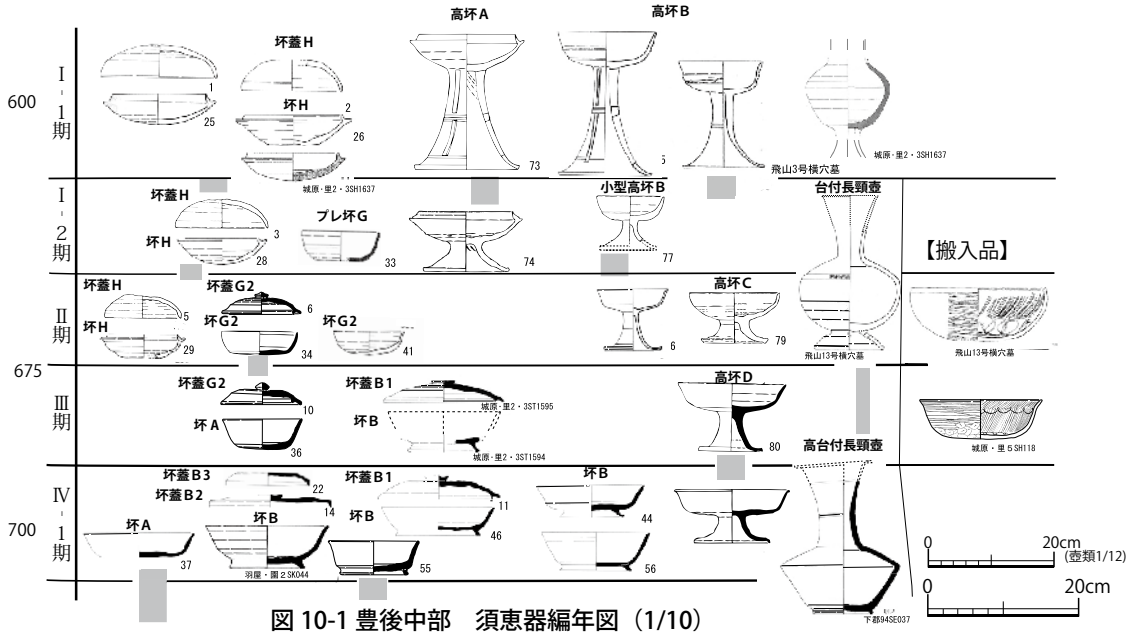
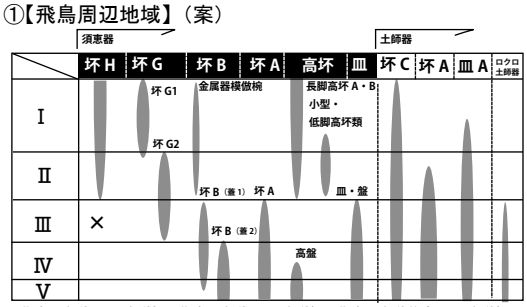


図 10-1 豊後中部　須恵器編年図（1/10）

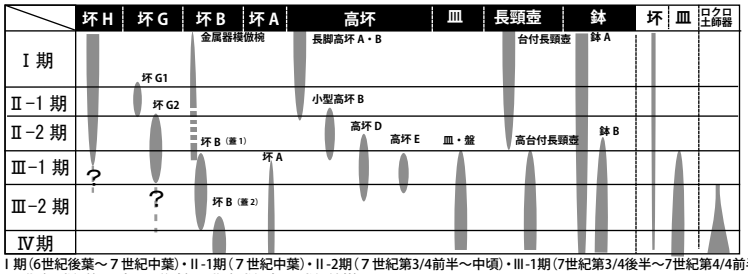
（長　2012b 図 6-1 を引用一部改変の上、本稿の図３-２の形式名をゴシック体で追記）

①【飛鳥周辺地域】（案）



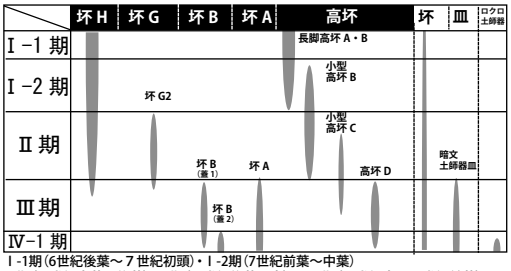
Ⅰ期（600年代～640年代）・Ⅱ期（640年代～660年代）・Ⅲ期（660年代後半～670年代）
Ⅳ期（670年代後半～680年代）・Ⅴ期（694年～710年）

②【筑前南部】



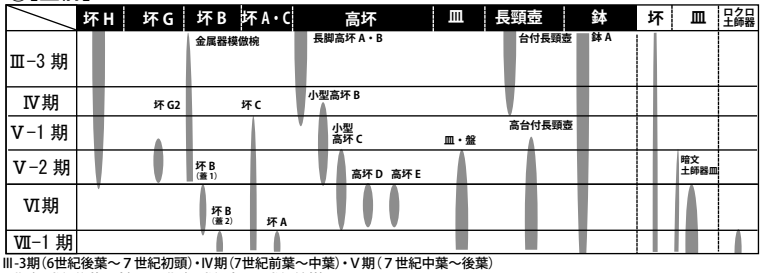
Ⅰ期（6世紀後葉～７世紀中葉）・Ⅱ-1期（７世紀中葉）・Ⅱ-2期（７世紀第3/4前半～中頃）・Ⅲ-1期（7世紀第3/4後半～7世紀第4/4前半）
Ⅲ-2期（７世紀第4/4中頃～後半）・Ⅳ期（7世紀末～8世紀前葉）

④【豊後中部】



Ⅰ-1期（6世紀後葉～７世紀初頭）・Ⅰ-2期（7世紀前葉～中葉）
Ⅱ期（７世紀中葉～後葉）・Ⅲ期（７世紀後葉～末）・Ⅳ-1期（７世紀末～８世紀前葉）

③【豊前】



Ⅲ-3期（6世紀後葉～７世紀初頭）・Ⅳ期（7世紀前葉～中葉）・Ⅴ期（７世紀中葉～後葉）
Ⅵ期（７世紀後葉～末）・Ⅶ-1期（７世紀末～８世紀前葉）

表４　形式消長図（各地の主な形式を抽出・量比はイメージ、年代は図 10-2 より想定）

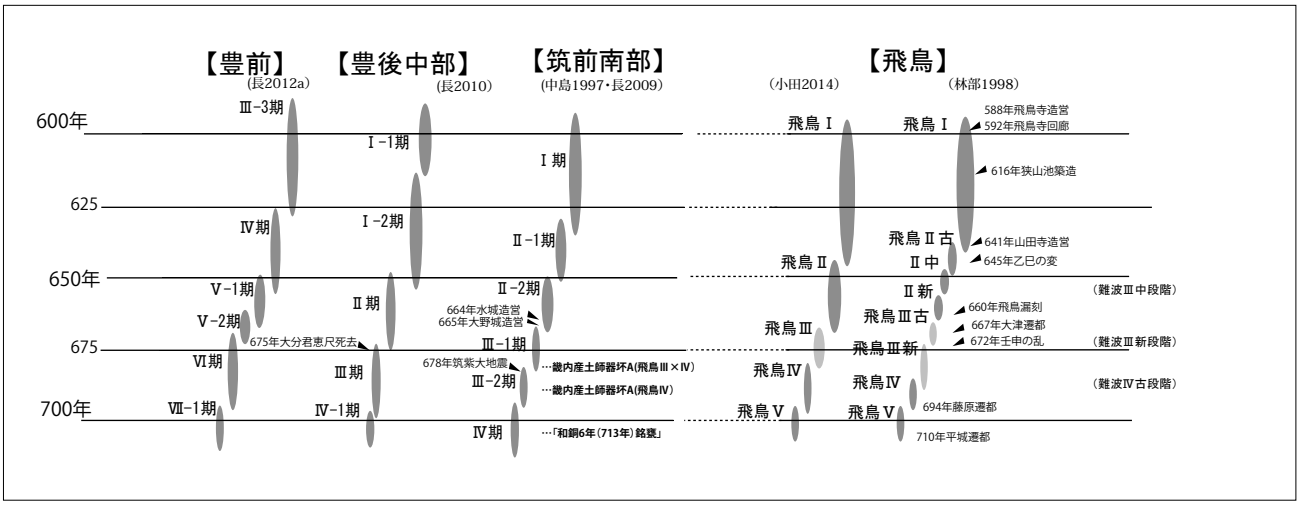


図 10-2　筑前・豊前・豊後・飛鳥地域との併行関係案（長　2012a を一部改変）

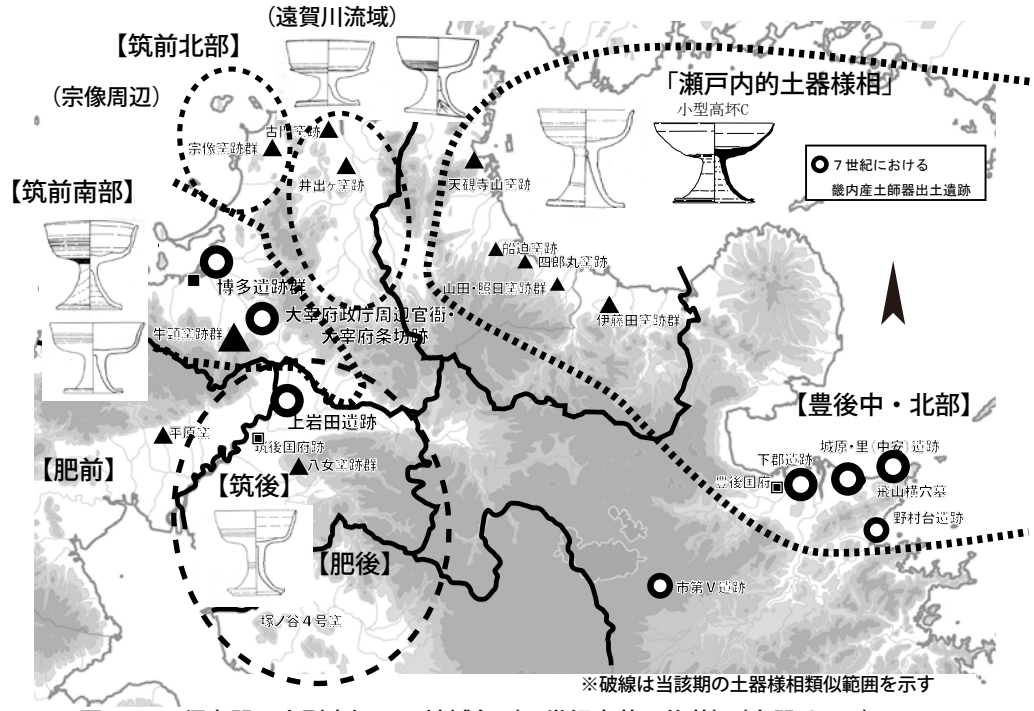


図 11-1　須恵器　小型高坏 B の地域色（7 世紀中葉～後葉）（土器は 1/8）

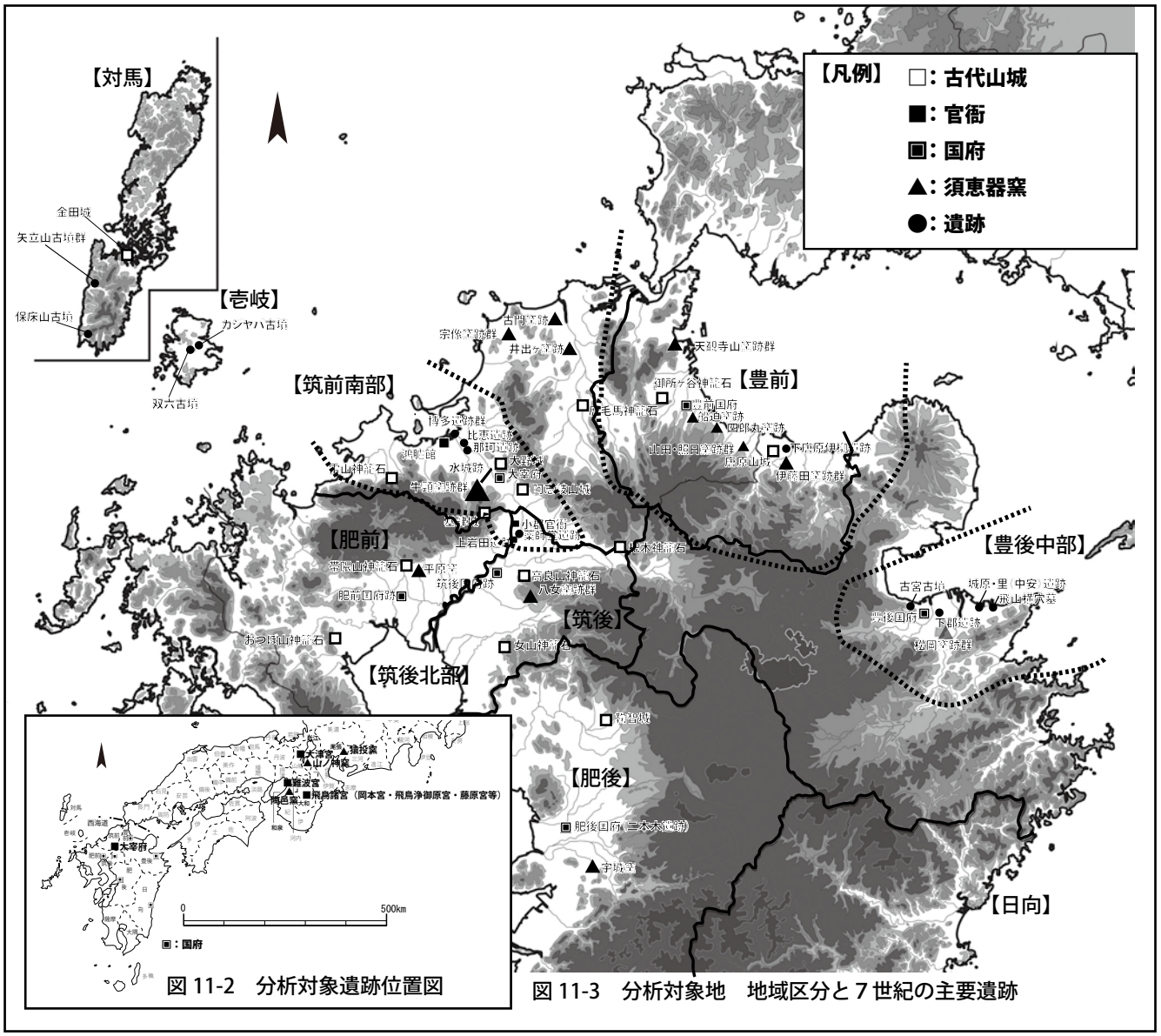


図 11-2　分析対象遺跡位置図

図 11-3　分析対象地　地域区分と 7 世紀の主要遺跡

【筑前南部Ⅱ−2】『龍頭遺跡』福岡県教委（1996）第 123 集

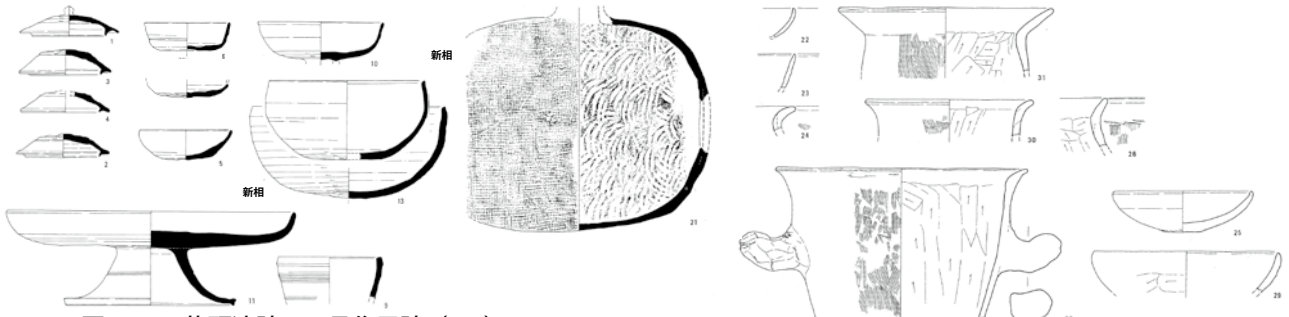
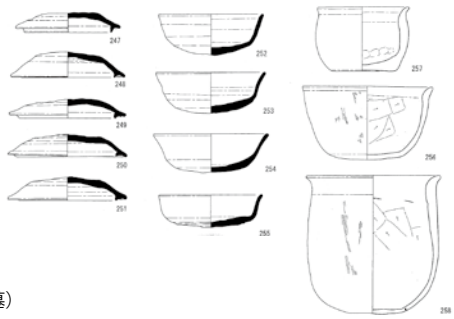


図 12-1　龍頭遺跡　5 号住居跡（1/8）　（集落）

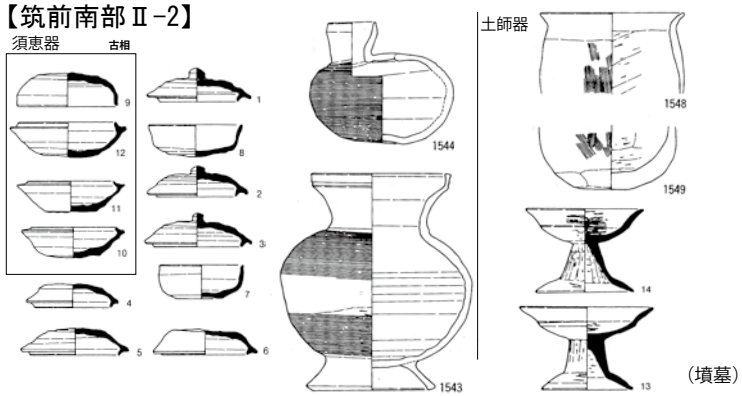
【筑前南部Ⅱ−2】
『乙金地区遺跡群 15』大野城市教委（2016）第 139 集



（墳墓）

図 12-2　王城山遺跡第 2 次 ST01（土坑墓）（1/8）

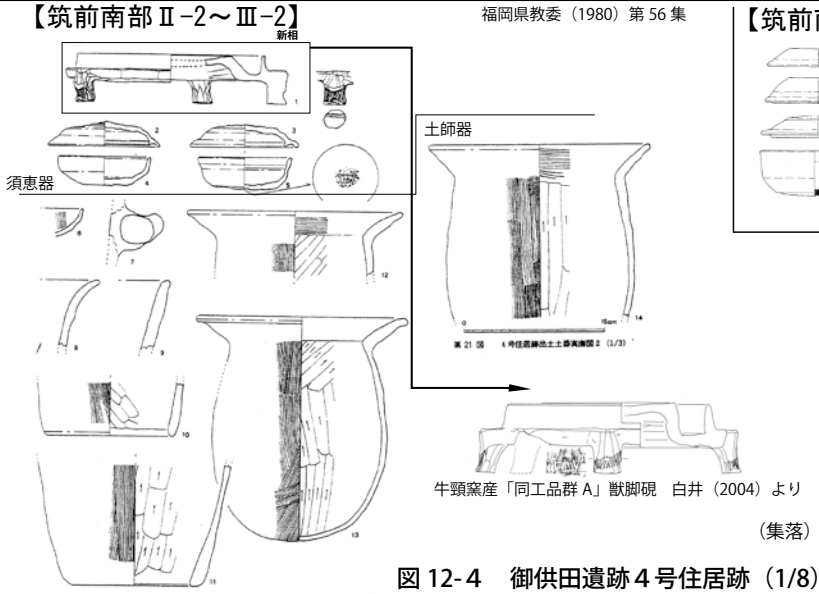
【筑前南部Ⅱ−2】
須恵器　古相　土師器



（墳墓）

図 12-3　堤ヶ浦古墳群　SK18（土坑墓）（1/8）
『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市教委（1987）第 151 集及び（中島 1997）

【筑前南部Ⅱ−2〜Ⅲ−2】　福岡県教委（1980）第 56 集



牛頸窯産「同工品群 A」獣脚硯　白井（2004）より

（集落）

図 12-4　御供田遺跡 4 号住居跡（1/8）

【筑前南部Ⅱ−2＜Ⅲ−1期】『平蔵遺跡』那珂川町教委（1980）第 5 集

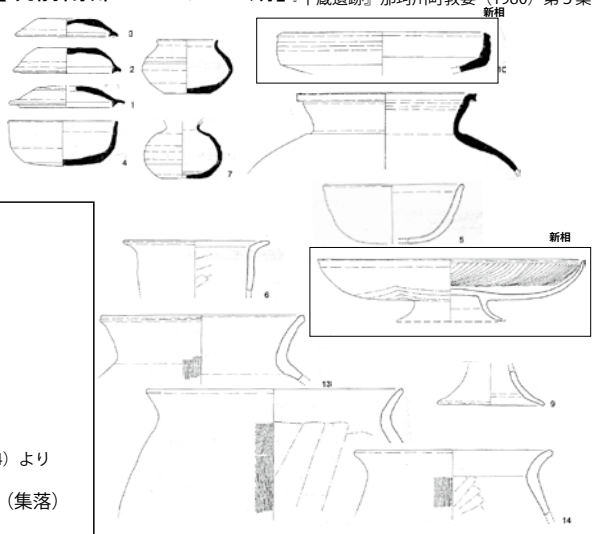
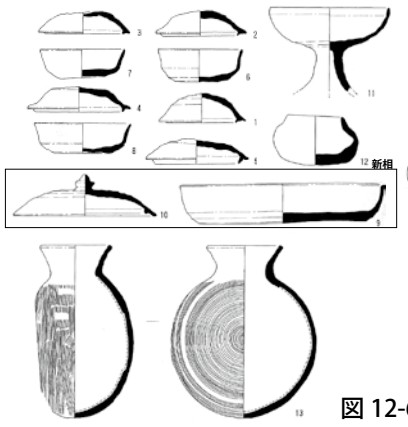


図 12-5　平蔵遺跡 SK11（1/8）　（集落）

【筑前南部Ⅲ−1】



『牛頸塚原遺跡』大野城市教委（1995）第 44 集

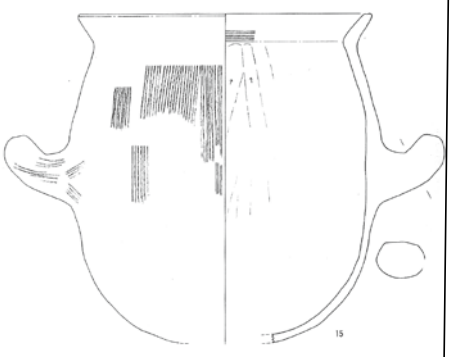
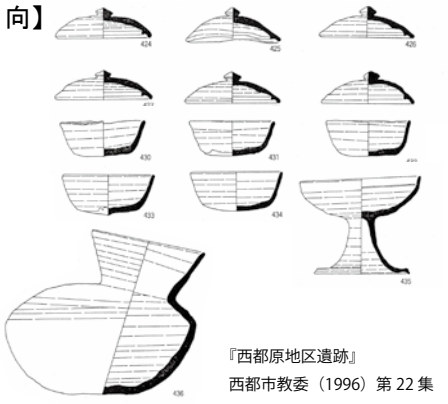


図 12-6　牛頸塚原遺跡 28 号住居跡（1/8）
（須恵器工人集落？）

【日向】

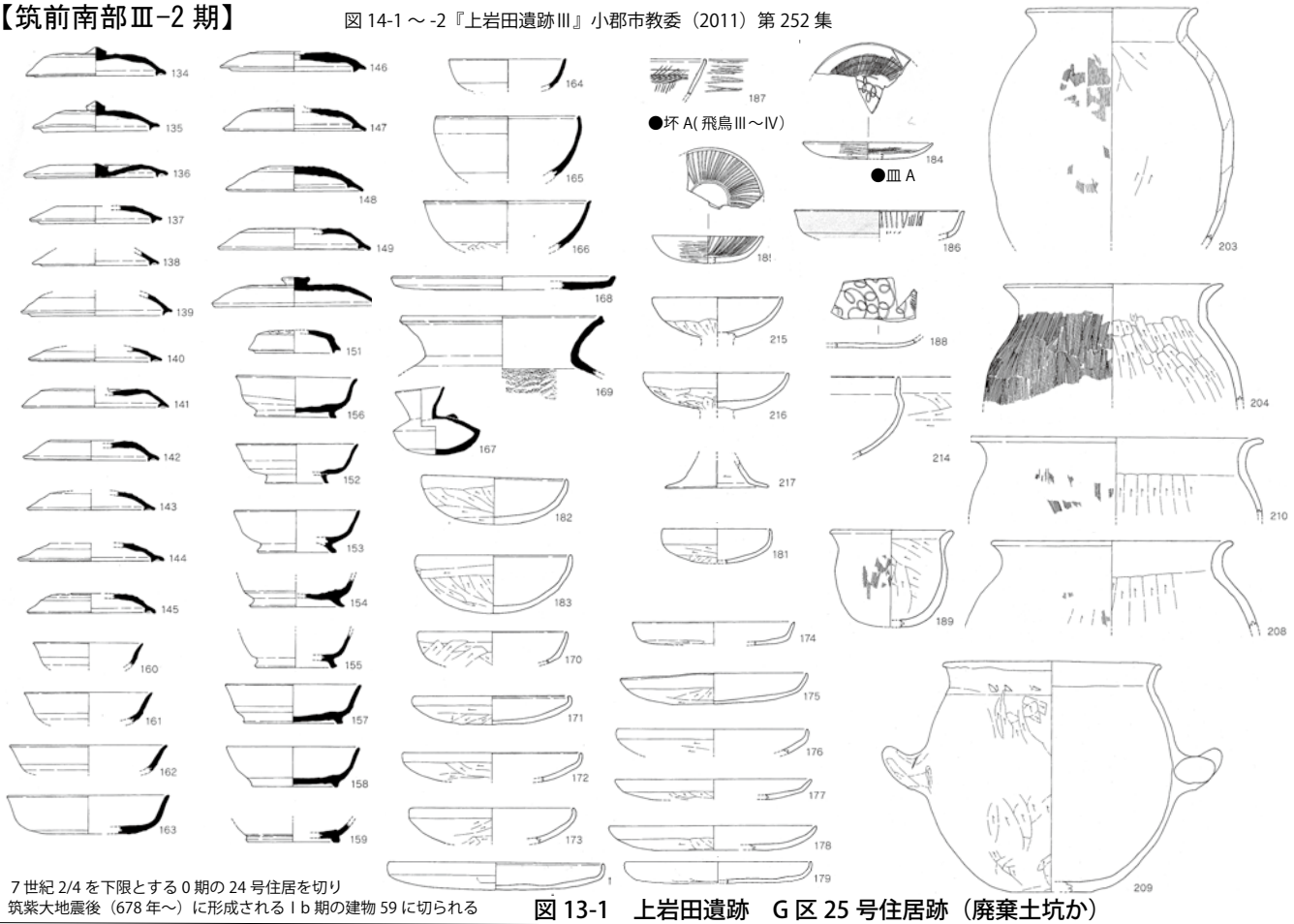


『西都原地区遺跡』
西都市教委（1996）第 22 集

図 12-7　旧競馬場跡 SD1（土坑墓か）
（墳墓）

【筑前南部Ⅲ−2 期】

図 14-1 ～ -2『上岩田遺跡Ⅲ』小郡市教委（2011）第 252 集



7 世紀 2/4 を下限とする 0 期の 24 号住居を切り
筑紫大地震後（678 年～）に形成される Ⅰb 期の建物 59 に切られる

図 13-1　上岩田遺跡　G 区 25 号住居跡（廃棄土坑か）

【筑前南部Ⅲ−2 期】

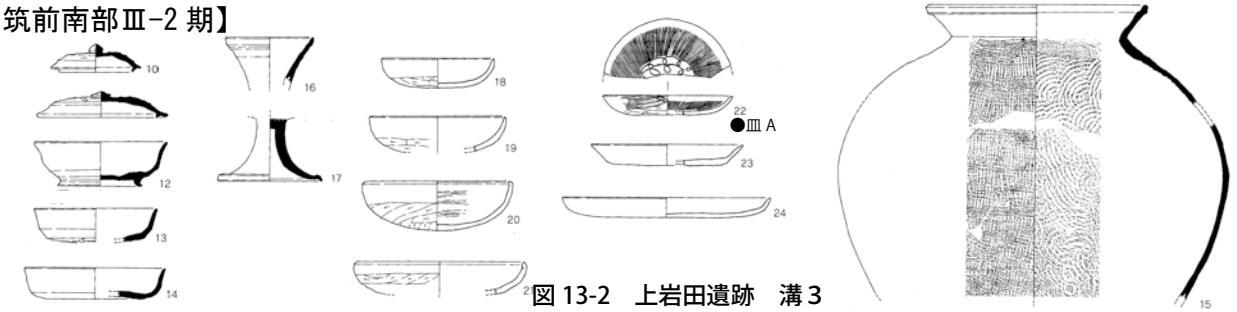


図 13-2　上岩田遺跡　溝 3

【筑前南部Ⅲ−2 期】

『博多 58』福岡市教委（1997）第 526 集

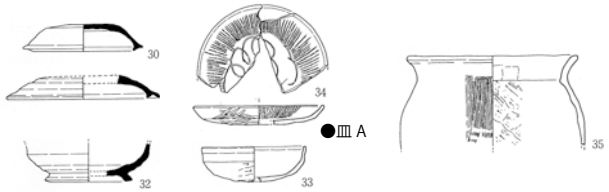
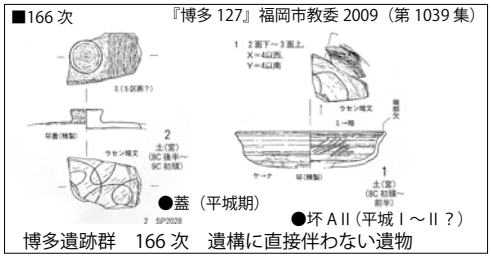


図 13-3　博多遺跡群 33 次 SC153

『博多 127』福岡市教委 2009（第 1039 集）



博多遺跡群　166 次　遺構に直接伴わない遺物

【筑前南部Ⅲ−1 期】

『福岡市埋蔵文化財年報』vol. 21 福岡市教委 2008

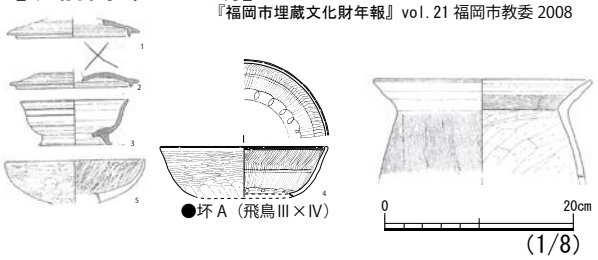
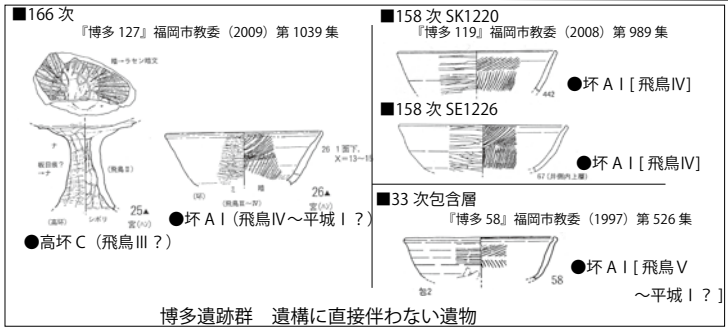


図 13-4　博多遺跡群 169 次 SK12



博多遺跡群　遺構に直接伴わない遺物

【筑前南部Ⅲ-1 期】『大宰府条坊跡Ⅸ』太宰府市教委（1996）第 30 集

■大宰府条坊跡

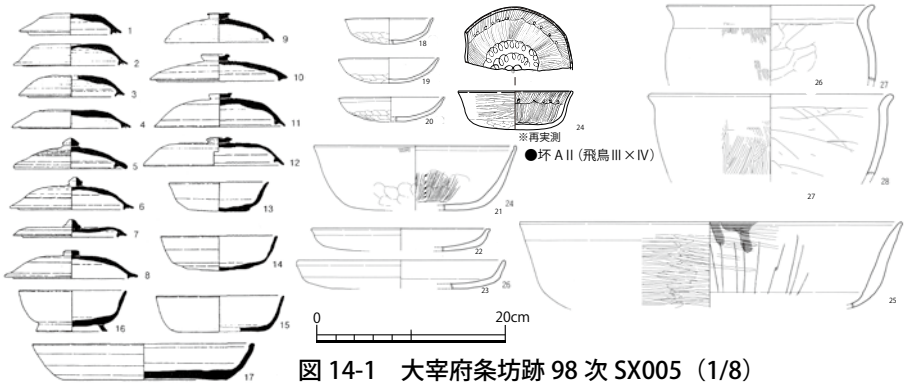
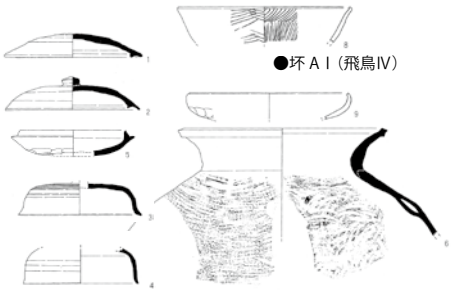


図 14-1　大宰府条坊跡 98 次 SX005（1/8）

【筑前南部Ⅲ-2 期】

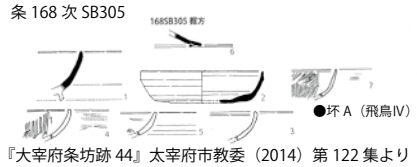
■大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区）



『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ- 不丁地区遺物編 1 -』
九州歴史資料館（2013）

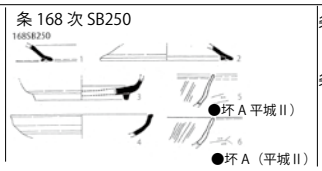
図 14-3　不丁地区 SK2344A（1/8）

条 168 次 SB305



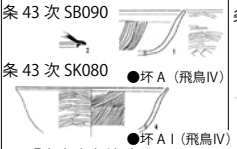
『大宰府条坊跡 44』太宰府市教委（2014）第 122 集より

条 168 次 SB250



条 43 次 SB090

条 43 次 SK080



『大宰府条坊跡Ⅹ』より

条 168 次　遺構に直接伴わない遺物

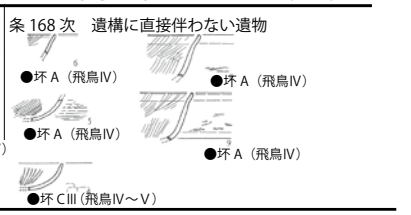


図 14-2　大宰府条坊跡出土の畿内産土師器（1/8）

【山本Ⅲ期】　『大宰府史跡』九州歴史資料館（1995）平成 6 年度概報

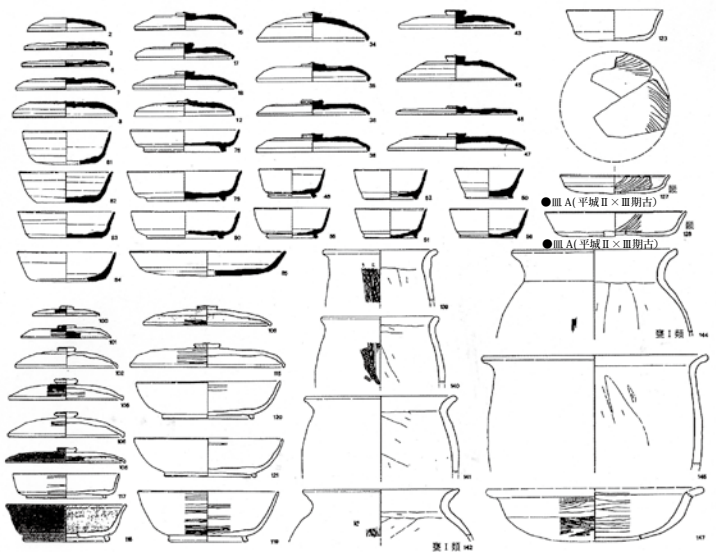
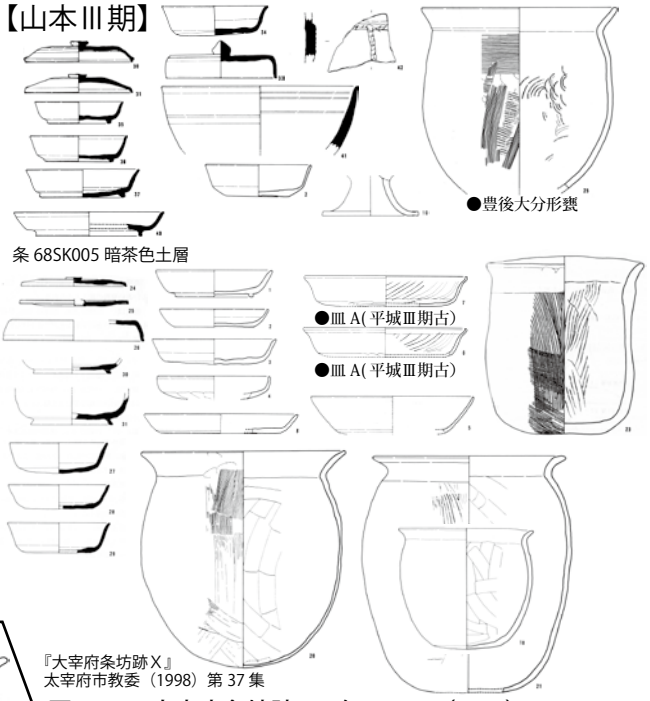


図 14-4　来木地区（大宰府史跡 160 次）SK4141（1/10）

【山本Ⅲ期】



『大宰府条坊跡Ⅹ』
太宰府市教委（1998）第 37 集

図 14-5　大宰府条坊跡 68 次 SK005（1/10）

【豊後Ⅲ期】

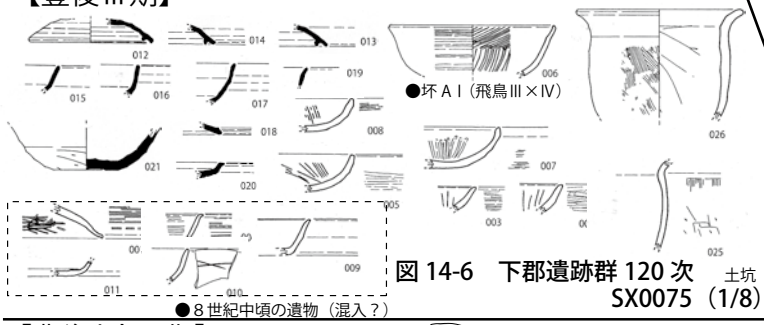


図 14-6　下郡遺跡群 120 次 SX0075（1/8） 土坑

【豊後Ⅱ～Ⅲ期】

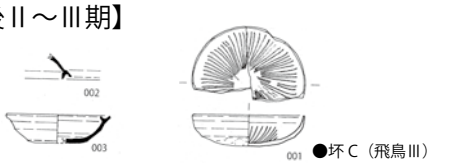
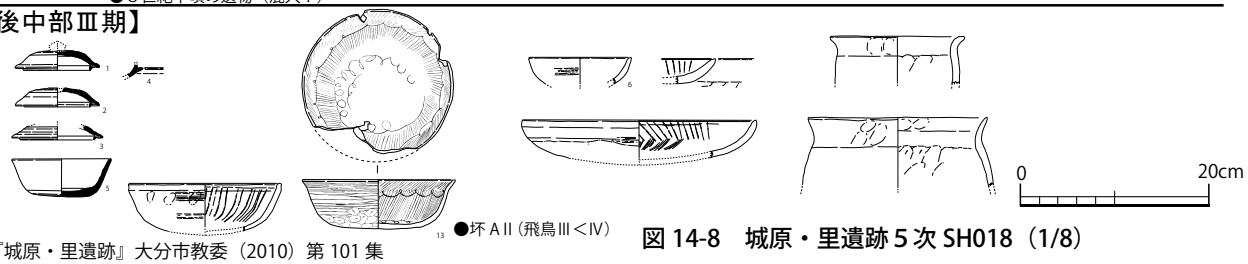


図 14-7　下郡遺跡群 120 次 SX1095（1/8） 土坑

『下郡遺跡群Ⅵ』大分市教委（2008）　第 85 集

【豊後中部Ⅲ期】



『城原・里遺跡』大分市教委（2010）第 101 集

図 14-8　城原・里遺跡 5 次 SH018（1/8）

【豊後Ⅱ期？】

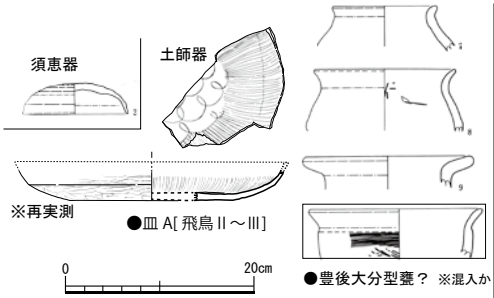


図 15-1　市第Ⅴ遺跡 SH4（1/8）

『市第Ⅴ遺跡』久住町教委（1998）第５集

【豊後Ⅱ期？】（大分県臼杵市）

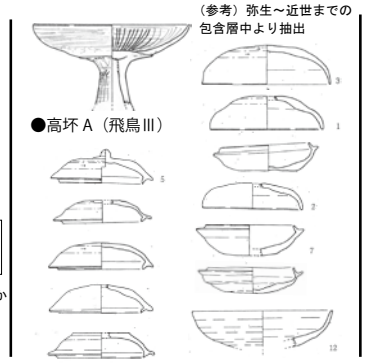


図 15-2　野村台遺跡
田井ヶ迫地区包含層（1/8）

『野村台遺跡』大分県教委（2003）第 156 輯

【豊後Ⅱ期？】

図 15-3　飛山 13 号横穴（1/8）

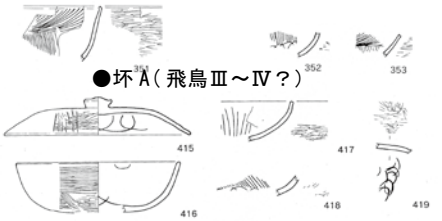
『飛山』大分市教委（1973）

【壱岐】

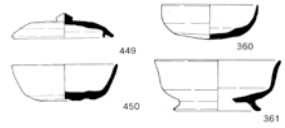
図 15-4　カジヤバ古墳（1/8）

『カジヤバ古墳』芦辺町教委（1988）

【日向】
遺構に直接伴わない遺物



（参考）遺跡中の上限遺物



■溝 98003

図 15-5　寺崎遺跡（日向国府跡）出土畿内産・畿内系土師器（1/8）

『寺崎遺跡』宮崎県教委（2001）

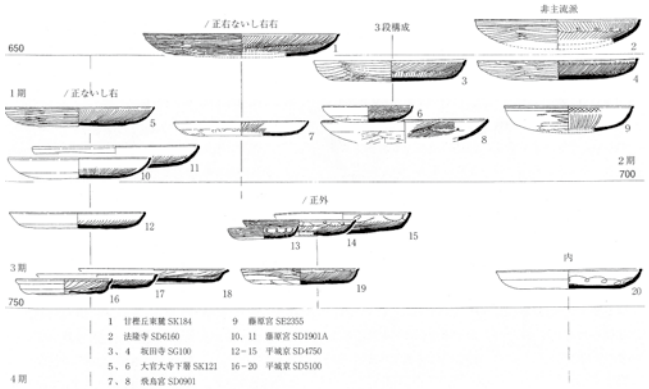


図 15-6　畿内産土師器　皿 A の暗文構成（森　2016　図 11 より）

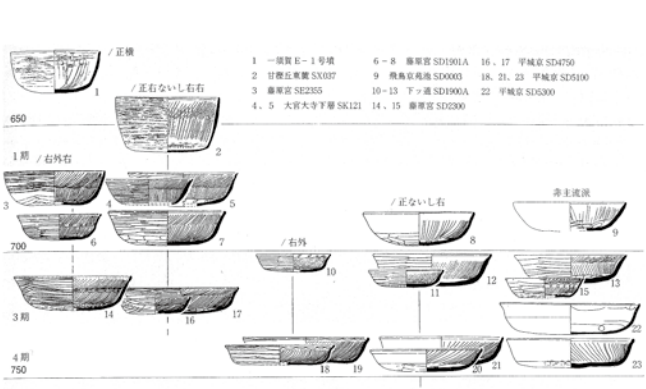
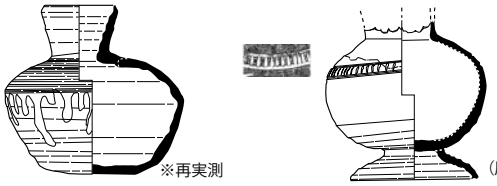


図 15-7　畿内産土師器坏 A の暗文構成（森　2016　図８より）

①下唐原伊柳遺跡ＳＢ７　柱穴1　②下唐原伊柳遺跡ＳＤ５【豊前Ⅳ期】
※豊前Ⅳ期（７世紀中葉）を下限とする遺構より出土　**東海系**か？



『下唐原伊柳遺跡』太平村教委（2003）・『下唐原伊柳遺跡Ⅱ（遺物編）』上毛町教委（2009）

③下郡遺跡群100次SX020（包含層）【豊後Ⅱ～Ⅲ期】
※豊後Ⅳ-2 期（８世紀中葉）を下限とする遺構より出土　**東海系か**？

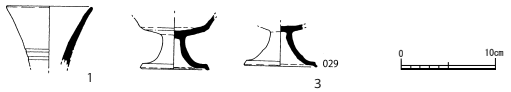


図 15-8　豊前・豊後地域の九州島外産須恵器（1/8）

『下郡遺跡群Ⅵ』大分市教委（2008）第 85 集

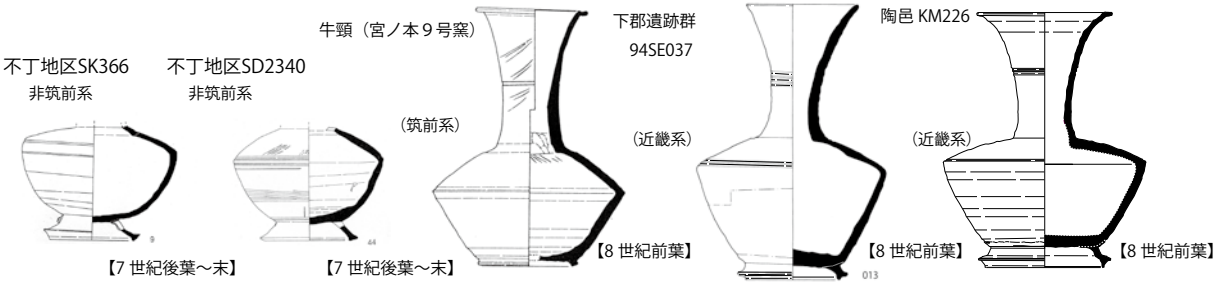


図 15-9　須恵器長頸壺の地域色（1/8）

①水城西門（SB120掘方）出土須恵器
坏H 【筑前南部Ⅱ-2】

『水城跡 下巻』九州歴史資料館（2009）

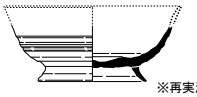
水城築城に伴うものならば
天智３年（664年）以前の資料

②大土居水城下層溝出土須恵器
坏G1 【筑前南部Ⅱ-1～Ⅱ】

『大土居水城跡』春日市教委（2000）

大土居水城が水城と当時に築城されたならば天智３年（664年）以前の資料

③大野城跡百間石垣 中央谷８層・15層出土須恵器
未定型の坏Bか？ 【筑前南部Ⅱ－２＜Ⅲ-1期】

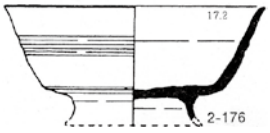


『特別史跡大野城跡整備事業』福岡県教委（2006）

（参考）宮ノ本４号表土（筑前南部Ⅱ-2＜Ⅲ-1）

『宮ノ本遺跡Ⅱ』（窯跡篇）太宰府市教委（1992）

（参考）山ノ神遺跡 灰原上層（飛鳥Ⅲ）

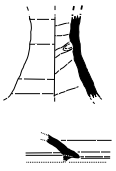


『山ノ神遺跡Ⅱ』大津市教委（1991）

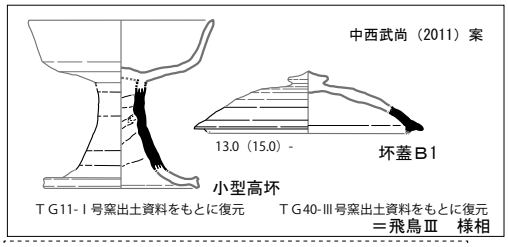
出土層位は石垣の背後にある透水層となっていた石と砂質の混じった層で報告者は石垣築造時に形成されたと考える。

大野城築城に伴うものならば天智4年（665年）以前の資料

④古宮古墳羨道出土須恵器
【豊後中部Ⅲ期】



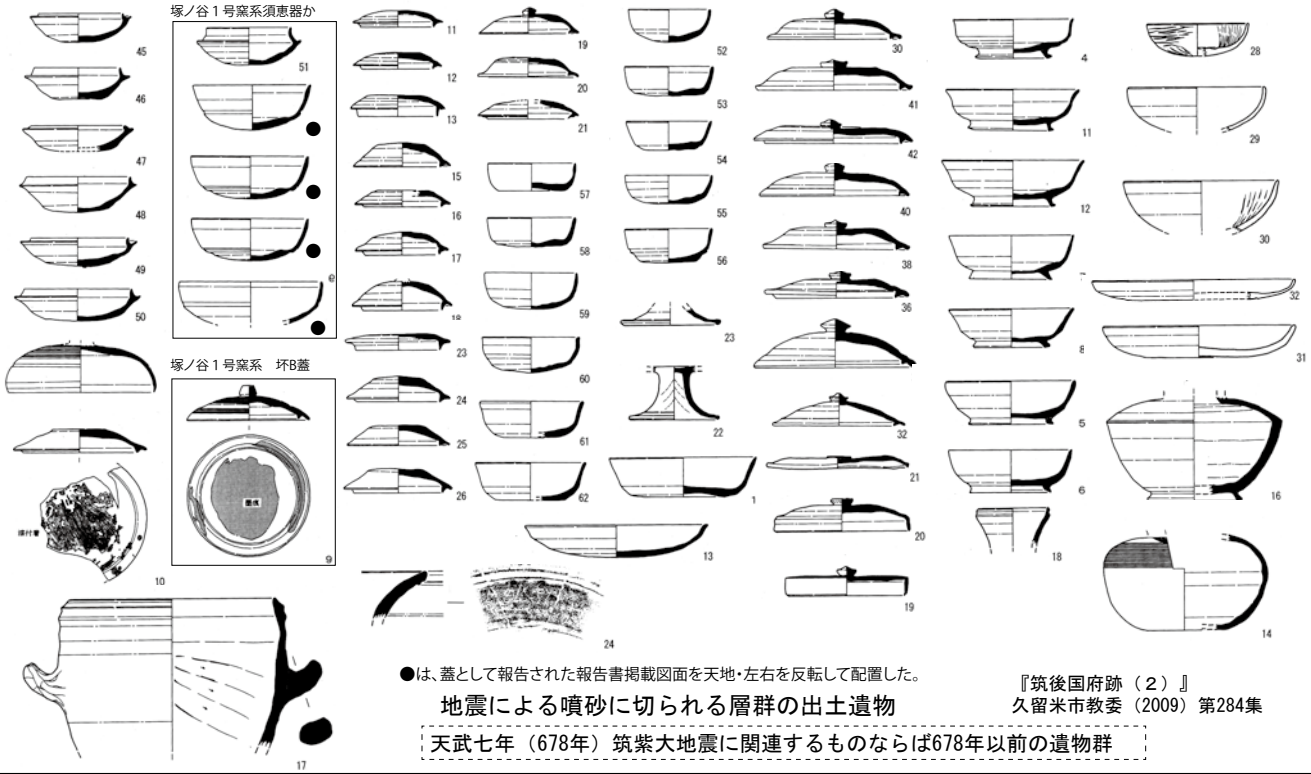
『古宮古墳』大分市教委（1982）



大分君恵尺の墓であれば天武四年（675）に近い遺物

0 10cm
(1/5)

⑤筑後国府87次筑後国府第89次東限大溝SX3856下層出土遺物 【筑前南部Ⅲ-2期】



●は、蓋として報告された報告書掲載図面を天地・左右を反転して配置した。

地震による噴砂に切られる層群の出土遺物

『筑後国府跡（２）』
久留米市教委（2009）第284集

天武七年（678年）筑紫大地震に関連するものならば678年以前の遺物群

⑥牛頸窯跡群 ハセムシ窯跡群12地区最下段下層灰原出土大甕

「和銅六年」（713年）刻銘須恵器大甕

IX号窯を同時焼成した遺物群であれば
左図遺物群は713年頃の遺物群

0 20cm
(1/8)

『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』
大野城市教委（1989）第30集

12-IX号窯出土須恵器 【筑前南部Ⅳ期】

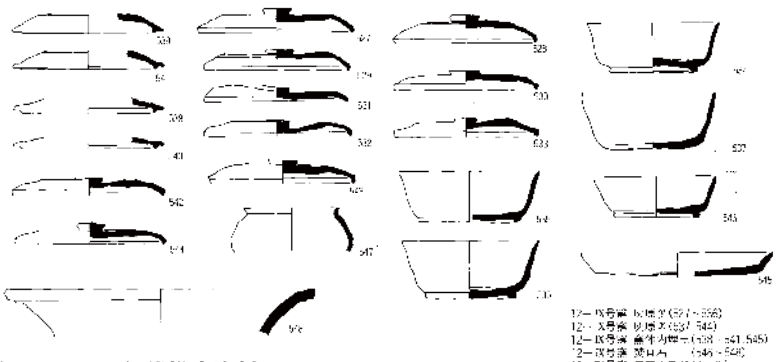


図 16 西海道における暦年代推定資料

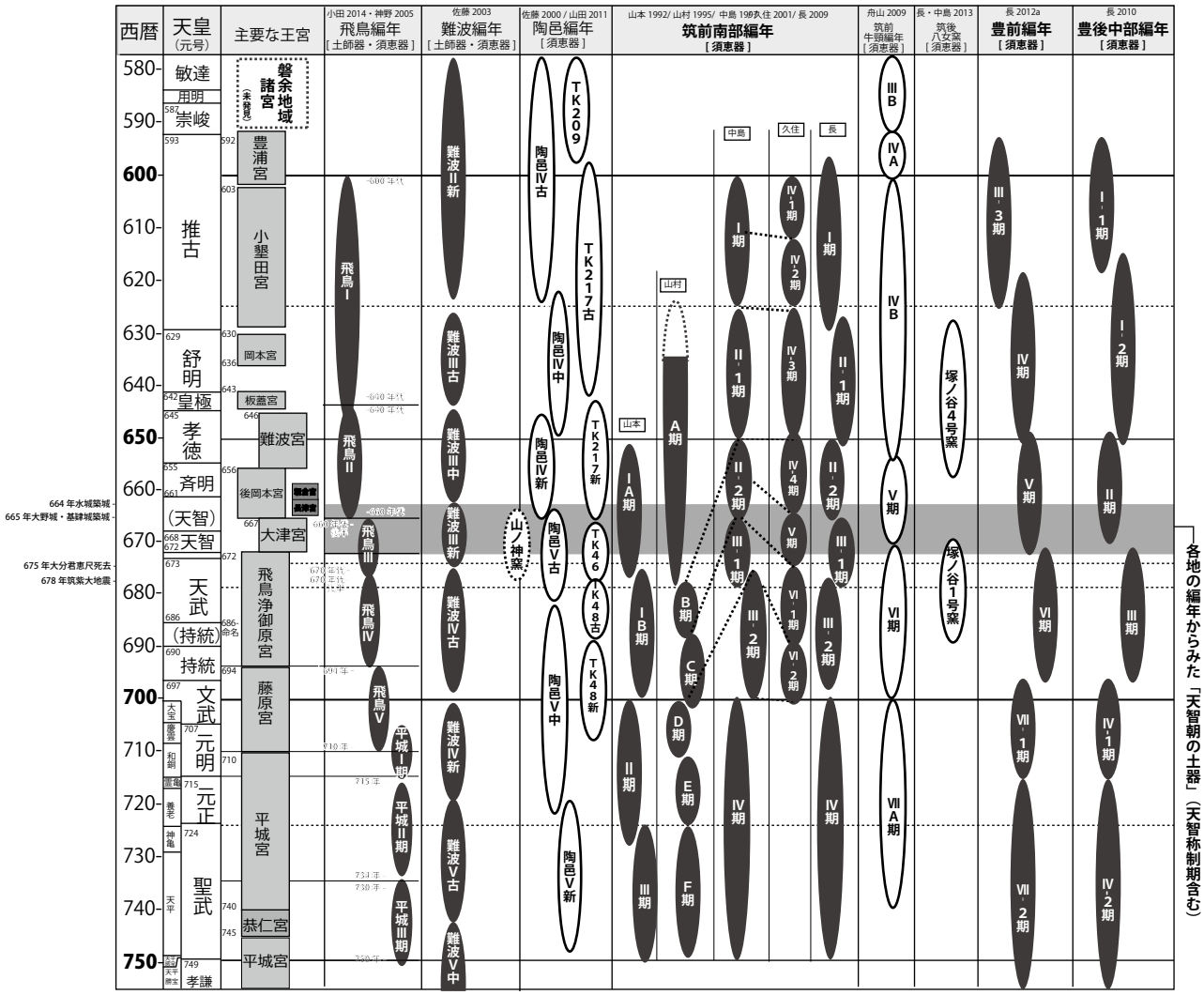
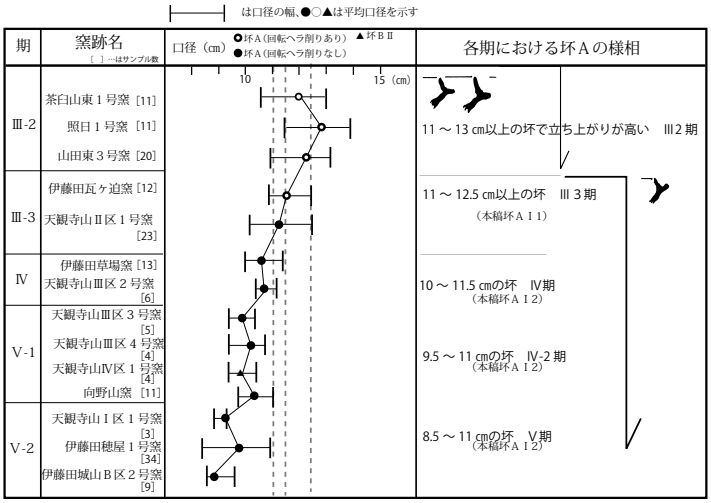


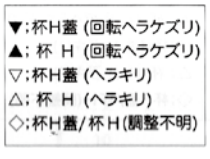
図 17-1　土器編年比較図

※各編年の年代観をもとに作成（土器様相比較や厳密な併行関係検証手続きを踏まえた図ではない）。
※筑前南部編年についてのみ各氏で同一土器様相の年代観に開きが大きいため中島編年を軸に山村氏・久住氏の考える同一様相の上限を破選で示す



伊藤田瓦ヶ迫窯は 10 cm以下の小型品、伊藤田穂屋1号窯は 11 cm以上の大型品については、イレギュラーなサイズのため、図からは除外して表記している。

図 17-2　須恵器坏 H の法量変化（豊前）
（長　2012a 図 14 より）



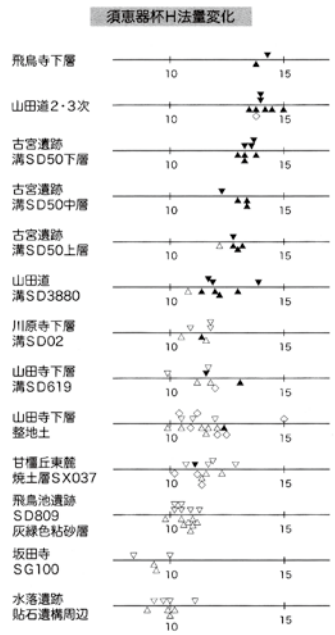


図 17-3　須恵器坏 H　の法量変化（飛鳥）
（筒井　2016 より）

column

豊前国の工房

大宰府管内の須恵器・瓦生産地でも、とくに工房全体の姿が把握できる遺跡に、福岡県築上郡築上町所在の国指定史跡・船迫窯跡がある。本工房は大きく３段階の変遷をたどり、古墳時代（６世紀）には須恵器生産。飛鳥時代（７世紀）には九州最古級の瓦生産を開始し、奈良時代（８世紀）には豊前国分寺に供給する瓦生産を担った。特筆すべきは、８世紀に利用された瓦製作工房跡で、柱間の床面積が長軸30m×短軸20mの約600㎡にもなる巨大な堀立柱建物が確認された。本建物で瓦の整形･乾燥を行い、その後、工房背後にある低丘陵地に築いた窯で瓦を焼成したと判断できる。

現在、船迫窯跡は史跡公園として整備されており、発掘調査成果を基に、巨大な瓦製作工房建物が想定復元されている。周辺地形も含めた古代の窯業生産地の姿を立体的に視認できる貴重な場所である。

（小嶋　篤）

船迫窯跡公園の遠景

復元された瓦製作工房

堀立柱建物の内部

第２章

西海道北部の土器生産 ～牛頸窯跡群を中心として～

石木　秀啓

はじめに

牛頸窯跡群は、福岡県大野城市を中心に太宰府市・春日市に広がる九州最大の須恵器窯跡群である。６世紀中ごろから９世紀中ごろの約300年間にわたり操業が行われ、これまで300基ほどの窯跡が調査されたほか、山中には現在でも最大150基が残存しているものと見られ、未調査・消滅のものも含めると、総基数は600基にせまると考えられる。また、窯跡群内の集落・古墳からは、須恵器生産に関連する遺構・遺物が確認されている。このような牛頸窯跡群は、長期間・大規模に操業された須恵器窯跡群として、平成21年に12ヶ所が「牛頸須恵器窯跡」として国史跡に指定されており、現在史跡整備事業を進めているところである[1)]。

今回、西海道の器と古代山城の築城がテーマとして掲げられている。大野城市の市名の由来となった大野城跡は、市の東部にあり、周知のとおり『日本書紀』に665年築造の記事が見える国内最大の朝鮮式山城である。また、大野城築造の前年に築造記事がみえる水城跡は、牛頸窯跡群が位置する丘陵地帯の北東側にある。水城跡は、長さ約1.2㎞、高さ約10ｍの土塁と濠からなり、福岡平野から二日市地峡帯・筑紫平野へと抜ける平野が最も狭まった所に築造された。水城跡の東と西には、１ヶ所ずつ門が設けられるが、それ以外は通行不可能であり、築造前後で土地利用や交通路・景観は大きく変わっているものと考えられる。さらに、牛頸窯跡群内や周辺には水城跡と同じころに造られたと考えられる小水城跡があり、水城跡西側丘陵地の小さな谷を塞いでいる。

このように、牛頸窯跡群は地理的に大野城・水城と関連がある。また、これまでの研究では、築造時期にあたる７世紀中頃から後半を境に大きな変化があったことが明らかにされている（石木2012）。これらを踏まえ、今回は大野城・水城築造前後の牛頸窯跡群と西海道北部の土器生産の様相を整理し、白村江の戦いから水城・大野城築造・大宰府成立にいたる歴史動向の中で、生産体制がどのように変容していったのか、またその意義を明らかにしていきたい。

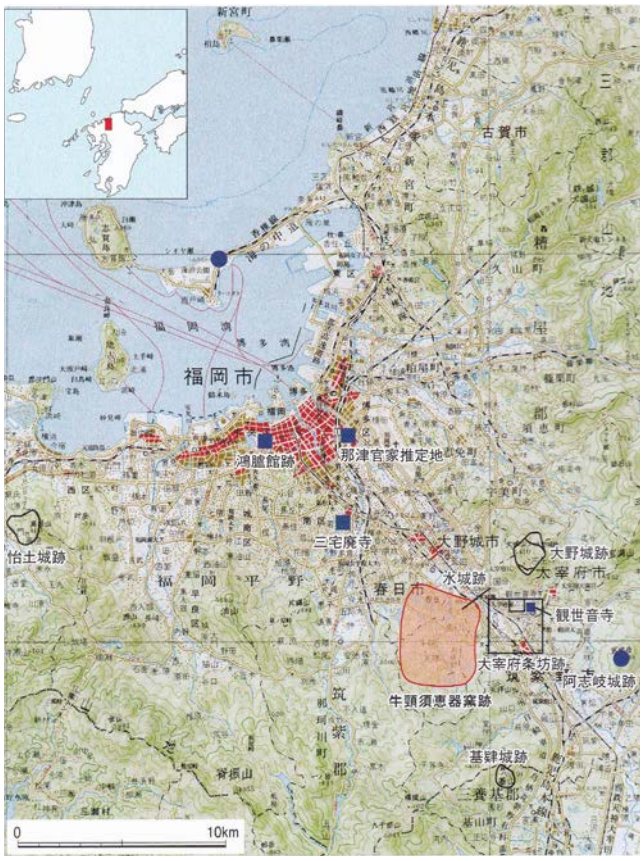


図１　牛頸窯跡群周辺遺跡分布図

１．大野城・水城築造以前の牛頸窯跡群

牛頸窯跡群の操業は、６世紀中ごろに始まる。当初は、群北部の上大利地区に窯が作られ、野添６号窯跡など２～３基程度の小規模な生産であったが、６世紀末から７世紀初めの時期に窯の数は一気に急

増し、窯が作られる範囲も牛頸地区などに拡大し、７世紀前半にかけて継続する。

窯構造は、７世紀前半までは全長が10mを超えるような大形の窯が作られる。６世紀後半ごろは平面形が紡錘形を呈するものであったが、６世紀末ごろになると平面形が短冊形で排煙孔が複数ある多孔式煙道窯を採用する。多孔式煙道窯は牛頸窯跡群特有の窯構造であり、ここ以外では大阪府陶邑窯跡群に１例あるのみである。

窯では、蓋杯や高杯・椀・𤭯（はそう）・提瓶・甕・大甕などが焼かれており、大形の窯を用いて様々な器種を焼いている。また、須恵器以外の生産品が見られるのもこの時期である。６世紀末にあたる神ノ前２号窯跡などでは、初期瓦の生産が行われ、７世紀中頃まで生産が続けられる。また、野添７次２号窯跡では陶棺２個体が出土し、九州で初めて生産地からの出土が確認されるとともに、その特徴から畿内の技術が用いられていることが明らかになった。

須恵器生産関連集落では、本堂遺跡14次調査で６世紀中ごろにあたる窯跡の灰原下方の斜面部に、竪穴住居跡と粘土生成土坑が確認された。工房跡と考えられる。このような、窯跡近くの斜面部に位置し、粘土生成土坑などを備え、工房跡と考えられる遺跡は、梅頭遺跡２・３次調査や惣利・惣利西・惣利東遺跡などがあり、７世紀前半まで継続する。一方で、平地に位置する集落としては、上園遺跡13次調査ではロクロピットが確認され、粘土生成土坑の存在から工房跡の存在が明らかになっている。また、牛頸窯跡群のほぼ中央部に位置する塚原・日ノ浦遺跡群では６世紀末頃以降９世紀に至るまで、長期間にわたり継続して集落が営まれ、多量の須恵器が廃棄された土坑が見つかるなど、中心的な須恵器生産関連集落と見られる。

図２　多孔式煙道窯の一例（中通Ａ－２号窯跡）

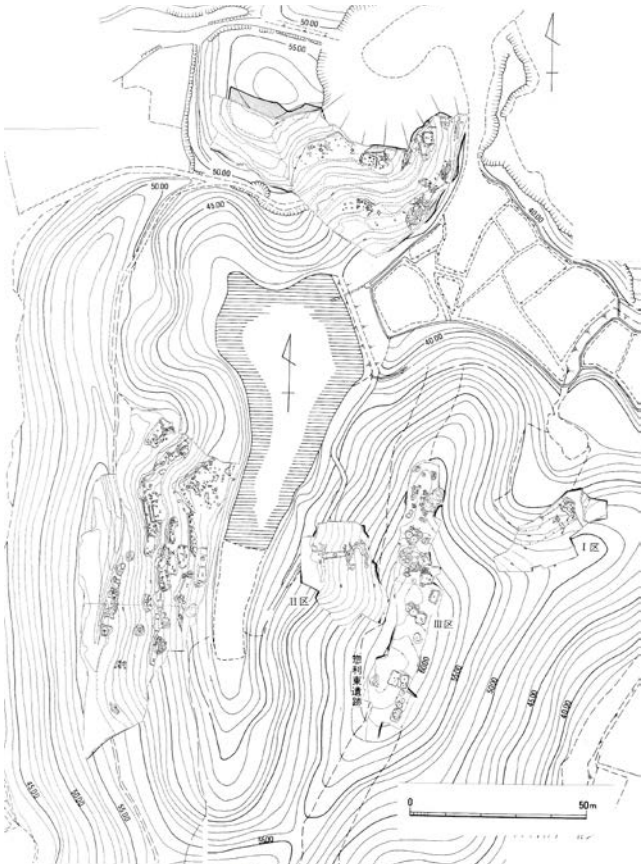


図３　惣利・惣利東・惣利西遺跡遺構平面図

墳墓では、小田浦・後田・中通古墳群で丘陵斜面に横穴式石室を有する円墳が６世紀末頃から７世紀中頃まで築造が行われ、鉄製Ｕ字型鋤先が副葬され、窯に近接して築造されることなどから須恵器工人の墳墓として考えることができる。一方で、梅頭遺跡群では、窯内から鉄刀や鉄鏃、耳環などの副葬品が出土する事例や、窯の焚口付近で遺体を火化した痕が見られるなど、窯を墳墓として転用した事例が３ヶ所で明らかになっている。

2．大野城・水城築造時期の牛頸窯跡群

この時期にあたるのは、牛頸窯跡群編年のⅤ期と呼ばれる時期である。生産される器種が最も少なくなる時期であり、古墳時代以来の主要器種であった蓋杯（杯H）は基本的に姿を消す時期とされ、法量も最も小形になる。またつまみのついた蓋を有し、丸底の杯身をもつ杯Gが増加している。この時期の窯の資料で、Ⅴ期とされる後田60−Ⅰ号窯跡、小田浦50−Ⅰ号窯跡はすべて杯Gとして報告されているが、杯Hと杯Gのどちらにすべきか迷うものが多くあり、Ⅴ期は杯Hと杯Gが共伴する時期と考える。むしろ、この時期を決めるのは高杯であり、脚が最も短く小型のものが指標となる。

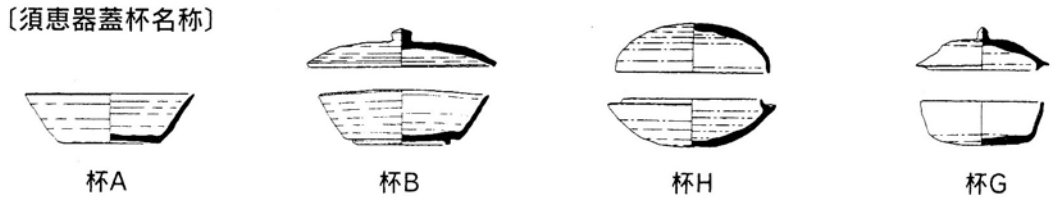


図４　須恵器蓋杯名称の表記（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所分類を援用）

この時期の窯跡は極めて少なく、調査されたものは５基程度と前代に比べて大きく減少する。窯構造は、前代まで主流であった多孔式煙道窯に対し、後田60−Ⅰ号窯跡のような直立煙道窯が出現する。窯の大きさも、全長10ｍを超えるものは少なくなり、全長５ｍ前後のものが増えてくる。

集落は、窯の近くの斜面部に立地するものはこの時期を境になくなり、平地にしか見られなくなる。また、古墳の築造は少なくなり、前代に造られた古墳への追葬が続く。

3．大野城・水城築造後の牛頸窯跡群

７世紀後半になると、杯Hは生産されなくなり、つまみ付きで高台を有する蓋杯（杯B）が主体となる。多孔式煙道窯はさらに少なくなり、直立煙道窯が主体となる。窯の大きさは、全長５ｍ以下のものが増加する。大形の窯で甕を含めた生産を行い、小形の窯で蓋杯や高杯・皿などの小形器種を生産している。また、前代まで生産されていた初期瓦や陶棺のような須恵器以外の生産物は認められなくなる。

図５　水城跡・大野城跡・上大利小水城跡空撮

さらに８世紀に入ると窯の数が増大する。特に８世紀前半は最も多くの窯が作られ、生産される器種も最も豊富な時期である。特にハセムシ・井手窯跡群のように山奥に操業範囲が広がっている。大形の窯では甕などの大形品を、小形の窯では蓋杯などの小形品を焼いており、製品の焼き分けを行っている。窯はすべて直立煙道窯となる。大形の窯でも７～８ｍ程度であり、７世紀に比べて規模は小さくなる。また小形の窯は全長３～４ｍであり、数は大型のものより多く、小形器種中心の生産が進められ、西海道一の大規模須恵器生産地となっていく。

集落は７世紀後半以降になると、太宰府市側にあたる大佐野川沿いに出現する遺跡が多い。特に、谷の最奥部の沖積地上に立地する長ヶ坪遺跡・カヤノ遺跡では、この時期に規模の大きな掘立柱建物が複

数棟出現する。ここは、上大利小水城が築造される水城西側の小さな谷から大宰府へいたる道の要所にあたり、その意義が問われるところである。

図６　長ヶ坪遺跡遺構平面図

また、島本・日焼・前田遺跡では官道が確認されているが、日焼遺跡では、官道側溝や河道から８世紀前半代の遺物が多量に出土し、焼けひずんだものも含まれる一方で、円面硯・転用硯や付札状木製品が出土する。焼けひずみのある須恵器は、前田遺跡や原口遺跡でも確認されている。

墳墓は、古墳への追葬がほとんど行われなくなり、明確な墳墓遺構の確認が少なくなる。一方で、８世紀前半代以降、宮ノ本丘陵において土壙墓が確認されるようになる。

４．Ⅴ期の年代観について

水城跡の調査では、西門第Ⅰ期城門の柱穴SB120Ａや木樋部SX050・051出土須恵器があり、水城築造時期に近い時期の遺物として考えられている。

また、ウトグチ遺跡Ｂ地点１号窯跡は、牛頸窯跡群特有の多孔式煙道窯の焼成部床面を階段状に掘りくぼめて瓦窯として使用している。窯構造は、この時期に位置づけられる小田浦50－Ⅰ号窯跡と、平面形や規模が類似している。出土遺物は、軒丸瓦・軒平瓦とともに、須恵器が出土しており、瓦の年代と文献資料から、その時期を「斉明朝（655 ～ 661年）を中心とする前後」にあたるとされている（渡辺1995）。

さらに、大土居小水城においては、２次調査出土遺物の中で、土塁南側裾部積土下の小溝から出土した杯身があり、小水城築造時期の上限を示す資料と考えることができる。上大利小水城跡においても、大浦２号窯跡に並行すると考えられる平瓦が積み土中から出土しており、水城・小水城の築造がⅤ期段階にあったことを知ることができる。

５．西海道北部の須恵器生産

九州では、５世紀以降各地で須恵器生産が行われる。７世紀になると、宗像・八女・牛頸窯跡群で大規模な生産地が成立しており、周辺では井手ヶ浦・裏ノ田窯跡群などで小規模な生産地があり、それぞれ独自の操業を行っている。これらの窯跡群は、７世紀前半代まではそれぞれ盛んに操業を行っているが、７世紀後半代になると筑前地域では牛頸窯跡群での調査例が非常に多くなり、他の窯跡群ではこの時期の窯の調査事例が少なくなる。またこの時期には、牛頸窯跡群の中に、ハセムシ27号窯跡のような宗像窯跡群の窯構造の特徴をもつものが作られ、操業が行われている。このことは、宗像窯の工人が牛頸窯に移入されたことを示している。

このように、筑前地域では７世紀後半になると牛頸窯跡群で集中的な須恵器生産が行われていると考えられる。８世紀前半代に入ると、牛頸窯跡群の操業はピークを迎え、筑前国一国の生産を担うようになり、西海道一の窯場へと発展をとげる。

まとめ

水城・大野城が作られるⅤ期からその後にかけて、牛頸窯跡群では窯の基数や窯構造・器種など生産体制の変化が生じている。すなわち、Ⅴ期段階では窯の基数が大きく減少し、生産される器種も減少するが、続くⅥ期においては窯構造の変化がおこり、窯の規模に応じた製品の焼き分けが行われ、生産される器種も杯Bを中心とした生産物へと変化する。

また、この時期の集落についても、窯とともに丘陵斜面にあった集落が姿を消し、窯と集落は切り離された形で別々の立地をとるようになる。このことは、個別に行われていた窯の操業が、集中的に行われるようになった結果と見ることができ、窯の動向と合わせ、生産体制の大きな変化が生じている。さらに、この時期に築造される水城は、東西の2ヶ所のみに門を構え、小水城もまた窯の所在する丘陵を塞ぐように位置している。これらの軍事的要塞は、土地利用や交通路・景観・住民の心情に変化をもたらし、集落構造・通行圏など地域の在り方に大きな影響を与えている。牛頸窯跡群においては、この時期以降に大佐野川周辺の集落・窯跡が増加し、水城西門官道側溝に焼けひずんだ須恵器が廃棄されていることは、大宰府への供給が志向された結果と考えられ、そのルートも小水城・水城を通行しないものであったと考えられる。

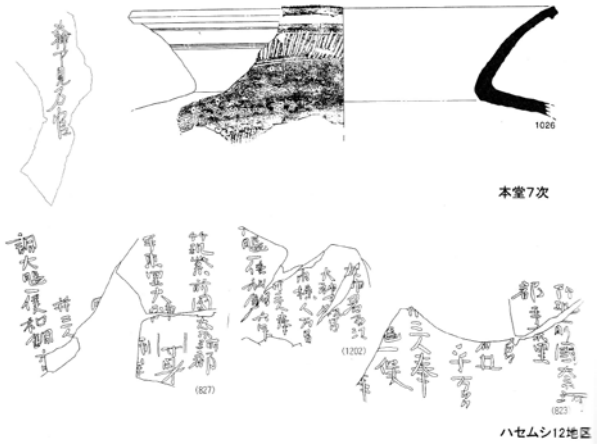


図7　牛頸窯跡群出土ヘラ書き須恵器

このように、水城・大野城築造を境にして大きく生産体制を変える牛頸窯跡群は、窯を転用した墳墓とヘラ書き須恵器から、7世紀前半には「大神部」と呼ばれる工人首長が生産を掌握していたものと考えられる。この大神部は、畿内の大神氏と関わりをもつ部民である。

『日本書紀』天智2年（663年）3月条には、新羅討伐へむかう軍の陣容と将軍の名前が挙げられており、地方豪族が中心となる軍と中央氏族が率いる軍があったことが知られている（森1998）。その将軍の一人に、「三輪君根麻呂」の名前が見える。鈴木正信氏によれば、「律令制以前に中央氏族が軍事行動に派遣される際、その中央氏族と関係を結んでいた地方氏族がその配下に加わって活躍した場合が存在した」としている（鈴木2014）。

このことから、7世紀前半に既に大神氏と関係を有し、牛頸窯跡群の操業を掌握していた大神部に連なる須恵器工人が、三輪君根麻呂が率いる軍に動員された可能性が考えられる。その結果、Ⅴ期段階における窯の減少につながり、生産体制の大きな変化を生じさせることとなっ

表1　百済救援の出兵者と募兵地域（森2016より転載）

国名	郡名	出典	人名	備考
駿河		斉明7・是歳条		船を造らせる
甲斐	山梨	古屋家家譜	大伴山前連潤守	唐で戦死
常陸	石城	風土記香島郡条		＊「渟海之世」に石城で造った船が香島郡に漂着
陸奥	信太	慶雲4・5・癸亥条	生王五百足	40余年後に帰国
但馬	朝来	粟鹿大神元記	神部直根閇	帰国後，大領に
播磨		風土記讃容郡条	国宰道守臣	＊官船を造る
備中	下道	風土記逸文		運磨郷で軍士2万人を徴発
備後	三谷	日本霊異記上―7	三谷郡大領之先祖	百済の僧侶をつれて帰国
讃岐	那賀	慶雲4・5・癸亥条	錦部刀良	40余年後に帰国
伊予	風速	持統10・4・戊戌条	物部薬	帰国，追大弐授与
	越智	日本霊異記上―17	越智郡大領之先祖	帰国後，立評，小市国造か
筑前	早良	天武13・12・癸亥条	筑紫三宅連得許	帰国
筑後	山門	慶雲4・5・癸亥条	許勢部形見	40余年後に帰国
	上妻	持統4・9・丁酉条	大伴部博麻	軍丁，30余年後に帰国
		持統4・10・乙丑条		
		天智10・11・癸卯条	筑紫君薩夜麻	帰国，筑紫国造か
豊前	宇佐	天智10・11・癸卯条	韓嶋勝娑婆	帰国，宇佐の有力豪連か
肥後	皮石	持統10・4・戊戌条	壬生諸石	帰国，追大弐授与
不詳		天智10・11・癸卯条	布師首磐	帰国，越中国射水郡・土佐国安芸郡に布師郷がある，讃岐国山田郡・鵜足郡に布敷臣が居住
		天武13・12・癸亥条	猪使連子首	帰国
		持統4・10・乙丑条	土師連富杼	天智10・11・癸卯条で帰国か
			氷連老	
			弓削連元宝児	
第1次派遣軍		斉明7・8・条	前将軍阿曇連比邏夫・河辺臣百枝	
		斉明7・9・条	後将軍阿倍引田臣比羅夫・物部連熊・守君大石	
			別将狭井連檳榔・秦造田来津〔近江・愛智〕	
第2次派遣軍		天智2・3・条	前将軍上毛野君稚子・間人連大蓋	
			中将軍巨勢神前臣訳語〔近江・神崎〕・三輪君根麻呂	
			後将軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄	
第3次派遣軍		天智2・8・甲子条	廬原君臣〔駿河・廬原〕	

たのではないかと考えている。

このように、水城・大野城が作られた時代を契機に、西海道北部の須恵器生産体制は大きく転換する。特に牛頸窯跡群では、その動向が顕著に表れており、水城・大野城を抜きにして歴史的動向を考えることはできない。今後、さらに広範な研究が必要である。

註

1） 史跡名称は「牛頸須恵器窯跡」であるが、本稿ではこれまでの研究史で使用されている「牛頸窯跡群」の語を用いるものとする。

参考文献

石木秀啓 2010「第３部　第３章　九州」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社
石木秀啓 2012「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」『古文化談叢』第67集　九州古文化研究会
杉原敏之編 2009『水城跡－上・下巻－』九州歴史資料館
鈴木正信 2014『大神氏の研究』日本古代氏族研究叢書④　雄山閣
中村昇平・森井千賀子 2004『ウトグチ遺跡Ｂ地点』春日市文化財調査報告書第39集　春日市教育委員会
中村昇平 2000『大土居小水城跡』春日市文化財調査報告書第28集　春日市教育委員会
舟山良一・石川健 2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書第77集　大野城市教育委員会
森公章 1998『「白村江」以後』講談社メチエ132　講談社
森公章 2016『天智天皇』人物叢書新装版　吉川弘文館
渡辺正気 1995「第４章　第３節　古代窯業遺跡」『春日市史』 春日市

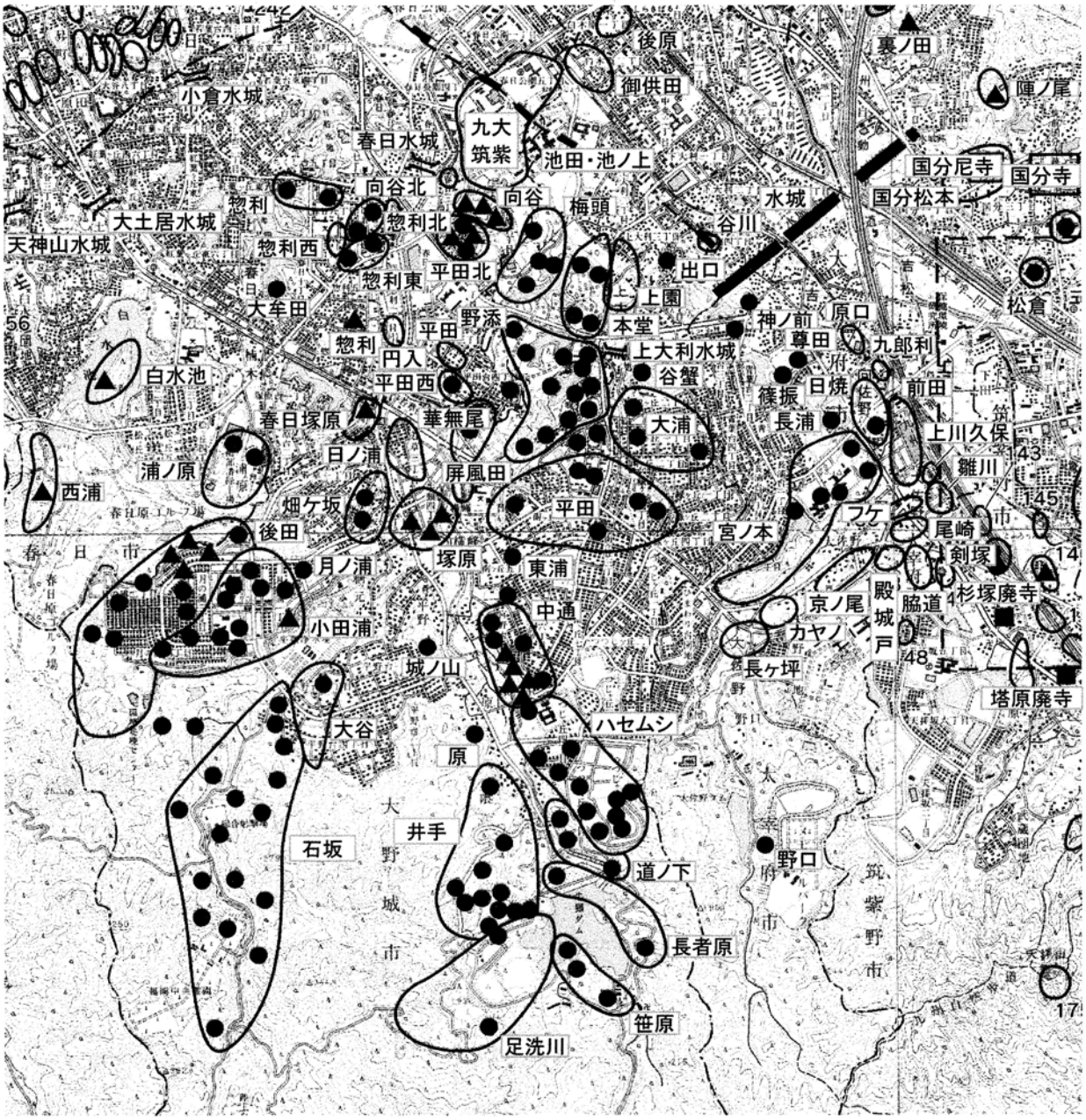
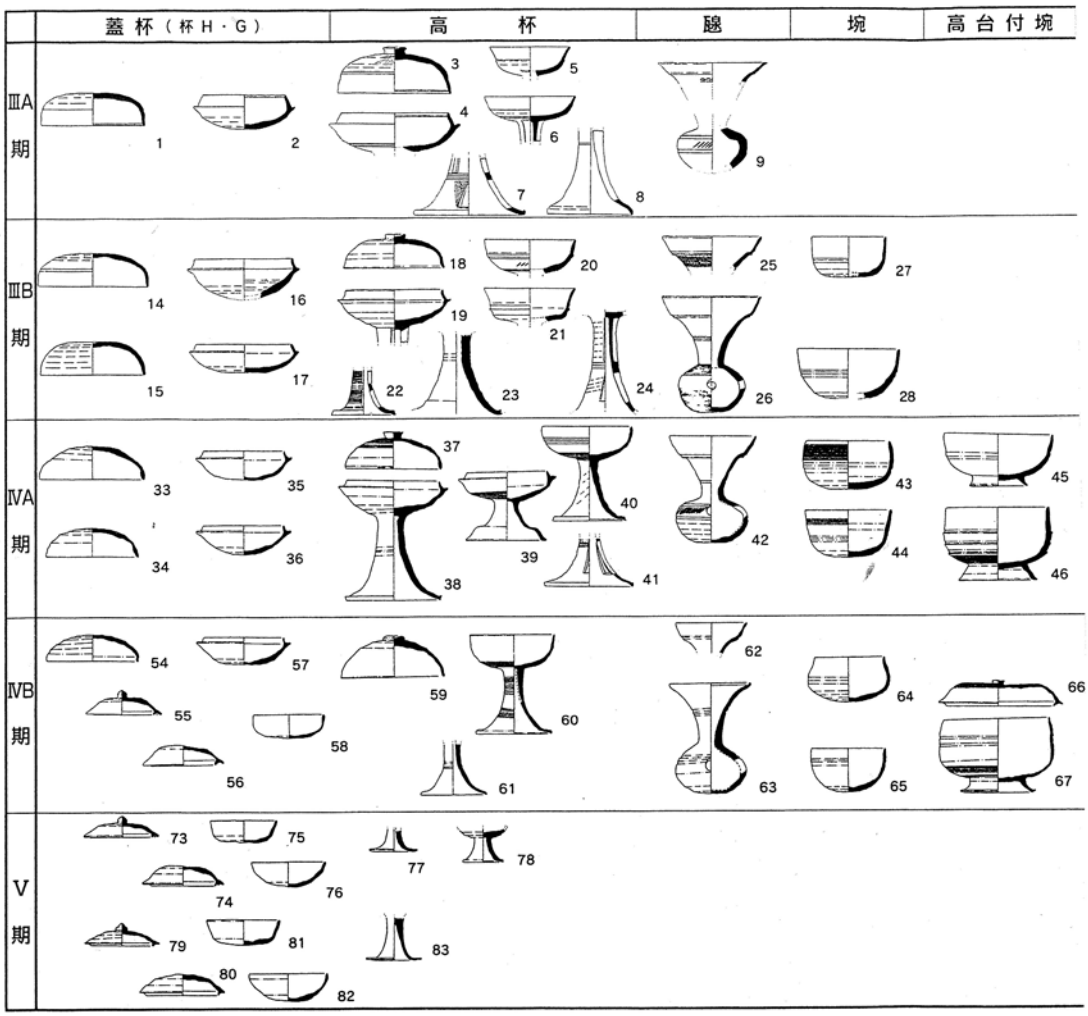
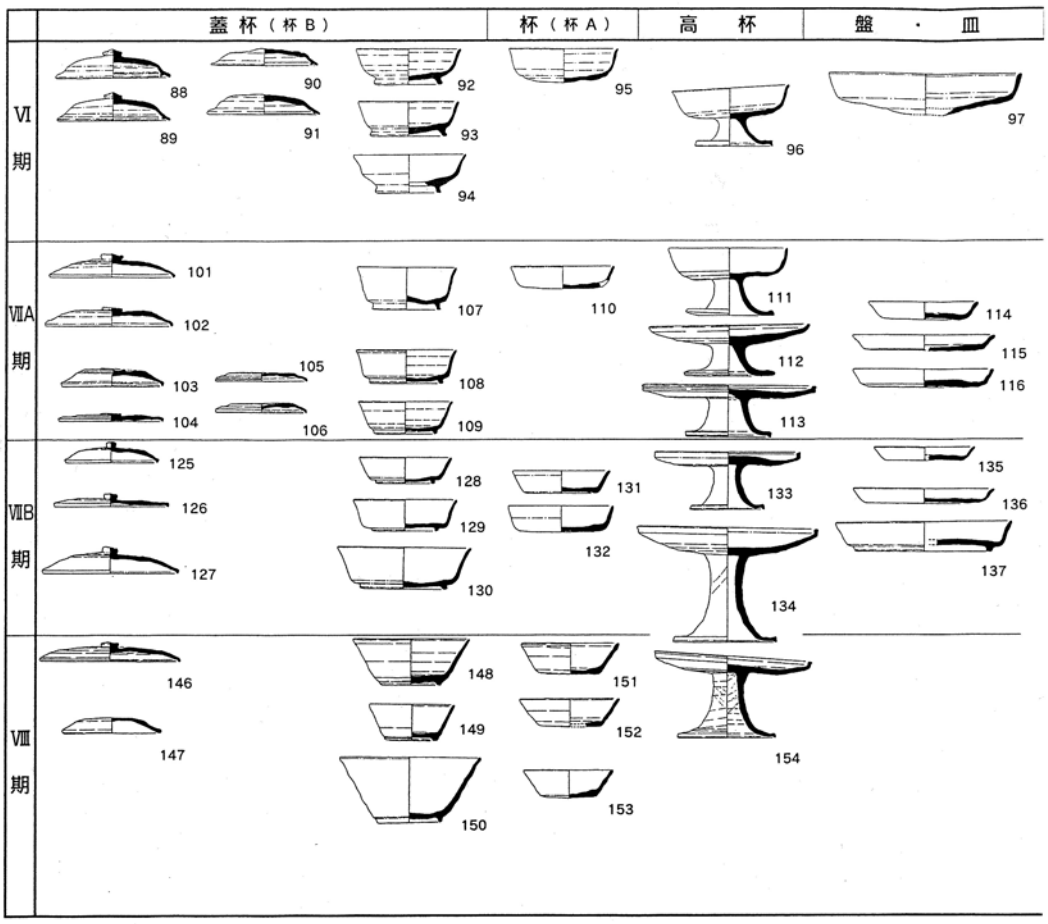
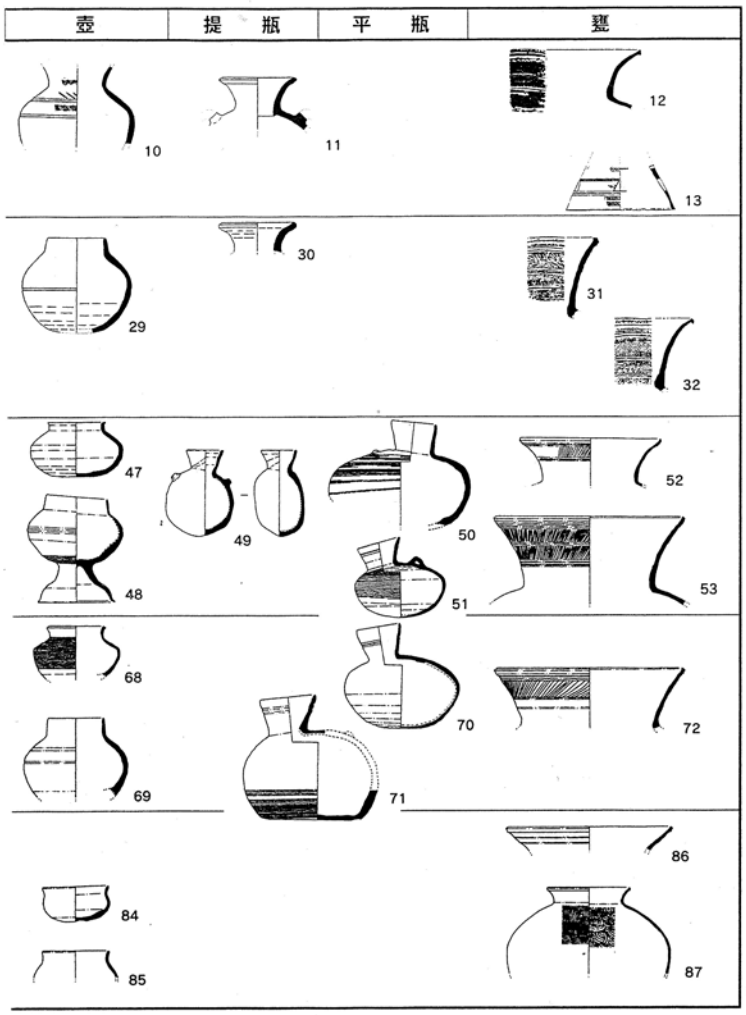


図８　牛頸窯跡群遺跡分布図（●は須恵器窯跡、▲は古墳を表す、■は寺跡を表す）


蓋杯（杯H・G）
高杯
甕
埦
高台付埦
ⅢA期
ⅢB期
ⅣA期
ⅣB期
Ⅴ期


蓋杯（杯B）
杯（杯A）
高杯
盤・皿
Ⅵ期
ⅦA期
ⅦB期
Ⅷ期



ⅢＡ期　６世紀中頃
ⅢＢ期　６世紀後半
ⅣＡ期　６世紀末～７世紀初頭
ⅣＢ期　７世紀前半
Ⅴ期　７世紀中頃
Ⅵ期　７世紀後半
ⅦＡ期　８世紀前半
ⅦＢ期　８世紀後半
Ⅷ期　８世紀末～９世紀前半

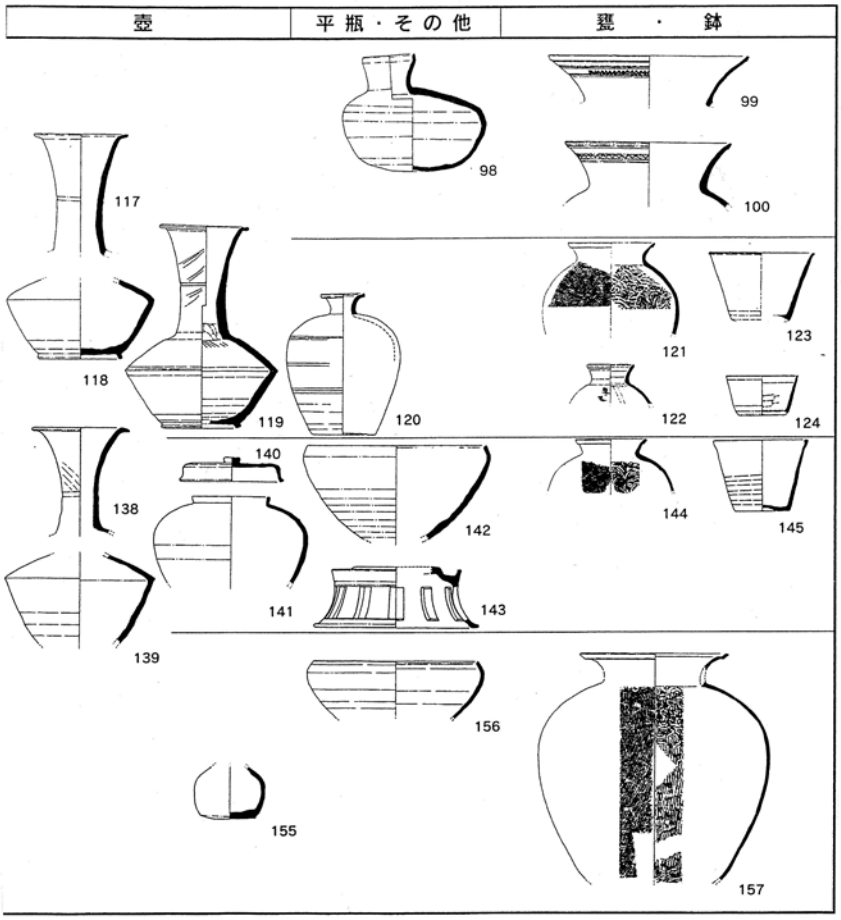


図９
牛頸窯跡群出土須恵器
変遷図（S=1/10）

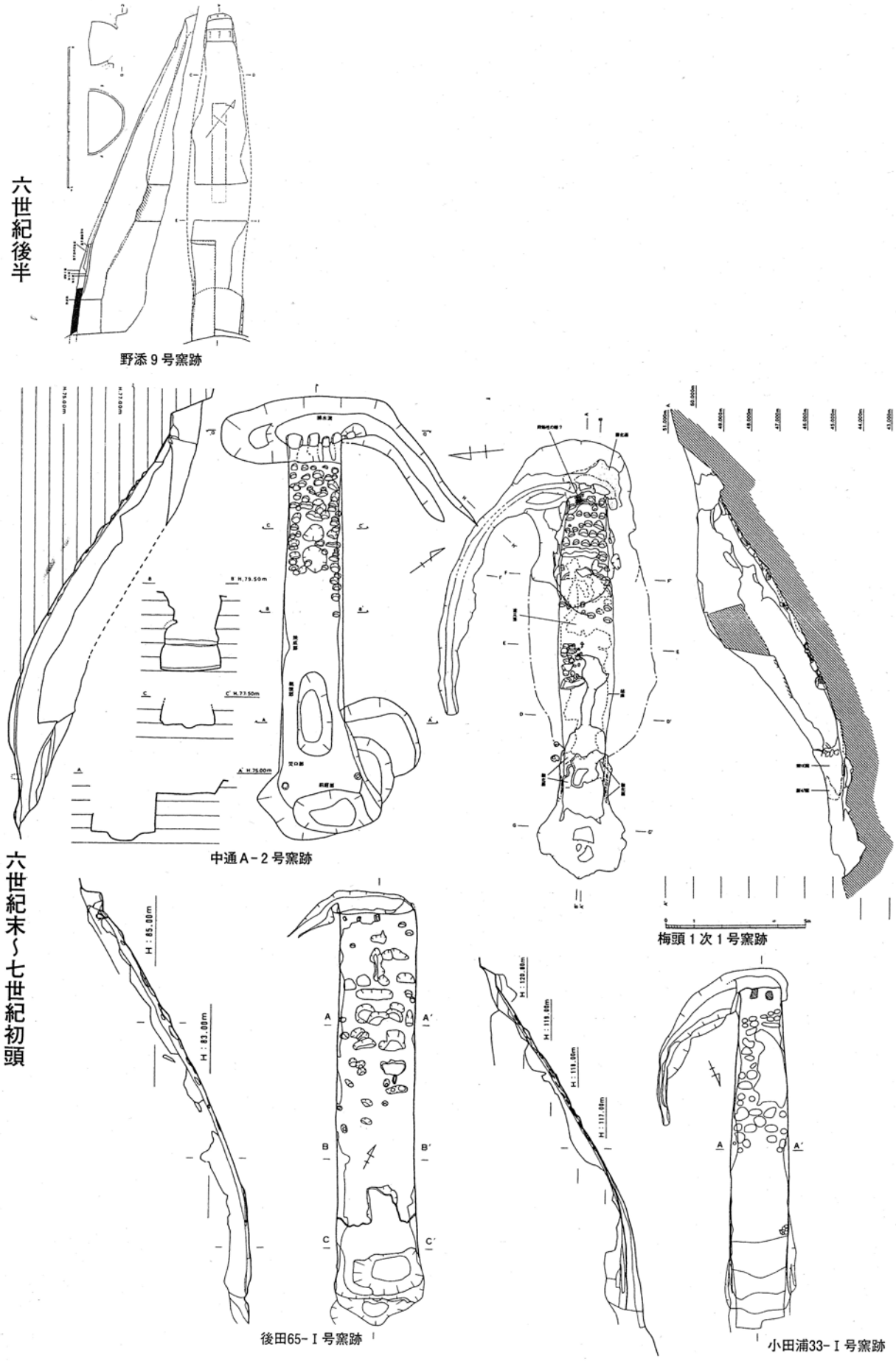


図10　牛頸窯跡群窯構造変遷図①（S=1/200）

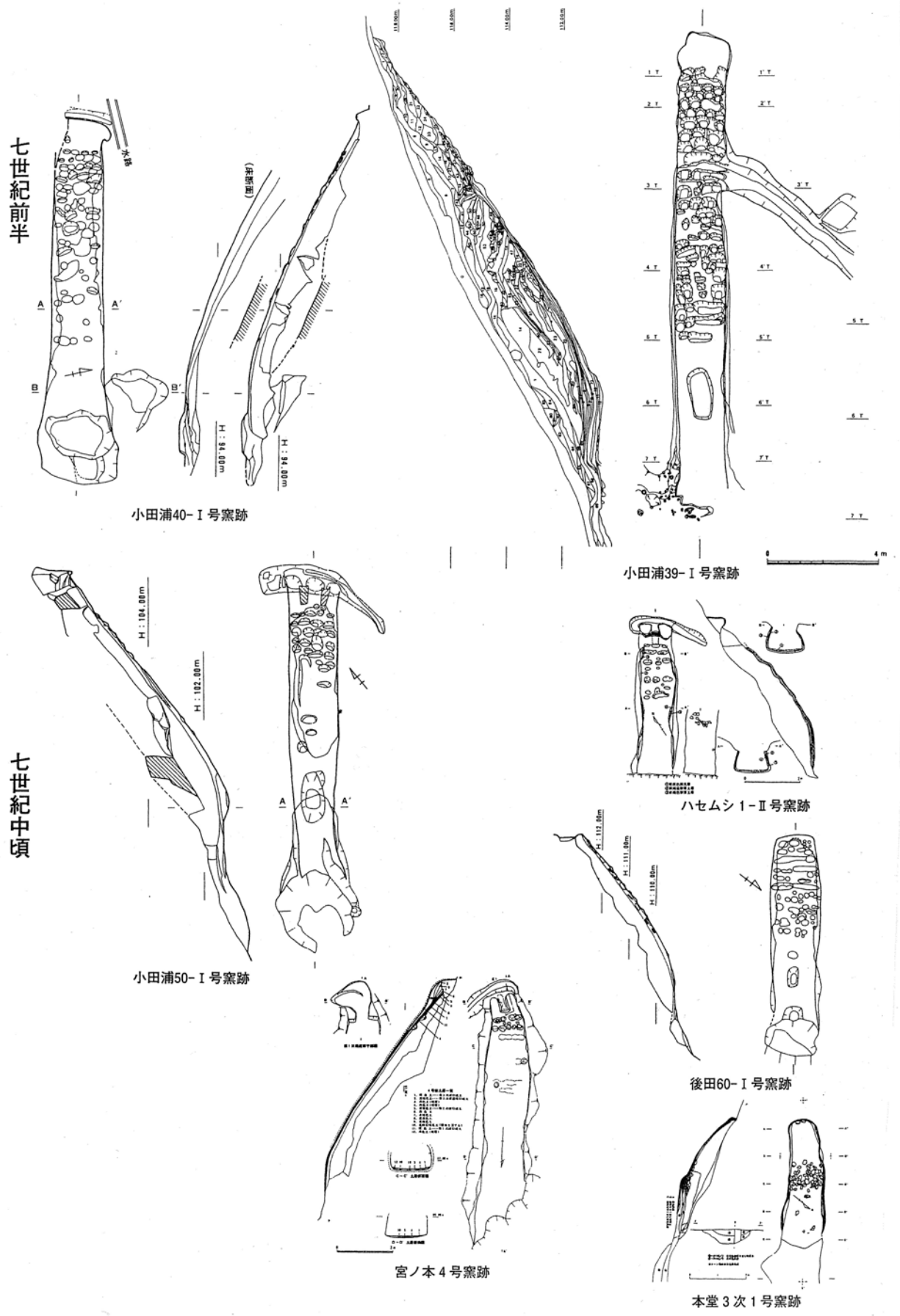


図11　牛頸窯跡群窯構造変遷図②（S=1/200）

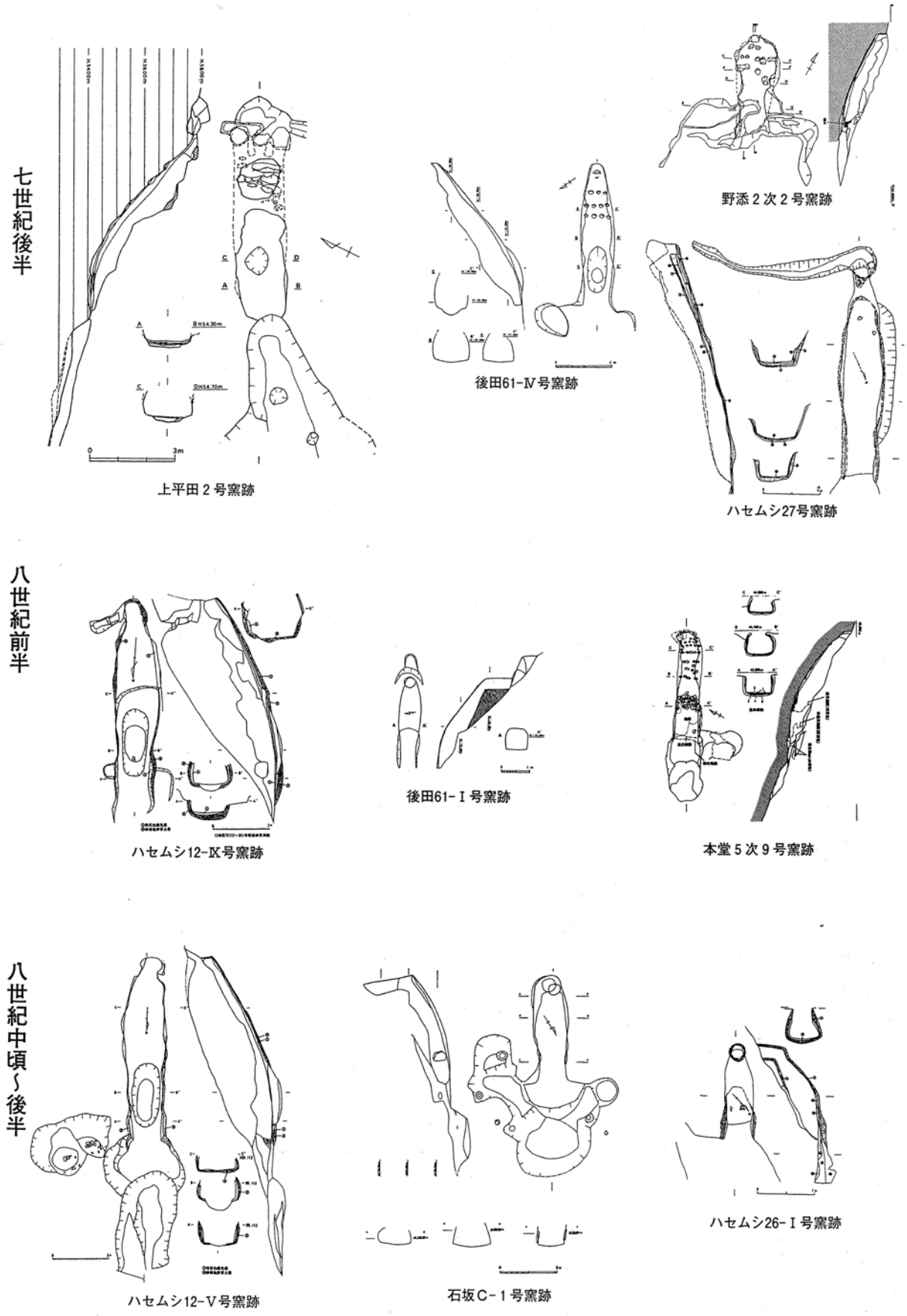


図12　牛頸窯跡群窯構造変遷図③（S=1/200）

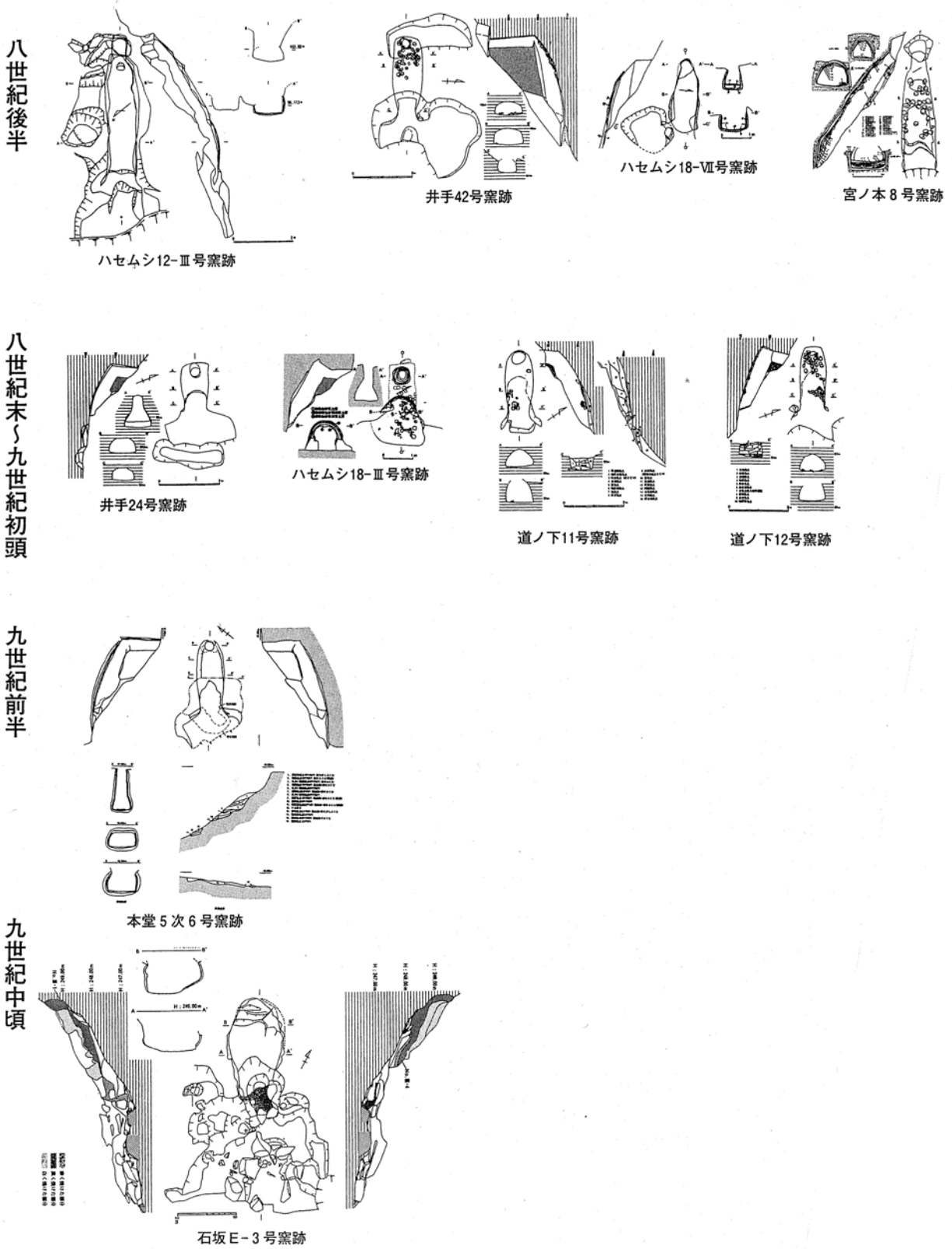


図13　牛頸窯跡群窯構造変遷図④（S=1/200）

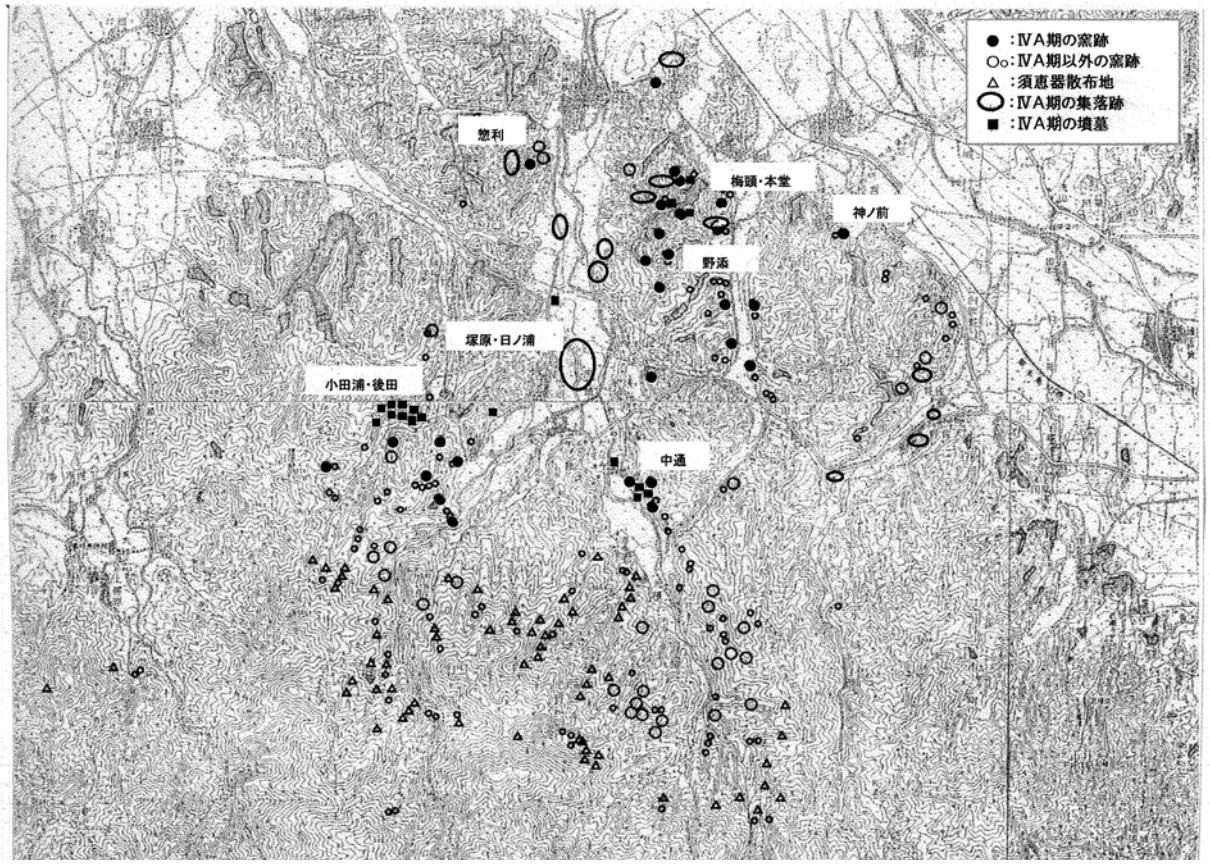


図14　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（６世紀末～７世紀初頭）

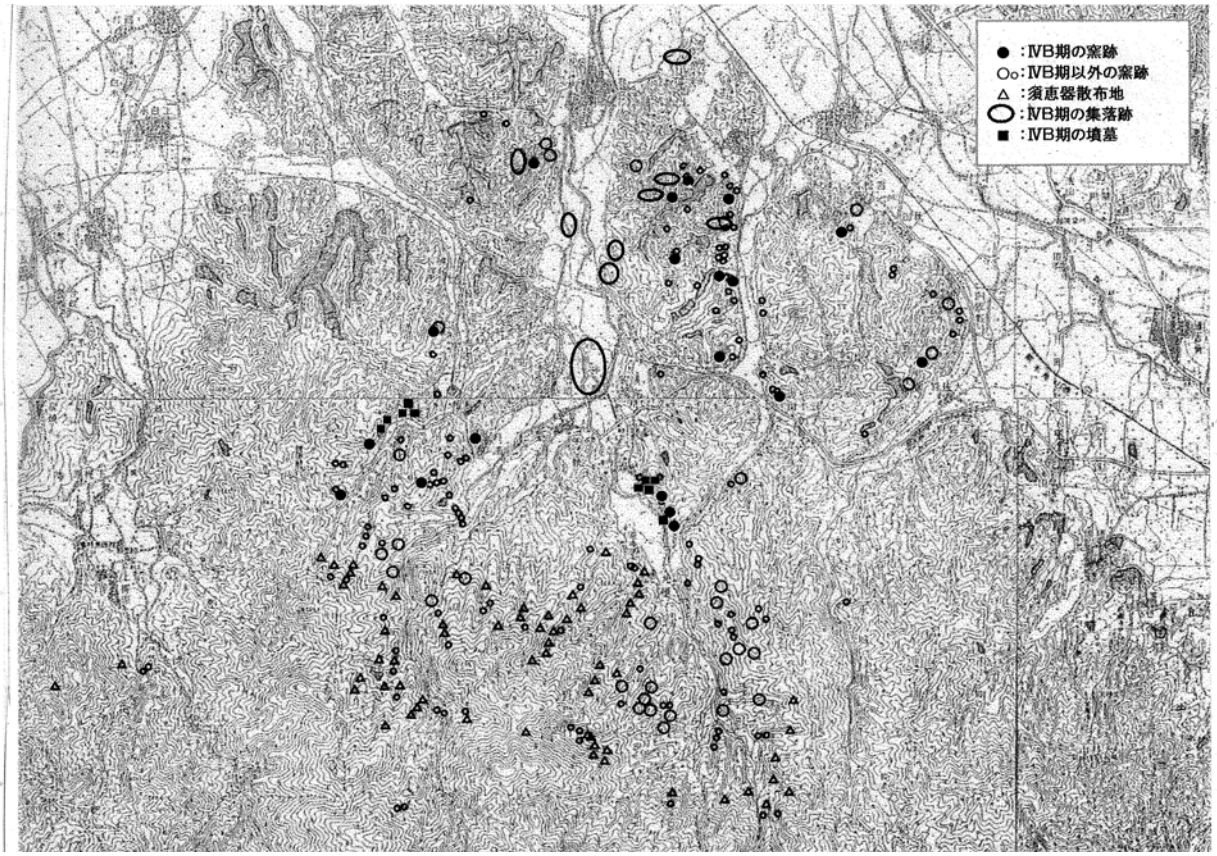


図15　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（７世紀前半）

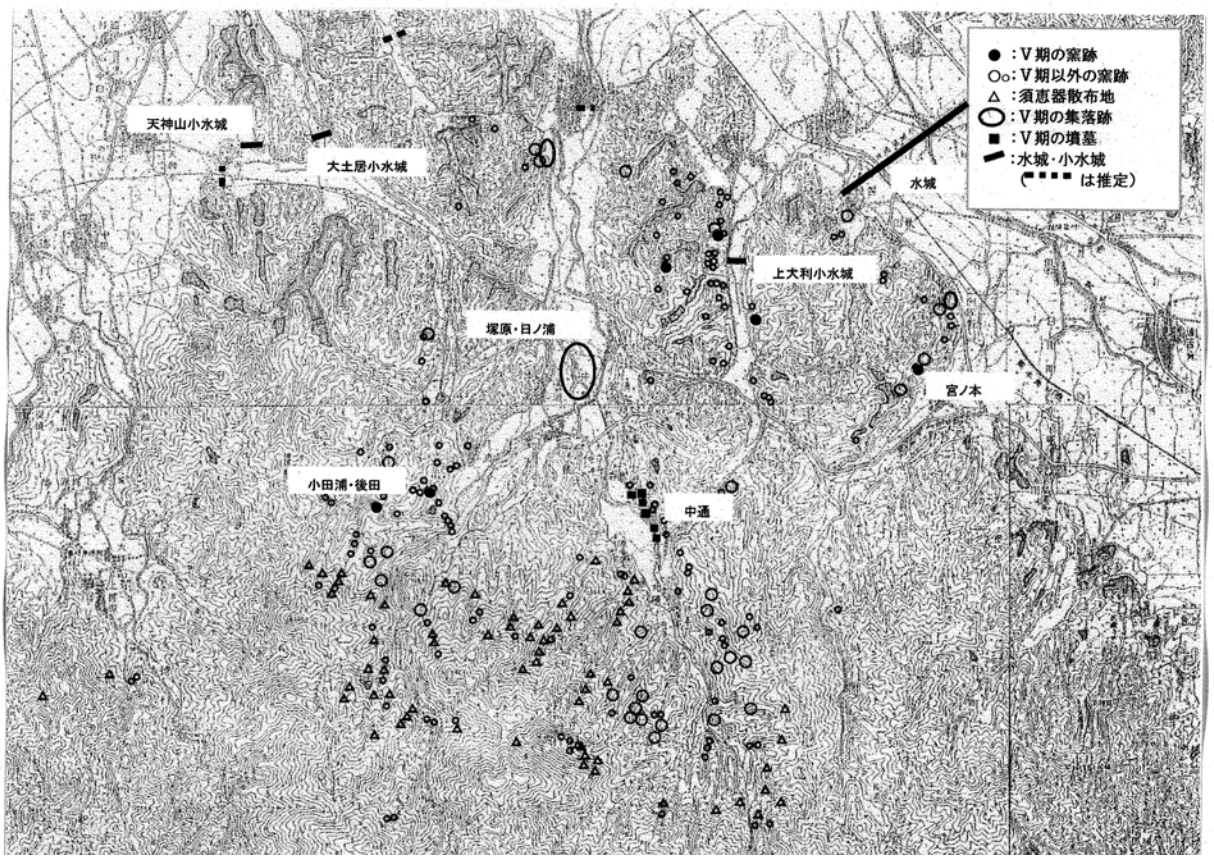


図16　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（７世紀中頃）

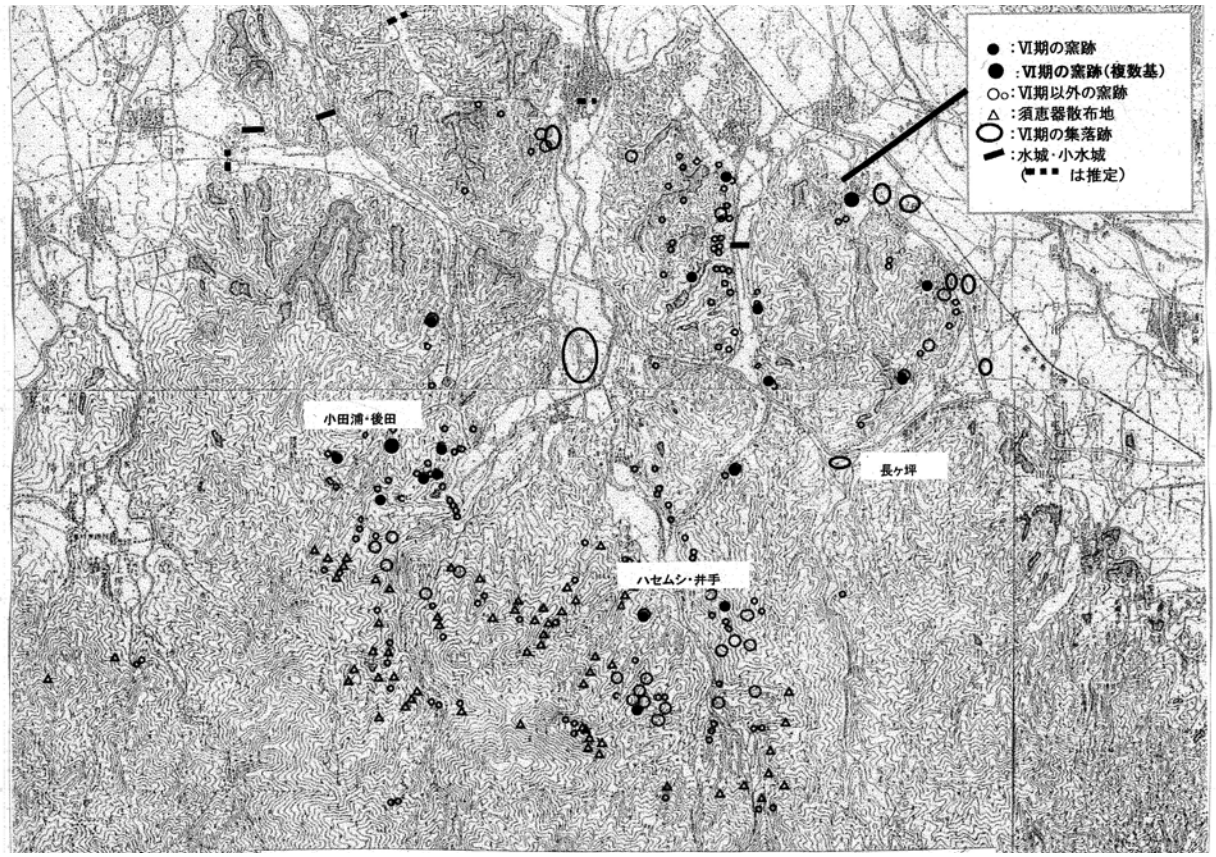


図17　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（７世紀後半）

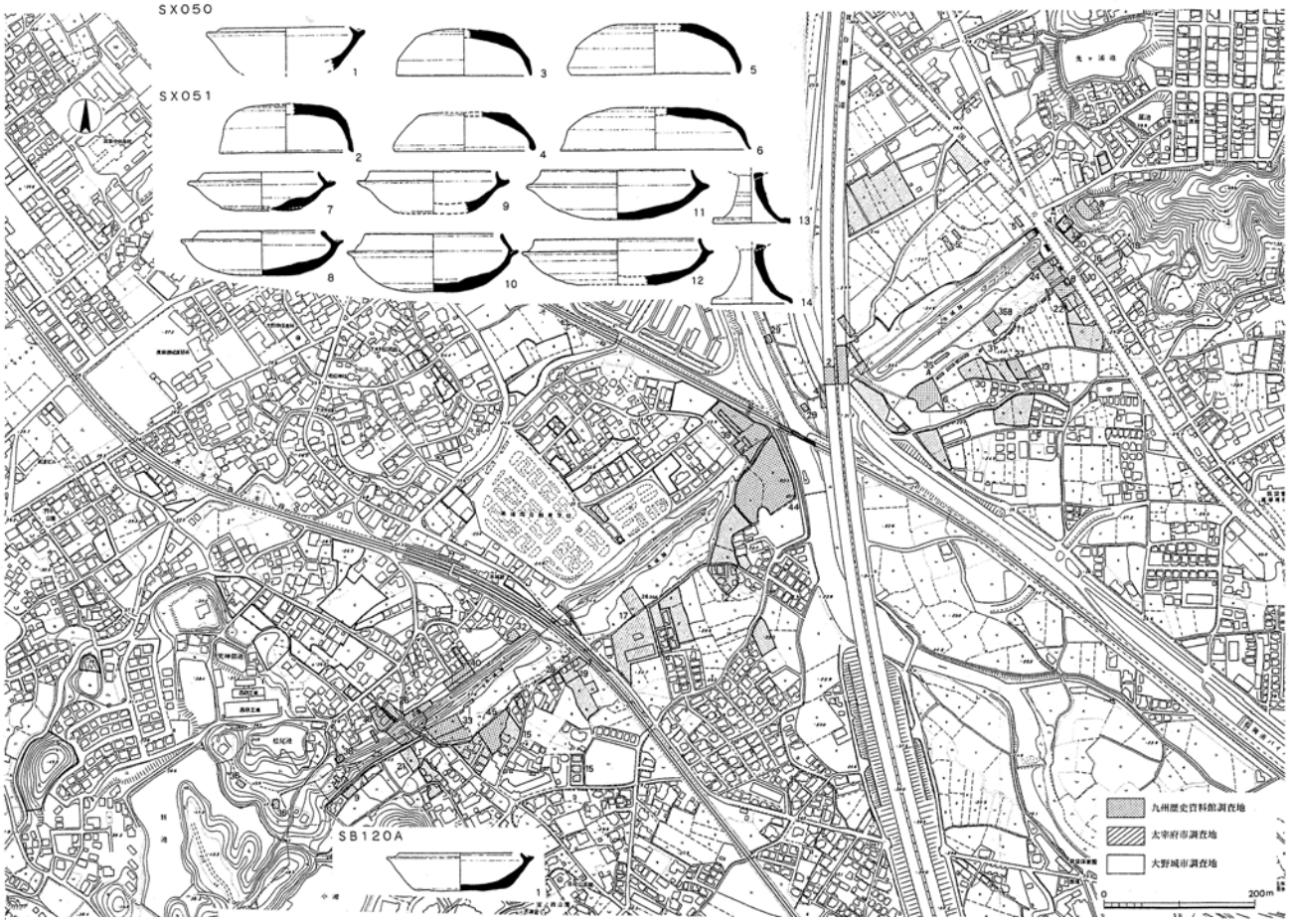


図18　水城跡西門跡SB120A・木樋SX050・051出土遺物（S=1/6）

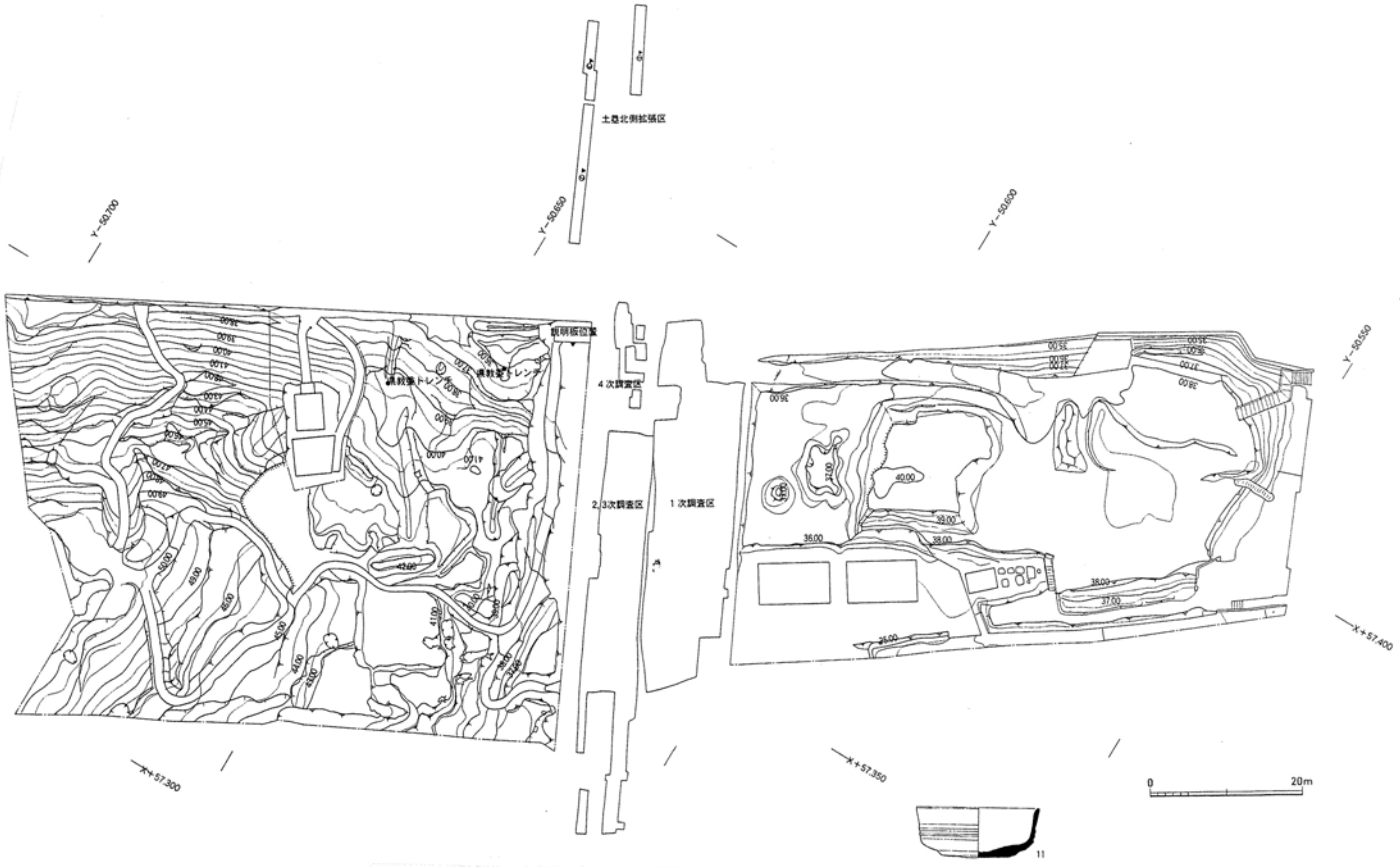


図19　大土居小水城跡土塁南側裾部出土遺物（S=1/6）

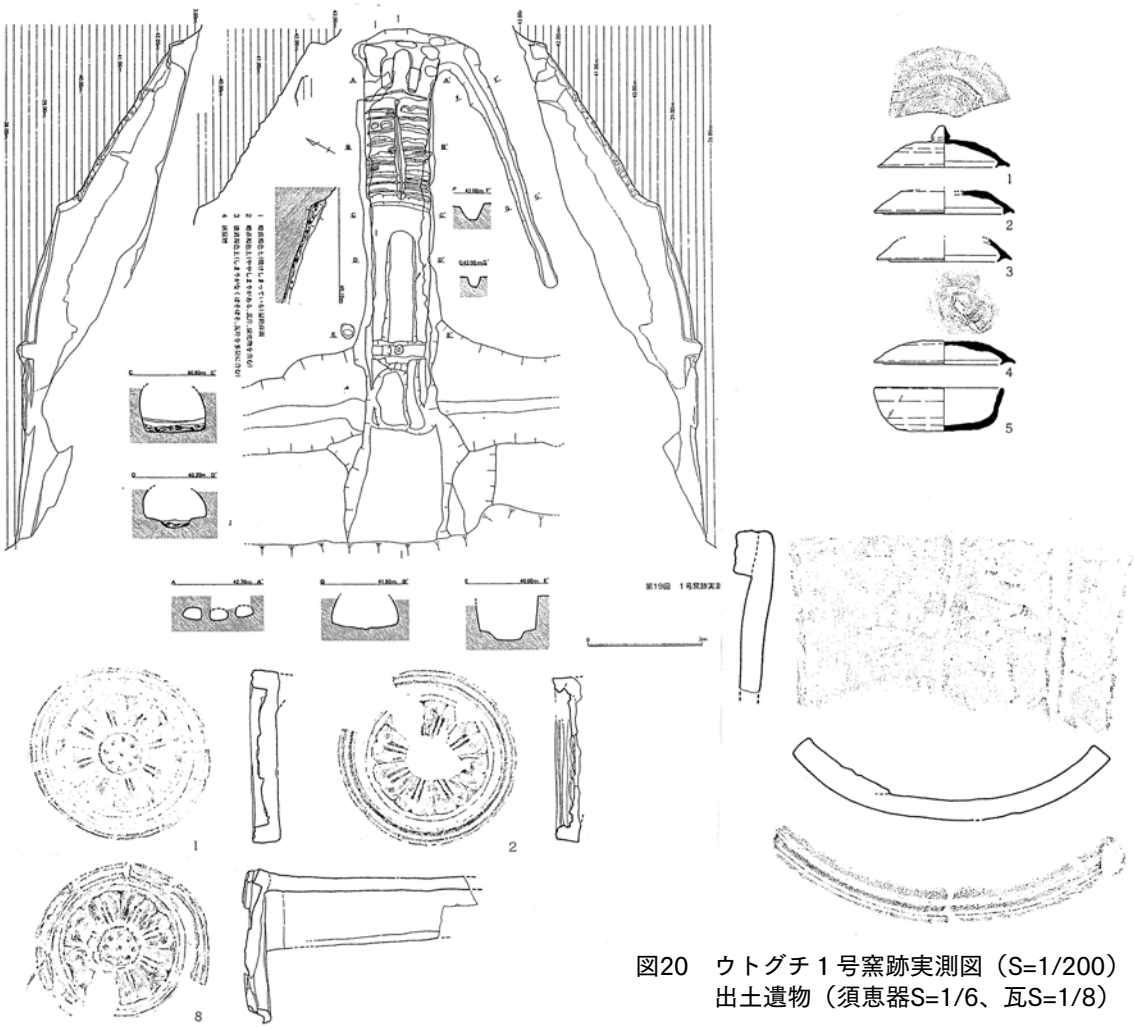
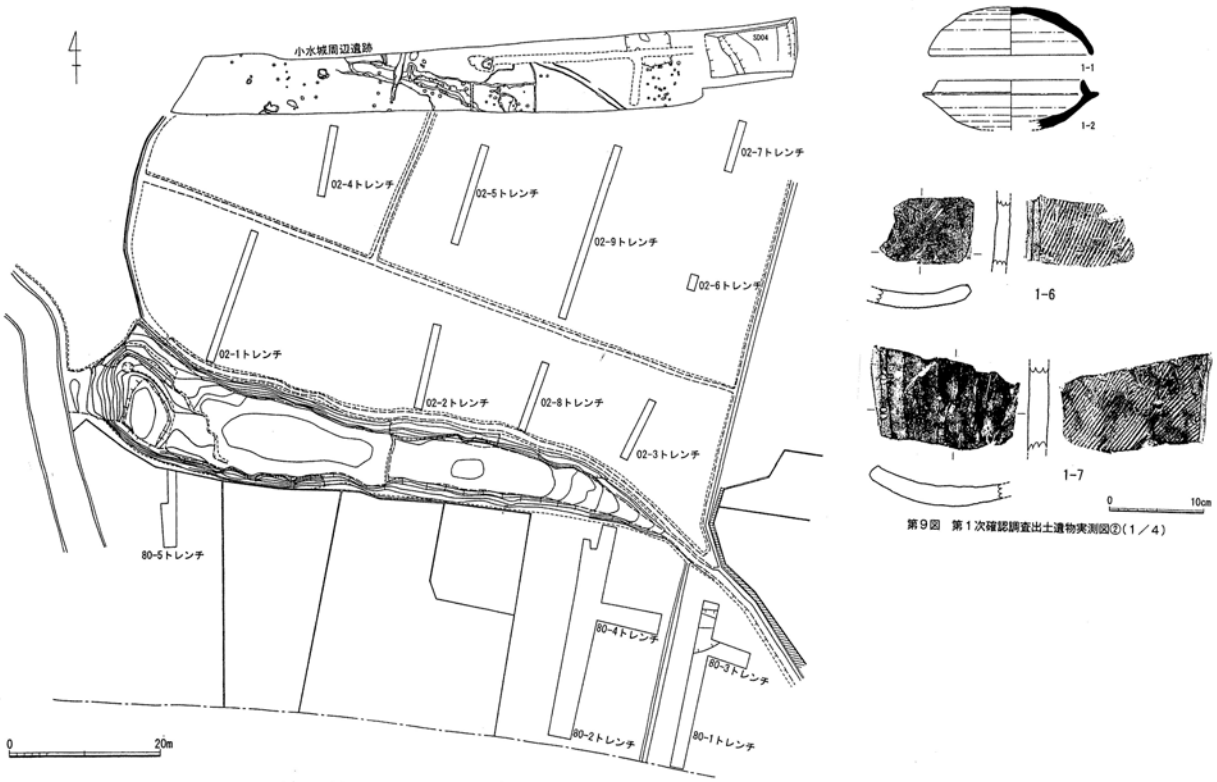


図20　ウトグチ１号窯跡実測図（S=1/200）
出土遺物（須恵器S=1/6、瓦S=1/8）



第９図　第１次確認調査出土遺物実測図②（１／４）

図21　上大利小水城跡出土遺物（須恵器S=1/6、瓦S=1/8）

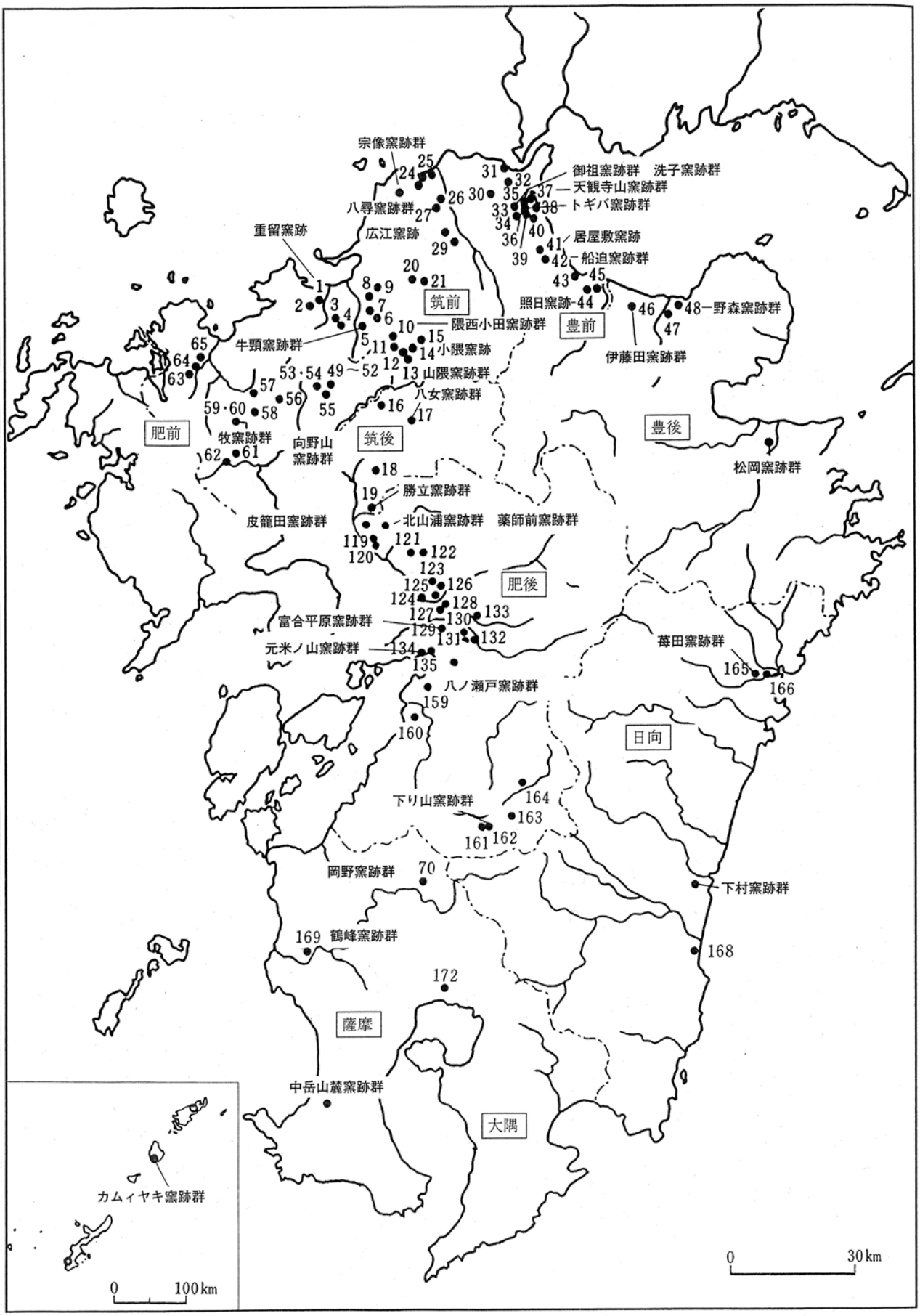


図22　九州の須恵器窯跡分布図

表２　西海道北部の須恵器窯跡群変遷表

国名	郡名	窯跡群名	5世紀			6世紀			7世紀			8世紀			9世紀		
筑前	怡土郡																
	志麻郡																
	早良郡	新開窯跡		■	■												
		重留窯跡			■	■											
		中島窯跡群					■	■									
	那珂郡	牛頸須恵器窯跡					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
		地別当窯跡群										■					
	席田郡																
	糟屋郡	岩長浦窯跡群					■	■									
		若杉今里窯跡						■	■								
	宗像郡	稲元日焼原窯跡群・三郎丸			■	■	■	■	■	▒							
	遠賀郡	野間窯跡群						■	■								
	鞍手郡	古門窯跡群						■	■								
		広江・八尋・宮崎窯跡群											■	■	■		
	嘉麻郡																
	穂波郡	井手ヶ浦窯跡群					■	■	■	■	■						
	夜須郡	小隈・山隈・八並窯跡群	■	■	■												
	下座郡																
	上座郡																
	御笠郡	隈西小田窯跡群	■	■													
		乙金窯跡群					■	■									
		雉子ヶ尾・裏ノ田窯跡群					■	■	■	■							
筑後	御原郡	苅又窯跡群						■	■								
	生葉郡																
	竹野郡																
	山本郡																
	御井郡																
	三潴郡																
	上妻郡	八女窯跡群					■	■	■	■	■	■	■	■			
	下妻郡																
	山門郡																
	三池郡	勝立・片平窯跡群												■	■		
豊前	田河郡	天郷窯跡・号四郎窯跡															
	企救郡	水晶山系窯跡群						■	■	■				■			
	京都郡	向野山・殿川窯跡群						■					■				
		荘原池窯跡群						■	■								
	仲津郡	居屋敷窯跡		■													
	築城郡	船迫窯跡群						■	■								
	上毛郡	山田・照日窯跡群					■	■			■	■					
		四郎丸窯跡群									■	■					
	下毛郡	伊藤田窯跡群						■	■	■	■			■			
	宇佐郡	野森窯跡群・新池窯跡群							■		■	▒					
豊後	日高郡																
	球珠郡																
	直入郡																
	大野郡																
	海部郡																
	大分郡	松岡窯跡群											■	■			
	速見郡																
	国東郡																
肥前	基肄郡																
	養父郡																
	三根郡																
	神崎郡																
	佐嘉郡	神籠池窯跡			■												
		不動滝窯跡群															
	小城郡																
	藤津郡	光武窯跡群・高月窯跡群												■			
	杵島郡	向野山窯跡群									■	■	■				
		牧窯跡群													■	■	
	松浦郡																
	彼杵郡																
	高来郡																
肥後	玉名郡	荒尾窯跡群						■	■					■	■		■
	山鹿郡																
	菊池郡																
	阿蘇郡																
	益城郡	宇城窯跡群										■	■	■	■	■	■
	合志郡																
	山本郡	鈴麦窯跡群												■	■		
	飽田郡																
	託麻郡																
	宇土郡	宇城窯跡群						■	■	■	■						
	八代郡																
	天草郡																
	葦北郡																
	球磨郡	下り山窯跡群											■	■	■		

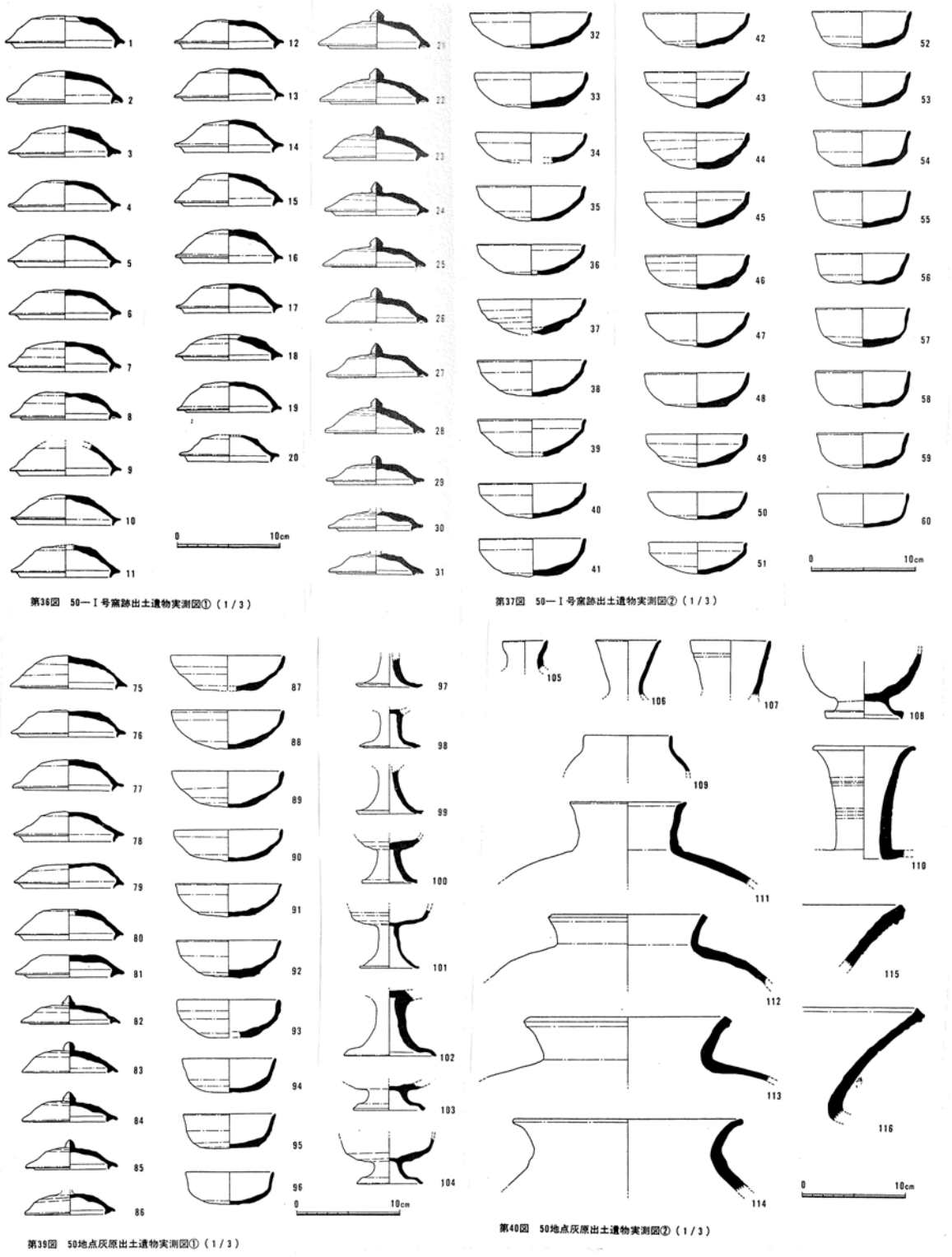


図23　小田浦50−Ⅰ号窯跡出土遺物（S=1/6）

第３章

西海道南部の土器生産

松﨑　大嗣

はじめに

九州南部の弥生時代終末～平安時代までの土器は一般的に「成川式土器」と呼ばれている（中村1987・2013）。成川式土器の特徴として、突帯をもつ甕や壺、脚台を持つ甕や鉢、丹塗が施される高杯や坩などが知られており、弥生時代の伝統を強く保持する点があげられる。

1980年代後半までは、成川式土器の下限は古墳時代後期におさまると考えられており、成川式土器が使用されなくなった後は古代の土器様式へ移行すると言われてきた（平田1979）。しかし、その後の発掘調査によって古代の須恵器との共伴例や降下テフラをもとにした土器の年代推定によって、成川式土器は８世紀代まで存続することが確実となった（下山1992）。近年では、指宿市の敷領遺跡で貞観16年（874年）の開聞岳噴火によって倒壊した建物跡の調査によって、建物内から多くの土器が確認された。詳細は後述するが、この調査によって９世紀後半まで成川式土器の伝統が存続することが判明している。

以上のように、九州南部の７世紀から９世紀の土器を検討する上で、成川式土器の下限と古代の土師器との関係性や年代的な位置づけは大きな課題となっている。そこで本論では、これまでの成川式土器の研究や近年確認された遺跡等をもとに、九州南部の当該期の土器について検討を行いたい。

１．成川式土器の研究

（１）大正年間～ 1960年代

成川式土器の本格的な研究は、大正年間の橋牟礼川遺跡の発掘調査を嚆矢とする。1918年、揖宿郡揖宿村土器包蔵地（現在の橋牟礼川遺跡）において京都帝國大学による発掘調査が行われた（濱田1921）。濱田耕作は、火山灰層を挟んで、下層より出土した土器を「貝塚土器（アイヌ式土器）」、上層より出土した土器を「所謂、彌生式土器と称するものの系統に属するもの」（濱田1921：p.34）とし、それぞれの層位に対応する形で「指宿上層式土器」を弥生土器、「指宿下層式土器」を縄文土器として位置づけた。この際、「指宿上層式土器」として位置づけられた土器は、現在の成川式土器と呼ばれる土器様式に属するものであった。

その後、指宿上層式土器は「南九州C様式（小林1938）」、「薩摩式土器（寺師1950）」、「３・４様式（河口1952）」、「第Ⅴ様式（河口1964）」といった名称で呼ばれ、九州南部の弥生時代後期の土器様式として位置づけられてきた。

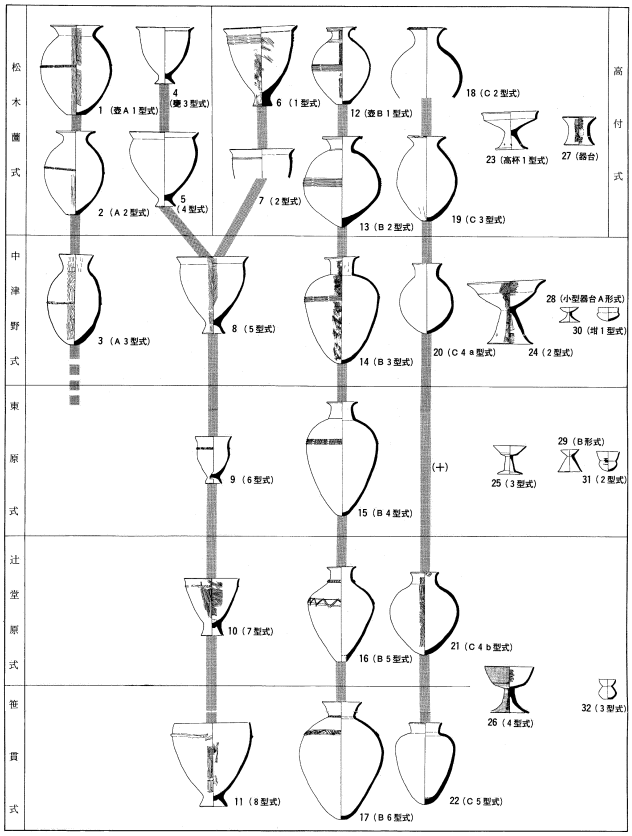
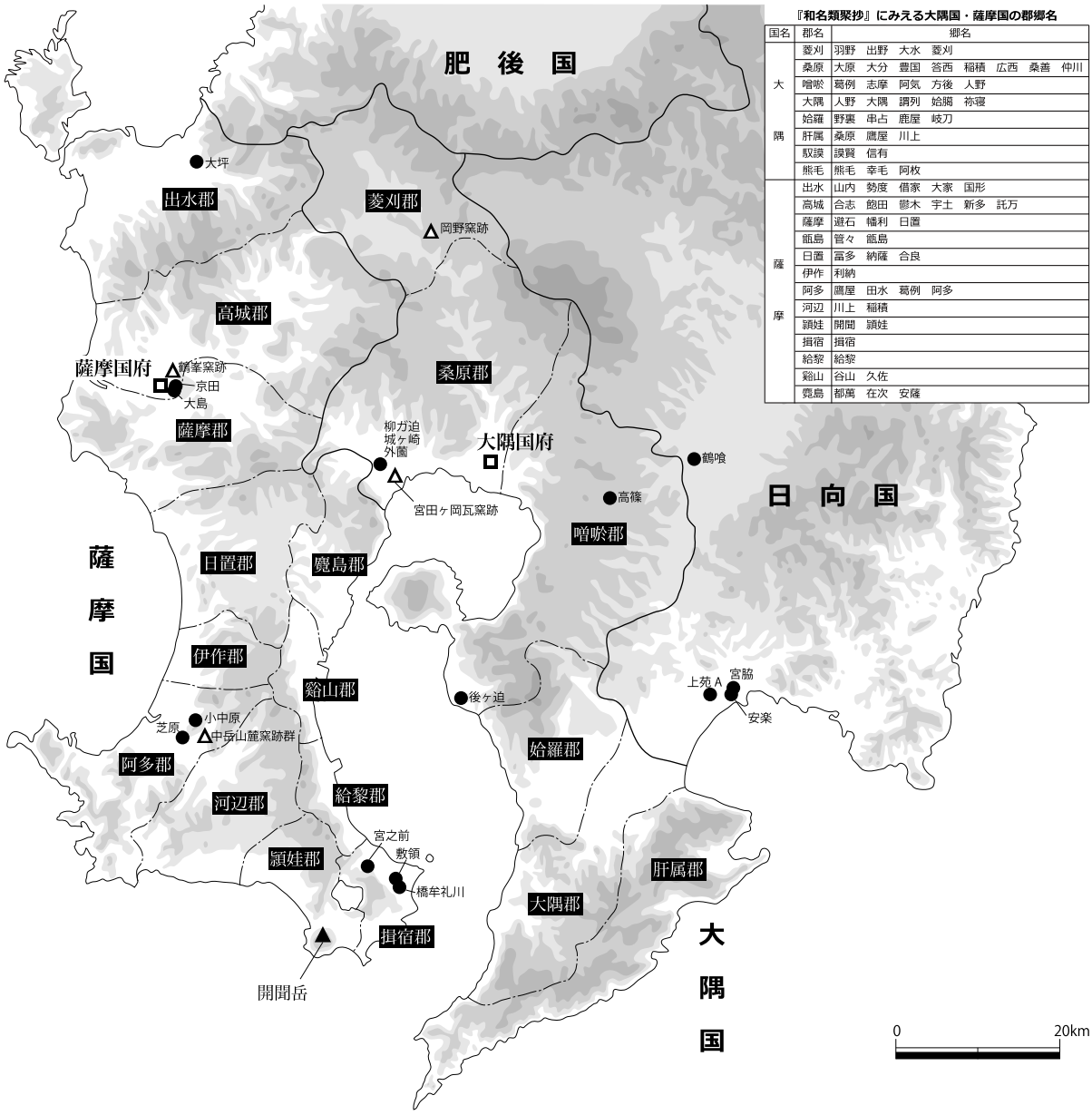


図１　成川式土器編年図（中村1987）



『和名類聚抄』にみえる大隅国・薩摩国の郡郷名

国名	郡名	郷名
大隅	菱刈	羽野　出野　大水　菱刈
	桑原	大原　大分　豊国　答西　稲積　広西　桑善　仲川
	噌吋	葛例　志摩　阿気　方後　人野
	大隅	人野　大隅　謂列　姶脚　祢寝
	姶羅	野裏　串占　鹿屋　岐刀
	肝属	桑原　鷹屋　川上
	馭謨	謨賢　信有
	熊毛	熊毛　幸毛　阿枚
薩摩	出水	山内　勢度　借家　大家　国形
	高城	合志　飽田　膠木　宇土　新多　託万
	薩摩	避石　幡利　日置
	甑島	管々　甑島
	日置	富多　納薩　合良
	伊作	利納
	阿多	鷹屋　田水　葛例　阿多
	河辺	川上　稲積
	頴娃	開聞　頴娃
	揖宿	揖宿
	給黎	給黎
	谿山	谷山　久佐
	麑島	都萬　在次　安薩

図２　本論で対象とする遺跡

（２）成川遺跡の調査

成川式土器は弥生時代に属する土器様式であるという評価が一般的な中、成川式土器の標識遺跡である成川遺跡の発掘調査が行われた（河口ほか1958，文化庁1974）。当遺跡からは多くの立石土壙墓・土壙墓が検出され、計233体の人骨が出土した。また、墓に供献された土器も多量に出土した。出土した土器は第Ⅰ類から第Ⅴ類まで分類されたが、その大半は第Ⅳ類土器であり、従来指宿上層式土器と呼ばれてきた土器群であった。河口貞徳は、この第Ⅳ類土器について、「この種の土器に対して、我々は従来指宿上層式土器と称していたが、指宿下層式土器である縄文式土器を、単に指宿式土器と称するようになったので、本形式土器を改めて成川式土器と呼ぶことにしたい」（河口1974：p.66）と述べている。河口による改称案により、従来使用されてきた「指宿上層式土器」や「薩摩式土器」、「南九州Ｃ様式」などは、成川遺跡を標識遺跡として「成川式土器」と呼ばれるようになった。

さらに乙益重隆は、共伴する鉄器・鉄製品の年代から「成川遺跡の上層における鉄器・鉄製品はたとえ上限が弥生時代後期末に比定されるとしても、主体をなす遺物の最盛期は、５世紀代の中・後期にあっ

たと考えられ、下限は6世紀前半に及ぶもの。」（乙益1974：p.150）と推定した。この見解は、従来「弥生時代に属する土器」として評価されてきた成川式土器に対して、時期幅をもつ可能性があることを初めて指摘したものとなった。

その後、鹿児島県内において成川式土器と須恵器などの古墳時代に属する遺物が共伴する事例が多く報告されるようなる。これらの発掘調査により、成川式土器は弥生時代後期の土器様式ではなく、古墳時代を主体とする土器様式であるという説が確実なものとなった。その中で、年代的位置づけや細分化をめぐって、1980年代に編年研究が精力的に行われた（平島1977，平田1978，池畑1980，多々良1981，坪根1986）。

多くの編年案が提示された中で、1987年に中村直子によって提示された編年が現在でも多く使用されており、成川式土器の編年研究は一定の枠組みが構築された（中村1987，図1）。中村は中津野式（弥生時代終末から古墳時代初頭）→東原式（古墳時代前期から古墳時代中期前半）→辻堂原式（古墳時代中期後半）→笹貫式（古墳時代後期）という変遷を明らかにし、笹貫式の下限は、須恵器との共伴関係から6世紀前半を想定している。

（3）青コラの降下年代

中村編年の提示により、成川式土器の基本的な枠組みは確立されたかに思われたが、1991年に行われた指宿市橋牟礼川遺跡の調査により、その下限に対して問題点が浮上する。これまで指宿地域の遺跡では、開聞岳を給源とするテフラが認められ、遺跡の年代を決める上で重要な鍵層とされてきた。中でも「青コラ（Km11）」と呼ばれる青灰色の火山灰層は、成川式土器の中でも最終段階に位置づけられる笹貫式の土器を被覆することで知られ、中村編年をもとに5～6世紀代に降下したと考えられていた（下山1990）。

しかし、1991年の発掘調査において、青コラに被覆されるかたちで須恵器台付長頸壺が出土した（図3）。下山は「一次降下物は、堆積後の攪乱を受けていないため、頸部下にはフォール・ユニットが明瞭に観察された。また、壺内部には、同様に、一次堆積物がフォール・ユニットを形成し、その後、ラミナが認められる火山噴出物の二次堆積層が壺内、外部に堆積していた。」（下山1992：p.69）と報告しており、出土状況から青コラ降下時点では、台付長頸壺は若干傾きながらも立っていた可能性を指摘した（下山1992）。この須恵器は中村浩による編年のⅢ型式3段階からⅣ型式1段階に位置づけられることから、7世紀後半から8世紀初頭の年代が想定された。これらの新見解により、青コラ直下から出土する成川式土器は7世紀後半まで下ることが想定されるようになる。

その後、1992年に行われた橋牟礼川遺跡の発掘調査において、成川式土器の下限はさらに下る。青コラの上位から掘り込まれた4基の竪穴住居が検出されたのである（下山ほか1996）。これらの住居には方形、円形の2種類のプランがあり、床中央部に炉をもつ。出土遺物としては、2号住居内から笹貫式の甕・鉢・須恵器の甕、軽石製品が、4号住居からは笹貫式の甕・鉢・壺・高杯、須恵器の杯蓋、甕が出土している（図4）。この調査により、少なくとも青コラ降下後の8世紀代まで成川式土器の伝統が継承されていたことが明らかとなった。一方、下山は「橋牟礼川遺跡出土の資料だけで、「成川式土器」の存続幅を一律に決定することは不可能である。」（下山1992：p.67）とし、成川式土器の終焉には地域差があることを指摘した。

以上のように、成川式土器の下限に関して再考を促す資料が提示されたが、指宿地域だけにみられる事例であったことから、成川式土器の下限に関する議論には限界があった。その後の研究は、成川式土器の年代的な位置づけだけでなく、他地域の土器様式の器種構成や土器製作技術の比較を論じるものが多くなる（相美2004，中村1999・2004）。また、成川式土器を検討する際に重要となる「小地域色」に着目した編年も提示されている（鎌田2009・2014）。

中村直子は、成川式土器と土師器を製作技術・器種組成などの面から比較し、北薩地域・肝属平野・

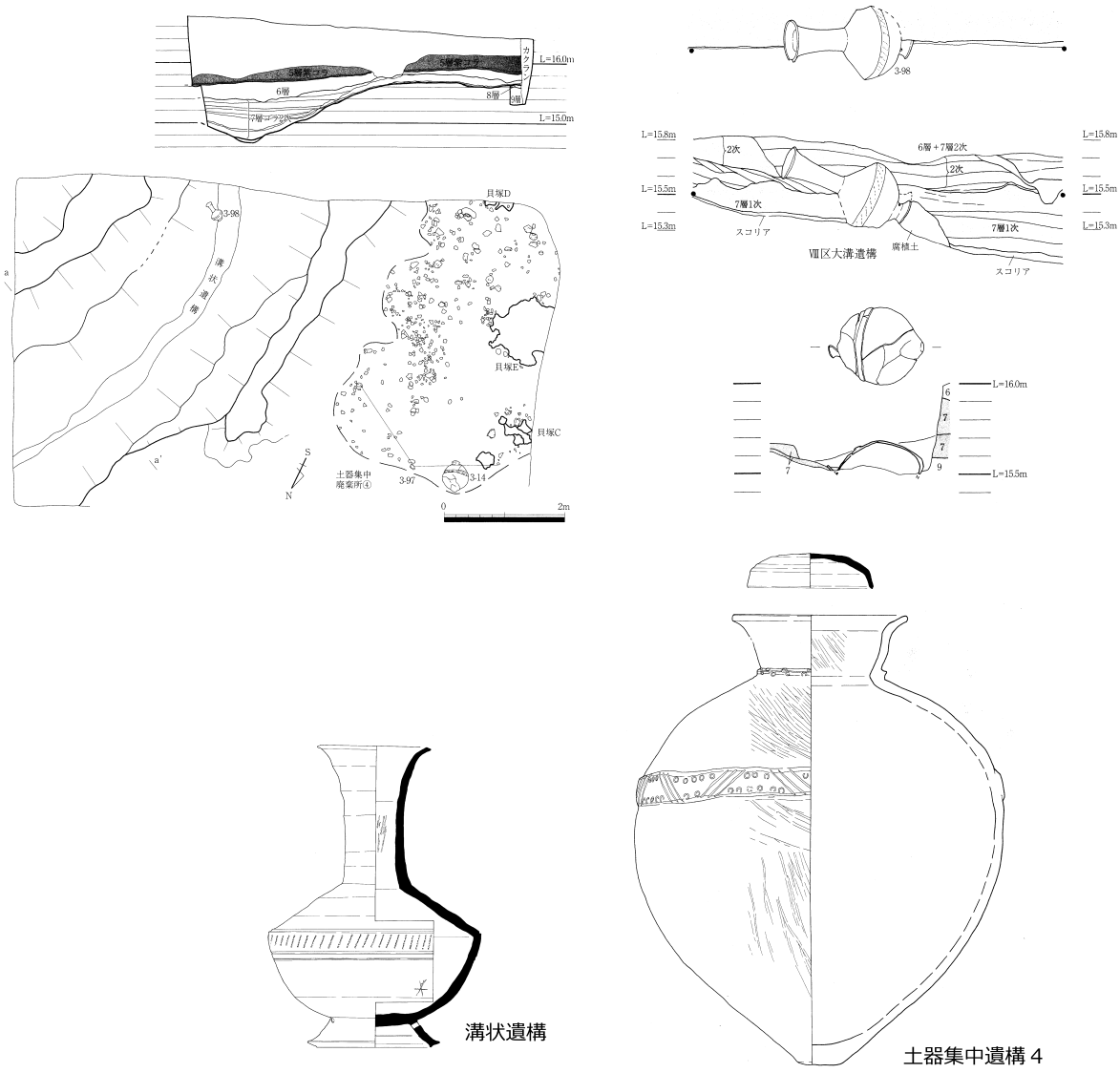
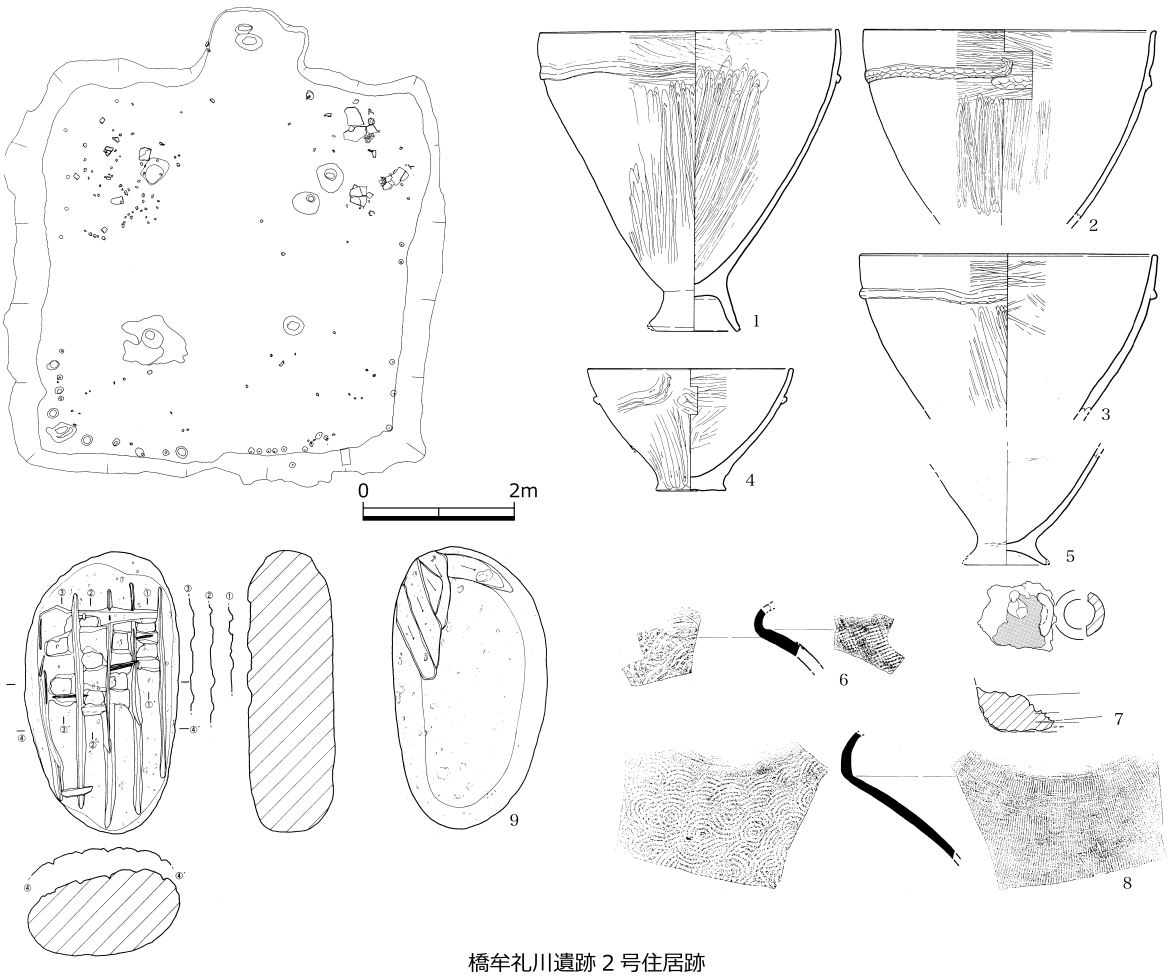


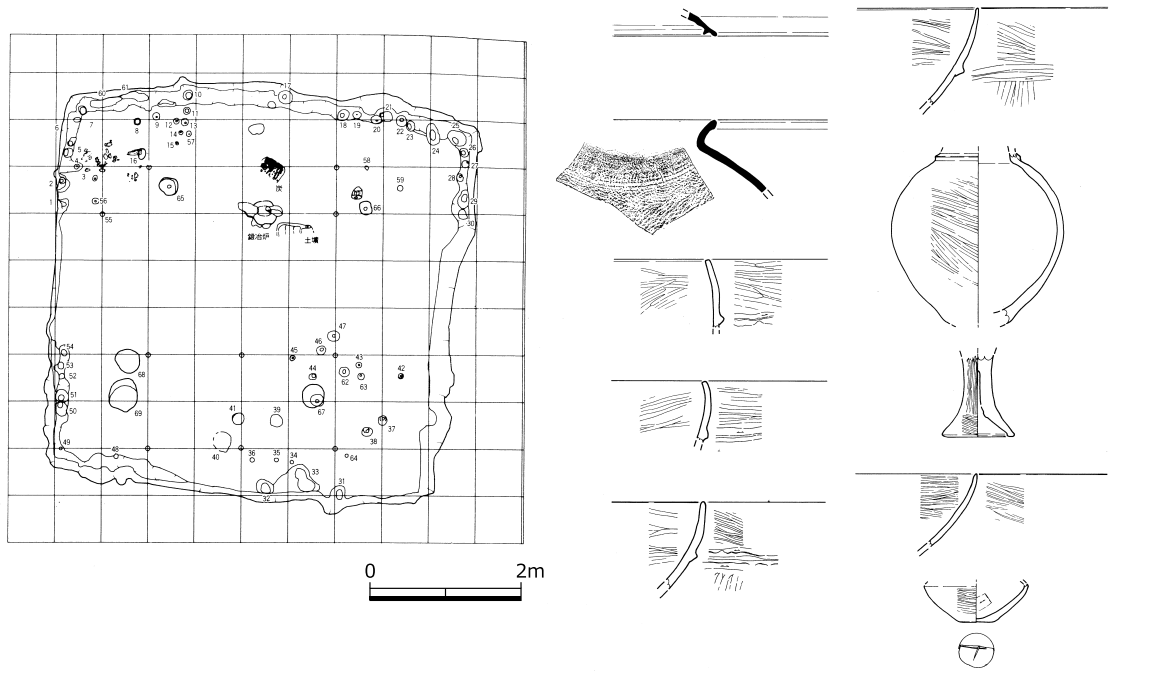
図３　橋牟礼川遺跡溝状遺構周辺遺物

都城盆地においては折衷甕・杯が存在するが、薩摩半島・鹿児島湾沿岸部では地域性の強い様相が認められると論じた（中村2004）。相美伊久雄は南九州を地勢的特徴から区分し、それぞれの地域における成川式土器の器種組成を通時的に分析した。分析の結果、辻堂原期において杯が川内平野、肝属平野、都城盆地、加久藤・小林盆地などで新器種として加わり、笹貫期に入ると薩摩半島西岸域や鹿児島湾奥でもわずかに認められるようになるが、薩摩半島東岸域では認められないことを明らかにした（相美2004）。このような地域差が生まれる要因として、中村は古墳の築造域・非築造域という違いから生じる生活様式の差異（竈・須恵器が導入されないなど）が反映されていると考えた（中村ibid.）。

他地域の土器との関係性が通時的な分析によって明らかになっていく中で、南九州で７・８世紀に位置づけられる集落の発掘調査事例も増加してきた。特に年代比定が可能な須恵器と共伴関係にある資料が増加したことは大きな成果である。新たな調査によって資料が蓄積される一方、笹貫式の下限が８世紀代まで下るということから、笹貫式の年代幅が６世紀から８世紀までの長期にわたるという問題点も浮上する。笹貫式（特に編年の指標となっている甕）は器形の変化が緩慢であることから（吉本2006）、笹貫式を区分するためには土器の形態だけでなく、他の属性に着目する必要があった。

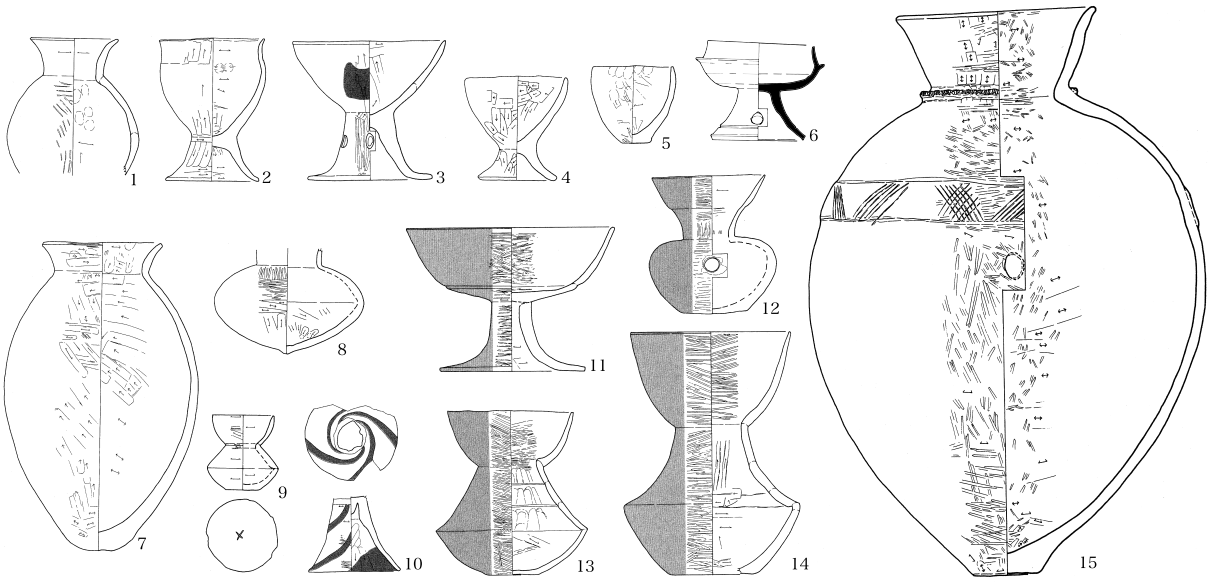


橋牟礼川遺跡２号住居跡

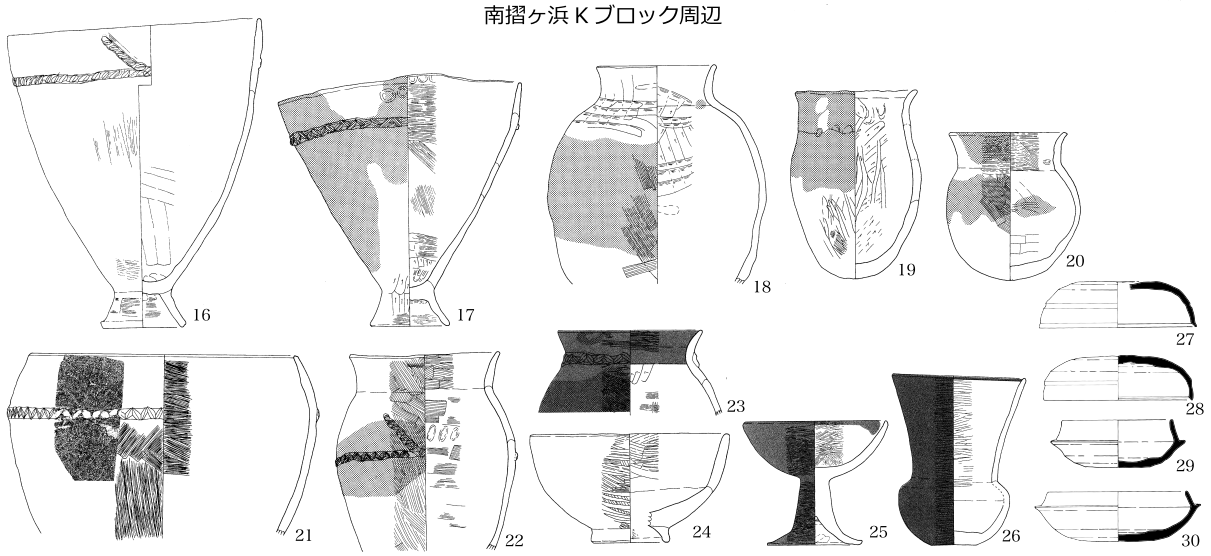


橋牟礼川遺跡４号住居跡

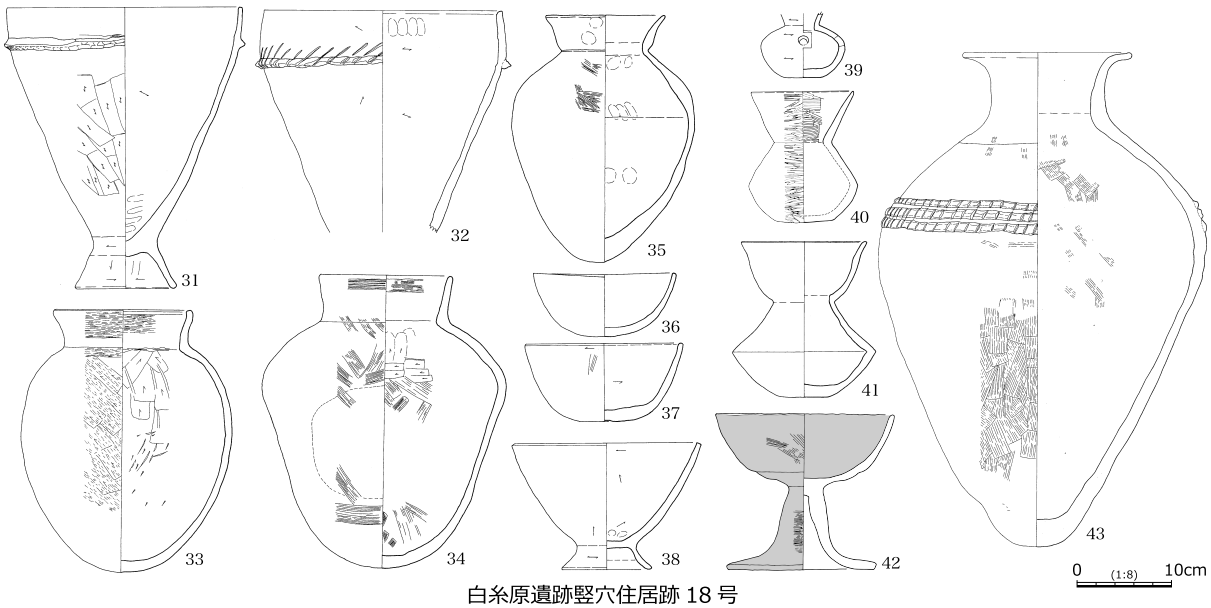
図４　橋牟礼川遺跡　青コラ上位から掘り込んだ住居



南摺ヶ浜Ｋブロック周辺



尾ヶ原４号竪穴住居跡



白糸原遺跡竪穴住居跡 18 号

図５　笹貫式古段階の土器（１）

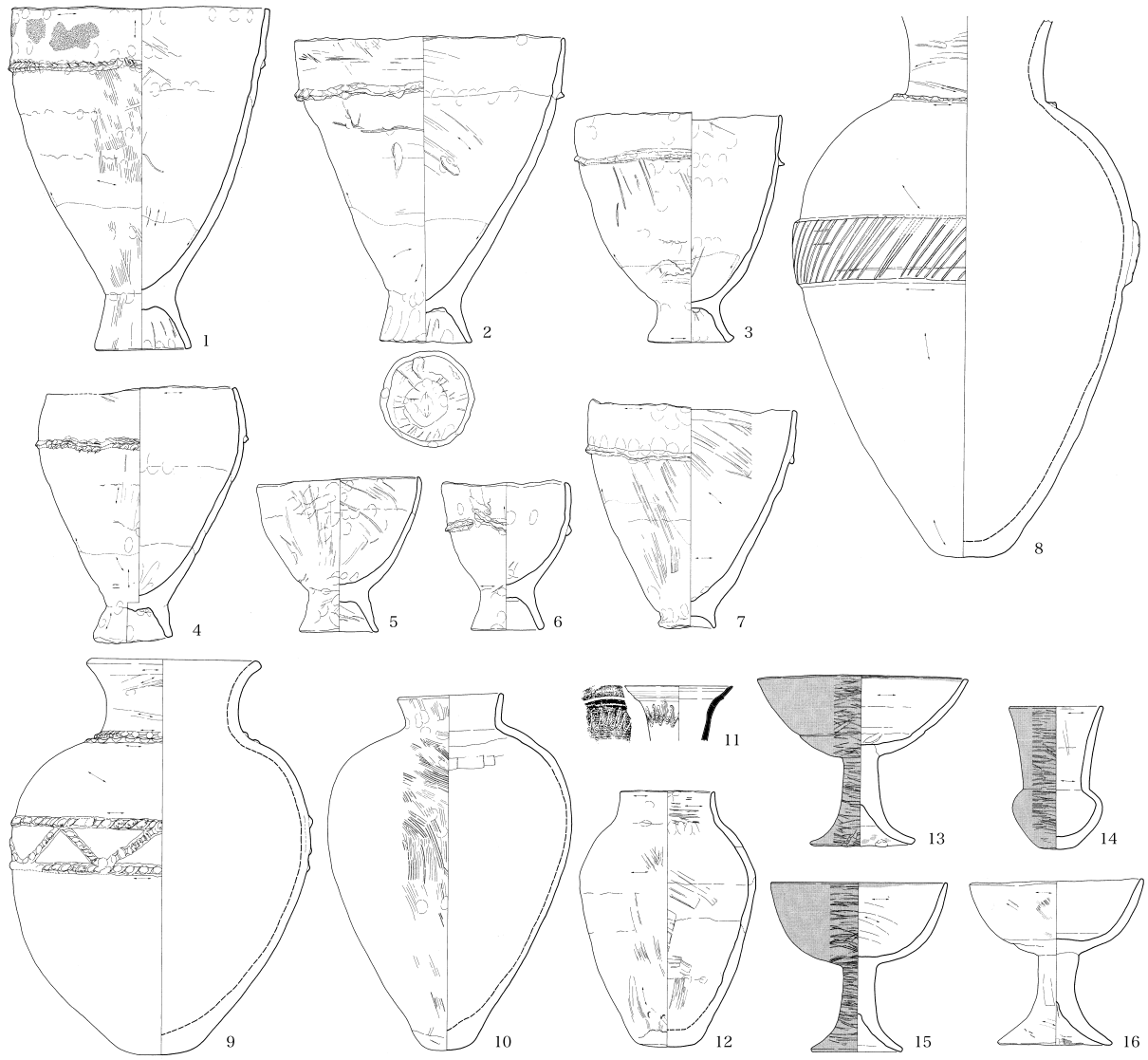


図６　笹貫式古段階の土器（２）

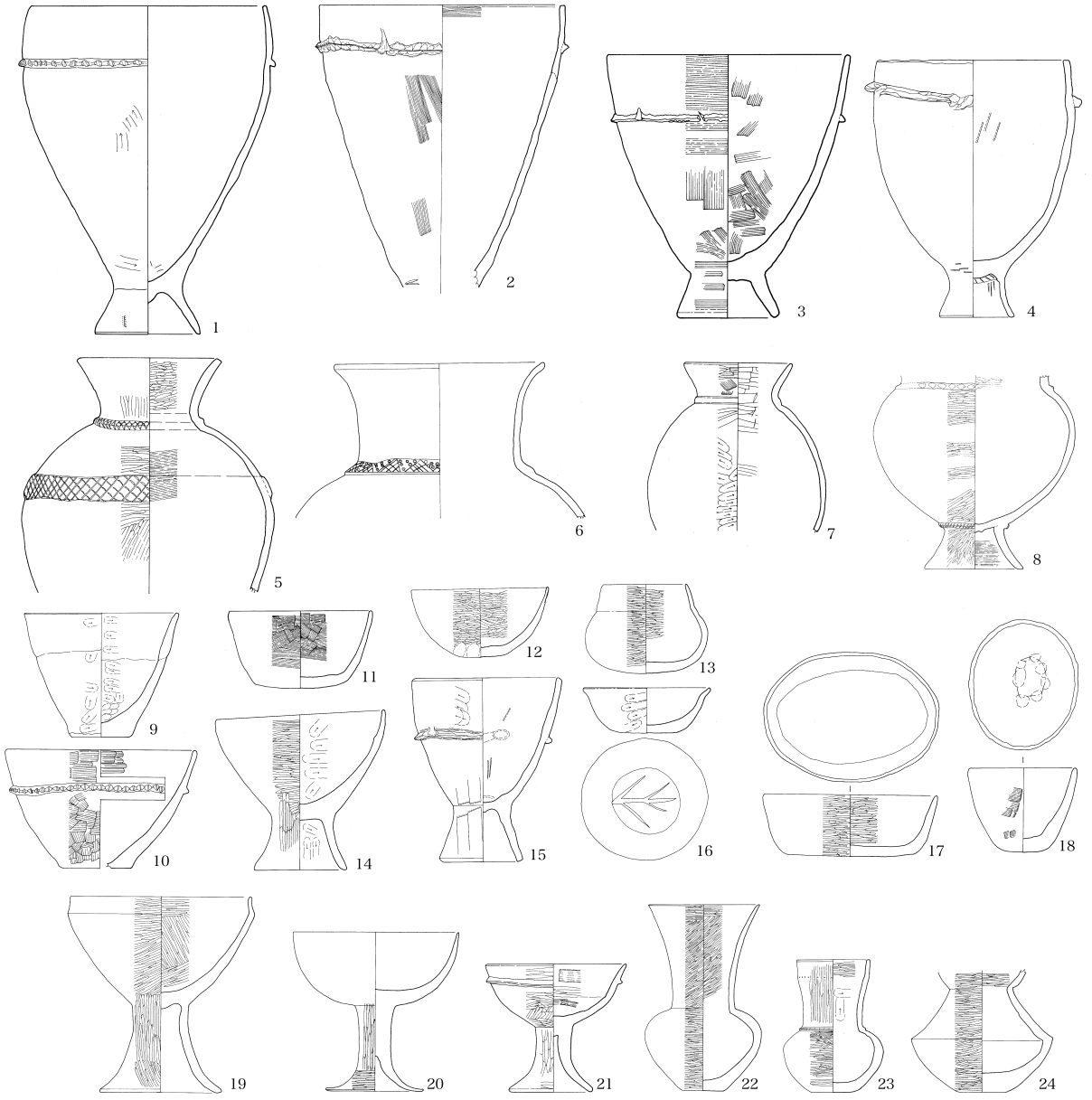
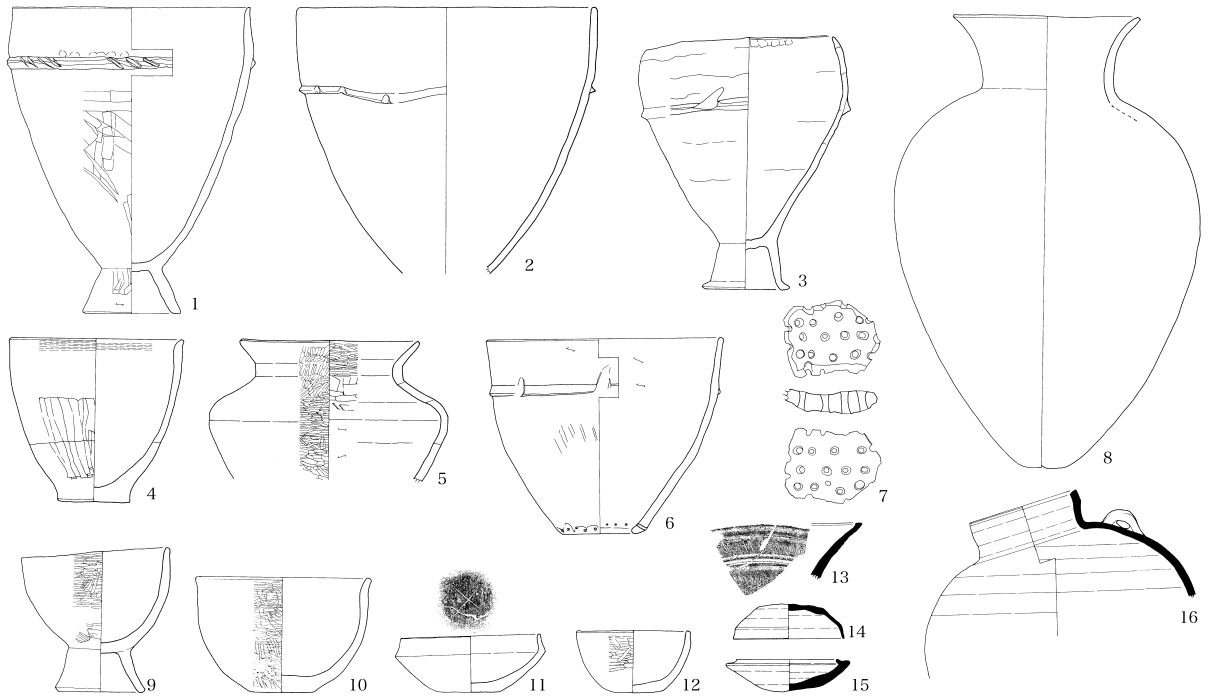
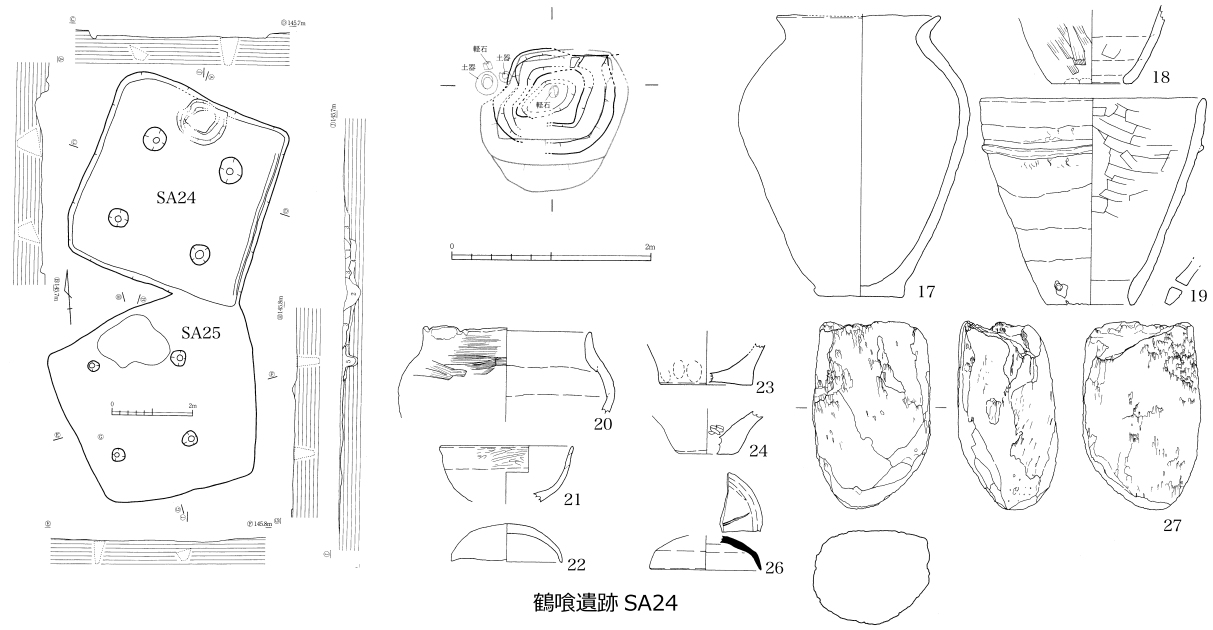


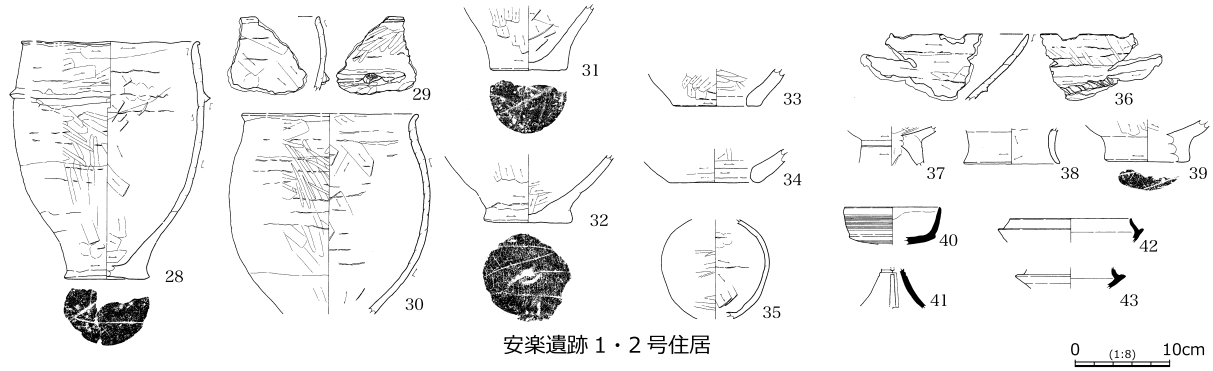
図 7　笹貫式新段階の土器（1）



中尾遺跡４号溝

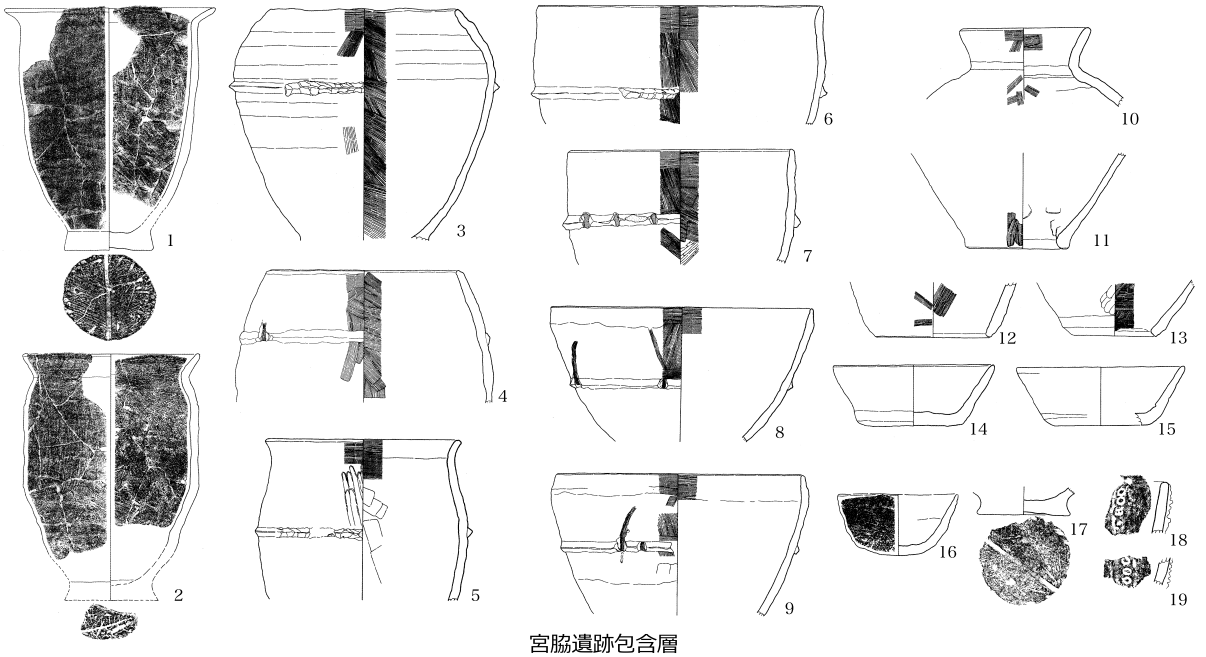


鶴喰遺跡 SA24



安楽遺跡１・２号住居

図８　笹貫式新段階の土器（２）



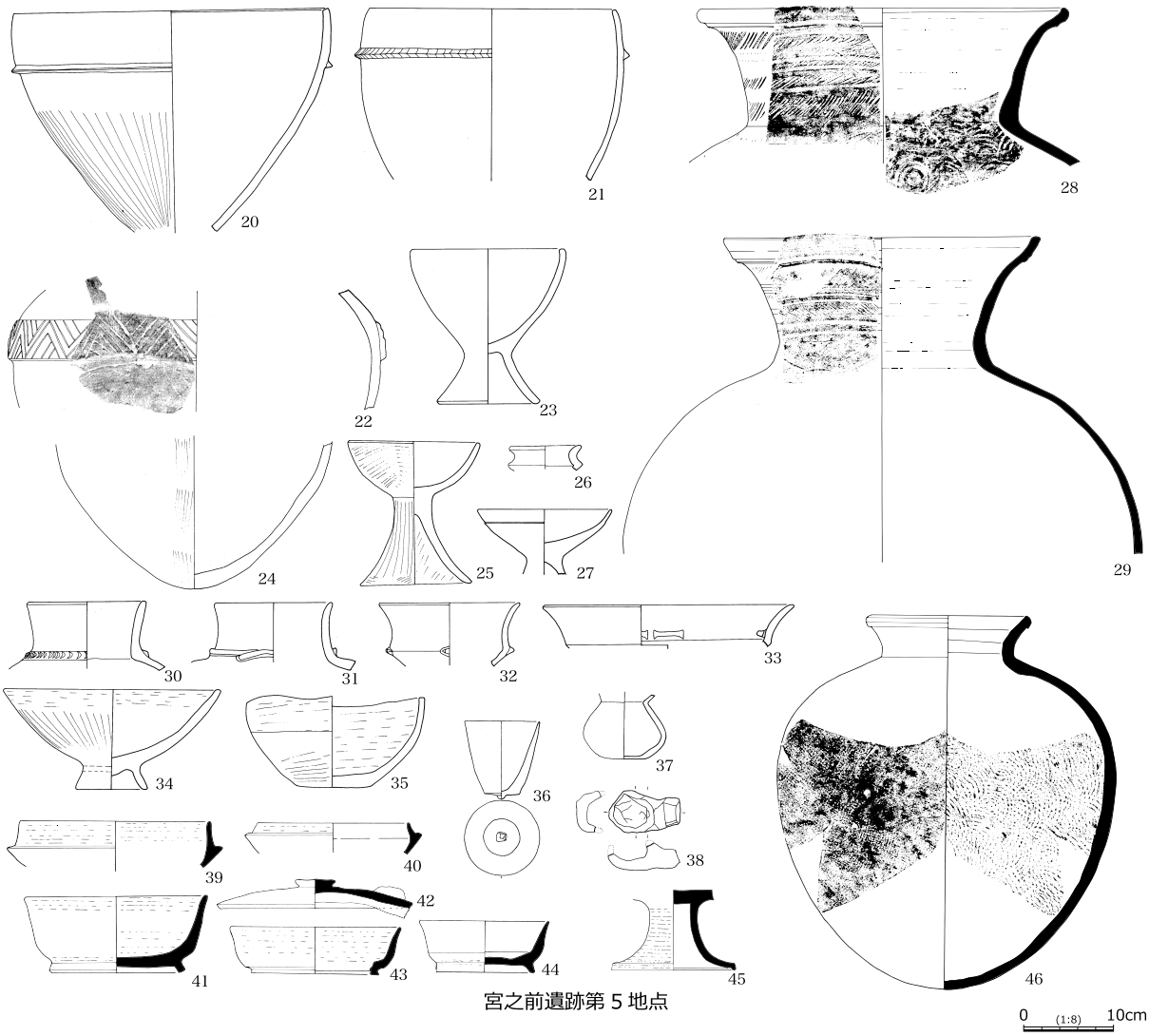


図９　笹貫式新段階の土器（３）

（4）笹貫式新段階の設定

中村直子は、須恵器の共伴例から笹貫式の細分を行った。そして、笹貫式でも新しい段階に位置づけられる一群を「笹貫式新段階」として設定した（中村直2009）。笹貫式新段階の特徴として、①甕や甑に施された太くまばらな刻目突帯、②複数器種において認められる器面に残る接合線、③甕の器面に施されたミガキ、④甑の安定的出土、⑤口が広く浅いタイプの杯、⑥小型化した高杯があげられている。図５・６には笹貫式古段階、図７～９には笹貫式新段階の代表的な資料を掲載している。

笹貫式新段階が設定されたことによって、これまで須恵器が共伴しなければ年代的な位置づけが難しかった成川式土器について、新古の関係性はおおよそ理解できるようになってきた。相美伊久雄は、志布志湾北岸域の笹貫式新段階に位置づけられる甕について同時期の宮崎平野、都城盆地との資料と比較を行った（相美2014）。比較の際、「南九州的特徴」として突帯の貼付、ミガキ調整、底部形態の脚台を、「宮崎平野的特徴」として器面の接合痕、木葉痕をあげ、土器の属性レベルにおける複雑な交流関係を示した。

以上のように、笹貫式新段階の資料が蓄積されることによって、７世紀～８世紀前半の九州南部における食器構成や地域間交流の議論も進展しつつある。一方、「成川式土器様式がどのように消えて他の土器様式に変わるのかという“様式の崩壊（変換）過程”」（下山1995）については不明な点が多く残っている。食器組成をみると古墳時代後期の九州南部では、置食器である高杯で手食中心であるのに対し、９世紀段階には手持ち食器である土師器杯や須恵器杯を中心としたものに変化しており、食事様式においても大きな変化があったことが想定されている（中村2013・2016）。

外来系の食膳具を受容する中で、煮炊具ついては成川式土器の伝統を保持しており、笹貫式新段階の甕と古代の土師器甕の共伴例は未確認だった。指宿地域では、笹貫式新段階の甕と古代の土師器甕の「折衷型」と位置づけられる資料（下山1992，松﨑2015）も出土しているが、資料数が少ないこともあり、安定した器種として存在するかは不明である。

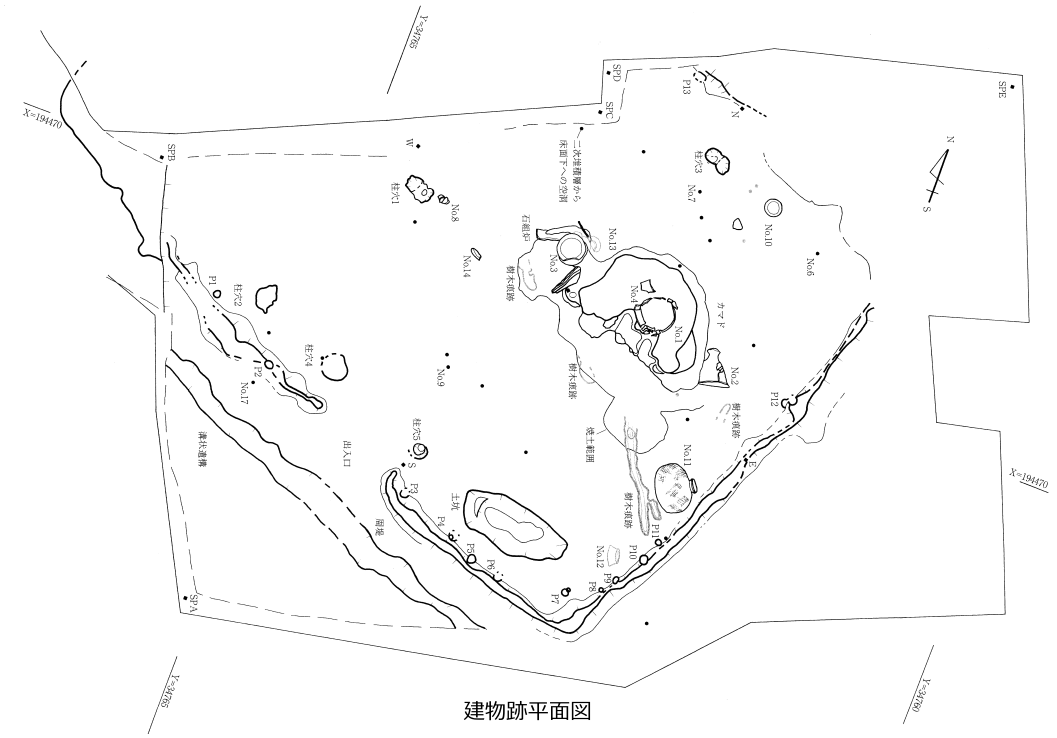
（5）敷領遺跡３号建物跡の調査

そのような中、指宿市敷領遺跡範囲内で確認調査が実施され、開聞岳の噴出物に被覆された倒壊建物跡が確認された（中摩ほか2015）。敷領遺跡は874年３月25日（貞観16年３月４日）の開聞岳噴火（Km12）によって埋没した火山災害遺跡（集落遺跡）で、橋牟礼川遺跡から直線距離で３㎞ほどの地点に位置する。

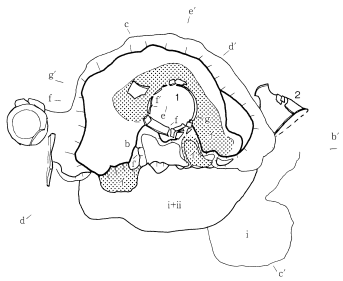
この開聞岳の噴火年代については、『日本三代実録』に記された火山災害報告と橋牟礼川遺跡の調査成果をもとに、年代と堆積層の類推が行われている（永山1992，下山1992）。現在のところ、874年の開聞岳噴火に伴う火山災害遺跡は指宿市内で橋牟礼川遺跡と敷領遺跡、慶固遺跡、小田遺跡が確認されている。

なかでも敷領遺跡では、平成７年以降、開発に伴う発掘調査や大学の学術調査によって火山被害直後の集落の様相が徐々に解明されつつある。中敷領地区では２軒の建物跡が確認されており、居住域の北側には畠域、東側には水田域が確認されている。当遺跡は、開聞岳噴火に伴う噴出物で良好な状態で建物や耕作地がパックされていることから、古代の揖宿郡における集落を検討する上で非常に重要な遺跡となっている。平成26年度に確認された建物跡は、長軸5.3ｍ×短軸3.8ｍの掘立柱建物である（図10，敷領遺跡３号建物跡）。建物跡の周囲は壁を外側から土盛りした痕跡が残っており、壁立に対して外側から土盛りをしたと考えられる。建物の南壁では土盛りが途切れていることから、南側が出入口であると想定できる。また、建物周囲の土層を観察すると、火山礫や火山灰をともなう一次降下物、その上層に二次堆積物である土石流層が見られるのに対し、建物内部には一次堆積物はみられない。そのため、３号建物跡は噴火直後（一次堆積物降下時）まで上屋のある状態で被災したと考えられる。

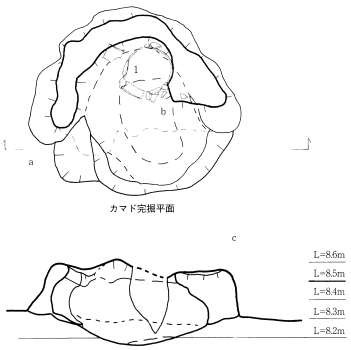
この建物跡の特徴は、建物内の調理施設が良好な状態で保存されていたことである。建物内では、中央軸よりやや離れた場所で壁に付かない独立したカマド跡、石組炉が検出されている。この二つの調理施設には、煮炊具である丸底甕が掛けられた状態で、二次堆積物によって被覆されていた。カマド内部



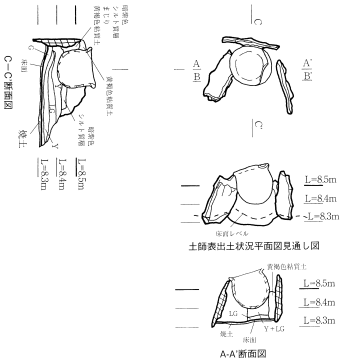
建物跡平面図



カマド検出平面図



カマド完掘平面・断面図



石組炉見通し・断面図

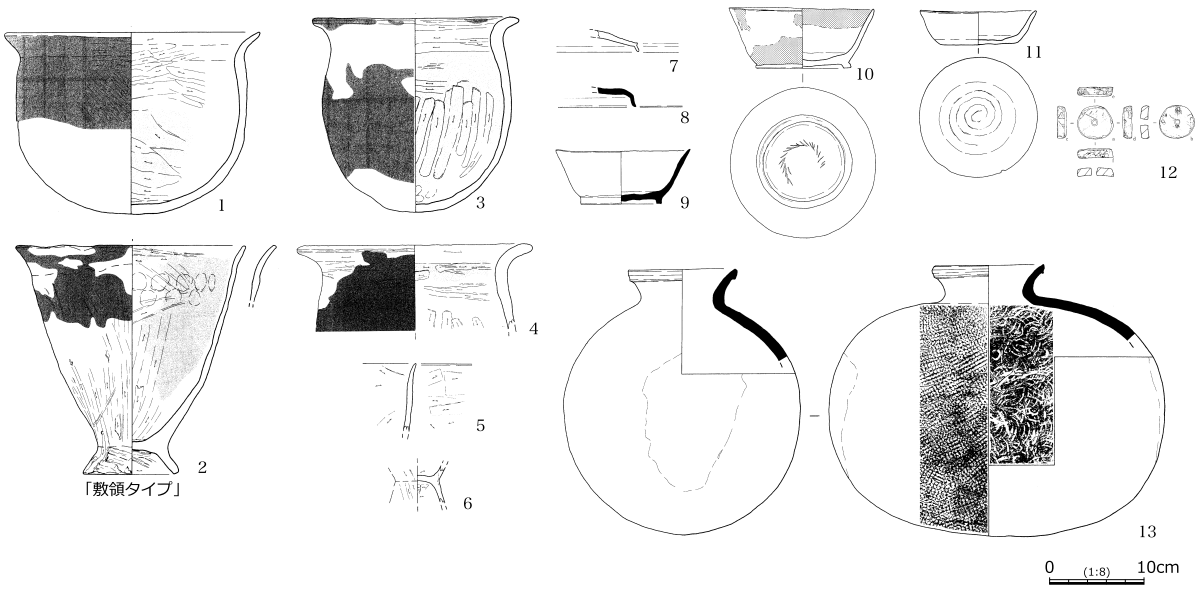
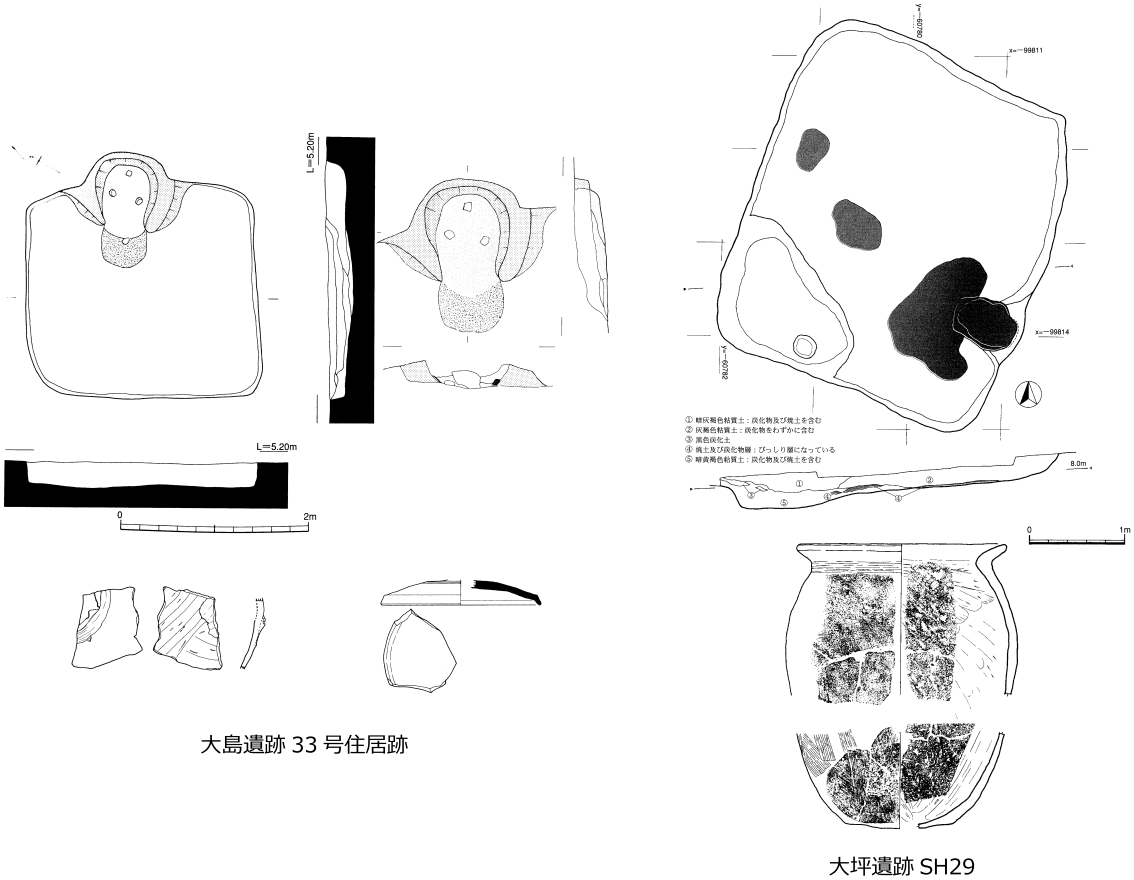


図10　敷領遺跡３号建物跡の遺構と出土遺物

大島遺跡８号住居跡



大島遺跡 33 号住居跡

大坪遺跡 SH29

図11　薩摩大隅におけるカマド付住居跡

には灰が詰まった状態で、カマド焚き口では炭化物がまとまった状態でみられており、噴火当時までこの建物は機能していたと考えられる。これまで、薩摩・大隅における造り付けカマドの検出例は、薩摩川内市大島遺跡８号・33号住居、出水市大坪遺跡SH29のみであり（上床2015）、いずれも壁につくタイプである（図11）。そのため、敷領遺跡の建物中央で独立し、煙道をもたないタイプのカマドがどこからの影響を受けて作られたかは今後検討する必要がある。

また、カマドの東壁には横転した状態で、成川式土器の甕が出土している。この甕の形態は笹貫式新段階の甕と異なり、口縁部が内湾せず頸部から若干外反する形態である。また、突帯などの装飾はつかない。器壁は胴部で２㎜～３㎜と薄く、先述した橋牟礼川遺跡２号住居から出土した甕の器壁が５㎜～６㎜であることを考えると薄手の作りである。この成川式土器は、床面直上に倒れた状態であり、器の

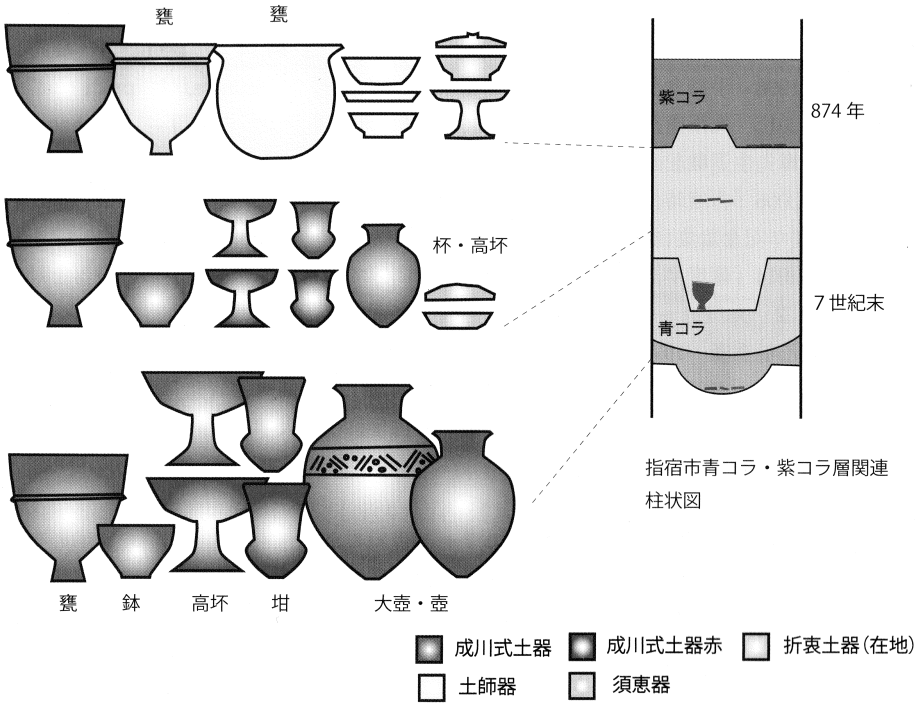


図12　指宿地域における成川式土器最終段階の土器相（中村2015より引用）

内部には開聞岳噴火に伴う２次堆積物が堆積していることから、カマドに設置された土師器甕同様、９世紀後半の年代が想定される。この甕は笹貫式新段階の甕とは形態的な類似性や共通点が少なく、型式学的な連続性は希薄である。現段階では、この甕を「敷領タイプ」として位置づけたい。敷領タイプの特徴として、①脚台を有する、②器壁が薄い、③口縁部形態はゆるやかに外反する、④突帯などの装飾は施されない等があげられる。その他、建物内部からは、須恵器杯、土師器杯、墨書土器、須恵器横瓶などが出土しており、当時の食器構成を知る上で非常に良好な一括資料と言える。

また、敷領遺跡３号建物跡で重要な点は、（A）九州南部で初めて成川式土器の甕と土師器甕が共伴して出土したこと、（B）平田信芳が指摘した成川式土器の下限（台付甕の消失）は、丸底の釜形土器とカマドの出現以降と考えられてきたが（平田1979）、カマドが受容・定着しても脚台付きの甕を使用していたこと、である。この調査によって、成川式土器の下限は（指宿地域において）９世紀後半まで下ることが確実となった（図12）。

２．薩摩・大隅における８世紀代の土師器編年

成川式土器が（指宿地域において）９世紀後半まで存続することが明らかになったことから、古代に位置づけられる土師器がいつから、どのように普及するかが課題となる。九州南部では大宝２年（702年）に薩摩国、和銅６年（713年）に大隅国が日向国から分かれて建国されており、８世紀初頭頃から律令制が普及し始めたと考えられる。

しかし、『続日本紀』和銅７年（714年）三月壬寅条に「隼人昏荒、野心未習憲法。因移豊前国民二百戸、令相勧導也。」とあり、薩摩・大隅両国建国時において律令制の導入は順調ではなかったと考えられる。この移民については、大隅国桑原郡に大原・大分・豊国・答西・稲積・広西・桑善・仲川の８郷が記されていることから（図２）、大分は豊後国大分郡からの移民と考えられるため、豊前国だけでなく豊後国からも移民が行われたことがわかっている（永山2011）。また、この移民政策は大隅国だけでなく薩摩国

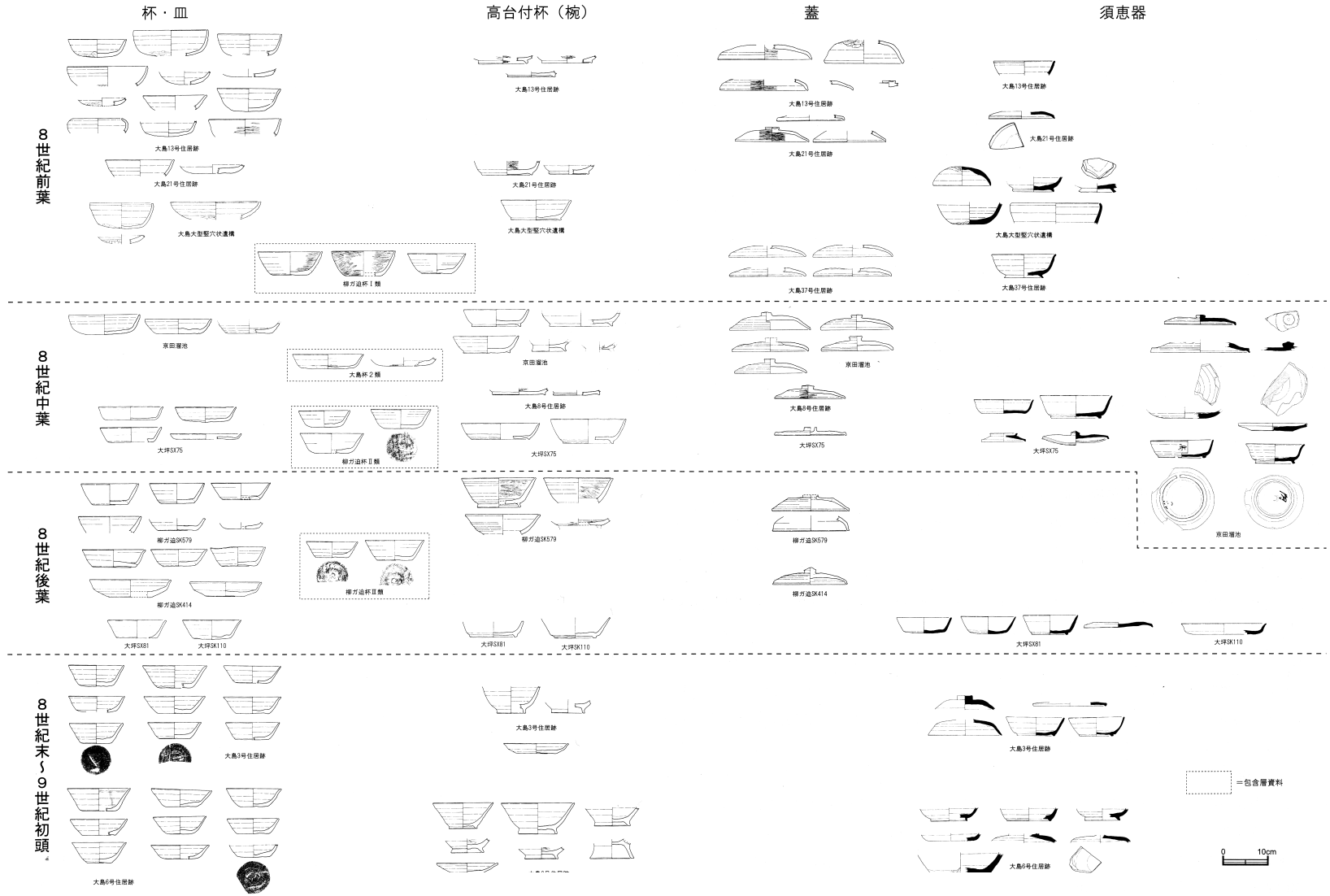
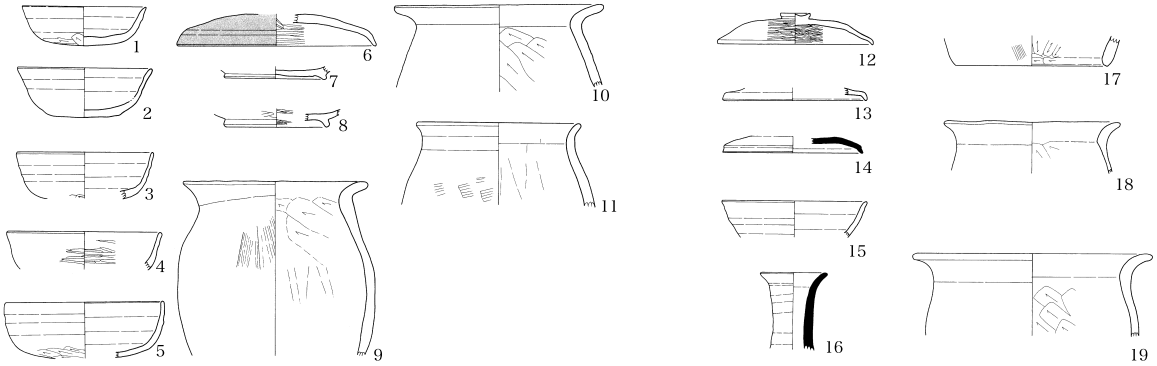
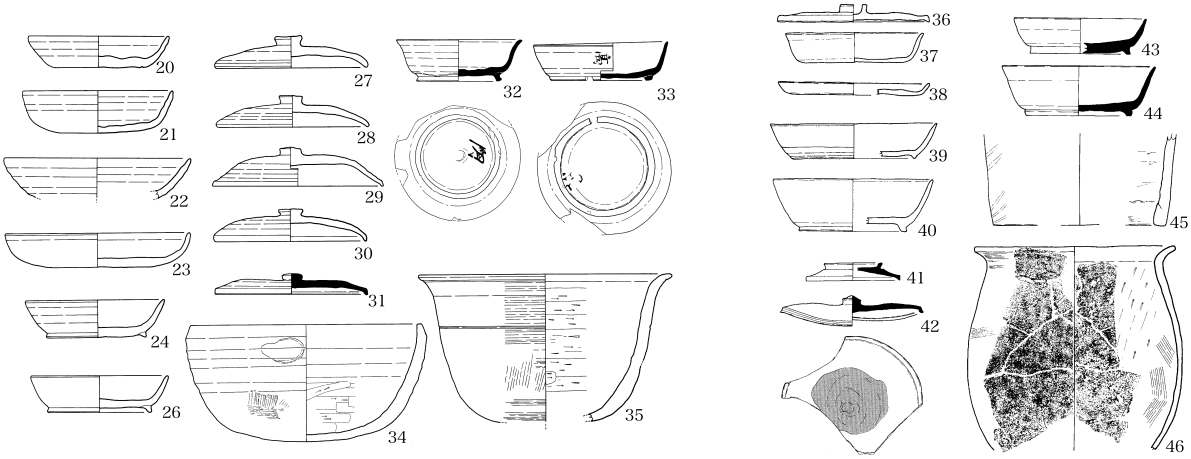


図13　薩摩・大隅国における8世紀の土師器編年（深野2012より引用）



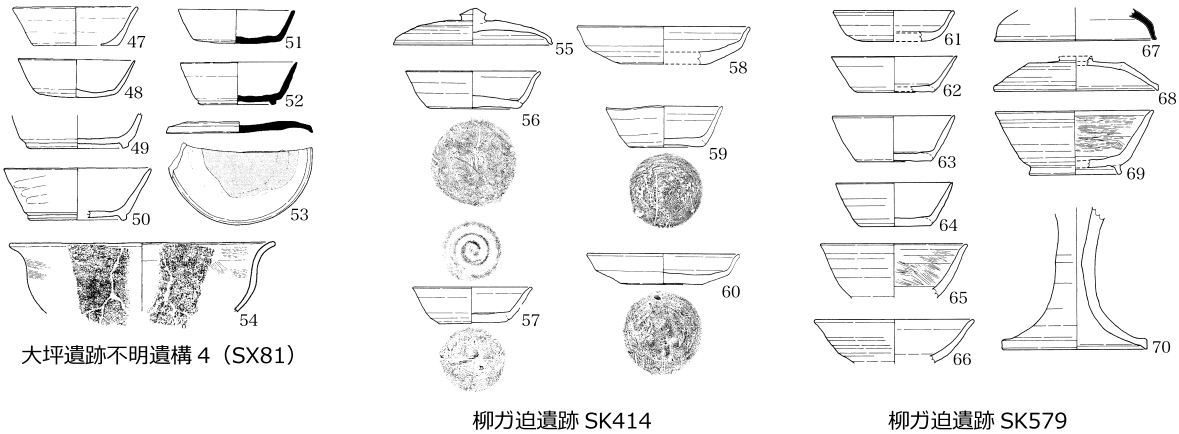
大島遺跡 13 号住居　　大島遺跡 21 号住居

図14　深野編年１期の土器（８世紀前葉）



京田遺跡溜め池状遺構　　大坪遺跡不明遺構３（SX75）

図15　深野編年２期の土器（８世紀中葉）

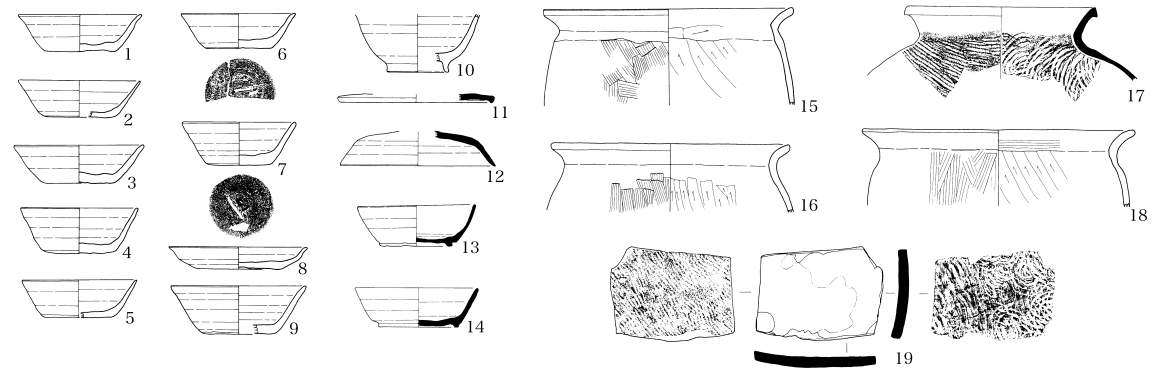


大坪遺跡不明遺構４（SX81）　　柳ガ迫遺跡 SK414　　柳ガ迫遺跡 SK579

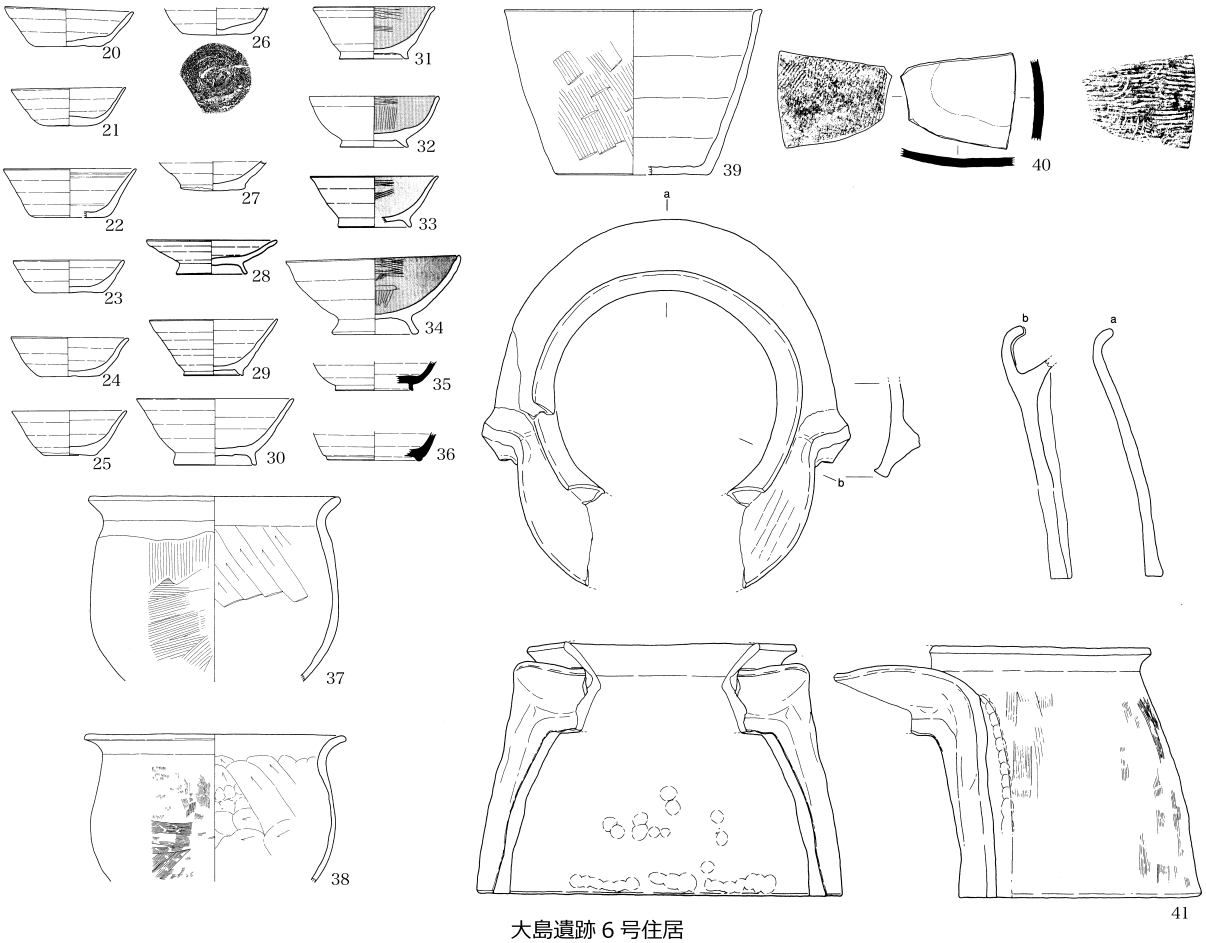
図16　深野編年３期の土器（８世紀後葉）

でも実施されている。薩摩国高城郡には、合志・飽田・鬱木・宇土・新多・託万の６郷があるが、このうち合志・飽田・宇土・託万の４郷の郷名が肥後国の郷名に一致していることから、肥後国からの移民が想定されている（永山2009）。大隅国桑原郡、薩摩国高城郡ともに国府所在郡であることが共通しており、国府設置を目的として他郡よりも重点的に律令化が推進されたと考えられている（深野2012）。

薩摩・大隅国の古代土師器については、中村和美の分類（中村1994，1997）や松田朝由の高篠遺跡の出土土器をもとにした編年（松田2004）が示されている。最近では、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う



大島遺跡３号住居



大島遺跡６号住居

図17　深野編年４期の土器（８世紀末～９世紀初頭）

調査により、薩摩川内市大島遺跡（宮田ほか編2005）、京田遺跡（川口ほか編2005）、出水市大坪遺跡（東ほか編2005）において８世紀代の良好な資料が報告されている。なかでも大島遺跡、大坪遺跡で鹿児島県初となる造り付けカマド住居が検出されたことは重要である。九州南部において造り付けカマドは古墳時代から存在しておらず、脚台をもつ成川式土器文化の中ではその受容は拒否されていると考えられてきた（杉井2004）。そのため、大島遺跡や大坪遺跡のカマド付住居の存在というものは、文献に記載のある移民政策を考古学的に裏付ける資料の一つと考えられている（宮田2005, 永山2009）。対して川口雅之は、大島遺跡において造り付けカマドが検出された住居跡が23基中２基と少ないこと、古墳時代後期と古代の土坑墓が近接して検出されており、古墳時代以来の墓域を継続していることから、この遺跡を形成

した集団の主体は在地の人々であった可能性も指摘している（川口2006）。

また、大隅国桑原郡内における発掘調査も進展しており、姶良市柳ガ迫遺跡、城ヶ崎遺跡、外園遺跡を総称する春花地区遺跡群が確認されている（深野編2011・2012）。なかでも城ヶ崎遺跡では路面幅3.7 ～ 4.7m、道路幅5.9 ～ 6.6mの側溝を備えた道路上遺構を検出し、８世紀末～９世紀前半に位置づけられる土師器や越州窯系青磁碗や石製腰帯具、フイゴの羽口なども出土していることから、薩摩国府と大隅国府をつなぐ古代駅路の存在が推定されている。深野信之は柳ガ迫遺跡の出土土器をもとにして、薩摩国府周辺の資料も加味して分類･編年案を提示している(図13)。この編年が構築されたことによって薩摩･大隅国の８世紀代の土師器について、①薩摩・大隅国の土師器は８世紀前葉段階から回転台成形により製作されている、②８世紀代の杯・高台付杯・蓋には、回転台成形の後にヘラミガキが加えれるものが存在する、③杯の器形は、丸みを持つ深手のものから須恵器を模倣した箱形のものへ移行する、④杯の底部外面調整は、８世紀前葉は手持ちヘラケズリが主体で、中葉には回転ヘラケズリ・不定方向のナデが加わる。後葉には手持ちヘラケズリはなくなり、回転ヘラケズリ・不定方向のナデで調整される。８世紀末～９世紀初頭では調整の意識は継続するものの、ヘラ切り痕を完全に消せない資料が増える、といった特徴が整理された（深野2012）。

深野編年が構築されたことにより、薩摩・大隅国の国府が所在する郡において８世紀前半以降、律令制期の土師器へ転換していることが確認された。中村直子は、国府周辺における土器様式の変化について、地域的・時間的な差異を持ちながら、律令制がいち早く普及した薩摩・大隅国府周辺では、土器様式の変化が早かったと指摘している（中村2008）。この土器様式転換の背景には、移民政策や律令制によるヒト・モノ・情報の流入量に大きな地域差があったことが要因と考えられる。一方で、指宿地域では律令的な食膳具を様式中に取り込みながらも、煮炊具は土師器甕と成川式土器の甕が併用されている。この背景については、今後の課題としたい。

３．九州南部における須恵器生産

薩摩・大隅における須恵器窯跡は、薩摩川内市鶴峯窯跡、伊佐市岡野窯跡群、南さつま市中岳山麓窯跡群が知られている。本論では、近年発掘調査が進められている九州南部最大の規模をもつ中岳山麓窯跡群について説明する。

中岳山麓窯跡群では、1984年に上村俊雄を団長とする鹿児島大学考古学研究室によって荒平第１支群の地形測量調査が実施された（上村1984）。この測量調査では、荒平第１支群において５基の窯跡が確認されている。本支群の特徴として、①半地下式構造の無段登窯であること、②スサ入り粘土塊を土器台として使用していること、③スサ入り粘土の支柱を用いていること、④特定の器種を生産していること、⑤重ね焼きを行っていること、⑥瓶形に近い広口形式の器形的特徴、叩きの種類などから９世紀代から10世紀はじめごろに比定できること、などが指摘された（上村ibid.：p.203）。

その後、荒平第２支群、嶽山第１･第２支群、テンド堀支群を含めた採集資料が報告されている（上村･坪根1985）。本論のなかでは、新出資料をふくめた中岳山麓窯跡群の生産品の内容や開窯の技術系譜が整理されている。その特徴として、①粘土焼台があること、②熊本県荒尾市内の窯跡に存在する穿孔須恵器がみられること、③壺の底部外面に同心円タタキがみられること、④胴部につまみを有する須恵器がみられること、⑥壺頸部に＋印の記号が線刻された須恵器がみられること、が示された。とくに、壺の底部同心円タタキや穿孔須恵器などの製作技法が、熊本県荒尾市に所在する荒尾窯跡群にみられる特徴と類似することから、中岳山麓窯跡群の工人達は肥後から連れてこられ、阿多郡衙の管理下で須恵器製作にあたったことが推定された（上村・坪根idid：p.173）。

中岳窯跡群は古代の地方窯として比較的規模も大きいことから発見当初から注目されてはいたが、ながらく発掘調査は行われこなかった。しかし、2014年２月に荒平第２支群において、中村直子を団長

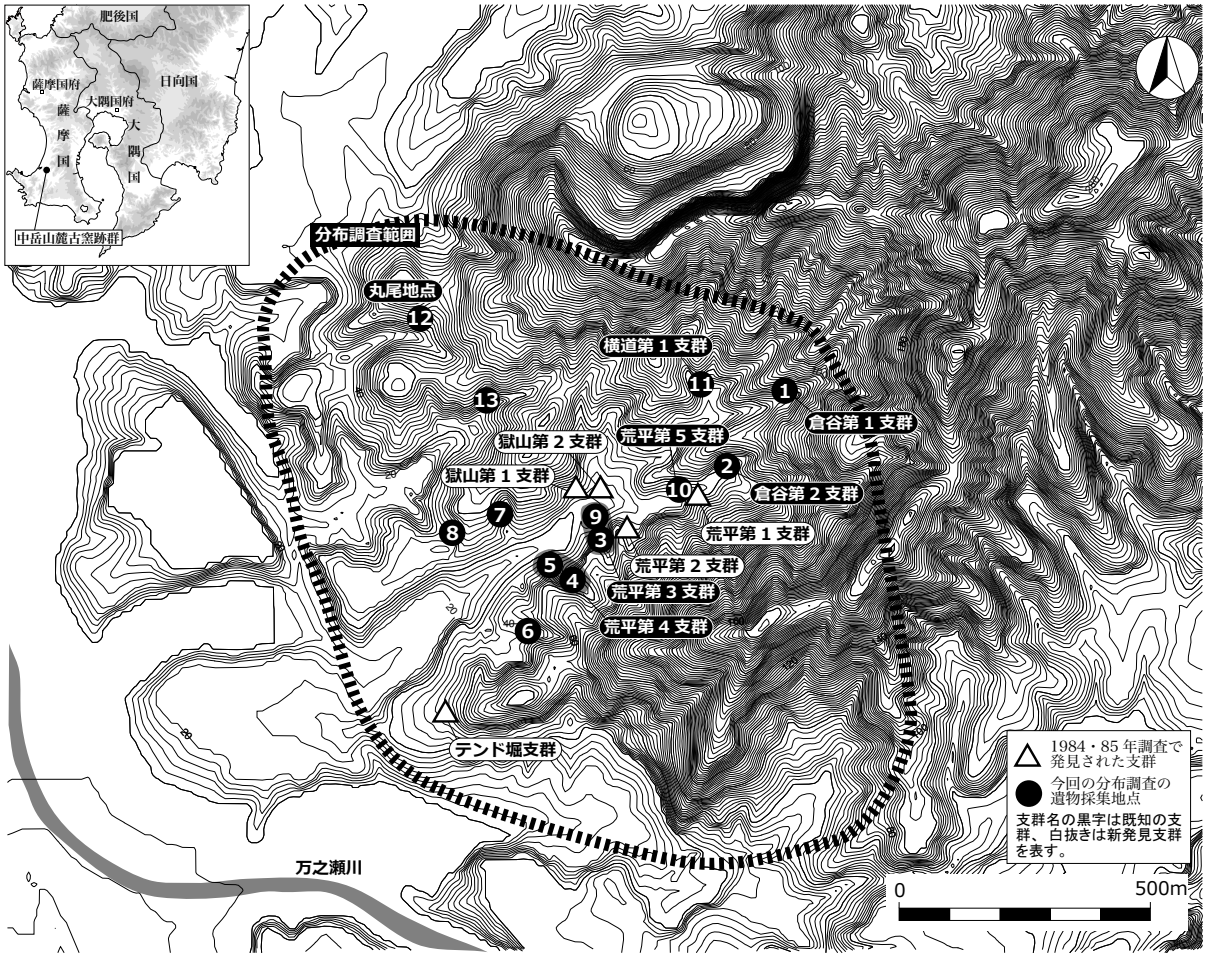


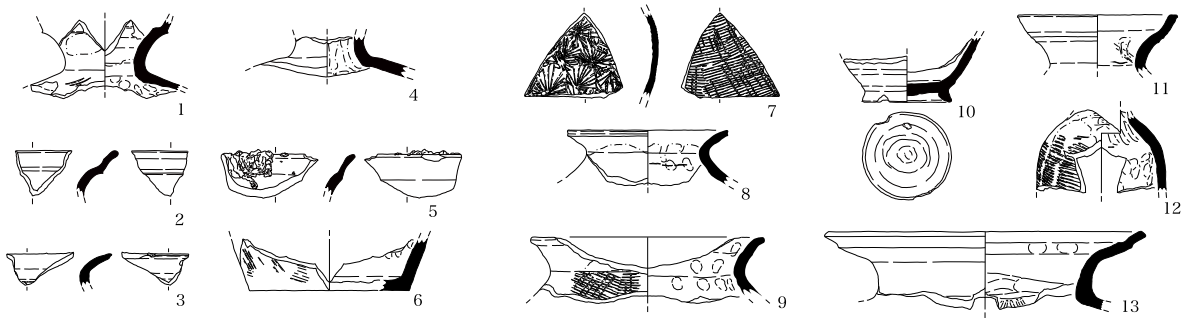
図18　中岳山麓窯跡群の位置と各支群の分布

とする調査チームによって発掘調査が実施された。この調査では荒平第２支群に８ヶ所のトレンチを設定し、西側斜面のFトレンチから窯体が確認された（中村・篠藤編2015）。地表面から岩盤を掘り込み天井を構築している点、天井を支えるための支柱が伴う点から半地下式構造の窯であることが想定されている（大西2015a・b）。

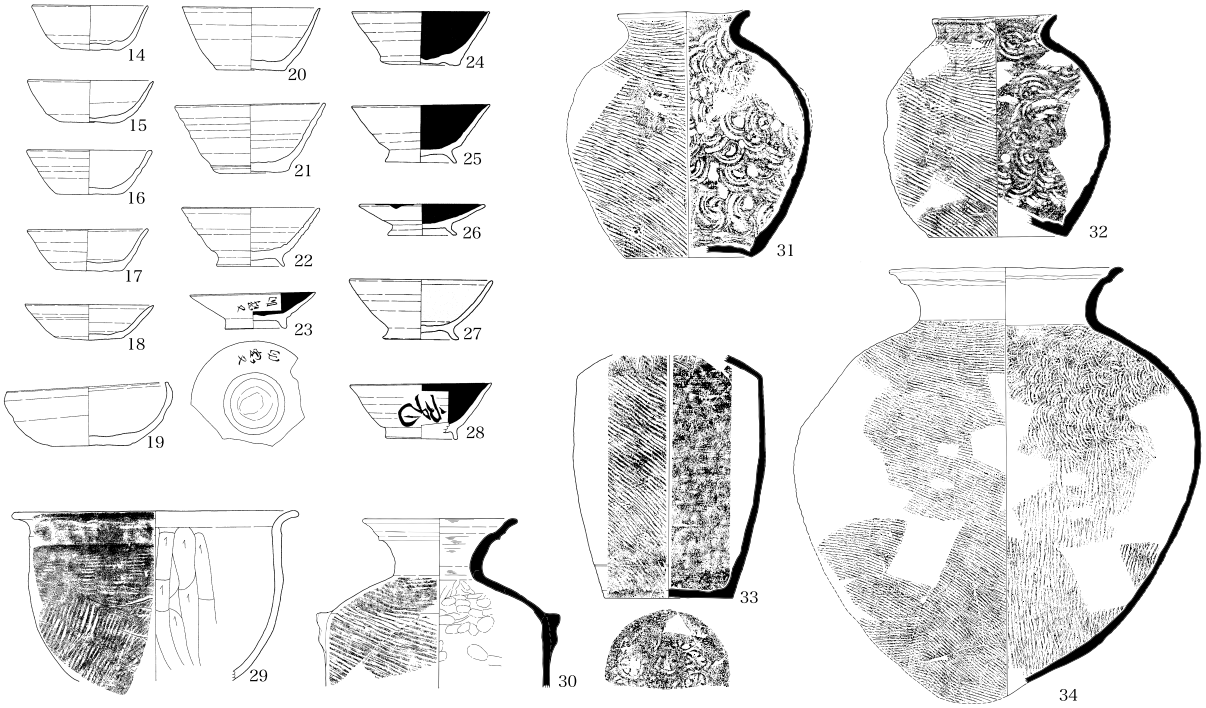
生産地に関する研究は始まったばかりだが、消費地・流通範囲については表採資料をもとに胎土分析が進められている。三辻利一は蛍光Ｘ線分析を用いて、中岳窯跡群（荒平支群、獄山支群）で採集された須恵器と霧島市妻山元遺跡、城山山頂遺跡から出土した須恵器、荒尾窯跡群の須恵器の比較を行っている（三辻1985）。結果、中岳窯跡群と荒尾窯跡群は元素レベルで完全に相互識別できることがあきらかとなった。また、妻山元遺跡の須恵器は中岳窯跡群の領域に、城山山頂遺跡の須恵器は荒尾窯跡群の領域に含まれることがわかった。

池畑耕一らによると、中岳窯跡群で生産された須恵器は、本土側だけで消費されたのではなく、奄美諸島まで供給されていることが指摘されている（池畑ほか2008）。同様に、中村直子・篠藤マリアによる中性子放射化分析（NAA）においても、大隅諸島、奄美諸島まで中岳産の須恵器が流通していることが明らかとなっている（中村ほか2014，篠藤ほか2015）。

南西諸島への流通が指摘される一方、鹿児島県域においても中岳産と考えられる資料が報告されている（中園ほか1987）。中岳山麓周辺では南さつま市芝原遺跡において中岳山麓産と考えられる須恵器が出土している（図18）。県内の流通範囲は、薩摩国府・国分寺遺跡、成岡・西ノ平遺跡、小瀬戸遺跡、妻山



荒平第２支群とその周辺遺物



芝原遺跡８号溝（西）

図19　荒平第２支群出土須恵器と芝原遺跡出土須恵器

元遺跡などであり、日向国の宮崎学園都市遺跡への流通も示唆されている（上村2005）。さらに、東九州・瀬戸内・近畿まで流通していた可能性も指摘されており（網田2003・2012）、その流通範囲の実態についてはさらなる検討が必要と考えられる。

おわりに

以上、九州南部の土器生産について概観してきた。九州南部の８世紀という時期は在地伝統的な成川式土器から古代土師器へ転換する過渡期にあたり、律令制の導入や移民政策など大きな社会変革が起きる時期でもある。また、９世紀に入ると中岳山麓窯跡群において大規模な須恵器生産が始まる。このような状況の中で土器様式が「転換」する国府周辺の地域、指宿地域のように「併存」する地域といった地域差が生まれる背景にはどのような要因が考えられるのか、今後の検討課題としたい。

謝辞

本論を執筆するにあたり、以下の方々にご指導・ご教授をいただきました。心より御礼申し上げます(五十音順、敬称略)。

石田智子、恵島瑛子、鎌田洋昭、鷹野光行、中摩浩太郎、中村直子、新田栄治、
本田道輝、松山初音、山元瞭平、横手伸太郎、與嶺友紀也、渡部徹也、渡辺芳郎

参考文献

網田龍生 2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ－考古学研究室創設30周年記念論文集』龍田考古会 357－386頁

網田龍生 2012「古代の須恵器生産」『荒尾市史通史編』荒尾市史編集委員会 131－142頁

池畑耕一 1980「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会 1－41頁

池畑耕一・堂込秀人・森雄二・黒川忠広・上床真・三辻利一 2008「鹿児島県内遺跡出土の平安時代の須恵器の山地問題」『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 286－287頁

上床真 2015「南部九州における古代のカマドに関する覚え書き」『縄文の森から』第８号 鹿児島県立埋蔵文化財センター 77－84頁

大西智和 2015a「鹿児島県南さつま市中岳山麓窯跡群の窯構造の把握に向けた試み」『Archaeology from the SouthⅢ－本田道輝先生退職記念論文集－』本田道輝先生退職記念事業会 269－278頁

大西智和 2015b「中岳山麓窯跡群の窯構造の推定」『中岳山麓窯跡群の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 49－54頁

乙益重隆 1974「第二節 鉄器・鉄製品」『成川遺跡』吉川弘文館 70－108頁

鎌田浩平 2009「成川式土器の地域編年－薩摩半島側鹿児島湾沿岸とその周辺を対象域として－」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集－』南九州縄文研究会 129－151頁

鎌田浩平 2014「薩摩半島西海岸側の地域編年に向けての基礎作業－甕・壺形土器を対象として－」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会 191－204頁

上村俊雄 1984「鹿児島県荒平須恵器古窯址群発見の意義とその問題点について」『古文化談叢』第14集 九州古文化研究会 187－204頁

上村俊雄・坪根伸也 1985「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯跡群に関する一考察」『古文化談叢』第15集 九州古文化研究会 151－174頁

上村俊雄 2005「中岳山麓古窯跡群」鹿児島県教育委員会編『先史・古代の鹿児島資料編』鹿児島県教育委員会 246頁

河口貞徳 1952「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』第２号 鹿児島県考古学会 3－17頁

河口貞徳・河野治雄・重久十郎 1985「成川弥生式群集墓」『考古学雑誌』第43巻第４号 34－42頁

河口貞徳 1964「南九州地方」小林行雄・杉原壮介編『弥生式土器集成本編１』pp.25－29

川口雅之 2006「薩摩国府推定域とその周辺の様相－近年の調査成果から－」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会 108－117頁

小林行雄 1938「南九州地方及び東九州地方」『彌生式土器集成図録正編解説』東京考古學会 23－33頁

相美伊久雄 2004「「成川式土器」の器種組成について（予察）－杯形土器の様相を中心に－」『縄文の森から』第２号 鹿児島県埋蔵文化財センター 29－36頁

相美伊久雄 2014「南九州東端域における７～８世紀の土器様相－志布志湾北岸域の甕形土器を中心に－」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会 221－238頁

篠藤マリア・鐘ヶ江賢二・中村直子 2015「中岳山麓窯跡群の調査に伴う生産と流通に関する自然科学的研究について」中村直子・篠藤マリア編『中岳山麓窯跡群の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 58－66頁

下山覚 1990「鹿児島県指宿市橋牟礼川遺跡に見る火山災害史と文化変異」『日本考古学協会第56回総会研究会発表要旨』日本考古学協会 15－17頁

下山覚 1992「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第８号 人類史研究会 65－80頁

下山覚 1993「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年的考察－「日本三代実録」貞観16年７月29日条についての考古学的アプローチ－」『古文化談叢』第30集（下） 九州古文化研究会 1179－1193頁

下山覚 1995「考古学からみた隼人の生活－「隼人」問題と展望－」新川登亀男編『西海と南島の生活・文化』名著出版 169－199頁

杉井健 2004「前方後円墳分布圏とその周辺における生活様式伝播の多様性」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会 307－314頁

多々良友博 1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号　鹿児島県考古学会　89－116頁
坪根伸也 1986「成川式土器小考–甕型土器突帯における一試論－」『鹿大史学』第34号　鹿児島大学史学地理学教室　23－40頁
寺師見國 1950「鹿児島縣の彌生式土器」『考古学雑誌』第36巻第１号　40－49頁
寺師見國 1952「鹿児島県の彌生式土器」『鹿児島県考古学会紀要』第１号　鹿児島県考古学会　29－34頁
中園聡・中村直子 1987「鹿児島県隼人町弓削丘出土の須恵器壺について」『鹿大考古学会会報』第５号　鹿児島大学考古学会　6－８頁
中村和美 1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』第10号　149－171頁
中村和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古学会　88－102頁
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号　鹿児島大学法文学部考古学研究室　57－76頁
中村直子 1999「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション－南九州の土器をメディアとして－」『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－』鹿児島大学　63－71頁
中村直子 2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めてコミュニケーションのかたち－ことば・もの・メディア－』鹿児島大学　47－62頁
中村直子 2009「７・８世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一還暦記念論文集－』中巻　南九州縄文研究会　119－128頁
中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究：５世紀から７世紀前半の沖縄伊江島』熊本大学　259－268頁
中村直子 2014「中岳山麓窯跡群に関する研究現状と課題」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会　279－287頁
中村直子 2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』 鹿児島大学総合研究博物館　25－30頁
中村直子 2016「遺跡から見た大隅国成立前後の社会とその変遷」『蘇る大隅国の実像－古代・中世の大隅半島部の歴史－』10－ 13頁
中村直子・Radegund HOFFBAUER・Johannes STERBA・Michael RAITH・篠藤マリア・鐘ヶ江賢二・大西智和 2014「中岳山麓窯跡産須恵器の生産過程と産地同定に関する鉱物学的研究」『日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会　234－235頁
中村直子・篠藤マリア編 2015『中岳山麓窯跡群の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
永山修一 1992「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）501－510頁
永山修一 2009『隼人と古代日本』同成社
永山修一 2011「大隅国桑原郡に関する若干の考察－柳ガ迫遺跡の理解のために－」深野信之編『柳ガ迫遺跡』姶良市埋蔵文化財発掘調査報告書（１） 157－161頁
濱田耕作 1921「薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第6冊』臨川書店　29－48頁
平島勇夫 1977「成川式土器」『つくし』第７号　つくし文化研究所　７－８頁
平田信芳 1978「古墳時代の遺物」『萩原遺跡』姶良町教育委員会　42－94頁
平田信芳 1979「隼人が用いた土器－成川式土器－」『隼人文化』第５号　隼人文化研究会　37－44頁
深野信之 2012「薩摩・大隅国における８世紀の土師器－柳ガ迫遺跡出土土師器の位置づけをめぐって－」『苑原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』苑原刊行会　607－618頁
深野信之 2015「大隅国の古代官道について－姶良市船津・城ヶ崎遺跡を中心に－」『浮かび上がる大隅国の実像－古代・中世の鹿児島湾奥部－』21－30頁
松﨑大嗣 2015「成川式土器と古代土師器の「折衷型」－敷領遺跡十町地点出土の資料を中心に－」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会　205－220頁
松田朝由 2004「土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　387－399頁
宮田栄二 2005「調査のまとめ」『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80） 313－324頁
吉本正典 2006「７世紀の列島南西域－村落の諸相－」『Archaeology from the South』鹿児島大学考古学研究室　161－177頁

第2部

大宰府と古代山城の年代論

特別史跡　大宰府跡・大野城跡・水城跡

第２部　大宰府と古代山城の年代論

第１章　大宰府と古代山城の誕生　赤司　善彦 …… 85
第２章　大宰府造営の年代論　杉原　敏之 …… 97
第３章　日韓古代山城の年代論　向井　一雄 …… 105
第４章　有明海沿岸における古代山城の年代論　矢野　裕介 …… 129
第５章　瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代　南　健太郎 …… 139

第２部では、律令国家形成における古代史像と直結する、大宰府と古代山城の年代論を検討する。第１部「大宰府の器と編年」で議論した内容をふまえ、大宰府と各古代山城の築造年代を示す資料を網羅的に整理した上で、築造の上限年代と下限年代の絞り込みを図る。

なお、第１章～第５章の掲載論考は、いずれも平成29年（2017年）２月18・19日に九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同で開催したシンポジウム『徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生』の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

『徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生』ポスター

第１章

大宰府と古代山城の誕生

赤司　善彦

はじめに

大宰府とは「おおみことももちのつかさ」とも読み、大君の御言（命令）を捧持して地方を支配する行政官の役所という意味である。大宰府の組織や役割が確立したのは７世紀末頃とされ、８世紀初頭の大宝律令施行後に本格的に整備された。これを律令制大宰府とも称し、古代を通じて西海道諸国を統括し、外交と対外防衛の前線を担った。この律令制大宰府の官司は現在の太宰府市を中心に、約９百ヘクタールの広大な面積が特別史跡や史跡として保存されている。この大宰府が展開された地域を、便宜的に大宰府地域と呼ぶことにする。ここは博多湾沿岸より10㎞ほど南に入った地点である。まわりを山並みによって囲まれた盆地状の地形となっている。

今回のテーマのもう１つの柱である古代山城は、白村江敗戦後この大宰府地域を護るように築城されているのが特徴的である。大宰府地域の盆地状をなす平地部分には福岡平野と南に広がる筑後平野を結んだ、幅1.2 ～ 1.5㎞のくびれのような低地が形成されている。このくびれ部分を一文字に塞ぐようにして長大な水城が築かれ、その東側の四王寺山には大野城が、盆地状地形の真南には基肄城が位置する。

これら７世紀後半に築城された古代山城によって囲まれた大宰府地域とは、８世紀以降に内外の関門を管轄し、さらには西海道を統轄した大宰府（政庁Ⅱ期）が造営された場所である。課題は、大宰府政庁跡下層で確認された７世紀後半の官衙遺構（政庁Ⅰ期）の位置づけである。史料に見える筑紫大宰との関わりや、古代山城の成立とは密接なつながりがある。また、白村江敗戦に至る百済救援のために筑紫に行幸した斉明天皇の朝倉橘朝倉橘広庭宮と筑紫大宰はどのような関係にあったのかも考えたい。

ここでは近年の新しい発掘調査による知見を交えて大宰府と古代山城の成立から見えてくるものについて問題提起したい。

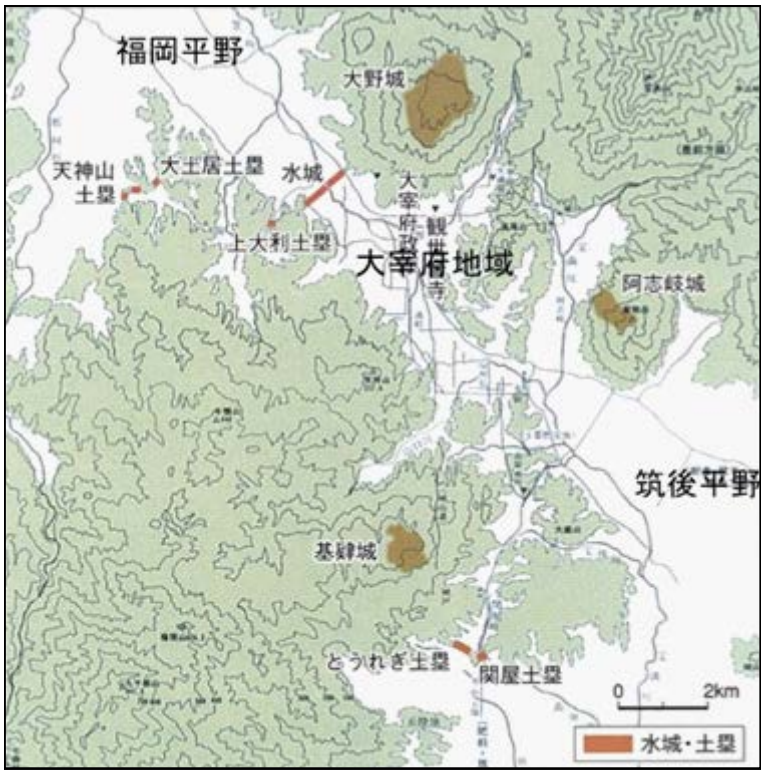


図１　大宰府地域周辺古代山城配置図

１．白村江敗戦と筑紫大宰

今から1300年前の７世紀は、朝鮮半島の百済・新羅・高句麗による領土争いが激化した時代である。三国のみならず中国の隋・唐もこの抗争に介入し東アジアの緊張が高まった。百済との長年にわたる友好関係にあった倭国も、決して対岸の火事では済まず、その渦中に投げ込まれることになる。そのきっかけとなった大事件は、660年の百済滅亡であ

る。

百済再興運動の支援を求められた倭国は、直ちに応諾し、天皇は全朝廷を引き連れて筑紫に行幸、併せて支援軍の派遣を決定した。ヤマト王権は、中核をなす中央豪族を主体に地方豪族との軍勢の派兵を開始した。663年、朝鮮半島南西部の白村江で唐の水軍と対峙した。兵力や作戦など全てにおいてその差は歴然であった。統制の取れた唐軍の前で、豪族軍の編成による倭国軍は壊滅したのであった。

この敗戦によってヤマト王権は、旧来の国造軍に頼ることなく統一した軍制や徴兵基盤を整えるなどのあらたな国家体制を構築する必要に迫られた。また併せて防御態勢を整備することも大きな課題であった。こうして筑紫と呼ばれた九州北部は、防衛の最前線に立たされることとなった。

筑紫は白村江敗戦で最も疲弊していただけでなく、筑紫磐井の乱の例を出すまでもなく、ヤマト王権の在地勢力への不信感も根強い地域であったことから最前線を担った防人は東日本で徴兵された。701年の大宝律令によって律令制が整備される中で、こうした筑紫の地域支配を担ったのが大宰府と呼ばれた官司である。大宰府は､西海道の内政や出入国管理などの外交のみならず軍事機能も付与されていた。それは古代山城の大野城・基肄城・水城という７世紀後半に築造された軍事施設によって護られた、いわば大本営としての役割が期待されたからである。

このように筑紫の古代山城と大宰府は、密接な関係が認められるが、これまでの文献史学では、663年の白村江での敗戦後にとられた天智朝の防衛戦略の一環として、博多湾沿岸から大宰府地域への筑紫大宰の移駐と、これを母体にして大宰府が成立したと位置づけられ、考古学的な調査もこうした通説に従ってきた。しかし、その前提となる筑紫大宰が掌握していた地域支配や軍事権、外交権の実態は明らかではない。これまでの議論は、大宝律令に規定された大宰府に対するイメージが前提となって、前代の筑紫大宰への史的接近が試みられてきたと言える。

白村江以後の緊張関係（天智朝期）　白村江敗戦後の倭国と東アジア地域の外交関係は、664年より唐使の来日、668年にも新羅との使節往来が再開されるなど、高句麗との間も含めて実際には活発な外交が展開されていた。一見平和へのプロセスのようでもあるが、実際には唐の高句麗征伐、668年の高句麗滅亡、670年の唐と新羅の旧百済領をめぐる戦争で、唐と新羅は連合せずに対立関係にあり、東アジア情勢はさらに混迷を深めていた。

図２　白村江海戦への道

敗戦後に想定された唐と新羅の倭国への直接の侵攻という最悪の事態は当面回避されたようにみえるが、天智朝は唐・新羅の侵攻を想定した防衛体制の強化に乗り出していることから、戦後ではなく戦争中という認識だったと思われる。

敗戦の翌年に、朝鮮半島に通じる対馬・壱岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防と烽を配置。まずは海浜防備と通信手段を整えた。同じ年に水城を築造し、翌年には瀬戸内への関門である長門国と筑紫に大野城･椽（基肄）城を築城している。そして２年後に畿内の宮都防衛の要地である生駒山系に高安城、そして瀬戸内の海上交通の要衝である四国の讃岐に屋嶋城、さらには領海の最前線である対馬に金田城

を築いている。戦略的には、律令官制として成立することとなる大宰府の周辺（大宰府地域）に水城・大野城・基肄城を配置し、ここに前線での集中防御態勢を構築。次に、金田城・屋嶋城・高安城などの多重の防御線を構えたものと推察できる。

ところで防人は主に対馬・壱岐・筑紫の沿岸部で国境警備のために配備された兵士で、８世紀中頃以降に西海道が負担するまで、東国の出身者を中心に３千人ほどが徴発されていた。その配備地は、「防」という施設で、「さきもり」の読みからして岬などの沿岸部とみられる。佐賀県唐津市中原遺跡出土の「甲斐国」・「戍」銘木簡は、防人が肥前国の沿岸にも配置されていたことを示すだけでなく、８世紀末に、東国防人廃止後も現地に留まっていた東国防人の実在を示す資料である。これら防人が配備された「防」や「戍」の遺跡はまだ明らかではないが、内陸の古代山城だけではなく、中世の元寇防塁にみられるように海辺での防衛ラインが想定されているのかは不明である。

筑紫大宰府の成立と緊張関係（天武・持統朝期）　672年、郭務悰の対新羅戦への出兵要請に対して、天智朝（近江朝廷）は大量の武器や武具を供与するなど、親唐寄りの姿勢へと変化する。直後に勃発した壬申の乱を経て皇位を手にした天武朝は、新羅との関係を強化する。朝鮮半島では、670年に始まった羅唐戦争が676年に新羅の勝利に終わり、翌年、唐は朝鮮半島から撤退した。こうして新羅が朝鮮半島の三国統一を果たしたことで、40数年に及ぶ朝鮮半島の争乱は終わった。倭国と唐との往来は全くおこなわれず、新羅からはほぼ毎年、倭国からは２・３年毎に使節の交流が行われるなど、大陸の制度や文化は、新羅を通じて摂取された。

天武朝後半以降には、東アジア情勢も落ち着きを見せたことから、律令制による地方支配の強化に比重が置かれるようになったとみられる。

ところで、朝鮮半島との間の国境が意識され、領土を護ることが重視された。その関門の府が後の律令制の大宰府である。大宰については筑紫大宰の官職名が推古朝期には出現するが、実在性は定かでない。実質的には天智朝期以降に徐々に整備されたとみられる。

『日本書紀』・『続日本紀』の用例の変化

1	推古朝期	筑紫大宰
2	大化～斉明	筑紫大宰帥
3	天智朝期	筑紫率（帥）
4	天武～持統朝期	筑紫大宰
5	持統～文武朝期	筑紫大宰（帥・率）
6	文武期	筑紫総領
7	大宝～	大宰帥

筑紫大宰について　筑紫大宰に関しては、609年の『日本書紀』の記事が初見である。さらに宣化元年(536)に外国使節が去来する関門である筑紫にあって、(飢饉等の）非常に備えて那津官家を設置したとする記事も重要である。通説的理解ではこの那津官家が大宰府の起源と考えられているからである。それは翌二年の記事を関連事項と捉えられているからである。その内容は、新羅による任那侵略に際して、大連大伴金村に任那救援を命じて、その子の磐と狭手彦を筑紫に派遣したとされ、狭手彦は渡海したが、磐はその地に留まり国政を執って三韓に備えたと記されている。こうした半島情勢を睨んだ筑紫の地域支配が、おそらくは那津官家で執行されたとみられることから、軍事・外交を視野に置いた大宰府の内政機能と通底すると考えられている。

このように大宰府の前身官衙を那津官家に位置付け、その長官は筑紫大宰と考えられている。筑紫大宰の名称は７世紀を通じて登場する。頻繁に登場するのは白村江敗戦以後のことである。筑紫大宰に対する外国使節の応接機能や防衛機能の強化と考えられる。また、大宰という地方官の制度は筑紫だけでなく７世紀末頃には、吉備・周防・伊予にも設置されていた。これが大宝律令施行後は、筑紫大宰府のみ存続したと考えられる。

さて、筑紫大宰は官司あるいは職名であろうが、後には筑紫総領とも呼称される。この総領は天武・持統朝期を通じて、筑紫以外に東国や吉備・周防・伊予・播磨の地方にも登場する。筑紫とともに総領と大宰が設置されたのは吉備である。唐や朝鮮半島との外交では、第一線の筑紫だけでなく、畿内から筑紫へと通じる瀬戸内地域の安定確保が重要であったことはまちがいない。筑紫・吉備大宰は広域行政だけでなく軍事的な権限も付与されていたと考えられている。

この吉備大宰・吉備・周防・伊予総領が置かれた地域と古代山城の関わりも近年クローズアップされてきた。このうち岡山県鬼ノ城山城は発掘調査の結果、７世紀後半～８世紀初頭の存続が確実となってきた。また、鬼ノ城で完成した角柱の掘立柱式門礎が同じ瀬戸内の山口県石城山城・香川県讃岐城山城・兵庫県播磨城山城でも出土し、寸法も一致するなど城門構造で設計と築城時期が関連していることを示唆する。

一方で九州北部の神籠石式山城もその多くが立地条件や城壁構造などで一致し、その配置が大宰府を中心にして四方に延びる官道沿いに配置されていることは、筑紫大宰との関連性が窺われる。この吉備と筑紫の大宰そして総領制は、律令制の国司制度が整備される中で廃止され、筑紫大宰のみが律令制の大宰府へと引き継がれていった。古代山城の役割も、築城当初の対外的な緊張関係だけでなく、地域支配や律令的な支配としての拠点形成も考慮に入れる必要がある。

２．大宰府政庁の構造と変遷

次に大宰府の成立をこれまでの調査成果から考えてみたい。大宰府諸官衙の中枢である大宰府政庁跡の発掘調査は、1968 年に開始された。これまでの数次にわたる調査の結果、政庁の規模と構造が明らかになった。調査開始前に地表に現れていた礎石の建物は、10世紀中頃に建て替えられていたこと、また奈良時代以前には掘立柱建物が先行して存在することなどが明らかとなった。その結果、政庁の建物群はⅠ～Ⅲ期の時期区分がなされ、Ⅰ期は７世紀後半を中心とする掘立柱建物、Ⅱ期は８世紀前半の朝堂院様式の礎石建物、Ⅲ期はⅡ期を踏襲した建物配置の礎石建物であることが理解されるようになった。

さて1998年からは政庁正殿跡の発掘調査が実施された。調査は正殿基壇とその周囲を対象に実施され、基壇の東半分のみ掘り下げて本来の基壇を露出させた。その結果、正殿の基壇もⅡ期のプランをそのままにⅢ期には積土が嵩上げされ、礎石もこれに伴って据え直されていたことが判明した。また基壇の周辺からは政庁Ⅱ期以前の掘立柱建物や溝状遺構、柵を検出した。これらは重複関係や層位から大きく３つの小期に分けることができる。ここでは便宜的にⅠ－１～３の小期と呼ぶことにする。

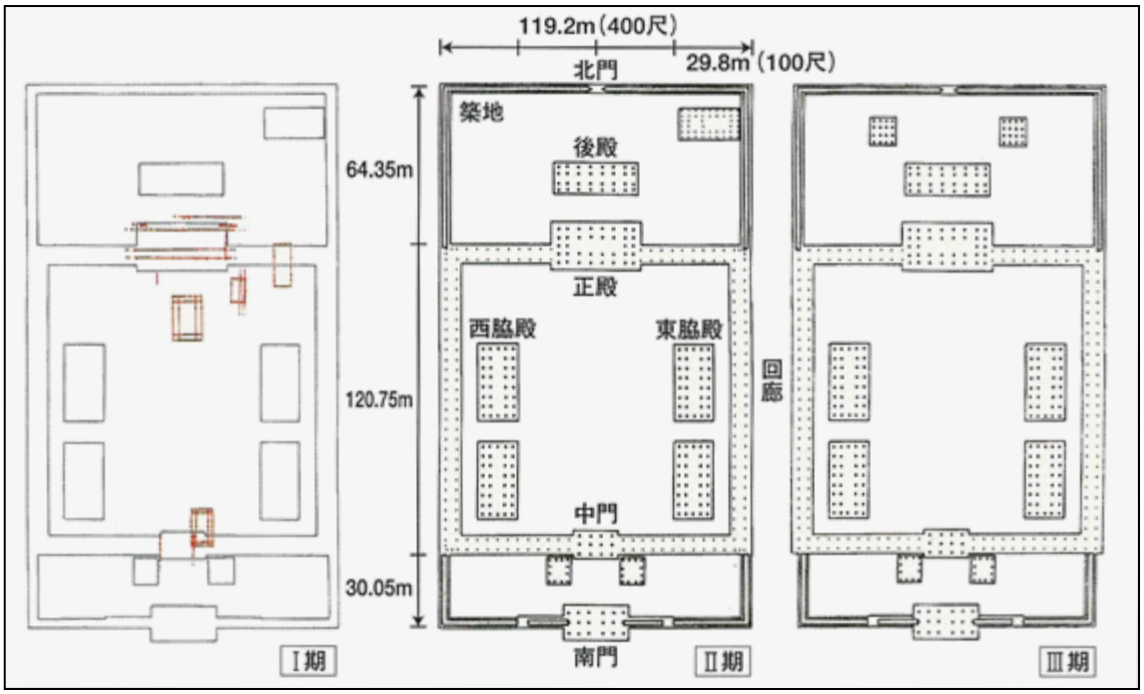


図３　大宰府政庁変遷図

注目すべきことはすべての建物と柵・溝状遺構が真北の方位線に拠って設計され、しかも整然とした配置を予測させることである。ここでは小時期ごとに調査成果のうち注目される点をいくつか取り上げてみる。

図４のように、Ⅰ－１期の遺構は、Ⅱ期政庁の北門にあたる位置から、柵と建物と考えられる遺構が検出されている。正殿地区では調査区の北側を東西に伸びる柵と南北棟建物２棟がある。この柵SA111の柱穴は１ｍ以上と規模は大きいが柱間寸法は1.8 ～ 2.0ｍとばらつきがある。なにより柱間寸法が短いことが特徴的である。この東西方向の柵と関連が強いのが、中門地区で検出した柵SA044である。同じく真北方位で東西方向に伸びる。出土土器は６世紀後半の返りのある須恵器蓋が１点出土している。Ⅰ－２期の柵SA045と重複し先行する。柱間寸法がSA111と同じく1.8 ～ 2.0ｍとばらつきがある。このことから東西に伸びる南北の柵は同時期に存続したとみてよい。

次にⅠ－２期の遺構群では、Ⅱ期正殿基壇と重複するような大型の東西棟とその南側前面でも同時に存在した大型南北棟を検出している。ただし、正殿下層の東西棟は上部の礎石を避けながら、しかも基壇の破壊を最小限度に留めた調査であったことから確実な平面プランを明らかにはできなかった。図５に示したように南側に庇がつくことは間違いないが北側柱列には柵が連続して延びる変則的な長舎構造が推定可能である。また、前面の南北棟は５間×７間の４面に庇を有した大型建物である。

一般的に四面庇構造の建物は中心的な建物に採用されることが多いが、柱の痕跡からすると用材は25㎝前後とそれほど立派なものではなく、また柱間も９尺（270㎝）と長尺が採用されていないため、中心建物とするには躊躇せざるをえない。Ⅰ－３期は基壇の整地を行った段階で建てられた総柱建物を主体とする。柱間寸法にばらつきがあり倉庫というよりは板張り構造の建物ではないかと推測できる。Ⅱ期政庁の造営に伴う仮説的な建物と考えている。

以上が正殿跡で得られた政庁Ⅰ期の遺構群である。それぞれの存続時期は、出土土器からⅠ－１期が７世紀第三４半期～第四４半期、Ⅰ－２期が７世紀第四４半期～８世紀第一４半期、Ⅰ－３期が８世紀第一４半期の存続が考えられる。

３．政庁Ⅰ－２期の施設と筑紫の新城

政庁Ⅰ期の建物群の中でも、とりわけ注目されるのが政庁Ⅰ－２期である。特に建物を囲む外郭施設の存在である。これは礎石建物となったⅡ期政庁域とそれほど変化のない範囲をすでにⅠ期段階から占地していたことになる。言い換えるとⅡ期政庁は、政庁Ⅰ－２期の施設の配置計画を基本的にはほぼそのまま踏襲して造営されたものと理解できる。現段階ではⅡ期政庁のように正殿前面に脇殿を配置し、内庭部を設け、そこでの儀礼空間を重視した配置ではないようである。しかし、柵や区画溝の存在はすでに周辺とは独立した一郭が形成されていたことを物語っている。正殿下層の東西棟がⅡ期の前身にあたる正殿もしくは主要殿舎であった可能性否定されないように思われる。

ところで、この政庁Ⅰ－２期の施設造営は、持統３年（689）６月の飛鳥浄御原令施行と翌年の「大宰・国司皆選任」によって筑紫大宰の官制が飛躍的に整備されたことと関連している。小田富士雄氏も「新令によるこれらの動向は筑紫大宰府の正式発足とみるべき」として、この政庁Ⅰ－２期を政庁Ⅱ期の整備へと繋がる大きな画期としてとらえられている。まさしく政庁Ⅰ－２期施設は政庁Ⅱ期の前身官衙としても重要な意味を持っていたとみられる。なにより制度の整備がなされたということは組織もこれに付随するため、前提に建物等のハードの整備が終わったかもしくは同時進行されたと考えられる。

政庁Ⅰ－２期施設と周辺整備は、持統３年の「遣直広参石上朝臣麻呂・直広肆石川朝臣虫名等於筑紫給送位記、監新城」の解釈とも関わる。飛鳥浄御原令制によって位階制度が導入され、その最初の授与が筑紫の官人たちであった。この筑紫の新城については新規の都城とする考え方がある。

都城はその概念からすれば農村地帯とは全く異なる景観が成立していなければならない。道路や宅地

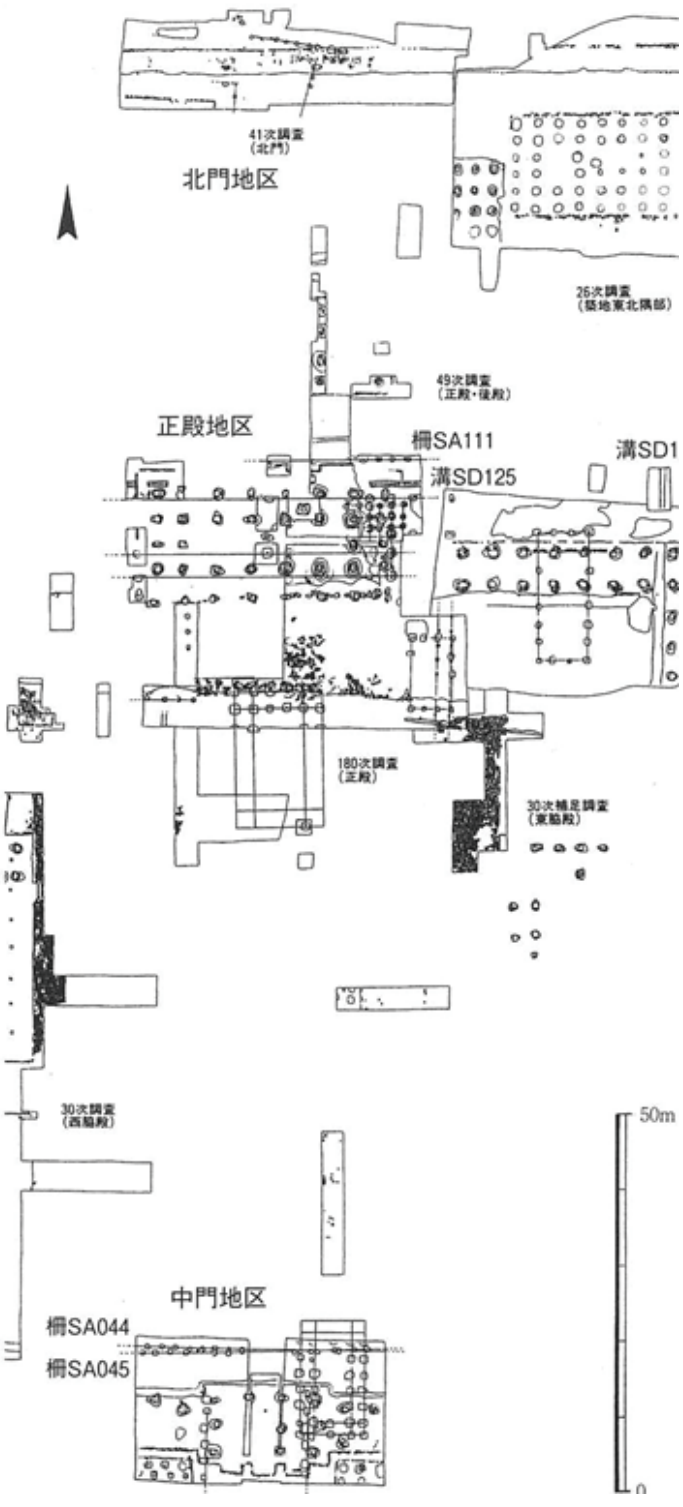


図４　大宰府政庁発掘調査図

割りなどの都市計画である条坊の施行が条件となる。持統三年の位階を受けた筑紫の官人とは、筑紫大宰府の官人と考えられる。この浄御原令によって位置付けられた新しい官司制では、筑紫大宰が律令制の大宰府の職掌である「番客」・「饗宴」に繋がる対外機能を付与されていたとみられる。そのため外交使節を応接する荘厳された空間整備が必要であるだろうし、また、官人の具体的な執務空間としての官衙建物群の整備が必要である。さらには位階に応じた官人達の居宅を供給する土地利用の基盤整備も重要となる。

大宰府の地割制については鏡山猛氏によって方１町の条坊復元案が提示されて以来、新たな条坊復元案が想定されるとともに、太宰府市教育委員会を中心に発掘調査で得られた区割り痕跡を基にした検証や新しい条坊復元の研究が進展してきている。

これまでの知見では、政庁Ⅱ期に政庁前面域で大尺250尺の区割りの存在が明らかになると、この基準尺が条坊全体に及んでいたとする条坊復元案が考えられ、条坊呼称も成立は10世紀であるとしても、７世紀末から８世紀初期に条坊制の方格地割りが施行されたと解釈されるようになった。その後も政庁Ⅱ期の段階で大尺250尺（90m）を基準尺とした方格地割が、条坊痕跡の精査で整合性のあることが追認された。しかし､政庁と観世音寺の建物と、その両者の前面から南に延びる大路の設計は和銅６年（613）に採用された小尺を基準にしていることが明らかとなった。そのため、街区とこれら南北大路は合致せず､異なる設計基準が採用されたと太宰府市教育委員会の井上信正氏はみている。続けて、条坊痕跡の一部で７世紀第４四半期に開削された区画溝があることから、大宰府の街区は、Ⅱ期政庁・観世音寺に先行して設計・施工された可能性をも考えている。

これは持統３年の筑紫の「新城」を考古学的に裏付けることになる。この新城の用例は王都が最初である。天武５年（676）に、飛鳥宮の北方で造営が開始された「新城」は、後の藤原京の条坊制に継承される方格地割であり、その段階では藤原宮は存在していなかったと考えられている。中枢施設の建設

と街区の条坊制導入の時期にズレがあったということである。王都と大宰府の場合を直接比較することには慎重でなければならない。さらに大宰府の場合は、Ⅱ期政庁の建設に先行するわけであるが、Ⅰ－2期政庁の段階であれば、政庁と街区の建設はほぼ同時期とみることもできよう。

Ⅰ－2期政庁の実態は、対外機能の強化に伴う筑紫大宰への役割の付与を体現したものと考えられ、ここに律令制の大宰府成立の大きな画期を認めることができよう。正殿とおぼしき建物を中核に儀礼空間を重視した配置が、Ⅱ期政庁にそのまま重なって踏襲されていることからも指摘できるのではないだろうか。

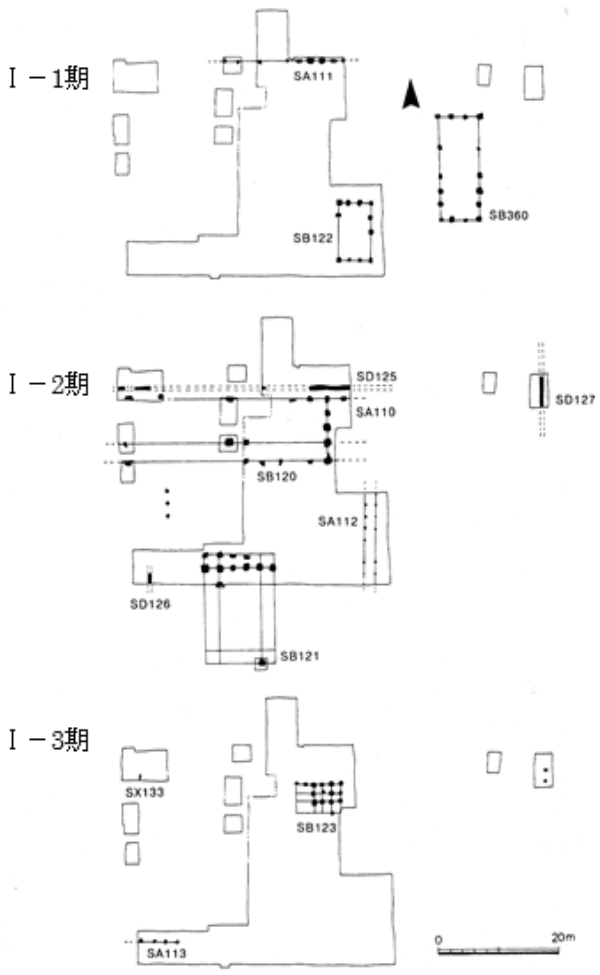


図５　政庁正殿地区Ⅰ期の遺構変遷図

４．政庁Ⅰ－１期の歴史的位置付け

では、政庁Ⅰ－1期の施設は、どのような性格を考えるべきだろうか。前述したように正殿域の東西の柵SA111とSA044は区画施設の可能性が高い。この区画内では規模の異なる南北棟の建物が検出されているが、その配置からは残念ながら建物の性格を類推することはできない。また、上層はⅡ・Ⅲ期政庁の回廊によって囲まれた内庭部にあたり、玉石が敷き詰められていたことから、下層の発掘には慎重にならざるを得ず下層の発掘調査は実施されていない。またこの２条の柵がどのように折れ曲がって区画されていたのかも不明である。両柵は柱間の間隔が短くバラツキもある。複廊のように荘厳された様子もなく、木柵だったと考えられる。現段階では門が想定されるような柱間が広く開けられた部分も見あたらない。

興味深いのはこの２条の東西柵の間隔は約118ｍで、小尺の単位が不明ながら仮に0.295ｍとすると、400尺の完数となる。これらが一体の区画施設として接続するものか、確認できていないが、完数尺を採用していることからも一連の区画施設の可能性を考えておきたい。この区画がどのような空間であったのか、現状では手がかりがないが、Ⅰ－1期の段階で一郭を構成した可能性があり、とりわけ真北方位を採用していたことは重要である。

王都では飛鳥宮Ⅱ期（飛鳥板蓋宮）から真北方位が採用され、その周辺への波及は天武朝頃には始まったという。北極星の方向を正南北線とした東西南北の中心点から、旭日方位を測り冬至を暦の始まりとして、政をおこなう考え方は、古来よりの信仰に大陸からもたらされた宗教が影響を与えてのこととみられる。『日本書紀』では、天武４年（676）に占星台が創設されたことを伝えている。このころ天文観測に基づいた祥瑞思想が定着したと考えられるが、それ以前の斉明４年（658）に沙門智踰が指南車を造り、天智５年（666）にも指南車を献じた記事がある。構造は不明だが、常に一定の方位を指し示すような構造と考えられる。後の和銅元年（708）の平城京遷都の詔勅で、四神思想を背景に都の位置選定を実施していることからわかるように、この頃から為政者層にとっては豊穣を祈願し、農耕暦に沿った政が明確に意識され、そのための真北方位が採用されたのであろう。

このように７世紀第３四半期に位置付けられる政庁Ⅰ－１期の建物群は、王都に倣った位置選定と周辺地域を含めた造営計画が、新しい思想を基盤に生み出されたのである。この点からも政庁Ⅰ－１期がいかに重要な施設であったのかが推測される。

では、この政庁１－１期の建物は、どのような性格のものであったのか。白村江での敗戦を契機に、水城や大野城等防衛体制の整備に伴って那津官家に駐在していた筑紫大宰が現在地へ移動してきたとする考え方が定着している。特に1968年の大宰府政庁の発掘調査で、７世紀後半の掘立柱遺構が、礎石建物の下層から確認されたことによって、通説となったのである。しかし、大野城の築造が白村江敗戦前に着手されたとすれば、これまでの一般的な見方の再検討にもつながることになろう。大野城や基肄城の築城は、これらの外郭施設によって守護されるにふさわしい重要施設が中心に存在することを前提としている。その要石ともいうべき、中核施設を担っていたのは筑紫大宰とその属領組織と断定してよいのだろうか。

５．大野城の築城年代について

今回、大野城太宰府口城門から出土した木柱の年輪について、Ｘ線ＣＴによる再評価を行った。その結果、650年の伐採年代という知見が得られたが、665年の築城記事との15年の年代差について考えてみたい。

『日本書紀』天智朝期に記載された白村江敗戦後の文脈をたどると、白村江敗戦後の緊迫した情勢の中で、山城が初めて構想されたと理解されてきた。そのため、築城開始が白村江敗戦を溯ることはあり得ないということになる。ここで、築城史料について検討してみたい。

築城史料　『日本書紀』は、663年の白村江敗戦後の国防策について次のように記す。

「664年　於對馬嶋壱岐嶋筑紫國等置防與烽　又於筑紫築大堤名曰水城」

「665年秋８月　遣達率答本春初築城長門国、遣達率憶礼福留達率四比福夫於筑紫国大野及椽二城」

敗戦の翌年に、対馬・壱岐・筑紫へ防人や烽を置き、最前線の防備と通信手段を整える。併せて九州本土（筑紫）へ上陸した場合に備え、その主要な交通路を遮断するために水城を築き、翌年に、百済の兵法や築城技術を活用した大野城・基肄城を築いて侵攻に備えた。つまり、唐羅の侵攻に怯えわずか数年の短期間で集中的に築城されたと理解されてきた。史料の記載を疑うものではないが、築城時期は溯る余地はないのであろうか。今回の伐採年代の扱いには慎重であるべきだが、築城開始の問題について

図５　出土木柱（囲みは刻銘）

図６　大野城太宰府口城門跡

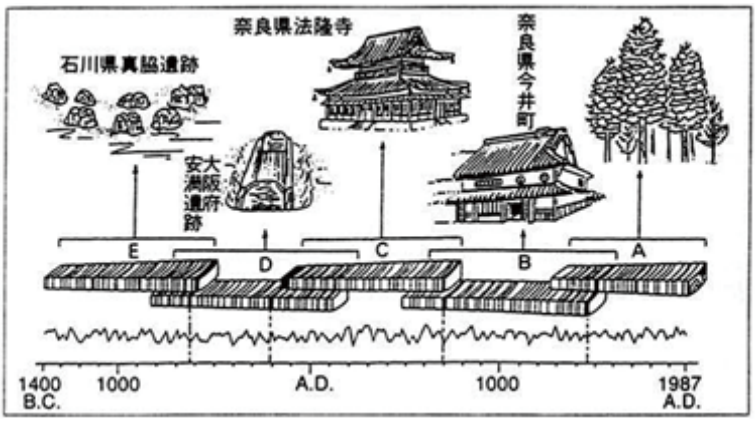


図７　年輪年代測定概念図（池上曽根遺跡シンポ資料集）

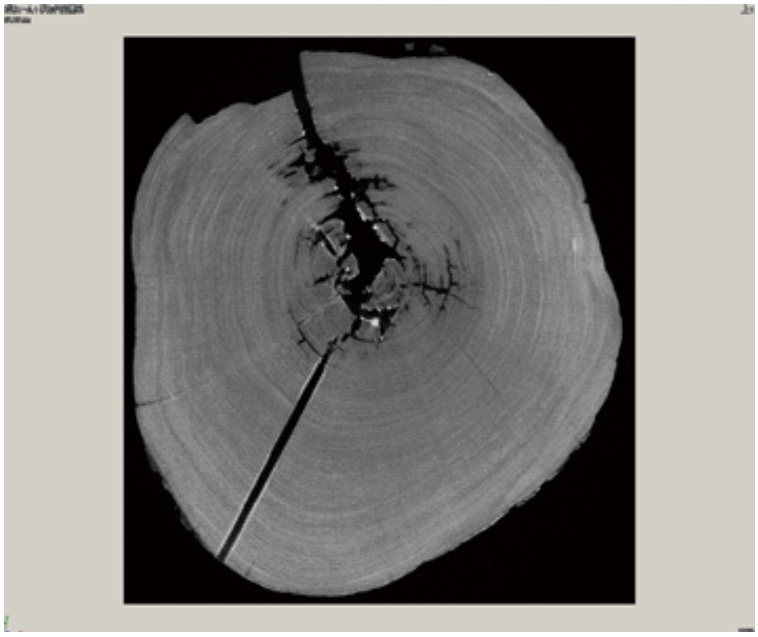


図８　木柱のＣＴスキャン断面画像

課題を整理したい。

木材の調達について　最初に検討しておかねばならないのが、この木柱が大野城の築城のために伐採された材木であるが否かである。大野城築城のために伐採がなされたとすると、築城計画はそれ以前に立てられたということになる。現代の建築に即して考えれば、基本・実施設計（選地・施設内容・動員計画など）が固まった段階を経て、工事のスケジュールに入り、さまざまな材料と一緒に、木材の調達もなされただろうと推測されるからである。

大野城のために調達された木材ではないケースを考えてみたい。建築材が当初の建築物から別の建築物に転用される例が少なくない。例えば同じ時期に築造された水城の遺跡のなかで、春日市大土居水城跡の調査で発見された木樋には、木樋の構造と関わりのないさまざまな加工痕があり転用材が用いられていた。今回の木材については、表面に仕口などの枘や枘穴、建築材としての加工痕は残されていない。そのため、現存する部分では転用材と考える積極的な根拠はない。

では、別の建築用に長期間寝かせていた材を使用したことも考えられないだろうか。調達期間では、伐採・集積・運搬の工程が考えられる。それだけなら最大でも半年あれば充分であろう。これに枯らしによる自然乾燥の期間も必要である。建築材として寸法のくるいや割れを防ぐための事前の乾燥は、樹種や材の大きさによって期間は異なる。樹齢二百年の杉材では２～３年であるとのこと。しかし含水率の低いコウヤマキの場合は、一般には枯らしは必要ないという。この木柱は大野城築城のために伐採され、それほど時間をかけずに現地へ運び込まれたと考えてよい。

築城記事は開始か完成か　次に、大野城の築城と記された665年記事が、完成なのか開始なのかも留意しておかなければならない課題である。『日本書紀』の場合、各種の原史料にある過去の情報を整理したうえで編年体による記述がなされている。そのため一般的な解釈として、編者の意図は完成記録にあると考えるのが妥当であろう。

確実に築城の始まりを記述した記録が残されている。福岡県前原市に所在する怡土城は、『続日本紀』の天平勝宝八年（756）条に「始築怡土城」と記されている。このように築城開始年の事例があることからすると、築城と記されている場合には完成の年と考えてよいのではないだろうか。

築城開始の時期について　では、いつ頃まで築城開始時期は、溯るのであろうか。先述したようにこ

れまでの定説では『日本書紀』の記述の流れから、663年の白村江敗戦を契機に築城が開始されたと考えられてきた。古代山城は緊迫した状況の中で、百済からの亡命してきた武将を登用することで初めて本格的な城塞が築かれたとする理解である。大野城の築城に遣わされた憶礼福留については、『日本書紀』663年９月条に、日本へと向かうことになった経緯が記されている。憶礼福留の来日後からとなると、665年８月築城の大野城はわずか２カ年という短期間で築城されたことになる。この時、筑紫国の10㎞圏内で、大野城、水城、基肄城も築造されていたことになる。

古代山城の施工期間を知り得る史料は、怡土城についての記事がある。天平勝宝８年（756）に、大宰大弐の職にあった吉備真備が専当して築城が始まり、765年には吉備真備に替えて佐伯宿祢今毛人を「築怡土城専知官」に任命して神護景雲２年（768）完成した。この佐伯今毛人も東大寺の造営責任者であった建築の実務に長けた人物のようで、後には造長岡宮使に補されて都の造営にも手腕を発揮した。この怡土城の築城期間は実に13年の歳月を要している。

怡土城は大野城などの７世紀の山城とは城壁の選地の仕方や構造に違いがあるが同規模なので、そのまま当てはめられないとしてもおおよその目安にすることはできる。この13年を単純に適用し大野城の665年から溯らせると、650年の伐採年代に近づくことになる。

白村江敗戦以前の築城に関する史料　このように施工期間は長期に及んだと考えて、大野城の築城開始を溯らせる推論に史料的な根拠を与えることはできるだろうか。

650年頃にはどのような対外的な動きがあったのだろうか。対新羅との関係では『日本書紀』白雉２年（651）条に「于時巨瀬大臣奏請之曰、方今不伐新羅　於後必当有悔。其伐之状不須挙力、自難波津至筑紫海裏、相接浮盈艫舳、召新羅問其罪者、可易得焉。」の記事が注目される。新羅は648年に唐との間で軍事同盟を結んでからは、礼服の制度など各種の唐の制度や文化を取り入れ、650年にはついに自国の年号をあらためて永徽の年号を採用するなど、唐風化政策を推進した。そして651年に新羅使が来朝したおりに唐服を着用していたことを不快として追い返し、先のような新羅に対する軍事的存在感を示して、新羅を詰問しようと考えたのである。軍事的プレゼンスが実行されたかどうかはわからないが、この記事は、新羅を仮想敵国として意識し、この頃から新羅征討の機運が高まったことの徴候とみることができる。唐と新羅との軍事的対立が650年段階で決断されたとするのは早計であろうが、645年以降、毎年来朝した新羅使節に対して、なんらかの武威を示す動きがヤマト王権内にあったことも考えられる。山城の築城がこのような朝鮮半島での唐の介入を避けるために、新羅への対抗措置としてとられ、大野城をはじめ水城・基肄城という軍事拠点の造営計画を進めたと考えられないであろうか。

ところで、665年以前に城塞築城の史料として、『日本書紀』斉明４年（658）是歳条の分注にある「繕修城柵断塞山川之兆也」の記事がある。これは神籠石の築城説の根拠とされていたが、大野城や水城の造営を指し示すとする見方もある。

くりかえすと、その根拠として古代山城の築城期間が長くなることを考えてみた。築城には土や石材・木材など用材の調達・運搬・加工、そして土木・建築・鉄器生産・瓦生産など各種の技術力とこれを支える労働力を集約させる必要があり、水城・基肄城を含めた大工事であったことや、怡土城の築城期間を参照にしても、少なくとも二・三年での築城は困難ではないかと考えたからである。

これまで、大野城の築城が白村江以前に計画された可能性について述べたことはあったが、650年まで溯ることの当否は、私自身まだ疑問に思うところもある。これまでの築城年代に対する史料との関連付けは、まだ慎重を期す必要がある。

おわりに

大宰府と古代山城の成立について、考古学の知見から述べてみた。昨年、筑紫野市の前畑遺跡が羅城の土塁ではないかという見方がだされた。羅城とは都城の外城である。仮にその羅城が大宰府地域に囲

繞されていたとすると、水城から大野城・基肄城などを取り込んだ都城の構想が664年段階ですでに実現されていたことになる。そのようなマスタープランはいつ構想されたことになるのだろうか。また、その羅城で守護される主体はどのような人たちであったのかという興味がますます沸いてくる。

大宰府は百済の泗沘東羅城の敷葉工法が水城土塁の工法に共通することからも、強い関連性が指摘される。一方で新羅の王都である慶州にもその山城の配置など類似点を指摘でき、羅城は設けられていないことを以前に指摘した（「古代山城研究の現状と課題」『古代山城の世界』月刊文化631　2016)。今後も構想だけではなく明瞭な羅城遺構の存在によって議論は深めなければならないと思う次第である。

※本稿は主に下記の記事等より再構成した。

赤司善彦　「筑紫の古代山城と大宰府の成立について－朝倉橘廣庭宮の記憶－」『古代文化』61－4　（財）古代學協會　2010

赤司善彦・光谷拓美　「大野城の築城年代再考－太宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から－」『東風西声』7　九州国立博物館　2011

column 大宰府政庁跡の四季

大宰府政庁跡は、一年を通じて市民が集う遺跡である。遠方から大宰府の旧跡を訪ね来る見学者に加えて、散歩やジョギング等で散策する市民も多い。政庁跡を含む大宰府史跡の特色は、日々の生活に溶け込む形で存在することにある。復元建物等で視界を遮らずに、里山としての景観を残していることも、大宰府史跡の魅力の一つと言えよう。政庁跡の周囲では、桜や梅、紅葉などの広葉樹に加え、区画溝には菖蒲が植樹されており、四季の移り変わりを身近に感じられる。

なお、今日の「大宰府」表記は、古代の役所やその遺跡に対して用い、中世以降の地名や天満宮については、「太宰府」の表記を用いることを原則としている。本論集における大宰府・太宰府の表記も本原則に沿っている。

（小嶋　篤）

桜花が巡る政庁跡

緑に覆われた政庁跡

秋空の下の政庁跡

雪化粧をした政庁跡

第２章

大宰府造営の年代論

杉原　敏之

はじめに

令制大宰府は、外交儀礼や辺境防備、管内支配という独自の政治機能を有していたが、その機能を表現するためにも多様な施設を造営した。この大宰府の造営時期を捉えるためには、中枢施設である大宰府政庁を中心とする官衙、軍事施設として大宰府外郭を構成する水城や大野城など諸施設総体として検討する必要がある。当然ながら、年代論の基準となるのは遺構と遺物の対比から積み上げた相対的な時間軸であり、特に重層的な調査事例が重要になるのは言うまでもない。本論では、筆者自身が直接関わった大宰府政庁跡の調査成果を基にして、水城跡や大野城跡を含めた大宰府造営の年代論について考えてみたい。

１．大宰府政庁と周辺官衙の造営時期

（１）大宰府政庁の造営

大宰府における大きな画期はⅡ期大宰府政庁の造営である。西海道の官衙では最初の瓦葺殿舎の礎石建物であり、都宮の朝堂院形式を採用した南北215.45m、東西119.2mの規模で、内庭部の東西に脇殿を、中央奥には宮の大極殿に相当する正殿を配している。政庁の平面配置は、政庁中軸線を折り返した東西幅119.2mの四等分が29.9mで天平小尺（＝29.8m）の100尺に相当する。小尺採用は和銅６年（713）の改定以後で、Ⅱ期政庁造営はこの時期以降に本格化し、霊亀・養老年間に成立したと考えられている(狭川1991他)。

Ⅱ期政庁以前のⅠ期政庁には掘立柱建物が置かれた。正殿地区では、Ⅰ期政庁が古・新段階に分かれることが確認されている（杉原2007他)。Ⅰ期新段階の政庁には、正殿下位に重複する南面廂を持つ長舎状の大型掘立柱建物SB120があり、掘立柱の板塀（柵）が接続して溝が巡る。また、前面には南北棟の四面廂建物SB121が配されている。さらに遡って最下層には、Ⅰ期古段階の掘立柱建物の一群がある。限定的な検出状況だが、正殿地区では７×３間の南北棟建物

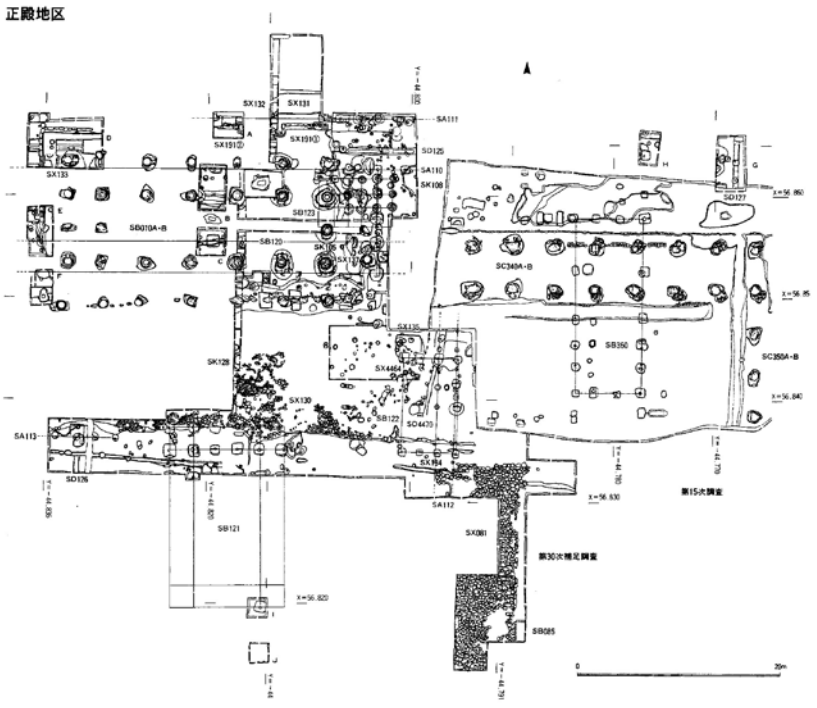


図１　大宰府政庁跡正殿地区調査図

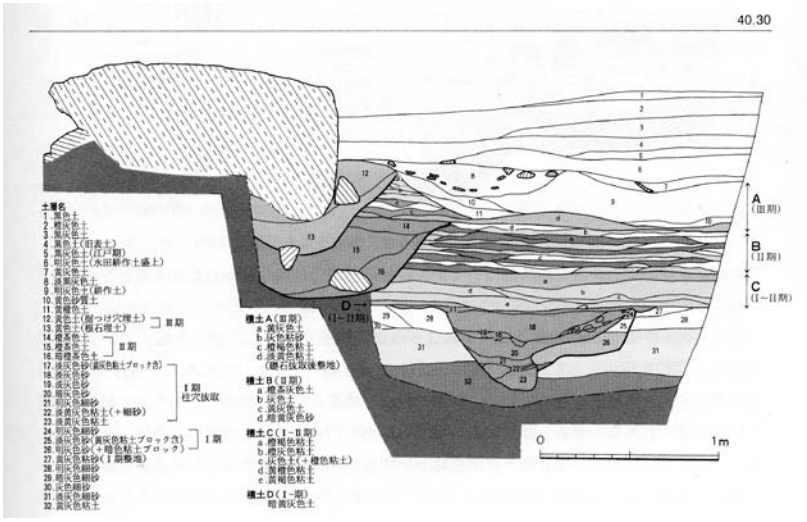


図２　大宰府政庁跡土層図

SB360、５×３間のSB112、北側に柵SA111がある。

Ⅱ期政庁へと繋がるⅠ期遺構の廃絶に関わる土器は、Ⅱ期正殿基壇やその下位の積土、掘立柱建物の柱の抜き取りや痕跡から出土している。須恵器坏蓋にはボタン状に潰れた摘みと口縁を三角形に肥厚させるものがあり、また中門鎮壇具に使用した長頸壺片や回転台使用の土師器が含まれる。土器群を総体として見ると、概ね８世紀第１四半期を下限とし、政庁Ⅰ期新段階の遺構はこの時期まで継続したことが分かる。この土器群の一部にはⅠ期新段階の上限を示す一群も含まれるが、須恵器では擬宝珠状の摘みを持ちながら口縁に返しを持つ坏蓋や、高台をハの字に踏ん張るものや無高台の坏身が該当しよう。概ね７世紀第４四半期を示しており、特に近接する回廊東北隅部ではまとまって出土している。

なお、この前段階に比定されるⅠ期古段階から新段階の土器は極めて限定的な出土である。北門地区築地積土下位の第１整地層で出土している。須恵器では天井部が高く、口縁端部に返しを持つ蓋や体部に丸みを持ちながら高台をハの字に

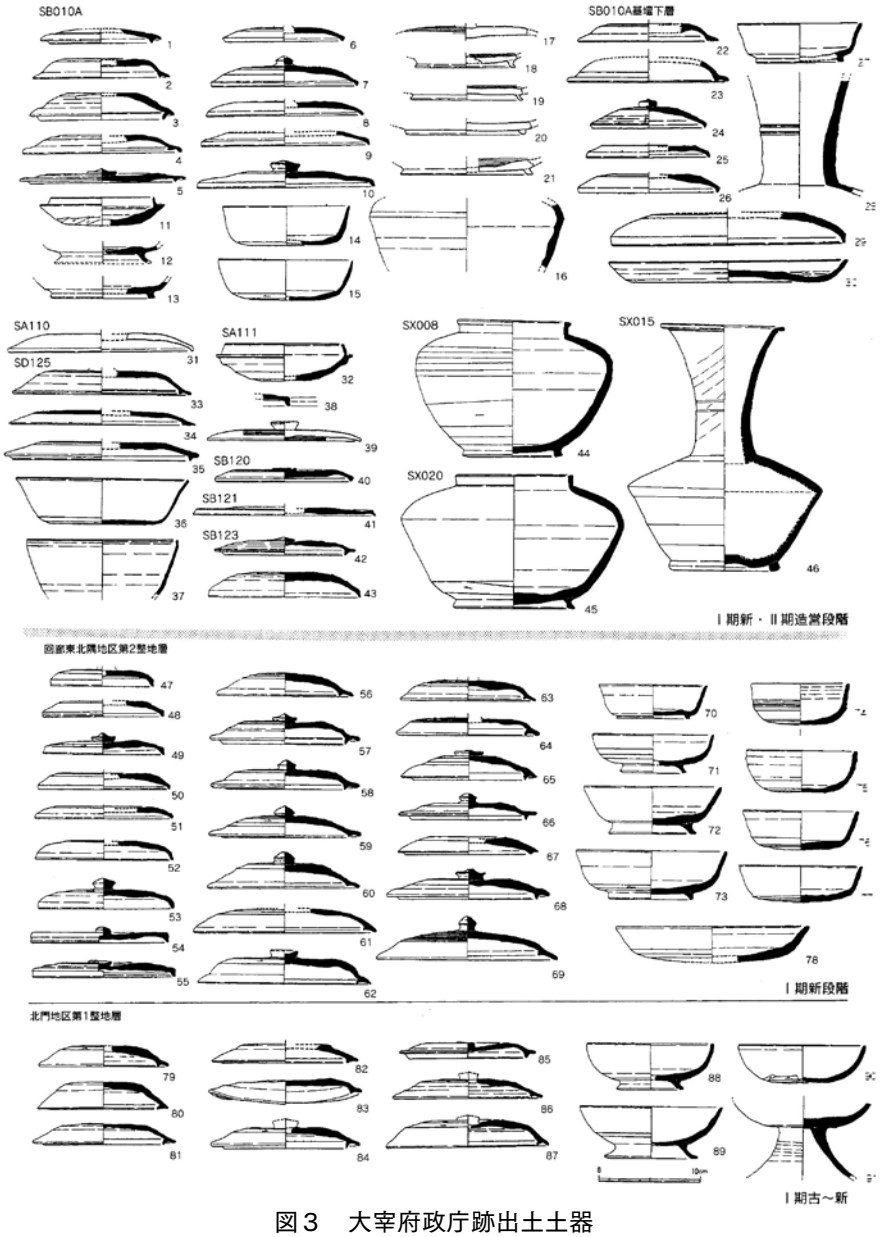


図３　大宰府政庁跡出土土器

踏ん張る一群がある。

（2）周辺官衙の造営

政庁前面では、Ⅱ期政庁に併せて大規模な官衙群が整備された。まず、政庁正面には広場、東に日吉地区官衙、西に不丁地区官衙と大楠地区官衙がそれぞれ位置し、南北の溝によってそれぞれ区画されている。各地区の境界溝の割付をみると、正面広場を挟んで東西に位置する日吉地区官衙の西境界溝SD4660と不丁地区官衙の東境界溝SD2340の溝心々距離が184.4m、SD2340と不丁地区官衙の西境界溝SD320の距離が溝心々87.3m、さらにSD320と西側の大楠地区官衙の区画溝SD2680の溝心々距離が89.2mで割り振られている。これらの溝は、小尺（＝0.296m）換算で、SD4660とSD320間が約620尺、SD2340とSD320、SD320とSD2680の距離がそれぞれ約300尺となる（九州歴史資料館1986）。そして政庁中軸線からSD2340までの心々距離は、102.4mになる。

官衙の区画溝の配置は御笠川以北の官衙域では妥当だが、以南の条坊域との関係からみ

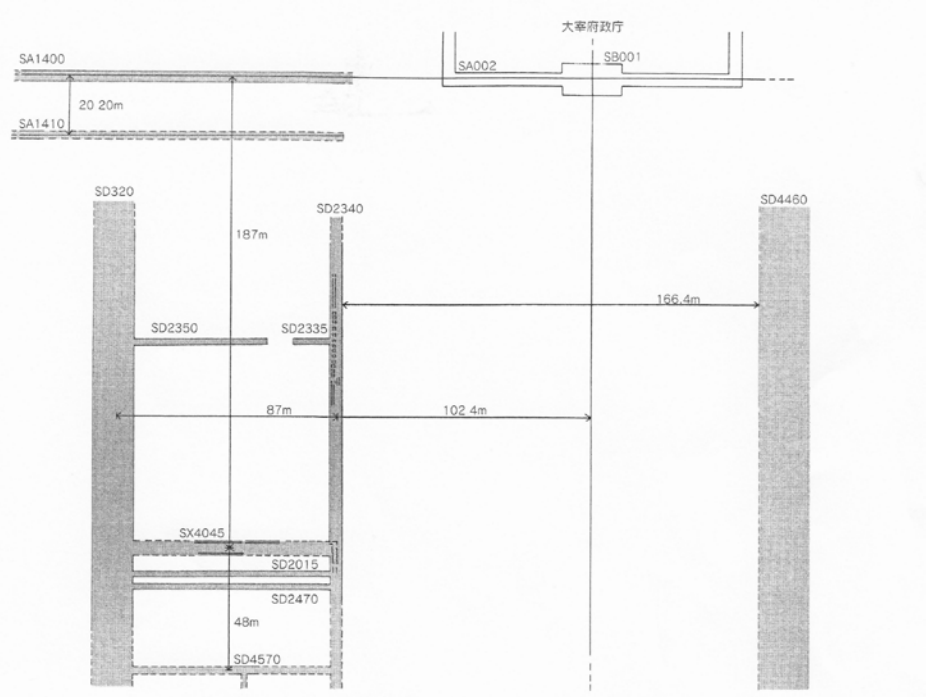


図４　政庁と周辺官衙の区画

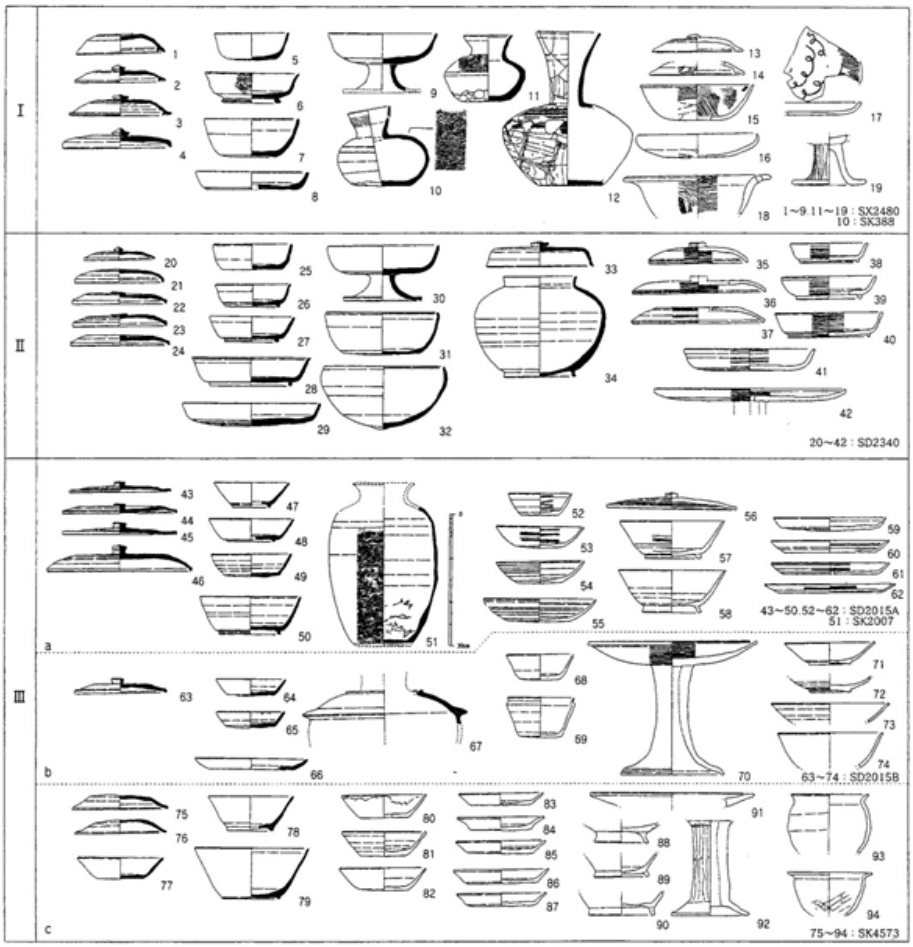


図５　不丁地区官衙出土土器

ると齟齬がある。大宰府政庁と幅36m（120小尺）の朱雀大路中軸線の一致に対して、一辺約90mの条坊区画の左右郭１坊の溝とに約５mのズレが生じる。この状況から、政庁の小尺（＝0.296m）に対する大尺（＝0.35m）施工の結果とみて、主要官衙施設造営以前の７世紀末から８世紀初め頃に街区の大宰府条坊が先行したとみる意見がある（井上2011）。

あらためて大尺換算で政庁前面域の区画溝をみると、SD4660とSD2340間が520尺、SD2340とSD320、SD320とSD2690間は約250尺となる。官衙の境界溝の開削時期については、不丁地区官衙のSD2340が98次調査で確認された７世紀第３～４四半期の流路SX2480を切ることや溝最下層出土土器を踏まえれば８世紀前後とみられる。そして、この境界溝に規制される形で８世紀前半に官衙施設の本格的な造営が開始される。この状況から、条坊区画の施工が官衙の造営に先だつことは確かである。

さらに、政庁前面に配置された官衙群の展開を考える上で重要になるのは、不丁地区官衙の境界溝SD2340である。堆積状況に粗密の差はあるが、最下層に流水を示す砂層堆積があり、その上位に滞水を示す粘質土層がある。85次調査区では下層より「天平６年（734）」銘木簡が出土しており、上層堆積層の埋没年代は８世紀中頃までであろう。

２．水城・大野城の築造時期

（１）水城

水城は、平野を遮断する約1.2㎞の長大な土塁と幅60mの外濠に水貯えた城壁である。上成土塁の高さ７～10m、下成土塁の幅は80m程度ある。上成土塁の積土の技術は山城の「版築工法」にも通じるが、下成土塁下部は厚い単位の砂質や粘質土で、最下層付近には基礎強化のための敷粗朶が埋設されている。また、下成土塁の下部には内濠から取水して外濠へ吐水する「導水管」の機能を持つ木樋が設置されている。また、西門地区では大きく３時期に亘る門の変遷が明らかになっている。Ⅰ期は掘立柱式で一間となる門の柱間は4.22m、切り通しの両壁は積石で補強されている。８世紀初め頃に礎石式となるⅡ期は、三間一戸の八脚門が想定され、大宰府政庁と同じく律令制成立による整備のためと考えられる。さらに９世紀以降には、Ⅲ期門の周辺には暗渠や石列等を埋設し、土塁を改修している。この水城跡において遺構と遺物を直接対比できる資料は限られるが、対象と成りうるのは西門地区の門、東門地区の木樋である。

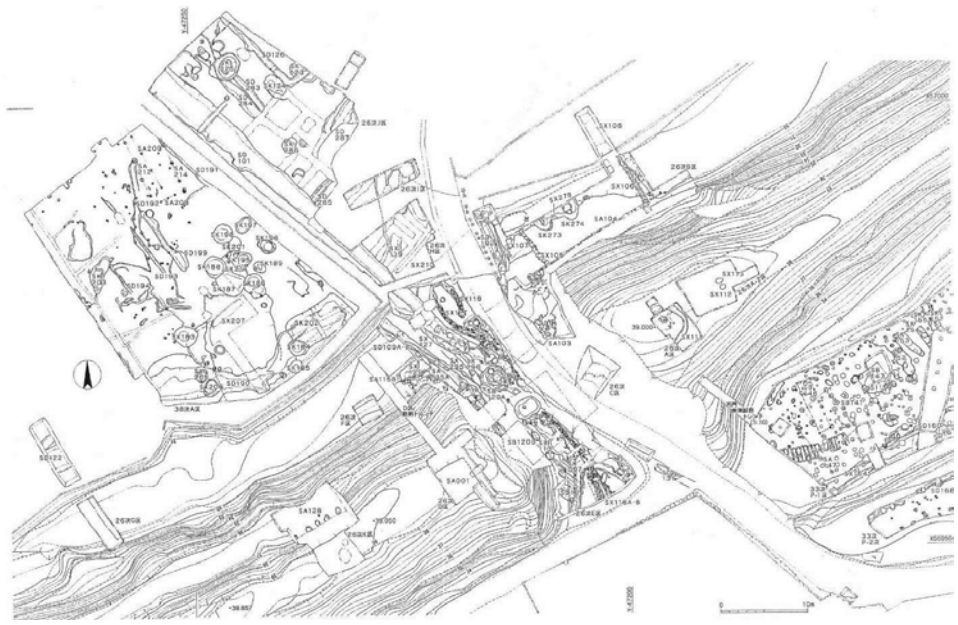


図６　水城跡西門地区

西門地区ではⅠ期掘立柱式の城門SB120Ａ柱穴の埋土上位より須恵器坏が出土している。体部が直線的に開き返しは内傾しながら立ち上がる。７世紀前半頃に比定される。さらにⅡ期城門SB120Ｂの礎石据付穴と考えられる遺構から須恵器蓋が出土している。摘みの径は大きいが潰れており、口縁端部を三角形に肥

厚する。８世紀第１四半期頃に位置づけられる。この他、Ⅱ期城門SB120Ｂ以前でⅠ期城門SB120Ａの柱穴を切るSD109Ａから土器類が出土している。このうち須恵器の高台付坏は体部と外底部の境を鋭くナデ、体部は直線的に開いて高台は高くハの字に開く。７世紀第４四半期から８世紀第１四半期に位置づけられる。この時期は、『続日本紀』にみられる文武天皇２年（698）の大野城・基肄城・鞠智城の「繕治」に該当するが、水城でも何らかの改修が行われた可能性がある。

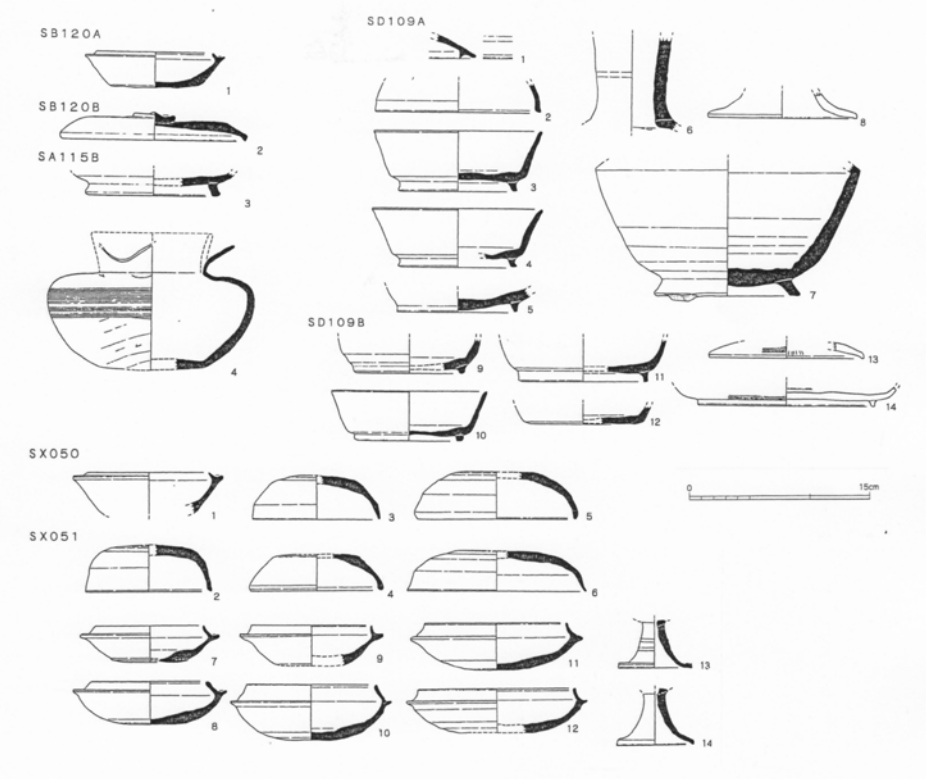


図７　水城跡出土土器

東門地区木樋掘方SX051埋土上層の茶褐色粘質土からは、須恵器蓋坏片がまとまって出土している。蓋の外天井部は回転ヘラケズリ、坏は受部を持ち、口縁は内傾気味に立ち上がって体部下位に回転ヘラケズリ調整がみられる。蓋口径13 ～ 15㎝、坏口径11.4 ～ 13㎝で器高が高い一群と、蓋口径10 ～ 11㎝、坏口径９～ 10㎝の大小に分かれる。後者でみれば、概ね７世紀前半に比定される。木樋埋設との何らかの関係を想定しても、土器編年との整合性に課題を残している。

（２）大野城

大野城は大宰府政庁後背に位置し、北側に深い谷を持つ独立的山塊の四王寺山（標高410m）に約８㎞の土塁や石塁からなる城壁を築いている。土塁は版築工法と呼ばれる堰板を使用して土を固く付き固めながら積み上げ、地形に併せた土塁の高さは一定でないが５～６ｍ程度ある。一方、谷部には粗割りした石を積み上げた石塁が見られる。城門は、水の手石塁と繋がる太宰府口城門、百間石垣と繋がる宇美口城門など、計９箇所確認されている。南の主門となる太宰府口城門では大きく３時期に亘る門の変遷が明らかになっている。Ⅰ期は掘立柱式で正面三間の門の中央柱間は5.25m、Ⅱ・Ⅲ期は礎石式で１×１間の正面5.25ｍの規模になる。Ⅱ期礎石式への建替えは律令制成立による整備のためと考えられている。城内には８世紀以降の倉庫とみられる礎石建物が70棟以上確認されている。

大野城跡の調査では、築造年代を直接示すような土器類の出土は確認されていない。比較的古い土器類が採集されているのは、太宰府口城門地区、鮎返り地区、大石垣上方内周土塁周辺、猫坂地区、北石垣城門、主城原地区などがある。須恵器蓋は宝珠状の摘みと返しを持ち天井部は高く、坏についてはハの字に開いて高台が踏ん張るもので、７世紀第４四半期前後の特徴を持つものが多い。

一方、主城原地区では掘立柱建物SB064（９間×３間側柱建物）と掘立柱建物SB065の柱痕跡より単弁八弁軒丸瓦が出土している。前者は１＋８の蓮子を持ち弁の稜が通り間弁も鋭い（単弁Ⅰ類）。丸瓦を瓦当部にのせて接合する。後者は１＋６の蓮子を持ち弁は短く平面的で二重の圏線がめぐる。行基の

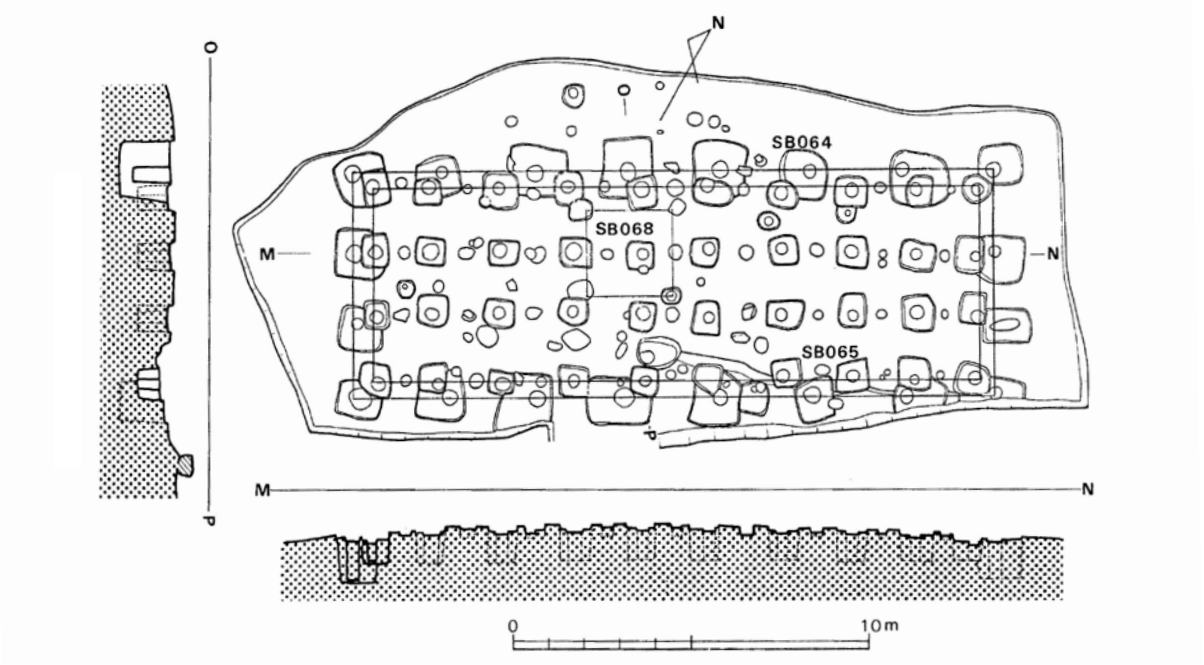


図８　大野城跡主城原地区Ⅰ期遺構

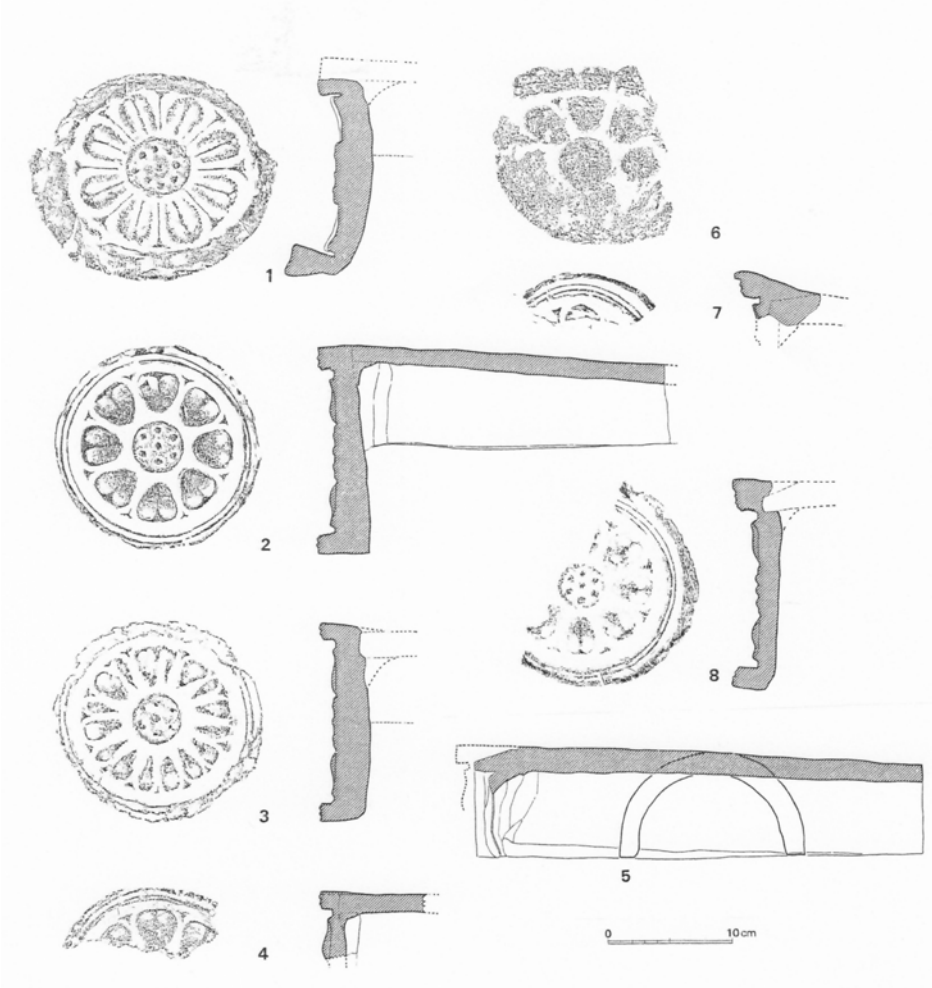


図９　主城原地区出土軒丸瓦

丸瓦を差し込むか押し当て接合している。これらは山城に葺かれた軒丸瓦としては古期の７世紀後半に位置づけられるが、官衙風の掘立柱建物で施設の機能や性格にも関わるものであろう。この他、直接年代を推定できるものとして太宰府口城門Ⅰ期の柱穴から最古級の刻書文字「孚石部」(「孚石都」)のあるコウヤマキ材の柱根が出土している（杉原2006)。かつてＣタイプとして最外輪年代648年で伐木年代推定は困難とされたが（田中編1991)、近年の再調査では樹皮を残すＡタイプとされ、年輪

年代による伐木年代は648年頃とされる（赤司・光谷2011）。そのため『日本書紀』の記事、天智天皇４年（665）よりも遡る時期に築城が開始されたとみる意見もある。

３．大宰府造営の年代論をめぐって

これまでの調査成果からみれば、大宰府では、遅くとも７世紀末頃、四王寺山南麓に後のⅡ期政庁に繋がるⅠ期政庁を中心とする主要官衙が成立したことは確かである。政庁正殿地区では、下位のⅠ期新段階とⅡ期の関係からみると中枢施設は連続している。また、蔵司西地区官衙における「久須評」銘木簡等の出土からⅡ期以前の大宰府を構成する主要官衙が付近に存在した可能性は高い。その後、令制大宰府発足によって成立するⅡ期政庁の造営と共に官衙域を政庁前面域へ拡大したのであろう。特に政庁東西の丘陵状地形はⅠ期の景観を概ね踏襲して、Ⅱ期以降も大きな改変を受けていないことも、この地域における官衙の継続性を含めて注意する必要がある。ただし、初期大宰府の姿については不明な点が多い。特に水城や大野城などの重要施設の築造とどう関わるのかが重要になる。

水城跡では、西門地区のⅠ期城門SB120Ａや東門地区木樋掘方SX051出土土器が手掛かりとなるが、これまでの本地方の土器編年観から見れば総体的に古い。近年の土器編年の再整理を含めた議論が必要なのは確かだが（山村1998）、出土状況から見る限りこれらが築造年代に直接結びつくとは即断できない。

一方、大野城跡では、７世紀第３四半期から第４四半期の土器類がかなり採集されている。これは、不丁地区SX2480出土土器群に相当し、政庁Ⅰ期新段階頃に対比できるものである。いずれも原位置を留めるものではなく、厳密な議論はできないが、この時期の城内における諸活動と関わっている可能性もある。また、山城の軒先瓦としても重要な単弁軒丸瓦については大宰府内の状況が整理されつつあるが（下原2014）、福岡平野における動向をみると７世紀第３四半期から４四半期前後の土器群と関わるものが多い。この地域における、官衙施設の造営時期に関わるものであろう。

このほか大野城跡ではⅠ期城門より出土したコウヤマキ材の刻書木柱がある。近年の再調査による年輪年代による伐木年代はAD648年頃とされ、『日本書紀』の天智天皇４年（665）の記述からも大きく遡る。築造年代とその背景をどのように理解するかは慎重にならざるを得ないが、コウヤマキ材自体が７世紀から８世紀の掘立柱式を中心とする建物柱材に使用されている事例が多いことや、畿内との関わりが深い点も注意する必要がある。

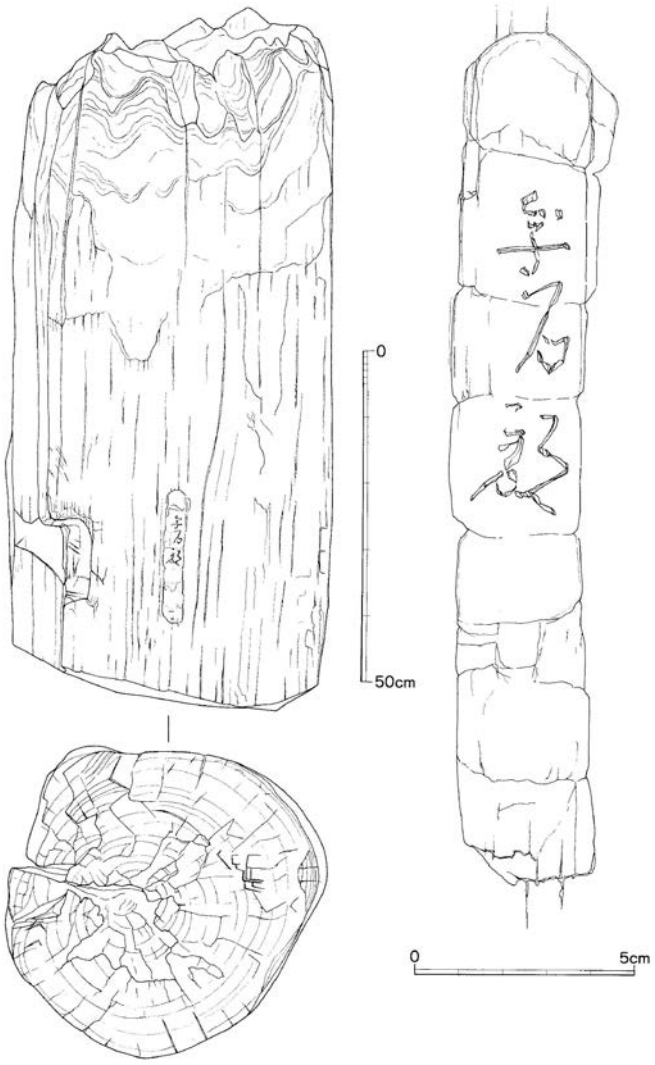


図10　太宰府口城門出土柱根

以上、本論では考古学的手法から大宰府諸施設の造営時期を整理してきた。このようにみると、大宰府政庁と連動するように、７世紀第４四半期頃には官衙や条坊、山城などの諸施設においても整備の痕跡が認められる。これは、後の西海道諸国島を統括した大宰府の機構整備に関わるものと考えられる。争点となる、７世紀後半の白村江敗戦直後の天智朝期における大宰府の造営状況はやはり不明と言わざるを得ない。これまでの調査状況をみる限り、大宰府の外郭を構成する水城や大野城が築造されていたことは確かだが、政庁との関係を含めて初期大宰府に関する結論は出ていない。既に指摘されてきたことだが、土器編年の整理と共にまず遺構の出土状況の再検討が必要になる。それでも断片的な情報しか得られないのは、遺構の重層性と共に、現在地における大宰府が、機能特化や機構再編などにより、施設の造営過程も多様であったことも要因としてあろう。

参考文献　※一部省略

赤司善彦・光谷拓実「大野城の築城年代再考―太宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から―」『東風西声』第７号　九州国立博物館
小田富士雄 2013「大宰府都城制研究の現在」『古文化談叢』70　九州古文化研究会
小田富士雄 2015「大宰府都城の形成と律令体制」『古文化談叢』74　九州古文化研究会
下原幸裕 2014「大野城跡クロガネ岩城門出土の軒丸瓦」『都府楼』46号（公財）古都大宰府保存協会
杉原敏之 2007「大宰府政庁のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32号
杉原敏之 2016「大宰府の造営と西海道諸国」『日本古代考古学論集』同成社
山村信榮 1998「７世紀後半の諸問題」『古文化談叢』41　九州古文化研究会

第3章

日韓古代山城の年代論

向井　一雄

はじめに

西日本の古代山城研究は、90年代に入って各地で発掘調査が行われ、新遺跡・新遺構の発見と相まって古代山城研究は新たな段階を迎えつつある。韓国や中国東北地方の城郭についても以前に比べて格段にその詳細が判明してきた。

本稿では、朝鮮半島の調査事例をご紹介するとともに、日本古代山城の年代論について従来の問題点を整理し、新年代のフレームワークを提起したいと思う。

1．朝鮮半島の古代山城

朝鮮半島城郭のルーツ

朝鮮半島では三国時代（3世紀頃から7世紀頃）、高句麗、百済、新羅の三国が鼎立していた。朝鮮半島の城郭の特色は山に築かれた山城にある。平時には平地で生活し有事には山城に籠城して戦うという防衛システムを構築している。その数およそ数千を超える山城が残っており、各々の地方の交通要衝を眼下にする要害の高地や地方の主要な街の背後にそびえる山々に城壁が築かれている。

朝鮮半島の古代山城は高句麗と大陸勢力との戦闘の中で生み出された山城であり、侵略軍を撃退するための弱者の戦略的な城郭といえる。高句麗の防衛システムは、国境防衛線である「前縁防御体系」、国境から王都までの敵の侵攻ルートに沿った「縦深防御体系」、王都を守る「衛星防御体系」の三つが組み合わさって構成されているといわれている。侵略軍を撃退するためには、長く籠城できることが非常に重要になってくる。そのため縦深防御体系を構成する山城群は守りの堅いことが要求された。

高句麗山城のルーツは、現在の中国東北地方、特に遼西の夏家店下層文化（紀元前2000年～前1500年頃）の囲郭集落に求める説がある（西川1993）。囲郭集落には様々な形態があるが、石城が多数みつかっている。崖や急斜面のそばにつくられた集落は周囲を石壁で守られている。規模は1～2万㎡のものが多く数万㎡に達するものもある。

秦が遼東に築いた長城に影響を受けたとする説もある（門田1986）。秦は天下統一後の紀元前221年、将軍蒙恬を河南（河套、オルドス）に派遣して、西は臨洮から東は遼東まで一万余里（約5千㎞）の長城を築かせたと『史記』に記されるが、実際、内蒙古や寧夏には石築の長城の遺跡が残っている。遼寧では赤峰・敖漢旗などで秦長城の遺跡が報告されている。

紀元前108年には、朝鮮半島北部に前漢によって楽浪郡が設置された。楽浪郡治（北朝鮮平壌市）は大同江南岸の丘陵上にあり、東西700×南北600mほどの不整な方形で土塁がめぐり、楽浪富貴などの瓦当や封泥も多数出土している。また、北朝鮮黄海北道鳳山郡の智塔里土城は帯方郡の郡治遺跡と考えられている。これら漢代の土城が朝鮮半島の平地城のルーツに当たる。

高句麗の興起は紀元前1世紀初めとされる。燕や秦の長城や漢の県城を高句麗人たちは見聞し、城壁構築方法の知識を得たとする考えが妥当性は高い。高句麗山城の起源として、『魏志夫餘伝』にみえる「円形の柵」や吉林北部から内蒙古に分布する環濠・柵列を持つ囲郭集落などの遺跡とどう繋がるのか、今後の課題である。

高句麗の山城

高句麗最初の王都・卒本は五女山城（中国遼寧省桓仁県）と考えられている。最古の高句麗山城である五女山城は峻険な断崖の山上に立地し、城下には高句麗初期の積石墓が濃密に分布している。山頂部は南北1500m×東西２～300mの台形状で断崖に囲まれ天然の要害をなし、山腹部にも断崖を利用しながら南面と東面の一部に石塁が築かれている。五女山城西南方には渾河に面した下古城子土城があり、五女山城と対になる平地城の可能性がある。

高句麗は３世紀初頭に首都を鴨緑江中流の集安（中国吉林省集安市）に移転させた。国内城は鴨緑江の支流通溝の北岸にあり、発掘調査によって漢代の玄菟郡高句麗県城の土城を石築に改築・再利用したものであることが判明した。丸都山城は国内城の北西2.5㎞にあり、周長７㎞におよぶ大型の包谷式山城である。高句麗は314年に楽浪郡を滅ぼし、南進して427年に集安から平壌（北朝鮮平壌直轄市）に遷都した。遷都時の王宮と山城は清岩里土城と大城山城に比定されている。

集安で、漢代の県城を平地城（王宮）として転用し、近傍に山城を築くという平地城＋山城のセットが完成する。このパターンは高句麗が中国の郡県が置かれた地域に進出した際にも取られた方法であり、新賓県永陵鎮の旧老城、丹東の泊汐城、撫順の新城などの類例が挙げられる。この平地の居住拠点と背後の逃げ城というセット関係が、この後の朝鮮半島城郭の基層となっていく。

中国東北地方には高句麗城郭が200ヶ所、北朝鮮地域に1000ヶ所、韓国内には2300ヶ所の山城が知られている（北朝鮮と韓国は三国～朝鮮王朝まで含む）。北朝鮮を除く中国東北の高句麗山城については、近年の踏査によって、遺構の実態が明らかになってきたが、現在残る城壁遺構が築造当初からのものかどうかはわからない。これまでの調査は地表調査が中心で発掘調査は一部で実施され始めた段階である。五女山城、丸都山城、石台子山城の報告書が刊行され、最近、燕州城（遼寧省沈陽市）が調査されている。

踏査の知見によれば、中国東北の高句麗山城の城壁は類似した様相を見せ、７世紀代の隋唐戦の最中に修改築が行われた可能性が高い。石台子山城（遼寧省沈陽市）は周長1.38㎞の包谷式山城で馬面10、城門４など、95年から山城全体が発掘された。７世紀代に築城後、戦闘で落城焼失したと考えられ、隋唐戦当時の高句麗山城の様相を示す遺跡といえる。石台子山城城門の門礎石と丸都山城２号門址の門礎石は酷似し、このことから丸都山城城門が７世紀代の修築後の遺構であることとわかる。多くの高句麗山城が７世紀後半の高句麗滅亡まで使用されており、現在地表に見る遺構は７世紀代のものである可能性が高い。

韓国における発掘調査の進展

朝鮮半島の山城は三国時代から朝鮮王朝（李氏朝鮮）時代まで長い間－継続的あるいは断続的に－同じ城が利用されてきたため、現在見ることのできる城郭の遺構がいつの時代に造られたものなのか、はっきりとわからない。しかし、地表調査や発掘調査によって各時代の城郭について、知見が集積されつつある。

韓国ではこの30年、城郭の調査が目覚ましく進展してきたが、地表調査や発掘調査を行ってみると、大半の城が新羅の山城であることがわかってきた。新羅は６世紀代に伽耶諸国を併呑、北は尚州から忠州と清州地域に進出して、556年には念願の漢江流域（現在のソウル地域）を押さえる。新羅は新たに進出した地域（上州・下州）に拠点となる山城を築き、支配拠点とすると共に、次なる進出拠点としても活用した。

早くから山城を発達させた高句麗に対して、新羅・百済の４～５世紀代の山城については、共によくわかっていない。漢城期の百済の城は風納土城や夢村土城といった前代の楽浪郡治の系譜を引く平地に土築城壁をめぐらせる城だった。新羅も王宮は平地にあって、南山の北麓に都堂山土城や南山土城など小型の丘城を設けていたらしい。有名な月城も５世紀後半の築造であり、当初は月城（王宮）と明活山城（逃げ城）がセットをなしていた。明活山城は６世紀代に土城から石城に改築されている。

漢城百済期の山城遺跡の発見

韓国の京畿道地域では、最近、曾坪・柑城山城（二城山城）や華城・吉城里土城など、漢城百済期の山城が確認され注目されている。柑城山城は４～５世紀の百済の山城で標高259ｍの山地に北城（周長429ｍ）と南城（周長1.4㎞）の二つの城が築かれているのが特徴で、百済初期の土築技術で築かれている。吉城里土城は３～４世紀に築かれた土城で、丘陵上に立地し周長2.3㎞の包谷式のプランを取り、百済漢城期の盛土技法と木柵列が確認されている。今後も４～５世紀代の百済山城が見つかる可能性は高いが、朝鮮半島の南部で本格的な石築の山城が登場するのは意外と新しい時代のことらしい。

百済は475年に漢城が高句麗によって陥落し、熊津に遷都する。最近、公山城（忠南公州市）の城壁崩壊に伴う発掘調査で、城壁内から築城当初－熊津百済期の版築城壁が検出された。版築土塁の外側に石築を付加する城壁が熊津期から始まるとみられる。

高句麗の堡塁群

さらに、京畿道地域を中心に５世紀後半頃、漢城期の百済（475年滅亡）を滅ぼした高句麗の南進拠点も見つかっている。ソウルの漢城期百済の中心である風納土城を見下ろす漢江北岸の峨嵯山の稜線上に並ぶ峨嵯山堡塁群（30箇所）、臨津江流域の堡塁群（20箇所）、滅ぼされた百済が第二の都とした熊津（公州）の東方30㎞に迫った忠北清原郡の南城谷遺跡や中原高句麗碑近くの塔坪里遺跡などが続々と発見され、京畿漣川と江原春川では高句麗古墳も確認されている。

峨嵯山堡塁群は一つの堡塁が径50ｍ（九宣洞堡塁）ぐらいのものから、最大のものでも周長210ｍ（峨嵯山第４堡塁）である。しかし規模こそ小さいが横矢掛かりとなる「雉城」を何箇所も設けるなど戦闘的な施設であることがうかがえる。また南城谷遺跡や大田・月坪洞遺跡は、プランは包谷式をとっているが、城壁は土塁でも石塁でもなく木柵の城である。臨津江沿いでは瓠蘆古壘（周長401ｍ）や堂浦城のように河川を防御線とする特異な丘城も造られている。

新羅の山城

新羅山城の研究によれば、外郭線は石築城壁が多く、城壁基底部に「基壇補築」と呼ばれる三角形状の外壁補強を設けるのを特徴とする。また城門入口には階段などなく地面から1.5～３ｍ近い高さの垂直の壁となっている場合がある－これは「懸門（凹形立面城門）」と呼ばれ、新羅山城の特徴とされてきた。防御するのに優れた戦闘的な城門構造で平時には木製の階段や梯子を使って出入りしていたと考えられている。懸門の淵源は高句麗にあるらしいが、まだよくわからない。三年山城の西門の門礎石は門道両サイドに「拝叉柱」と呼ばれる柱穴が並ぶ中国式の城門型式で、韓国内では唯一例、近似する事例は高句麗の平壌城内城の平壌神社北門遺構が挙げられ、高句麗からの影響を窺わせる。「確金（ファクセ）」と呼ばれる特異な門の軸摺金具も新羅山城を中心に見つかっている。

このように新羅山城の特徴が明らかになりつつあるが、慶尚北道地域を支配下においた新羅によって、５世紀後半～６世紀前半に築かれた報恩・三年山城や聞慶・姑母山城、寧越・正陽山城などが、この時期の新羅山城の一つの基準となっている。最近調査された慶州・明活山城では北門で曲城（円形の雉城）が検出された。曲城は三年山城や姑母山城で見つかっているだけで、三城の関係が注目されている。

半島南部－洛東江の流域に、百済と新羅とは別に伽耶諸国と呼ばれる地域があった。この諸国の王墓と推定される古墳群の背後にも古代山城があり、これまでは伽耶諸国の山城と考えられてきた。しかし韓国における城郭調査が進展してくると、これら伽耶地域の山城も実は新羅が６世紀代に伽耶地域に進出、併呑していく過程で、占領地域を支配する拠点として築城されたものだったことが明らかになってきた。

慶南咸安の城山山城などは当初は安羅国の王宮とそれを守る城だと思われていたが、1991年からの発掘調査の結果、大量の木簡が出土し、６世紀代に新羅がこの地域に進出した時、支配拠点として築

いた城とわかった好例である。城山山城では新羅の城壁工法である基壇補築も見つかっている。また2004年から調査された巨済島の屯徳岐城（廃王城）は７世紀に築城された新羅の山城で、巨済島では最古の城郭であることがわかった。巨済島は『魏志韓伝』に「倭と界を接す」と記された弁辰の濊盧国の有力な比定地だが、濊盧国が新羅に併合された後、巨済郡という名前に変更されたとされ、屯徳岐城もその頃築かれたと考えられている。

全南順天の馬老山城などでは百済山城から統一新羅期に石敷き門に改築されている。石敷き門道は朝鮮半島北方に系譜を辿ることができる。高句麗の平壌城内城の平壌神社門址や渤海上京龍泉府宮殿の午門などでは、中国式の城門の直写様式の遺構をみることができる。韓半島中部以南の地域では新羅山城に石敷き門道の事例が多い。

百済の山城

日本の古代山城は、百済から亡命貴族らが築城を指導したことから「百済式山城」だとよくいわれる。百済人が指導したから百済式だというのはあまりにも文献に引っ張られた解釈であり、そもそもどのような特徴もって百済式というのか－それほど「百済山城」の実態はまだよくわかっていない。

2008年、韓国の忠南錦山郡で百済泗沘後期の遺物しか出土しない栢嶺山城が見つかった[1)]。一時期の遺物しか出土しないということは、現在残っている遺構－石塁や城門など－がその一時期の遺構の状態を示していると考えられる。その遺構の特徴を、他の時期が不明な山城と比較することで百済の泗沘時代後期（７世紀前半頃）の城郭を見分けることが可能となってくる。

栢嶺山城は百済と新羅の国境線地帯に築かれた山城の一つで、周囲207ｍの小規模な山頂式山城である。注目されるのは、城門の平面プランで、城門左右の石垣が門の袖部分で角張らず円弧状にカーブしている。実はこの様式の城門は、百済の最後の都となった泗沘（扶余）の南方－林川の聖興山城と論山の魯城山城の城門にあった。両城は城門の型式だけでなく、石塁が切石積みである点、懸門である点なども共通しており、部分的に見ると見分けがつかないほど似ている。両城が何らかの関係を持っていることは窺えたが、城の年代はわかっていなかった。

聖興山城[2)]では史跡整備のため、1996年に東門の発掘調査が行われた。この時城門の石塁直下から百済泗沘時代の土器が出土したため、現在見る遺構が百済泗沘後期の築造ではないかと報告されていたのだが、泗沘後期のプレーンな遺構を残す栢嶺山城の発見によってそれが裏付けられることとなった。聖興山城－魯城山城－栢嶺山城は百済が泗沘（扶余）に都を置いた泗沘時代の後半－７世紀前半に築かれた兄弟城ともいえ、今後扶余周辺の城郭調査の一つの指標となる。

最近調査された古阜・古沙夫里城（古阜旧邑城）や扶余東羅城でも袖部が円弧状にカーブした門遺構が見つかっており[3)]、百済山城と考えられる事例が増加している。扶余・石城山城の調査では、百済時代－統一新羅時代－朝鮮時代の城壁変遷が明らかになった。ようやく百済山城の実態や変遷過程が明らかになりつつあり、新羅の城との比較など様々な課題に答えることができるようになるだろう。

伽耶の城郭

『魏志倭人伝』にも登場する狗耶韓国（弁辰狗耶国）－三国期には金官伽羅国と呼ばれる有力な国だが、この金官国の王宮があったとみられる遺跡が2003年、金海の市街地で発掘調査された。その遺跡が鳳凰土城で、鳳凰台と呼ばれる低丘陵（標高45ｍ）の周囲２㎞に幅約20ｍの土塁がめぐらされていることがわかった。またこれも伽耶の有力国である多羅国の王墓のある陜川でも、玉田古墳群の南に接する城山里土城が2009年に発掘され、黄江に面した標高53ｍの丘陵上に築かれた伽耶時代の土築の城がその後、新羅によって石築に改築されたと推定されている。

このような低丘陵上の土築の城が、伽耶時代の城の姿であることがようやくわかってきている状況で、山城については、周囲200 ～ 400ｍの非常に小規模な山頂式山城が伽耶時代にも築かれていたらしい

が、百済や新羅の山城とはプランや城壁構造が異なっている。2008年、金海の良洞山城が発掘調査され、三角形の水口（石畳の排水口）の独特な形態から伽耶の山城ではないかと報道された。しかし発掘された城門は袖部が円弧状となる百済型である点、城壁基底部には新羅山城の特徴である基壇補築があるなど－伽耶の山城とは断定できない。2012年には大伽耶国の王都である高霊の主山城の発掘調査が開始され、城壁基底部に基壇補築のあることがわかった。この城壁が大伽耶時代の遺構なのか新羅時代に修築されたものかは意見がわかれているが、発掘調査では城壁の内部からもう一つ小規模な城壁が発見されており、こちらが大伽耶が築いた城壁であった可能性が高い。伽耶地域は百済と新羅の係争地域でもあり、城郭も様々な影響を受けていることが予想される。

2．従来の日本古代山城の年代論

朝鮮式山城と神籠石

日本の古代山城はこれまで朝鮮式山城と神籠石の二つに分類されてきたが、近年の調査成果を受けて「古代山城」として一括して論じられるようになりつつある。とはいえ1960年代の発掘調査によって神籠石論争に終止符が打たれた後も、文献未記載の山城に対して「神籠石系（式・型）山城」の呼称が引き続き使用され、学術用語としてもほぼ定着した感は否めない。しかし「神籠石」とは本来列石のことではなく「磐座・石神（神体石）の一種」を指した名称であり、現在では学史的に使われているに過ぎない。

1898年（明治31）、小林庄次郎が高良山の遺跡を学会に報告した際、誤って列石線が「神籠石」という名称で紹介された。『高良記』によると、参道沿いの現在「馬蹄石」と呼ばれている磐座の名称こそ本来の「神籠石」であり、列石は「八葉の石畳」と呼ばれていたことがわかる。「神籠石」と呼ばれる神体石や地名は管見でも全国で140例以上－北は宮城県県南部から南は鹿児島県まで分布しており、皮籠石、革籠石、交合石、皇后石、香合石、神護石、皇護石、川子石、こうごう石、向後石、高後岩など、様々な用字みられ、「カウゴ（こうご）」という呼称の本来の意味は分からなくなっている。

神籠石が磐座の名称であることは、既に1910年（明治43）－神籠石論争の時期に、柳田國男が『歴史地理』誌上や『石神問答』で指摘し「(神籠石は）孤立する奇石の名なり」と喜田貞吉氏の磐境説に疑問を呈していたが、その後も喜田は「神籠石」と呼ぶことを止めなかった。1932年（昭和７）－雷山が史跡指定される際に、「神籠石」が史跡名称となり、文献に記載のない山城の呼称として定着してしまった。古賀寿らも、神籠石が磐座の名称であることを文献や実例を上げて指摘しているが、一地方研究者の著作であったため民俗学者も含め学会ではほとんど知られていない。

遺跡名称としては、2004年度に国史跡となった、大廻小廻山城跡、永納山城跡については当初から神籠石の呼称は用いられていない。また新聞発表から発掘調査段階まで、神籠石の呼称を付けていた唐原神籠石も2005年度の史跡指定時には「唐原山城跡」に名称変更された。山城遺跡を表す名称として神籠石が不適切なものであることは明らかであり、「○○神籠石」という表記は、今後少なくとも研究論文などでは使用を控えるべきだろう。文献に記載のあるなしによる分類も考古学的分類としては実態にそぐわないし、神籠石系山城といってもいくつかの類型に分けられる。この点は朝鮮式山城も同様である。

先行説と後出説

文献に記載のない山城の歴史的性格、特にその築造年代については７世紀代に収斂しつつあるが、７世紀代といってもその築城を大野城（665年）以前とするか以後とするかによって、「先行説（７世紀前半)」と「後出説（７世紀後半～８世紀初頭)」に分かれている。

戦前の神籠石論争以来、60年代の発掘調査まで、北部九州の神籠石遺跡はその分布から邪馬台国や

磐井といった九州の在地勢力に関係するもの、年代も文献史料になく伝承も残されていないことからかなり古い時代に造られ忘却された遺跡とする考えが支配的だった－当然、神籠石遺跡は朝鮮式山城よりも古い遺跡であるということになる。現在でも先行説をとる研究者は多いが、明確な根拠があるわけではなく、文献記録のないことが大野城以前とする最大の理由となっている。先行説も後出説も類型化に関しては大差なく、①大野城などの朝鮮式山城、②瀬戸内の神籠石系山城、③北部九州の神籠石系山城の三つの類型を想定する研究者は多い。編年序列の問題は北部九州の神籠石系諸城の編年的位置付けが論点となっている。

斉明天皇築城説

1988年、渡辺正気による「斉明天皇西下時築城説」の発表以降、６世紀後半～７世紀初めの推古朝頃とされていた先行説の年代は660年頃まで引き下げられ、九州の研究者を中心に渡辺説が引用、支持されるようになった。当初、渡辺説は九州に限定したものだったが、その後、先行説論者らによって瀬戸内の古代山城も斉明朝に造られたと拡大解釈されるようになった。調査成果との整合性を取るために、白村江戦後の神籠石系諸城の未完成・放棄、一部修築後の朝鮮式山城との併存を認めようとする折衷説が最近の論調としてみられるが、占地、外郭構造の異なる山城が同時、同契機に造られたとは考えにくい。

2008年、八木充が文献史学の立場から渡辺の斉明四年是歳条の解釈が誤読であると反論している。四年是歳条の「国家」が倭国ではなく百済を指すと解釈するもので、既に牛島康允や白石成二も同様な指摘をしていたが、八木は四年是歳条の「「国家」以下は百済領内部の状況説明と断じてよい」とする。渡辺説の発表以降、先行説論者は渡辺説を援用して全ての神籠石系山城が斉明期に築かれたとしてきたが、それらは斉明四年是歳条の渡辺解釈に無批判に依拠しており、新解釈によれば斉明朝築城説そのものがその立脚点を失いかねない。

翌2009年開催された「神籠石サミット久留米大会」では八木論文の影響からか、斉明天皇一色だった論調がトーンダウンし、これ以降、考古学者が斉明朝築城説を表立って主張することはなくなった。八木説への反論は渡辺からは出されなかったが、2016年、堀江潔が反論を発表した。堀江は斉明四年是歳条の「由是」以下の文は倭国を主語として読むべきで、倭国の西と北の国境地域（九州・北陸地方）で兵士配置と防塁・木柵などを備えた何らかの施設の修繕が行われたことが読み取れるという。北部九州各地では神籠石・山城の築造・修築など防衛体制整備が進められたというが、考古学的根拠はほとんど提示されていない。

そもそもこの斉明四年是歳条の記事は、658年（斉明４）の出雲における雀魚大量漂着から始まる予兆記事であり、『書紀』編者は、不吉な雀魚の話から二年後の海の向こうの百済滅亡を予言し、その後の百済救援軍の派遣や敗戦後の防衛体制（防人や烽の設置、水城や大野城の築城）について、この或本記事に語らせたかったという解釈でも何ら問題はない。渡辺自身も論文中で「A「以兵士甲卒陣西北畔」は…防人、B「繕修城柵断塞山川」は大野城以下をさすとも考えられる」と述べている。Aを斉明の西征、Bは神籠石をさすと考える根拠として、「記事の文脈、神籠石の構造や、使用尺度等から、またその立地や分布、わが国古墳時代以降の築城事情から考えて、大局的には、（斉明朝築城）の考えが妥当ではないか」としているが、構造や立地の詳細は全く論じられていない。

このように八木説も渡辺説も文献解釈上決定打とはいえず、それは四年是歳条の史料的限界を如実に示している。四年是歳条に「繕修城柵」とあることからそれ以前に城があった証拠だと先行説論者は主張するが、神籠石系山城には修築の痕跡すらない。堀江説のような文献的な解釈だけでは、古代山城問題は解決しないことを認識すべきだろう。

占地による編年

原田大六による「愚城説」（神籠石は大陸の城を模倣した日本人による実戦には使えない城）はよく

知られているが、原田は神籠石遺跡の立地の高低によって編年（高い→低い）を試みており、戦前の研究には見られない新機軸であり、神籠石編年論の嚆矢といえる。

80年代には葛原克人や出宮徳尚が古代山城の占地に注目してその比高と全周規模から山城を分類し編年を試みている。占地＝編年論のアイデアは既に原田が発表しており、坪井が九州型、瀬戸内型の分類を提唱していたが、細かく占地を分析した両説はその後の分類編年案のモデルとなった。

山城を考える上で占地－どのような地形を選んで築城するかは非常に重要である。古代山城は山地の低いところ（谷部）から高いところ（山頂）までうねうねと城壁が取り巻いて造られているから高さを比較するには山頂よりも谷部の高さに注目した方がよい。比高の低い谷部分はその城の弱点にもなるから軍事的な守りの強さも比較できる。

山城の周長（全周規模）をX軸、城壁の最低点（水門部）までの比高（平地からの高さ）をY軸にとった相関グラフを作ってみると、日本の古代山城の選地には、嶮しい独立峰に占地する嶮山城類（城内最低点比高差50m以上）と低丘陵や背後に主山塊を持つ支峰に占地する緩山城類（50m以下）の大きく二つのタイプがあることがわかる。北部九州に濃密に分布する神籠石系10城のうち７城が緩山城である。

嶮山城類が北部九州～瀬戸内沿岸に広く展開するのに対し、緩山城類は北部九州－中でも有明海沿岸を中心に集中分布しており、緩山城類が嶮山城類とは異なる目的を持って築造されていることが分布からも想像される。

年代の決め手―土器・切り合い関係・尺度

従来、古代山城では土器の表採例もほとんどなく、発掘調査でも出土遺物は極めて少なかった。出土状態も版築土塁中や建物基壇・柱穴からではないため、城に伴うものとしても存続期間の１時点を示しているにすぎないとされ、考古学が最も得意とする出土土器からの年代推定が困難とされてきた。遺構の切り合い関係から推定される年代は、帯隈山城での陶棺破壊、女山城・唐原城郭内の群集墳、唐原城水門下層遺物などの事例から、６世紀末以前には遡れない。

帯隈山城の土師質の陶棺は列石線のすぐ外側だが列石側は破損が酷く、列石線工事による破壊であることは確実である。残念ながら陶棺内には遺物はなく、時期が絞り込めない（佐賀市1969）。九州で陶棺は珍しいが、近辺では須恵質の陶棺出土例があり、大野城市でも陶棺が出土している[4)]。女山城の列石に接して山内２号墳があり、切り合い関係の確認が期待されたが、明確な切り合いは判断できない位置関係であった（瀬高市1982）。

坏蓋・坏身、長頸壺、平瓶などこれまでの出土・表採須恵器の年代観は７世紀中葉～８世紀前半に比定されるものが多い（飛鳥Ⅲ～平城宮Ⅱ期）。比較的出土点数が多いのは甕破片だが、細かな年代推定は難しい。

列石前面の柱列に関しては、おつぼ山城の調査時に「逆茂木説」が出されたが、その後「版築工事の堰板支柱説」が支持されるようになった。最近の調査では土塁内部からも柱列が検出される事例（おつぼ山城、鹿毛馬城、御所ヶ谷城、鬼ノ城、大野城、鞠智城）も増加しており、土塁構築前に立てられ埋め殺しにされている。また版築技法で構築されていても列石前面柱を持たない土塁（大廻小廻山城・永納山城）もあり、雷山城や杷木城、唐原山城のように列石のみ配し上部の土塁を築いていない山城でも前面柱は検出されていない。土塁内外の柱は対となり柱列間隔は1.6 ～ 1.8m（大野城・鞠智城）、1.8m（御所ヶ谷城）、2.19m（石城山城）など短いものもあるが３m間隔の事例が多い。前後の柱を横木や縄などで接続して版築が行われたと考えられるが、前面柱のない事例は版築工事の多様性（堰板保持の方法）を示している。版築は７世紀代の寺院の基礎や基壇、終末期古墳などにも用いられているが、大規模な使用は地方では古代山城が初めてといえる当時最新の土木技術である。６世紀頃までの古墳の盛土は土嚢積みと呼ばれる工法でつくられていて、版築ではない。

列石前面柱については、その柱間距離が約３m間隔であることから、おつぼ山城の調査後、鏡山猛により「唐尺使用説」が提唱されている。おつぼ山城で検出された柱間距離＝３mについては、偏差の大きいデータの平均値に過ぎず、ここから使用尺度は求められないとする批判もあるが、３mは城壁各部分（土塁・石塁幅＝９m、城門幅＝３mなど）の基準単位となっており、モジュールとしては認めてもよいと思う。唐尺使用以前の高麗尺については諸説あるが、最近の平城京跡の発掘調査成果によると「度地尺（土地計測）としての高麗尺使用（正確には高麗法）は藤原京から平城京段階まで認められる。７世紀代の古代寺院調査によっても、寺院全体のプラン（土地計測）には高麗尺が、各建物の設計には唐尺が使用されているという状況が指摘されており、基準尺が高麗尺→唐尺へ切り替わるという想定は否定されつつある。令大尺＝高麗尺、令小尺＝唐尺（唐大尺）であるとしても、唐尺（もしくはその原型となる尺度）の使用がいつ頃まで遡るかは不明といわざるを得ない。

礎石建物などの設計に使用された尺度は、大野城では天平尺の29.6㎝よりも若干長く国分寺建設期の一尺（29.9㎝）と合致する。鬼ノ城では前期難波宮使用尺の29.2㎝と合致する柱間が指摘されており、鬼ノ城が７世紀後半とすると、大野城倉庫の年代は八世紀代に下る可能性が尺度面からも窺える。

土塁構造と類型化

土塁構造については、北部九州の神籠石系山城の土塁断面調査が先行し、天智紀山城（朝鮮式山城）や瀬戸内の山城では最近まで調査事例に恵まれなかった。そのため神籠石系山城＝列石あり、朝鮮式山城＝列石なし、といったイメージが定着してしまった。外部観察によるかぎり朝鮮式山城では列石は確認されていなかった。しかし大野城や鞠智城、讃岐城山城でも土塁基底部の列石が確認されるに及んで、上記のイメージは見直しを迫られている。そして調査所見で重要な事実は、列石の「非露出（いわゆる埋め殺し）」である。非露出の場合、本来土塁完成時には列石は見えていなかったのであり、断ち割り調査の行われていない基肄城などでも列石がないとは断言できない。列石の有無が分類指標として絶対のものでないとすると、列石の非露出・露出こそ指標として注目せねばならない。そして列石の非露出・露出は列石の切石使用とも関係している点は見逃せない。

外郭線が直線を一単位として走行し接続部に「折れ構造」を持つ山城が瀬戸内の諸城と北部九州の一部の山城（御所ヶ谷城、阿志岐山城、雷山城）にみられる。おつぼ山城など有明海沿岸部の山城は曲線走行を基本としており、外郭線走行に大きく東西２つのタイプが存在している。曲線走行の山城の外郭線にも時折、折れ構造に近い配石区間が見受けられ、折れ構造→曲線への推移が想定される。大野城など文献に記載のある山城についても、最近の調査により、「折れ」の存在が確認されつつある（屋嶋城南西斜面外郭線城壁背面、大野城北石垣城門）。

この他、土塁構造としては、城壁の形態－「夾築法」「内托法」「土段式[5)]」が指標としてあげられるし、列石など石材の調達方法にも顕著な相違（現地調達、外部からの搬入）があることが判明しつつある。

編年序列の問題

斉明朝築城説を支持し660年頃の築造年代を想定する先行説論者の間でも、神籠石系山城の編年観－九州が古いか瀬戸内が古いか－については大きく意見の相違がある。これは、考古学的な研究において、研究者同士の編年基準にコンセンサスが取れていないためで、研究者の考えは各々異なっている。

例えば、列石に関して、装飾過多なものから機能本来の形態へと移行すると考えるか、原初的なものから徐々に発展して最終的に形式的となり、形骸化するかという二つの編年観がある。占地についても同様で、高地から低地へ、低地から高地へとここにも対立がある。このような違いを単に地域差とみて、城郭の年代差や築造目的とは関係がないと捉える研究者さえいる。考古学的にはいずれの編年観も“論理的”には間違っていない。

先行説論者は、年代観として神籠石系山城の斉明期築城が大前提になっているため、切石加工の問題、

交通路や官衙との関係、占地（縄張）からみた軍事性の評価、朝鮮城郭史の編年観などについて、議論の俎上にも乗らない。後出説では時期差や機能差（対外防衛→律令制化・地域支配）として段階的な築造過程を推定しており、編年序列は軍事性の低下していく方向で想定している。同じものを見ながらも、斉明期築城に辻褄が合うように解釈されていたといえよう。

3．韓国城郭からみた編年

テメ式と包谷式

朝鮮半島の山城では占地形態からみた「包谷式」と「テメ式（山頂式・鉢巻式）」の分類が広く使われているが、両者の中間的な山城も多く、実際に分類するとなると単純ではない。高句麗地域には大型の包谷式が多いが、百済・伽耶など半島南部では大部分が周長１㎞以下の中小規模のテメ式山城である。日本の山城の規模や形態は大型の包谷式ばかりで、むしろ高句麗山城を指向している。

百済・新羅地域の山城では三国統一後、より高い山岳へ立地するものと城壁が山の斜面から平地へ降りてくる二つの類型が成立する。高い山岳へ立地する山城は純軍事的城郭で三国時代よりさらに大型化していく。また平地へ降りてくる平山城（土城）は高麗時代の古邑城につながる城郭で、行政的機能を担当したとみられている。

新羅の富山城や百済の青馬山城のように、山城の大型化は三国統一直前には始まっており、クライアント（倭王権）からのリクエストが高句麗山城であったと考えれば、日本の山城の多くが周長２㎞以上で６㎞を超える大型山城もあることは肯ける。また統一新羅以降の土城と北部九州の神籠石系山城の立地上の類似も注意される。

版築土塁

版築土塁は元々中国黄河流域で発達した土壁の構築技法で黄土を叩き締めて硬化させるものだ。朝鮮半島を経て日本へ伝わった版築技法はオリジナルの中国のものとは若干異なり、粘度の異なる土や砂、粘土を交互に積み重ね、一層一層叩き締めながら構築していく。

韓国で最も古い版築土塁は漢城期百済の風納土城などにみられるが、その版築の工法は後のものと若干異なっている。基底部幅約30m、高さ約10mの土塁の断面図をみると、中心部の１次版築層、その外側に２次版築、３次版築というように何層もの版築が外側に貼付けられながら構築されている。また列石（韓国では基壇石という）を持たないのも特徴である。先に紹介した曾坪・柑城山城などでも風納土城タイプの版築工法がとられており、遺構の時期や系譜を考える基準となっている。その後、６世紀頃から前後の柱を横木や縄などで接続して行う通常の版築工法が出現してくるとみられている。

列石と永定柱

1983年、独立記念館の建設時に調査された木川土城（忠南天安）で基底部に列石を持つ版築土塁が見つかった。日本では神籠石系山城の列石のルーツとして、この木川土城がいまだによく紹介される。そして木川土城が百済地域に含まれることから、列石は百済山城の特徴であり、それが日本へ伝わり神籠石系山城が造られたという。しかし、木川土城からは百済の遺物は全く出ておらず、出土したのは統一新羅から高麗時代の土器や瓦片ばかりであった。その後、各地で木川土城と類似した列石を持つ城郭の調査事例が増加し、現在では韓国における列石の出現は早くても三国末、一般化するのは統一新羅以降とみられている。

神衿城（忠南洪城郡）、蛇山城（忠南天安）、扶蘇山城（忠南扶余）、華山里城（慶南蔚山）、堂甘洞城（釜山）などで列石が検出されているが、中でも木川土城によく似ているのは神衿城で９世紀代の築城とされている。列石の配列の方法からも新旧が想定されていて、蛇山城のように傾斜地でも一定の勾配で直

線状に配石されるものが古く、木川土城のように階段式に傾斜地を登っていくタイプは新しいと考えられている。

また韓国では土塁に伴う柱列も検出されているが、石列間に立てられ土塁に半ばめり込んだ状態で設けられている。柱間間隔については、三国時代には1.2 ～ 1.8mと短かったものが、統一新羅時代以降に３m以上となり、高麗時代には3.5 ～ 4 mと次第に長くなっていくこともわかっている。

韓国で列石が登場した頃－７世紀中葉に日本に古代山城が導入され、その後独自の発展をしていったとみられ、柱間間隔からみると、日本には1.6 ～ 2.0m程度の短いグループ３m間隔の長いグループがあり、ちょうど韓国での柱間間隔の伸長化する時期に当ると考えられる。

切石積み

石塁の使用石材には、自然石･割石や切石がある。いずれも外壁面に横方向の目地が通る布積みだが、内部構造には差異が存在する。高句麗地域でみられる石塁には「打塁法」という呼称が付けられている。外壁以外は加工石材を使用していないが、層状の石積みで外壁とは鋸歯状に組み合った強固な石積みとなっている。新羅山城の石塁も高句麗山城に類似するが、三年山城や忠州山城など一部の山城では一層ごと井桁のように品字型に組んだより強固な構造の石塁もみられる。これに対し、百済地域では伝統的に版築土塁が多いが、石塁の場合、全て石材を使用する他に、内部が版築で外壁だけ石築にする技法（月坪洞式）もみられる。

半島南部における切石積み石塁の出現は、百済地域では扶余周辺で７世紀前半頃～、新羅地域では関門城、南山新城など７世紀末～８世紀初め頃に認められる。高句麗地域での切石使用の初現は不明だが、三国統一後、半島南部でも切石使用が普及期に入ると推定される。

日本の古代山城については、野面積み→割石積み→切石積みとする編年観があり、編年指標として一定の蓋然性は認められる。ただし石塁の積み方と使用石材については単純に考えられない部分もあり、韓国でも時代が下る高麗城郭や朝鮮時代の邑城の石塁が全て切石積みに変化するわけではない。時代毎、地域別の石積み技術や使用できる石材に制約があって、石塁が構築されているとみるべきだろう。内部構造に着目すると、日本の古代山城の内、天智紀に築かれた山城は石塁内部に外壁と同大の石材を使用しているが、北九州の神籠石系の山城では、外壁は切石、内部はグリ石と大きな差異が認められる。

４．日本古代山城の新年代

土器

考古学では遺跡から出る土器がその遺跡の年代を決める重要な手掛かりとなる。これまで古代山城からはこの土器の出土が非常に少なく僅かであったため、出土土器から古代山城の年代を論じることができなかった。大野城や基肄城、鞠智城などは９世紀半ば頃まで維持されていることが文献史料にも残っており、存続期間が長いことから城内に建物も数多く建てられ、土器や瓦などもそれに伴って出土している。しかしむしろこの三城は日本の古代山城の中ではレアケースであり、多くの山城は７世紀後半から８世紀初頭の短い存続期間で廃城となっている。

大野城では８世紀後半～９世紀代にかけての瓦の割合が多く、増改築を繰り返しながら、修理・維持されていたと考えられる。基肄城でも表採されるのは縄目叩きの瓦が多く、少なくとも８世紀代までは建物群が維持メンテナンスされていたらしい。中心部が発掘された金田城や鞠智城では土器の出土量から城内活動の盛衰を窺うことができる。金田城では出土土器に７世紀中葉と７世紀末のものがあり、各々創築期と修築期が想定され、８世紀以降の出土遺物がないことから廃城となったと考えられる。鞠智城の場合、Ⅴ期にわたる変遷過程が復元され、Ⅱ期が繕治期に、Ⅲ期が停滞期（廃城？）、Ⅳ期が復興期とされている。Ⅰ～Ⅱ期は須恵器が多く、Ⅳ期以降は土師器が中心となる（郡衙的）など、土器の構成

から築城主体や施設の性格の変化まで論じられている。

鬼ノ城の発掘調査が進むと、遺物からみた創築年代が白村江の戦いの後の築城記事－665年～667年の天智紀六城と微妙にズレがあることがわかってきた。500余点の出土遺物は飛鳥Ⅳ～Ⅴ期（７世紀末～８世紀初頭）のもので、大野城などの築城記事より明らかに新しい年代を示している。出土する土器は鬼ノ城が築城され使われていた期間の「ある時点」を示しており、創築年代を示すものではないとする意見も以前からよく聞く。また土器による年代観はあくまでも相対的なもので実年代を示さないということもわかる。しかし「坏」のような年代の変化をよく反映する器種から見た場合、鬼ノ城からは宝珠つまみを持った「坏G」は出土するが、古墳時代的な古い器形である「坏H」がこれまで出土したことはない（村上2010）。坏Gと坏Hは須恵器編年でいうTK217（飛鳥Ⅱ期を中心とする。７世紀第２四半期に比定）の中で交替して、その後は坏Gのみとなっていく。TK217期は、最新の須恵器の実年代観でいうと７世紀中葉から670年頃で、鬼ノ城が最初に築城された年代はぎりぎり660年代に入る可能性は残されているものの、出土遺物からみた創築期は飛鳥Ⅳ期（680年以降）であり、少なくとも坏Hが出土しない鬼ノ城がTK217期を飛び越えて７世紀前半にまで遡る可能性はなくなったといえる。

ここで問題となってくるのは二つあり、①礎石建物に下層遺構（掘立柱）がないことも鬼ノ城の創築年代が遡らないことを示し、②コの字形門礎石のある瀬戸内の神籠石系山城が鬼ノ城との密接な関係を持っていたとすれば、その築城時期や整備時期も鬼ノ城と同時期であるとみられること、である。屋嶋城中心部と目される屋島寺からは坏Hや坏G蓋が出土しており、屋嶋城創築時の遺物と評価できる。TK217併行期の須恵器坏はこれまでも少量であるが、基肄城や金田城、鞠智城でも出土しており、天智紀山城と瀬戸内の古代山城間にも微妙な時期差があると考えた方が、その他の遺構（石塁・列石・門礎）についても理解しやすいかもしれない。

最近の調査で、神籠石系の山城からも年代を示す資料が増加してきている。御所ヶ谷城－７世紀第４四半期の須恵器長頸壷と８世紀前半の土師器、鹿毛馬城－８世紀初めの須恵器水瓶、永納山城－８世紀前半の畿内系土師器と７世紀末～８世紀初頭の須恵器坏蓋など、いずれもこれまでの年代観－７世紀前半とは大きく違っている。鹿毛馬城では水門背後で出土した須恵器甕破片がよく知られているが、水瓶頸部は列石前面の柱穴からの出土であり注目される事例といえる（未報告）。

唐原山城の須恵器甕は細かい年代比定の難しい甕破片資料であり、唐原城内の後期古墳群の存在も勘案しないとならない資料だと考えられる。おつぼ山城の小田編年Ⅳ～Ⅴ期という須恵器坏破片は実測図も示されておらず判断できない。七世紀前半という従来の年代観に一致する資料ばかり着目して、一致しない資料や矛盾する資料からは目をつむるという研究姿勢は古代山城研究の混乱を招いてしまいかねない。

炭素C－14年代

対馬金田城のビングシ山土塁中の炭化材の炭素年代測定値から「（最初の金田城は）６世紀末から７世紀初めごろにかけて築造された」とする著作や新聞報道を見ることがある。ビングシ山土塁が新旧二時期あることは事実としても、それを土塁中の炭化物で年代推定することは問題がある。土中には様々な時代の炭化物が混入しており、考古学的イベント（この場合は土塁の構築）に伴わない炭化物を年代測定しても意味がない年代しか得られない。

金田城では、ビングシ山の掘立柱建物内部の炉跡炭化物や南門から出土した加工材（板材）など、考古学的イベントに伴う試料(確実に遺構に伴う炭化物－火焚き痕跡､土器付着の煤､人工的な加工材など)の測定値はAD670年前後やAD650年前後とほぼ築城年代と整合している。鬼ノ城でも、第０水門外側の排水溝付近から出土した加工木材２点のAmS年代測定が行われているが、加工材の年代はAD670±10年の年代と推定され、出土土器と年代的に整合している。

鹿毛馬城の調査報告には、水門前面と背面から出土した柱根と板材について、AD560年やAD480年と

いった炭素年代測定結果が掲載されている。従来の年代観と合わないとコメントが付されているが、これらは較正前の年代であり、暦年較正すると７世紀代の年代を示している[6)]。1962年のおつぼ山城調査でも第１水門前面で柱根、東門付近で倒壊した柱と門扉らしい炭化材が出土している。これらはまさしく考古学的イベントに伴う試料であり、最新のAmS年代測定することによって北部九州の神籠石系山城の築造年代が明確になると思われる。第１水門前面の柱根は保存されていたと側聞するので、将来の調査に期待したい。

占地論

嶮山城類と緩山城類について、単に立地する山地の高低と捉えては「城郭」の縄張りを読み解いたとはいえない。嶮山城類といっても全て独立した高山に占地しているわけではなく、縄張りという点では特色がみられる。

金田城も鞠智城も城壁最低点が平地近くまで下るという点では緩山城類に一見似ているが、周辺地形まで含めると緩山城類とは全く異なった占地を取っていることが判明する。金田城は城山北端と対岸の鋸割岩間の細り口を塞げば黒瀬湾への侵入はできない。黒瀬湾を外城として取り込んだ複郭的構想が窺える。鞠智城も米原台地北側に谷盆地を挟んで丘陵が取り巻き、南側は迫地が幾重にも入り込んで台地への侵入を阻む地形となっている。

瀬戸内の諸城では、永納山城と大廻小廻山城が標高は緩山城類に近いが、周囲を丘陵が取り巻き、城内最低点を背後の谷盆地側に開く状況は鞠智城にも通じ、防御ラインとして縦深性を持たせた縄張りと評価できる。

緩山城類がおよそ戦闘的でないことは、城内最低点である水門部が平地に接しなおかつ平野側に向けて縄張りされていること、独立峰でなく背後に主山塊を持った支峰に占地していることからも、それは窺える。このタイプは欠石区間があり[7)]、軍事施設として大きな疑念点となっている。また山頂から扇形に稜線を下り２箇所以上の谷を取り囲むという共通したプランをとることが多い。いわゆる傾斜囲繞型の占地である。谷を多く取り込んでいる割に城内は傾斜地ばかりで平坦地に乏しい。北部九州に集中する緩山城類については、このような軍事施設として劣る点をどのように理解するか、少なくとも編年観的には、古代山城として形骸化が進んだ型式と考えらえる。

構造論

城壁の形態や折構造の有無、列石と土塁、内部施設の有無などが基本的な検討指標となるが、城壁のめぐらせ方－城壁の屈曲の度合い、敵折れ・味方折れによる横矢がかり、雉城・角楼の有無、城門の位置、尾根のどの部位に城壁を設けているか、城壁の高さや外壁面角度（遮断性）など戦術的な分析視角も重要である。古代山城は山地に占地している城郭だが、漫然と城壁を構築しているわけではない。城壁は山地の地形を利用しつつ立体的に構築されている。少なくとも現地を歩いて体感せねばそれは理解不能であり、報告書や地図を机上で眺めていても古代山城を理解したとは言えない。

城門については、最近調査事例が増加し実態が判明しつつあるが、城門の存在自体明らかでない城跡も依然多い。特に北部九州の神籠石系山城では門跡はあっても門柱さえ検出されない事例があり、普請（土木）のみ完了して作事（建築）に取りかかっていない状況が推測される。門礎石については、九州＝円柱、瀬戸内＝方形柱という２グループに大別できるが、瀬戸内のコの字型門礎石は原位置をとどめていないものが多く、鬼ノ城を除いて軸摺穴もないため、未完成と考えられる[8)]。

構造論は、例えば「石塁構築技法」単体で成り立つものではなく、山城構造の各パーツ編年論とも相互に一致する必要があるし、占地論（縄張り論）と双方向的に関係し合いながら初めて意味を持つ。いわば車の両輪といえる。先にも述べたように、編年序列は北部九州の神籠石系諸城の編年的位置づけが論点となっており、時期の差は「対外防衛」から「律令制化・地域支配」へという機能差として段階的

な築造課程が捉えられ、新しい時代になるにつれ軍事性は低下していくと考えられる。

列石

日本への山城導入期に、列石を使用する工法も入ってきていることは間違いなさそうだが、朝鮮半島でもまだ普及していない状況で、自然石・割石使用の段階であり、切石の大きな列石が古い段階に日本で先に登場するとは考え難い。神籠石系山城の中でも北部九州の切石列石を持つグループを古く考える説は韓国における城郭調査の成果とも矛盾している。

北部九州の神籠石系山城の列石には、列石前面上部の縁をL字に「切り欠き加工（段差調整面）」を施している事例が多い。この加工は列石の上縁線を揃えるために為されたもので、列石線の見た目という装飾的な意味と版築土塁の削土範囲を示すという実利的な機能が考えられる。実利的な機能を考えれば、土塁を築かない場合、この加工は不要であるが、杷木城や唐原城でも切り欠き加工は施されている。列石にはL字加工を施すという石材加工作業のルーチンが残存しているとすれば、「痕跡器官」的な加工と考えられ、編年序列としては最後に位置付けられる。

石塁構築技法

古代山城だけでなく石塁（石垣）を理解するためには、内部構造が重要である。近世城郭の石垣と朝鮮半島の古代山城では、外面が似ていたとしても、内部構造は全く異なっている。石垣というと内部はグリ石が入っているというのは日本人研究者の先入観であることをまず認識しなければならない。

石塁構築は地域の伝統的な工法の背景と使用できる石材､加工技術等々､諸々の条件があって成り立っている。近世城郭石垣も小牧山城や安土城以降の試行錯誤、地方石積み工人の吸収など様々な経験と試行錯誤の結果、完成を見るのであって、大野城など天智紀山城を築城時の石塁構築は困難を極めたと思われる。

瀬戸内の古代山城の石塁は様々な様相が見られるが、その中では鬼ノ城－石城山城（東水門）－阿志岐山城（第３水門）に一定の発展系列が見いだせる。いずれも加工を施した長方形石材を使用しているが、鬼ノ城ではなかった鍵型石加工が石城山城や阿志岐山城で登場し、石城山城からは徐々に後ろへ下げて積む技法（控え積み）が現われ、阿志岐山城では顎止め加工（抉り込み加工）も施される。大野城などの天智紀山城から瀬戸内の山城までは内部は、ほぼ同大の石材を層状に積む－半島系の石塁に連なる工法で築かれている。

北部九州の神籠石系山城の石塁は、いずれも切石積み石塁である点が特徴であるが、阿志岐山城の特異な列石構築技法を応用した感がある。外壁面石材の加工がさらに進む。積むというより組み立てる形に近くになり､内部もグリ石が使用されるように変わる。この後は石材の小型化や石塁高の低下となり、鹿毛馬や帯隈山のような石塁を用いない土塁式の谷間城壁も登場する。

小澤佳憲は石塁を外壁面で分析されているが､内部構造を加味しない議論は不十分の誹りは免れない。石塁を立体的な構築物と捉えるならこの点は重要である。横目地が通ることは石材を層状に積む工法から当然ともいえる石積みのあり方で、縦目地（重箱積み）は近世城郭のような構造では禁忌だが、古代山城の構造ではあまり問題とならない。

さらに石塁や列石については、石材供給の問題もある。天智紀や瀬戸内の山城では基本占地する山体から石材を採取していたのに対して、北部九州の神籠石系山城では外部から石材を搬入している。年代観としては、割普請の工区毎に個別に石材調達していた段階から、次第に石材供給と工事の分業化が図られる管理された築城工事へ移行していく様相が窺えるのである。

門礎石（唐居敷）

門礎石について、最近、小澤や赤司善彦より編年論が発表されているが、いずれも日本国内の古代山

城の門礎石の型式分類に基づいて編年されているが、唐居敷の構成要素である軸摺穴、方立、柱のバリエーションを型式として認定している。ほぼ同時期の城門の格付けによる門礎石の変化を時期差と評価するのは誤りである。

鞠智城の門礎石は軸摺穴しかないが、基肄城東北門や金田城も方立がないタイプで、大野城などと比べて簡略化したものと捉えて問題はない。コの字型門礎石についても、鬼ノ城、石城山、播磨城山城は酷似するが、讃岐城山城例は全体的に小型化している。

軸摺穴の形状（方形・円形）で大野城の門礎石を分類し、これを築造の時期差とするのも、軸摺金具に確金系（新羅・百済系）と皿系（中国・高句麗系）の２タイプあることを前提とし、日本への導入時に２系列あったと考えれば、全く問題なく理解できる。

唐居敷は７世紀代に寺院建築と共に導入された新しい建築技術であって、川原寺下層（推定川原宮）出土の石製唐居敷を最古例とする。特に山城における唐居敷は掘立柱→礎石建ての変化はあるが、ほとんどの山城で掘立柱式の時期に廃絶してしまう。大野城や水城では礎石建ての時期まで二段階程度変化し、傾向として簡略化に向かう。最近、兵庫県の駅館遺跡（落地（八反坪）遺跡、古大内遺跡）でも石製の唐居敷が見つかり、若干資料は増えたものの、円形軸摺穴＋長方形方立の通常の唐居敷であり、大勢に影響はない。

おわりに

年代論や築城主体論から次フェーズの研究段階へステップアップしていくためには、律令国家形成史の中での位置付け、地域史の中での位置付けなど―考古学だけでなく広い視野が必要である。そのためには文献史学や歴史地理学の研究成果から学ばねばならないことも多い。出土土器の実年代観をめぐって「650年まで遡る」とか「660年代になんとか収まる」といった年代論をいまだに聞く。天智紀など文献記載の山城とともに、文献未記載の山城の築造場所も当初から決められていたと推定し、築城の取り掛かりに大きな時期差はなかったとする意見をいまだに聞く。鬼ノ城のように出土土器による年代が明らかになっても、築城契機について白村江敗戦に求めようとする見方は根強い。

このような考えを見聞きするたびに占地論や構造論への理解と深化が必要だと痛感する。古代山城築造の意義が軍国体制建設のための地域編成と密接に関わっているとするならば、些末な議論に陥っている感も拭えない。７世紀の地域支配体制の確立過程の研究こそ重要な議論であって、山城の築造年代がその「鍵」を握っているかもしれない。

註

１）栢嶺山城では若干新羅の遺物も出土しているとの情報もあるが、門構造、木槨庫など百済山城と考えられる。

２）拙著（向井2016）では、聖興山城の西側の石築城が「新城」、東側の城を「古城」と考え、古城を501年に築かれた加林城に比定したが、最近の調査で東側の城は高麗時代に付加された外城と判明した。高麗時代に増築された外城は寧越・正陽山城でも確認されている。外城は本城（内城）に比べて簡単な構造であることが多い。

３）城門開口部曲線構造は、次第に守りの堅い「食違い門」に発達していくと考えられる。

４）帯隈山周辺に須恵器窯跡が分布することも陶棺出土の背景と思われる。

５）土段式の土塁形態は韓国にはなく日本独自のもので、内托土塁の簡略化した形態と考えられる。

６）鹿毛馬城の炭素年代はβ線法による古い調査結果であるため、誤差が大きく、一部のデータは大きく汚染の影響を受けているとみられる（紀元前になっているものあり）。

７）北部九州の神籠石系山城にみられる欠石区間（周長の１/３～１/２近くの列石や土塁が築かれていない）について、亀田修一は「未完成説」を提唱しているが、未完成という言葉だけが一人歩きし始めていることを懸念している。筆者はある一定の方向（駅路や官衙など）から見える範囲だけ構築している状況「見せる山城」と評価する（向井2016）。

８）最近、讃岐城山城の外郭（第２車道）では、列石だけ並べた遺構が確認されている。讃岐城山城には、ホロソ石と呼ばれる門礎石のコの字型の抉り加工が途中で中断している事例もある（サルブチ滝のホロソ石）。

参考文献

東潮・田中俊明1988『韓国の古代遺跡１新羅篇（慶州）』中央公論社
東潮・田中俊明1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社
今井和彦・工藤茂博・向井一雄1996「讃岐城山城跡の研究」『溝婁』第６号,古代山城研究会
今村峯雄・小林謙一・新免歳靖・坂本稔・谷山雅彦2007「炭素14測定からみた鬼城山遺構の築造年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集
岡山県教育委員会2013『史跡　鬼城山２「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』
岡山県古代吉備文化財センター 2013『鬼ノ城発掘調査報告会　ここまで分かった鬼ノ城』
小澤佳憲2014「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第２号,熊本県教育委員会
小澤佳憲2018「石垣構築技術からみた鞠智城跡石垣の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第６号,熊本県教育委員会
穎田町教育委員会1998『国指定史跡鹿毛馬神籠石』
亀田修一2015「古代山城を考える－遺構と遺物－」『古代山城と城柵調査の現状』平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会発表要旨集
韓国城郭学会・古代山城研究会2009「特集　日韓古代山城研究セミナー」『溝婁』第14号,古代山城研究会
熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第８～32次調査報告－』
佐賀市教育委員会1969『帯隈山神籠石東北部調査概要』
瀬高町教育委員会1982『女山・山内古墳群』
大平村教育委員会2003『唐原神籠石Ⅰ』
高松市教育委員会2007『屋島寺』
高松市教育委員会2016『屋嶋城跡－城門調査整備事業報告書』
筑紫野市教育委員会2008『阿志岐城跡－阿志岐城跡確認調査報告書』
対馬市教育委員会2008『古代山城　特別史跡金田城跡Ⅲ』
西川宏1993「朝鮮式山城の源流についての初歩的探求」『古文化談叢』30中,九州古文化研究会
堀江潔「百済滅亡後における倭国の防衛体制－斉明紀「繕修城柵」再考」『日本歴史』第818号,吉川弘文館
美津島町教育委員会2000『金田城跡』
向井一雄1991「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』第125号,古代学研究会
向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第27号,地域相研究会
向井一雄2001「古代山城研究の動向と課題」『溝婁』第９・10合併号,古代山城研究会
向井一雄2014「韓日古代山城の城門に関する一考察（予察）」『百済文化』第50輯,韓国公州大学校・百済文化研究所
向井一雄2016『よみがえる古代山城－国際戦争と防衛ライン－（歴史文化ライブラリー）』吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り（吉備考古学ライブラリィ２）』吉備人出版
村上幸雄2010「鬼ノ城－城門遺構の調査と出土土器による年代－」『古代文化』61-4,古代學協會
門田誠一1986「東アジアにおける神籠石系山城の位置」『古代学研究』第112号,古代学研究会
八木充2008「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』第722号,吉川弘文館
行橋市教育委員会2006『史跡　御所ヶ谷神籠石Ⅰ』
渡辺正気1988「神籠石の築造年代」『考古学叢考』中、吉川弘文館

図版出典

図１～２、表１～２：向井作成
表３：岡山県古代吉備文化財センター 2013
表４：熊本県教育委員会2012
表５：大野城心のふるさと館2018『再々発見！古代山城と水城・大野城』特別展図録
図３：大平村教育委員会2003
図４：佐賀市教育委員会1969
図５：瀬高町教育委員会1982
図６：穎田町教育委員会1984『鹿毛馬神籠石』
写真１：須原緑2008「鹿毛馬神籠石」『季刊韓国の考古学』７号
図７：行橋市教育委員会2006、岡山県教育委員会2013、福岡県教育委員会2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』高松市教育委員会2016、佐賀県教育委員会1967『帯隈山神籠石とその周辺』、西条市教員句委員会2012『史跡永納山城跡Ⅱ』、村上幸雄・乗岡実1999
図８：村上幸雄・乗岡実1999、佐賀県1967、神埼町1969『帯隈山神籠石天童山東部調査概報』
図９：村上幸雄・乗岡実1999、古代山城研究会『溝婁』、穎田町教育委員会1998
図10：福岡県2010、鬼ノ城学術調査委員会1980『鬼ノ城』、筑紫野市教育委員会2008、武雄市1965『おつぼ山神籠石』、みやま市教

育委員会2013『女山神籠石』、行橋市教育委員会2006、大平村教育委員会2003

図11：基山町教育委員会1977『特別史跡基肄城跡』、瀬高町教育委員会1982、新宮町教育委員会1988『城山城』、美津島町教育委員会2000、行橋市教育委員会2006、筑紫野市教育委員会2008

図12：小澤佳憲2014

図13：東潮・田中俊明1995

図14 ～ 15：古代山城研究会2007『溝婁』13号

図16：東潮・田中俊明1988

図17：向井2016

図18：高正龍1995「韓国古代山城」『古代文化』47-12（443号）

図19：古代山城研究会1999『溝婁』８号

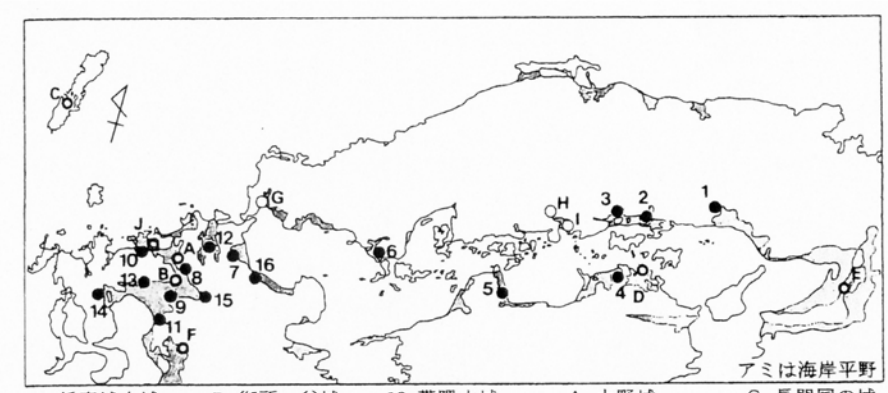
写真２：向井撮影

写真３：（財）忠清文化財研究院2003『大田月坪洞山城』

図20：沈相六2014「2013年扶余羅城発掘調査成果報告」『季刊韓国の考古学』25号

図21 ～ 24：向井2014

図25 ～ 27：向井1999



1 播磨城山城　2 大廻小廻山城　3 **鬼ノ城**　4 讃岐城山城　5 永納山城　6 石城山城
7 御所ヶ谷城　8 **阿志岐山城**　9 高良山城　10 雷山城　11 女山城　12 鹿毛馬城
13 帯隈山城　14 おつぼ山城　15 杷木城　16 **唐原山城**
A 大野城　B 基肄城　C 金田城　D 屋嶋城　E 高安城　F 鞠智城
G 長門国の城　H 常城　I 茨城　J 怡土城

図1　古代山城分布図

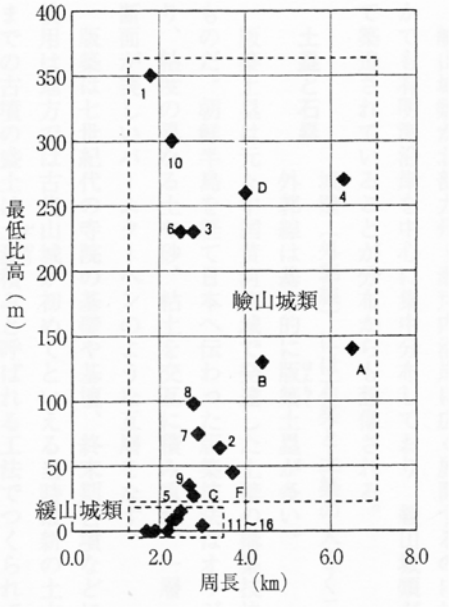


図2　古代山城周長比高グラフ

表1　古代山城構造比較一覧

	山城名	所在地	周長(km)	標高(m)	最低比高(m)	占地	外郭線構造					列石・石材							城門	
							土築・石築	墨形態	折・曲	版築	水門	列石	石材加工	石材供給	被覆・露出	置き方	段差調整面	列石前柱（有無・間隔m）	城門	門礎
1	播磨城山城	兵庫県たつの市	1.8	458	350	嶮	石・土?	土段	折?		石墨		野面	現地					○?	凹型
2	大廻小廻山城	岡山県岡山市	3.4	198	64	嶮	土	土段	折	◎	石墨	◎	割石	現地	被覆	寝	×	×	○?	
3	鬼ノ城	岡山県総社市	2.8	403	230	嶮	土・石	内托	折	◎	石墨	◎	割石	現地	露出?	寝	×	◎3.0	◎	凹○型
4	讃岐城山城	香川県坂出市・丸亀市	6.3	462	270	嶮	石・土	土段	折		石墨	○	野面	現地	被覆	寝	×		◎	凹型
5	永納山城	愛媛県西条市	2.5	128	15	緩	土	土段	折	◎		◎	割石	現地	被覆	寝	×	○3.		
6	石城山城	山口県光市・田布施町	2.5	350	230	嶮	土	土段	折	◎	石墨	◎	割石	現地	被覆	立	○	◎2.19	◎	凹型
7	御所ヶ谷城	福岡県行橋市・みやこ町	2.9	247	75	嶮	土	内托	折	◎	石墨	◎	切石	現地	被覆	立	◎	◎1.8	◎	
8	阿志岐山城	福岡県筑紫野市	2.8	339	98	嶮	土	土段	折	◎	石墨	◎	切石	現地	露出?	立	×		○?	
9	高良山城	福岡県久留米市	2.7	252	35	緩	土	土段	曲	○?	石墨?	◎	切石	現地?	露出?	立	×			
10	雷山城	福岡県糸島市	2.3	483	300	嶮	土墨なし		折		石墨	◎	切石	搬入	露出	立	◎	×		
11	女山城	福岡県みやま市	3	202	4	緩	土	土段	曲	◎	石墨	◎	切石	搬入	露出	立	◎	◎3.0		
12	鹿毛馬城	福岡県飯塚市	2.2	70	0	緩	土	土段	曲	◎	土墨	◎	切石	搬入	露出	立	◎	◎3.0	○?	
13	帯隈山城	佐賀県佐賀市	2.4	174	9	緩	土	土段	曲	◎	土墨?	◎	切石	搬入	露出	立	◎	◎3.0	◎	
14	おつぼ山城	佐賀県武雄市	1.9	66	0	緩	土	土段	曲	◎	低石墨	◎	切石	搬入	露出	立	◎	◎3.0	◎	
15	杷木城	福岡県朝倉市	2.3	130	8	緩	土墨なし		曲	○?	石墨	◎	切石	搬入	露出	立	◎	×		
16	唐原山城	福岡県上毛町	1.7	73	0	緩	土墨なし		曲?		低石墨	◎	切石	搬入	露出	立	◎	×	○?	
A	大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140	嶮	土・石	内托	折	◎	石墨	◎	野面	現地	被覆?	寝	×	◎1.6	◎	○型
B	基肄城	佐賀県基山町	4.4	416	130	嶮	土	内托		○?	石墨		野面	現地					◎	○型
C	金田城	長崎県対馬市	2.8	276	27	緩	石	内托	折?		石墨	○?	野面	現地					◎	○型
D	屋嶋城	香川県高松市	4	292	260	嶮	石	内托・折					野面	現地					◎	
E	高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町		488		嶮	土?	土段?				○?								
F	鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	3.7	169	45	緩	土	内托		○?		◎	野面	現地	被覆?	寝	×	◎1.8	◎	○型

表2　古代山城編年指標（上段：朝鮮半島、下段：日本）

指標	3C	6C		7C		8C	9C	
柱間間隔		←―――	1.2～1.8m	――――→	←―――	3.0m→	3.5～4.0m	→
列石有無	列石なし	←――――――→			列石あり→			
版築	版塊連接	――→	通常版築	――――→				
石築		石築出現→		切石使用→				
大型化					大型化→			
折れ				折れ→	曲線→			
切石				←野面・割石→	切石→			
占地				嶮山城→	緩山城→			

表3　鬼ノ城城内各地区の変遷（青の部分は各地区の消長を示す。出土遺物の量をもとに作成）

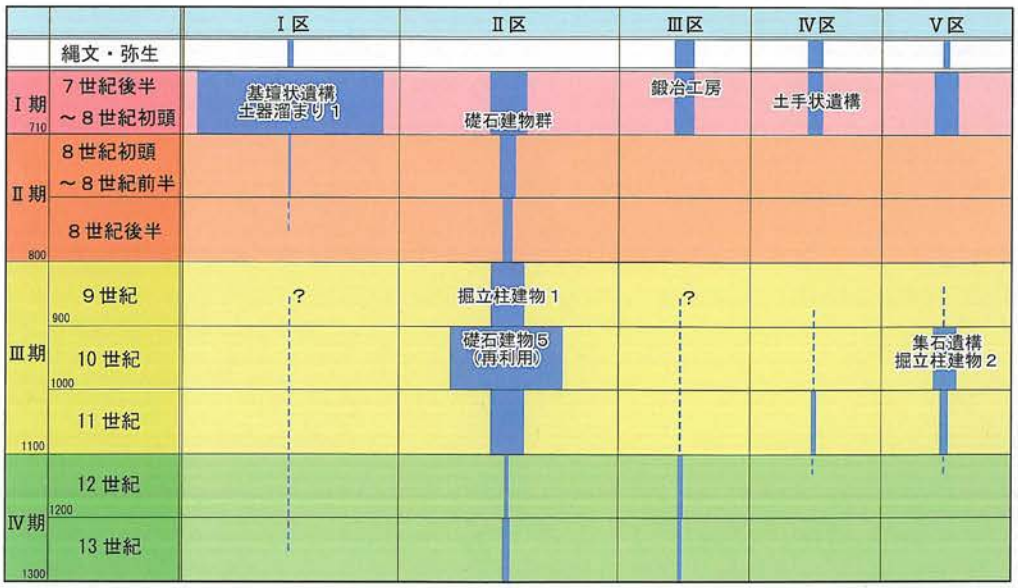


表4　鞠智城跡出土土器の時期別数量比較

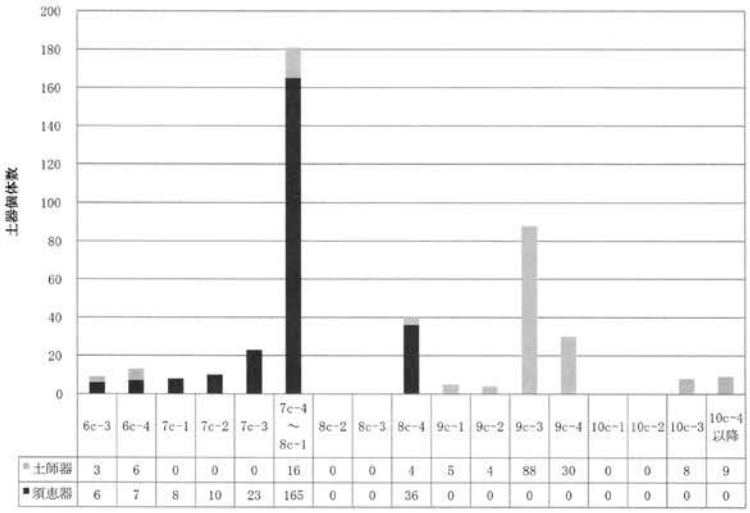
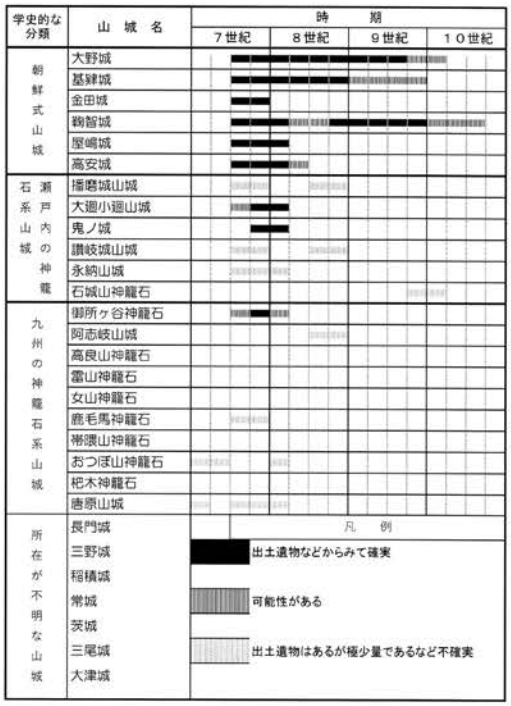


表5　古代山城出土土器の時期（赤司善彦作成）



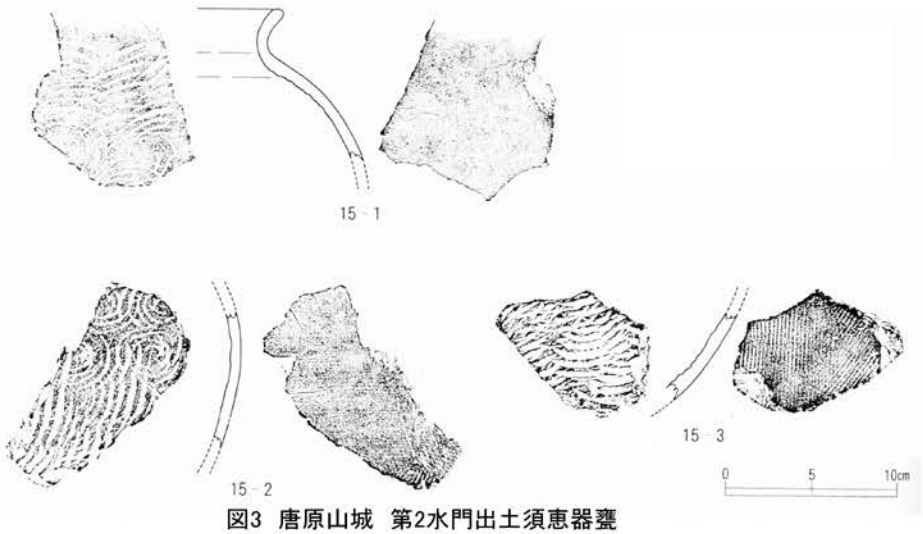


図3　唐原山城　第2水門出土須恵器甕

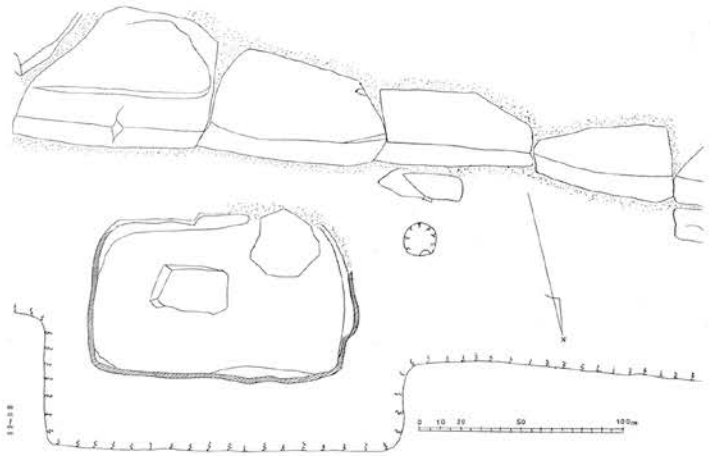


図4　帯隈山城の陶棺との切り合い関係

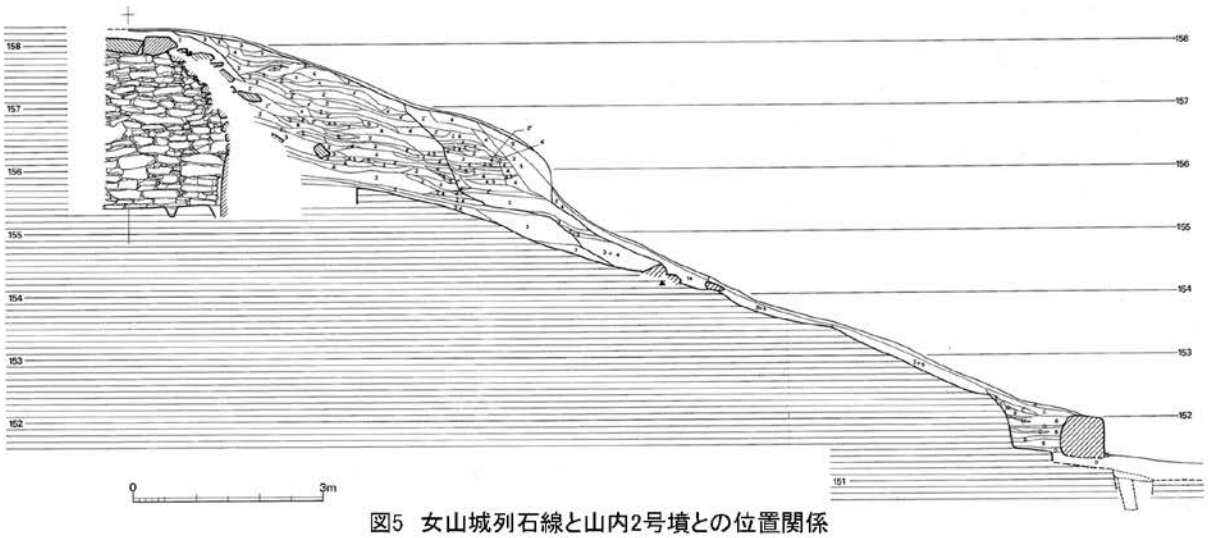


図5　女山城列石線と山内2号墳との位置関係

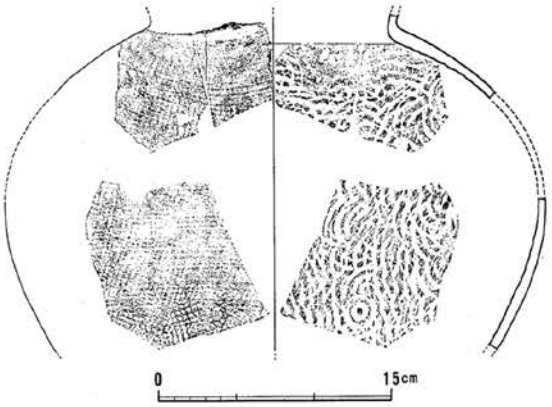
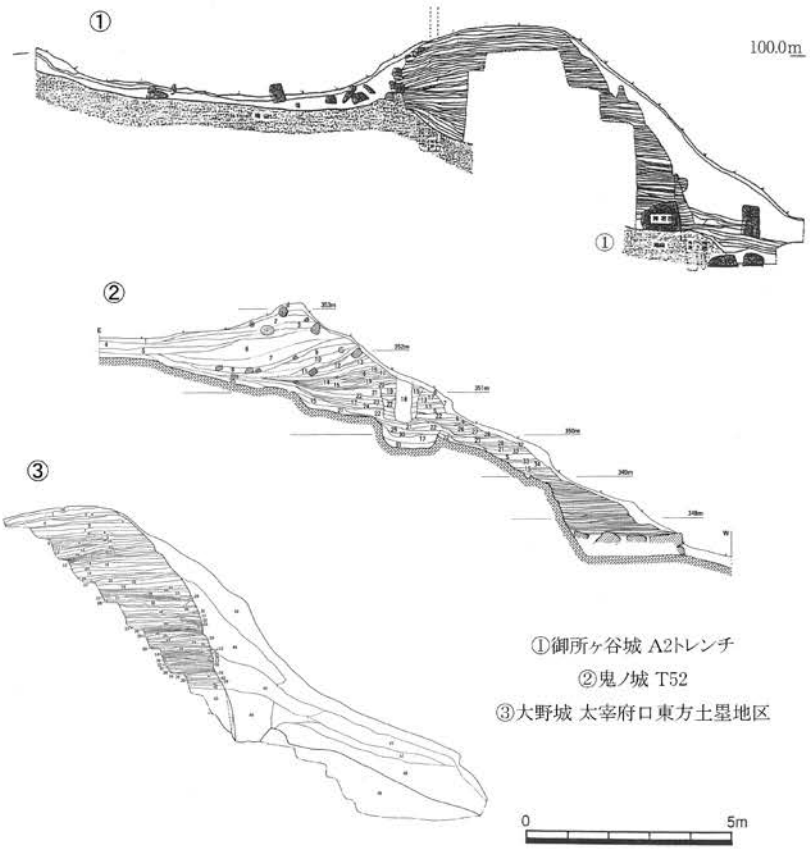
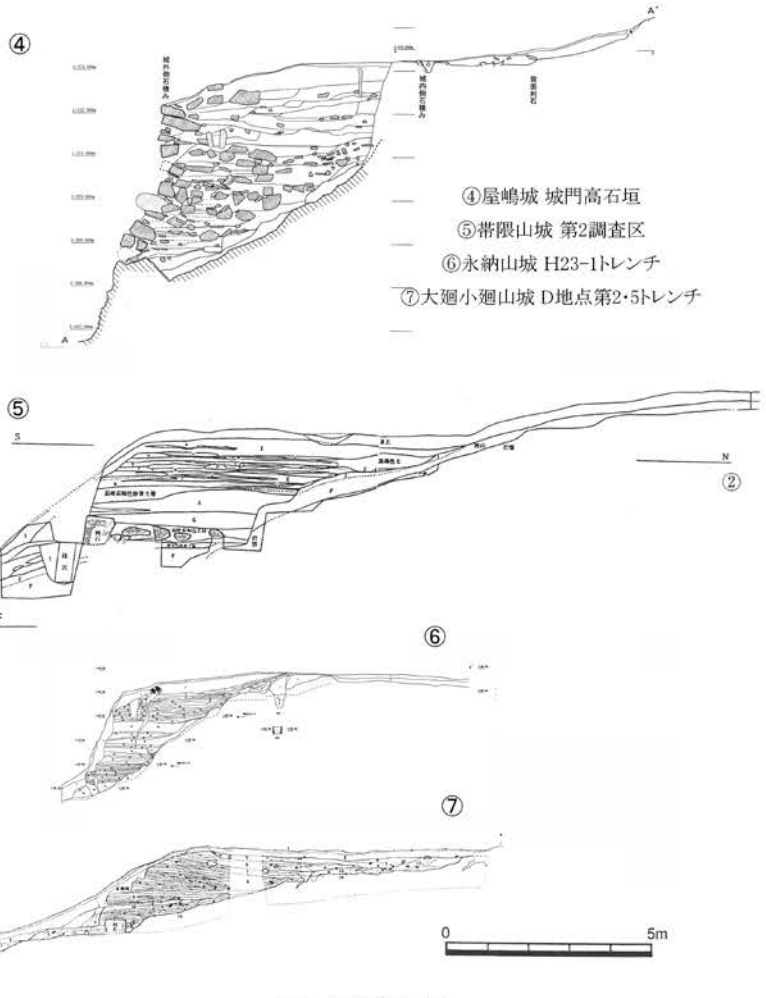


図6　鹿毛馬城　水門背後出土須恵器甕

写真1　鹿毛馬城　列石前面柱穴から須恵器水瓶出土状況

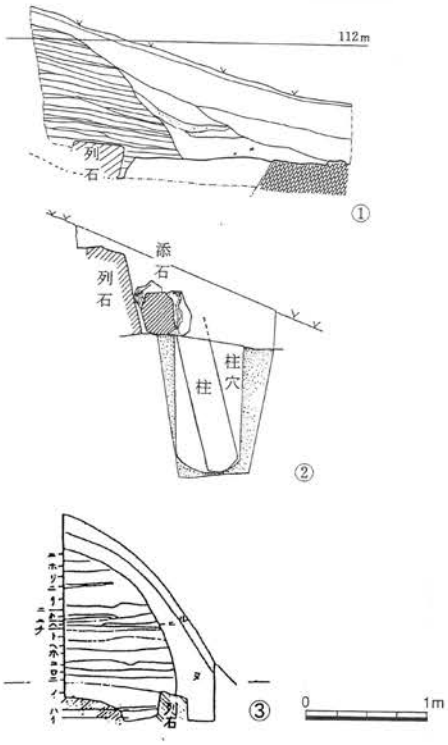


①御所ヶ谷城 A2トレンチ
②鬼ノ城 T52
③大野城 太宰府口東方土塁地区



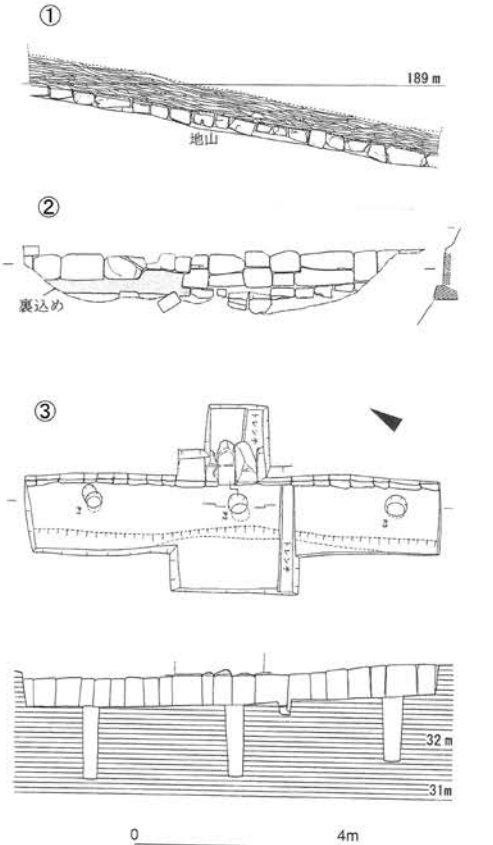
④屋嶋城 城門高石垣
⑤帯隈山城 第2調査区
⑥永納山城 H23-1トレンチ
⑦大廻小廻山城 D地点第2・5トレンチ

図7 土塁断面図



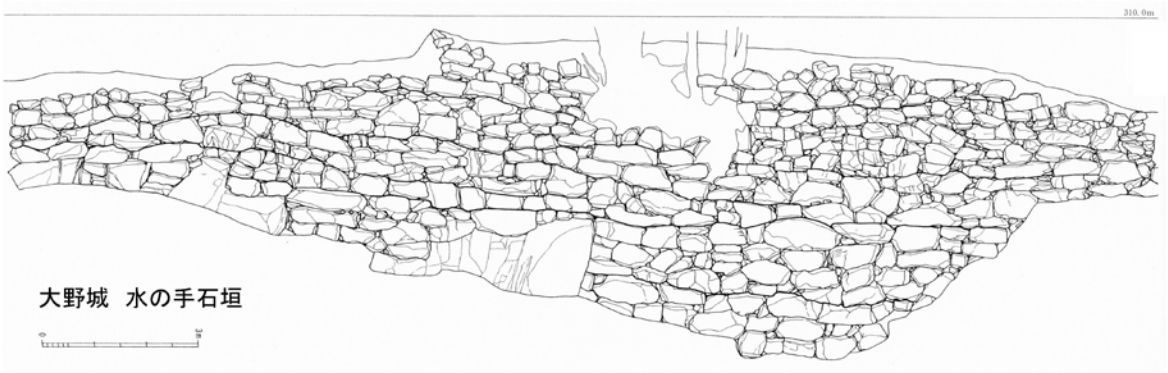
①大廻小廻山城 L地点第4・5トレンチ(列石被覆)
②帯隈山城 第4調査区(列石露出)
③帯隈山城 天童山東部第4区

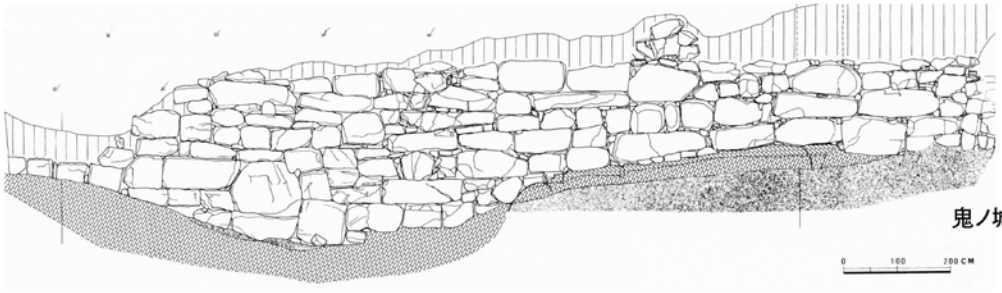
図8 列石前面部の状況



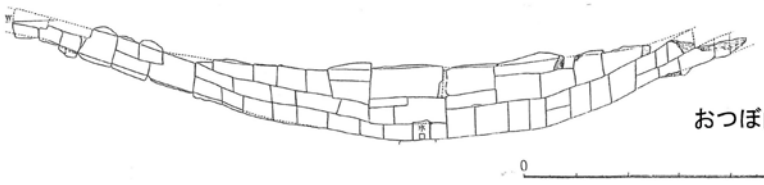
①大廻小廻山城 H地点
②阿志岐山城 A墓状遺構
③鹿毛馬城 Aトレンチ

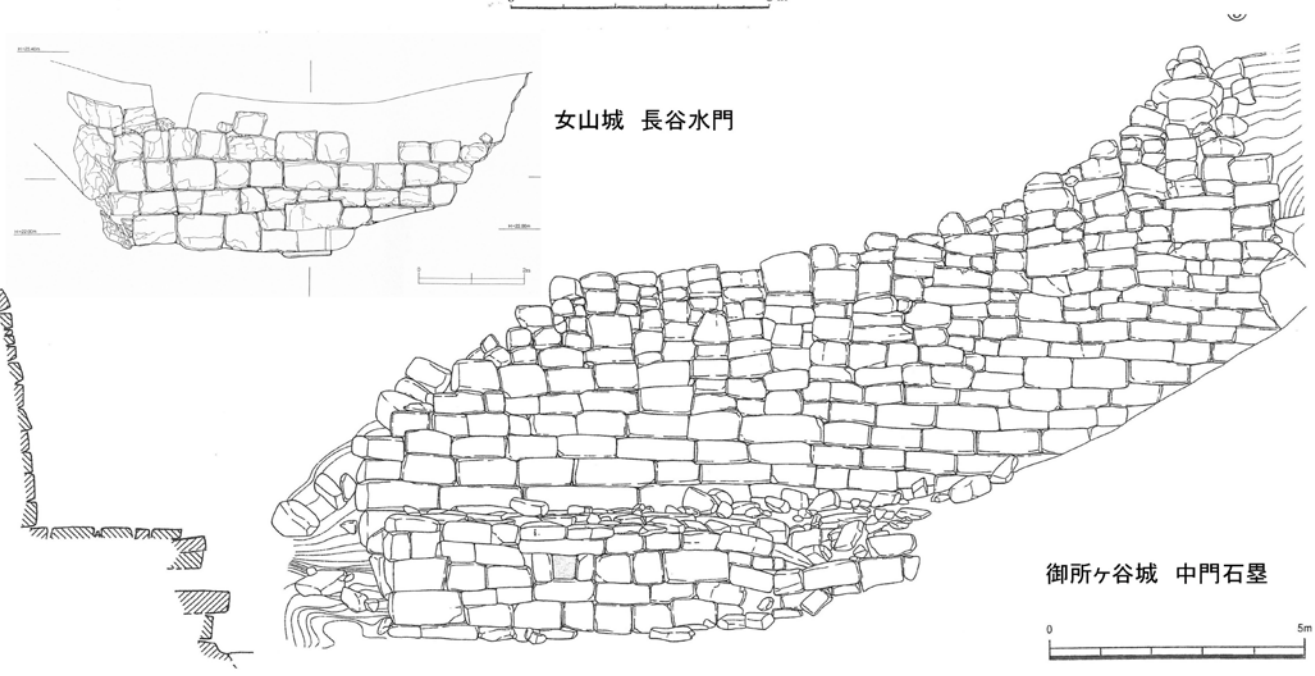
図9 列石立面図


大野城　水の手石垣


鬼ノ城　第2水門

阿志岐山城　第3水門


おつぼ山城　第二水門
0
5m


女山城　長谷水門
御所ヶ谷城　中門石塁
0
5m

唐原山城　第1水門

図10 石塁

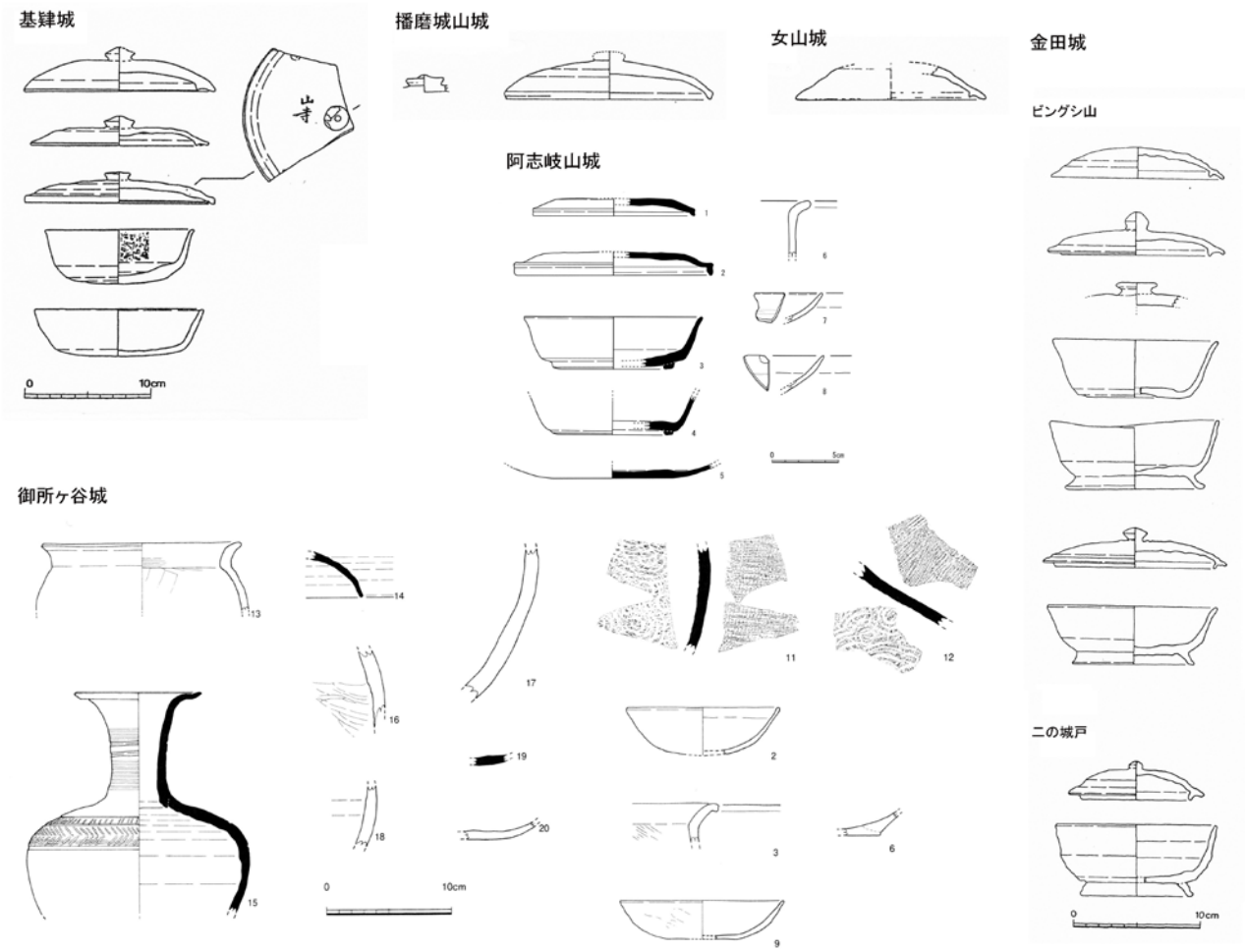


図11 各地の山城の出土遺物（須恵器・土師器）

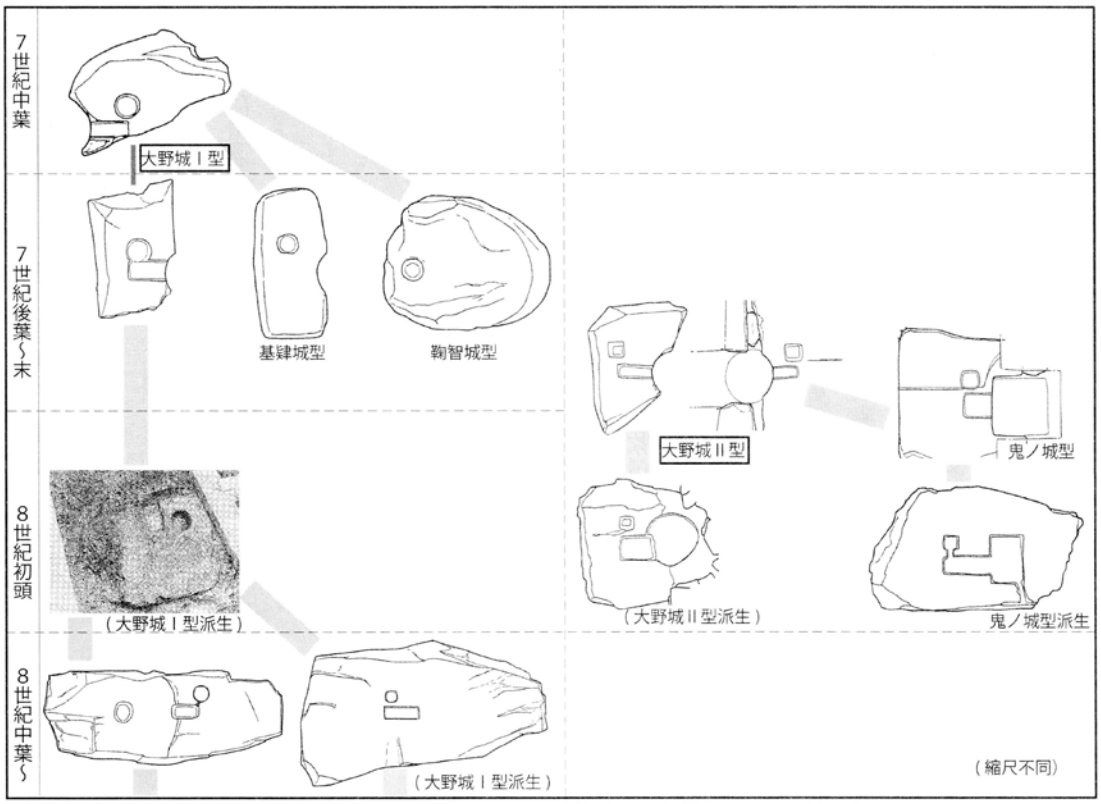


図12 石製唐居敷の分類と編年（小澤佳憲作成）

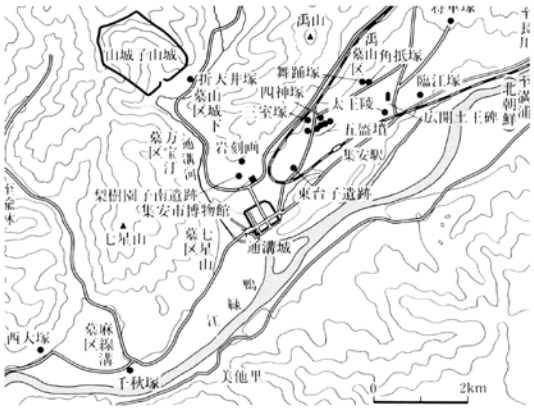


図13 集安周辺の山城・古墳群

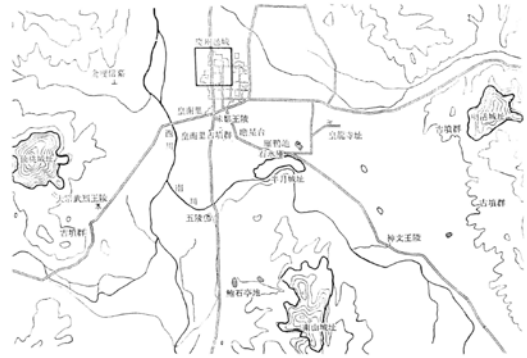


図14 慶州周辺の山城

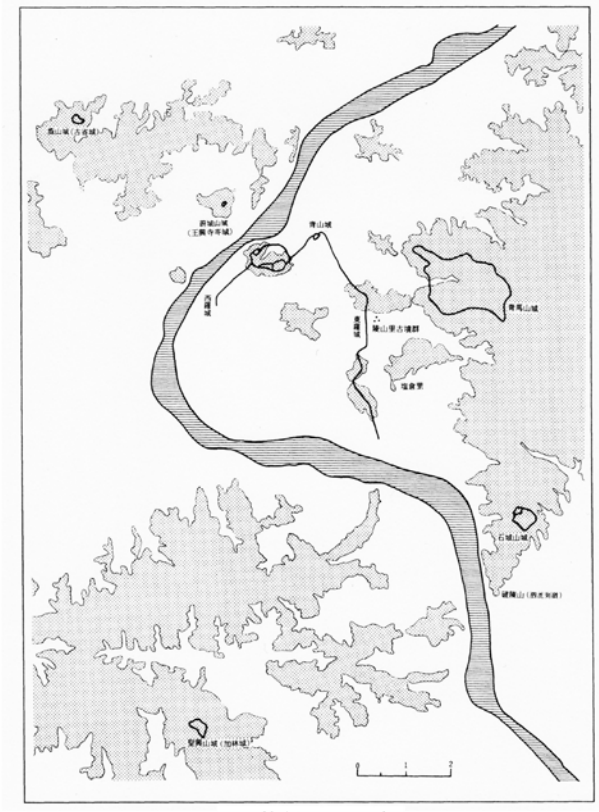


図15 扶余周辺の山城

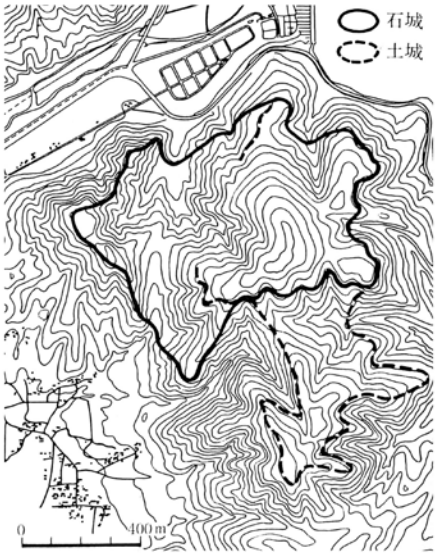


図16 明活山城

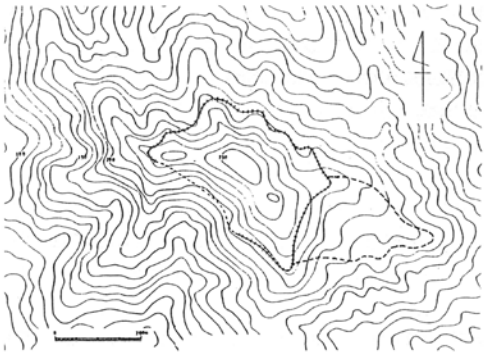


図17 聖興山城

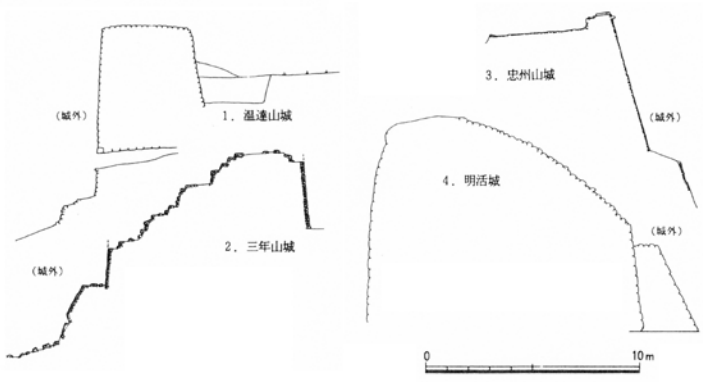


図18 基壇補築 断面図

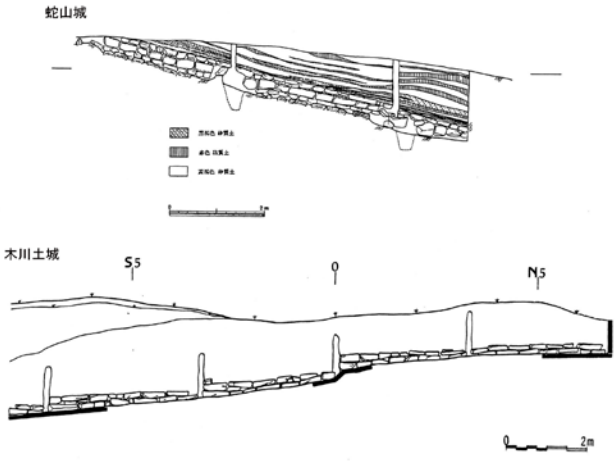


図19 韓国の基壇石(列石)立面図

写真2　忠州山城　石塁断面

写真3　月坪洞山城　城壁断面

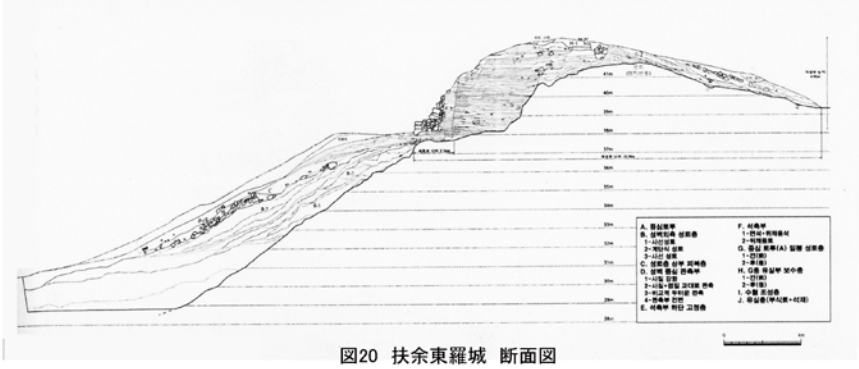


図20　扶余東羅城　断面図

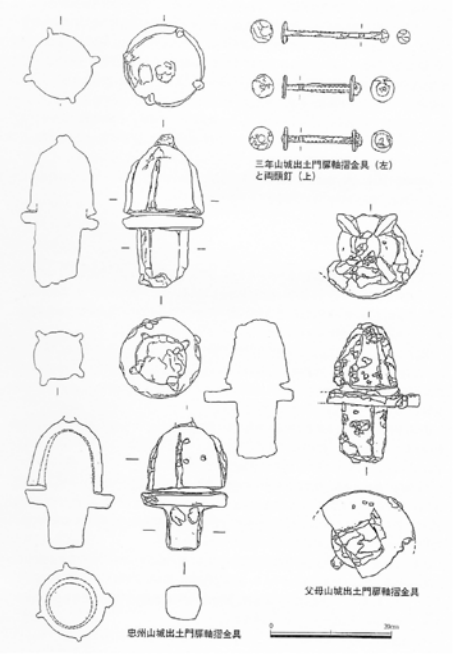


図21　確金（門扉軸摺金具）

図22　聖興山城　東門

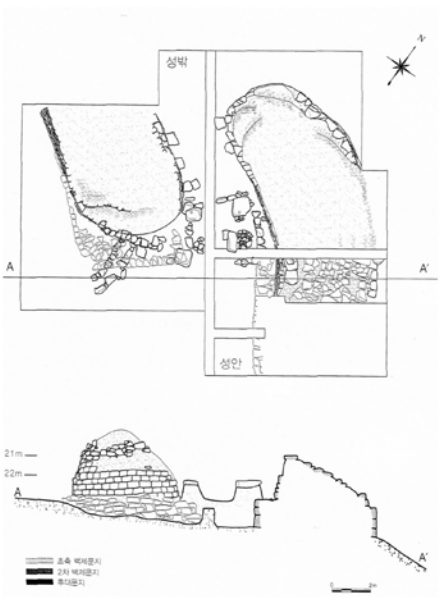


図23　古沙夫里城　西門

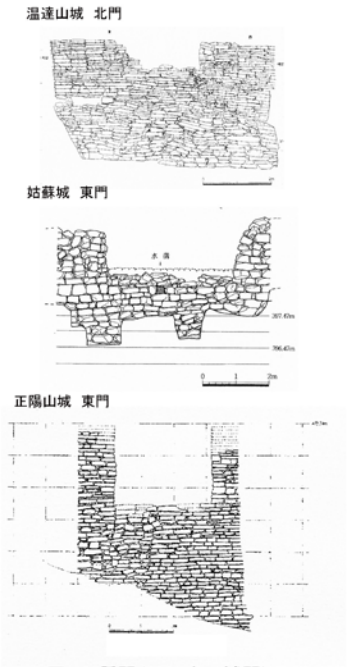


図24　懸門（凹形立面城門）

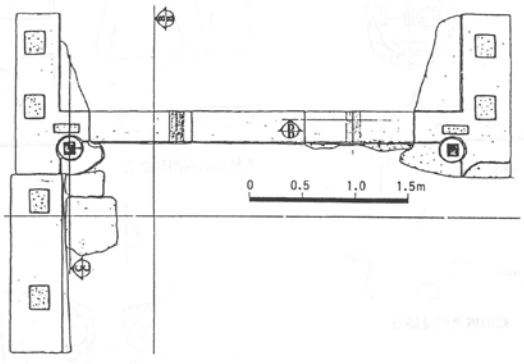


図25　三年山城　西門　門礎石（1期）

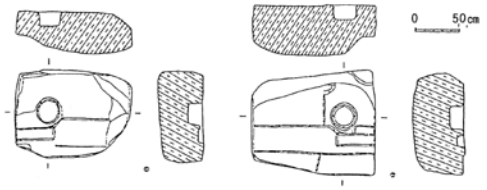


図26　会津土城　南門　門礎石

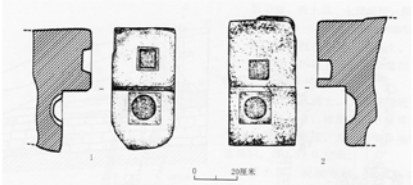


図27　石台子山城　北門　門礎石

第４章

有明海沿岸における古代山城の年代論

矢野　裕介

はじめに

我が国における古代山城の築城年代については、朝鮮半島における白村江の敗戦（663）を境として、それ以前か、以後かで議論の分かれるところであるが、７世紀中頃～後半にかけて築城されたとする見解は衆目の一致するところであろう。また、廃城年代についても、ほとんどの城が８世紀前半までにはその役割を終えたものとして大過ないものといえる。

そうしたなか、熊本県の北部に位置する鞠智城跡は、遺構の変遷、出土遺物等の検討から、７世紀後半から10世紀中頃まで存続したことが推定されており、大宰府都城の一角をなす大野城（福岡県太宰府市・大野城市・宇美町）、基肄城（佐賀県基山町・福岡県筑紫野市）とともに、８世紀以降も存続した城であることが明らかとなっている。大宰府から直線距離で約62㎞離れた鞠智城がかくも長きにわたって存続した要因として、城の役割・性格の究明が待たれるところであるが、坂本経堯が想定した「有明海侵入敵の確認・伝達」「大宰府非常に備えるための物資・兵器の蓄え」「九州南部の熊襲族に対する重鎮」がその議論の礎となっている。

本稿では、その一つに挙げられる「有明海の侵入敵の確認・伝達」について、有明海沿岸部に所在する古代山城を取り上げながら考えてみたい。

１．鞠智城について

まず、最初に鞠智城について述べておく。

鞠智城は、『続日本紀』文武天皇２年（698）５月条「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治せしむ。」の修繕記事を初見とし、『日本文徳天皇実録』天安２年（858）２・６月条、『日本三大実録』元慶３年（879）３月条に「菊池城院」「菊池郡城院」の名で、兵庫鳴動、不動倉焼失記事が散見する国史記載の城である。その城跡となる鞠智城跡は、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する菊池川の中流域、山鹿市と菊池市の市境に位置する。

筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高1,052m）の南西麓に発達した複雑な丘陵地帯の南端近く、標高145m前後の台地状丘陵、通称「米原台地」に鞠智城跡は立地する。南に望む平野部(菊鹿盆地)との比高差100m程の低丘陵でありながら、四周は急峻な斜面や崖線で囲繞されており、その城域については、古くより広域説、狭域説が議論されてきたが、狭域説のうち土塁線と崖線で囲繞され

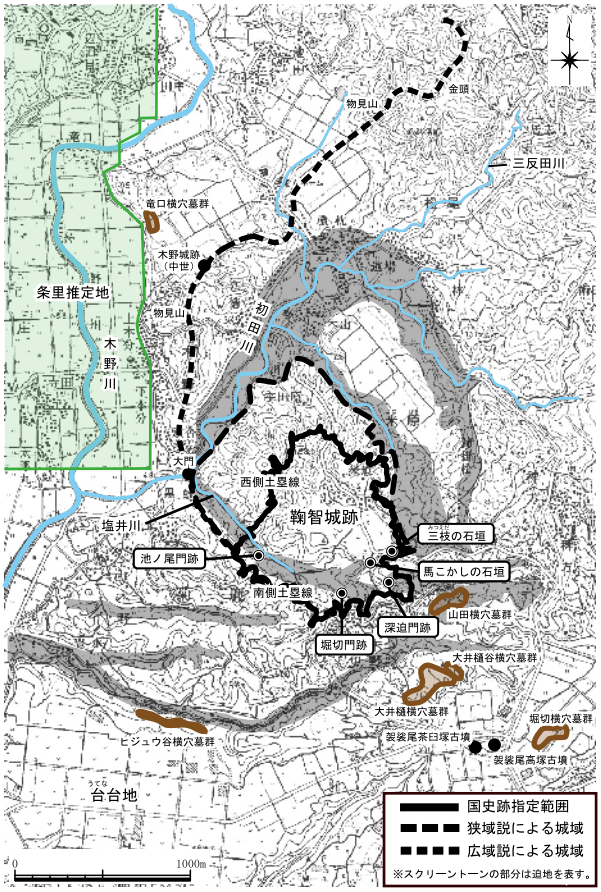


図１　鞠智城跡城域図

た周長3.5㎞、面積55haの範囲を内城地区とし、それを含む約64.8haが国の史跡に指定されている（図1）。

昭和42年（1967）に始まる発掘調査により、周長3.5㎞、標高90～171mの外郭線上に城門3箇所（深迫・堀切・池ノ尾）と土塁、石塁が検出されており、城内には、城の中枢域となる長者原地区を中心に72棟の建物跡、その北側谷部に5,300㎡の貯水池跡が検出さるなど、城の構造解明が進んでいる（図2）。また、須恵器、土師器などの日常雑器のほか、単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、農工具などの木製品、『秦人忍□五斗』銘の付札木簡（荷札）、銅造菩薩立像など、他の古代山城に比べて多くの遺物が出土しており、城の造営年代の検証を可能なものとしている（図3，4）。

鞠智城の変遷については、7世紀後半から10世紀中頃まで、5期に及ぶ時期区分と変遷（鞠智城Ⅰ期～Ⅴ期）が明らかとなっている。

その変遷を概観すると、鞠智城の創建期となる鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～第4四半期）に、城門、土塁、貯水池など、城としての施設が急速に整備され、次の鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）に、行政的機能を併せ持つ城の中枢施設が出現するなど、城内の施設が再編されるとともに、多数の人員を配置するなど、城の隆盛期を迎える。鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～第3四半期）で掘立柱建物から礎石建物に建て替えられるなど、施設の長期的な存続が図られる一方、配置人員は皆無に等しく、城の運営に変化が生じ、鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）以降は、中枢施設の消失、貯水池機能縮小の一方、礎石建物の大型化が図られ、食糧の備蓄的機能が主体となる。鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）には、大型礎石建物が再建されるなど食糧の備蓄機能が存続し、そして廃城を迎える。

このうち鞠智城Ⅲ期前半までの変遷は、大宰府政庁の変遷との比較のなかで、鞠智城Ⅰ期前半が大宰府政庁Ⅰ期古段階、鞠智城Ⅰ期後半が大宰府政庁Ⅰ期新段階、鞠智城Ⅲ期前半が大宰府政庁Ⅱ期にそれぞれ対比でき、ほぼ連動した動向であることが指摘できる。こうした連動は、少なくとも鞠智城Ⅲ期前半までは、鞠智城が大宰府との密接な関係のもと機能していたことを示すもので、大宰府防衛の一翼を担う軍事的役割とともに、その維持管理の面でも大宰府が大きく関与していたことがうかがえる。

六国史にみる鞠智城　＊『国史大系』吉川弘文館

甲申。令下二大宰府一繕中一治大野。基肄。鞠智三城上。
（書き下し文）
「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ。」
『続日本紀』文武天皇二（698）年五月二十五日条

丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。
（書き下し文）
「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「丁巳、又鳴る」
『日本文徳天皇実録』天安二（858）年二月二十四・二十五日条

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。
（書き下し文）
「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「同城不動倉十一宇火く」
『日本文徳天皇実録』天安二（858）年六月二十日条

肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。
（書き下し文）
「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」
『日本三代実録』元慶三（879）年三月十六日条

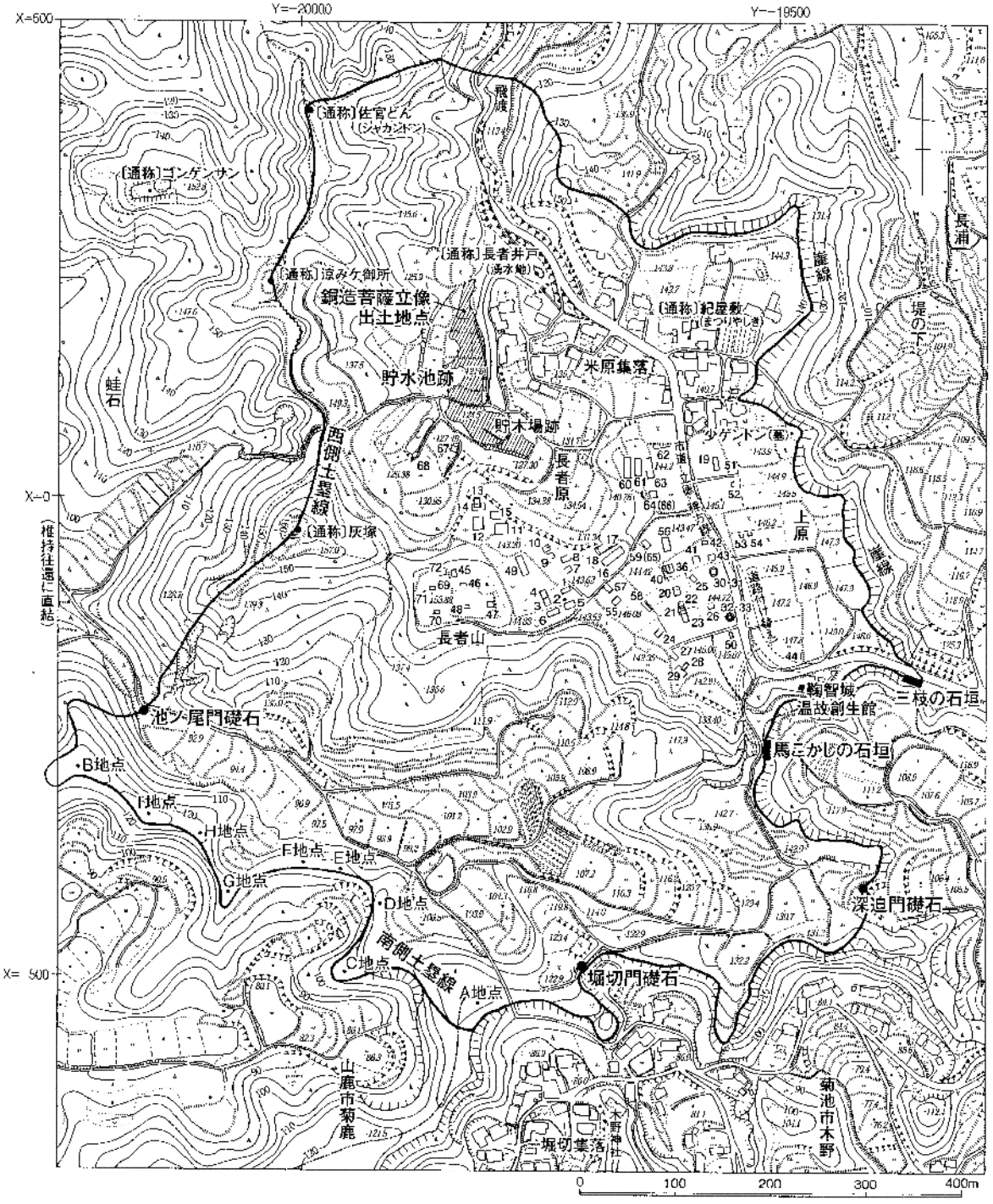


図２　鞠智城跡全体図

２．有明海沿岸部における古代山城

有明海沿岸部に位置する古代山城として、ここで取り上げるのは、有明海までさほど距離がない武雄盆地南端のおつぼ山城（佐賀県武雄市）、佐賀平野北端の帯隈山城（佐賀県佐賀市）、筑後平野東の高良山城（福岡県久留米市）、同じく南端の女山城（福岡県みやま市）の４城である（図5）。いずれも、いわゆる神籠石系（型・式）山城に分類され、土塁基底部に土塁基底部前面に切石加工の列石を巡らす山城で、ほぼ同時期に築造されたものと考えられるものである。以下に、各城の概要とその特徴を述べる（図6）。

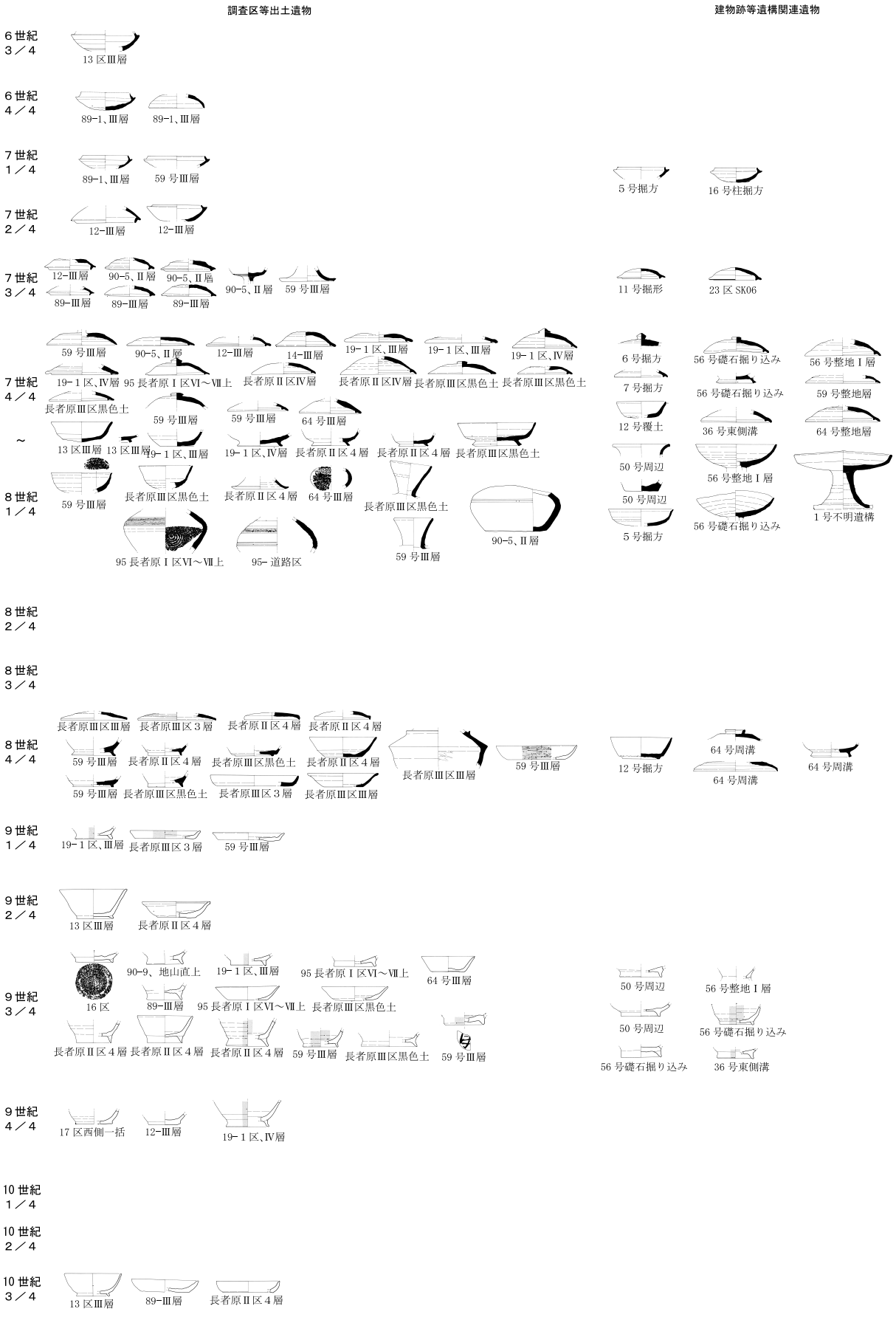


図３　鞠智城跡・長者原地区出土の土器

須恵器

土師器

軒丸瓦

木製品

炭化米

木簡

百済系銅造菩薩立像

図４　鞠智城跡出土遺物

（１）各城の概要

①おつぼ山城（史跡「おつぼ山神籠石」）

佐賀県の南西部、武雄盆地の南端近く、杵島山塊の西麓に位置する最高所66.1ｍのおつぼ山の東側を中心に立地する古代山城である。総延長約1.9㎞の外郭線は、おつぼ山周辺の地形に応じて、丘陵や峰を取り込みながら廻る。その外郭線上に、２箇所の水門（第１水門、第２水門）と２箇所の城門（東門、南門）、列石、土塁が確認されている。列石は曲線を基調とすることを特徴とする。列石は安山岩で、平均幅76㎝を図り、上縁加工を施す。土塁は調査箇所で幅9.0ｍを図り、土塁前面に柱間約3.0ｍ間隔の柱穴列が確認されている。

②帯隈山城（史跡「帯隈山神籠石」）

佐賀県の中央部、背振山系の南端に位置する標高174.6ｍの帯隈山の南斜面を中心に立地する古代山城である。南に佐賀平野を見わたすことができる。総延長約2.4㎞の外郭線は、帯隈山を取り込み、北側標高175ｍのから下って南側山裾を廻り、２～３の低丘陵を取り囲んだ馬蹄形状を為す。その外郭線上に、城門１箇所（北門）と列石、土塁が確認されている。列石は花崗岩で、上縁加工を施したものである。土塁は調査箇所で残存高2.6ｍ、幅9.0～10.0ｍを図る。このほか南側谷口３箇所に水門も推定されている。

③高良山城（史跡高良山神籠石）

福岡県の南部、耳納連山の西端、標高312ｍの高良山の北西斜面を中心に立地する古代山城である。筑後平野を西に見下ろす位置にある。総延長約2.7㎞の外郭線は、南北２つの谷と５つの峰をつなぐように巡る。その外郭線上に、水門１箇所（南谷水門）、列石が確認されている。列石の大部分は秩父古生岩で、ほか滑石、安山岩がある。幅は小さいもので18～20㎝のものがあるが、大部分は80㎝以上となる。大きいもので、3.2ｍがある。上縁加工は施されていない。

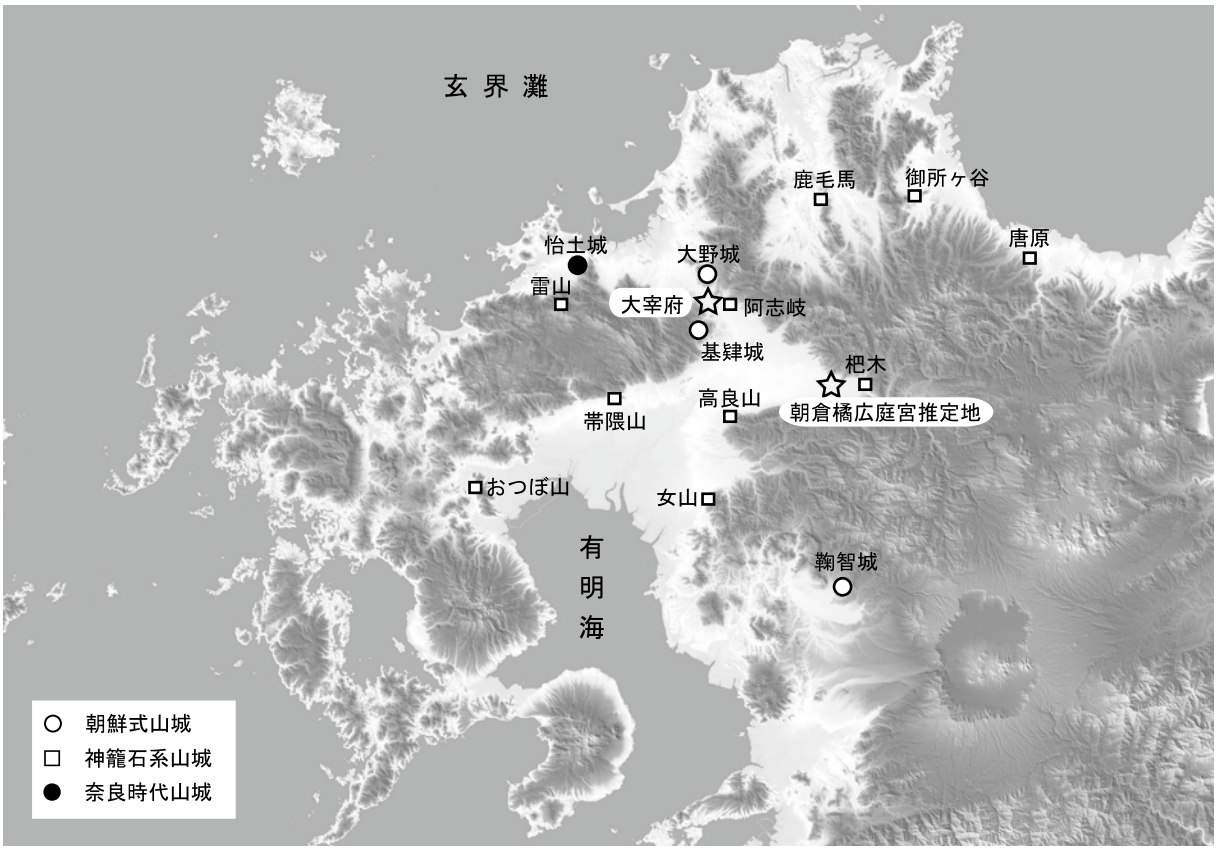


図５　北部九州における古代山城の分布（金田城を除く）

④女山城（史跡女山神籠石）

福岡県の南部、筑後平野の南端、標高286ｍの古僧都山の西斜面を中心に立地する古代山城である。総延長約3.0㎞の外郭線は、標高203.6ｍの古塚山山頂を取り込み、西に向かって扇状に広がり、西側山裾を廻る。その外郭線上に、水門４箇所（粥餅谷、長谷、源吾谷、産女谷）、列石、土塁が確認されている。列石は火成岩で、平均幅70㎝で最大のものは1.65ｍを図る。上縁加工は施されている。６世紀後半の古墳を破壊して、外郭線が構築されており、それ以降の築城が明らかとなっている。

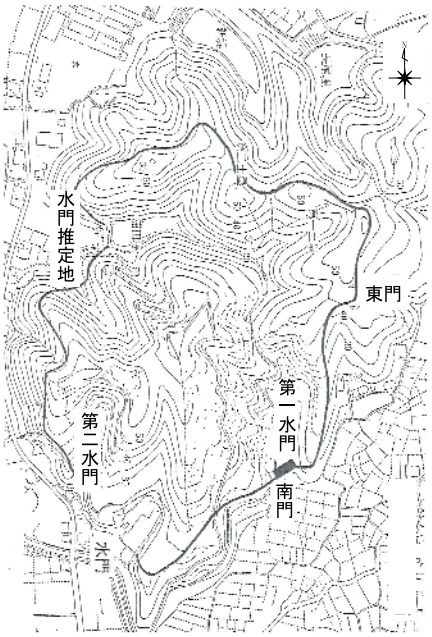
（２）各城の築造年代について

これら４城の築造年代を考えるにあたって、ある程度の比較検討が可能なものに、土塁がある。

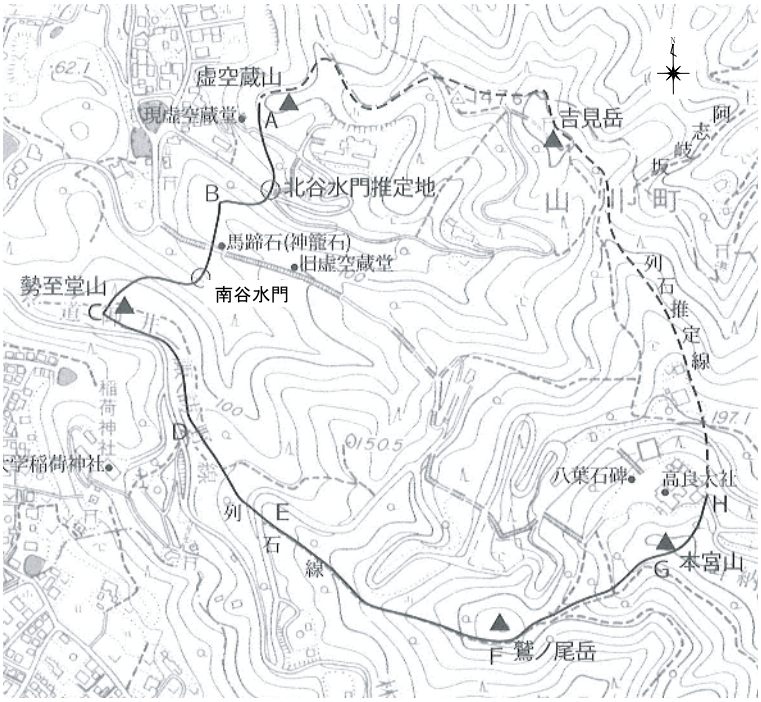
土塁裾部に設置された列石については、いずれも切石加工を施している点で共通するが、おつぼ山城、帯隈山城、女山城の列石には列石前面上縁に段加工を施す点で相違する。特に、おつぼ山城が顕著である。この上縁加工は、切石上縁高を揃える意図が働いたものであり、手間をかける分、丁寧な造りといえる。高良山城はそれを省略した形といえよう。その石材の採取については、おつぼ山城で西方の杵島山から搬入された可能性が指摘されているものの、各城ともそれが立地する基盤層など、比較的採取の容易な石を使用する。

次に、土塁前面の柱穴列であるが、おつぼ山城、帯隈山城、女山城で確認されており、いずれも約3.0ｍ幅を図る点で共通する。土塁幅についても、おつぼ山、帯隈山城で9.0ｍを基準としていたことが明らかとなっている。

以上の点から、少なくとも土塁については、各城共通する工法、考え方のもと構築されたものであり、同時期に築かれたものであることは明らかである。ただし、列石前面上縁の段加工の有無については、それが僅かな時期差なのか、地域差なのか検討を要する。出土遺物が皆無に等しく明確な年代はいえな



おつぼ山神籠石



高良山神籠石

帯隈山神籠石

女山神籠石

図６　有明海沿岸の古代山城（縮尺：約1/10,000）

いが、女山城で6世紀後半の古墳を壊して土塁が構築されているという遺構の先後関係と、おつぼ山城など土塁構築の基準尺に唐尺が採用されているとの指摘は注視すべきであろう。

3．有明海における防衛網

有明海の防衛を考えるうえで、参考になる資料に『肥前国風土記』がある。『肥前国風土記』の成立は、郷里制下の行政区画に従っている点から、養老4年（720）から天平12年（740）と考えられており、城や烽など、成立当時の軍事面での記述があることから、有明海の防衛を考えるうえで、一つの手がかりとなる。

まず、城に関しては、冒頭に城1所の記述があるのみで、その1城は基肄城とされている。肥前国に位置するおつぼ山城、帯隈山城がそれぞれ所在するのは、肥前国11郡のうち杵島郡と佐嘉郡であるが、そのような記述は認められず、風土記の成立当時、既に廃絶されていたことを示すものといえよう。次に、烽であるが、肥前国11郡のうち有明海に面する郡は、佐嘉郡、杵島郡、藤津郡、高来郡の4郡であり、うち烽の記述が認められるのは、藤津郡に烽1、高来郡に烽5となり、肥前国の烽20のうち6が配備された形となる。特に高来郡は島原半島に位置し、四方が海に面する郡であることから、多くの烽を配備したものと思われる。

また、10世紀に成立した『延喜式』の駅路の記述などから、古代官道の復元が試みられているが、おつぼ山城、帯隈山城、高良山城、女山城の近くを官道が通ることが想定されている。大宰府からみていくと、肥前国については、帯隈山城は三根郡の切山駅から佐嘉郡の佐嘉駅へ向かう北側、おつぼ山城は杵島郡の杵島駅から藤津郡の塩田駅へ向かう東側に位置する。『肥前国風土記』成立当時においても、三根郡に駅1、佐嘉郡に駅1、杵島郡に駅1、藤津郡に駅1の記載があり、ほぼ踏襲しているものと思われる。筑後国においても、御井郡に所在する高良山城は御井駅の東側、山門郡に所在する女山城は葛野郡の葛野駅から山門郡の狩道駅へ向かう西側に位置する。いずれも官道を見通せる隣接した位置にあり、古代官道との密接な関連性がうかがえる。

以上のことから、7世紀代の有明海の防衛についても、古代官道に隣接した位置に城を配備し、烽、官道で情報伝達を可能なものにするなど、ネットワークを構築しながら防衛網を築いていた様相を垣間見ることができる。このほか、上津土塁跡（福岡県久留米市）の存在も注目される。7世紀代の官道と目される藤山道を遮断する位置に構築された土塁であり、主要幹線沿いにこうした遮断施設を設けていたことも想定される。

おわりに

鞠智城の役割の一つとして挙げられる「有明海の侵入敵の確認と伝達」については、鞠智城が有明海を見通すことができず、最も近い女山城も見通せない位置にあることから、現時点で、鞠智城がそうした役割を担ったとは考えにくいものである。

それよりもむしろ、熊本県南部あるいは中央部の有明海あるいは八代海から上陸し陸路で北上してくる敵を迎え撃つには格好の位置にあり、防衛面でそうした役割が主にあったことが指摘できる。現に、鞠智城の南には、熊本県南関町から菊池郡家に比定される西寺遺跡を経由し、その南で阿蘇方面、熊本市方面に分岐する、『延喜式』以前の「車路」地名から復元した初期官道が通ることが想定されている。

有明海の防衛網からみて、鞠智城は有明海沿岸部の各城とは少し異質な存在といえ、期を同じくした防衛構想のもと構築されたものとはいえないのではなかろうか。有明海沿岸部の各城の防衛主体、築造年代をどこに求めるのか、それを究明していくことは鞠智城の役割・性格を考えるうえでも大きな課題である。

参考・引用文献

小澤太郎2002「北部九州における神籠石型山城の配置」『究班』Ⅱ
小澤太郎2014「古代山城・高良山神籠石を考える」『鞠智城とその時代２－平成14～21年度「館長講座」の記録－』熊本県立装飾古墳館分館　歴史公園鞠智城・温故創生館
小田富士雄編1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書第10巻　名著出版
小田富士雄2016「大宰府都城の形成と東アジア」『季刊考古学』第136号　雄山閣
小野正敏、佐藤信、舘野和己、田辺征夫編2007『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
亀田修一2016「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」『季刊考古学』第136号　雄山閣
鑑山　猛ほか1965『おつぼ山神籠石』佐賀県武雄市史跡調査報告
木村龍生2016「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城－発表資料集－』古代山城に関する研究会資料集
熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱ～鞠智城跡第８～32次調査報告～』熊本県文化財調査報告　第276集
熊本県教育委員会2015『史跡鞠智城跡保存管理計画（増補版）』
久留米市教育委員会1989『筑後国府跡・国分寺跡～昭和63年度発掘調査概報～』久留米市文化財調査報告書第59集
高瀬哲郎2007「帯隈山神籠石」温故創生館館長講座資料
長　洋一1998「防人をめぐる問題」『都府楼』25号　財団法人古都大宰府保存会
鶴嶋俊彦1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』７　古代交通研究会
日野尚志2011「古代の官道」『鞠智城とその時代－平成14～21年度「館長講座」の記録－』熊本県立装飾古墳館分館　歴史公園鞠智城・温故創生館
吉野　裕訳1969『風土記』東洋文庫145　平凡社

挿図出典

図１　熊本県教育委員会2015より作成
図２　熊本県教育委員会2012より転載
図３　木村龍生2016より転載
図４　熊本県教育委員会2015より作成
図５　熊本県教育委員会2012より作成
図６　高瀬哲郎2007、小澤太郎2014、小田富士雄編1983より作成

column

古代山城からの眺め

「古代山城からの眺め」と「古代山城跡からの眺め」は異なる。

現在、古代山城跡の大部分は山林に没し、わずかに開けた整備後の土塁、あるいは木々の隙間から城外を望むしかない。古代山城が築かれた７世紀には、視界を遮る樹木は刈り払われ、地形的制約を受けつつも、大半の地点で眺望がきいたに違いない。そして、当然ながら眼下の平野や湾の形、田畑や村々、人々が行き交う道、停泊する船の姿も、古代と現代では大きくことなる。

古代山城の役割についての議論はつきないが、「古代山城からの眺め」への理解を深めることが研究の着実な歩みとなるだろう。

（小嶋　篤）

鬼ノ城跡からの南方の眺め

金田城跡からの東方の眺め

屋島城跡からの西方の眺め

第５章

瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代

南　健太郎

はじめに

東アジア規模の戦乱である白村江の戦いにおける敗戦（663年）後の状況について、『日本書紀』・『続日本紀』には日本列島西半の慌ただしい動向が記載されている。664年の水城の構築と対馬・壱岐・筑紫国などへの防・烽の設置、665年の長門城・大野城・基肄城の築城、667年の高安城・屋嶋城・金田城の築城、というように矢継ぎ早に大掛かりな土木工事や構築物の建造に踏み切っている。665年以降に築城されたと考えられる城は古代山城と呼ばれており、このような７世紀以降の国家的な動態を探る上で重要な位置を占めている。

古代山城は28ヶ所にその存在が知られている。これらは『日本書紀』『続日本紀』に記載のある「朝鮮式山城」と、記載のない「神籠石系山城」に分けられている。古代山城の分布は主に北部九州と瀬戸内海沿岸に分けられる。瀬戸内海は関門海峡と都を結ぶ大動脈で、物流や交通、軍事などを含めた対外関係上、重要なルートであったことは疑いない。このような地理的な背景を一つの条件として、上記の長門城や屋嶋城のような古代山城が築かれている。瀬戸内海沿岸で所在が明らかなのは朝鮮式山城１ヶ所（屋嶋城）、神籠石系山城６ヶ所（播磨城山城、鬼城山城、大廻小廻山城、石城山城、讃岐城山城、永納山城）で、この他に文献に名前があるが所在不明の長門城、茨城、常城がある（図１）。朝鮮式山城である屋嶋城は667年に築くという記載があるが、それ以外については築城に関する情報を文献から得ることができない。築城年代を明らかにすることは、古代山城築城の契機、背景、そして歴史的な意義を考える上で欠かすことができない。このような視点から本論では瀬戸内海沿岸に所在する古代山城の築城年代を検討し、当地域における古代山城築城が歴史的にどのように評価できるかについて考えていきたい。

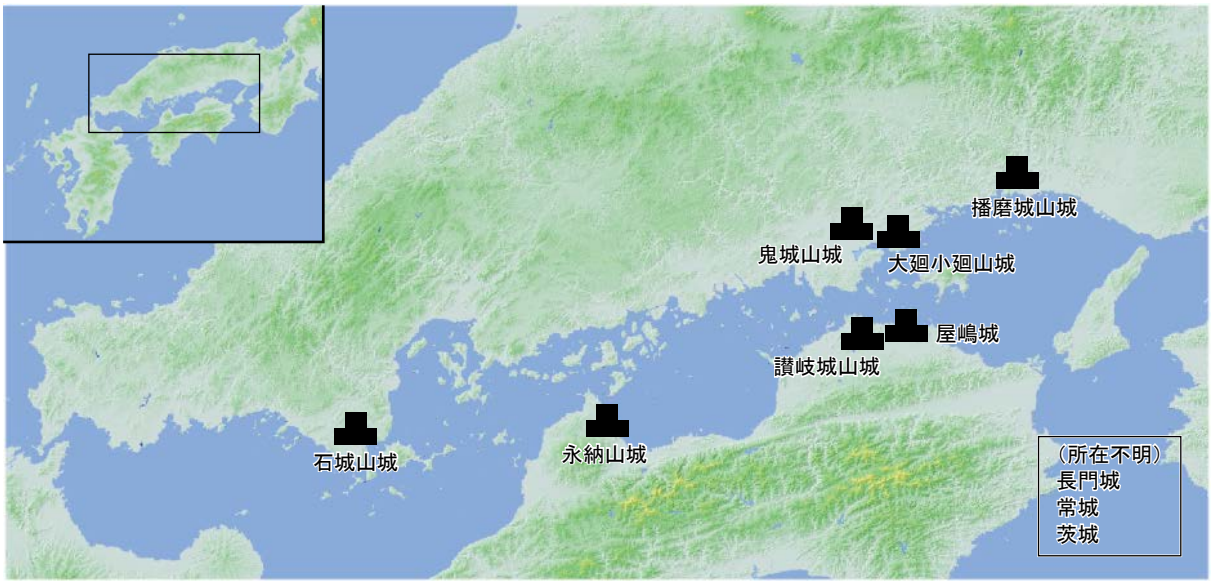


図１　瀬戸内海沿岸の古代山城

1．瀬戸内海沿岸の古代山城

築城年代の検討にはいる前に、瀬戸内海沿岸の古代山城の概要をまとめておく（第４回古代山城サミット高松大会実行委員会編2013を参照）。

播磨城山城　兵庫県たつの市に位置する。最高所標高は458m、城郭線標高は不明。城門１ヶ所、石塁、礎石建物が確認されており、門礎石（唐居敷）もみられる。

大廻小廻山城　岡山県岡山市に位置する。最高標高は198m、城郭線標高は85 ～ 190m。城門３ヶ所、水門３ヶ所、土塁が確認されている。

鬼城山城　岡山県総社市に位置する。最高標高403m、城郭線標高290 ～ 385m。城門４ヶ所、水門６ヶ所、角楼、土塁、石塁、礎石建物などが確認されている。門礎石（唐居敷）もみられる。

屋嶋城　香川県高松市に位置する。『日本書紀』に667年の築城とある。最高標高292m、城郭線標高260 ～ 280m。城門１ヶ所、水門２ヶ所、角楼状施設、堀切、土塁、石塁が確認されている。

讃岐城山城　香川県坂出市に位置する。最高標高462m、城郭線標高260 ～ 370m。城門１ヶ所、水門１ヶ所、土塁、石塁が確認されている。門礎石（唐居敷）もみられる。

永納山城　愛媛県西条市に位置する。最高標高132.4m、城郭線標高35 ～ 110m。城門１ヶ所以上、水門１ヶ所以上、土塁、石塁、鍛冶路が確認されている。

石城山城　山口県光市に位置する。最高標高359.7m、城郭線標高268 ～ 342m。城門２ヶ所、水門４ヶ所、土塁、石塁が確認されている。

これらの他にも文献に長門城、常城、茨城が登場するが、所在地ははっきりわかっていない。**長門城**は『日本書紀』に665年築城とあり、大野城、基肄城とともに最古段階の古代山城として重要である。山口県下関市周辺が候補地として挙げられている。**常城・茨城**は『続日本紀』でそれぞれ備後国安那郡、葦田郡とされており、719年に廃城したと記されている。常城は広島県府中市、茨城は広島県福山市に所在するという指摘がある（広島県立府中高等学校地歴部編1968）。長門城、常城、茨城は古代山城の存在を示す明確な遺構・遺物がみつかっておらず、今後の調査の進展が期待される。

2．これまでの築城年代研究

（1）築城年代に関する議論

朝鮮式山城の築城年代については『日本書紀』の記載に定点が求められるが、問題は神籠石系山城である。1970年代までの議論は出宮徳尚や葛原克人の論考にまとめられている（出宮1978、葛原1981）。そこでは５世紀代（坪井1961）、６世紀（李1977）、６世紀末～７世紀前半（西川1977）、天武朝期以降（686年～）（高橋1976）、６世紀末以前（出宮1978）、６世紀最末期～７世紀中葉（葛原1981）という諸説が挙げられており、年代の根拠も様々であった。この時期はまだ発掘調査がおこなわれた古代山城が少なく、基礎資料が揃っていない段階であり、遺構・遺物の型式学的な検討などが困難であったことは否めない。その中で古墳時代後期の遺構との比較、朝鮮半島との比較、文献資料、特に大宰や屯倉、記載方法に着目して築城年代に迫る方法論は特筆される。重要なのは神籠石系山城と朝鮮式山城の時間的な前後関係である。それによって古代山城築城の背景は大きく左右される。上記の論考ではそのほとんどが神籠石系山城の築城を朝鮮式山城よりも前、つまり白村江の戦いによる敗戦以前に位置づけられている。葛原は城門の変遷や塁線の巡り方に着目し、さらに７世紀初頭から中葉にかけての緊迫した東アジア情勢をも根拠として神籠石系山城から朝鮮式山城へという過程を描き出している（葛原1981・1994）。

1980年代以降、朝鮮式山城、神籠石系山城の両者で発掘調査が進展すると、遺構・遺物から築城年代にアプローチすることが可能となってきた。出土遺物の面からは、神籠石系山城出土土器はいずれも朝鮮式山城よりも古くなるものが確認されないということが次第に明らかになってきた。古代山城を

構成する各要素の検討をおこなった向井一雄は神籠石系山城を朝鮮式山城よりも新しく位置づけた（向井1991）。このような方向性は1990年前後に発表された各氏の論考でも指摘されている（山上1988、乗岡1992など）。また城門の門礎となる唐居敷の変遷が明らかにされるようになり、古代山城以外の遺跡における年代観を参照できるようになってきたことも築城年代を考える上で重要な転換点となった（向井1999）。

近年は築城年代に関する議論が活発化している。亀田修一は神籠石系山城である岡山県総社市鬼城山城と朝鮮式山城である金田城・屋嶋城の構造的特徴が極めて類似することを指摘し、朝鮮半島の古代山城との比較からも、築城年代が金田城、屋嶋城に近接することを指摘している（亀田2009・2012）。稲田孝司は古代山城を石の加工方法・形態・構築方法から４系統に分け、唐居敷の型式変化や城郭線の幾何学的企画性の変化から編年をおこなっている。稲田の検討でも神籠石系山城は朝鮮式山城よりも後出するという結果が得られている（稲田2012）。また小澤佳憲は石塁や土塁の築造技術や城郭線の形状から朝鮮式山城と瀬戸内海型神籠石式山城が、瀬戸内海型神籠石式山城と九州型神籠石式山城が近い関係にあるとした（小澤2012）。また唐居敷や軸摺金具の検討からは朝鮮式山城を古く置き、神籠石系山城が後出することを指摘している（小澤2014・2016）。

（２）築城年代研究の課題

ここまで築城年代研究の推移をみてきたが、朝鮮式山城が古く、神籠石系山城が新しいという変遷観については、概ね認められるのではないかと思われる。出土遺物の検討や、完成・未完成の議論からもこのことは肯定的に捉えられている（亀田2014・2016、木村2016）。ただし築城年代についての議論の中で意見が分かれているのは、神籠石系山城の築城がどこまでさかのぼるのかという点である。例えば上述の鬼城山城は神籠石系山城ではあるものの朝鮮式山城である金田城・屋嶋城との共通性が高く、福岡県行橋市御所ヶ谷城も神籠石系山城ではあるが出土遺物には朝鮮式山城の築城時期と大差ないものがみられる。そもそも神籠石系山城の中で前後関係がないのかどうかという検討もまだ十分になされていないように思われる。

また近年は出土遺物に基づいて築城時期を考えようとする試みがなされている。出土遺物から築城年代を考えるのは考古学的な検討の中心をなすものではあるが、この場合どのような遺物が築城年代を示すのかをまず考える必要がある。城門や水門・土塁といった城郭線を構成する遺構群と、城内での活動痕跡を示す遺構群の間に、多少の時期差がある可能性も考えられるであろうし、古代山城が築城以降性格を変えながらいろいろな施設を有するようになることは鞠智城や鬼城山城などでも確認されている。大野城のように城門の改修が確認されることもある。出土遺物からの検討をおこなう際には上記の点を明確にした議論が望まれる。出土遺物からの検討については自然科学的な分析も無視できない。特に近年は古代山城出土木材の年代測定もおこなわれており、築城年代を考える上で参考になる。以上のことを念頭に置き、古代山城の築城年代について考えていく。

３．瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代

（１）朝鮮式山城

屋嶋城

瀬戸内海沿岸で唯一の位置の明らかな朝鮮式山城である。高安城、金田城と同様に667年に築城されたことが『日本書紀』に記されている。近年の発掘調査で遺構・遺物の様相が明らかになってきている。特に注目されるのは南東に向かって開かれている城門である（図２）。門道が城外の地面よりも高い位置に設けられる懸門構造で、門道は階段式、門道床面には排水施設が作られている。懸門構造の城門は屋嶋城の他に大野城、金田城、鬼城山城で確認されており、構造的な類似性が指摘されている（亀田2009・

2012、南2015・2016)。出土遺物については城門の調査において地山直上から７世紀後半の須恵器が出土しており（高松市教育委員会編2008・2016)、報告書では年代の限定に慎重だが、亀田は７世紀中葉としている（亀田2016)。いずれにしても667年の築城記事との矛盾はない。

城門遺構整備事業では城門床面で柱穴が確認され、門道上部に構造物が作られていたことが明らかとなった（高松市教育委員会編2016)。柱穴は４つ検出されており（６つ検出されているが、２つは除外されている)、掘形はいずれも丸みの強い隅丸方形である。注目すべきは柱の形態であり、N−②柱は40㎝×32㎝の角柱であったとされている。城門遺構における角柱の使用が確認された古代山城としては鬼城山城が挙げられる。鬼城山城では西門・南門がすべて角柱で、北門は親柱のみ角柱、東門はすべて円柱となる（図４)。角柱を用いることは古代の建築で特異な存在であることが指摘されており（稲田2012)、このことは角柱の使用という面でも屋嶋城と鬼城山城の親縁性が垣間見られるということを示している。

以上のように屋嶋城の築城年代は、発掘調査の成果からも667年とみてよいと考えられる。

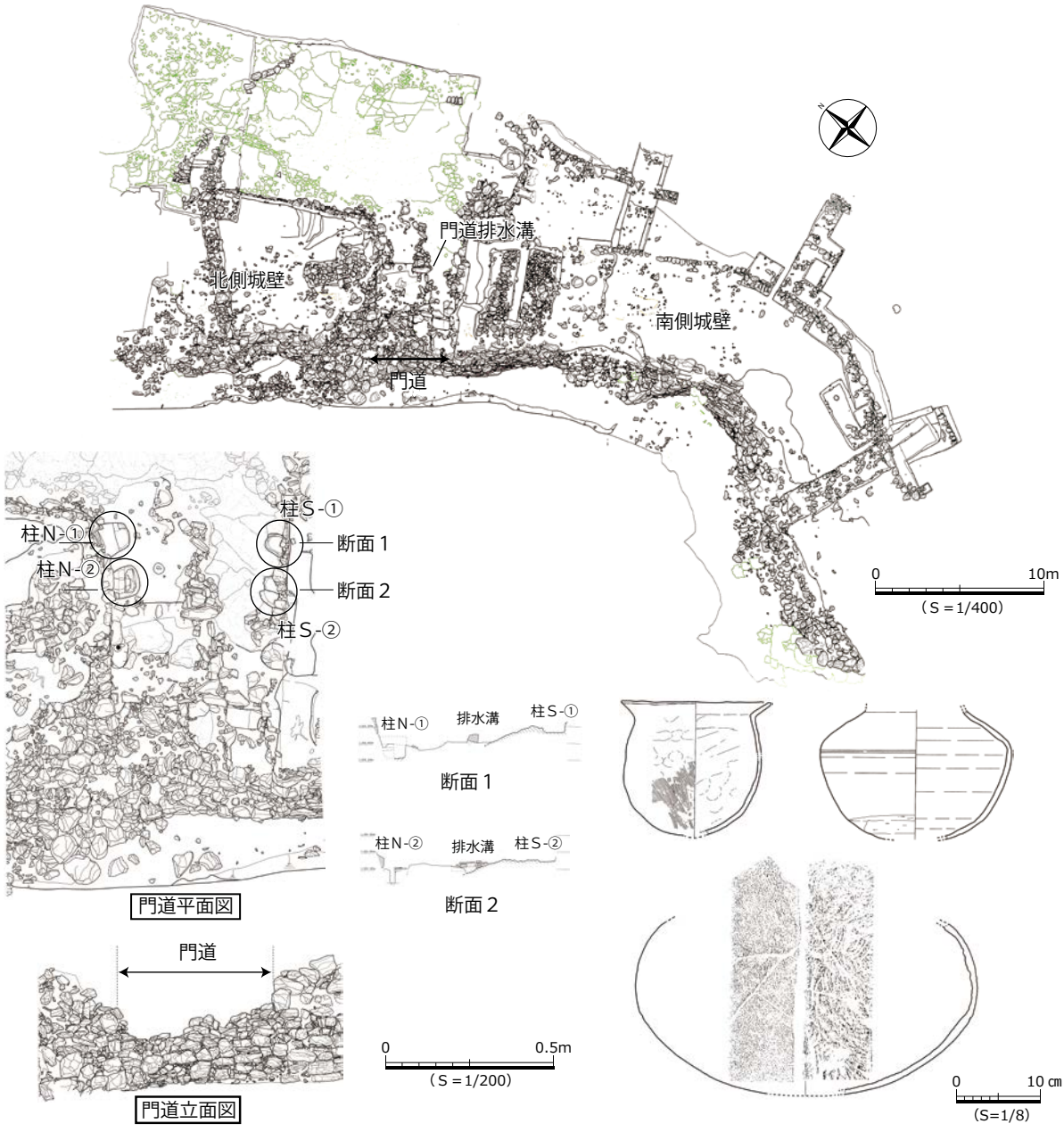


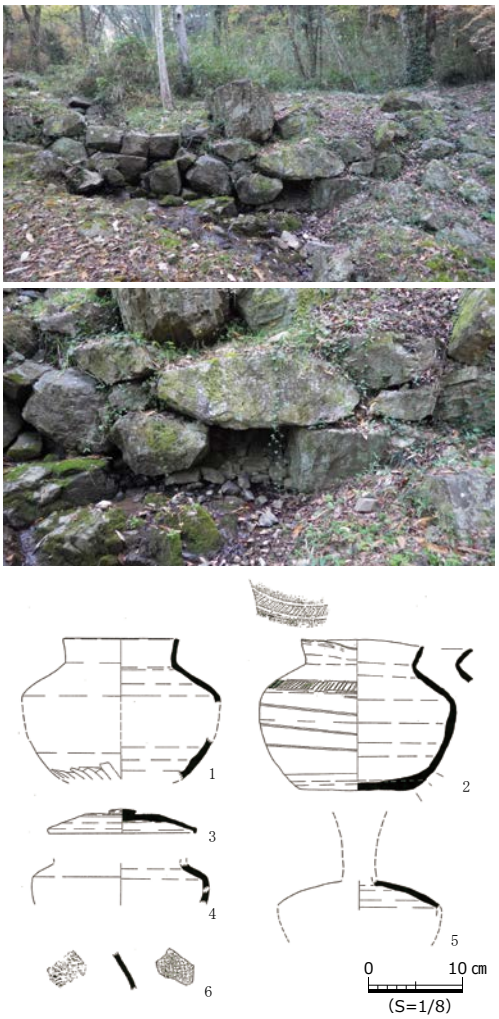
図２　屋嶋城の城門構造と城門出土遺物

（2）神籠石系山城

①大廻小廻山城

城郭線の発掘調査で土塁の構造が明らかにされており、水門遺構も確認されている。遺物は７世紀後半から８世紀前半のものが出土している（図３）が、築城年代を決定づける状況での出土ではない。少なくとも７世紀代の築城と考えられる（岡山市教育委員会編1989、村上・乗岡1999）が、遺物からこれ以上絞り込むことは難しい。稲田の編年によると、城郭線を構成する列石外側の堰板柱穴の欠如から、鬼城山城などよりも後出する第３段階に置かれている（稲田2012）。筆者は水門の開口部の構造と底石の使用状況が朝鮮式山城との共通性が強い鬼城山城よりも讃岐城山城との共通性が窺われることを指摘した（南2015・2016）。城門が未確認ではあるが、城郭線は全周していることから完成していた可能性が考えられ、朝鮮式山城の多くが完成、神籠石系山城が未完成のものが多いという現状からは、前者との関係が深いように思われる。なお讃岐城山城については列石の欠如や「車道」の構造から朝鮮式山城との近い関係性が指摘されている（村上・乗岡1999：Ｐ156）。

大廻小廻山城については築城時期を明確にすることは困難であるが、朝鮮式山城と類似する要素を持ち合わせている点からすると、そう大きな時期差を考慮する必要はないのかもしれない。



１：城跡北西部土塁上
２～５：小廻山山頂付近平坦部
６：一の木戸上方の流土

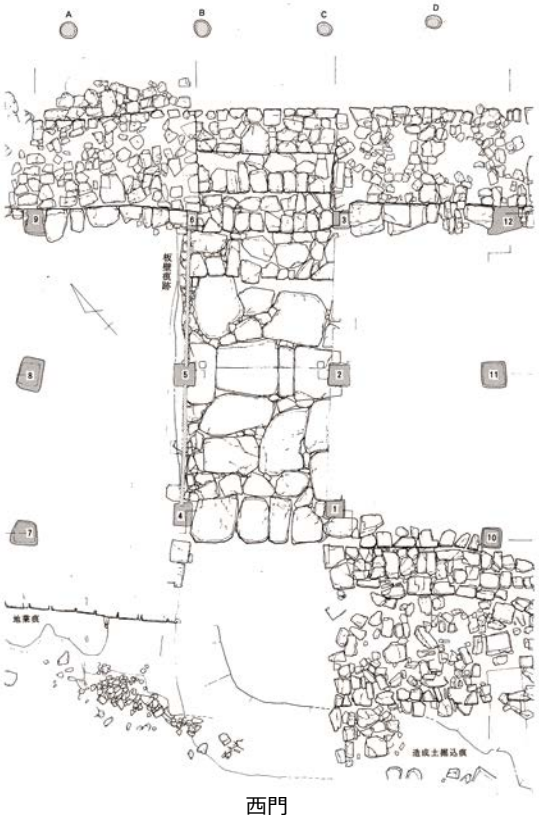
図３　大廻小廻山城一の木戸と出土遺物

②鬼城山城

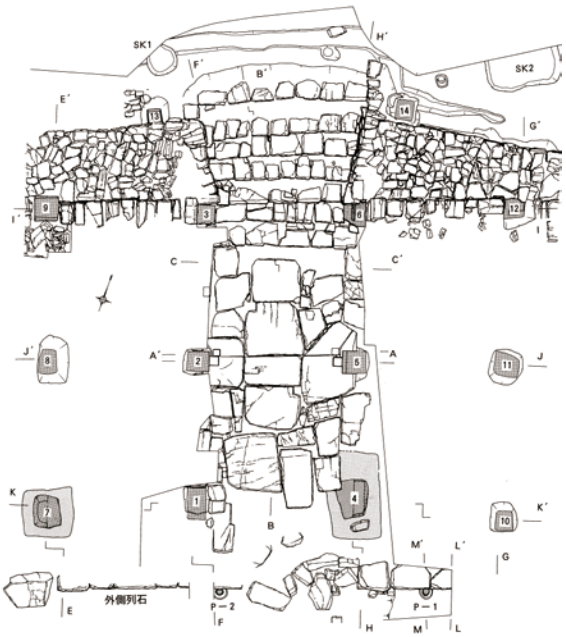
城郭線と城内の発掘調査がおこなわれており、城門や水門、高石垣の構造、城内施設などが明らかにされている。すでに述べたが、城門の構造は朝鮮式山城との類似性がみられる（図４）。築城年代に関しては朝鮮式山城築城以前（出宮1992・葛原1994・2002・2005など）、朝鮮式山城とほぼ同時期（乗岡1992、亀田2009・2012、平井典2016など）、朝鮮式山城築城以後の諸説があり、朝鮮式山城築城以後は天武朝（672年）以降（稲田2012）と７世紀後葉以降（小澤2014・2016）という考えが提示されている。特徴としては城門などの構造からは朝鮮式山城との類似性が指摘され、唐居敷に着目した場合は新しく位置づけられるという傾向にある。土器については少数の７世紀第３四半期のものと、まとまった量の７世紀第４四半期末前後に位置づけられる資料が確認されている（図５：岡山県教育委員会編2013）。後者の土器をもって築城年代とする立場もある（武田2016）が、７世紀第３四半期の資料（葛原2005、平井泰2010）をどのように評価するかが問題である。７世紀第４四半期末前後の土器溜まり１は上方からまとめて廃棄された状況と報告されており（岡山県教育委員会編2013）、築城年代を示す出土状態とは言い難く、築城年代は少なくともそれ以前と考えられる。稲田の検討では鬼城山城にみられる角柱親柱刳込唐居敷の年代は大野城築城以降、藤原宮西面中門建設以前、つまり665年から694年の間でおさまることが指摘されている（稲田2012：Ｐ60）。唐居敷については小澤は大野城よりも新しく位置づけ（小澤2014）、大野城の改築時に用いられた技術（大野城北側城門群：７世紀後葉～末以降）との関係の中で理解している（小澤2016）。向井は出土した土器から７世紀第４四半期としている（向井2017）。

鬼城山城では城門の調査の際に木材が出土しており、これについては炭素14年代測定がおこなわれ

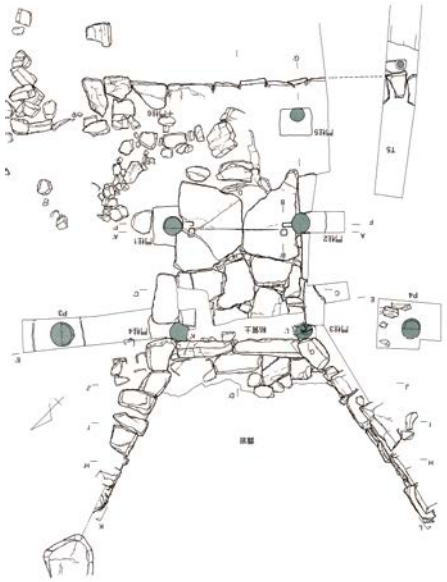
ている（今村他2007）。注目すべきは西門から続く高石垣の外面に構築された第０水門出土加工木の年代が619年～ 668年（95.2%）、617 ～ 660年（94.8%）を示している点で、少なくとも伐採年代は680年を下らないとされている。これらは西門に使用された柱などの材料の一部と考えられている。西門では築城に関する明確な遺物は出土しておらず、これまでに確認されている最も古い型式の土器と炭素14年代測定の結果を参考にするならば、鬼城山城の築城時期を７世紀第４四半期以降とするのには躊躇せざ



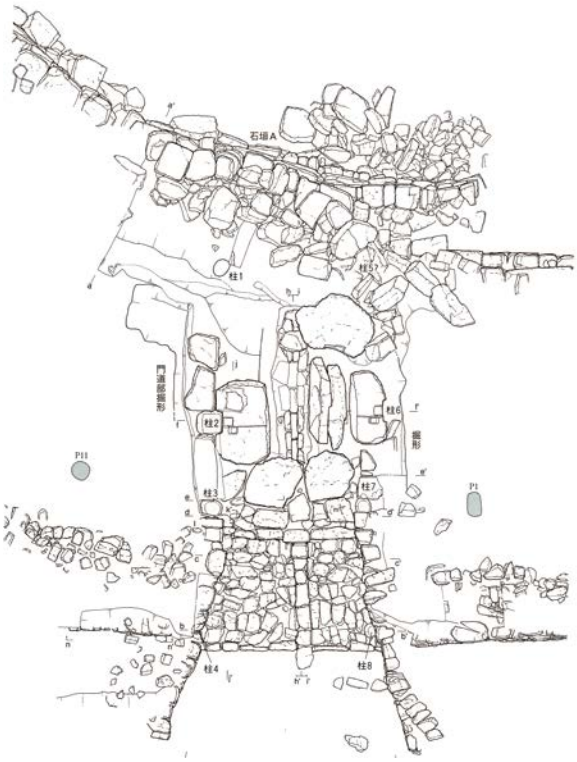
西門



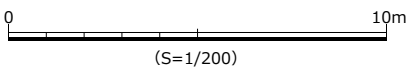
南門（懸門）



東門（懸門）



北門（懸門）



(S=1/200)

図４　鬼城山城の城門構造（上が城外側、下方向が城内側）

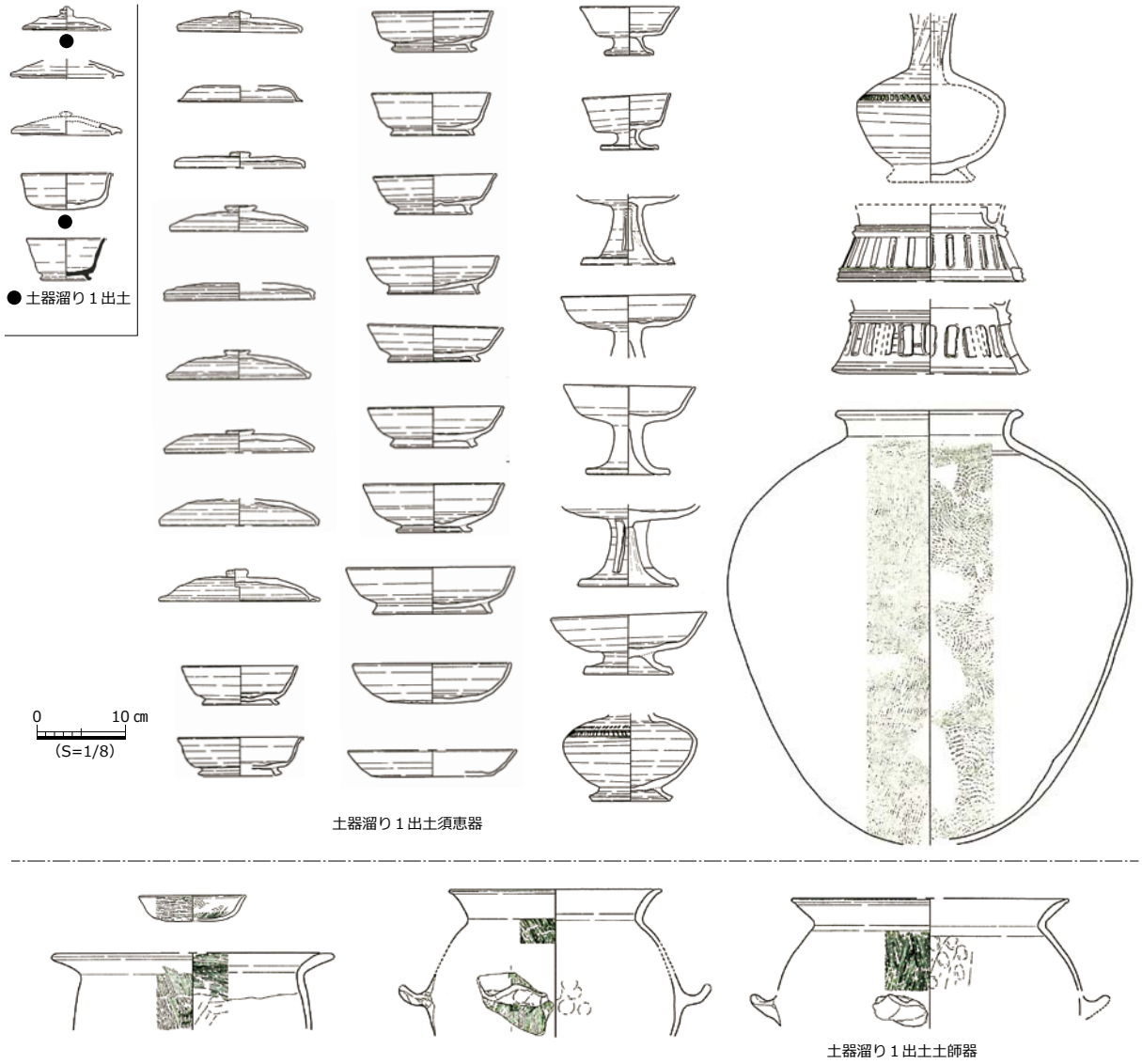


図５　鬼城山城出土土器

るを得ない。

城門構造、出土土器、炭素14年代測定から考えると、鬼城山城の築城年代については７世紀第３四半期とみる見解を支持したい。屋嶋城で確認された角柱の使用は鬼城山城との築城技術の共有をさらに補強するものと考える。その背景には両城の築城に高句麗からの技術導入があった可能性がある（葛原2005、亀田2009、稲田2012）。

鬼城山城の築城年代をこのように考えると、唐居敷や軸摺金具の年代観との少なからぬ齟齬が生じる。小澤は鬼城山城の唐居敷を大野城北側城門群の年代観から７世紀後葉～末に位置づけ、両者の軸摺穴の系譜が統一新羅成立（676年）以後に求められることを指摘している（小澤2016）。出土遺物や炭素14年代測定結果からは鬼城山城のほうが先行する可能性を否定することはできず、今後の唐居敷や軸摺金具の資料増加を待ちたい。

③石城山城

これまでの研究では築城年代についての言及は積極的にはおこなわれてこなかったが、その存在は瀬戸内海沿岸の諸城と比べるとやや異質といえる。神籠石系山城は使用石材の加工方法によって細分され

図６　石城山城北水門の構造（上段：A面オルソ画像、下段：通水施設とその内部）

ており、割石を使用する瀬戸内海沿岸型、切石を使用する九州型とされる場合が多かった。石城山城は列石に切石を使用するが、水門には割石が使用されている。このため石材の加工方法からの分類では位置づけが難しく、九州型と瀬戸内海型という分け方で築城年代を議論する場合はなおさら扱いにくい部分が生じる。

出土遺物には須恵器や土師器があるが、築城年代を示すものは抽出できない。北門に唐居敷は存在するが軸摺穴が作られていない。城郭線の土塁・列石などが確認されていない箇所もあり、未完成であったと考えられている（亀田2014）。城郭線の折れと直線が明確であることから、稲田は第２段階（672年ごろ以降）においている。

築城年代について考える材料は乏しいが、ここでは水門の構造に着目したい。水門は４ヶ所で確認されているが、排水口の構造が明瞭なのは北水門と東水門である。北水門は排水口を有する面（ここではA面と呼称する：図６）と、これに対して鈍角に展開する面（Ｂ面）がある。Ｂ面の石積工法と土塁中の石材使用法からは朝鮮式山城との距離が近いとされる「瀬戸内海型」に分類されている（小澤2012）。A面は排水口を地面に接する位置に設けている。全体的な石積み方法は、排水口付近よりも下方に大型の石材を用い、上方は比較的小型の石材が使用される構造をとる。東水門は排水口の有する面の両側が鈍角に展開する石積となっている。排水口の位置と石積の様相は北水門と共通しており、地面に接する位置に排水口があり、石積のサイズは排水口よりも下方が大きく、上方が小さくなる。このような点を神籠石系山城間で比較すると、排水口の設置個所は大廻小廻山城や後述の讃岐城山城と共通するが、これらの山城は排水口の上方にも大型の石材を用いるという点で違いがみられる。このような違いは排水施設の下部構造にもあらわれている。石城山神籠石では排水施設の底面に板石が敷かれており、これらの底石を挟むように側石が配置され、天井石が設置されている。このような底石を有する構造は鬼城山城の排水施設にもみられるものである。また大野城屯水土塁地区水門や基肄城の大水門も底石を有する構造をなしており、鬼城山城とともに朝鮮式山城との関連性と評価しておきたい。

④讃岐城山城

石城山城と同様に築城年代を考える資料が乏しい。唐居敷は方立用の穴と軸摺穴が彫られていないものや、方形刳込も途中までしか彫られていないものがあることから、城門は完成していなかったと考えられている。出土遺物は７世紀第４四半期～８世紀第１四半期の土器がまとまってみられる。稲田は石

城山城と併行する第２段階においている。大廻小廻山城との水門構造の共通性はすでに述べたところである（図7）。

讃岐城山城の周辺では讃岐国府下層遺跡で７世紀中頃に突如集落が現れ、７世紀末まで継続することが指摘されている（渡邊2013）。古代山城の管理監督署的な機能を有した遺跡と評価されており、この期間において築城された可能性が考えられる。

⑤永納山城

城郭線と城内の発掘調査がおこなわれている。城内では鍛冶関連遺構・遺物が確認されている。出土遺物の中には畿内産土師器があり、鍛冶関連遺構・遺物とのセット関係は大野城、鞠智城、鬼城山城でもみられ、これらはいずれも完成した山城としてまとめられる可能性が指摘されている。出土土器には７世紀第２～３四半期のものも含まれており、築城年代が７世紀第３四半期以前まで遡る可能性もある（木村2016：図８）。

このような出土遺物とともに注目されるのが、炭素14年代測定の結果である。測定資料は鍛冶関連遺構の炭置き場で採取された木炭で、637年～ 666年（68.2％）、607年～ 675年（95.4％）という結果が得られている（西条市教育委員会編2012）。鍛冶遺構の評価にもよるが、生産された鉄器が築城に関するものであったと考えるならば、築城時期を７世紀第３四半期とすることも可能だろう。今後の測定数の増加が望まれる。

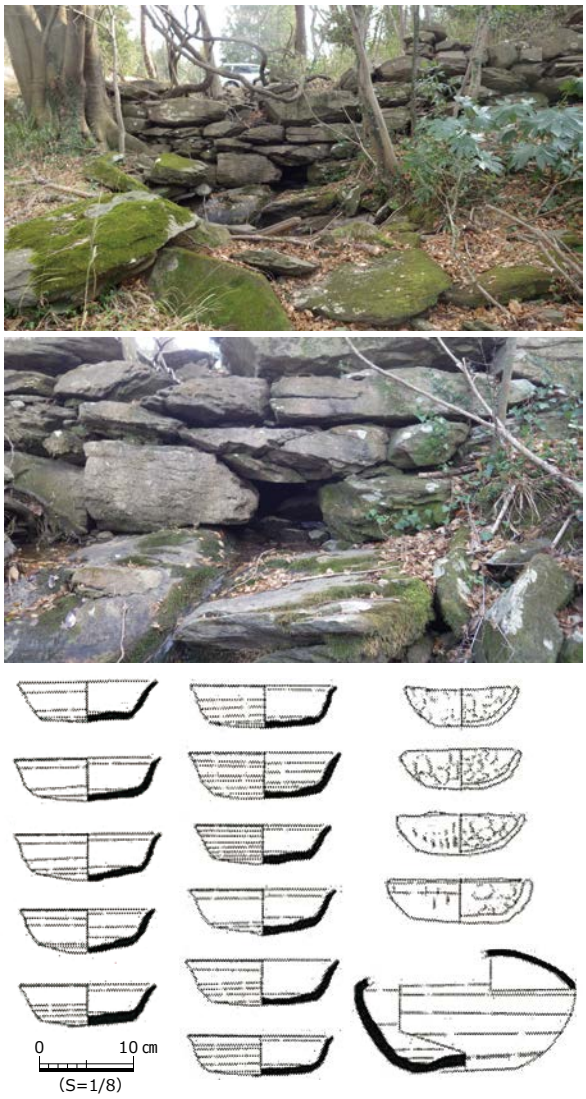


図７　讃岐城山城の水門構造と出土遺物

（３）小結

ここまで検討してきた築城年代を整理してみよう。

・『日本書紀』に築城の記載がある屋嶋城は667年の築城。

・667年築城と考えられる屋嶋城、金田城と城門構造が共通する鬼城山城は、出土土器や炭素14年代測定の結果から７世紀第３四半期の築城。屋嶋城・金田城と近接した年代。

・朝鮮式山城や鬼城山城と同様な排水施設の床面構造、石積の特徴をもつ石城山城は、鬼城山城に近い築城年代を考えることが可能。

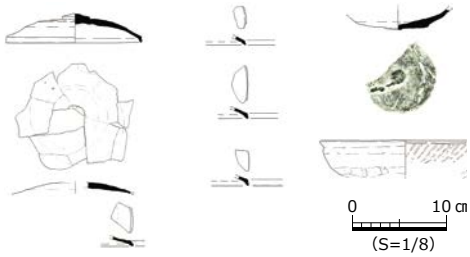


図８　永納山城出土の土器

・大廻小廻山城と讃岐城山城は石積の特徴が共通。排水施設に底石が用いられておらず、出土土器も７世紀第４四半期以降で、鬼城山城よりも時期が下る可能性が高い。

・永納山城は出土土器と炭素14年代測定の結果から７世紀第３四半期の築城の可能性が考えられる。

これまでの研究で提示されてきた編年と大きく異なるのは石城山城と永納山城を７世紀第３四半期に近い時期においているところである。石城山城は列石に切石を使用している点で時期が下るとも考えられるが、水門などでは割石が使用されており、切石主体である北部九州の神籠石系山城の先駆をなして

いるとも考えられる。また稲田は永納山城を古代山城築城の最も新しい段階である第３段階としている。今回は出土遺物と炭素14年代測定の結果から古くおいたが、今後遺構の構造とともにさらに詳細な検討をおこなう必要がある。

このように未確定要素を残すが、瀬戸内海沿岸の神籠石系山城の築城年代は７世紀第４四半期までにおさまる可能性が考えられる。

４．瀬戸内海沿岸における古代山城築城の意義

古代山城の築城に関しては、これまで白村江での敗戦後の対外的緊張関係に対する軍事的な側面にその要因を求める立場が一般的であった。築城に関しては百済官人の関与が文献から知られ、唐・新羅の軍勢に対処する施設と考えられてきたのである。しかし近年は白村江敗戦前後における東アジア情勢の再検討が活発になされ、上記の古代山城築城の要因も再検討が必要となってきている。鈴木靖民や小田富士夫が指摘しているように、663年の敗戦後、664年にはすでに唐側から使者が送られており、水城や大野城などの築城期にはすでに大陸・朝鮮半島からの襲来危機が回避されていたことがすでに確認されていたと考えられている（鈴木2011、小田2012・2015ａ・2015ｂ）。その上で小田は築城の背景を、律令国家確立を目指した大宰府都城の外郭防衛網の形成（667年以前）と、それ以後の国境最前線から畿内に至る連絡網の形成に求めている（小田2015ａ）。また百済滅亡後に唐によって設置された熊津都督府と古代山城の関係性を検討した近藤浩一は、軍事拠点としての性格よりも、倭国と朝鮮半島間の旧来からのネットワークを示すランドマークとしての機能や、対外交渉、交易拠点といった性格があったことを指摘している（近藤2015）。古代山城築城の背景の一つに、「見せること」があったことも指摘されており（向井2010・2017）、未完成の山城（亀田2014）もこのような視点でみると意義深い。

ここで本論で検討してきた古代山城の築城年代から、築城の背景と意義を考えてみたい。まず７世紀第３四半期の築城とした屋嶋城、鬼城山城、石城山城、永納山城について667年を中心とした時期の築城と考えた場合、その位置は非常に興味深い配置となっている（図９）。上記４城は瀬戸内海沿岸に位置してはいるが、実際はその立地がやや異なる。屋嶋城・永納山城は瀬戸内海が眼前に迫る位置にあるが、鬼城山城・石城山城は沿岸部から平野部を挟んだ少し奥まったところに築かれている。瀬戸内海を行き来する船団に対する軍事的な機能を考えた場合、鬼城山城や石城山城はその意にそぐわない面が垣間見られる。瀬戸内海の軍備を固めるという視点でみると、屋嶋城、永納山城も瀬戸内海の海峡が最も狭まる重要な位置に近いが、屋嶋城はそれよりもやや東側の屋島にあり、永納山城は高縄半島の東面に築かれている。

このような地勢は関門海峡を通って都に至るルートを防御するに適した位置とは言い難く、軍事的役割以外の要因を考える必要があるだろう。現段階でその要因を限定するのは難しいが、注目したのは瀬

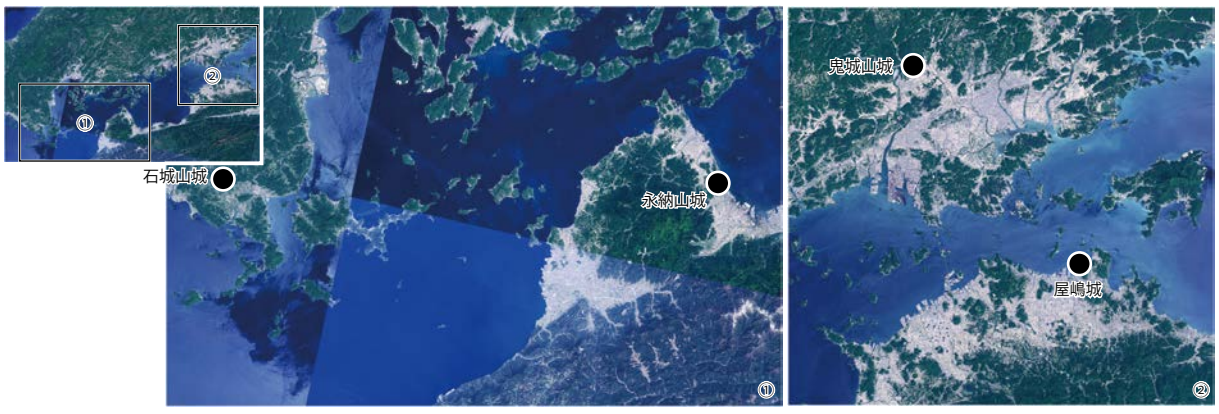


図９　屋嶋城、鬼城山城、石城山城、永納山城の位置

戸内海沿岸の多くの山城が築城から廃城までの期間が非常に短いという点である。鬼城山城では８世紀前半を境に備蓄施設へと様相を変えることが指摘されており、７世紀第４四半期の築城と考えている大廻小廻山城と讃岐城山城を含めて、この時期にほとんどの古代山城はその役割を終えている。存続期間は長くても50年程度だろう。多大な労力や財力を投入して築城されたにも関わらず、極めて短い期間で必要とされなくなったとみられる。これは言い換えると７世紀第３四半期（667年以降）から８世紀前半の短期間において必要とされていたとすることができるだろう。この間の国際情勢は上述したが、国内では667年の近江宮への遷都、671年の天智天皇の崩御、672年の壬申の乱とその後の天武天皇の即位、飛鳥浄御原宮への遷都と、目まぐるしく政局が変化していく。また679年の難波羅城の構築、そして藤原京（694年）を経て、大宝律令の制定（701年）平城京への遷都（710年）に至る。また７世紀末～８世紀初頭には西都大宰府が機能を開始している。古代山城が機能した時期はこの期間にあたっている。屋嶋城、鬼城山城、石城山城、永納山城は天智期の対外・対内に向けたものであり、大廻小廻山城、讃岐城山城は壬申の乱を経た天武期の内政に関連するものであると考えておきたい。その性格は実用的な施設というよりも、山城を築城することに意義を有した、いわゆるモニュメントとしての城ということも考えておきたい。

本論執筆においては大久保徹也、大橋雅也、渡邊誠、渡邊芳貴の各氏から多くのご助言をいただきました。また石城山城のオルソ画像作成については山口雄治氏の協力を得た。記して感謝いたします。

参考文献

稲田孝司2012「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号　日本考古学協会
今村峯雄・小林謙一・新免歳靖・坂本稔・谷山雅彦2007「炭素14測定からみた鬼城山遺構の築造年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集　国立歴史民俗博物館
岡山県教育委員会編2013『史跡　鬼城山２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236
岡山市教育委員会編1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』
小澤佳憲2012「朝鮮式山城と神籠石系山城」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』 日本考古学協会2012年度福岡大会実行
小澤佳憲2014「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第二号　熊本県教育委員会
小澤佳憲2016「古代山城城門出土の軸摺金具」『築城技術と遺物から見た古代山城』 熊本県教育委員会
小田富士雄2012「対馬・金田城の築城とその背景」『古文化談叢』第67集　九州古文化研究会
小田富士雄2015ａ「白村江戦の戦後処理と国際関係」『古文化談叢』第73集　九州古文化研究会
小田富士雄2015ｂ「大宰府都城の形成と律令体制」『古文化談叢』第74集　九州古文化研究会
亀田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」『鬼ノ城と吉備津神社－「桃太郎の舞台」を科学する』シリーズ『岡山学』７　吉備人出版
亀田修一2012「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』 成周鐸教授追慕論叢刊行委員会
亀田修一2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ　－論考編１－』 熊本県教育委員会
亀田修一2016「西日本の古代山城」『日本古代考古学論集』 同成社
木村龍生2016「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』 熊本県教育委員会
金達寿1976「鬼の城をめぐって」『日本のなかの朝鮮文化』 朝鮮文化社
葛原克人1981「古代山城の特色」『日本城郭大系』別館１　創史者
葛原克人1994「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』 新人物往来社
葛原克人2002「備中鬼ノ城の創築期をめぐって」『田辺昭三先生古稀記念論文集』 田辺昭三先生古稀記念の会
葛原克人2005「鬼ノ城と東アジア」『古代を考える　吉備』吉川弘文館
近藤浩一2015「古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城－築城背景と役割を探る－」『鞠智城と古代社会』第３号　熊本県教育委員会
西条市教育委員会編2012『史跡　永納山城跡Ⅱ』
鈴木靖民2011『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館
総社市教育委員会編1998『総社市埋蔵文化財調査年報』８
総社市教育委員会編1999『総社市埋蔵文化財調査年報』９
総社市教育委員会編2005『古代山城　鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告18

総社市教育委員会編2006『古代山城　鬼ノ城２』総社市埋蔵文化財発掘調査報告19
第４回古代山城サミット高松大会実行委員会編2013『日本古代の山城』
高橋護1976「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』№117　ニュー・サイエンス社
高松市教育委員会編2008『屋嶋城跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告書第113集
高松市教育委員会編2016『屋嶋城跡－城門遺構整備事業報告書－』高松市埋蔵文化財調査報告第172集
武田恭彰2016「鬼ノ城出土の土器の年代と歴史的背景」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第８号　岡山市埋蔵文化財センター
坪井清足1961「城柵の設置」『世界考古学大系』４　平凡社
出宮徳尚1978「吉備の古代山城試論」『考古学研究』第25巻第２号　考古学研究会
出宮徳尚1984「古代山城の機能性の検討」『高地性集落と倭国大乱』小野忠凞博士退官記念出版事業会
出宮徳尚1992「瀬戸内の古代山城」『新版　古代の日本』第４巻　中国・四国　角川書店
西川宏1977「瀬戸内地方の古代山城」『日本古代文化の探究－城－』　社会思想社
乗岡実1992「古代山城」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社
平井典子2016「鬼ノ城（鬼城山）」『季刊考古学』第136号　雄山閣
平井泰男2010「鬼ノ城～謎の古代山城～」『鬼ノ城～謎の古代山城～』　岡山県立博物館
広島県立府中高等学校地歴部編1968『奈良時代山城の研究』
向井一雄1991「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』第125号　古代学研究会
向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27　地域相研究会
向井一雄2010「駅路からみた古代山城－見せる山城論序説－」『地図中心』453号　日本地図センター
向井一雄2017『よみがえる古代山城　国際戦争と防衛ライン』　吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版
南健太郎2015「石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論」『鞠智城と古代社会』第３号　熊本県教育委員会
南健太郎2016「石積遺構から見た古代山城の築城技術」『築城技術と遺物から見た古代山城』　熊本県教育委員会
山上弘1988「古代山城に関する一考察」『網干善教先生華甲記念　考古学論集』　網干善教先生華甲記念刊行会
李進熙1977「朝鮮と日本の山城」『日本古代文化の探究－城－』　社会思想社
渡邊誠2013「讃岐に築かれた二つの古代山城－「地方」の成立という視点から－」『讃岐国の幕開け』　香川県埋蔵文化財センター

図版出典

図１・図６・図９：筆者撮影・作成。図６のオルソ画像作成には山口雄治氏の協力を得た。
図２：高松市教育委員会編2016を一部改変。
図３：写真は筆者撮影。図は村上・乗岡1999を一部改変。
図４：西門：総社市教育委員会編1999、南門：総社市教育委員会編1998、東門：総社市教育委員会編2006、北門：総社市教育委員会編2005
図５：岡山県教育委員会編2013
図７：写真は筆者撮影。図は渡邊2013を一部改変。
図８：西条市教育委員会編2012を一部改変。

第3部 筑紫の大城

宇美町から眺めた大野城跡

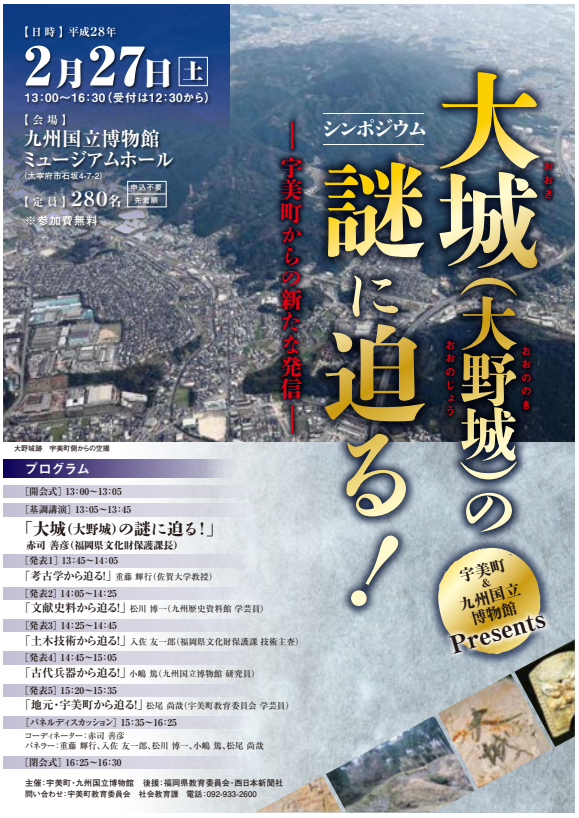
第３部　筑紫の大城

第１章　古代山城とＧＩＳ	赤司　善彦	153
第２章　大野城の研究成果	赤司　善彦	165
第３章　糟屋屯倉と怡土城からみた大野城	重藤　輝行	169
第４章　文献史料からみた大野城	松川　博一	173
第５章　大野城の土木技術	入佐 友一郎	177
第６章　大野城と古代日本の戦争	小嶋　篤	181
第７章　大野城と宇美の歴史的繋がり	松尾　尚哉	185
第８章　大野城築城と新羅	上田　龍児	189

第３部では、「筑紫の大城」と称される大野城を検討する。第１章では、古代山城研究の基礎資料として、航空測量等を利用したＧＩＳの成果をまとめる。第２章以降では、考古学・文献史学・土木工学・地域史という各分野から多角的に大野城を追究する。大宰府政庁を見下ろす防衛施設の大野城は、大宰府の軍事機能とも直結する。

なお、第１章は新稿である。第２章～第７章は、平成28年（2016）２月27日に、九州国立博物館・福岡県・宇美町が合同開催したシンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

第８章は、平成27年（2015）11月３日に、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催した講演会「新羅王子がみた大宰府」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。



「大城（大野城）の謎に迫る！」ポスター

第１章

古代山城とＧＩＳ

赤司　善彦

はじめに

近年、リモートセンシング技術やＧＰＳ（全地球測位システム）、さらにはＧＩＳ（地理情報システム）が考古学の分野でも活用されるようになってきた。

７世紀から８世紀にかけて西日本一帯に築かれた古代山城は規模が大きく、その立地は周辺地形との関わりが強いことからＧＩＳ（地理情報システム）を活用した各種の分析に適している。とりわけ可視領域などの空間分析での活用が期待できると思われる。そのためには詳細な微地形データに土塁線の状況が示されなければ、ＧＩＳの分析は不可能である。これまで、その城壁線は、１／1000や１／2500の地形図に記されて周辺地形と併せて把握されてきた。

図１　基肄城（佐賀県基山町）遠景

さらに、平板測量によって城壁線とその周辺地形が把握されてきたが、古代山城の城壁線は少なくとも２㎞以上と規模が大きいため、平板測量では多くの人出と時間が必要である。また、草が茂る夏場に限らず、樹木の生育状態では踏査そのものが困難な場合もある。

図２　城壁線付近
城壁線は踏査も困難であり、土塁も確認できない。

図１は佐賀県基肄城である。これまで現地踏査によって土塁線が推定され、その土塁線が１／2500の地形図に記載されている。この地形図を頼りに現地を踏査してみた。図２のように樹木管理のために伐採も行われていることもあって、現地では土塁を確認することはできず、足を踏み入れることも困難である。

そこで本研究では上記の新しい技術を用いて、正確かつ簡便な手法による城壁線や古代山城の地形データを取得しＧＩＳを活用したデジタルアーカイブの構築など、古代山城の新しい研究基盤を確立しようとするものである。

１．研究の概要

（１）航空レーザー計測による古代山城と周辺地形の数値標高モデルの取得

これまで古代山城は、等高線によって示された２次元の地形図にその城壁線を記すことが一般的であ

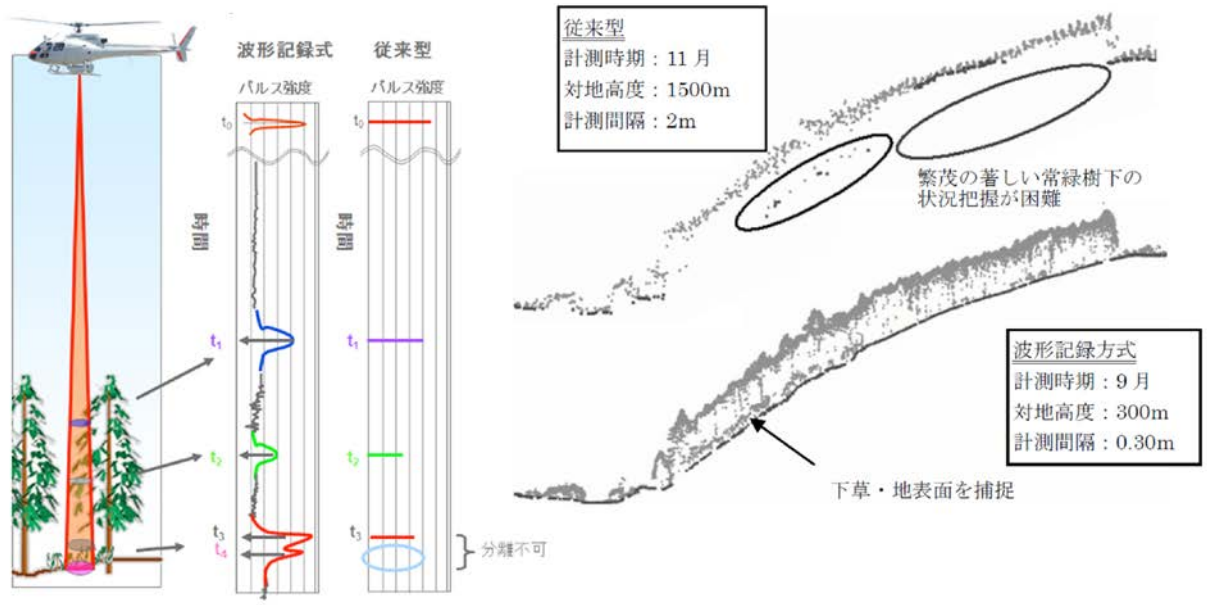


図３　レーザーの記録方式の比較

波形記録方式およびヘリコプターによる細密計測により、従来に比べて地形検出の精度が改善した。

る。これではなかなか地形の把握が容易ではない。これを解決する地図が立体地図（デジタルマップ）である。カーナビで使われている立体表現は、現地との対応にまことに便利である。最近では写真や地形図に垂直方向の標高データを加え傾斜の度合いを色で表現し、さらに一定方向の陰影をつけることで、より立体表現が可能となった。その決め手が標高データの取得である。最近、国土地理院が提供する10m方眼の標高データ（ＤＥＭ）も入手が可能となっている。より細かいメッシュでのデータが得られれば、当然精緻な立体地図が出来上がることになる。

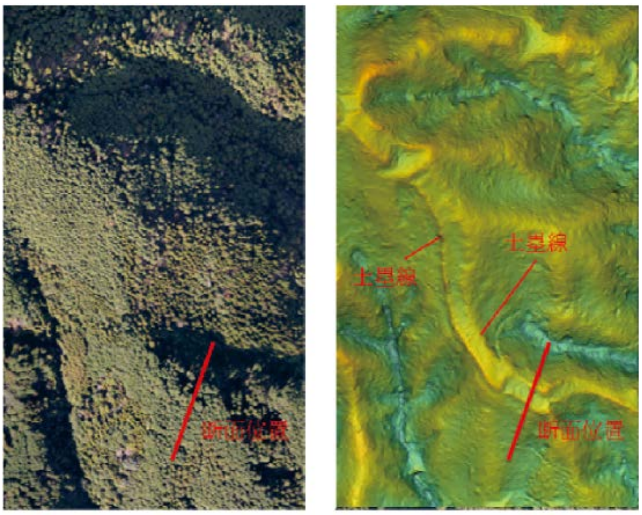


図４　航空写真とレーザー計測の比較

左のように地形図はこのような航空写真から作成される。航空写真では樹木を撮影するので、地表の状況は把握できない。これにたいして右のレーザー計測では、微地形だけでなく土塁線を捉えることができた。

ところで、紙の地形図の作成方法は、上空から撮影された山容の写真を立体視して図化するのである。山岳地の場合には、当然にして樹林が写っている航空写真を用いることになる。そのため現地の標高データを基に補正はされているが地表のひだを正確に反映しているわけではない。標高にも若干の誤差がつきまとっている。

近年、航空レーザー測量という最新技術が登場し、地球の襞を表現することが可能となり、土砂崩れ危険地のハザードマップなど各種の応用がなされつつある。この技術はレーザー光を地表に発射し、反射して戻ってくる時間差により地上までの距離を測るのである。航空機の高さを計算して、地面の標高を導き出すのである。今回の研究では､通常のセスナではなくヘリコプターに搭載した装置で計測した。ヘリ計測であればスピードを遅くすることができるため、それだけ地表を密度高く捉えることができるのである。１秒間に10万発のレーザーを照射する。この方法では50㎝間隔での計測が可能である。つまり50㎝の大きさの構築物であれば、これを計測して表現することが可能となったのである。

もちろん、レーザー照射によって得られた点群データから地表面のデータだけを抽出するデータ処理はかなりむずかしいが、これまでにいくつかの山城を計測してきた経験で、その精度を高めることができた。

また、このレーザー計測によって、土塁線そのものが明瞭に判読できたことも大きな成果である。

以下の古代山城について、九州国立博物館アジア文化交流センターでは科研費等も一部活用しつつ、古代山城のレーザー計測による詳細なＤＥＭを作成した。

１ｍＤＥＭ

・福岡県　特別史跡大野城跡

・福岡平野～大宰府地域

50㎝ＤＥＭ

・佐賀県　特別史跡基肄城跡

・福岡県　史跡高良山神籠石山城

・福岡県　阿志岐山城

・山口県　石城山神籠石山城

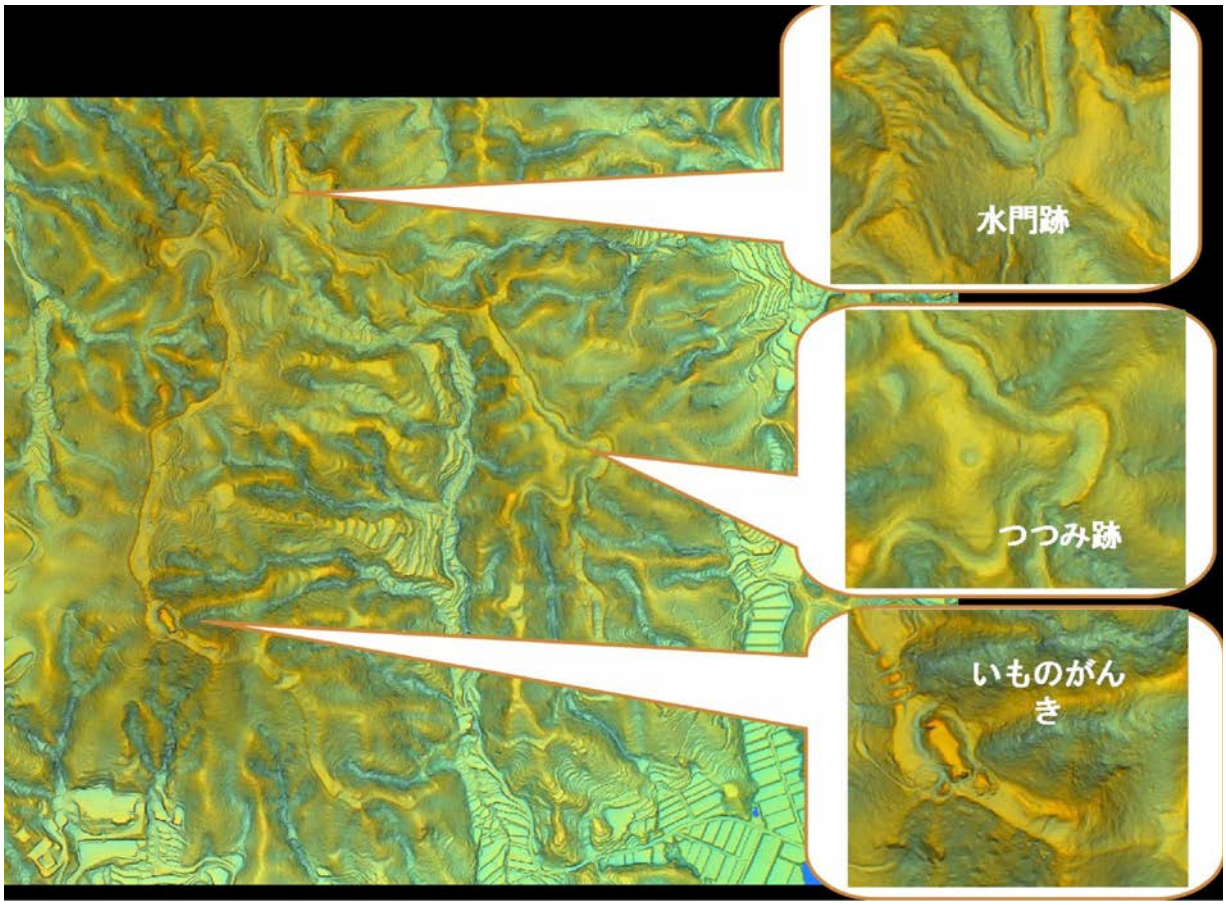


図５　基肄城の傾斜区分図　（レーザー計測で50㎝ＤＥＭ作成）

（２）　携帯ＧＰＳ機器による城壁線の測量

詳細な地形データが取得できたことで、地表の起伏を捉えてはいるが、これだけではまだ土塁線は確定ではない。やはり現地での再確認が欠かせない。

現地での城壁線の測量は、これまで平板測量を実施してきたが、膨大な労力が必要となる。測量機器も近年は進化し、携帯ＧＰＳを用いることで、現地踏査で再確認した土塁線の観測データを簡単に得ることができるようになった。本研究では市販されているハンディＧＰＳ機器を携帯して土塁線の現地踏

査をおこない、その軌跡データを処理することで土塁線を確定しようと実証実験を繰り返した。(使用機器　Garmin60CSx)

このＧＰＳ機器による現地測量のデータを用いて、レーザー計測した土塁線を修正することで正確な基本データを完成させることができるのである。これに種々の土塁の属性（外壁式・両壁式・折衷式、列石の有無、石築・土築、土塁の有無等）を反映した土塁線のデータベース化や、地形分析等が実施できる見通しが立った。

もちろん簡易なＧＰＳ測量がどの程度有効であるのか、その検証も試みた。その結果、ＧＰＳ観測の軌跡は最大でも１ｍほどの誤差であることが判明したこのように現地測量とＤＥＭの標高値を勘案した誤差修正をおこなうことで、土塁線の正確な基本データを完成させることができる。

この手法では、市販のＧＰＳ機器を２台用いて、クロスチェックすることが望ましい。また、軌跡は自動設定で線情報として記録されるが、土塁線の属性（方向変換点・列石の有無・土塁の有無など）を記録するためには、その地点を細かくマークし、さらに地形図にその番号と内容をメモしておくとよい。最も有効な手段はICレコーダにマークした地点番号と内容を記録しておくことである（後処理がやりやすい）

今回、国内の古代山城だけでなく、韓国の扶余に所在する扶余羅城もＧＰＳ測量を実施する事ができた。韓国の山城研究者との合同調査であり、今後の日韓の研究交流の共通基盤が形成されることに発展すると思われる。

図６　ＧＰＳ測量のログデータ

これまで地形図に記された城壁線にログデータを重ねたところ、ログデータは城壁線の出入りを測定している。

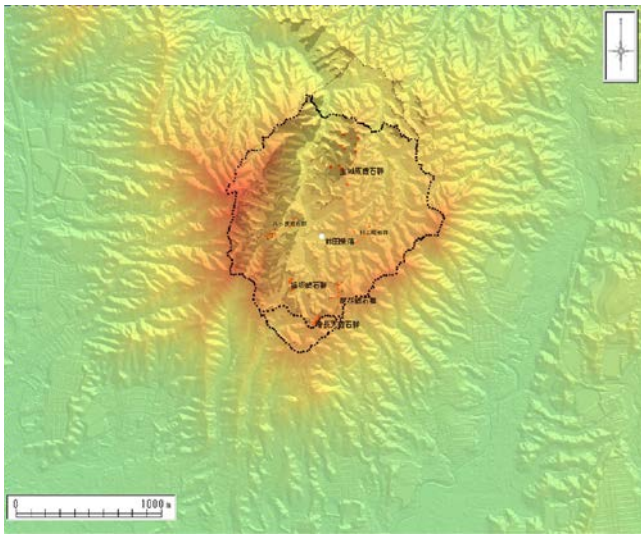


図７　大野城の主城原地区からの可視領域

主要な建物が置かれた主城原地区からは、村上地区を除いて、全ての倉庫群のある地域を可視することができる。

今回の研究では、大野城跡及び基肄城跡でのＧＰＳ機器による実証実験を繰り返し実施した。その他に国内７つの古代山城と、韓国での山城を計測することができた。

２．古代山城のＧＩＳによる分析

この古代山城の城壁線を記したデジタルマップを用いて、今後はＧＩＳによるさまざまな分析をおこなうことが可能となった。山城の各任意の地点からの眺望や、推定古代道路からの可視領域、あるいは烽火や他の山城との可視関係などを地図上に表示することが可能である。その他にも、傾斜を考慮した城壁の規模確定や、自然地形の傾斜と城壁築造の相関関係の分析などへの応用も期待できる。

ここでは一例として古地図との重ね合わせの成果を紹介する。大野城と基肄城の研究に欠かせない前近代の古地図に、文化３(1806)年頃に制作された『太宰府旧蹟全図』がある。この古地図は２枚からなり、北図は大野城、南図は基肄城を中心に地形と遺跡が描かれている。山の稜線や河川、道路を墨書きし、

これに細かな注記が施される。北図の大野城を例に取ると、山城の土塁線が明確に線で示されてはいないが、土塁線内側を濃く彩色して周囲とは区別することで、城の範囲を図示している。その他に礎石の分布も記されているが、なにより未発見の城門遺構を示す注記がある。土塁の一部に「クロカ小岩　門ノ石スエ」という注記がある。実際にこれまで確認された門跡でも、古地図上に「門ノ石スエ」・「門石スエ」と記され合致していることから、ここも門跡の可能性が高い。

『大宰府市史　環境資料編』で製作されたこの部分の書き起こし図を幾何補正して、大野城のレーザー計測図に重ねたのが図８である。現地を踏査したところ、城門と思われる石積遺構と門礎石を新しく発見することができた(図９)。

今後の大野城などの古代山城の調査にこうした成果を活かすことで、新しい研究の基盤を作り上げたいと考えている。

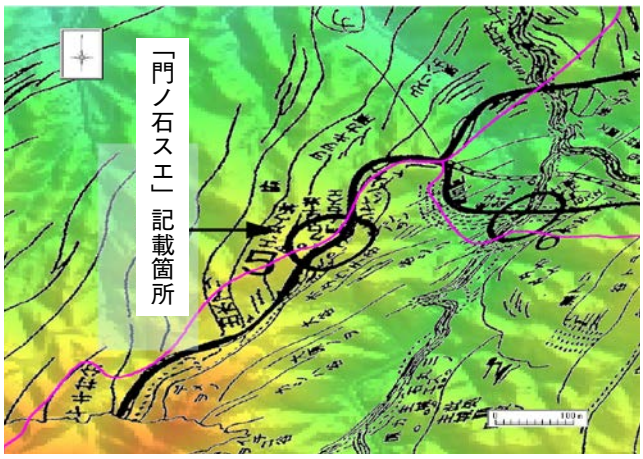


図８　古地図との重ね合わせ
古地図をレーザー計測地形データに重ね合わせた。

図９　新しく発見した城門（クロガネ岩城門）

３．今後の進展

現在、古代山城データベース（テキスト・写真等の属性データ）に加えて、本研究で得た空間情報をＷＥＢ上で公開するための閲覧ビューワーの開発に着手した。ＧＰＳ機器を使うと、現地での遺跡位置を確認することも可能である。今後はiPadなどＧＰＳ搭載のタブレット機器を用いて、山城の保存管理や多くの人が山城踏査するさいのナビゲーターなど、幅広い分野で活用が期待される。

４．ＧＩＳと古代山城に関する共同研究

九州国立博物館アジア文化交流センターでは、中日本航空株式会社に業務委託し共同研究として、古代山城跡と関連地形の既存の航空測量データを用いたパーソナルコンピュータやタブレット端末上での視覚的に有意な表示方法の開発、および成果の公開を行うためのWebＧＩＳやアナグリフ画像、立体模型などの製作を行った。ここにＧＩＳと関わる共同研究について成果の概要を記したい。なお、業務の委託は平成24年度に行った。

研究目的　今後航空レーザーはドローンを活用した計測等さまざまな場面で実施されることが予想される。しかしながら、統一的な視覚表示もなく、仮に地方自治体の文化財担当部局が古墳等のレーザー計測を委託し、その成果物を受領してもどのように活用していいのかわからないのが現状である。

本来はデジタルデータであり、さまざまな分析が可能であるし、一般市民向けの動画や３Ｄイラストなどの作成も容易である。こうした活用方法を公開することで、自治体等がレーザー計測を実施する仕様書にこうした成果物も記入されれば、データの有益な活用がなされると考えられる。

九州国立博物館アジア文化交流センターが蓄積した古代山城跡の航空測量データ（１ｍＤＥＭ：福岡

図10　佐賀県・福岡県基肄城

県特別史跡大野城跡、福岡平野～大宰府地域、50㎝ＤＥＭ：佐賀県特別史跡基津城跡、福岡県史跡高良山神龍石山城、福岡県阿志岐山城、山口県石城山神籠石山城）を活用し、上記の研究を実施した。

研究概要　①上記の各山城跡やそれぞれを相関して、パーソナルコンピュータやタブレット端末上での視覚的に有意な表示ができるように加工を行う。表示に関してはＧＩＳ（地理情報システム）上で以下のデータの重畳やリンクが可能なものとした。

・航空レーザによるDEMデータ
・航空写真データ
・携帯ＧＰＳ機器による測量データ
・古地図（※古地図に関しては、スキャナで読み取り正規化作業を行うものとする。）

②作成された成果を一般に公開するための以下の各種手法について、これを製作する。成果に関しては、将来的に九州国立博物館のホームページや関係施設において公開を行うことが可能なものとする。

・ＧＩＳデータ
・動画コンテンツ
・立体視画像
・立体模型

上記の研究概要に従って、以下の作業を実施した。

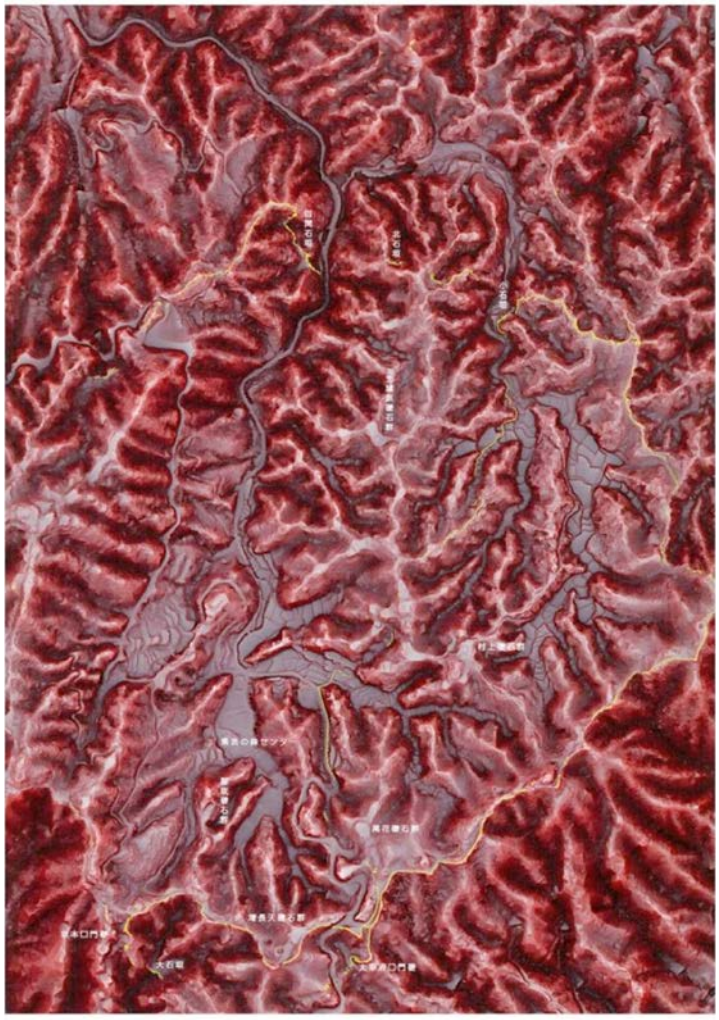


図11　福岡県大野城

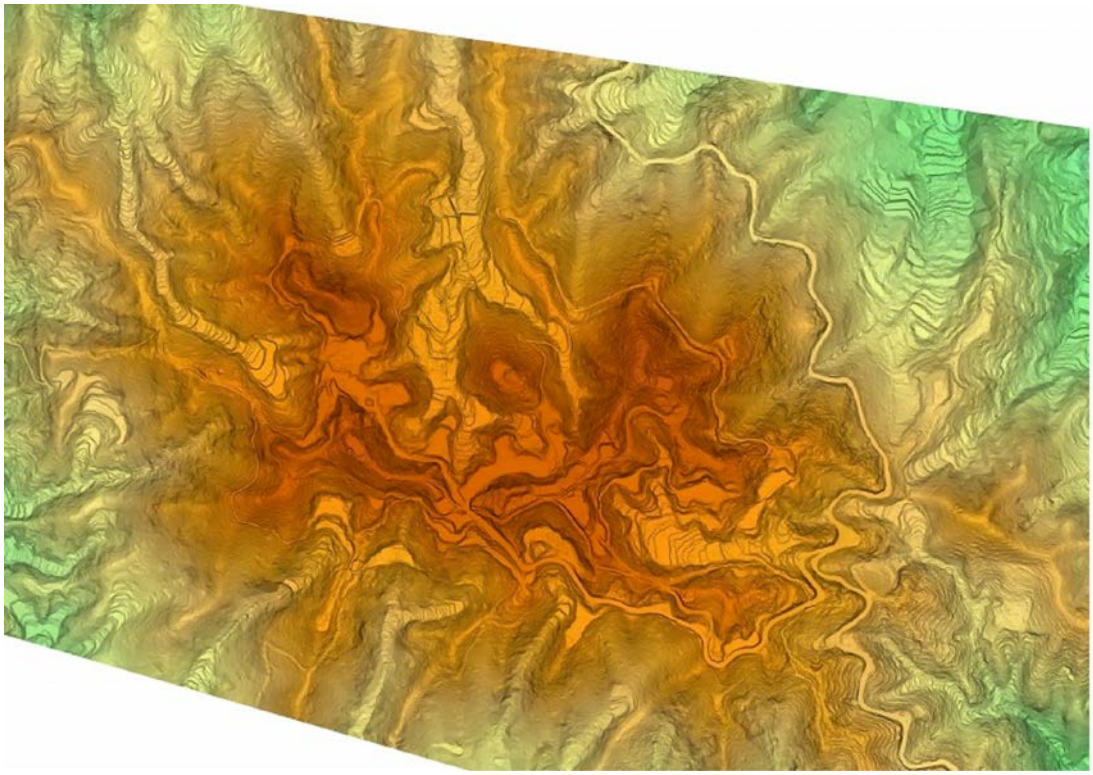


図12　山口県石城山神籠

（１）立体地形解析図の制作

九州国立博物館アジア文化交流センターでも、航空レーザーの計測データにより、詳細な地形データが得られているが、それらを図面や画面などの平面で、地形の詳細な立体形状を把握するには、微地形をわかりやすく表現するための地形解析手法が必要となる。

立体地形解析図作成は、地形モデル（DEM）データから立体視画像データを作成し、出力紙やパソコン画面で閲覧できるようにしたものである。これらは、土塁線や遺構などの地形解析や眺望解析も直接適用されるものであり、種々の新知見の発掘が期待できる。

これらの解析図の作成手法として、いくつかの方法が提案されているが、今回は、立体斜度図、PEAKIT図及び地形起伏図による画像を作成した。

本研究では、大野城及び基肄城を対象として作成した。用いたデータは航空レーザ計測で得られた地形モデル（DEM）を用いており、大野城は１ｍメッシュ、基肄城は0.5ｍメッシュである。

このため、１ｍメッシュの大野城は基肄城と比べると、地形表現の詳細さがやや劣っており、地形判読や解析を行う際には注意が必要である。

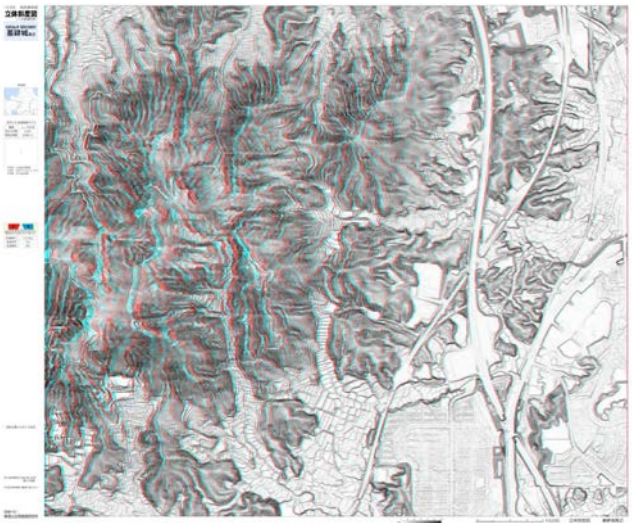


図13　立体斜度図　基肄城

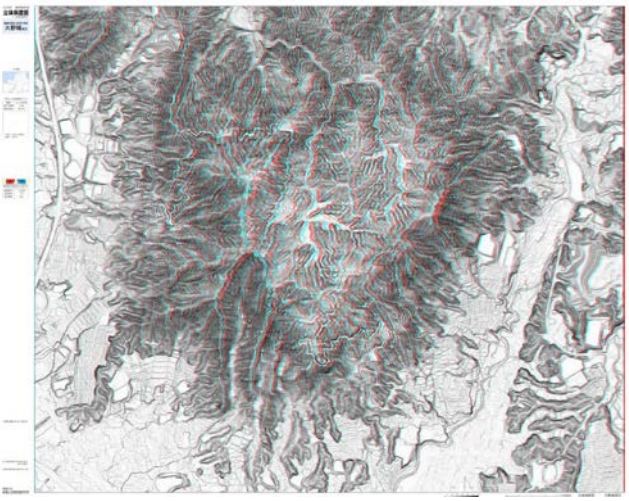


図14　立体斜度図　大野城

①立体斜度図　立体斜度図は、数値標高モデルから作成した斜度（地表傾斜角）図をアナグリフ画像としたものである。垂直倍率（距離縮尺に対する標高縮尺の高倍率）が一定値となるようにして作成してあり、画像中のメガネの色の凡例に画像向き合わせて、赤青メガネで見ることで、立体画像が得られる。なお、作製した画像はGeoTIF形式でデジタルデータ化した。

②PEAKIT図　PEAKIT図は、遺構や遺物の表面の形状および特徴線を的確に記述するために、開発された作成法であり、標高段彩、尾根線、谷線、陰影の４種のテクスチャを重畳表示したものである。立体斜度図がメガネにより立体形状を把握できるのに対し、PEAKITは実際の立体視はできないが、メガネなしで地形の起伏を詳細に把握することが可能である。なお、作製した画像はGeoTIF形式でデジタルデータ化した。

③地形起伏図　地形解析図は、標高に応じた基本色（低標高は緑、高標高は茶色）に、地形の起伏を二次色（凹地形は寒色、凸地形は暖色）として加え、さらに斜面の勾配に応じた影をつけたものである。

土塁のような微細な地形変化を明瞭に表現することが可能であり、なおかつ標高の高低を地形標高に応じた色変化で示すことができるため、大規模な自然地形に土塁のような人工的地形変化が存在する古代山城等の遺跡の表現に適していると思われる。

今回は10ｍメッシュデータによる福岡県周辺の広域と大野城、基肄城、阿志岐城の詳細ＤＥＭを用いた地形起伏図を作成した。

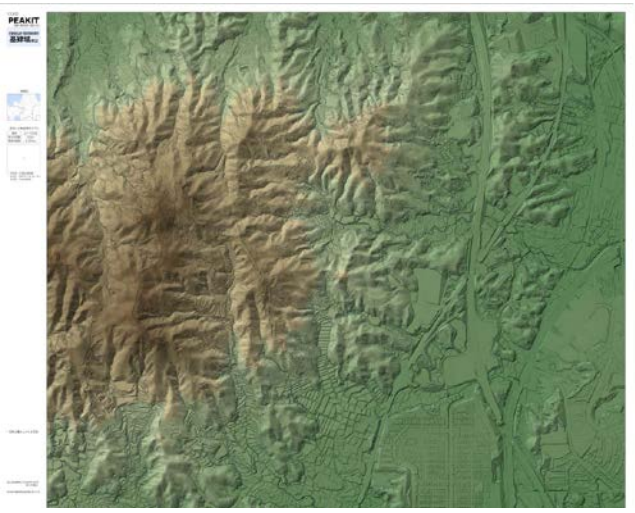


図15　PEAKIT図　基肄城

図16　PEAKIT図　大野城

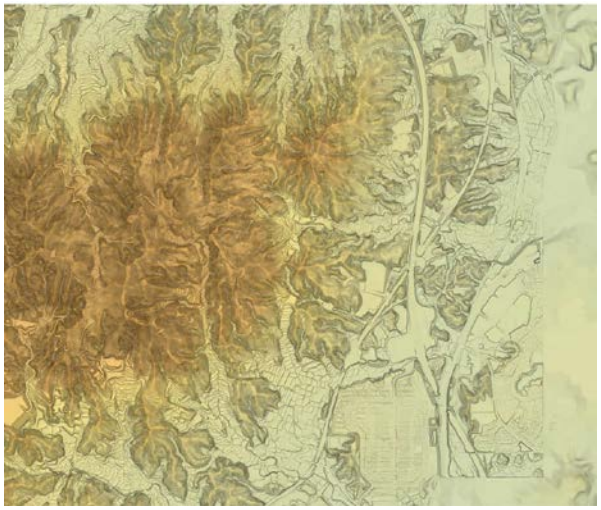


図17　地形起伏図　基肄城

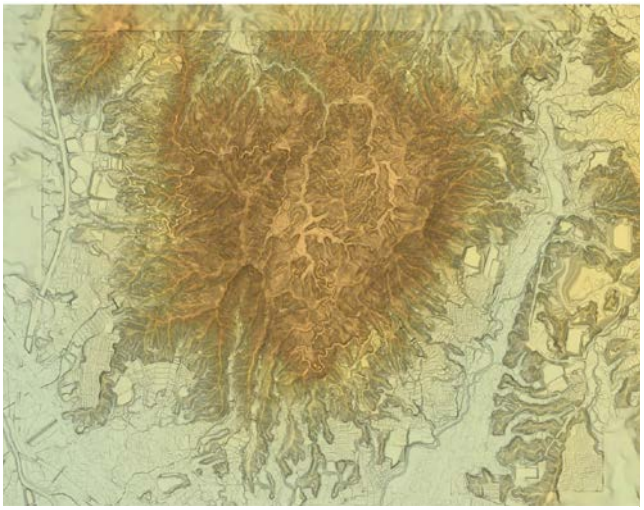


図18　地形起伏図　大野城

（2）立体地形解析図による３次元的な空間把握と眺望分析

①ArcＧＩＳによる解析　ArcＧＩＳを用いて３次元的な空間把握と眺望分析を行う方法を検討し、その手順をまとめた。検討は、まず、広域の把握を目的とした国土地理院の10mメッシュデータによる地形解析及び眺望分析をおこない、多様な解析が可能かことを確認した。

次に、航空レーザ計測データによる詳細な地形分析を試みたが、詳細データはデータ量が膨大となるため、通常のデータ処理ではメモリ不足となり、データを取り込みArcＧＩＳ形式に変換することが不可能であった。そこで、データ入力方法を検討し別の方法でArcＧＩＳ形式データを得た。これにより詳細DEMデータによる解析が可能になった。

図19　地形起伏図　阿志岐城

②古地図の変換　古地図は重要な情報が含まれていることが多いが、紙ベースであることや、縮尺や位置情報があいまいであること等から、ＧＩＳデータとしてすぐに用いることが困難である。そこで、古地図をスキャニングしてデジタルデータ化し、さらに、古地図に記載されている、位置情報を利用して現在の地形図に重ね合わせ可能なように画像の変換を行った。

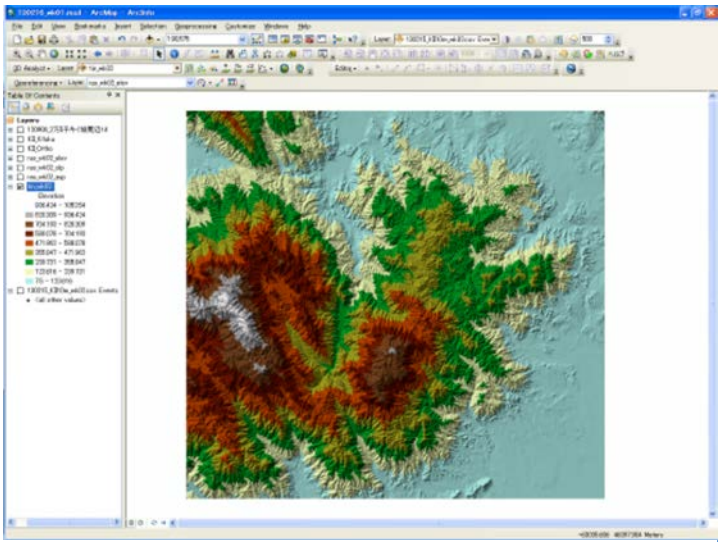
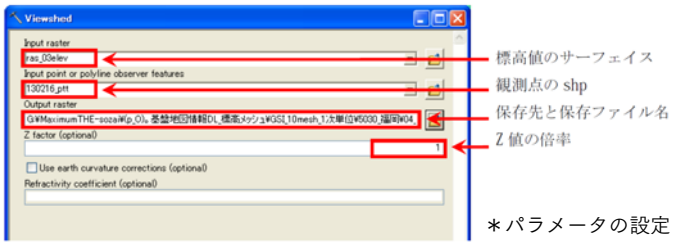
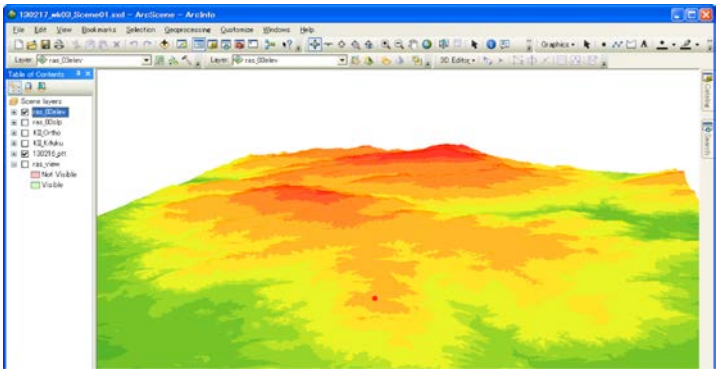


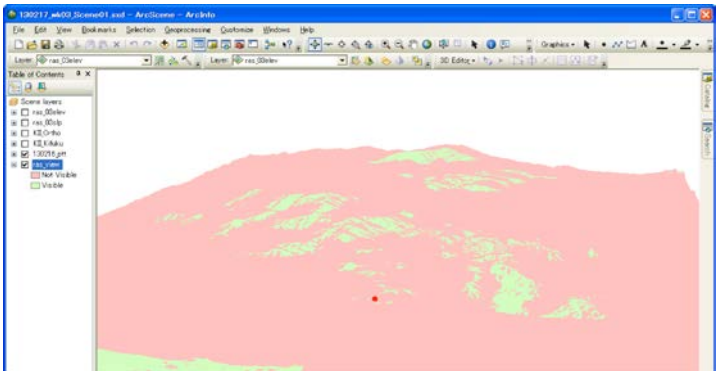
図20　10mメッシュデータをArcGISに取り込み
標高で色付けし表示した例



＊パラメータの設定



＊標高データ



＊眺望可能範囲（薄緑：眺望可能／薄桃：眺望不可）

図21　ArcSceneによる眺望分析の例

＊ArcSceneの機能でパラメータを設定（図上段）すると、標高データ（図中段）から、視点（図中段/下段の中央赤い点）から眺望可能な領域が計算され表示できる。

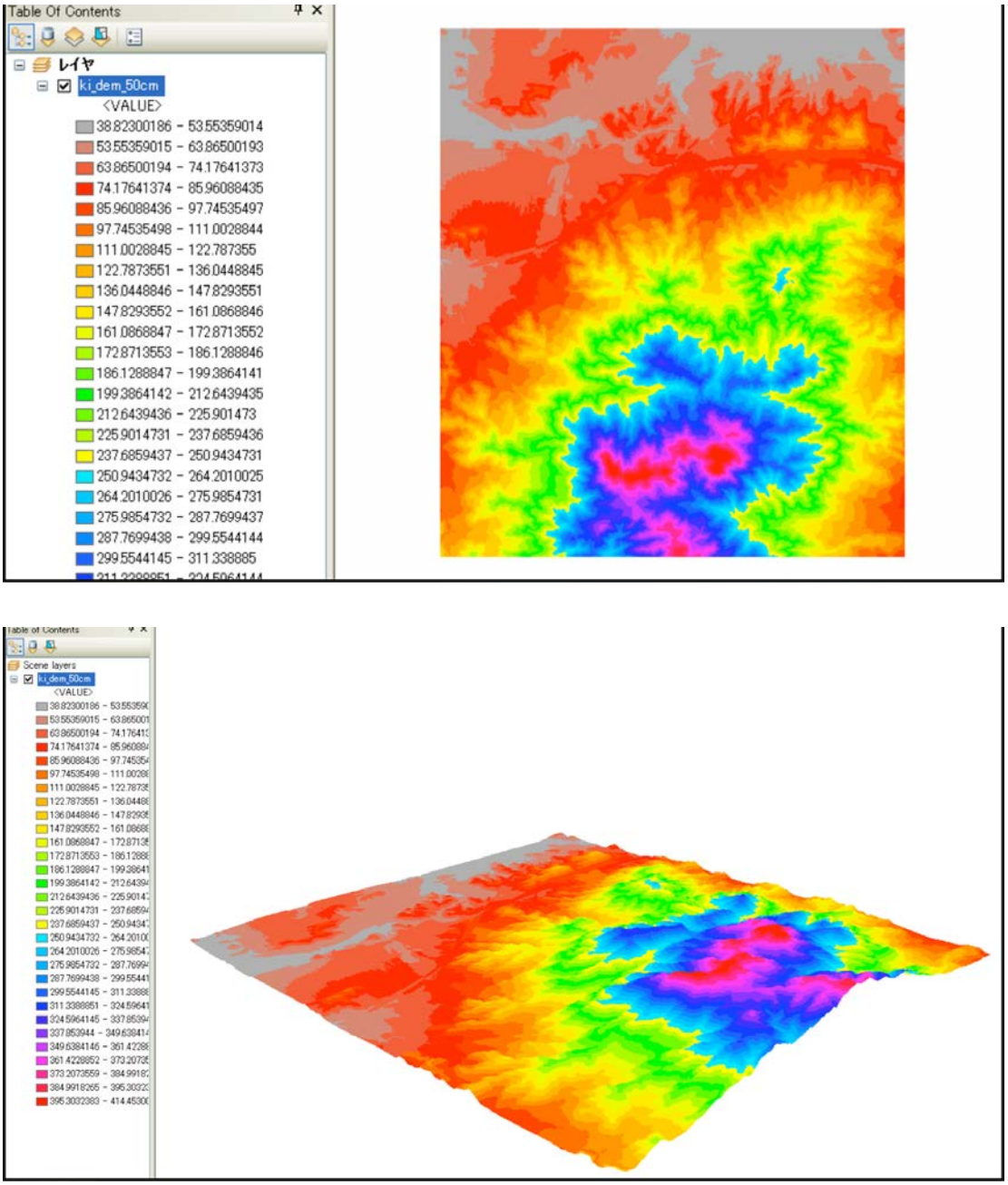


図22　詳細DEMの解析

＊50㎝の詳細DEMからArcGIS形式（ラスター）を作成しArcGISで読み込んだ事例

本研究は九州国立博物館アジア文化交流センターの古代山城アーカイブ作成事業予算と、科学研究費（基盤研究Ｂ）「ＧＩＳを活用した古代山城の研究基盤の創設」（研究代表者　赤司善彦　平成21～23年度）の研究成果の一部である。
また挿図の一部は中日本航空株式会社の提供を受けた。

参考文献

赤司善彦 2010「ＧＩＳの古代山城研究への活用」『ＧＩＳ ＮＥＸＴ』第30号　ネクストパブリッシング
赤司善彦 2010「大野城をＧＩＳで読み解く」『地図中心』450号　財団法人日本地図センター
赤司善彦 2010「古代山城の景観　数値標高モデルからの眺め」『地図中心』453号　財団法人日本地図センター
赤司善彦 2011「レーザー計測による古代山城の研究－基肄城をめぐる土塁の詳細－」『西日本文化』
赤司善彦 2018「古代山城とＧＩＳ－大野城・基肄城・阿志岐山城の眺望を中心に－」『大宰府の研究』古志書院

図23　画像変換後の古地図（基肄城周辺）

＊基肄城を中心として地形図に位置が合うように変換してある。このため、基肄城周辺ではよく一致するが、その他の地図の外縁部分は大きくひずんでいる。

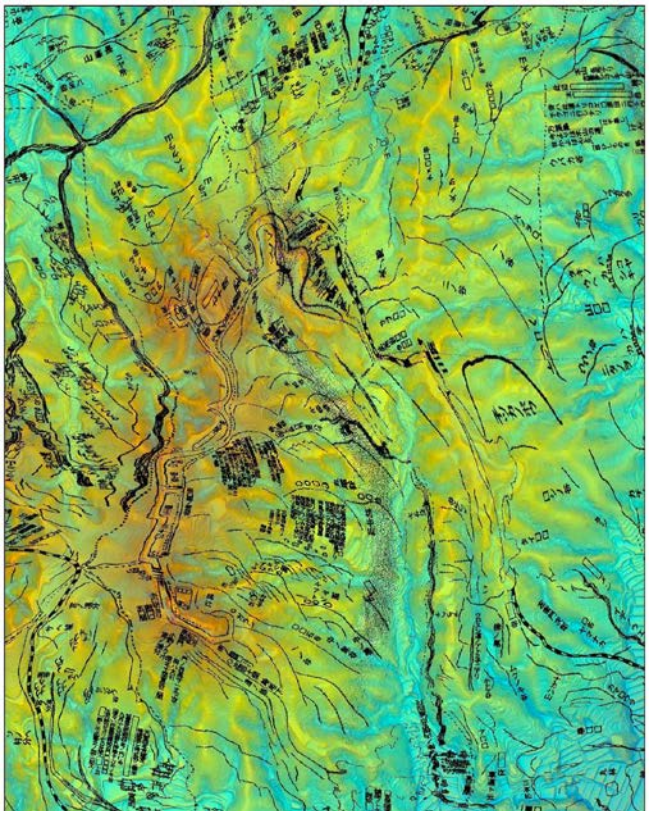


図24　古地図と詳細DEMの重ね合わせ（基肄城周辺）

＊古地図と地形が概ね一致しているのがわかる。

第2章

大野城の研究成果

赤司　善彦

はじめに

大河ドラマ『真田丸』では信長の安土城など数多くの城を舞台にストーリーは展開される。応仁の乱（1467年）から一世紀半、徳川幕府が誕生するまでを戦国時代と呼ぶ。この時代、戦国大名は乱世を生き抜くために競って城を築いた。全国で作られた城は５万以上とみられる。村に一つというほどの数で世界史的にも類を見ない数字である。この攻防の戦の中で生み出されたさまざまな城は、江戸時代になると、幕藩体制のもとで都市や集落などの城下町を抱えた城に統一された。

多くの日本人は、そびえ立つ天守閣や櫓、さらには曲線が美しい石垣と、これを映し水を満々と湛えたお堀が大好きである。江戸時代のお城はその美において日本のお城の到達点である。

こうした中世から近世へと受け継がれたお城が、今回のテーマである古代山城に繋がっているかというと、そこには全く歴史的な連続性はない。こちらは飛鳥時代から奈良時代にかけて、西日本の九州北部と瀬戸内一帯に築造され、音も「き」と読まれた。軍事的な緊張の中で誕生した城は、その必要性が薄れると忘れ去られる宿命をもっている。つまり、中国や朝鮮半島で発達した城が一度は古代に日本へと伝わったもののすぐに廃れてしまい、中世になって国内の覇権争いの激化で再度誕生したのである。

古代山城の築城主体も目的も、中世・近世の城とは異なっている。古代山城の場合は国外の敵が対象となって築城されたと考えられている。ただし、この考え方も近年の発掘調査の成果によって、別の視点での見方がされるようになってきた。新しい知見を交えて今日の時点での課題（謎）を紹介したい。

１．古代山城の築城

古代山城は、東アジアの緊迫する情勢を背景に、ヤマト王権によって外敵の侵入を防ぐ目的で築城された。弥生時代や古墳時代には存在しない。その系譜については、中国で形成されその後、山岳地形に富んだ朝鮮半島で発達した山城の築城技術に求められ、７世紀代に我が国へもたらされたものである。

今から1350年前の７世紀、朝鮮半島では百済・新羅・高句麗による領土争いが激化し、ついには中国（隋・唐）までも介入しはじめることとなった。そして660年に百済が滅亡すると、日本はただちに百済救援のための大軍を送った。しかし､朝鮮半島西部の白村江で唐の水軍に壊滅させられてしまった。これが663年の白村江の戦いである。この敗北によって、日本は唐と新羅を敵に回してしまい外交関係は完全に破綻したかにみえた。さらに668年には北の高句麗も滅亡してしまう。

実は白村江での敗戦後、唐や朝鮮半島の諸国から日本へ使節の派遣があいつぎ、直接的な唐・新羅に対する脅威は一見なくなったようにもみえるが、日本の唐と新羅に対する警戒心は決して解かれず、さらに守りを強固にしようとしたと考えられる。

『日本書紀』によれば、敗戦の翌年に、対馬・壱岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防人と烽（とぶひ）を配置し、同時に九州北部の筑紫に水城を築造。翌年には瀬戸内への関門である長門と、筑紫に大野城・椽（基肄）城と、さらに２年後には近畿の高安城と瀬戸内の屋嶋城さらには最前線の対馬に金田城を築いたと記す。戦略としては、まず防人による海浜警備と、通信網となる烽火の体制を整えたのである。次に大宰府地域に内陸の防衛拠点を形成して、さらには対馬から瀬戸内そして畿内の王都に至るまでの陸路・海路の主要幹線に多重防御線を敷いたと解釈できる。この天智朝期に仮想敵国の侵攻を防

ぐための国防策が矢継ぎ早に実施され、まだ白村江海戦での大敗の傷が癒えないまま、九州北部は防衛の最前線に立たされることになったのである。

日本が世界に向かって「日本」の国号を宣言し、天皇中心の中央集権国家としてアジア世界に躍り出たのは、ちょうどこの古代山城が築かれた直後のことである。まさに古代山城は日本の古代国家成立期を物語る歴史的記念物である。

２．大野城の歴史的な評価と課題（謎）

古代山城の教科書ともいえるのが大野城である。東アジアでも最大規模を誇る。これまでの調査で城壁や内部に様子が調査され古代山城の中で最も解明が進んでいる山城である。山城が築かれたのは、標高410mの四王寺山である。山頂に登ると北は博多湾、南は天候に恵まれると有明海まで見通せる。四王寺山が通常の山容と違うのは、北側へと開口する谷を取り込んでいるため、外側は急峻だが内側はすり鉢状をなしている点である。

城壁　外郭線は自然の地形を利用しながら土塁を巡らせている。その土塁の総延長は6.5㎞以上である。この外郭の土塁線は日本では最大規模で、朝鮮半島の百済にもこのような大きな山城は築かれていない。百済滅亡後、新羅でも大規模化と高所化がなされているので、その築城設計の変化が反映されたのと考えられる。

さて、城壁は基礎部分の盛土とその上部に版築による硬く締まった強固な土塁を築くことを基本としている。近年の調査でこれが版築工法で築かれたことが明らかになった。しかし、城壁線がすべて確定しているかというと、実はそうではない。特に南北２重の土塁線が想定されているが、北側については門が設置された内側はともかく、外側土塁がすべてに囲繞されていたかどうかは異論がある。また、山城は険しい自然地形を効果的に利用して防御を施すことが特徴であり、土塁の有無の把握が難しい面がある。

城壁線が谷筋を通過する場合には、石垣を用いている。これまでに北側で百間石垣・北石垣・小石垣・屯水石垣、南側で水ノ手石垣・大石垣・原石垣の７カ所が確認されている。これらは内部まで石築された石塁（総石垣）と土塁の法面（表面）のみを石垣で構築して内部は築土からなる貼石垣がある。大野城の場合、存続期間が長いので当然すべてが初築の石積みとは限らない。谷部は総石垣で、丘陵部には土塁版築の外側のみ石積みした貼石垣がある。集水の様相の違いによって内部は異なる。長さ約180mで、古代の尺度に直すと大尺500尺の完数尺が想定できる。城塁の施工が一定の尺度を基本として設計されていることの検証は、今後の調査の課題である。なお、この百間石垣も積み直しを考慮しておく必要がある、

城門　城の内外に通じる城門は、2005年以降に新たな城門遺構が４ヶ所も発見されている。その結果北半の土塁で４ヶ所、南半に５ヶ所の計９ヶ所の城門が判明している。大野城の正門にあたる宇美口城門は、門礎の一部が保存されているだけで、詳細は不明である。

城門には門扉の軸や方立などを受ける仕口を造り出した唐居敷が付属しているが、これにより掘立式と礎石式があることが知られる。礎石の場合は唐居敷を一石でつくる事例が多い。柱には円柱と角柱が用いられている。さらに門扉の軸受孔の平面形が円形と隅丸方形そして方形の三種がある。形式的には大野城の水城口城門が最古期で、掘立柱式で円柱、そして軸受孔は円形である。保存されている宇美口城門の唐居敷は比較的新しい形式であり、建て替えられた可能性も考えられる。

また、門の床面は、防御性を重視して急峻な段差を設けた懸門（けんもん）式と呼ぶ北石垣城門、段差のない形式平門式の太宰府口城門のほか、床面の石敷に階段を設けた観世音寺口城門がある。大野城では掘立柱式の懸門式から礎石式の平門式へと変化している。軍事的な実用性の重視から荘厳する方向に変化したといえよう。それにしても城門は最も防御を固める必要がある施設である。なぜこれほどの

数の城門を築いたのか謎である。

築城年代　太宰府口城門第Ⅰ期に用いられたコウヤマキの木柱が残存していた。「孚石部(うきいしべ)」もしくは「孚石都」と読まれる文字が刻まれていることが明らかになった。都は津の意味で港である。和歌山に浮石津の地名が残る。また年輪年代測定法で検討したところ、650年の伐採であることが判明した。『日本書紀』には665年に築くとあることから、この年を築城完成年とすると、15年前に築城準備がされていたことになる。しかも、コウヤマキの年輪の変動パターンが平城宮出土のコウヤマキと合致していることから、和歌山などの近畿地方で伐採されそれが九州まで運ばれた可能性がある。

役割の変化　城内には各所で礎石建物跡の礎石を見つけられる。高床倉庫がそのほとんどを占めている。その構造や炭化米が大量に出土することからみて、稲穀を収納していたとみられる。50棟を超える倉庫は7世紀後半から9世紀にかけて、幾度か拡大していった姿である。

こうした倉庫のあり方は古代の国・郡に設置された稲の備蓄倉庫と構造や規模がよく似ている。大野城に蓄得られた膨大な稲穀は、海外との戦への備えだけではなく、災害や疫病などの非常事態に対応する財源を大宰府が独自に確保しようとしていたのではないだろうか。奈良時代に入ると外交が安定したことで、ほとんどの古代山城が廃絶させられるが、大野城や基肄城の場合には大宰府の管轄下にあり、九州地域の安定化のための備蓄基地という役割もあり長期に存続したのではないだろうか。

これは太宰府口城門の建て替えからもその変化が指摘できる。築城時のⅠ期は掘立柱建物で間口が5m以上と他の城門と比較して広いのが特徴的である。奈良時代前半にⅡ期の建物に立て替えられる。屋根が重層になる門で宰府政庁と同じ鬼瓦が用いられている。軍事的というよりは権威の象徴というような性格に変化しているようである。

立地と分布　大野城は、水城や基肄城とともに奈良時代に成立した大宰府の周囲にされている。東側の阿志岐山城の配置を含めると、百済の最後の王都扶余との類似が指摘されている。扶余の東羅城と名づけられた外郭城塁はその低湿地の工法が水城の敷粗朶（しきそだ）工法と同じであり、古代の幹線に関門を設けた防塁を築く発想は受け継がれていると思われる。

また、新羅の王都慶州にもよく似ている。王都である慶州の地は盆地状の地勢にあって、羅城はなく周囲の三山（明活山・南山・仙桃山）の山頂に山城を設け、さらにその外側に外城を築いて王都を防御している。大宰府の場合も敵の侵入が想定される博多湾側には、地峡を遮断する関門城としての水城や小水城を配するが、それ以外に大宰府を囲む土塁等の明確な防塁は確認されておらず、大宰府に羅城が存在したのかは不明である。

3．神仏が護る四王寺山

大野城が築かれて約100年後の宝亀5年（774）大野城の城内に四天王寺が建立された。寺院を設置した目的は、新羅が日本を呪詛しているとの情報がもたらされたことから、これに対抗するため新羅に面した高く清らかな地に四天王像を祀って、その加護のもと金光明最勝王経の力と併せて新羅の災いを払い国家安寧をはかったのである。現在では信じられないかもしれないが、当時は観念の力こそが真の力と信じられていたのである。

四王寺山には北西の最も高い場所に毘沙門天、東に持国天、南に増長天、このやや西寄りに広目天の地名が残っているが、実際には四天王寺の一個所に四天王像を揃えて安置していたと考えられる。史料には「大野城鼓峰」と記されている。博多湾を望む最高所にあたり、毘沙門天の地名が残る。これまでの調査で礎石建物跡や水晶製の軸端や瓦などが発見されているが四天王寺の威容を伝える寺院跡は発見されていない。現在、毘沙門堂では、正月3日の「四王寺毘沙門詣り」が宇美町四王寺地区の人々によって守り伝えられている。

ところで四天王寺では四名の僧によって精進・修行が行われ、毎日昼は金光明経を読経し、夜は神呪

を唱え続けたという。四天王寺は、観世音寺と同じく大宰府の官寺に位置づけられた。ただし、延暦20年（801）には四天王寺で四天王法が停止され､仏像も筑前国分寺に移された。新羅の直接の脅威が去ったという認識があったようである。しかし、807年になると大宰府管内で疫病が流行り百姓も疲弊している状況にあることから四天王寺の再興が大宰府より申請許可されている。

このように、大野城という軍事力だけではなく、神仏という精神的な力を合わせて国を護ろうとした当時の考え方がみてとれる。

おわりに

大野城の特徴をおさらいすると、規模が大きく山の高いところに築城され、城門や倉庫がたくさん築かれている。また、使用された期間が長い。ただし実戦に使用されたことがない。平和の象徴ともいえる。さて、多くの遺跡が土取りなどで破壊されているが、大野城はなぜ現在まで残されているのか。それはこれまでの1350年間大切だと認識されていたに他ならない。聖地として、地域の誇りとして今後も多くの皆さんに愛されることを願っています。

第3章

糟屋屯倉と怡土城からみた大野城

重藤　輝行

はじめに

大野城は古代山城の中でも最大規模のもので、その築造過程や役割を理解するには、東アジア情勢を含む広い歴史的脈絡から考える必要がある。ここではその試みのひとつとして、大野城築城から１世紀後の古代山城である怡土城と大野城の対比と相互の関連、大野城に先行する６世紀の糟屋の古代遺跡や渡来人のあり方をみて、大野城をその前後の時代の脈絡の中に位置づけてみたい。

１．怡土城の築城からみた大野城跡

怡土城の概要　大野城、基肄城築城から約１世紀後、同程度の規模を誇る山城、怡土城が福岡県糸島市の東部、高祖山の西斜面に築城される（**表１・図１**）（瓜生編2006）。山の尾根線を走る城壁線上には８ケ所の望楼跡、山裾には南北約２㎞にわたる土塁があり、全周は6.5㎞ほどになる。構造上は大野城跡のような朝鮮式山城とは異なり、中国式山城との関連が指摘されている（鏡山1937）。

表１　古代山城一覧（磯村2010を基礎に作成）

	名称	所在地	旧国名	全周	遺構など
1	高安城跡	奈良県生駒郡平群町ほか	大和	不詳	倉庫建物跡
2	屋島城跡	香川県高松市	讃岐	7.2km	石塁・水門跡(1)
3	大野城跡	福岡県糟屋郡宇美町・太宰府市・大野城市	筑前	8.0km	倉庫建物跡・石塁・城門跡(9)・水門跡(1)・土塁
4	基肄(椽)城	佐賀県三養基郡基山町・福岡県筑紫野市	肥前	4.4km	倉庫建物跡・石塁・城門跡(3)
5	金田城跡	長崎県津島市	対馬	2.8km	石塁・水門跡(3)城門跡(3)
6	鞠智城跡	熊本県山鹿市・菊池市	肥後	3.6km	倉庫等建物跡・城門跡(3)・土塁
7	長門城跡	山口県下関市？	長門		所在地未確認
8	茨城城跡	広島県福山市	備後		未調査
9	常城城跡	広島県福山市	備後		未調査
10	大廻・小廻山城跡	岡山県岡山市	備前	3.2km	列石・石塁・水門跡(3)・土塁
11	鬼城山	岡山県総社市	備中	2.8km	石塁・列石・水門跡(5)・城門跡(3)・建物跡
12	城山	香川県坂出市ほか	讃岐	7.6km	土塁・建物礎石・石塁
13	永納山城跡	愛媛県西条市・今治市	伊予	2.7km	列石・土塁
14	石城山神籠石	山口県光市	周防	2.5km	列石・土塁・水門跡・城門跡
15	御所ヶ谷神籠石	福岡県行橋市・京都郡みやこ町	豊前	2.8km	列石・土塁・水門跡(1)・城門跡(6)・建物跡
16	鹿毛馬神籠石	福岡県飯塚市	筑前	2.0km	列石・土塁・水門跡(1)
17	雷山神籠石	福岡県糸島市	筑前	2.6km	列石・土塁・水門跡(2)
18	杷木神籠石	福岡県朝倉市	筑前	2.4km	列石・土塁・水門跡(2)
19	高良山神籠石	福岡県久留米市	筑後	2.7km	列石・土塁・水門跡(2？)
20	女山神籠石	福岡県みやま市	筑後	3.0km	列石・土塁・水門跡(4)
21	帯隈山神籠石	佐賀県佐賀市・神埼市	肥前	2.5km	列石・土塁・水門跡(4)・城門跡(1)
22	おつぼ山神籠石	佐賀県武雄市	肥前	1.8km	列石・土塁・水門跡(4)・城門跡(2)
23	唐原山城跡	福岡県築上郡上毛町	豊前	1.7km	列石・土塁・水門跡(3)・城門跡(1)
24	阿志岐山城跡	福岡県筑紫野市	筑前		列石・土塁・水門跡(3)
25	城山城跡	兵庫県たつの市	播磨	3.5km	石塁・城門礎石跡
26	三野城跡	福岡県福岡市か？	筑前？		所在地未確認
27	稲積城跡	福岡県糸島市か？	筑前？		所在地未確認
28	怡土城跡	福岡県糸島市	筑前	6.5km	土塁・石塁・城門跡(3)・望楼跡・建物跡

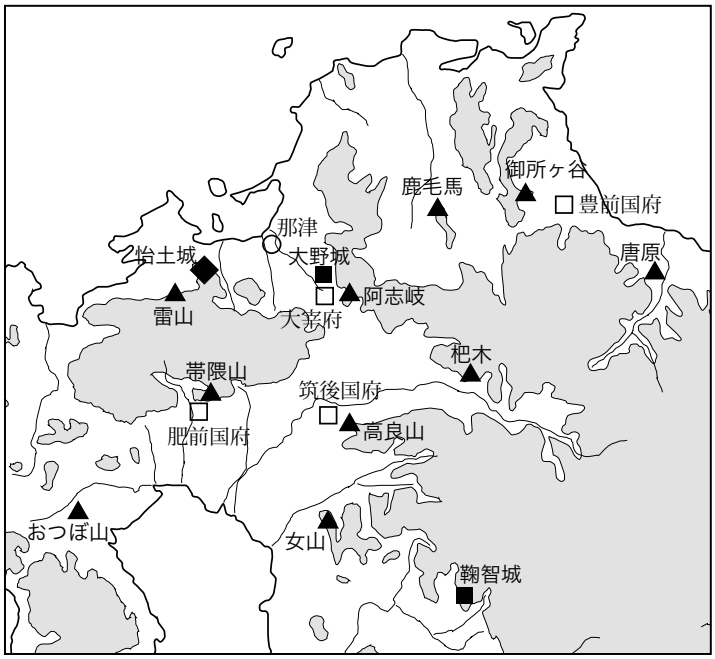


図１　北部九州の古代山城分布図（山中編2004を基礎に作成）

怡土城は天平勝宝８年（756）に着工され、神護景雲２年（768）に完成したと記録される。大規模な山城の築城に要する期間を知ることができ、大野城跡もその程度の期間を要するのではないかと考えられる。 また、その築城には２度の遣唐使として著名で、奈良時代の政治史上でも大きな活躍を果たした吉備真備が指揮したことが記録されている。

吉備真備と怡土城　ここで少し、吉備真備の生涯を見てみることにしたい（宮田1961)。 吉備真備は１回目の遣唐使として、中国に19年間滞在し、帰国後、中央政界で官人、政治家として順調に位を高め､天平19年（747）には平城京の長官、右京大夫にまで出世する。ところが、その後、同時期の政治家、藤原仲麻呂により左遷されることとなる。

左遷後、天平勝宝２年（750）筑前国司、肥前国司を経て、天平勝宝３年（751）に遣唐副使となり、２回目の遣唐使として翌年、入唐し、２年後に鑑真とともに帰国する。そして、帰国後は大宰大弐として、天平宝字８年（764)、造東大寺長官に異動するまで、怡土城築城を指揮することになる。

吉備真備の構想　怡土城の築城は、中国の安史の乱（755 ～ 763年）および新羅との関係悪化に応じた防衛体制の整備の一環とされる。ただ、吉備真備は筑前・肥前国司時代に築城から90年ほど経過した大野城、基肄城の状況を熟知していたと考えられる。中国で学んだ築城技術に加えて、国司時代の経験が怡土城の占地や設計、さらには築城のための労働力、資材の確保、工程の把握など様々な面で、活かされたと推測される。安史の乱、新羅との関係悪化に先立ち、740年代より新羅は疫病等で政情が不安定であったと記録されている。吉備真備は筑前・肥前国司の時期から新たな築城を構想し、そのために２度目の遣唐使としての入朝に望んだことも想像される。

怡土城築城当時、大野城、基肄城は山城として機能しており、吉備真備は、新たに怡土城を設けることで、一体的な防衛を考えたのであろう。また、怡土城築城時の大野城、基肄城の役割を考えると、単に大宰府の北と南を固めるだけでなく、博多湾を意識した守りとしての大野城の役割が考えられる。怡土城が糸島半島、基肄城が有明海、そして大野城が博多湾から上陸する敵に備えるという構えである。

２．糟屋と大野城

大野城築城と糟屋の渡来人　推測、想像の是非はさておき、怡土城築城に係る吉備真備の動向から大規模な古代山城の築城に要する期間の長さを知ることができる。また、古代山城の築城には山城構造、軍事的知識はもちろん、地域の労働力、資材の分布についての知識が必要であったと考えられる。そのような観点から大野城跡と糟屋郡との関わりを考えていくことにしたい。

周知のように大野城、基肄城の築城には百済からの渡来人、憶礼福留と四比福夫が指揮したとされる。ただ、労働、資材の提供等まで考えると築城には多くの人びとが関与したと考えられる。

大野城を築城した渡来人は、百済の滅亡に伴うものであるが、５世紀後半以降、朝鮮半島からの渡来人が多く日本に渡来し、とりわけ九州北部はその最初の上陸地であった。５世紀後半以降の朝鮮半島西

南部、馬韓・百済系土器の分布（図2）を見ると糟屋地域はその集中地域のひとつである。また、大野城市側では薬師の森遺跡でも出土する。したがって、大野城築城に200年先立つ時期から糟屋、大野城周辺には渡来人が集中していたと言える。７世紀においても、彼らが大野城築城にその様々な知識・技術を提供したと考えられる。なお、基肄城周辺も５世紀後半以降の馬韓・百済系土器の分布が集中する感があり、糟屋郡域と同様に渡来人の居住が考えられる。

糟屋屯倉から大野城へ　６世紀の糟屋郡には、筑紫君磐井の乱後の、継体天皇22年（528）に、糟屋屯倉が設置された。糟屋屯倉の設置は磐井の子、葛子が罪の赦しを乞うために献上したことが直接の理由であるが、屯倉はヤマト政権による領域的な支配とともに、軍事的な性格を持つとされる。

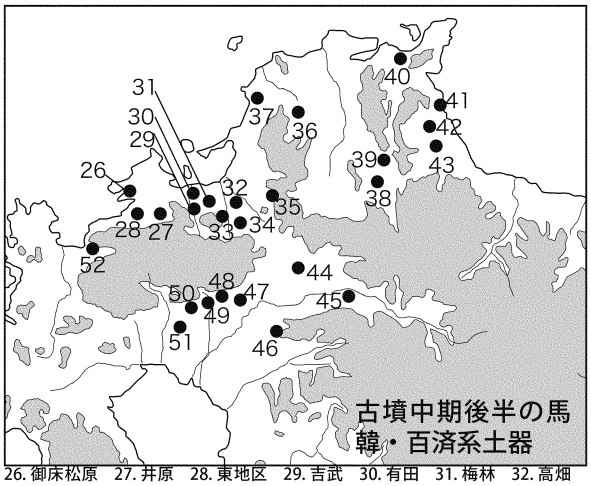
屯倉の軍事的性格については、屯倉に設けられた倉に軍隊が駐屯したという指摘がある（薗田1981）。また、桃崎祐輔氏は、屯倉と軍糧備蓄および地域への示威・威圧のための大型倉庫群の存在との関わりに注意している（桃崎2010）。近年、糟屋屯倉との関連が指摘される遺構が古賀市鹿部田渕遺跡、そして、粕屋町糟屋官衙遺跡群阿恵遺跡で発見されている。糟屋屯倉の場所はいずれかは確定していないが、いずれの遺跡でも大型の倉庫を伴い、示唆的である。また糟屋官衙遺跡群阿恵遺跡は７世紀後半には評家となった可能性が高く、大野城北の正門となる百間石垣から北へと向かう道上にも位置する。大野城築城期の物資、兵の集積地であった可能性も考慮する必要があろう。

ところで、高句麗軍の侵攻による百済の王都漢城の陥落を記した『日本書紀』雄略20年（476）の条には、「爰有少許遺衆、聚居倉下、兵糧既尽、憂泣茲深」とあり、薗田香融氏は、倉の下が軍隊の駐屯に利用されていたとする（薗田1981）。倉の軍事的利用やその朝鮮半島との関わりを示すものとして注意され、大野城、基肄城の倉庫群の利用方法を考える材料になると考えられる。

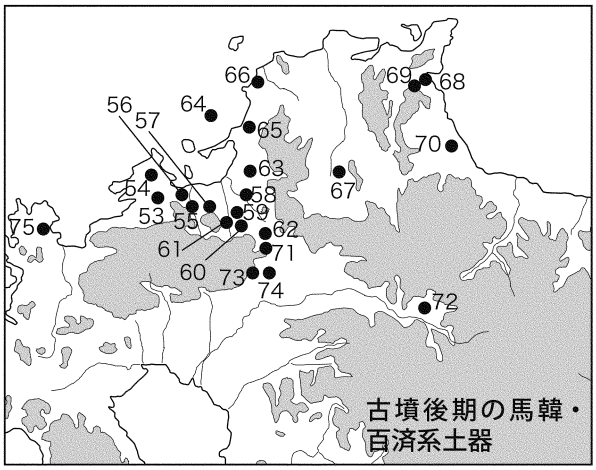
大野城築城には亡命した百済人の指導が考えられるが、一方で、５世紀後半以降に朝鮮半島から渡来し、糟屋郡等大野城周辺に居住していた渡来人の参画が想定される。また、大野城築城には糟屋屯倉と連続する部分があったと考えられる。このような点から、大野城は大宰府の防衛という視点だけでなく、糟屋郡との関わりも重視すべきであることを確認しておきたい。

おわりに

大野城築城について本稿では築城に先立つ５～６世紀の渡来人の動向や屯倉の設置、築城から100年



26. 御床松原　27. 井原　28. 東地区　29. 吉武　30. 有田　31. 梅林　32. 高畑　33. 野口　34. カクチガ浦　35. 乙植木　36. 冨地原遺跡群（冨地原森・冨地原川原田）　37. 在自遺跡群（在自小田・在自上ノ原・在自下ノ原）　38. セスドノ　39. 五徳畑ヶ田　40. 小倉城下屋敷　41. 番塚　42. 鬼熊　43. 京ヶ辻　44. 西森田　45. 塚堂　46. 西行　47. 青柳　48. 浦田　49. 野田　50. 藤附K　51. 東高木　52. 仁田



53. 井ノ浦　54. 桑原石ヶ元　55. 広石　56. 草場　57. 小袖　58. 堤ヶ浦　59. 赤井手　60. 観音山　61. 小丸　62. 剣塚　63. 脇田山　64. 相島　65. 鹿部田渕　66. 生家釘ヶ浦・在自下ノ原・奴山伏原　67. 次郎太郎　68. 潤崎　69. 寺田　70. 船迫　71. ハサコの宮　72. 朝日天神山　73. 都谷　74. 薮原　75. 相賀

図２　古墳時代中期後半（５世紀後半）・後期（６世紀）の馬韓・百済系土器の分布

後の吉備真備による怡土城築城という二つの視点から考えてみた。大野城築城は７世紀の日本史上の画期となる出来事であるが、長期的な視点や大野城にかかわる人びとの動きを見ることにより、大野城の役割や築城の経緯に対する理解が深まるのではないかと考えられる。今後も、様々な視点から大野城跡をめぐる議論が展開されることを期待したい。

引用文献

磯村幸男2010「西日本の古代山城」森公章編『史跡で読む日本の歴史』吉川弘文館
瓜生秀文編2006『国指定史跡怡土城跡』前原市文化財調査報告書第94集
鏡山猛1937『怡土城阯の調査』日本古文化研究所報告第６　日本古文化研究所
宮田俊彦1961『吉備真備』吉川弘文館
桃崎祐輔2010「北部九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦？還暦！－武末純一先生還暦記念献呈論文集・研究集』武末純一先生還暦記念事業会
山中敏史編2004『古代の官衙遺跡』Ⅱ　遺物・遺跡編　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

第４章

文献史料からみた大野城

松川　博一

１．大野城築造を語る史料

『日本書紀』には大野城の築造を示す記事がふたつ存在する。ひとつは白村江の敗戦の翌々年にあたる天智天皇４年（665）８月の築造記事である。

【史料１】秋八月に、達率答炑春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二つの城を築かしむ。

もうひとつはそれから５年後の天智天皇９年（670）２月の記事である。

【史料２】又、高安城を修りて、穀と塩とを積む。又、長門に城一つ・筑紫に城二つを築く。

【史料２】の筑紫に築かれた二つの城とは、【史料１】から大野と椽の二つの城、つまり現在の大野城跡と基肄城跡のことを指すと考えられる。これを『日本書紀』編纂時の重出記事として取り上げない説がある一方、【史料２】を山城完成の記事として積極的に評価した上で『日本書紀』天智天皇10年正月条の答炑春初と憶礼福留に対する叙位をその功績への褒賞とする見方もある。

大野城の築造を考える上で重要な出土文字資料としては、大野城太宰府口城門跡出土の創建当初に使用された刻書木柱がある。刻書の内容については、第３文字目をめぐって「𠮷石部」とする氏族名説と「𠮷石都」とする津（港）名説の両説があり、前者については「𠮷石部」と読み的部を指すとする説も提示された。築造年代を考える上で重要となるのは木柱の伐採年であり、Ｘ線ＣＴスキャナの画像に基づいた年輪年代測定法による調査の結果、白村江の敗戦前の650年前後との年代を得ている。この【史料１・２】と刻書木柱の伐採年代が大野城築造の謎に迫る大きな鍵となる。

この３つの史料の理解をめぐっては、大別すると①【史料２】を重出記事としてあくまで【史料１】に基づき665年を大野城の築造年とする説、②【史料１】を大野城の築造開始とし【史料２】を完成を意味するとする説、③刻書木柱の伐採年を重視し白村江の戦い以前から築造が始まっており【史料１】を完成記事とみる説がある。

その後、大野城が注目されるのは、天智天皇死後の天武天皇元年（672）に起きた壬申の乱の時である。筑紫大宰であった栗隈王は、大友皇子からの援軍要請に対して、「城を峻くし隍を深くして、海を臨みて守らするは」外敵から国を守るためだとして、内乱への派兵を断っている。「城」とは大野城をはじめとした筑紫の城、「隍」とは水城と考えて大きな間違いはないであろう。白村江の敗戦から約10年が経過してもなお、大野城や水城が対外防衛施設として強く意識され、筑紫大宰の下で維持管理されていたことがうかがわれる。

つづいて「大野城」が史料上で確認できるのは、文武天皇２年（698）５月の大野城・基肄城・鞠智城の修理を命じる記事である。

【史料３】大宰府をして大野・基肄・鞠智の三つの城を繕治はしむ。

筑前国の大野城、肥前国の基肄城、肥後国の鞠智城が大宰府の管理下で修築されていることがわかる。

２．大野城と大野山・大城山

「大野城」という城名の由来は、大野の地名もしくは大野山の山名に求めることができる。「大野」の地名は筑前国御笠郡の郷名として大野郷がみえるほか、万葉筑紫歌壇が花開いた奈良時代、大宰大監大

伴百代の恋歌の中に「思はぬを 思ふと言はば 大野なる 三笠の社の 神し知らさむ」（巻４−561）とみえ、三笠の社（＝御笠の森、現在の大野城市山田）の所在地として「大野」の地名が確認できる。「大野山」については大宰帥として赴任した大伴旅人が妻を亡くし、その悲嘆を慮って筑前守の山上憶良が詠んだ「大野山 霧立ちわたる わが嘆く おきその風に 霧立ちわたる」（巻５−799）の万葉歌に「大野山」がみえる。「大野」と「大野山」が少なくとも奈良時代まで遡り得る名称であることは確かである。

さらには『元暦校本万葉集』の「いちしろく しぐれの雨は 降らなくに 大城の山は 色づきにけり」（巻10−2197）の和歌に付された「大城の山」の註には、「謂ふは筑前国御笠郡の大野山の頂にあり、号けて大城と曰ふ」とあり、大野山の頂を大城（山）と呼んだことがわかる。この内容は、『万葉集』の最古の注釈書『秘府本万葉集抄』（平安時代末期成立）が引く『筑前国風土記』の逸文にも同様の記載が確認でき、その認識は和銅年間（708 ～ 715）の風土記の編纂時まで遡ることは明らかである。大野山は大野城が築かれたことによって、『万葉集』に詠まれる「大城山」や延喜５年（905）の『観世音寺資財帳』にみえる「大野城山」という別称を持つことになったと考えられる。また、大宰府政庁前面の不丁地区の官衙跡からは、「大城」と墨書された土器が出土しており、「大野城」を意味すると考えられている。大野山の頂が大野城を意味する「大城」と呼ばれたのにはしかるべき理由があるはずであり、今後大野城の構造の解明を進めていく上で大野城の最高所にあたる「毘沙門天地区」は重要な地点である。

「大城山」の山名は『日本三代実録』貞観８年（866）２月14日条に「城山四王院」と記され、さらに「城山」と略称されている。なお、現在の「四王寺山」の山名は、宝亀５年（774）、大野城内に大宰府四天王寺（四王寺）が建立されることにより生まれた呼称である。これらを整理すれば、おおよそ「大野山」→「大野城山」→「大城山」→「城山」→「四王寺山」という山名の移り変わりが想定される。

あわせて基肄城についても言及すると、『日本書紀』では「椽」の城として登場するが、『続日本紀』では「基肄城」、『万葉集』では「記夷城」と表記されている。当初、「椽」という地名・郡名だったものが、和銅６年（713）５月に国・郡・郷名に二字の好字を当てることとなり、「木国」が「紀伊国」となったように「椽郡」から「基肄郡」に改定されたと考えられる。この時に編纂された『肥前国風土記』では、これにしたがい郡名を「基肄郡」、山名を「基肄之山」と表記している。

３．大野城の倉庫の中身

古代の「クラ」の用字には、大きく「倉」と「庫」で使い分けがあった。「倉」は穎稲・穀稲（籾米）・粟を納めるクラ、「庫」は武器・文書・書籍・布帛・宝物を納めるクラを指した。大宰府でいえば、大宰府管下の六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）から貢進された稲穀を納めたクラを「税倉（税庫）」といい、西海道諸国（九州一円）から貢納された布や真綿などの調庸物のほか武器・文書・書籍などを納めたクラを「府庫」という。そして、「税倉（税庫）」は税司、「府庫」は蔵司が所管していた。「府庫」の中でも武器庫そのものを指す場合には特に区別をして「兵庫」と書かれる場合が多い。

大野城内にあった倉庫やその収納物について知ることができる史料は意外と少なく、いずれも平安時代以降のものである。大野城内の「クラ」は、大宰府政庁の周辺にあった「府庫」「税倉（税庫）」に対して、「城庫」と呼ばれていた。その「城庫」に納められていたものとして確認できるのは、貞観12年（870）５月２日太政官符にみえる「大野城器仗」と、同18年３月13日太政官符にみえる「大野城衛卒粮米」である。ただし、同12年以前には庸米や雑米の一部が収納されていた可能性も皆無とはいえない。

「器仗」とは実用（兵仗）と儀礼用（儀仗）の武器・武具のことを指し、ともに「兵庫」に納められていた。大宰府の「兵庫」は、大宰府政庁の近くの「府庫」と大野城内の「城庫」の二か所にあった。これらの兵庫は延暦18年（799）以降、不動とされ、原則として非常時と修理以外で開封されることは許されなかった。養老衛禁律には、兵庫や「筑紫城」へ不法侵入した際の罰則規定がある。

【史料６】凡そ兵庫の垣、及び筑紫の城を越えたらば、徒一年。陸奥・越後・出羽等の柵も亦同じ。

「筑紫城」とは、少なくとも大野城と基肄城の二城、あるいは【史料３】を踏まえれば鞠智城を含むと考えられる。兵庫の垣を越えることと山城の土塁・石垣を越えることとが同じ罪に問われている。山城そのものが、警衛区域として兵庫と同格との認識があったことを意味する。もうひとつの「衛卒粮米」とは、大野城に配備され城の修理や日常の管理に当った衛卒40人分の粮米のことであり、毎月24斛が支給された。大野城の収納物についての記述は以上であり、あとは他の山城の例から類推するしかない。

古代山城の収納物として確認できる初出例としては、大和国の高安城の例がある。『日本書紀』天智天皇８年是冬条には「高安城を修りて、畿内の田税を収める」との記述がみえ、そのことは前掲の【史料２】の「穀と塩を積む」の記事からも確認できる。壬申の乱の時、高安城は大友皇子側（近江方）の軍事拠点のひとつであったが、城内の備蓄米が敵方に渡るのを恐れた大友皇子方は撤退するに際して税倉に火を放っている。この史料は、対外防衛の軍事拠点であった大野城でも同様に、有事の際に兵粮となりうる稲穀や塩を貯蔵していた可能性をうかがわせる。

大宰府政庁跡の前面に位置する不丁地区官衙跡から出土した木簡には、大宰府が基肄城に収納されている稲穀を「筑前・筑後・肥国等」の大宰府管内諸国に分かち与えたことを示す文書木簡がある。

【史料４】為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随 大監正六上田中朝□ □　（264）・34・６　6011

（筑前・筑後・肥等の国に班給せんがために、基肄城の稲穀を遣わして、大監正六（位）上田中朝（名欠）に随はしむ）

稲穀が諸国に班給される理由として考えられるのは、疫病・災害・飢饉に際して稲穀を病人・高齢者・貧窮者らに支給する賑給である。木簡は不丁地区官衙跡の東限をなす境界溝（SD2340）から出土しており、８世紀前半のものと考えられている。田中朝臣については名を欠いているが、天平４年（732）に大宰少監として赴任した田中朝臣三上である可能性が高い。なお、三上は天平８年正月に正六位上から外従五位下へ昇進している。天平４年から７年の間で賑給を必要とした事態としては、天平７年の大宰府管内における疫病の流行が想起される。この時、疫病患者らに対して８月と閏11月の２回にわたり賑給が行われている。以上のことから、この木簡は古代山城に稲穀が貯蔵されていたことを明証するだけではなく、その稲穀が疫病への救済策に使用された可能性を示す貴重な史料といえる。

鞠智城の倉庫については、時代が下るものの『日本文徳天皇実録』天安２年（858）６月己酉条に以下の記事がある。

【史料５】又、肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴り、同城不動倉十一宇火く

鞠智城内に兵庫のほか、不動倉が11棟以上あったことを示す。不動倉とは、正倉のうち、稲穀で満杯となり封印された非常備蓄用の倉のことをいい、郡ごとに置かれていた。その稲穀は不動穀といって賑給のような特別な場合を除き消費できないことになっていた。先述した基肄城の稲穀もまた、賑給であったとすれば、動用穀が不足すれば不動穀が充てられたであろう。基肄城や鞠智城と同様に大野城にも不動倉があり、有事の時はもとより疫病・災害・飢饉の際の備えとしていたと考えられる。

さらにいえば、大宰府は外交の窓口や対外防衛の拠点という特有の機能を有しており、疫病対策に止まらず、外国使節の応接や交易、対外国および対隼人などの軍事に関わる費用といった、優先すべき臨時的な支出が発生する可能性が他の地域や官司に比べて極めて高い。その万が一の備えとして、大野城をはじめとした管内の山城に不動倉を設け、大宰府の統轄下に置いたと考えられる。

４．大野城を守った人々

大野城が防衛施設としての機能を果たすためには、それを守衛・維持するための兵員が必要である。城柵については基本的に所在国の国司が管理責任を負うことになっていた。したがって、軍団制下においては、国司の指揮の下で軍団兵士がその任に当たったと考えられる。西海道でいえば、大野城は筑前

国、基肄城は肥前国、鞠智城は肥後国の軍団兵士がそれぞれ上番して守衛していたことになる。しかしながら、大宰府が筑前国を兼帯していた時期には大宰府が大野城を直接所管していた。その場合、大野城の守衛は、筑前国だけではなく、府下六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）から大宰府へ上番していた軍団兵士によって編成された大宰府常備軍が担っていたと考えられる。兵士の役務は、城門や城庫などの守衛だけではなく、城隍の修繕もあった。修繕のための兵員が確保できない時には近隣の農民を人夫として徴発することも可能であった。大宰府と筑前国については、兼帯と別置を繰り返すが、大野城の管理については次第に大宰府が直接所管することが恒常化し、大宰府の官司内に大野城の管理を専当する主城（大主城・少主城）や城司（大野城司）が置かれることになる。

天長３年（826）、西海道の軍団制が廃止され統領選士衛卒制が施行されると、軍団兵士に替わり選士が兵員として守衛にあたることになる。大宰府の選士400人のうち何人が大野城に配備されたかは不明であるが、大宰府における守衛対象施設として大野城が兵庫とならび優先順位が高かったことを考えればそれに割く人員は少なくなかったと考えるべきであろう。あわせて衛卒についていえば大宰府の衛卒200人のうち、40人が大野城の修理をはじめとした日常的な維持管理のために常駐する規定となっていた。これをうけて城周辺の農民の中には、粮米を納める城庫の近くに居を構え衛率らを相手に商売を行う者も現れた。彼らは万が一の際、臨時の兵員となることも期待されていたと考えられる。

最後に、大野城を語る上では、宝亀５年に新羅の呪詛へ対抗すべく建立された四天王寺（四王寺）の存在を忘れてはならない。同寺には四天王像の供養のために４人の僧が置かれ、昼は金光明最勝王経四天王護国品を読み、夜は神呪を唱えることになっていた。四僧はあくまで修行のための要員であり、このほかに官寺としての施設と組織を維持していくために僧侶や俗人が住していたと考えられる。

参考文献

坂本太郎1964「天智紀の史料批判」『日本古代史の基礎的研究　上　文献編』吉川弘文館

平野邦雄1969「大宰府の徴税機構」『律令国家と貴族社会』吉川弘文館

平野邦雄1983「クラ（倉・庫・蔵）の研究―大宰府、郡家の発掘調査によせて―」『大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館

横田義章1983「大野城の建物」（『大宰府古文化論叢 下巻』吉川弘文館

渡辺晃宏1989「平安時代の不動穀」『史学雑誌』98-12

倉住靖彦1990「大野城司考」『古代中世史論集』吉川弘文館

杉原敏之2006「大野城出土柱根の刻書」『九州歴史資料館研究論集』31

鈴木拓也2010「軍制史からみた古代山城」『古代文化』６-14

鈴木拓也2010「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26

磯村幸男2010「西日本の古代山城」森公章編『史跡で読む日本の歴史３古代国家の形成』吉川弘文館

赤司善彦・光谷拓実2011「大野城の築城年代再考―太宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から―」『東風西声　九州国立博物館研究紀要』７

松川博一2012「大宰府軍制の特質と展開―大宰府常備軍を中心に―」『九州歴史資料館研究論集』37

八木充「大野城の門柱刻書について」『日本史研究』624

赤司善彦2014「古代山城の倉庫群の形成について―大野城を中心に―」『東アジア考古学論攷』２、中国書店

九州歴史資料館2015『特別展　四王寺山の1350年―大野城から祈りの山へ』

酒井芳司2017「大野城跡出土柱根刻書再考」『九州歴史資料館研究論集』42

松川博一2018「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』43

第５章

大野城の土木技術

入佐　友一郎

はじめに

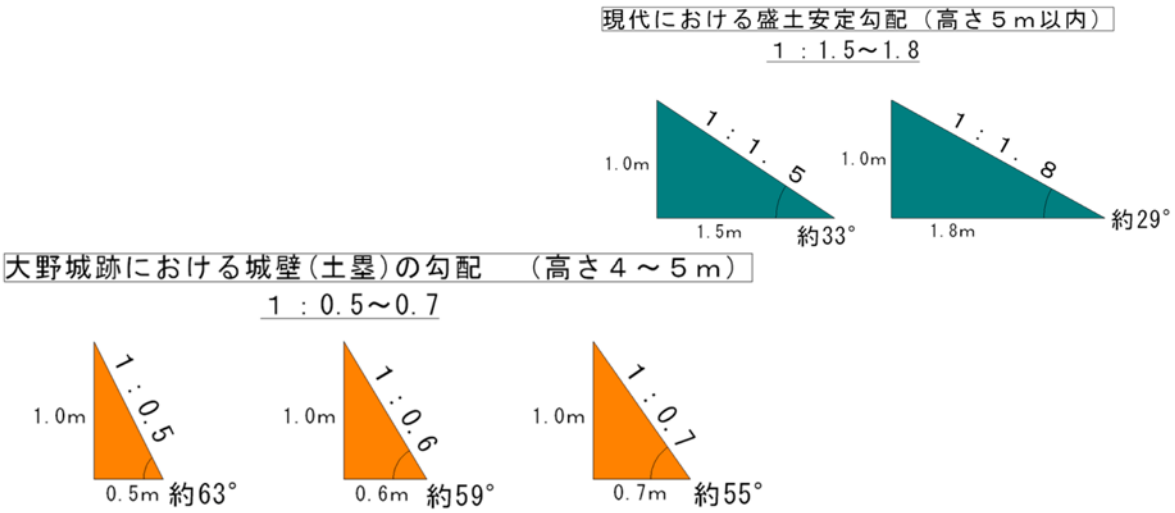
城壁総延長約８㎞、城門９箇所、石垣６箇所、建物総数約70棟を確認・推定する大野城は、その歴史的背景のみならず、遺構の残存状況が大規模かつ良好に残されていることが評価されて「特別史跡」という国宝級の扱いを受けている。しかし、日本書紀･続日本紀などの文献史料からは、築造の時期（665年)、修築の時期（698年ほか)、築造の指揮官（憶良福留、四比福夫など百済からの亡命官人）など限定した情報しか得ることができず、城の構造、築造に用いられた技術、築造に要した年数、動員された労働者の数などに関しては、今なお不明な点が多い。

本発表では、これまで筆者がこれまで携わってきた大野城跡の復旧・復元事例の中で知り得た、古代の人々の多種多様な技や工夫などの「土木技術」を通して「大城（大野城）の謎」に迫っていきたい。

１．〈古代の技術〉＝〈原始的な技術〉ではない！

研究者や歴史愛好家などの一部を除き、多くの人は大野城が築造された時代、つまり飛鳥時代の土木技術というものは極めて原始的と思っているだろう。しかし、水城や大野城の城壁などを「構造」つまり工学的視点から検証していくと､その技術レベルの高さは決して現代に劣っていないとの結論に至る。その理由について、土塁を例に説明していきたい。

城壁である土塁は、四王寺山脈の峰々を永延と廻っている。場所によってばらついているが、およその規格は、天端幅２～３ｍ、高さ５ｍ程度である。一般的に盛土という構造物は、その高さを上げていくと徐々に不安定化し、さらに高くしていくとやがて崩壊に至る。現代の土木工事では、この問題に対処するため､のり面の角度をおよそ30°（勾配１:1.5 ～１:1.8）と緩くするように規定されている。では、城壁である土塁の角度はどの程度だったのか。バラつく傾向を見せるが、筆者の測定ではおよそ55 ～60°（勾配１:0.5 ～１:0.7）であった。つまり､現代の安定基準の２倍にも迫る不安定な角度なのである。



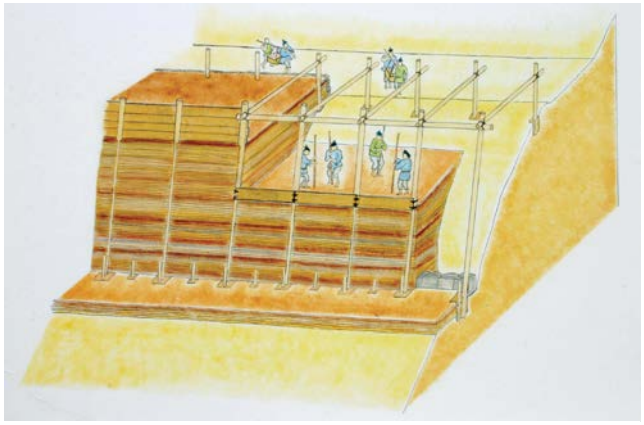
現代の安定勾配（上）と土塁の勾配（下）の比較

このように不安定と判断される構造物が、自然条件の厳しい山頂付近で、1300年以上も崩壊せずに残ってきたのはなぜか。それは、古代の土木技術が決して原始的、あるいは未熟なものではなく、大変優れていたからと言えるのである。

2．版築と呼ばれる盛土技法に迫る！その１～１層当たりの厚さと施工方法を現代と比較する～

では、なぜ優れているのか？その答えが一般に「版築」と呼ばれる古代の盛土技法と知る人は多い。版築とは何か？その定義は、史跡御所ヶ谷神籠石で想定された右の復元図のように側方を板のようなもので固定し、その中に入れた土を棒などにより突き固める行為と言われる。よって〈縞模様又は互層〉＝〈版築〉は、定義に照らし合わせれば間違えとなる。では、大野城の土塁はこの定義のとおり版築で築かれたのか。小石垣近傍の土塁の発掘調査にて、実際に棒で突き固めたと思われる痕跡と、側方を固定するために必要な縦柱の痕跡の両者が検出された。また、縦柱の痕跡は他にも多くの地点で確認され、これらのことから大野城は版築という技法で築かれたと報告されている。

また、発掘調査の際に現れる土塁の断面を詳細に観察すると、盛土１層当たりの厚さは10～15㎝程度であった。現代の盛土は一般的に30～50㎝／層なので、およそ１/２～１/３の厚さでしかない。盛土の方法も、現在は施工性・効率性に優れた大型の機械（タイヤローラなど）であるのに対して、大野城が築かれた時代は人間が棒を用いて少しずつ丁寧に突き固めていた。これらは、現代的に考えれば、原始的かつデメリットのように思えるが、逆に、人間が一層毎に丁寧に土を積み重ねていったことによって、現代より緻密で堅固な盛土が構築可能となり、現代の基準では考えられない急角度の城壁を実現できたと言い換えることができるのである。



版築による土塁築造復元図（行橋市教育委員会提供）

検出された土塁断面と縦柱の痕跡（北石垣城門東側）

１層毎の厚さは概ね10㎝前後が多い

3．版築と呼ばれる盛土技法に迫る！その２～古代の現場における盛土管理方法を推察する～

さらに話を深めていきたい。古代の土塁築造の現場ではどのような盛土の管理。つまり突き固め回数や施工時の土の水分量などをどのように規定していたのか。このことについて、筆者が過去に実施した

経験を基に推察していく。

現代では“現場における密度試験の結果”や“機械で転圧する回数”などの基準値を用いて締固めを行った盛土の品質を規定しているが、往時はどのように規定していたのだろうか。それを調べるため、平成17年の冬に焼米ヶ原の近くにて試験的に人力盛土を行った。そもそも土の強度というのは、回数を多く突けば高くなるというものではない。ある回数までは強度が増加し、それを超えると徐々に強度が落ちる性質を持っているのである。必要以上に転圧を行った状態を過転圧といい失敗例として度々紹介される。堅固な盛土を築くためには、締固めの回数が多くても少なくてもいけない。最も強度が出た状態で締固めを止めることこそが重要なのである。古代の人々は、何回棒で突けばピークの状態になると考えていたのか。答えから先に言うと、それは人により異なるというものである。体格が良い作業者が大きな直径の棒で突いた場合と、一般体型の作業者が小さな径の棒で突いた場合では回数が異なるという意味であり、考えてみれば当然のことと言える。実際の試験盛土では、回数とは関係なく強度がピークを示した際に感じる棒の跳ね返り具合が重要であるとの結論を得た。その際には最も棒の跳ね返りが良くなることが、実際に作業を行うと感覚として何となく分かってきたのである。そして、それこそが棒で突くのを止めるサインであり、古代の現場では、この感覚を共有させるように指揮官から命令されていたのではないかと考察できたのである。

試験盛土の状況（平成17年）

一方、堅固な土構造物を築造するためには、土塁に用いる土の水分量の管理も大変重要な要素といえる。いくら最適な締固めを行ったとしても、土の水分量が多くてはドロドロとなり、少なくてはボロボロになるからだ。水分量についても、締固めと同様に最適な状態（＝最適含水比）が存在し、それを維持していくことが大切ということになる。最適含水比は土ごとに違うため、現代の工事では用いる土の最適含水比を予め算出した後に本施工を行うが、古代の人々は水分量の管理をどのように行っていたのか。これについても、先述の試験盛土により様々な水分量を試すことにより感覚として知ることができた。それは、右の写真に示すように、土を握って手を開くと形がそのまま残り、それを少し振ると元の状態に戻るほどの水分量である。こちらも感覚的な表現であるが、当時もこのような会話を現地で行いながら作業者へ指示されていたものと推定される。

適切な水分量の目安

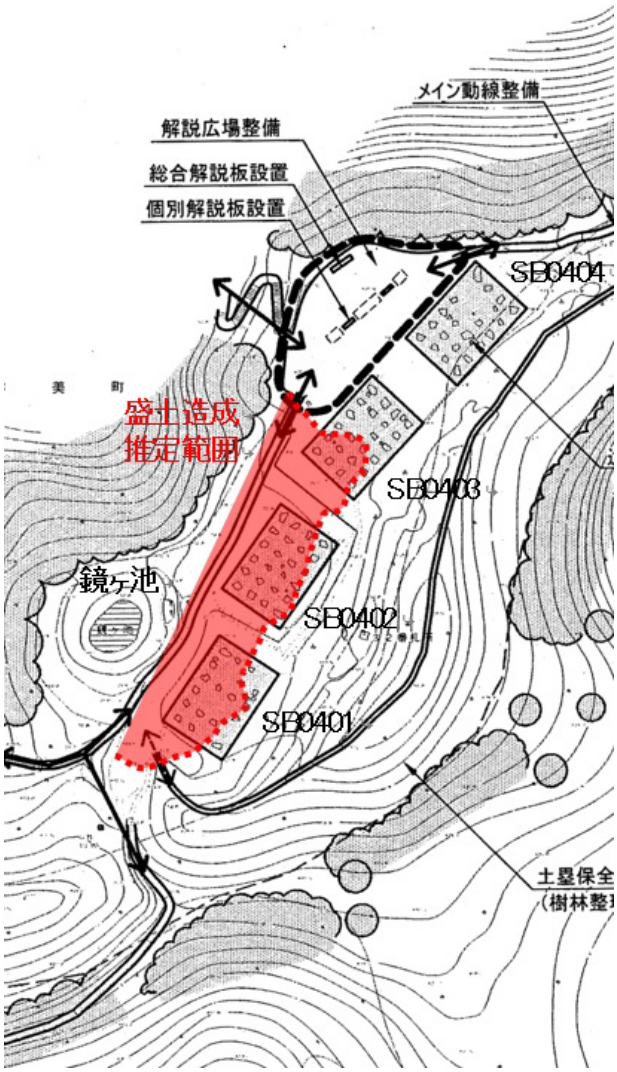
4．様々な盛土技術の使い分けと鏡ヶ池が涸れない理由

城の南東部、太宰府口城門の北西に増長天礎石群という場所がある。城壁（土塁）の内部に「建物群４棟」と「鏡ヶ池」と呼ばれる遺構を残すが、礎石しかないことから往時の姿の理解が難しいとの意見を来訪者から多く受けていた。福岡県は、これを解決するために九州歴史資料館に発掘調査を依頼し、

得られた情報を基に建物跡とその周辺についてイラスト復元を行った。この際、建物に関する情報とともに建物跡平坦地の造成方法についても知り得た。その方法は、右図に示したように、丘陵を平坦に切って発生した土を谷部に落とし込み造成を行ったものであり、一層当たりの厚みも20㎝以上で大きくばらついていた。また、土の締まりも土塁と比べれば明らかに緩く、現在に例えれば、丘陵上で行われる団地造成をイメージさせるものであった。さらに、平坦地内側に設けられた斜面の角度も、先述した現代の安定基準（およそ30°（勾配１：1.5～１：1.8））とおよそ同じで、城壁に比べれば明らかに緩やかなものであった。

以上のことから、〈古代の盛土〉＝〈版築〉ではなく、実は現代とあまり変わらない盛土方法（ただし人力盛土）を既に持っており、城壁など急勾配の盛土を行う際に限定して「版築」という技法を用いたと考察された。古代の人々は、いくつかの盛土技法の中から状況に応じて適切な方法を臨機応変に使い分けていたということである。

さらに、右図の盛土造成推定範囲（図の赤い部分）を見れば、建物跡西側に位置する「鏡ヶ池」が盛土造成部に該当することがわかる。この池は、水が涸れないために雨乞いなどに利用されたことで有名であるが、盛土を行う際に古代の人々によって水が涸れない仕掛けが成された可能性が高いのである。確定させるには発掘調査を行わねばならないが、谷部には水が流れ落ちることを利用して、ただ単に埋めるだけでなく、粘性土を巧みに利用して遮水を行った古代の叡智の一つと考えるが如何であろうか。



増長天礎石群の盛土造成範囲

おわりに

大野城という広大な城を築くためには、ここで紹介した以外にも数えきれないほどの技術や工夫が駆使されているはずである。時間や書面の関係から一部の紹介にとどまったが、文中に示した内容だけでも、種々現場条件に極めて柔軟に対応しつつ、幾つもの困難な土木工事を達成していった古代の人々の姿やレベルの高い技術を感じていただけたのではないかと思う。今後も「土木技術」の視点から、古代技術者の工夫や労苦を伝えていければ幸甚である。

参考文献

九州歴史資料館　2015『大宰府史跡ガイドブック２　特別史跡大野城跡』
山内豊聡　1993「土木，その過去・現在・未来」『遺跡の地盤工学に関する寄稿集』
福岡県教育委員会　2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ－上・下巻－』
入佐友一郎　2009「大野城跡に見る古代の土木技術」『古代の福岡』，海鳥社

第6章

大野城と古代日本の戦争

小嶋　篤

はじめに

大宰府北方の防衛施設である水城・大野城は、古墳時代に築かれた前方後円墳を凌駕する巨大な建造物である。水城・大野城の整備は大宰府の整備とも連動し、国家事業として多大な労働力と資源が投下された。しかし、如何に「濠を深く、城壁を高く」築こうとも、防衛施設を運用するための諸条件（兵士・兵器・食糧等）が整備されていなければ、その真価は発揮できない。本章では、防衛施設運用の諸条件の一つである古代兵器から「筑紫の大城」に迫る。

１．大野城と兵器

（１）大野城跡の発掘調査で兵器が出土していない理由

大野城をはじめとした古代山城では、西日本各地で発掘調査が進められているが、発見された兵器の数量は極めて微量である。大宰府により大野城・基肄城とともに整備された鞠智城は、城内の中核地区（長者原地区）で面的な発掘調査が実施されたが、鉄鏃１点（鑿箭式長頸鏃）が出土したに過ぎない。大野城跡も城門や倉庫（礎石建物）を中心に発掘調査が複数地点で実施されているが、兵器は未確認の状況にある[1)]。

兵器が大野城跡の発掘調査で出土していない理由は、大きく二つある。一つは、大野城を主戦場とした戦争が起らなかったためである。大規模戦闘が生じていない以上、当然ながら戦争痕跡となる兵器は出土しない。なお、主戦場として機能した古代山城は、壬申の乱で落城した「三尾城」が文献史料で確認できる唯一の事例である（※高安城は交戦前に放棄）。もう一つの理由は、兵器の管理が厳重になされていたためである。律令では、兵庫に納める兵器の種類（長柄武器や指揮具等）や兵庫の守衛に関する罰則規定が細かく定められており、法的理念・規則が貫徹されていたならば、古代山城の城内で兵器が埋没する事象は発生しない。しかし、兵器と同様に城内に備蓄されていた食糧は「炭化米」として考古資料で確認でき、火災等の偶発的事象や埋納等の儀礼行為により埋没した事例が存在する可能性はある。

（２）大宰府保有兵器の実態

では、戦時下の大野城ではどのような兵器の運用が構想されていたのだろうか。平時における大宰府都城（水城・大野城・基肄城等）の管理は、複数の文献史料（『日本書紀』・『続日本紀』・木簡等）から、大宰府が担っていたことが実証できる。古くは、壬申紀の筑紫大宰・栗隈王の発言から、大宰府の前身となる筑紫大宰も大野城を管理していたと考えられる。つまり、大宰府都城の防衛に際しては、当然ながら大宰府保有兵器の運用を構想していただろう。

近年の大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査により、大宰府出土兵器の数量は急激に増加した（小嶋2014・2017c・2018）。出土した鉄製品は高温度の被熱痕跡があり、製品の形状を残しつつも、大半が半溶解のような形態で出土する。被熱原因の特定は現在も継続中であるが、鉄鏃が軸を揃えた状態で束のまま（保管形態のまま）被熱すること等から、遺物観察の所見では「兵庫火災」が有力な仮説となる。このような被熱鉄製品の出土は類例に乏しく、上述したような偶発的事象の産物である。なお、大宰府の兵庫に

関わる文献史料には、『日本三代実録』貞観11年（896年）12月庚子17日条「大宰府庁事并門楼兵庫」の記載がある。本記載に注目した松川博一氏は、大宰府の兵庫が大宰府政庁の近くに所在した可能性を指摘している（松川2012）。

被熱鉄製品の出土量から兵器の備蓄の裏付けがとれるのは、矢（鉄鏃）である。鉄鏃は軸を揃えて、かつ同一部位付近で溶着していることから、束ねられた状態で被熱したと判断できる。矢と対となる弓は、弓の装飾部品である「両頭金具」の存在から備蓄対象であったことが確認できる。甲冑も複数種類の鉄製小札の存在から、備蓄が認められる。鉄製小札は希少価値の高い武具であり、その備蓄主体が大宰府であるのを示す状況証拠の一つでもある。

以上のように、有機質素材の焼失という資料的制約があるものの、弓矢・甲冑は考古資料から兵器の備蓄が確認できる。戦闘時の消耗品である「矢」の備蓄数が最も多く、長距離戦闘用の兵器である「弓矢」が大宰府保有兵器の主力であったと認めてよい。考古資料で確認できる弓矢の備蓄は、『続日本紀』の記事でも確認でき、701年から716年にかけて「弓・梓弓500 ～ 5,374張」が大宰府に輸送されている。近距離戦闘用の兵器には鉄矛・鉄槍等の長柄武器、鉄刀・鉄剣があるが、出土品は断片であり、現状の出土品から備蓄を肯定することはできない。同様に律令軍団を特色づける指揮具（鼓・旗等）の実態についても課題を残す。

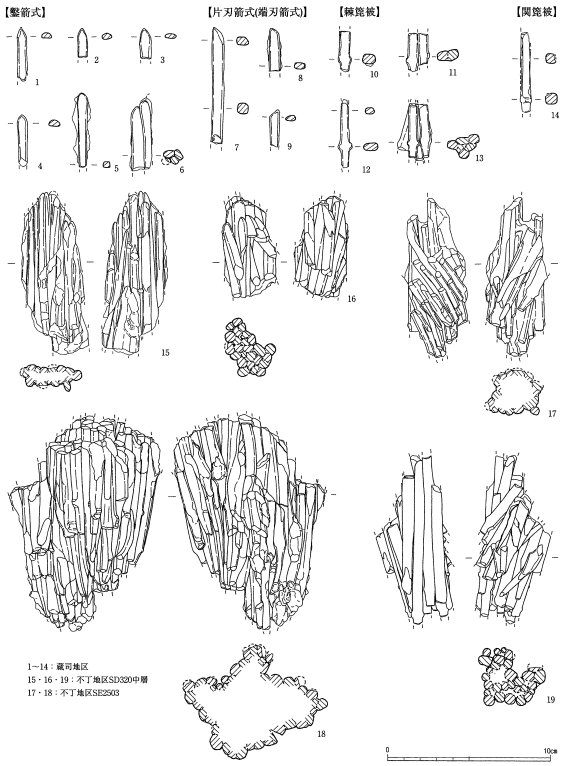
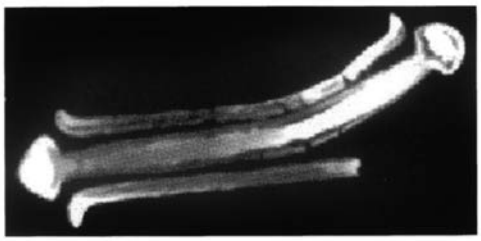


図１　大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄鏃



画像１　X線CTスキャナの断面画像

X線ＣＴスキャナを利用することで、表面では観察できない皮金具内部の状況が把握できる。

画像１では、皮金具と芯金具が密着しておらず、芯金具がある程度可動する構造であったことが分かる。また、両頭金具の破損状況も確認でき、保存処理での処置方法も検討できる。

画像２では、肉眼では観察しづらい両頭金具の折り返し部の微細部位を三次元画像で図示している。

画像２　X線CTスキャナの三次元画像

図２　大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱両頭金具

次に大宰府保有兵器の主力である弓矢の製作時期を整理する。鉄鏃は尖根系長頸鏃が主体であり、平根系鉄鏃はごく少量が確認できる。刃部形式を列挙すると、尖根系長頸鏃は柳葉式・三角形式・鏨箭式・鏨根式・片刃箭式・端刃箭式の６種類、平根系鉄鏃は三角形式と思われる資料が断片的に見られる。鉄鏃組成の主体となるのは鏨箭式長頸鏃であるが、片刃箭式・端刃箭式長頸鏃の数量も多い。鉄鏃の篦被形態は大半が棘篦被で構成されており、わずかに関篦被を含む。これらの特徴をもつ鉄鏃は、７世紀後半に造営された終末期古墳や土坑墓の副葬品に数多く見られる。また、弓の存在を実証する両頭金具も、古墳時代後期に流行した弓の装飾部品である。つまり、大宰府保有兵器の主力である弓矢には、７世紀以前（飛鳥時代以前）の製品が数多く含まれていることがうかがえる。

（３）奈良時代以前の兵器備蓄事例

大宰府政庁周辺官衙跡で確認できた「矢」の備蓄は、大宰府南方に位置する小郡官衙遺跡でも認められる。小郡官衙遺跡出土鉄鏃は、尖根系長頸鏃（鏨箭式67点、片刃箭式31点、三角形式１点）を主体とし、平根系鉄鏃（２点）がわずかに加わる。これらの鉄鏃群は、大宰府政庁周辺官衙跡出土品と同一型式で組成も類似しており、同時期の製品に位置づけられる。

矢の備蓄は奈良東大寺正倉院でも認められ、鉄鏃3,542本、竹鏃192本、骨鏃44本、角鏃３本を含む3,800本余が伝世している。鉄鏃は尖根系長頸鏃（鏨箭式2,472点、片刃箭式759点、三角形式96点）を主体とし、平根系鉄鏃（方頭式187点、三角形式26点、飛燕式２点）を含む。また、これらの矢には棘篦被形態のものや「下毛野奈須評」銘が認められ、７世紀後半に製作されたものも含む（津野2015）。

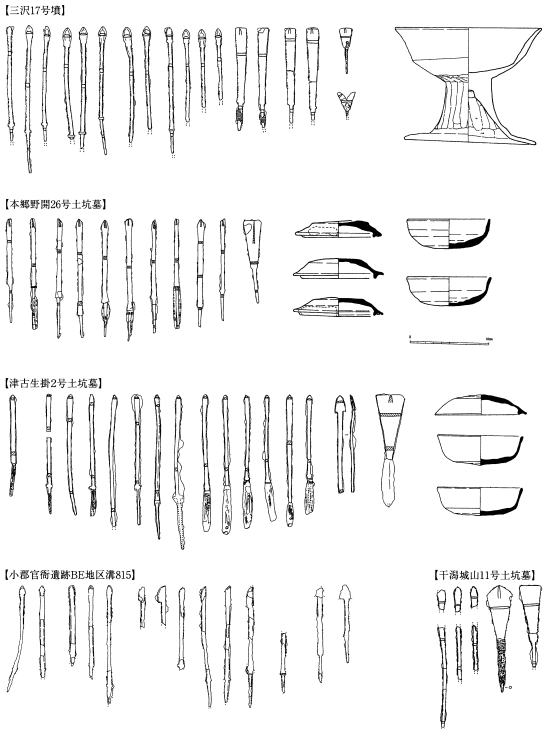


図３　小郡官衙遺跡周辺の鉄鏃

このように、奈良時代以前の兵庫には、長距離戦闘用兵器である弓矢が多量に備蓄されていた。しかも、７世紀以前に製作された兵器を多量に含み、長期間にわたる兵器の備蓄が確認できる。また、大宰府政庁周辺官衙跡鉄鏃や小郡官衙遺跡出土鉄鏃は、奈良東大寺正倉院に伝世する鉄鏃の組成とも類似しており、大宰府保有兵器が中央様式に準じていたことが分かる。

２．大野城の防衛

（１）古代兵器にみる古代山城の「日本化」

飛鳥時代以降の兵器は、弩や綿襖甲をはじめとする新式武装の導入が図られる一方で、基本装備は古墳時代の武装を継承していることが指摘されている（津野2015）。大宰府保有兵器の主力である弓矢も、古墳時代に流行した両頭金具付属弓や棘篦被の長頸鏃（７世紀）を多量に含んでおり、様式継承だけでなく備蓄兵器自体も継承する実態が明らかとなった（小嶋2014）。

古代山城は朝鮮半島での軍事活動を通じて、７世紀にはじめて日本列島に導入された防衛施設である。古墳時代の戦略では恒常的な防御施設の設置概念は希薄で、古代山城の出現には従来の戦略との断絶面を認めることができる。その一方で、実際の戦闘では古墳時代以来の武装を用いた遠距離戦闘（陣地戦）

を継続しており、古墳時代の戦術との連続面も評価しなければならない。

（2）古代山城と古代日本の戦争

『日本書紀』記載の集団戦闘を分類すると、その形態は「①防御施設の包囲（焼き討ち）」、「②交通路の封鎖」、「③会戦・陣地戦」、「④突撃・追撃」、「⑤奇襲（夜襲）・伏兵」に大別できる[2)]。また、戦時下の古代山城の運用事例では「高所からの軍勢把握」と「敵軍視認後の対処的迎撃」が確認できる。大野城の山麓は狭い谷筋を除くと、おおむね山頂部尾根線（城壁）からの眺望が利き、城壁土塁からの弓矢・弩矢の射程範囲外で敵軍を視認することができる。また、山裾から平野にかけては切れ間なく眺望が利くことから、戦略的視点での軍勢把握が可能な立地となる。

しかし、壬申の乱や藤原広嗣の乱をはじめとした文献史料の記事では、古代山城を運用していた時代においても、防御施設を主戦場とした集団戦闘の記事は乏しい。古代日本の戦争で最も重視されたのは、交通路（官道）の封鎖であり、峠の会戦や河川（渡河地点）を挟んだ陣地戦（置盾を基点とした軽装弓兵による陣地構築）が主体的な集団戦闘の形態であった。大野城は戦時における大宰府の「逃げ城（篭城）」としての性格がひろく知られているが、『日本書紀』記載の集団戦闘事例と照合すると、四方の山裾にのびる官道が開戦時の迎撃地点として構想されていたと考える。官道と古代山城の関係は古くから指摘されている研究視点であるが、古代兵器の様式と備蓄兵器の実態、『日本書紀』記載の集団戦闘形態をふまえると、戦時下の官道では「峠」や「渡河地点」がより重要となる。

おわりに

戦場や陣営地となる頻度の高い渡河地点は、河川による削平により考古学からの実態把握が難しい場所となる。その実態把握では、官道や流路の変遷、古環境等の情報を蓄積し、実証的に明らかにする必要がある。また、古代兵器の実態（古墳時代武装様式と備蓄兵器の継承）から古代山城の戦術的運用を想定したとき、城壁からの視認領域の確保は絶対条件となる。山麓部の層位的検出をふまえた花粉分析等による古環境把握が、大野城の運用だけでなく、「大宰府都城の景観」復元にも欠かせない研究課題である。

参考文献

小澤佳憲 2017「大野城跡出土の鉄製武器」『九州歴史資料館研究論集』42 九州歴史資料館
小嶋篤 2014「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』vol.10 古代武器研究会
小嶋篤 2017a「兵器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
小嶋篤 2017b「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』第４号 熊本県教育委員会
小嶋篤 2017c『大宰府の軍備に関する考古学的研究』平成25 ～ 27年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書　九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
小嶋篤 2018「大宰府の兵器と工房」『大宰府の研究』高志書院
津野仁 2015『日本古代の軍事武装と系譜』吉川弘文館
松川博一 2012「大宰府軍制の特質と展開－大宰府常備軍を中心に－」『九州歴史資料館研究論集37』九州歴史資料館
※本発表は、平成25 ～ 27年度科学研究費（若手研究（B）「大宰府の軍備に関する考古学的研究」課題番号25770290研究代表者小嶋篤）の成果の一部である。成果全体は小嶋2017cでまとめている他、小嶋2018で研究史を中心とした要旨を公表している。

註

1）本章（『大城（大野城）の謎に迫る！』「古代兵器から迫る！」2016年2月27日初出）の公表後、2017年に小澤佳憲氏が大野城跡出土鉄製武器の資料紹介を行った（小澤2017）。この鉄製武器は矛等の長柄武器の袋部片で、災害に伴う不時発見を経て、九州歴史資料館に保管されたものである。

2）『日本書紀』記載の集団戦闘については、小嶋2017a・2017cで整理している。また、小嶋2017bでは鞠智城跡を中心に戦術的運用の検討を行っている。

第７章

大野城と宇美の歴史的繋がり

松尾　尚哉

はじめに

『日本書紀』天智天皇４年（665）に築造記録がある「大野城」。国特別史跡に指定されているこの重要な遺跡は、宇美町・太宰府市・大野城市にまたがる四王寺山に所在しており、尾根沿いに連なる土塁（城壁）や石垣、城門跡や建物跡などがよく残っている。

本論では、大野城内の約８割が所在する地元･宇美町からみた「大城（大野城）の謎」に迫る。また、今回は新発見資料も公開し、さらに謎の奥深くまで迫りたい[1)]。

１．大野城（四王寺山）と宇美の深い繋がり

まず、大野城が所在する四王寺山と宇美との深い繋がりについて説明したい。大野城は大宰府関連遺跡であり、白村江の戦いで敗北を喫した倭（日本）が、664年に水城、665年に大野城・基肄城といった防御施設を築造し、大宰府都城が成立した。このため大宰府政庁が存在する太宰府市側との関係性が取り上げられ、宇美町は裏側というイメージが強いものと思われる。しかし、江戸時代の宇美の人々にとってそれは異なったイメージであり、四王寺山を意識している点が多々見られる。

これを示すものが、大城山の頂上部付近に所在する毘沙門堂である。

「筑前國続風土記拾遺」の表糟屋郡四王寺村の項に､「村（四王寺村）の西の峰高き所に在。石の堂也。石像長一尺八寸計有、近年別に木像を作て傍らに置ケたり。」という記述があり、その始まりは応永年間で、文政年間に本堂が建ったと伝わる。この毘沙門堂の前面に、弘化４年（1847年）銘の「奉納糟屋郡産村大庄屋格小林虎太」と刻まれている鳥居がある。この小林虎太は､寛政５年（1793年）創業で、長い歴史をもつ宇美町の造り酒屋「小林酒造（通称：萬代)」の３代目当主である。虎太は、家業を発展させるとともに、地域の土木事業などに貢献し、幕末期には福岡藩の撫育方を勤め、孫の代まで大庄屋格の扱いすると申しつけられた地元の有力者であった。さらには、文久の政変で都落ちをしてきた公家「七卿」のうち、太宰府へ移った「五卿」たちとも親交を持った人物である。のちの太政大臣三条実美公らは、虎太が建てた別邸「竹亭」で酒を酌み交わし、歌を詠んだ記録が残っている。

このように、宇美の有力者が毘沙門堂の鳥居を建立していることからも、江戸時代において四王寺山という地は、宇美にとっても深い信仰の場であったといえる。

また、大正時代に入ると、それまでは都府楼跡や太宰府天満宮という太宰府観光の一部として捉えられていた四王寺山が、宇美町側からの観光ルートの一つとなってきている。この契機となったのが、吉塚から志免を経て宇美に至

四王寺山パンフレット「大福岡市近郊の名山　四王寺山」

り、終点の宇美勝田までを通る「筑前参宮鉄道」の全線開通（大正８年）である。この鉄道は、石炭の輸送に加え、観光客を運ぶ目的ももつ路線であった。昭和５年に筑前参宮鉄道が発行した四王寺山の観光パンフレットには、宇美八幡宮から四王寺山を巡る案内図が掲載されている。キャッチフレーズに「本邦最古の國防城趾と史上に輝く古戦場の視察へ」とある点や「宇美八幡駅より完備した道標あり」という文字も見られることなどから、宇美八幡宮から大野城・四王寺山観光という事業に力を入れていたことがうかがえる。この観光事業はさらに発展し、福岡日日新聞社（現在の西日本新聞社の前身）も「糟屋郡宇美町四王寺山古蹟案内図」というチラシを昭和６年に発行している（昭和14年増刷）。また、これと連動し、江戸時代後期に四王寺山に建立された、四王寺三十三体石仏を巡る「千人詣り」という行事も行なわれている。

以上、宇美町にとって、大野城・四王寺山という存在は、古くから身近な信仰の場であるとともに、近代に入ると観光の目玉として組み込まれていくという深い繋がりがある。

２．前田地区の再検討と地元の伝承

「舘」銘墨書土器

「舘」銘墨書土器拡大

大野城内の中心部に、前田地区が所在する。ここは、「舘」銘墨書土器や文様塼など、城内の謎に迫る資料が出土している地区である。この資料は、内部の様相を解き明かすものとして、数々の企画展等に出展され、図録等にも掲載されているが、その出土状況について、明確にされていないのが現状である。

これらの資料は、昭和52 ～ 53年にかけて、県民の森管理事務所近くにある宇美町大字四王寺の住宅地（通称：前田地区）の斜面部から、８世紀代の須恵器・土師器数点とともに採集されたものである。「舘」銘墨書土器は、須恵器皿の底部に墨書があり、宇美町文化財調査報告書第２集「塔ノ尾遺跡」で紹介されている。文様塼は、宝相華文と周縁をめぐる珠文が施されたタイプであり、大宰府政庁跡・学校院跡・観世音寺など大宰府史跡の限られた場所で出土しているものと同様である。

さて、これらの資料は、大野城内に役所的機能を持つ建物の存在の可能性を示すものである。現状で確認されている建物跡の多くは、総柱の礎石建物であり、稲倉であったと考えられている。しかし、この前田地区から北側に位置する主城原地区では、官衙風の３間×７間の掘立柱建物が確認されており、この主城原地区から連なる前田地区にかけて、役所的機能を持つ建物があったことも想定される。

「太宰府旧蹟全図北図」では、四王寺山（大野城内）の地名が詳細に記されており、建物跡の記述もみられる。前田地区については「二ノ丸石スエ」と、主城原地区については「三ノ丸石スエ　主城カ原此処主城頭役ノ居処」と記されている（本丸については、増長天地区にその記述がある）。この記述は、近世城郭を意識した記述であろうが、主城原地区と同じ規模の建物跡が、前田地区にもあったという認識が示されており、興味深い資料といえる。大野城司や主城と呼ばれた施設の存在を今後検討していく

文様塼

「太宰府旧蹟全図北図」での前田地区

必要がある。

また、現地を踏査すると、主城原建物群と同等規模の平坦地が6か所ほどみられる点や、先の「太宰府旧蹟全図」で、主城原建物群の「三ノ丸石スエ」とは別に「二ノ丸石スエ」と表記している点からも、主城原建物群とは別に、独立した建物跡が存在する可能性も十分に考えられる。また、少し地点は離れるが、遠見所から村上礎石群へ向かう箇所では、谷をふさぐように土橋状の道が存在している。このような箇所は他にも見られ、これらは大野城の土塁が外周だけでなく、内部にも同様の技術を用いて構築された遺構が存在する可能性もあるといえる。

また、地元の古老へ行った聞き取り調査では、四王寺区住宅地の北東に存在する水田を耕作中、羽子板状の石組を確認したとの内容があった。時期は不明であるが、何かしらの機能を持つ可能性もあり、大変興味深い。なお、その石組みの石材は、現在も水田脇に積まれている状態である。

3．独鈷杵の発見

宇美町民の方が四王寺山を登山中に発見されたものである。その後、九州歴史資料館において、仏教美術史担当の井形進学芸員と、共同で調査研究を行った。また、同館の保存科学班で蛍光X線調査などの科学分析調査を実施した。さらに、金属工芸史を専門とする九州国立博物館の望月規史氏に実見していただき、ご教示とご見解を頂いた。

独鈷杵は、青銅製鋳造で、先端がやや鈍化しているものの、全長は19.6㎝、把長は6.1㎝、鈷長は6.7㎝程度である。比較的ずっしりとした重みを感じさせる。軸にゆがみがほとんどみられず、把中心部分には楕円形をした二重で盛り上がった鬼目が四つめぐり、その左右には、八葉の蓮弁帯がみられる。蓮弁の鏑は少し弱い印象を受けるが、その真ん中を締めている三本の紐は均一の太さであり、きつく締めている描き方をしている。鈷部分の面は、窪ませて匙面となっている。一部で緑青がみられるが、現状では青黒い色となっている。

共同調査の結果、この独鈷杵のかたちは、古式であり、本来の武器としての面影をのこし、鈷が把よりも長く鋭さを感じさせ、鈷に匙面をつけ、把の蓮弁を締める紐帯の紐が、三本であることなどは、平安時代後期を中心とする頃の作例の特徴を示すものであることがわかった。各部に抑揚をつけ、全体として優美かつ端整な姿をしていることも同様に、当該期頃の特徴を示しているものといえる。

蛍光Ｘ線による分析調査では、銅を主としつつ、鉛を含み、錫をわずかに含む組成であった。その他には、砒素の検出も見受けられるとのことであった。精錬の過程で砒素などの不純物は除去されるため、新しい時代になるとこれは検出されない。よって、このような成分が検出されたことは古い要素を示すものというご教示を頂いた（九州歴史資料館保存科学班）。また、Ｘ線ＣＴスキャナによる調査におい

独鈷杵（北岡進一氏撮影）

ては、X線が内部まで通らなかったことから、鉛を多く含む内部構造であると考えられる。

さて、大野城築造後、この山では、宝亀５年（774）に、新羅の呪詛に対抗するべく、高顕浄地に四天王像を安置した四天王寺（四王院）が創建される。その後、平安時代前期、仁寿元年（851）には、後に天台座主となった智証大師円珍が、唐へ渡る船を待つ間、城山四王院に滞在したという記録があり、さらには、平安時代後期に入ると、経塚が集中的に造営されていく（ここから出土した多くの経塚出土遺物は宇美八幡宮の所蔵）。このことからも、この時期の独鈷杵という密教法具が発見されてもおかしくない歴史的環境にあるといえよう。

あくまで表採資料であるため、この遺物について詳細を検討することは困難といえる。しかし、この独鈷杵は、平安時代後期頃に制作された密教法具の貴重な例であることから、これを機に、これまであまり調査が行われておらず、その実態が謎に包まれた四天王寺の本格的調査の契機としたい。

この独鈷杵の出土からも、大野城（四王寺山）の未知の領域は、まだまだ広がっていくことが容易に想像できる。なお、四王寺山発見の独鈷杵について、資料紹介と検討を行ったのは、本論が最初である。継続する今後の資料調査に期待したい[2)]。

註

1）本論は、2016年２月27日に開催した、宇美町と九州国立博物館の共同主催によるシンポジウム『大城（大野城）の謎に迫る！－宇美町からの新たな発信－』の発表要旨である。

2）本論発表後、井形進氏による詳細報告（井形2016）、岡寺良氏による四王院跡及び四王寺山経塚群との関係性に関する考察（岡寺2018）がなされている。

参考文献

橋詰武生編1958『小林作五郎伝』

宇美町誌編纂委員会編1975『宇美町誌』宇美町役場

宇美町教育委員会編1981『塔ノ尾遺跡』宇美町文化財調査報告書第２集

青柳種信・福岡古文書を読む会校訂1993『筑前國続風土記拾遺』文献出版

福岡県教育委員会編2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第225集

関根俊一2011『日本の美術 541 金剛鈴と金剛杵』ぎょうせい

四王寺山勉強会編2015『太宰府旧蹟全図に描かれた四王寺山』

九州歴史資料館編2015『特別展　四王寺山の1350年』九州歴史資料館特別展図録

熊本県教育委員会編2016『築城技術と遺物から見た古代山城－古代山城に関する研究会 発表資料集－』

井形進2016「（資料紹介）四王寺山の独鈷杵」『九州歴史資料館研究論集』41

岡寺良2018「四王院跡と四王寺山経塚群」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年記念論文集

第8章

大野城築城と新羅

上田　龍児

はじめに

663年、百済復興支援のため出兵した日本（倭）は、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫した。翌664年には水城、665年には大野城・基肄城といった防衛施設を築造し、水城・大野城・基肄城を外郭とする大宰府都城が成立した。大宰府都城は、百済最後の都である泗沘都城との類似性から百済系都城とも呼ばれる。また『日本書紀』によると「達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わして、大野と椽、二城を築かしむ。」とあり、大野城・基肄城が亡命百済官人の指導により築造されたことを伝える。

7世紀の日本（倭）は百済と同盟関係にあり、大野城をはじめとする大宰府都城も百済との関係性の中で成立したことが通説となっている。一方、新羅との関係は白村江の戦いで敵国であったこともあり、緊張関係・敵対関係にあったというイメージが強い。ところが、大野城跡がある四王寺山の麓に位置する大野城市乙金地区では、新羅土器をはじめとする7世紀前後の新羅系文物が集中する様相が明らかになっており、新羅との関係を看過できない状況になってきた。以下では、乙金地区の発掘調査成果を通じ、大野城築造と新羅との関係について、その可能性が探っていきたい。

1．大野城市乙金地区の発掘調査成果

大野城跡が位置する四王寺山の北側に、乙金山という円錐形をした小さな山がある。乙金山の麓には、古墳のほか集落跡や須恵器窯跡など多くの遺跡が分布する。ここでは、6・7世紀の遺跡を中心に見ていくこととしよう。

【古墳群】 乙金山麓には総数100基を超える大規模な群集墳があり、総称して乙金古墳群と呼ぶ。古墳群の形成は5世紀後半に始まり、6世紀後半に分布範囲が拡大する。6世紀末～7世紀前半には最盛期を迎え、7世紀後半まで継続する。

このうち善一田古墳群は総数30基ほどの古墳群である。6世紀後半に造られた18号墳は直径約25mの円墳で、乙金古墳群中最大規模となる。馬具や盛矢具をはじめ豊富な副葬品があり、当地域を代表する有力な人物の古墳と考える。副葬品の中で最も注目できるのは「鉄鉗」で、被葬者は金属器生産集団の統括者という性格を付与できる。18号墳以外でも、鉄滓・銅滓や砥石を供献・副葬する古墳があり、金属器生産に関わる集団の古墳といえる。また、象嵌大刀や三累環頭大刀などの装飾大刀を副葬する古墳もあり、比較的有力な集団の墓域と考えられる。この他、新羅土器や朝鮮半島系軟質土器も出土した。

王城山古墳群は善一田古墳群の南に隣接する総数40基ほどの古墳群である。10点を超える新羅土器が出土しており、新羅と積極的な交流を展開した集団の古墳群と考える。渡来系鍛冶工人と関わる遺物とされるミニチュアの農工具もあり、鉄器生産との関わりもうかがえる。

【集落】 乙金古墳群に葬られた人々の集落と考えられるのが、薬師の森遺跡である。6世紀中頃～7世紀中頃にかけての住居跡が100軒ほど見つかった。鉄滓や鞴羽口が出土し、集落内で鉄器生産をしていたことが確実である。また、軟質系土器をはじめ一定量の朝鮮半島系資料が出土しており、渡来人が居住していたことを示す。

【須恵器窯跡】 乙金窯跡（6世紀中頃～後半）と雉子ヶ尾窯跡（6世紀後半～7世紀前半頃）がある。いずれの窯跡も、朝鮮半島に特徴的な土器作りの技法や形態を持つ須恵器を生産しており、窯業生産に

渡来人が関与した可能性がある。

２．乙金地区の新羅系文物

【土器】 最も顕著な存在は新羅土器である。王城山古墳群で10点程度、善一田古墳群で２点、唐山古墳群で１点、薬師の森遺跡で１点確認しており、半径１㎞圏内に15点近くの新羅土器が集中する。６・７世紀代では全国的に見ても新羅土器が最も集中する地域の一つである。６世紀末前後～７世紀後半までの間、途切れることなく搬入されていることから、新羅との交流が長期間継続していたことを示す。

新羅土器以外では、脚部に交互透かしを施す在地産の高杯があり、新羅土器の模倣品と考えられる。

【金属器】 善一田古墳群出土の三累環頭大刀と鉄鉗があげられる。三累環頭大刀は元々新羅の王族の間で流行した装飾大刀である。善一田例は舶載品もしくは最初期の国産品の可能性がある。同古墳群では銅滓も出土していることから、国産品であるならば新羅からの渡来系工人が乙金地区周辺で生産した可能性も残る。

鉄鉗の副葬事例は国内では40例ほどあり、善一田例のように握る部分の端部を環状にするものは、国内では鳥栖市東十郎古墳群、朝鮮半島では半島南端部に位置する巨済島の古墳に類例がある。鉄鉗の副葬事例自体は、朝鮮半島の新羅・伽耶地域に多いもので、新羅（伽耶）系資料としての位置づけも可能であろう。

一方で、新羅以外の朝鮮半島系資料の存在も明らかになっている。竪穴住居の一角に住居外側にのびる溝が付く「溝付住居」や須恵器の甕を棺とした「甕棺墓」などがあり、これらは朝鮮半島南西部（百済や馬韓地域）に由来する資料である。

なお、乙金地区周辺には、「唐山」・「韓人池」など大陸・半島との関わりを示す地名が残っており、渡来系集団が活動したことを彷彿とさせる。

おわりに

乙金地区では６・７世紀の古墳・集落・生産が相互に関連しながら展開する。新羅に系譜がある渡来人が一定数居住し、彼・彼女らを軸に手工業生産や対外交流を進めていったことであろう。６世紀中頃に始まる手工業生産や朝鮮半島系文物、さらには渡来人といった要素は前代とは連続性がなく、この時期に新たな集団が進出してきたものと想定できる。その背景は、536年に中央政権により那津官家が設置されたことと、これに伴う地域社会に再編によるものと考えられる。

７世紀中頃になると乙金地区では人々の居住の痕跡が希薄となり、窯業生産も停止する。一方、古墳群では７世紀中頃～後半にかけても新規造墓や追葬・墓前祭祀を盛んに行なっている。こうしたことから、乙金地区の集団がどこかで営みを続けていたことは間違いないが、乙金地区で再び集落経営が始まるのは８世紀中頃～後半になってからである。

７世紀中頃～８世紀中頃は、まさしく水城・大野城の築造や大宰府都城の整備が進められた時期で、現在の大野城市・太宰府市を中心に、大土木事業が行われた時代である。このような時代に、大野城の麓で各種手工業生産集団を擁する乙金地区の集団が活躍したであろうことは想像に難くない。また、新羅と絶えず交流を続けていた当地域の集団が、朝鮮半島の山城の情報を知っていたとしても不思議ではない。日常的な生活圏内である四王寺山の様子を知っていたであろう乙金の集団が、大野城築造場所の選定や四王寺山中の案内などに際しても、大きな役割を果たした可能性が充分想定できるのである。

参考文献

上田龍児編 2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書第159集　大野城市教育員会

写真１　乙金地区の遺跡と大野城

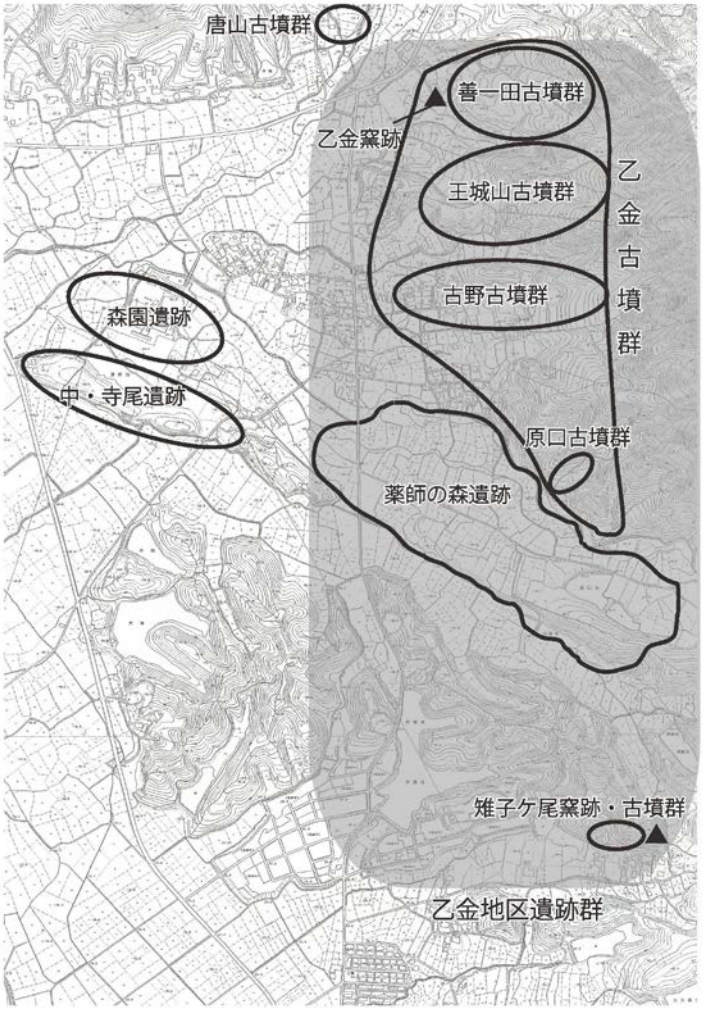


図１　乙金地区の主な遺跡

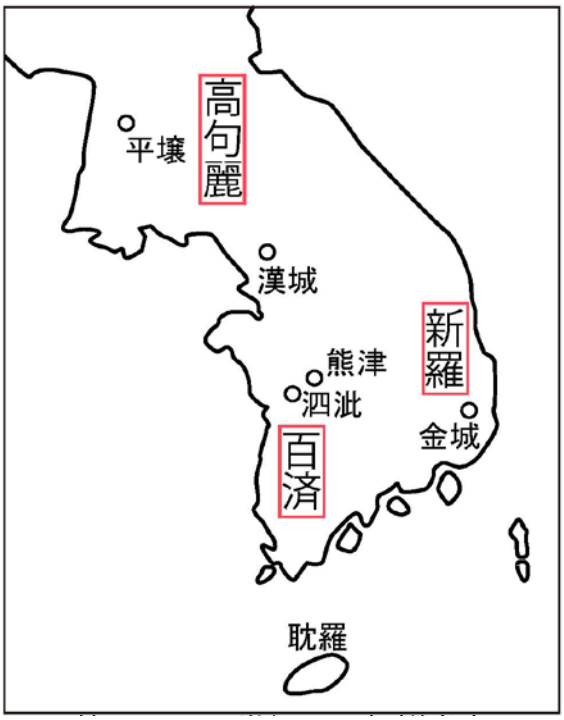


図２　７世紀頃の朝鮮半島

写真２　善一田古墳群全景

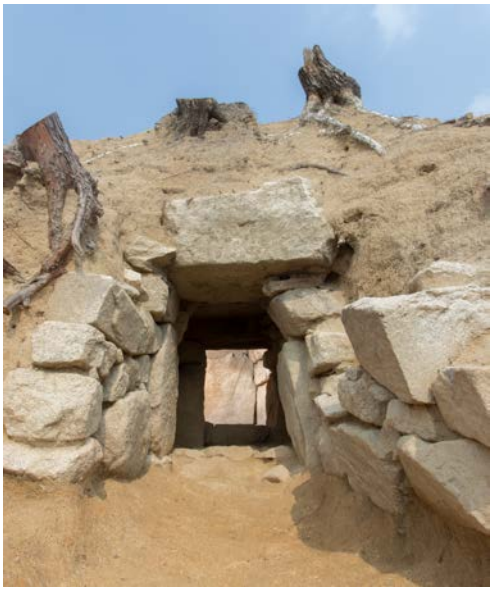


写真３　善一田18号墳石室

写真４　乙金地区出土の新羅土器

写真６　善一田18号墳副葬品

写真７　鉄鉗（左）と供献鉄滓（右）

写真５　薬師の森遺跡の朝鮮半島系土器

写真８　三累環頭柄頭（右上）と装身具類

第4部

大宰府の官衙と諸司

太宰府の町並に眠る大宰府官衙

第４部　大宰府の官衙と諸司

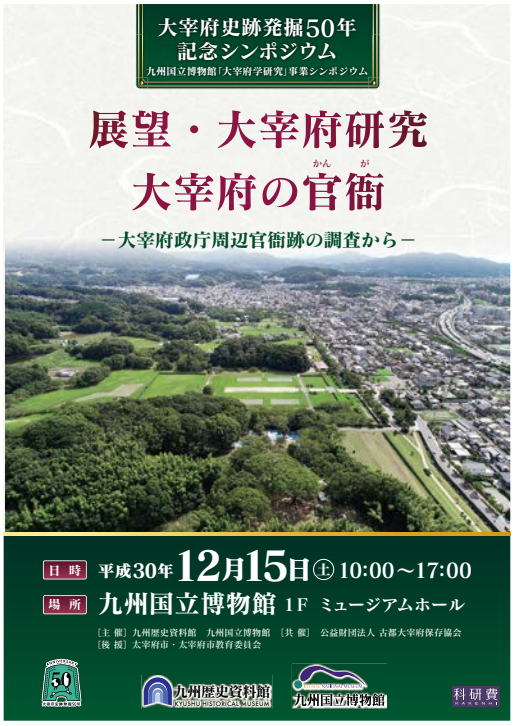
第１章　大宰府の機能と律令国家	佐藤　信	195
第２章　大宰府の官衙	森　公章	203
第３章　大宰府の諸司	松川　博一	211
第４章　大宰府史跡出土の付札木簡	酒井　芳司	217
第５章　前面官衙跡の調査研究成果	小田　和利	223
第６章　蔵司地区官衙跡の調査研究成果	下原　幸裕	229
第７章　鉄から見た大宰府官衙	小嶋　篤	235

第４部では、西海道統治の拠点施設である大宰府官衙を研究する。第１章で大宰府の機能を体系的に整理した後、第２～４章で文字史料を基に官衙と諸司、管内支配機能の実態を明らかにする。第５～７章では、考古資料を基に大宰府官衙の配置や変遷を明らかにした上で、官衙の整備過程や諸司の比定に議論を進める。

第１章と第４章は、平成22年（2010）10月30日に九州国立博物館・福岡県・九州歴史資料館が合同開催したシンポジウム「展望•大宰府研究 蔵司跡の調査から」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

第２・３章と第５～７章は、平成30年（2018）12月15日に九州国立博物館・福岡県・九州歴史資料館が合同開催したシンポジウム「展望•大宰府研究　大宰府の官衙」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」
ポスター



「展望・大宰府研究　大宰府の官衙」
当日配布資料表紙

第１章

大宰府の機能と律令国家

佐藤　信

はじめに―大宰府と平城京―

奈良時代の大宰府は、首都の平城京と比肩される存在であった。大宰少貳として大宰府にあった小野朝臣老は、平城京を「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」（『万葉集』巻３、328）と美化して歌っているが、筑紫国に赴任する海路途上の柿本朝臣人麻呂が「大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ」（『万葉集』巻３、304）と詠んだように、大宰府は「遠の朝廷」とも称されていた。帥以下の大宰府の官人たちは、『続日本紀』（神護景雲３年〔769〕10月甲辰条）に

大宰府言さく、「この府は人・物殷繁にして天下の一都会なり。…」

とみえるように、「天下の一都会」とまで称している。宮都の平城京に後れをとらない人口と流通をもつ都市像を自負しているものと思われるが、大宰府の発掘調査の進展により、かつて鏡山猛氏によって「大宰府都城」と呼ばれた条坊制的な構造をもつ大宰府の府郭の都市像が明らかになってきつつある。

最近のあたらしい日本古代史の研究の進展には、めざましいものがある。その動向は、①東アジア（東ユーラシア）的視野から日本列島の古代史をみること、②発掘調査成果や新発見の木簡など出土文字資料によって、歴史像を具体的・立体的に再構成するようになったこと、③これらによって列島各地の地域の古代史像が明らかになってきており、合わせて諸地域間で境界を越えた交流が盛んに行われていたことが解明されてきたこと、と整理できよう。そして、日本列島の古代史が多元的に展開したことが指摘されるようになってきたのである。かつて、古代国家が編纂した六国史・律令など文献史料によって国家・天皇・畿内・中央を中心に描かれがちであった古代史像に対して、列島各地域の古代史像が描かれるようになってきたといえよう。今日では、中央からのまなざしと地方からのまなざしとの両方からの視座を総合した列島全体の古代史像が目ざされているのである。

こうした研究動向において、各地に置かれた国府（国衙）・郡家（郡衙）など地方官衙の発掘調査成果は、そこから出土する木簡などの出土文字資料による歴史情報と合わせて、日本古代国家が中央集権的な体制をどのように実現し得たのか、中央集権性の実像を検討する上で大きな焦点となってきている。大宰府は、平城宮跡・多賀城跡（陸奥国府でもある東北城柵）とともに日本古代の「三大史跡」（大規模遺跡）として数えられるが、古代最大の地方官衙である大宰府のあり方の解明は、中央と地方を結ぶ接点を理解する上で、大きな焦点となろう。

幸い、大宰府史跡では、福岡県立九州歴史資料館による多年の発掘調査・研究の蓄積によって、古代大宰府像の解明が格段と進んできており、太宰府市教育委員会による条坊遺跡などの調査・研究成果も合わせて、古代都市としての大宰府像が見えてきつつある。大宰府のほか、平城宮跡では奈良文化財研究所による多年の発掘調査・研究成果により古代の宮都・王宮の実像が明らかになり、多賀城跡でも宮城県立多賀城跡調査事務所により古代東北城柵・陸奥国府の実像が解明されてきている。この他にも地方官衙としての国府・郡家の実像が各地で解明されてきており、これらの研究成果を関係づけて理解することによって、律令国家の地方支配の構造が立体的に明らかになると思われる。

平成22年、平城遷都1300年を期して奈良文化財研究所の平城宮跡資料館の展示がリニューアルされ、多賀城の発掘調査50周年を期して東北歴史博物館でも特別展「多賀城・大宰府と古代の都」が行われ、また新しい九州歴史資料館（小郡市）が開館するとともに特別展「大宰府展」が開催された。列島の古代史を多元的に理解する上で、これらの調査・研究成果を改めて総合的に検討することが求められてい

るといえよう。

１．遠の朝廷大宰府

（１）遺跡群としての大宰府史跡

大宰府は古代最大の地方官衙であり、政庁正殿の都府楼を中心として、様々な機能を果たす多様な施設から構成されていた。大宰府を構成する諸官司（曹司）や観世音寺などの寺院、防衛のための古代朝鮮式山城群など、その広がりは多種類・広範囲に及ぶ。

史跡としては、

大宰府跡・大宰府学校院跡・観世音寺境内及び子院跡・筑前国分寺跡・国分瓦窯跡・塔原塔跡・大野城跡・水城跡・基肄城跡・鴻臚館跡・怡土城跡

などがあり、付随する官司や生産遺跡として、

不丁地区（官衙群跡）・来木地区（官営工房群）・月山東地区（官衙跡）・大宰府条坊跡（「朱雀大路」など）・主船司・警固所

などがある。

大宰府を取り囲みネットワークを組む史跡・遺跡群としては、

古代朝鮮式山城跡・神籠石系山城跡・烽（とぶひ）群・地方官衙遺跡（国府・郡家）・瓦窯跡（老司瓦窯跡など）・土器窯跡（牛頸窯跡など）

などがあり、寺院・神社では、

観世音寺・戒壇院・筑前国分寺・国分尼寺・塔原塔跡・竈戸山寺

太宰府天満宮（安楽寺）

などが知られる。

また、大宰府をめぐる交通路関係遺跡として、

西海道跡・古代官道跡・駅家跡

なども指摘できる。

こうした大宰府をめぐる遺跡群を、総体として大宰府史跡群としてとらえる視角が必要と思われる。

（２）大宰府史跡の調査・研究

大宰府史跡の発掘調査・研究を中心となって進めてきたのは、福岡県立九州歴史資料館である。大宰府史跡や関連遺跡の発掘調査・研究のほか、史跡の整備や博物館展示も進め、さらに九州各地における発掘調査を牽引する役割も果たしてきたのであった。

大宰府史跡については、地道な発掘調査の積み重ねの上に、これまでに多くの調査成果が蓄積されてきた。大宰府木簡の出土も大きな成果であり、また、太宰府市教育委員会の発掘調査による大宰府条坊遺跡の確認も注目される。

「文明のクロスロード」に位置する遺跡群としての大宰府史跡群は、研究対象として、東アジアにおける日本古代国家を解明する上できわめて重要な位置を占めるものといえよう。その際、遺跡だけでなく史料・建造物・美術工芸品など多様な文化遺産からなる歴史資料を、総合的・学際的に調査・研究することが求められる。かつての「大宰府研究会」などは、そうした意図をもっていたものと聞いている。大宰府をめぐる多様な歴史資料・文化遺産を学際的・多角的に調査・研究する「大宰府学」が、日本史・考古学・建築史・美術史・国文学・歴史地理学・東洋史・保存科学などの学際的な共同研究によって進められることを、今後の九州歴史資料館や九州国立博物館においても期待したい。

2．大宰府をめぐる人びと―大伴旅人―

大宰府をめぐる人々として、ここでは神亀５年（728）頃から大宰帥として赴任し、「筑紫歌壇」とまで呼ばれる和歌群を『万葉集』に伝えることになった大伴旅人ついて、大宰府における帥としての生活に注目しつつみてみたい。大伴旅人関連の『万葉集』の和歌群やその題詞・左注からは、大宰府の府官館（かんのたち）である「帥家」における「梅花の宴」など、府官・国司たちとの交流や、国内神社への拝礼、近郊への遊覧、大宰府周辺の交通体系を示す駅家の利用、離任の際の帰路など、様々な実像がうかがえる。

○「右は、神亀五年（728）戊辰、大宰の帥の大伴の卿の妻大伴の郎女、病に遭ひて長逝せり。時に勅使式部の大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣して、喪を弔ひ并せて物を賜ひき。その事既に畢りて駅使及び府の諸卿大夫等、共に記夷の城に登りて、望遊せし日、すなはちこの歌を作りき。」1472

○「冬十一月、大宰の官人等、香椎の廟を拝み奉り訖へて退り帰りし時、馬を香椎の浦に駐めて、各懐を述べて作れる歌」957 ～

天平２年（730）正月、帥宅にて梅歌の宴を開く

○「梅花の歌三十二首（序并せたり）・天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まるは、宴会を申ぶるなり。時に初春の令き月にして、気淑く風和み、梅は披く、鏡の前の粉を、蘭は薫らす、珮の後の香を。しかのみにあらず、曙の嶺に雲移り、松羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥うすものに封められて林に迷ふ。庭には新しき蝶舞ひ、空には故つ雁帰る。ここに天を蓋にし、地を座にし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然としてみづから放に、快然としてみづから足る。もし翰苑にあらずは、何を以ちてか情をのべむ。詩に落梅の篇を紀せり。古と今とそれ何ぞ異ならむ。うべ園の梅を賦みていささか短詠を成すべし。」815 ～ 46

帥である旅人の府官館に於いて開かれたこの著名な「梅花の宴」に列席した人々は、

大貳紀卿・小貳小野大夫（老）・小貳粟田大夫（人上か）・筑前守山上大夫（憶良）・豊後守大伴大夫（三依か）・筑後守葛井大夫・笠沙彌（満誓）・主人（大伴旅人）・大監伴氏百代（大伴百代）・小監阿氏奥島・小監土氏百村（土師百村）・大典史氏大原・小典山氏若麿（山口若麿）・大判事丹氏麿・薬師張氏福子・筑前介佐氏子首・壱岐守板氏安麿（板茂安麿か）・神司荒氏稲布・大令史野氏宿奈麿・小令史田氏肥人・薬師高氏義通・陰陽師磯氏法麿・算師志氏大道（志紀大道か）・大隅目榎氏鉢麿・筑前目田氏真上・壱岐目村氏彼方・対馬目高氏老・薩摩目高氏海人・土師氏御道（土師水道）・小野氏国堅・筑前掾門氏石足（門部石足）・小野氏淡理（小野田守か）

らという大勢で、美しい春の饗宴を楽しみ和歌を詠み交わしている。西海道の諸国・島の国司・島司の一員も参列しており、大宰府の府郭には諸国・島の「出張所」的な出先施設が当然あったとみられる。

同年六月、脚病となり、奏して遺言を伝える同族を派遣してもらう

○「さきに天平二年庚午の夏六月、帥大伴の卿、忽に瘡を脚に生じ、枕席に疾み苦しみき。これによりて、駅を馳せて上奏し、望はくは、庶弟稲公姪胡麻呂を請ひて遺言を語らまく欲と奏せば、右兵庫助大伴宿禰稲公・治部少丞大伴宿禰胡麻呂両人に勅して、駅を給ひて発遣し、卿の病を省しめ給ふ。而して数旬を経て、幸いに平復することを得たり。時に稲公等、病の既に療えたるを以ちて、府を発ちて京に上る。ここに大監大伴宿禰百代・小典山口忌寸若麻呂及び卿の男家持等、駅使を相送りて、共に夷守駅家に到り、いささか飲みて別を悲しみ、すなはちこの歌を作りき。」566・7

○「七月七日の夜に、憶良、天の河を仰ぎ見る。（一は云ふ、帥の家にて作れる）」1522

山上憶良が大伴旅人の帥家の七夕の宴会に参列した時の和歌か。

○「右は、天平二年七月八日の夜、帥の家の集会。」1523 ～ 1526

○「大宰の帥の大伴の卿の、大納言に任けられて京に入らむとする時に臨み、府の官人等の、筑前国の蘆城駅家に卿を餞する歌四首」568 ～ 571

旅人送別の宴会に、筑前掾門部連石足・大典麻田連陽春・防人佑大伴四綱らが参加した。

○「大宰の諸卿大夫并せて官人等の、筑前国の蘆城駅家に宴せる歌二首」1530・1531
○「冬十一月、大伴の坂上郎女の、帥の家を発ち上道して、筑前国宗形郡名児山を超えし時、作れる歌一首」963題詞
○「同じ坂上郎女の、京に向ふ海路に浜の貝を見て作る歌一首」964題詞

旅人の帰京の少し前に大伴坂上郎女が平城京への帰途についた時、宗像郡の名児山を越えるまでは陸路を行き、その後海路を採ったことが知られる。

○（冬十二月）「右は、大宰の帥大伴の卿、大納言に兼任して、京に向ひて上道しき。この日、馬を水城に駐めて、府の家を顧み望みき。時に卿を送る府の吏の中に、遊行女婦あり。その名を児島と曰ふ。ここに娘子、この別れ易きを傷み、その会ひ難きを嘆き、涕を拭ひ、みづから袖を振る歌を吟ひき。」965・966左注

大宰府を出発して都に戻る際、水城の門の所で馬を降りて大宰府の庁舎を遠望しており、 水城まで見送りがあった。

この大伴旅人のほか、740年に乱を起こした藤原広嗣（少弐）、玄昉（観世音寺別当）、吉備真備（大弐）、配流されてきた菅原道真（権帥）そして939年に乱を起こした藤原純友など、古代史上著名な人々が大宰府をめぐる人々として挙げられるのは、やはり大宰府の占める歴史的位置の重要性に応じているものといえよう。

3．大宰府の機能

（1）大宰府の特質

日本古代の地方官衙としては、大宰府、国府（国衙）、郡家（郡衙）のほか郡家出先機関・城柵・関・駅家などが挙げられるが、その最大のものは大宰府である。対外外交を管轄し、西海道の九国三島を統括するという国府をしのぐ組織であり、官人の規模も国府をはるかにしのぐ。長官の大宰帥の官位相当は親王四品･従三位であり､大国の守の従五位上相当をはるかに上回る上級貴族が任じられることになっている。大宰帥の職掌としては、国司とは違って「蕃客・帰化・饗讌」が規定されており、中国・朝鮮や隼人・南島に対する対外外交の前線を担うところが、大きな特質といえよう。

外交や西海道統括という中央政府に準じた行政を担うところから、大規模な官人構成をもち、管下の官衙（曹司、実務官衙）としても多様な部署をかかえている。

古代都市としての大宰府については、大宰府が平城京の条坊制にならって条坊をもつ府郭を備えていたことが、他の国府などとは異なっている。大宰府の条坊遺跡は、太宰府市教育委員会による地道な発掘調査によって次第にその姿が明らかになりつつある。かつて鏡山猛氏が想定した都城型の条坊説そのままではないようだが、「朱雀大路」は確かに存在しており、「あみだくじ」式の条坊とみる説や、独自の条坊とみる説などが知られている。

都府楼の政庁の前面に広がる官庁街としての不庁地区の展開、朱雀大路や条坊道路の存在、街区の区画にあわせて長大な南北棟建物が規格性をもって配置されるというような町並みのあり方は、大宰府の府郭が宮都にならった条坊をもち、「天下の一都会」と称されるだけの都市としての実態をもったことを示していよう。

多賀城跡（陸奥国府、宮城県多賀城市）にも、方格地割をもつ都市域（山王遺跡・市川橋遺跡）が外郭南面から西にかけて展開し、立派な四面庇建物や園池をもつ国司館と推定される宅地などが立ち並んでいたことが知られているが、これは八世紀後期～九世紀に形成されたという点が、大宰府と異なっているといえよう。

（2）大宰府の機能

大宰府が果たした機能は、外交・行政・財政・軍事・宗教・給食・交通などの諸分野にわたる多様なものであった。外交機能をもち西海道の統治拠点でもあり、国府の上に位置づけられることも、その多様な機能に結びついている。

外交機能は、東アジアの中国・朝鮮や隼人・南島に対する外交を担うもので、新羅使・渤海使や南島などからの外国使節等の来朝に対応している。日本からの外交使節も、遣唐使だけでなく、『万葉集』に和歌群を残す遣新羅使なども、大宰府を経由して海を渡って行った。これらの外交使節を迎える迎賓館として、博多湾岸には鴻臚館（筑紫館）が営まれ、大宰府との間は水城の西門につながる直線官道で結ばれていたのであった。

行政機能は、九国三島の西海道諸国に対する行政を総括する役割である。

財政機能は、西海道諸国の調庸物は、長門国以東の一般諸国（陸奥・出羽を除く）のように平城京に貢進するのではなく、大宰府に集約されたのであった。大宰府の「蔵司」は、こうした大量の調庸物を収納する倉庫群が配置された官司であった。諸国で口分田を班給した剰りの「公田」（乗田）では、耕地を農民に賃租して収穫の五分の一を地子として納めさせる地子経営が行われた。その公田地子は、内国では太政官に送納されて太政官の財源となったが、西海道においては、大宰府に送納されてその財源となった。8世紀半ばからは、「府官公廨」として大宰府官人たちの得分となっていった。この府官公廨も、大量に大宰府で収納されたものと考えられる。

軍事機能は、対外防衛そして対隼人・南島の性格をもって、大宰府を守る形で様々な造営が行われた。防人・烽火（とぶひ）・古代朝鮮式山城群・水城・怡土城跡などがそのために営まれた。防人たちは大宰府に直属して北部九州などの防衛に当たる兵力であり、大宰府の下の防人司が管轄した。西海道諸国の軍団の兵力も、直接には諸国国司の管理下にあるが、諸国司の上に大宰府が位置していた。防人・烽火や水城は663年の白村江の敗戦の翌年に緊急に作られ、さらに翌年に長門城・大野城・基肄城などの古代朝鮮式山城群が作られたことは、『日本書紀』にみえる。

○『日本書紀』天智3年（664）是歳条

対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防（さきもり）と烽とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

○『日本書紀』天智4年（665）8月条

達率答本春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。

水城…版築の敷粗朶工法、柱の埋め殺し工法、暗渠導水管の精密な工法

宗教機能としては、大宰府とセットで営まれ、西海道を代表する寺院である観世音寺の存在が大きい。その大規模なあり方は、延喜5年（905）の「観世音寺資財帳」（国宝）にみることができる。戒壇は、正式な僧侶となるための受戒の儀式を行う場である。天平宝字5年（761）に内国の東大寺、東国の下野薬師寺と並んで西海道の観世音寺が正式な戒壇として認められた（「本朝三戒壇」）。

給食機能は、古代の官司で行われた官人に対する毎日の給食や食材の管理など、厨がはたした機能である。大宰府官人として「主厨」が存在し（職員令）、官司として主厨司があったと考えられる。

交通機能は、西海道をはじめとする官道（駅路・伝路）や駅家の体系は、大宰府を中心として配置されていたのであった。そのネットワークの中で大宰府が占めた役割を、確認する必要があろう。

（3）大宰府の諸施設

発掘調査などにより明らかになってきた大宰府関連の諸施設について、概観しておこう。

大宰府政庁…「都府楼」とも称される。巨大な礎石が基壇上に現存する正殿を中心とするが、南から南門・中門・正殿・後殿・北門が南北に並び、中門と正殿を結ぶ回廊や南北の南門・北門が発する築

地によって南北三つの区画に分けられている。中央の区画の正面に東西棟の正殿があり、その前面広場の東西にそれぞれ二棟の南北棟の脇殿が配置されている。下層の７世紀後期の掘立柱建物群（建物配置は未詳）からなる第Ⅰ期、８世紀になって上記のような配置で礎石建物群が立ち並んだか第Ⅱ期、天慶４年（941）に藤原純友の乱で焼失したのち同様な配置で再建され、現在の正殿の礎石・基壇の時期にあたる第Ⅲ期と時期区分されている。後殿の近くからは削屑をふくむ大宰府木簡が大量に出土しており、後殿が文書行政の場となったことが推定された。

不丁地区…都府楼前面の東西道路の南に、官衙（曹司）群の区画が並んで展開した地区が、発掘調査で確認されている。政庁前面に大宰府を構成する諸官司（曹司）の官庁街があったのである。この地区からも、木簡が多く出土しており、とくに基肄城の穀の分配について記した文書木簡は注目される。この木簡は、基肄城の倉庫群に貯積された大量の稲穀が大宰府の管理下にあり、何らかの理由で筑前・筑後・肥前・肥後などの諸国にその稲穀を班給する際に、大宰府官人の大監が派遣されたことを示している。

○大宰府史跡不庁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随　大監正六位上田中朝［

大宰府木簡としては、西海道管内諸国からの紫草・綿など調庸物の貢進物荷札木簡が出土している。大宰府が、管内諸国からの調庸を集約したことを示す実物史料である。また、南島木簡も出土している。「木奄美島」・「伊藍島」（沖永良部島）と記載した木簡であり、南島との交流を示す。なお、平城宮跡からは、大宰府に集まった諸国からの調綿の一部を大宰府から平城宮宛てに荷造りして貢進した際に、大宰府で付けた貢綿荷札木簡が多く出土している。大宰府で書かれたこの貢綿荷札木簡群は、材に広葉樹を利用していることが特徴であり、もっぱら檜・杉の針葉樹を材とした日本古代木簡の中にあって大きな特徴を示している。

月山地区…政庁の東側の丘陵部にあたる月山地区は、史料から確認できる水時計（漏刻）が設置された場所と推測されている。

学校院…月山地区の東方に並ぶ地を占めて、学校院が存在した。西海道の諸国の国学の上に位置する教育施設である。官人の再生産をめざして府官などの子弟を教育した。孔子廟があり、釈奠（孔子祭り）の儀礼が行われた。吉備真備が大宰府に赴任した時代に釈奠の儀礼が整えられたという。朝鮮半島と類似する文様塼が出土することが名高いが、本格的な発掘調査はまだである。

観世音寺…西海道諸国の仏教を統括し、諸国国分寺の上に立つ大宰府の寺院であった。

戒壇院　『観世音寺資財帳』 梵鐘　創建期をめぐる課題

鴻臚館跡（筑紫館跡）…外国使節や日本から派遣される遣唐使・遣新羅使たちを迎える迎賓館が博多湾沿いに営まれていた。東に開いた門は、水城の西門につながる直線官道とむすびついていたと考えられる。のちに鴻臚館交易ともいわれる外国使節との交易の場ともなった。南館・北館の二つの客館からなり、掘立柱建物群から礎石建物群に変遷したことが発掘調査により明らかになっている。九世紀代の、優秀なイスラム陶器・ガラス器・中国陶磁器などが出土している。この鴻臚館跡からの出土木簡には、豊前国京都郡や南海道の讃岐国三木郡からの庸米等の貢進　物荷札木簡があり、大宰府や平城京に送られるべき貢進物が、大宰府のもとで国家的な施設であった鴻臚館に転送されたことが知られる。

（豊前国）　○・京都郡庸米六斗
・□□［　］□［　］月　　186×　21　×８
○讃岐国三木郡□□六斗　　213×(21)×４　031

おわりに

あたらしい日本史の動向の一つは東アジア（ユーラシア）的規模の国際関係の視座から列島の歴史を

見直す所にあるが、「文明のクロスロード」として東アジアの交流史の中で大宰府が果たした機能を明らかにすることは、大きな意義があろう。また、遺跡群としての大宰府史跡のあり方や古代都市としての大宰府の実像の解明は、他の地方官衙・城・寺院・生産遺跡・交通路などの遺跡の解明とリンクさせることによって、古代国家における中央と地方との関係を立体的にとらえ直す道を開くことになると思われる。

ここまで大宰府史跡群の調査・研究が展開してきた基盤は、これまで続けられてきた毎日の地道な発掘調査の成果に多く負っていることは、誰もが認めるところであろう。
調査区の設定によっては、その時々では地味な発掘調査であっても、その成果が積み重なって大宰府史跡群の各地区の歴史的意義が次第に明らかになってきたことは、最近まとめられた大部な報告書群によっても知ることができる。

今日では、発掘調査に対してマスコミをにぎわせる「教科書を書き換える新発見！」に注目が集まり過ぎる傾向が強いように感じるが、地味ながら、古代国家の構造理解や古代都市の実像解明に結実していく大きな成果に結びつく継続的な発掘調査を、これからももっと大切にしていただきたい。大宰府史跡群の調査・研究では、ぜひ、今後の戦略的な発掘調査の成果を期待するとともに、史跡の整備・活用と調査・研究成果のさらに広範な公表を通して、国民・市民に対する発信を進めていただきたいと願っている。

参考文献

鏡山猛 1967『大宰府都城の研究』風間書房
鏡山猛 1979『大宰府遺跡』ニュー・サイエンス社
倉住靖彦 1985『古代の大宰府』吉川弘文館
倉住靖彦 1979『大宰府』教育社
佐藤信編 2002『日本の時代史４　律令国家と天平文化』吉川弘文館
田辺征夫・佐藤信編 2010『古代の都２　平城京の時代』吉川弘文館
藤井功・亀井明徳 1977『西都大宰府』日本放送出版協会

column 九州歴史資料館と九州国立博物館

九州歴史資料館（福岡県小郡市三沢）

九州歴史資料館は、昭和48年（1973）に太宰府町石坂（現在の太宰府市石坂、九州国立博物館南側駐車場の地）で開館した。本施設の開館は、九州国立博物館と密接な関係がある。当初の館名は「福岡県立歴史資料館」が有力候補であったが、国立博物館の設置基盤となる調査研究施設という役割も期待され、「九州」の名を冠する「九州歴史資料館」として開館することになった。

九州歴史資料館は、国立博物館誘致の拠点施設という役割に加え、大宰府史跡をはじめとする福岡県内の文化財についての調査研究・収集保管・展示公開も担ってきた。平成30年（2018）に迎えた大宰府史跡発掘50年の歩みも、九州歴史資料館が主体となって進められた。

九州歴史資料館の役割の一つであった国立博物館誘致は、平成17年（2005）の九州国立博物館の開館により結実した。その後、九州歴史資料館自体は施設の老朽化、収蔵庫の飽和等の問題を抱えていたこともあり、太宰府市を離れ、小郡市三沢で調査研究・収集保管・展示公開のさらなる充実とともに、教育普及・保存修復の機能強化を図ることになった。

九州国立博物館が進める「大宰府学研究」は、九州歴史資料館が蓄積してきた調査研究の成果を学術的基盤としている。今後の研究、公開活用においても、両施設が連携することで、より確かな成果をあげることが出来るだろう。

（小嶋　篤）

参考文献

大庭孝夫 2010「九州歴史資料館の歩み」『大宰府―その栄華と軌跡』九州歴史資料館

第２章

大宰府の官衙

森　公章

はじめに

大宰府は宣化朝の那津官家を先蹤とし、直接的には推古朝に初現する筑紫大宰に淵源するもので、海域アジアへの窓口としての地政学上の位置とともに、律令制下では西海道全体を統括する機関として重要な役割が期待された。大宰府が現在位置に定まったのは、663年白村江戦の敗戦前後であるが、『日本書紀』持統５年（691）正月丙戌条には「直広肆（従五位下相当）筑紫史益、筑紫大宰府典を拝して以来、今に廿九年」とあり、大宰府の始まりとの符合とともに、当初から実務官が存し、機構的整備が図られていたことがわかる。

大宰府の様相については、先駆的研究とその後の発掘調査の進展、木簡などの出土文字資料や他の遺物なども相俟って、中心となる政庁は九州歴史資料館編『大宰府政庁跡』（吉川弘文館、2002年）、周辺官衙群に関しては日吉、不丁、大楠、広丸など各地区の発掘報告書の刊行が進められている。文献史料は『大宰府・太宰府天満宮史料』などに集成され、木簡は『大宰府史跡出土木簡概報』１・２（九州歴史資料館）や『木簡研究』などで報告されているが、官衙名などを記した墨書土器は意外に出土せず、紫草関係木簡により不丁地区に貢上染物所が、蔵司地区と谷を挟んで西側の来木丘陵上とその周辺の来木地区で銅・鉄の生産工房が検出され、匠司の存在が考えられているくらいで、官衙地区の解明はなお研究途上にある。

文献史料に基づく大宰府官衙機構の様相は早くに整理がなされており、付加できる点は多くはないが、官司や家政の実務遂行部署である「所」に関する研究、地方官衙としての国衙・郡家の検討なども深化されており、近年の発掘調査の進展・知見をふまえて、具体的な官衙像や運営の日常の姿を究明することが必要であると考える。そこで、以下では、大宰府の官衙組織について、主に文献史料から具体的な執務のあり方を考察してみたい。

１．大宰府の官員

まず養老令文に記された大宰府の官制を示すと、次の通りで（官位相当も掲げた。〔→〕は後の名称変更、【　】は関係部署名を示す。史生は大宝令では10人か）、中央の太政官組織のミニュチュア版が看取され、防人司や主船といった独自の部署も存する。

○主神（正七位下）１人
○帥（従三位）１人－大弐（正五位上）１人／少弐（従五位下）２人－大監（正六位下）２人／少監２人（従六位上）－大典（正七位上）２人／少典（正八位上）２人－史生20人
○大判事（従六位下）１人－少判事（正七位上）１人－大令史（大初位上）１人／少令史（大初位下）１人〔→明法博士〕
○大工（正七位上）１人－少工（正八位上）２人〔→主工〕【匠司、修理器仗所】
○博士（従七位下）１人【学授、学校院】
○陰陽師（正八位上）１人
○医師（正八位上）２人　【薬司、薬園】
○算師（正八位上）１人　【税倉、税司】

○防人正（正七位上）１人－佑（正八位上）１人－令史（大初位下）１人【防人司】
○主船（正八位上）１人【主船司】
○主厨（正八位上）１人【主厨司、厨戸】

ところで、大宰府は天平12年（740）少弐藤原広嗣の乱後に一時廃止され、平城還都時に復置される。それに伴う措置として、『続日本紀』天平17年（745）８月己丑条に、

給大宰府管内諸司印十二面。（大宰府管内の諸司に印十二面を給ふ）

とあるのが注目される。「管内諸司」に関しては管内の諸国（九国三島）説と大宰府の被管諸司説がある。ともに特段の論拠がある訳ではないが、大宰府廃止期間中に西海道諸国の国印が収公されることがあったのか、また大宰府の被管諸司が12もあったのかは不審とされる。ただ、例えば国府においては８・９世紀に国書生などの雑色人や国務分掌の場としての「所」の存在、郡家でも郡雑任の存在が知られており、大宰府に関しても官印頒布に与るような「司」か否かは別にして、そうした存在の有無を考慮せねばならない。

２．大宰府の「所」と構成員

10･11世紀に所見するものも含めて、大宰府管下の諸司･「所」を列記すると、学校院、（左右）兵馬所（兵馬司）、蕃客所、主厨司＊、主船司＊、匠司＊、修理器仗所＊、防人司＊、警固所、大野城司＊、蔵司＊、大帳所、公文所、薬司＊、貢上染物所＊、作紙所＊、貢物所、政所＊

などが知られる（＊を付したものは、８・９世紀に登場する部署名）。

官衙運営を支える人員として、『類聚三代格』巻５延暦16年（797）４月13日官符には外散位からとる使部が不足の場合は白丁の使部を20人から40人に増員、巻14大同２年（807）正月13日官符では使部･書生に稲を無利子で借貸するとあり、使部は200人、書生（散仕）は100人がいたことが知られる。これらは８世紀から存したと考えられ、天平年間と目される大宰府154号木簡には使部が見える。巻７天長２年（825）８月14日官符には「監典等早朝就衙午後分行、多事少人僅検大略」「就事書生得弁細砕」「選択書生、毎所配充永置不替」とあり、『日本三代実録』貞観12年（870）２月23日条には大宰府の諸司・諸所にも「監典二人、勾当釐務」、『類聚三代格』巻８貞観13年８月10日官符には「蔵司勾当監典」が見える。つまり監・典が勾当するが、多忙のため大略を把握するのみで、交替年限のない書生（終身任用か）が実務を担っていたのである。

ちなみに、天長２年官符には「求得経按繋名郡司尽其勤卓」とあり、府書生の出自は郡司クラスの豪族であった。154号木簡には「遠賀郡子弟」が見え、使部とある三家連安は筑前国早良・那珂郡の郡領氏族である。その他、政庁地区正殿後方築地東北隅出土木簡にも「車持朝臣氏道」、「□書生鴨牧麻」、「合漆人前田臣」（34・36・37号）のような人名を記した８世紀中葉～後半の削屑があり、書生の肩書、筑前国上座郡の郡領氏族として知られる前田臣の存在など、やはり管内諸豪族の出仕状況を窺わせる。天長２年官符では書生10人を権任郡司に任じることで、繋ぎ止めを図っており、10人としたのは『類聚三代格』巻６大同４年（809）正月26日官符の貢綿使の郡司10人と関連するものと目され、これが後代の十郡司の呼称につながっていくのであろう。

３．官衙運営の諸相

次に彼らの実務遂行の様子を大宰府とその関連施設出土木簡、また京上の作業に関係して平城宮跡出土木簡に探る。まず不丁地区東限の南北溝ＳＤ2340からは186点の木簡が出土しており、天平年間前半頃までの時期が推定される。中には大宰府から中央に貢上される特産品として知られる紫草の貢進物付札を始めとして、筑前・筑後・豊後・肥後・大隅・薩摩、さらには南島からの貢納の様子が看取される

ものが存する。貢上染物所の現業部署があったのではないかと推定される所以である。

大宰府跡およびその周辺の関連施設から出土した荷札木簡を見ると、筑前国以外の管内諸国からのものを含めて、国名から書き始める荷札例は少なく、郡名からのものが多い。これは西海道全体が大宰府管内であり、大宰府への進上は「国内」での物資移動という意識もあり、郡名から記せばよいという方式であったことを窺わせる。一方、大宰府から宮都に進上された紫草の荷札を見ると（『平城宮発掘調査出土木簡概報』31－31頁）、

筑紫大宰進上肥後国託麻郡…□子紫草　（168+19）・19・3　081

「筑紫大宰進上」の文言と国郡名が明記され、文字も国衙公文様書風で、大宰府管内からの荷札がそのまま宮都に送られた訳ではないことがわかる。大宰府における中央貢上のための荷札作成の作業が存したのであり、国衙公文様書風は大宰府で文筆能力により実務運営を支える人々によって作成されたことを示している。

調綿進上の荷札を見ると、宮都出土のものは100屯という数量・4両という重量を記し、裏面に木簡作成者、あるいは計量責任者の名前があり、彼らこそが書生などの実務担当者であった。一方、郡司による貢上、複数人の合成を示す異質のものも存するが、これらは本来中央には到来しない筈のもの、大宰府管内から府衙に納入される際の貢綿荷札のあり方を窺わせ、こうした管内からの貢上を中央進上用の荷札に整える作業が府衙で行われたのである。

むすびにかえて ―蔵司の解明への期待―

近年発掘調査が進む蔵司地区の遺構の様子は第3章～第7章に委ねることにし、南西部の台地南端の第4次調査出土木簡（9点）に触れておきたい。遺跡の性格決定には文書木簡の方が有効であるとする知見によれば、6号木簡は重要である。これは稲の出入に関わる指示または申請を記した文書と目され、その稲とは4号木簡の「貸稲」、即ち出挙活動の実施に関連するものであり、木簡を残した部署では出挙に伴う事務が行われていた。

木簡出土地の丘陵上に存する蔵司地区の機能を検討すると、やはり蔵司の存在が想定され、貞観13年官符では蔵司が調庸の麁悪などを看過している点が指弾されており、収納・管理の業務を有していた。中央官司では大蔵省に比すべきもので、律令制下では調と庸のうちの布・綿類は大蔵省、庸のうちの米・塩は民部省、春米は宮内省被官の大炊寮に納入されることになっている。大宰府では民部省に比される官司は税司であり、こちらが徴税や予算の責務を担っていたのであろう。

中央の大蔵省では正蔵院に季禄を積み上げて賜与する儀式などが行われていたから（『儀式』巻9「二月廿二日賜春夏季禄儀」など）、蔵司でも同様の形で禄物の賜与が行われていたのかもしれない。なお、出挙関係の木簡との関連の有無で言えば、大蔵省は調物を管理していたが、稲穀の収蔵・出納に携わっていた徴証はなく、蔵司についてもそのような職掌を有していたか否かは不明とせねばならない。しかしながら、郡家の正倉には、倉別に収納物の区別はあると思われるものの、調庸物と稲穀の双方が納入されていたと目され、地方官衙である大宰府でも中央官司の如き稲穀管理の分掌は行われておらず、クラとしての蔵司が一括して掌握していたと考えることができるかもしれない。とすると、出挙木簡を蔵司の職務に関係づけることも全く無理ではなくなるが、いずれにしても蔵司地区のクラとしての機能の究明が俟たれるところとなる。

参考文献

酒井芳司 2005「大宰府史跡蔵司西地区出土木簡の再検討」『九州歴史資料館研究論集』30

杉原敏之 2011『遠の朝廷 大宰府』新泉社

竹内理三 1956「大宰府政所考」『史淵』71

森公章 2009『地方木簡と郡家の機構』同成社

森公章 2013『在庁官人と武士の生成』吉川弘文館

森公章 2018「大宰府官衙の研究」『大宰府の研究』高志書院

表1　監代・典代と「所」官人の氏姓

監代…直、安部、大蔵朝臣、大中臣朝臣、小野朝臣・小乃、上毛野、紀朝臣、清原真人、百済、佐伯、早良、菅乃朝臣、菅原、但波、多治朝臣・丹治、高橋、豊嶋、津、伴朝臣、竹志、橘朝臣、秦、速部、惟宗朝臣、日奉、船真人、藤原朝臣、源朝臣、御春朝臣、真上、宗形朝臣、山村、和気朝臣／直宿禰、伊勢、大蔵朝臣、大中臣朝臣、大原朝臣、小野、上野、紀朝臣、清原、惟宗朝臣、菅野、橘、伴朝臣、平、中原朝臣、藤原朝臣、文屋真人、源

典代…阿刀、不知山、大蔵、大中臣、紀、清原、内蔵、財部、橘朝臣、津、長岑、速部、宗形／平

庁頭…大中臣、惟宗、伴宿禰、秦、藤井、山、和気

貫首…清原、高橋、豊嶋、中臣、秦／丹治、源

税司…預：矢作、十郡司：別、別当：橘

蕃客所…執行：山村、監代：山村

兵馬所…官人代：建部・小治田、勾当：百済・調・海原 // 執当：赤染・宗形、庁頭：中臣・清原、十郡司：酒井、府老：大中臣・山宿禰、預

警固所…鎰取：田口、本司兼監代：百済、文殿：宗形、庁頭：大中臣、貫主：高橋、府老：紀朝臣

検非違所…別当、執行：大蔵、検非違使：佐伯、大神

公文所…庁頭：和気・山・宗形・惟宗、府老：百治（百済か）・山・宗形朝臣・惟宗朝臣、案主書生：紀、案主史生：高橋、監代：竹志・小乃・藤原・早良・大中臣

学校院…別当：（権監代）、院司

造観世音寺行事所…庁頭：藤井、府老：大中臣、典代：不知山、監代：菅野、文殿：内蔵、府掌：平

（備考）「／」以降は鎌倉時代の事例であることを示す。「所」官人については役職名別に表示した。兵馬所の項の「 // 」は別の文書での構成員であることを示す。庁頭・貫主には「所」官人として登場する事例も含めて表示してある。

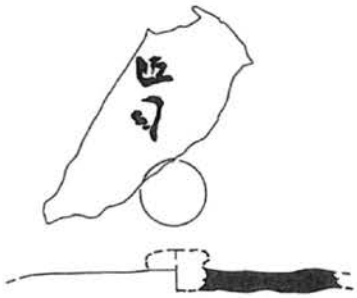
「∨肥後国飽田□□□【郡調綿カ】壱□□【伯屯カ】
□□□【養老カ】」 (237)×34×7 039

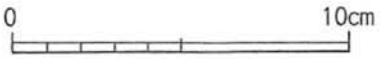
二八三・筑前國怡土郡調綿壹伯屯 四兩養老七年
室山 235×25×6 6031

二一〇までの調綿荷札の裏の人名、たとえばこの「室山」はその収納責任者か。

二〇〇 肥後國飽田郡調綿壹伯屯 天平三年主政大初位下勳十二等建部君馬□【都カ】
368×37×10 6031

【綿カ】大原里綿七十八屯【平カ】
□壱伯屯 天□四年
三井里綿廿□□
【二屯カ】
(194)・25・4 019 JF11





0　10cm

不丁地区 遺物

墨書土器

一八九　「怡土郡紫草廿根」

一九二　「糟屋郡紫草廿根」

二一三　「合志郡紫草大根四百五十編」

二〇二　・「夜須郡苫壹張」
・「調長大神マ道祖」

「〈大隅郡」

「〈伊藍嶋□□×

「〈桑原郡」

「〈掩美嶋×

二一六　・山鹿郡紫草
・託□　大根

裏面は判別が容易でない。第二字は「广」が見えるだけであるが、第一字を考慮すれば、「麻」であろうか。とすれば、肥後国託麻郡の意味であろうし、それは現在の熊本県飽託郡に当たる。

一五四・×　□遠賀郡子弟名

□料受□師伊福マ□□

□受使マ他田舎(人脱カ)千依

受　使　部三家連安

瓦工

受　吴マ廣野

蔵司西地区出土木簡

一号（『木簡概報（一）』一号）

・□□疾病為依

・□日下部牛(開カ)□

里長日下部君牛閇　(147)・31・6　019

二号（『木簡概報（一）』五号）

□大夫之(舳カ)□□　091

三号（『木簡概報（一）』一一号）

・久須評大伴ア

・太母□□□三貢　156・27・3　032

四号（『木簡概報（一）』四号）

八月廿日記貸稲数(財カ)「ア人　物財」　(153)・32・7　061（物差）

五号

□年里五戸　(134)・(15)・(5)　081

六号（『木簡概報（一）』三号）

・告稲事者受食白　大伴ア尸手此

・无(故カ)□在時□吾(収カ)□□(麻)□(稲)□(取カ)出白　343・21・6　011

七号（『昭和四五年度概報』図版一〇の七号、本文二九頁の八号）

□□□□子亥戌□

□□□□□□□□(記カ)　(163)・37・5　019

八号

□十二篇其(以カ)□□□　(116)・37・6　081

九号

101・22・6　032

墨痕を確認できなかった。

column　特集展示「大宰府研究の歩み」

大宰府史跡の発掘調査は、昭和43年（1968）に開始され、平成30年（2018）に50年の節目を迎えた。九州国立博物館では、この節目の年に際して、特集展示「大宰府研究の歩み」を開催し、大宰府史跡の発掘調査にいたる『前史』に焦点を当てた。

大宰府は、古墳時代に起源をもつ地方行政官「大宰（オオミコトモチ）」を、律令制の中に取り込んだことで成立した日本独自の行政府である。「西都」とも称された大宰府は、対外交流の窓口を兼ねた地方最大の都市として栄えた。12世紀までに大宰府政庁は役割を終え、威容を誇った殿舎は荒廃した。やがて建物の基礎である礎石を田畑に残すのみとなったが、18世紀に古典や歴史地理についての研究が進展し、また名所を訪ねる旅行が盛行すると、大宰府史跡にも新たな光が当たる。六国史に登場する「大宰府」、菅公の詩に詠まれた「都府楼」を礎石や瓦片から体感できる大宰府跡は、『遺跡』として広く認識されるようになった。江戸時代における多様な学問の進展は、遺物・遺跡に対する考証を深め、その成果を受けた遺跡の保存と顕彰が唱えられる契機となったと言えよう。

江戸時代の研究をふまえ、大宰府研究にも新たな学問の波が押し寄せる。中山平次郎（九州大学名誉教授）は考古学的手法に沿って、大宰府政庁周辺をくまなく踏査し、採集資料の観察を通じた研究成果を次々と発表した。鏡山猛（九州大学名誉教授）は、大宰府の都市区画である条坊の復元案を提示するなど、大宰府史跡の全体像をはじめて示した。鏡山が集大成としてまとめた『大宰府都城の研究』は、その後の調査研究の教科書的存在となっている。また、大正２年（1913）の線路の複線化工事では、「水城切掘図」が描かれた。このような発掘調査開始以前の研究蓄積が、大宰府史跡発掘50年の学術的基盤となった。

（小嶋　篤）

「大宰府研究のあゆみ」リーフレットの表紙

第3章

大宰府の諸司 ―蔵司を中心に―

松川　博一

はじめに

大宰府には、多種かつ多数の品官と分課された被管官司があった。天平17年（745）、大宰府管内の諸司に印十二面が支給されており〔史料2〕、大宰府に12の被管官司があったとされる。これについては、中央の寮司印に先行することから九国三島の公印との異論もある。中央の諸司印支給の契機は、調庸の納入手続きの厳正化にともなう書類への捺印のためとされる。大宰府では、貞観12年（870）まで諸国の雑米は税庫ではなく、諸司諸所に直接納められていた〔史料6〕。大宰府が中央に先んじて諸司印が支給されたのはその手続きのためと考えられる。その12司の中には蔵司が含まれてよいであろう。

1．大蔵省と蔵司

大宰府の蔵司は、中央の大蔵省に当たる官司である。省名の「大蔵」とは、同省が管理する倉庫群のことであり、調庸物を収納する正蔵などからなる。「蔵」という字は、「大蔵」や「正蔵」のように中央の「クラ」に用いられた。ところが大宰府の「クラ」は地方の「クラ」でありながら中央の大蔵に準じて「筑紫大蔵」と呼ばれた。蔵司の名は「筑紫大蔵」に由来すると考えられ、その成立は奈良時代以前に遡る可能性が高い。

平安京では大蔵省の敷地の西南辺に大蔵庁があり、その東に大蔵や長殿・率分所（蔵）、つまり数区画の正蔵院などがあった。その構造は、一院のなかに各種の倉庫が方位を揃えて整然と配列され、そのほぼ中央に「中庭・中区・大庭」とよばれる広場があった。その機能は、諸国からの調庸物を保管するだけでなく、その収納に際して現物を勘会する場でもあった。また、官人への季禄支給の際、禄物を中庭に積み上げて分配するという賜禄の場としても使用された。さらに山陵使の派遣に際してはその幣物も中庭に積み上げられた。

2．蔵司地区の遺構と機能

蔵司地区の遺構をみると、丘陵の南西部（D・E地区）には9間×2間の身舎に南北の廂をもつ大型礎石建物があり、その南東部（A・C地区）に3間×5間の総柱の礎石建物などが中央の広場を囲むようにコの字形の配置で6棟以上が並ぶ。それは大蔵庁と正蔵院の「雙倉」や「中庭」に通じる建物配置であり、蔵司地区の遺構を蔵司の曹司庁と「筑紫大蔵」院とみることができる。

その機能は、西海道諸国の調庸物の保管はもとより現物勘会の場として、また大宰府や壱岐・対馬の官人の季禄の運積・分配の場として使用されたと考えられる。さらにいえば、香椎廟は山陵と見なされたことから、その幣物の積上の場となった可能性もある。

大型礎石建物は一被管官司の曹司庁として破格の規模であるが、蔵司は大宰府による西海道支配を体現する官司である。それにふさわしい規模と格式の建物が装置として必要であったとみることができる。建物の前面の空閑地は、正蔵院の「大庭」にあたる役割を担ったことも考えられる。このような推論が許されるならば、蔵司は遅くとも8世紀前半には整備され、調庸物の勘会・出納・保管にともなう政務や賜禄儀礼をはじめとした儀式の場として機能した可能性が高い。

3．蔵司と「大宰府工房」

大蔵省の職掌には官工房に関係するものがあり、その管下に典鋳司・掃部司・漆部司・縫部司・織部司が置かれた。その官工房では金属器・ガラス器・玉器、薦・蓆・床・簀・苫・葦簾等、漆器、衣服、錦・綾・紬・羅等の染織品、靴・履・鞍具、染革品などである。

蔵司が同様の職掌とすれば、これまで匠司の管下と考えられてきた、いわゆる「大宰府工房」のうち、蔵司管掌のものが多く含まれることになる。あらためて、匠司の官人とされる大工の職掌をみると、「城隍・戎器・舟楫・諸営作事」である。つまり、染織品や漆工品などの手工業生産は蔵司、土木・建築工事、瓦・建築部材の製造・調達、船舶の建造、武器・武具の生産は匠司が担当したことになる。そのことから、貢上染物所・作紙所・細工所などの諸所や工房は、蔵司の管下にあったと考えるべきである。したがって、紫草の付札木簡や木工に関わる「轆轤役」木簡、漆付着の土器・木簡などの手工業生産関係遺物が出土した不丁地区も含めて蔵司の管轄であったとみることができる。蔵司は大宰府の諸司の中で別格の規模と権限を有した存在であったといえる。

4．蔵司の官人

蔵司の官人は、貞観13年（871）の時点で勾当の監・典ならびに使等から構成されていた〔史料7〕。蔵司に限らず、他の諸司も監・典が釐務を勾当しており〔史料6〕、監・典が複数の諸司を所管した可能性が高い。また、蔵司と税司には経理担当として品官の算師が配されていたと考えられる。

天長２年（825）の太政官符には、監典が早朝は「衙」に就き、午後から「分行」するとある〔史料4〕。「衙」とは府の政所を指すと考えられ、大宰府の総務的な事務を担った太政官庁的な所司である。今のところ、木簡削屑が大量に出土した政庁後殿地区を想定している。「分行」とは勾当を務める諸司へ行くことを意味し、政庁周辺官衙ということになる。諸司の実務は、監・典の監督の下、現業を主導する品官と事務に精通した府書生が担い〔史料4〕、雑用に当たる仕丁も配置された〔史料7〕。

おわりに

蔵司地区からは多くの武器・武具が出土している。大宰府の兵庫は、貞観11年（869）の記事に「大宰府庁事并門楼兵庫」と主要建物が列記されていることから政庁の近くにあったとみられる。難波・平安宮では大蔵省の側に兵庫が置かれており、大宰府においても蔵司に隣接して兵庫があった可能性が高い。倉庫群が集中した方が警衛に都合がよく、また丘陵上に建ち並ぶ倉庫群の威容を示すことで視覚的な効果を狙ったのかもしれない。

参考文献

倉住靖彦『古代の大宰府』吉川弘文館、1985年
佐藤　信「史料からみた平城宮大蔵省」（『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館、1997年）
竹内理三「大宰府政所考」（『史淵』71、1956年）
平野邦雄「クラ（倉・庫・蔵）の研究―大宰府、郡家の発掘調査によせて―」（『大宰府古文化論叢　上巻』吉川弘文館、1983年）
松川博一「大宰府官司制論―被管官司の検討を中心に―」（『大宰府の研究』高志書院、2018年）
森　公章「国書生に関する基礎的考察」『在庁官人と武士の生成』吉川弘文館、2013年）
森田　悌「平安中期の大蔵省について」『平安時代政治史研究』吉川弘文館、1978年）

●大宰府の「諸司」関係史料

〔史料１〕『日本書紀』天武天皇６年（677）11月１日条

筑紫大宰、赤烏を献れり。則ち大宰府諸司人に禄を賜うこと各差有り。且専ら赤烏を捕れる者に爵五級を賜う。乃ち当郡の郡司等に爵位を加増したまう。

〔史料２〕『続日本紀』天平17年（745）８月己丑４日条

八月己丑、大宰府管内の諸司に印十二面を賜う。

〔史料３〕『類聚三代格』巻六、大同４年（809）正月26日太政官符

太政官符す

一、位禄・季禄の料米を運ぶを聴す事

右大宰府解を得るにいわく、謹んで太政官の去る神護景雲二年（768）七月廿八日の符を検するにいわく、府の解を得るにいわく、五位国司及び帯国の諸司官人等の款して云わく。賜うところの位禄ならびに季禄の料の舂米を、京に上せて親族に資せんと欲す、てえり。（中略）

以前、右大臣宣すらく、勅を奉るに、件のごとし。

大同四年正月廿六日

〔史料４〕『類聚三代格』巻第七　天長２年（825）８月17日太政官符

太政官符

応に直府の書生を権りに郡司に任ずべき事

右、大宰府の解を得るにいわく、府は九国二島を惣管する所にして、政迹の体は、内外相兼ね、雑務出納、色に触れて紛繁なり。監・典等、早朝に衙に就き、午後は分かれ行う。事多くして人少なく、僅かに大略を検するのみ。唯、事に就いては書生のみ、細砕に弁ずることを得る。茲に因り、承前、書生を選択し、所毎に配し充て、永く置きて替えず。経按を得ることを求めて、名を郡司に繋けて、其の勤卓を尽さしむ。而るに太政官の去る弘仁三年八月四日の符に依るに、郡司の選は、一らに国定に依れとす。書生等競いて本国に就き、府に留むる心無し。捉搦を加うと雖も、免れて恥なし。弘仁七年以来の雑公文、今に至りて未だ進めざるは、職として斯に由る。望み請うらくは、直府の書生、その才に随いて、権りに主帳以上に任じ、惣数は十人を過ぐること莫く、名を郡司に繋け身を府の衙に留め、継譜の慶びを以て、奔躁の之を粛せんと、てえり。右大臣宣すらく、勅を奉るに、請いに依れ。

天長二年八月十四日

〔史料５〕『類聚三代格』巻十八　天長３年（826）11月３日太政官符太政官符す

応に兵士を廃し選士衛卒を置くべきの事

（中略）

衛卒二百人

右、同前の奏状に偁はく、此の府は九国二島の輻湊する所にして、夷民、往来し、盗賊も時無く、追捕拷掠、其の備え有るべきなり。しかのみならず、兵馬二十疋の飼丁・草丁、貢上染物所、作紙所、大野城の修理等、旧例は皆兵士を以て充つ。今、商量するに、此の二百人を置き、件の雑役に充つ。年を以て相替え、調庸を免じ、及び粮塩資丁を給うこと、一らに仕丁に同じからんことを。

（中略）

天長三年十一月三日

〔史料６〕『日本三代実録』貞観12年（870）２月23日条

（中略）。その三にいわく、承前の例、諸国の雑米はおのおのその本色に随い、諸司・諸所に輸納す。しかるにある司全く納まりて、用い尽すことすでにおわり、ある所は多く未進を致して、公途を闕くることあり。期会あるに至りて、廻撥することを得ず。いわんやまた、件の司等は、監・典二人、鞅務を勾当し、ある時は自ら用いることあるも、また判置することなきにあらず。貢進の怠、これによらざるなし。たとい一任の内、ことに厳制を立つとも、なおおそらく、相承の官意に任せて改更せん。官符にあらざるよりは、なんぞ後法を立てん。望み請うらくは、五使料のほか、庸米ならびに雑米は、すべて税庫に納め、毎月下し行え。もし符宣の旨にあらずして、たやすくもって下し用うれば、監当の官、法に准じて罪を科さん、と。（中略）詔してならびにこれを従す。

〔史料７〕『類聚三代格』巻八 貞観13年（871）８月10日太政官符

太政官符す

応に大宰府の貢物の麁悪を責むべきの事

右、案内を検するに、去る承和十四年十月十四日の格にいわく、貢物の麁悪及び違期は、重科に処すべきの状、延暦十四年七月廿七日、大同二年十二月廿九日、承和十三年二月廿一日、数度の符を下すこと既におわんぬ。而るに府司等、符の旨を遵行せず、猶違期を致す。（中略）左大臣宣すらく、（中略）猶麁悪・違期を致さば、府司及び管内国宰は、公廨四分の一を奪え。但し郡司は諸国貢物の綱領に准じ、杖八十一を決せよ、てえれば、（中略）而るに年来貢ぐところの絹・綿等は、濫悪のもの既に多く精細のもの尤も少し。寔に是れ府国の吏、憲章を慎まざるの致す所なり。（中略）督さざるの怠は府国帰すと雖も、容れ隠すの責は専ら蔵司に在り。右大臣宣すらく、勅を奉るに、法有りて行わざれば、何ぞ懲革することを期さん。宜しく霜典を降し、更に将来を粛すべし。仍りて須く麁悪の物、絹一百疋に及び、綿一万屯に満たば、蔵司勾当の監・典并びに使等、見任を解却し、曽ち寛宥せざるべし。自余の雑事は前格の如くせよ。

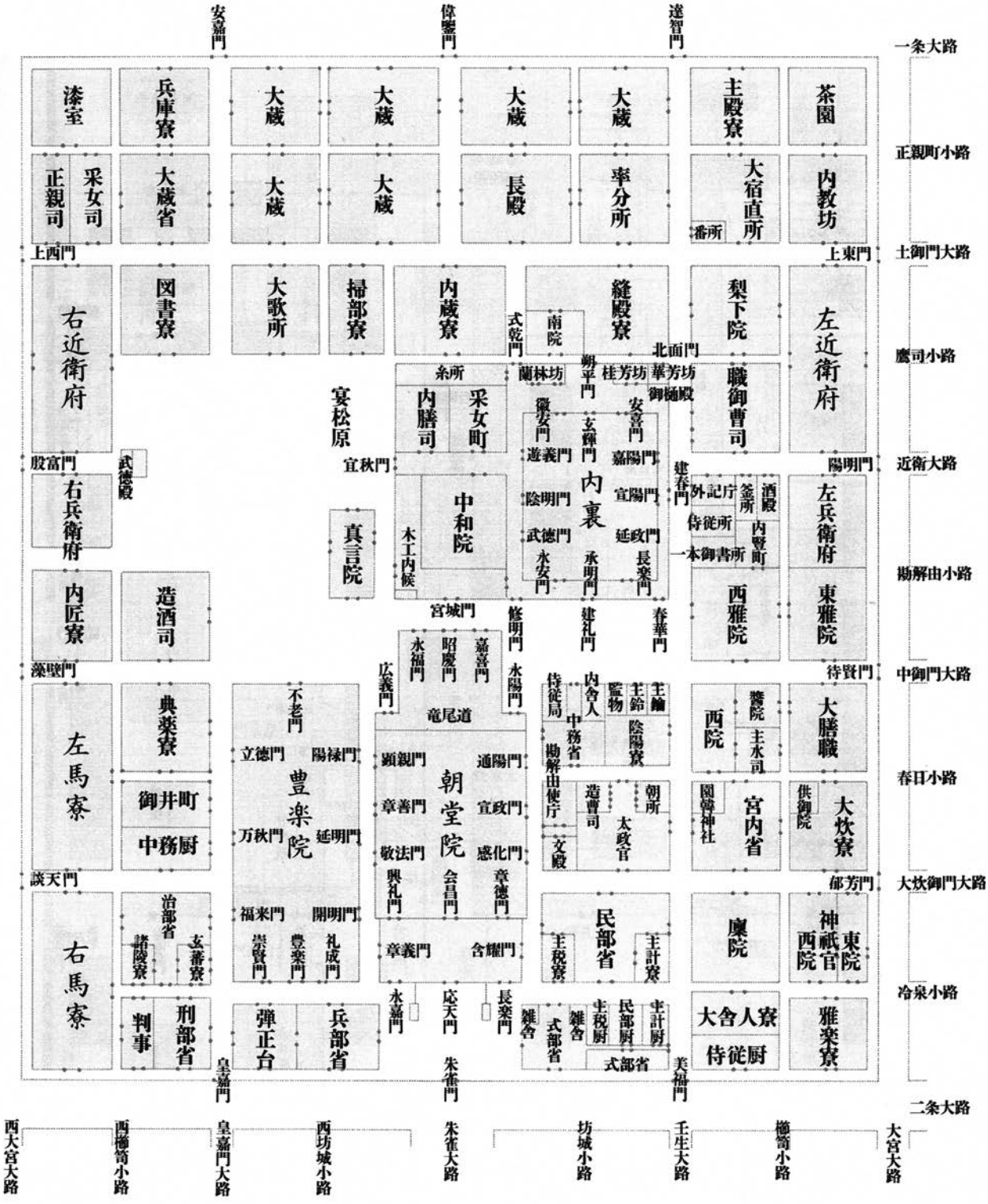
貞観十三年八月十日

〔史料８〕『延喜式』民部省下式大宰仕丁条　延長５年（927）奏進

凡そ大宰府、仕丁を充つるは、①帥に卅人、大弐に廿人、少弐に十二人、大少監に各八人、主神・主工・大少典・博士・明法博士・主厨に各六人、音博士・陰陽師・医師・算師・主船に各五人、大唐通事に四人、史生・新羅訳語・弩師・儛仗に各三人、②府衛に四人、学授に二人、蔵司に二人、税倉に二人、薬司に一人、匠司に一人、修理器仗所に一人、③守客館に一人、守辰に六人、守駅館に一人、儲料に廿人。みな諸国事力に准えて、其の食は皆庸米を充てよ。もし、仕丁の酬傭を情願う者あらば、みな黒綿卅斤を以て限りとなし、これにより過ぎ収むることを得ず。其れ香椎宮の守戸は一烟、薬園の駈使は廿人、主船は一百九十七人、厨戸は三百九十六烟。

	所司名	別　称	年　代	出　典
1	政所	政所【墨書土器】	8世紀	大宰府政庁周辺官衙跡不丁地区
2		府政所	998	『本朝世紀』長保元年（999）3月7日条
3	防人司	防司	718	養老考課令最条
4		防人司	757	『続日本紀』
5	主神司	神司	730	『万葉集』巻第5
6		主神司	807	『古語拾遺』
7	学校院	府学校	781	『類聚三代格』15、太政官符
8	主船司	（大宰）主船司	787 － 791	『令集解』営繕令有官船条令釈
9	城司	城司【墨書土器】	8世紀	福岡市早良区次郎丸高石遺跡出土
10		大城【墨書土器】	8世紀	大宰府政庁周辺官衙跡不丁地区
11		城司	876	『類聚三代格』18、太政官符
12	匠司	匠司【墨書土器】	8世紀	大宰府政庁周辺官衙跡不丁地区
13		匠司ヵ【墨書土器】	9世紀	大宰府条坊跡
14		匠司（仕丁）	927	『延喜式』 巻23民部下　大宰仕丁
15	主厨司	厨司	862	『類聚三代格』14、太政官符
16		主厨司（領田）	1004	大宰府牒案（平安遺文2 － 435）
17	蔵司	蔵司（勾当）	871	『類聚三代格』8、太政官符
18	薬司	薬司（仕丁）	927	『延喜式』 巻23民部下　大宰仕丁
19	税司	税司（納米）	989	東大寺文書、大宰府牒案（平安遺文2 － 335）
20	兵馬司	左兵馬司	1006	観世音寺牒案（平安遺文2 － 445）
21	左郭司	左郭司	1059	大宰府政所下文案（平安遺文3 － 932）

大宰府諸司初出一覧



平安京大内裏図 『平安時代史事典』（角川書店、1994年）より転載。

第4章

大宰府史跡出土の付札木簡

酒井　芳司

1．古代の木簡

古代の木簡は、文書、帳簿、付札、習書など様々な用途に使われ、役人たちは、その使い道にあわせて多様な形に木材（9割以上は杉・檜などの針葉樹）を加工して木簡を製作した。これらのうち、付札と呼ばれる木簡は、長方形に加工した木材の一端、もしくは両端の左右辺から切り込みを入れた形のものである。この切り込みは、税として納められた物品に、ひもでくくりつけやすくするための工夫である。付札には地名や物品名、数量、納入した人物名などが墨書されている。付札はさらに、物品を送った側が取り付けた荷札、物品を受領した側が管理のために付けた整理用付札に分けられる。

2．不丁地区出土の付札

奈良・平安時代において、中央政府は、国司を日本列島に置いた60余りの国に派遣して直接に支配していた。ただし、西海道と呼ばれた九州地方の九国三島については、国司も派遣するが、中央政府と国司との間に大宰府を置き、大宰府が中央政府の命令を受けつつ、九州全域を統治していた。その具体的な事実として、西海道の税、すなわち特産物の調、労役奉仕の代わりに布などを納めた庸については、いったん大宰府にすべて納め、一部を中央政府の命令によって大宰府が都に送ることになっていた。

付札は物品とともに生産地から納入先へと移動し、物品を最終的に消費する際にはずされて廃棄される。したがって、大宰府では西海道各地から納められた税の物品に付けられていた付札がたくさん出土する。もっとも多くの付札が発見されたのが、大宰府政庁跡の西南に隣接する不丁地区の東端を限る南北溝SD2340である。出土した186点の木簡のうち、文字が判読できないものも含めて70点が付札であり、すべて8世紀半ば以前のものである。

不丁地区出土の付札を検討すると、以下のことがわかる。まず、筑前国内の郡名がある付札は大半が紫草の付札で、「郡名＋物品名＋量」という書式のものが多く、大きさも近い。糟屋郡の付札は筆跡の類似、切り込みの形、上端から切り込みまでの長さが短いという共通性があり、怡土郡（糸島郡）の付札は切り込みの形や上端をとがらせる点に共通性がある。加麻郡（嘉麻市）は下端をややとがらせるという独自の調整を行い、岡賀郡（遠賀郡）は他郡と共通した書式のほか、「（表）岡賀郡全／（裏）一編十根」という独自の書式でも作る。上端をとがらせるのは怡土郡とも共通する。つまり、筑前国では大きさや書式の統一に規制がかかりつつも、作り方の細部においては郡ごとに特徴があり、郡の役人が作成に関わっていることがわかる。その際、郡の役所において大宰府が指導して作成させた可能性と、納入の際に大宰府において郡の役人が作成した可能性がある。

筑後国の三井郡の庸米の付札は、筑前国の紫草の付札と同じ書式である。飛鳥浄御原令施行（689年）前後に、筑前国と分けられる前は、筑後国は筑前国と一体で、筑紫国と呼ばれていたので、書式が共通するのであろう。この庸米の付札は切り込みがないので、米俵の中に三井郡が品質保証のために入れたものである。このことは、同じ書式の筑前国の荷札も郡司が主体的に作成したことを傍証するだろう。

豊後国・肥後国・薩摩国の付札は、書式が一定しておらず、物品名や数量が書かれていないものが多い。大きさも多様である。同じ郡でも様々な形と大きさがある。これらは付札の作成にあたった郡、または郡以下のレベルの役人の個性が際立ち、大宰府や国ごとの規制は働いていない。薩摩のみは国名が

記載されるという特徴がある。

大隅国の付札や南島（掩美島＝奄美大島・伊藍島＝沖永良部島か）は大きさ、切り込みの形と位置、上端部の整え方などに共通性がある。これらの作成には、郡や南島の人びとではなく、大宰府や大隅国が関与している可能性がある。

以上より、付札は郡が主体となって作成したものが多く、郡が税の納入に責任を持ったことがわかる。したがって、これらは整理用付札ではなく、荷札である。筑前国は大宰府が直轄統治していたため、大宰府の規制が行き渡り、規格が統一されている。成立が遅れた大隅国（713年成立）や南島からの物品には郡や島レベルでは荷札が付けられず、大宰府や大隅国が付けたのだろう。また、薩摩国以外では国名が記されず、郡名のみが表記される。蔵司（くらつかさにし）西地区で出土した７世紀末の久須評（くすのこおり）（豊後国球珠郡）の荷札も同様である。これは大宰府の前身である７世紀の筑紫大宰（つくしのおおみこともち）や筑紫総領（つくしのそうりょう）が、後に郡の役人となる地域豪族を直接に支配下に置いており、８世紀以降も郡の人事権を掌握し、とくに筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後が大宰府の直接的な経済・軍事基盤であり続けたことと関係があるだろう。

３．平城宮・京跡出土西海道木簡と不丁地区出土付札

最後に都に行った大宰府作成の荷札を紹介する。平城宮・京跡などでみつかる西海道から送られた荷札は、国や郡が違っても、樹種（広葉樹）、切り込みの形（台形）、書式に統一性があり、大宰府が作成して取り付けたものである。不丁地区で出土した肥後国飽田郡の調綿の荷札からわかるように、真綿の荷札は、梱包を解かないまま、大宰府の蔵に蓄積されていた真綿に付いていた西海道諸国作成の旧荷札の内容を転記して大宰府が作成したものとみられる。

また、紫草の根も大宰府で染料や染物に加工し、「筑紫大宰進上」ではじまる統一した書式の荷札を大宰府が作成して付けていた。しかし、不丁地区出土の進上ではじまる豊後国海部郡の荷札は、都に送るために加工された紫草の根を、何らかの事情で大宰府において使用することになり、そのために荷物から外されて廃棄されたものとみられる。

このように、都に送る予定の物品であっても、必要に応じて大宰府の判断で差し替えて消費することもあり、中央政府の経済的需要にどう応えるかはすべて大宰府の裁量に委ねられていたと言えよう。

参考文献

九州歴史資料館 2014『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ－不丁地区　遺物編２－』

薩摩国

「＜薩麻国枯根」

薩麻国枯根

17

薩摩頴娃

薩麻頴娃

18

平城宮・京跡出土の大宰府が送った付札

・「＜肥前国□□郡調綿壱佰屯四両養老二年＜」

・「＜　　片麻呂　　＜」

筑紫大宰進上肥後国託麻郡…□子紫草×

1cm

10cm

奈良文化財研究所所蔵

霓嶋六十四斗

(27)

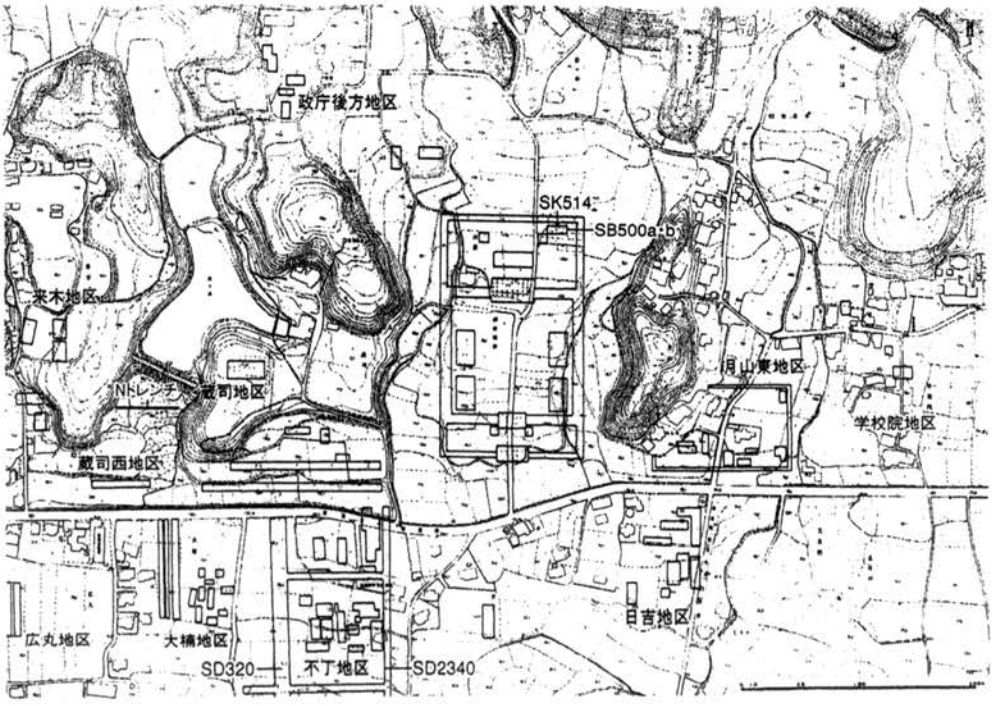
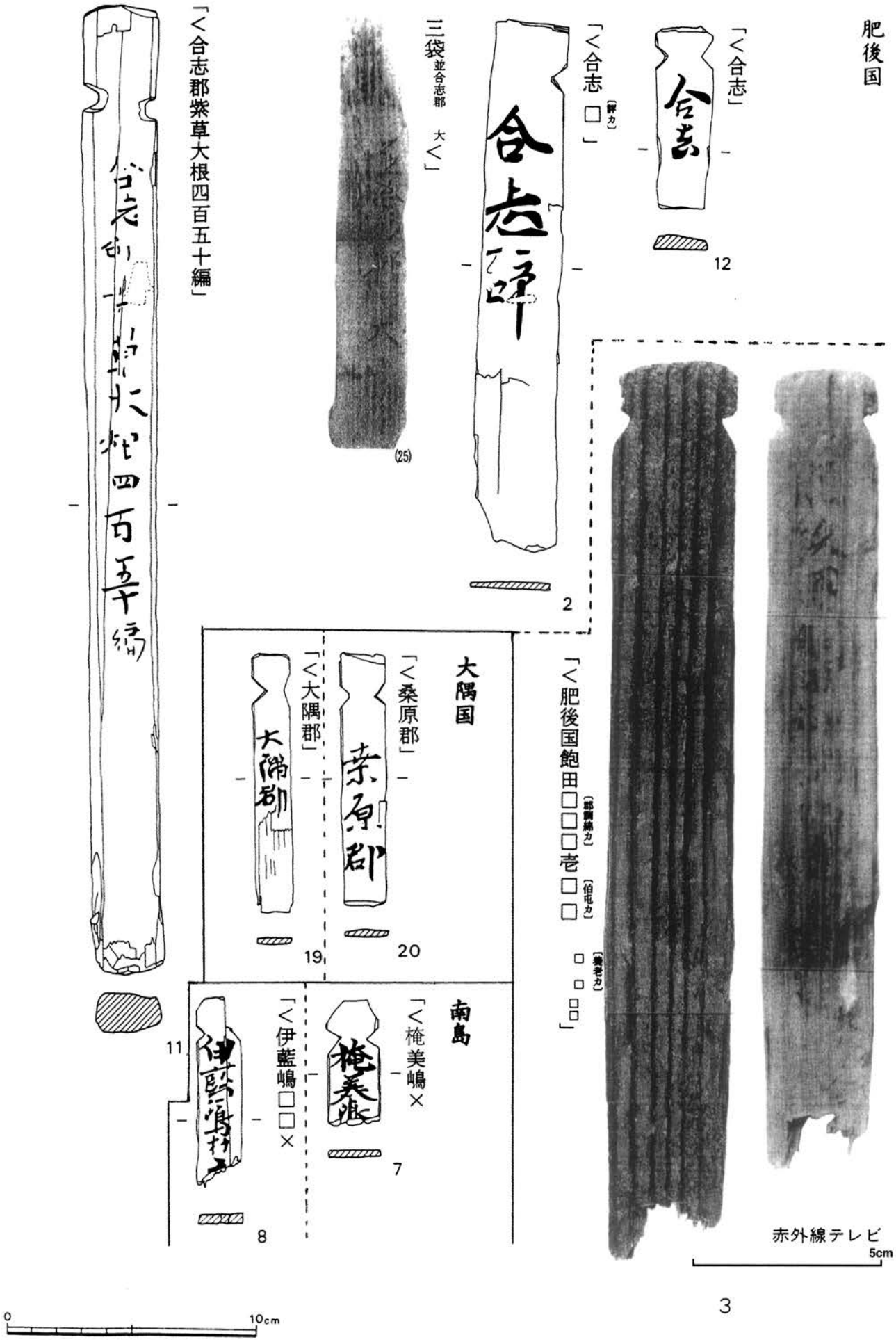


図1　大宰府政庁周辺官衙配置図

九州歴史資料館『大宰府政庁跡』Fig.5を改変。

0　10cm


肥後国
「＜合志」
12
「＜合志□」
(評カ)
2
三袋並合志郡 大＜」
(25)
「＜合志郡紫草大根四百五十編」
11
「＜肥後国飽田□□□壱□□
(郡調綿カ)
(伯屯カ)
□□□□」
(養老カ)
赤外線テレビ
5cm
3
大隅国
「＜桑原郡」
20
「＜大隅郡」
19
南島
「＜掩美嶋×
7
「＜伊藍嶋□□×
8
0
10cm

筑後国

「三井郡庸米六斗」

7

豊前国

・「〈□平八□九 □〔月カ〕

・「〈豊前□□□□〔国京郡カ〕

(23)

・「果安 安安如如

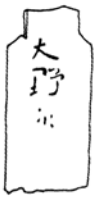
・「 □

豊前国豊代□□

17

豊後国

「〈大野□



15

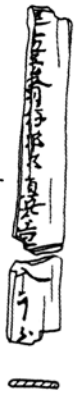
大野郡黒葛

21

「〈大野加海部郡」

14

×進上豊後国海部郡真紫草……□□□〔斤カ〕



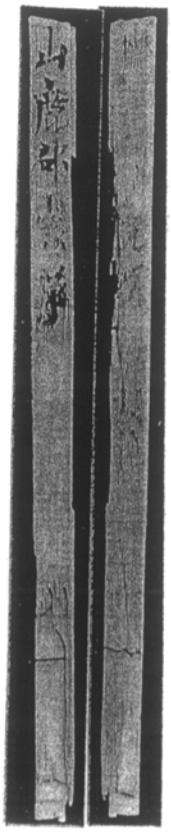
6

「三袋並大分 大〈」

16

・託□ 大根

・山鹿郡紫草



肥前国

「肥前国松浦郡神戸調薄鰒

14

肥後国

「〈肥後□廿」

4

宅麻

9

「〈□□〔山鹿カ〕郡□□」

13

大宰府史跡出土の付札

筑前国

「＜糟屋郡紫草廿根」

「＜糟屋郡紫草廿根」

「＜岡賀郡紫草□□」

「＜岡賀郡紫□×」〔草カ〕

「＜岡賀郡紫×

「＜加麻郡紫□×」〔草カ〕

・□

・筑紫□屋□〔滓郡カ〕

□□」

□□□□□〔前牛カ〕

×屋郡伊賀□□〔黒米カ〕

・「＜一編十根」

・「＜岡郡□」

・「＜一編十根」

・「＜岡郡全」

・「＜□

・「＜怡土郡□×

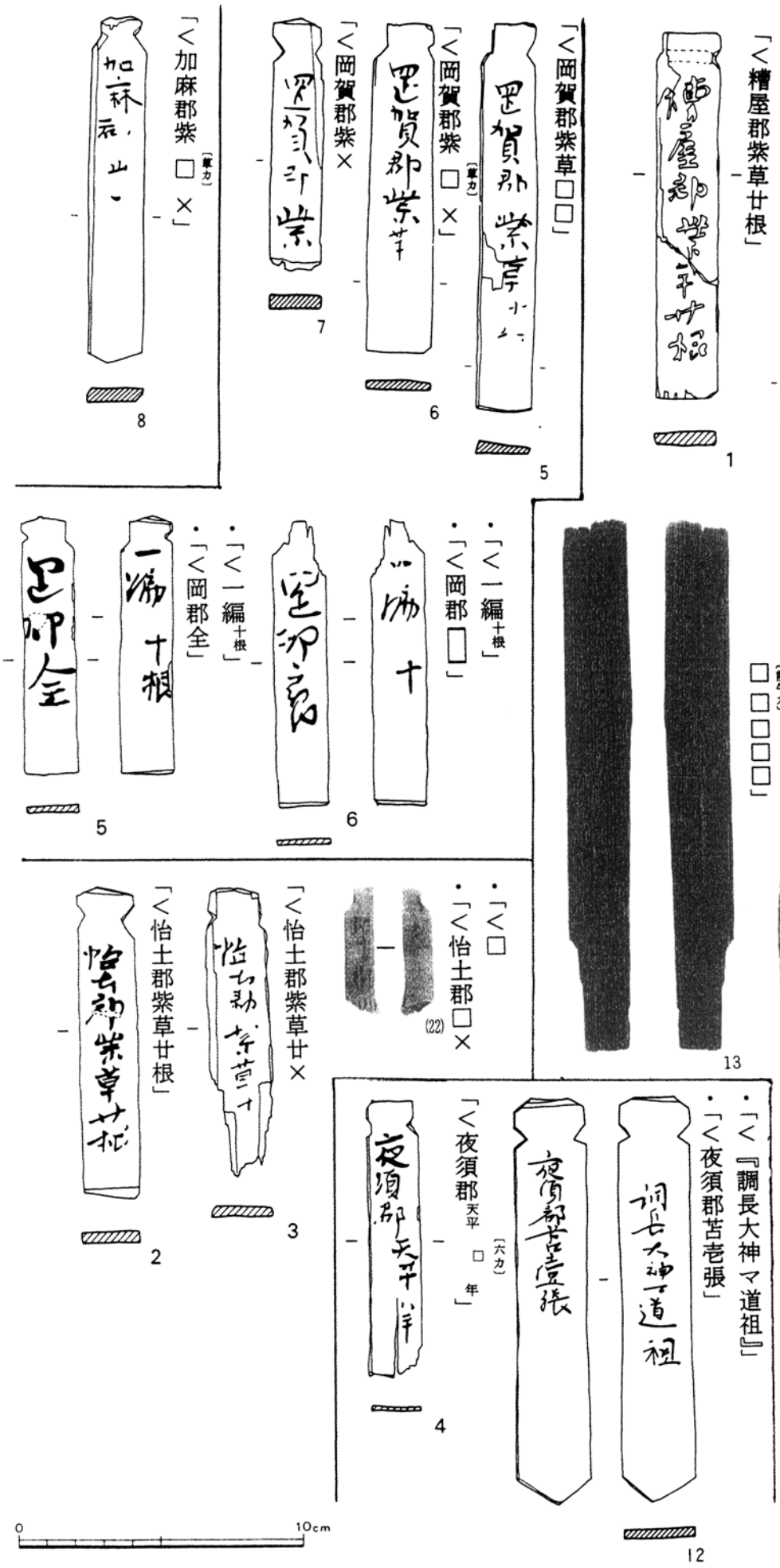
「＜怡土郡紫草廿×

「＜怡土郡紫草廿根」

・「＜『調長大神マ道祖』」

・「＜夜須郡苫壱張」

「＜夜須郡天平□年」〔六カ〕



第５章

前面官衙跡の調査研究成果

小田　和利

はじめに

大宰府政庁周囲の８地区（月山東・蔵司・後背・日吉・不丁・大楠・広丸・来木）には、大宰府に関連する官衙（所・司）が存在したことが判明している。しかし、その所在地が比定されている官司は、蔵司（蔵司地区）・貢上染物所（不丁地区）・匠司（来木地区）・主厨司（大楠地区）と僅かである。なお、所司の比定に際しては、建物の規模・配列・変遷、文字・生産関連遺物等を総合的に比較・検討する必要があるが、陶硯（定形硯・転用硯）の分析は、官衙の性格を判断する上で重要な視点となり得る。

前面官衙跡の調査研究成果

日吉官衙跡は、政庁前面広場跡の東隣に位置し、建物21棟、柵６列、井戸５基、溝20条等が検出された。建物群は８世紀前半～12世紀前半の築造であるが、官衙建物とみなされる大規模な建物は９世紀後半で終焉し、その後は２間×３間程度の小型建物に代わる。日吉Ⅱ期（８世紀前半～後半）の建物配列は、四面廂建物SB2220を中心に梁行３間の建物SB2000・2001・2195がコ字形に配され、官司としての体裁をなす。日吉Ⅲ期（９世紀中頃～後半）には、片廂建物SB2200と梁行３間の建物SB2215・2235・2240がコ字形に配列する。日吉官衙跡においては、官衙を特定できる文字資料は出土していない。しかし、文書事務に必須の陶硯（定形硯51点、転用硯79点）が130点出土しており、陶硯に占める定形硯の比率が約４割と高いことから、文書事務を担当した役所と考えられる。

不丁官衙跡は前面広場跡の西隣で、二つの南北溝（SD2340・320）に挟まれた幅約80ｍの範囲において建物63棟、柵21列、区画溝５条、井戸15基等の遺構を確認した。不丁Ⅱ期（８世紀前半～中頃）の建物配列は、南北棟建物SB2400・2445と東西棟建物SB2435とでＬ字形をなす。次の不丁Ⅲ期（８世紀後半～９世紀中頃）には、北側の東西柵SA2451と南側の東西溝SD2015・2470によって三分割され、中央部においては四面廂建物SB2420を中心とする一群と東西棟建物SB2380とがＬ字形配列をなし、不丁官衙の中枢部を構成する。しかし、官衙建物とみなされる大規模な建物は、８世紀初頭～10世紀前半の存続であり、藤原純友の乱（天慶４・941年）以降は築造されておらず、その後は井戸を伴った１間×２間の小型建物へと大きく変容する。

なお、南北溝SD2340からは、天平６（734）・８（736）年の紀年銘木簡を含め186点の木簡が出土しており、調・庸の付札木簡には７国19郡２島の名がみえ、大宰府の支配が西海道一円に及んでいたことが知られる。同溝からは紫草に関する荷札木簡も多く出土しており、従前より所司の一つである貢上染物所がこの地区に存在した可能性が指摘されている。また、墨書土器には「政所」・「□司」があり、不丁官衙跡には事務的官司と工房的官司の二者が併存したことを裏付ける資料と言える。

南北溝SD320を挟み不丁官衙跡の西に接する大楠官衙跡とそれに西接する広丸官衙跡は、日吉・不丁官衙跡の建物と比較して小規模である点と井戸を伴っていることから、官衙ではなく官人居住域とされてきた。しかし、大楠官衙跡では、建物64棟、柵27列、境界溝３条、井戸27基等を検出した。官衙建物とみなされる大規模な建物は、８世紀中頃～10世紀前半の存続であり、不丁官衙跡同様、藤原純友の乱以降は築造されておらず、居宅的様相を呈するに至る。また、SD320からは「烏賊」と記した木簡、墨書土器「主典」・「那ツ支」（菜坏）・「杯」、「厨」と判読した墨書土器、さらには人名の「春岑」と篦

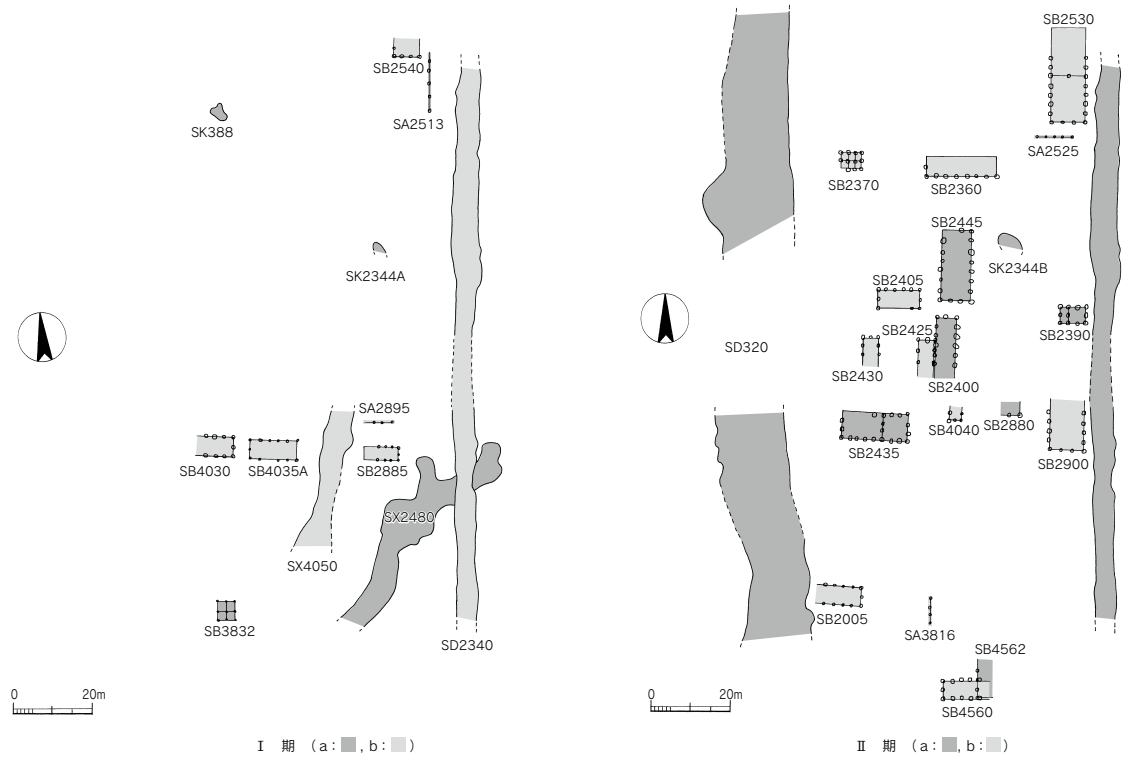
書した移動式竈（かまど）が出土している。これらの文字資料は厨（くりや）の存在を強く窺わせるものであり、製塩土器の点数も400点余りと多量であることから、大楠官衙跡を主厨司に比定しておきたい。

広丸官衙跡は、大楠官衙跡の西隣にあたり、同官衙跡とは境界溝SD2680（後にSD2700）で画される。建物30棟、柵23列、区画溝14条、竪穴住居１軒、井戸３基、土壙墓23基等を検出した。広丸官衙跡においては、官司名を特定できる文字資料は出土していないが、定形硯の比率が45.6％と極めて高いことから事務的官司とみなせ、北側に位置する匠司に比定されている来木工房跡を統括する役所と評価できよう。なお、東西溝SD540以南には官衙建物は存在せず、空閑地的様相を呈する。SD540の南に位置する南北小溝SD2785・2786は、６～７ｍ間隔で並走することから通路側溝と考えられ、SD2680との心々距離は135ｍを測る。これは、官衙一区画（幅約90ｍ）の1.5倍にあたることから、広丸官衙跡が３区画分を占めていたとすると丁度中心の位置に来る。この通路は御笠川まで延伸していたとみられ、その箇所に船着き場を想定すると、空閑地は物資の集積場としての利用が考えられる。

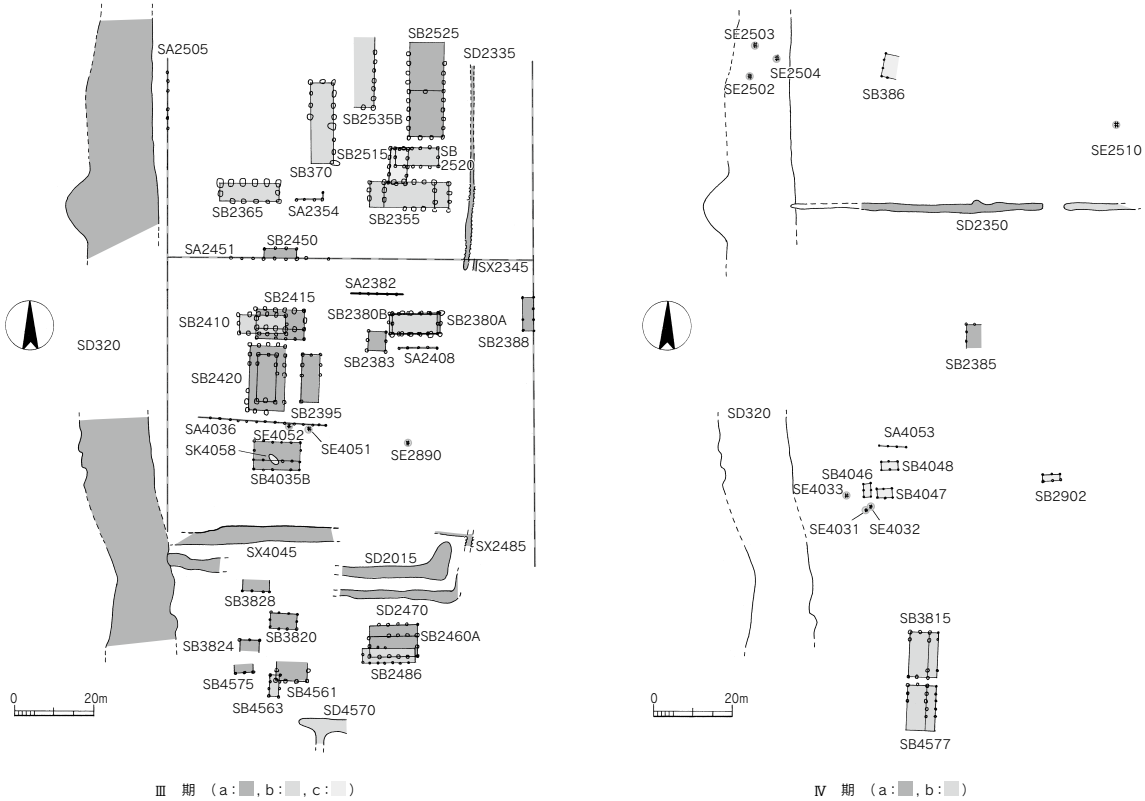
おわりに

大宰府政庁跡及び周辺官衙跡からは、平城宮・京に次ぐ約1,160点もの陶硯が出土しており、西海道における文書行政の頂点に君臨した大宰府を如実に物語っている。このことから、陶硯総数に占める定形硯の比率が日吉・広丸官衙跡のように４割前後の数値であれば文書事務を担当した部署とみなせ、不丁官衙跡のように２割程度だと工房的官司と判断される。

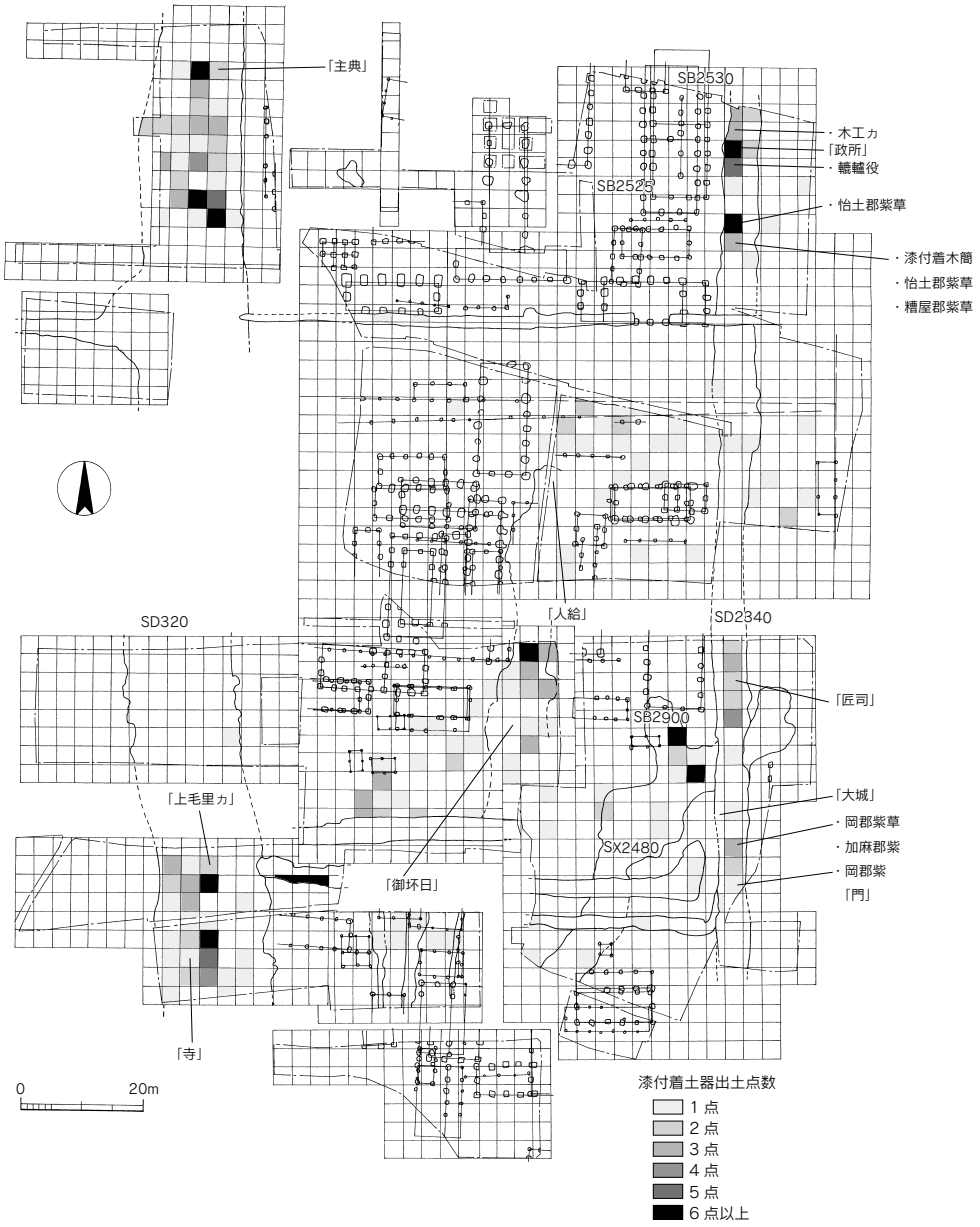
一方、政庁前面域官衙群の特徴として、官衙建物とみなされる大規模な建物は、藤原純友の乱以降には築造されておらず、乱以後は井戸を伴った１間×２間ないしは２間×３間程度の小規模な建物が存在するにすぎない。政庁の建物（Ⅲ期）は再建されるものの、政庁に関連した所司は前面域から姿を消し、Ⅲ期政庁はシンボル的な建物へと変容したことが窺われる。



不丁官衙跡建物変遷①：不丁Ⅰ期（7c後半～ 8c初頭）・不丁Ⅱ期（8c前半～中頃）



不丁官衙跡建物変遷②：不丁Ⅲ期（8c後半～ 9c中頃）・不丁Ⅳ期（9c後半～ 10c前半頃）



不丁官衙跡漆付着土器出土位置図

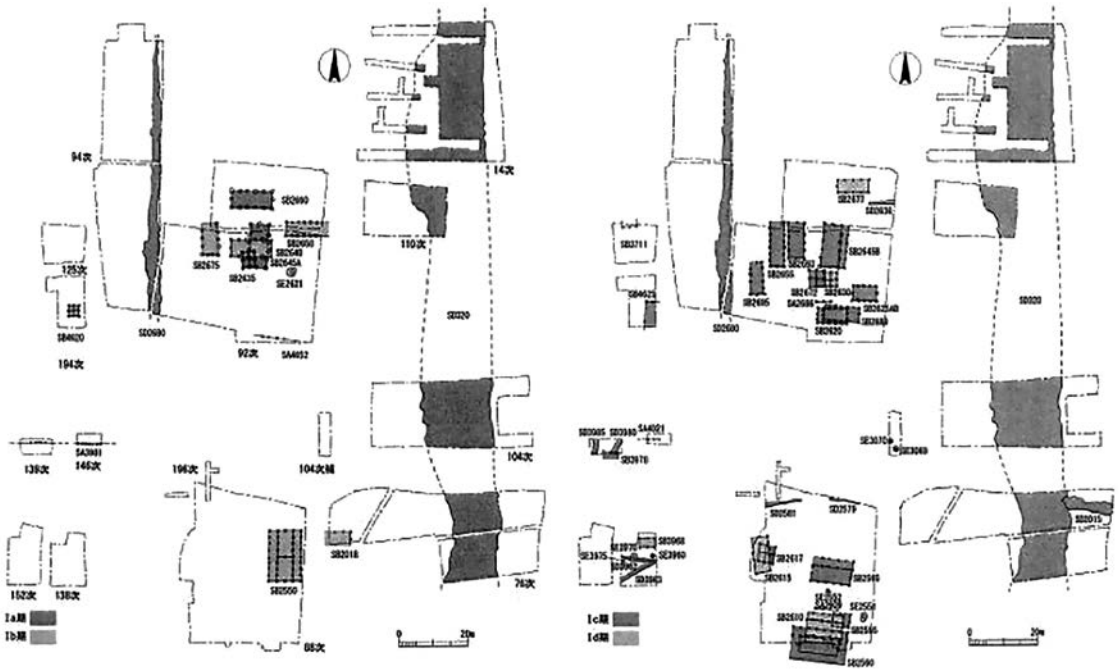
漆付着木簡

「政所」銘墨書土器

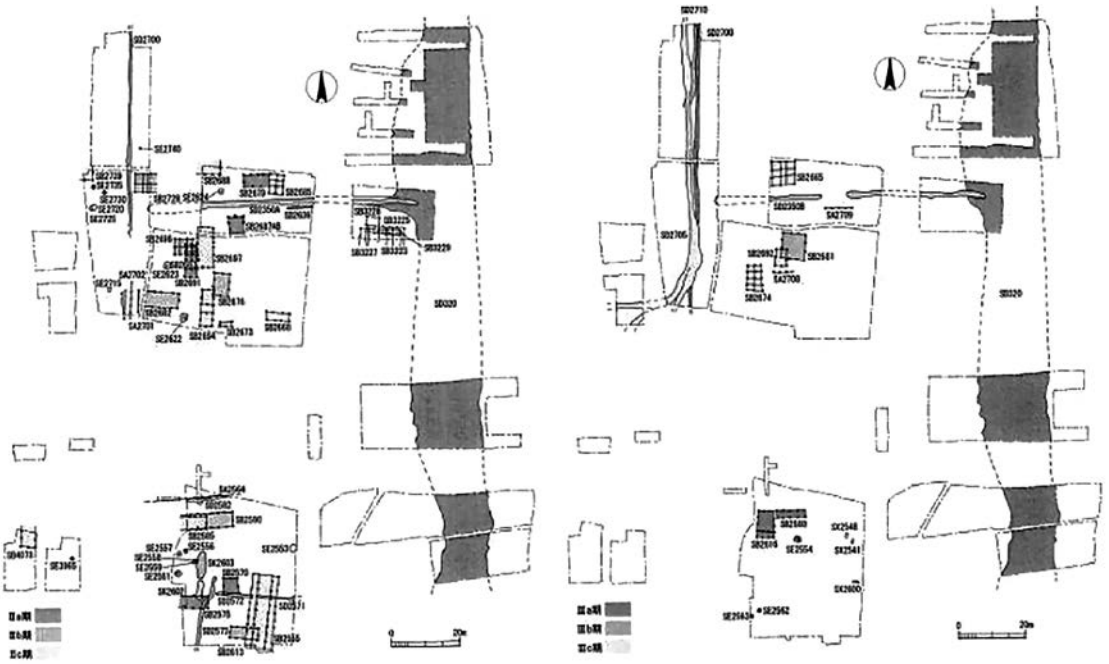
「匠(カ)司」銘墨書土器

「細工」銘刻書土器

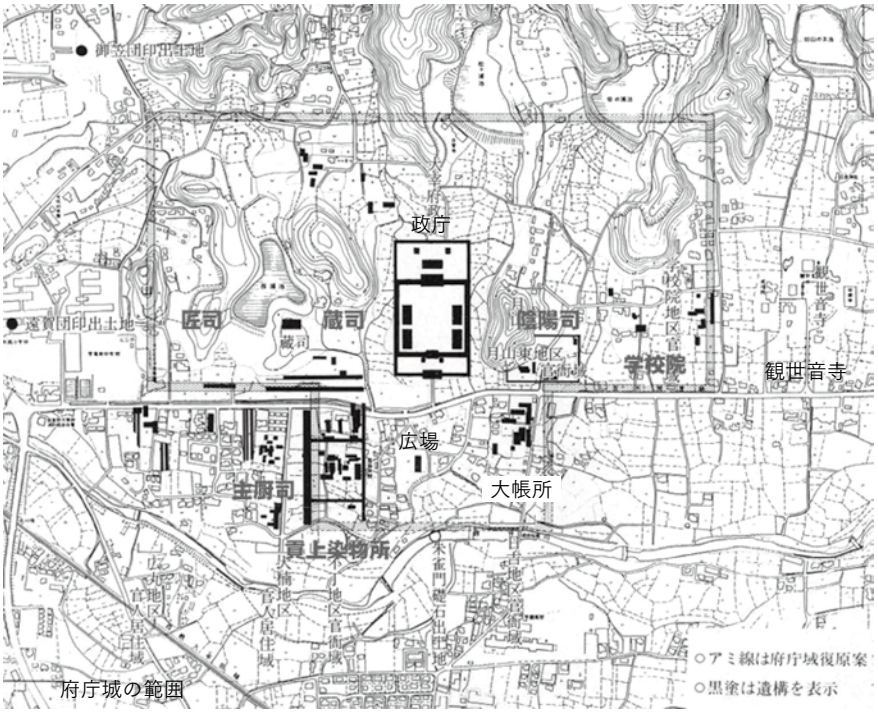
不丁官衙跡出土墨書・刻書土器



大楠官衙跡建物変遷①：大楠Ⅰ期（7c後半～ 9c前半）



大楠官衙跡建物変遷②：大楠Ⅱ期（9c中頃～ 10c前半）・大楠Ⅲ期（10c中～ 11c代）



大宰府政庁及び周辺官衙想定図

様々な陶硯

「厨カ□」銘墨書土器

漆付着土器各種

「春岑」銘篦書土器

第６章

蔵司地区官衙跡の調査研究成果

下原　幸裕

はじめに

大宰府史跡の発掘調査は現在240次を越える。蔵司地区では1970年代に「久須評」木簡などの木簡群が出土した西側谷部の４次調査、政庁前面を横切る四条路沿いの築地塀や礎石建物等が見つかった丘陵南側の54・60・65次調査などが行われていたが、丘陵上は戦前の鏡山猛氏による大型礎石建物（現SB5000）の測量調査だけであった（鏡山猛1937）。平成21年、九州歴史資料館による丘陵上の本格的な発掘調査が始まり、主に丘陵南半部で古代の建物跡などが次々と見つかっている。

今回は、丘陵上における建物群の調査成果を整理し、蔵司地区官衙跡について考えてみたい。

１．蔵司地区官衙の建物群

（１）建物群と変遷

蔵司丘陵南半の平坦地では、これまで掘立柱建物４棟、礎石建物７棟が確認されている（表１）。掘立柱建物はいずれも礎石建物よりも先行する時期であることが確認されていることから、掘立柱建物群が展開する段階（蔵司Ⅰ期）と、礎石建物群が展開する段階（蔵司Ⅱ期）に区分できる。

①蔵司Ⅰ期

蔵司Ⅰ期の建物群は、Ｄ・Ｅ区で３棟、Ａ区で１棟の、合計４棟が見つかっている。

一段高い平坦地のＤ・Ｅ区では、平坦地の北端にSB5020・5030の２棟が並び、平坦地中央に南北棟SB5010がある。３棟はいずれも異なる構造の建物であるが、床束建物のSB5020と片廂建物のSB5030は南辺の柱筋が揃い、中央の側柱建物SB5010の西辺柱筋とSB5020の西辺柱筋が概ね直線をなすなど、配置の計画性が看取できる。また、SB5010は３棟の中で柱間が最も広く、柱痕跡も直径40㎝と最も大きく、中心的役割を担った建物と推定される。わずか３棟であるが、この建物配置は中心建物を庁舎で囲む官衙の建物配置とも通ずるところがあるだろう。

Ａ区の１棟は、部分的な調査であるが、東西３間、南北２間で、柱間が2.4ｍの等間の総柱構造とみられている。高床式倉庫となる可能性を考えても良いのではないだろうか。

②蔵司Ⅱ期

蔵司Ⅱ期の中心的建物は、丘陵上で最大規模を誇るＤ区の大型礎石建物SB5000である。政庁正殿を凌ぐ床面積で、柱座を刳り出す礎石を用いるなど、周辺官衙跡の中でも異色である。近世の絵図「文政三庚辰年三月観世音寺村之内旧跡礎現改之図」（1820年）によればSB5000の南西側にも南北６間ほどの礎石建物が存在した可能性があるが、近現代の造成もあり痕跡は残っていない。仮にこの南北棟が存在すればSB5000を北に据えたＬ字状の建物配置となり、蔵司Ⅰ期とは異なる配置になる。

東側のＡ・Ｃ区は、建物の方位が概ね一致し、柱筋を揃えるなど一体的な官衙空間として形成されている。西辺にあたるＣ区のSB5110・5120の２棟は、柱間を2.4ｍ等間とする桁行５間、梁行３間の総柱構造で、高床式倉庫である。同じ５間×３間の倉庫跡は大野城跡や基肄城跡などでも多数みられるが、柱間は2.1ｍが基本で、一回り小さい。南辺にあたる建物１・２は柱間も広く倉庫とは異なるが、北側柱筋をSB5120南辺とも揃える。北辺の建物３・４は柱間が2.4ｍの等間で総柱とみられ、Ｃ区と同じく高床式倉庫が並ぶ可能性がある。建物群に囲まれた中央部は空閑地で、倉庫の出納作業や儀礼等を行う

場として機能したと推定される。

（2）建物群の年代

蔵司Ⅰ期は、建物の柱穴掘方や建物に伴う整地層から瓦類が全く出土せず、大宰府官衙における本格的な瓦葺きの導入以前の時期に比定できる。SB5020柱穴掘方からかえりを有する須恵器蓋も出土していることから、７世紀末から８世紀初頭ごろを中心とする時期となろうか。

蔵司Ⅱ期は、瓦葺き礎石建物の時代であり、雨落溝や整地層などから多量の瓦が出土する。その下限は軒瓦や文字銘瓦などの種類から10世紀代に下る。一方、上限は鴻臚館式や老司Ⅱ式などの軒瓦をはじめとする多量の奈良期の瓦から８世紀代とみられ、９・10世紀にかけて葺き替えや補修などが行われたと考えられる。こうした年代観は整地層等から出土する土器類の様相とも合致するが、SB5000は雨落溝から９世紀代以降の瓦がほとんど出土せず、A・C区の建物群よりも早い段階で廃絶した可能性もある。

２.「蔵司地区官衙」の役割

これまでの調査により、蔵司地区ではⅠ期とⅡ期の大きく二段階の建物群の変遷があること、いずれの時期とも西群（D・E区）と東群（A・C区）の２つの区画からなることが明らかになってきた。建物配置が比較的明確になった蔵司Ⅱ期は、倉庫を主体に儀礼・作業空間を備えた東群と、それを統括する政務・儀礼空間を備える西群という機能の違いが想定できる。蔵司Ⅰ期は全体像が掴めず役割を議論することは難しいが、東群で見つかった１棟を倉庫と評価すれば、Ⅰ期、Ⅱ期とも「政務空間」と「収納空間」が組み合わさった官衙として機能していた可能性が考えられる。

今回詳述できなかったが、丘陵上から多量に出土する武具（小札）・武器（弓付属金具・鉄鏃）・鉄釘を中心とする被熱鉄製品は「収納施設」の存在を示唆し、丘陵西側谷部から出土した「久須評」等の木簡群は「収納」あるいは「出納」の機能が蔵司Ⅰ期に遡ることの傍証となろう。

以上から、蔵司丘陵上に「蔵司」もしくはその相当施設が置かれていた可能性を考えたい。

参考文献

鏡山猛 1937「太宰府蔵司の礎石と正倉院」『史淵』14輯

図表出典

図１　九州歴史資料館作成図
図２　九州歴史資料間作成図
図３　筆者作成

表１　蔵司丘陵上の建物一覧

建物名	地区	基　部	規模・構造	柱　間
SB5000	D 地区	礎石	9 間× 2 間、南北二面廂	桁間 4.1 m、梁間 3.25 m
SB5010	E 地区	掘立柱	4 間× 3 間、側柱	桁間 3.0 m、梁間 2.7 m
SB5020	D 地区	掘立柱	9 間× 2 間、床束	桁間 2.0 m、梁間 2.5 m
SB5030	D 地区	掘立柱	5 間以上× 3 間、東面廂	桁間 2.25 m、梁間 2.3 m
SB5110	C 地区	礎石	5 間× 3 間、総柱	桁間・梁間 2.4 m
SB5120	C 地区	礎石	5 間× 3 間、総柱	桁間・梁間 2.4 m
礎石建物１	A 地区	礎石	4 間（以上？）× 3 間、総柱	桁間 3.6 m、梁間 3.0 m
礎石建物２	A 地区	礎石	7 間× 2 間、南面廂？	桁間 3.6 m、梁間 2.7 m
礎石建物３	A 地区	礎石	2 間以上× 3 間、総柱	桁間・梁間 2.4 m
礎石建物４	A 地区	礎石	2 間以上× 3 間？、総柱	桁間・梁間 2.4 m
掘立柱建物１	A 地区	掘立柱	3 間× 2 間、総柱	桁間・梁間 2.4 m

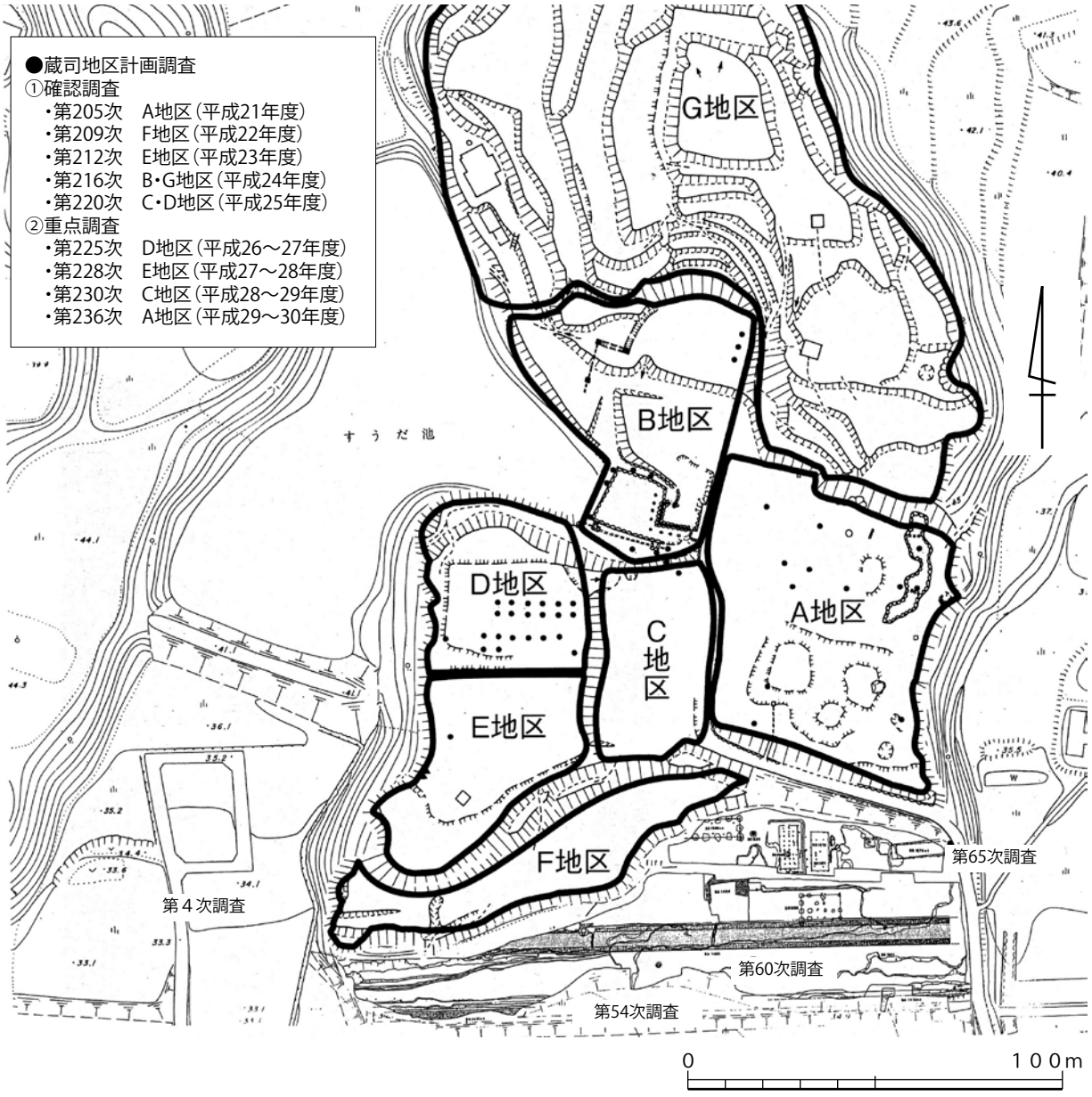


図１　蔵司丘陵地区割図（１/1800）

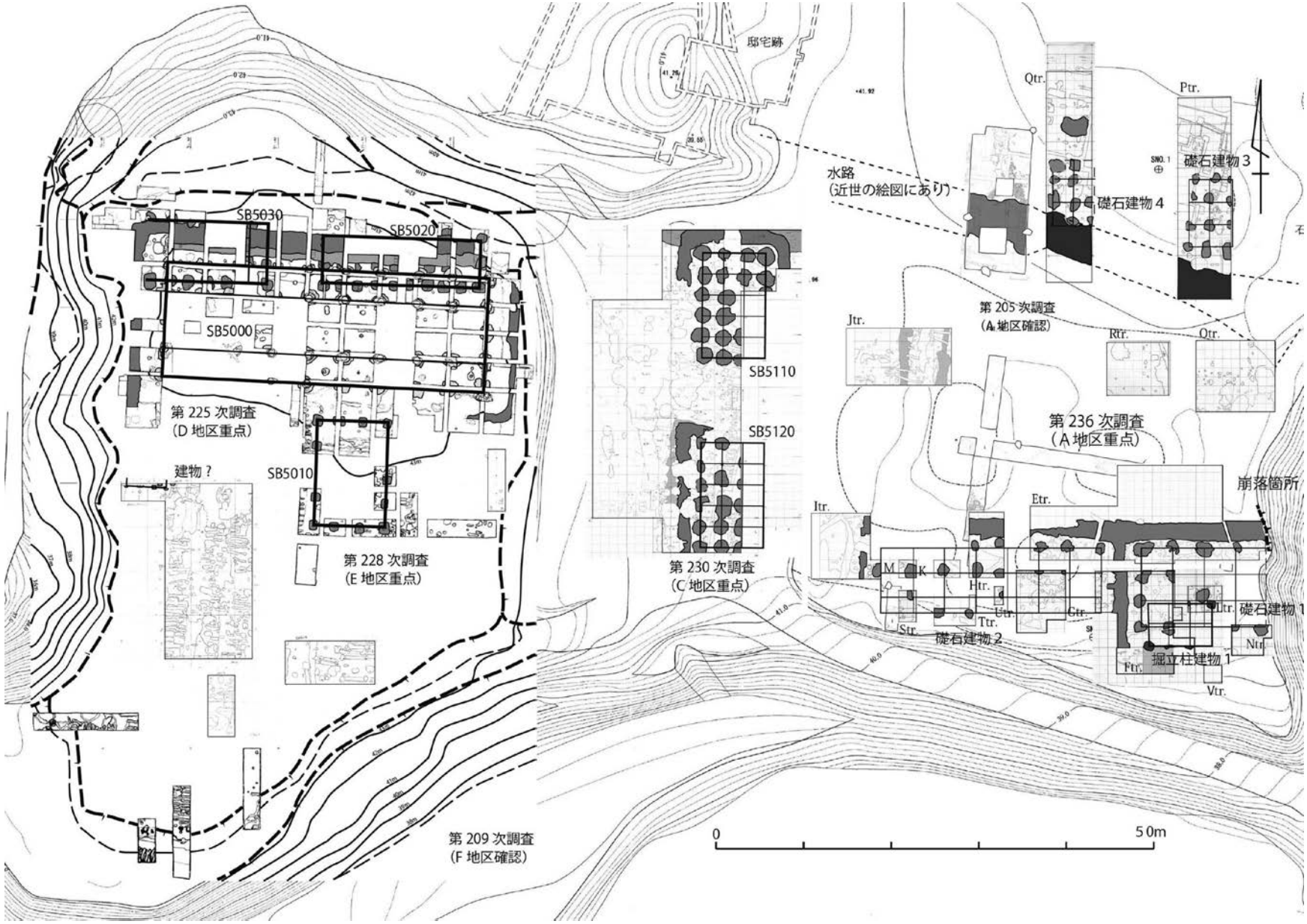


図２　蔵司地区官衙遺構配置図（１/650）

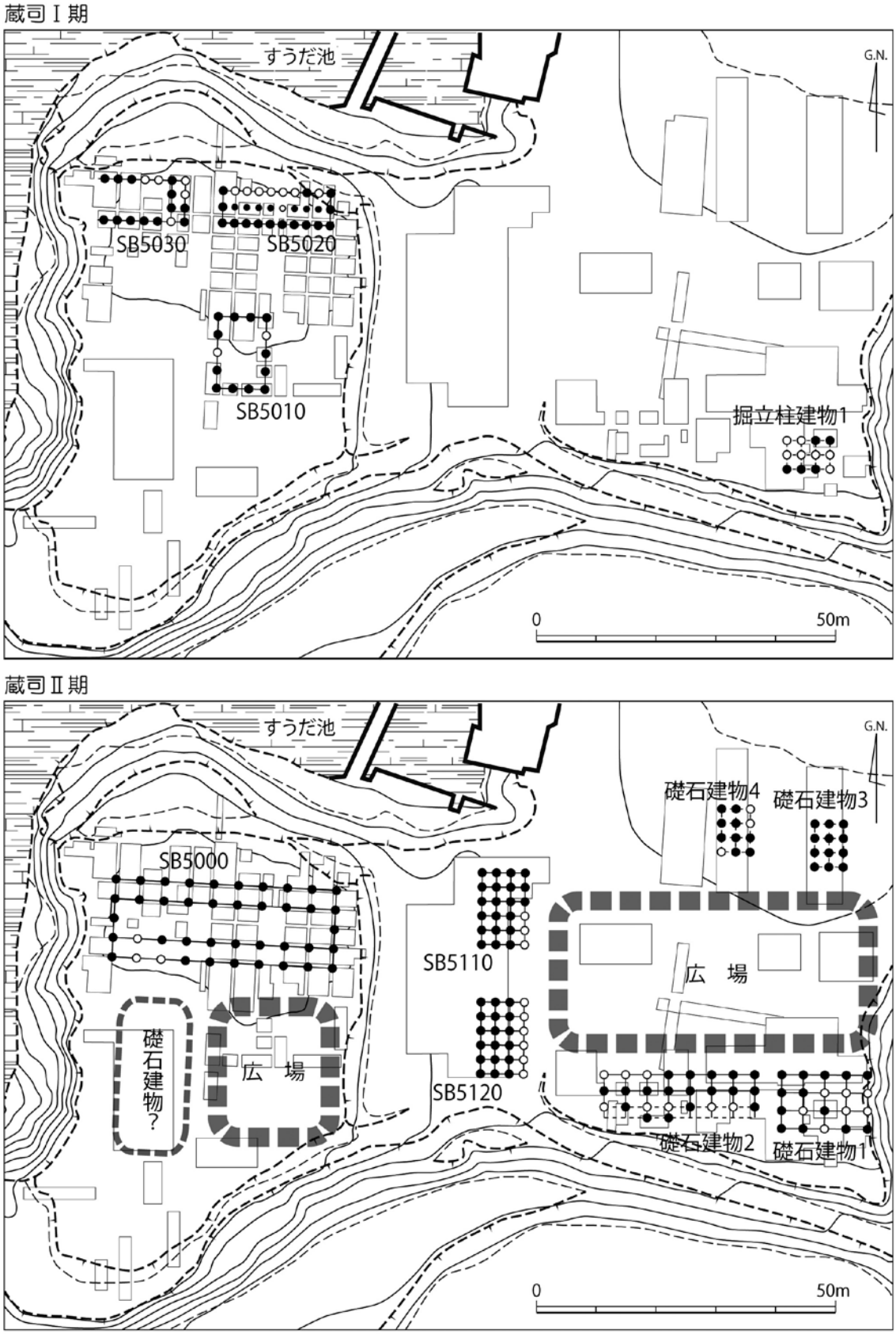


図3　蔵司丘陵上の建物変遷案（1/1,000）（下原作成）

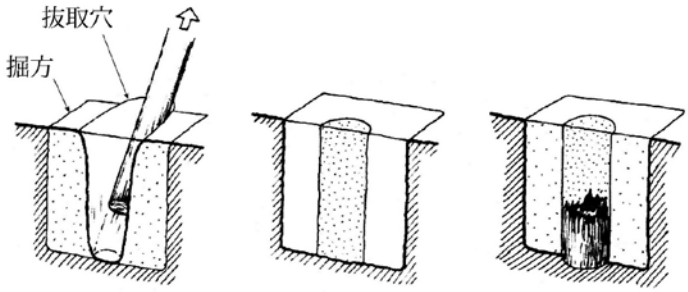


図４　掘立柱の遺構
（左：柱の抜取の様子、中：柱痕跡、右：柱根の遺存状況）

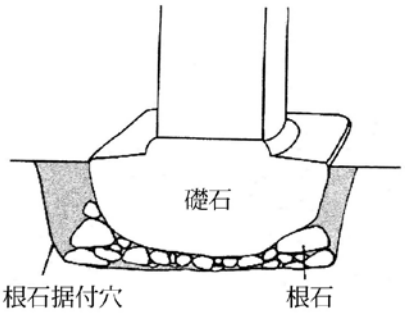


図５　礎石据付穴の構造

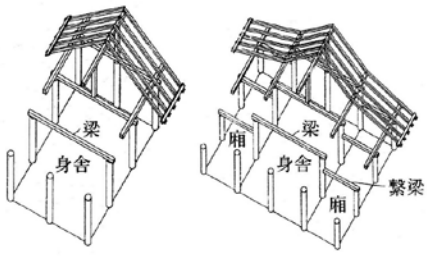


図６　建物の構造と名称

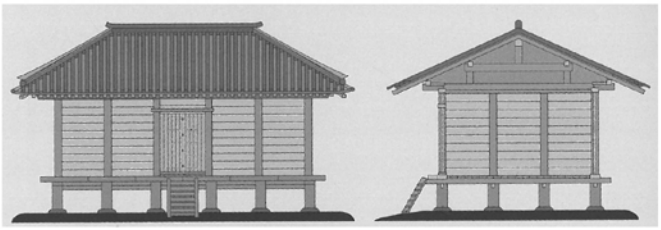


図７　高床式倉庫の構造模式図（５間×３間総柱）

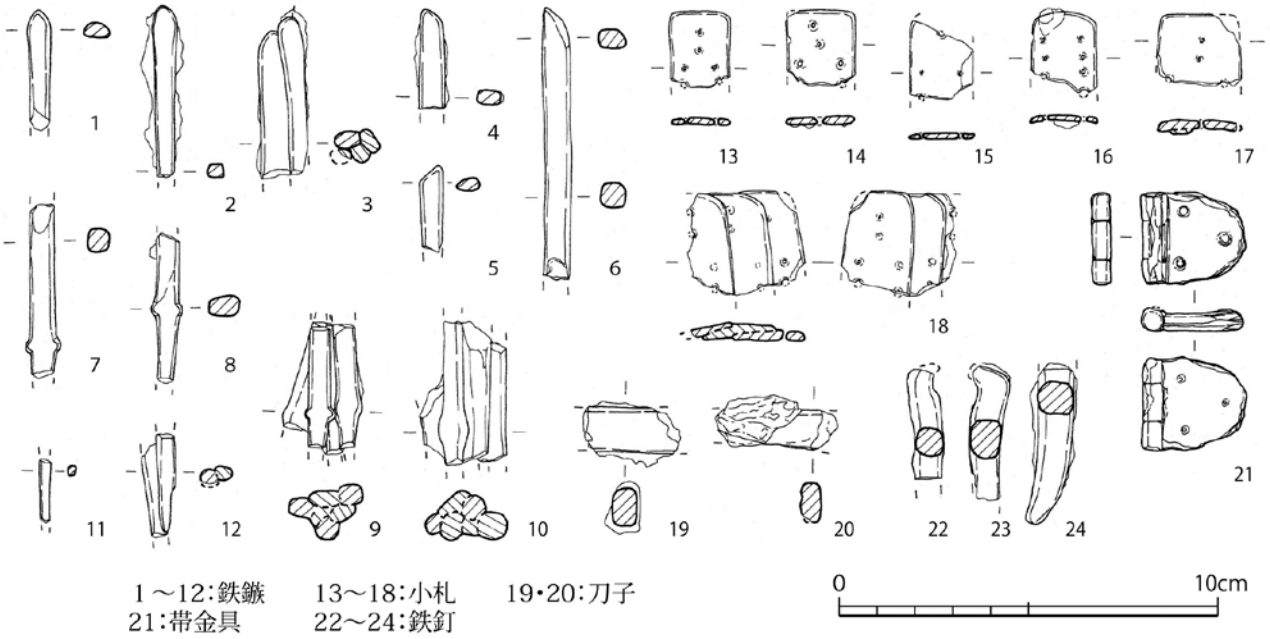


図８　蔵司地区出土の被熱鉄製品（１/２）

挿図出典

図１　九州歴史資料館2012『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅶ 平成23・24年度』より転載・一部改変。
図２　九州歴史資料館2018「大宰府跡蔵司地区現地説明会資料」より転載・一部改変。
図３　九州歴史資料館2018前掲資料を元に筆者作図。
図４～６　奈良文化財研究所編2016『発掘遺構から読み解く古代建築』より転載・一部改変。
図７　九州歴史資料館2015『大宰府史跡ガイドブック２　特別史跡大野城跡』より転載。
図８　九州歴史資料館2012前掲書より再構成。

第７章

鉄から見た大宰府官衙

小嶋　篤

はじめに

福岡平野周辺は、古墳時代より対朝鮮半島政策を睨んだ軍事動員や物資集積の記録が残る地域であり、実際に那津官家や糟屋屯倉と見られる倉庫群跡や、物資搬入の痕跡である夥しい数の牛の蹄跡等が確認されている。これらは博多湾沿岸域に立地するが、百済救援戦争以後の主要官衙は、水城・大野城等の古代山城群と組み合う形で内陸の四王寺山南西麓に建設される。この新たな官衙が大宰府の中枢「大宰府官衙」に整備されていく。ただし、大宰府は律令制導入過程における予定調和な存在ではない。むしろ、唐・新羅の脅威に対する対抗策を念頭に、律令制の枠外で成立していた「筑紫大宰」（推古朝初出）を、後出する律令制内部に組み込んだ変則的な組織と評価できる。このため、地政学的要因と歴史的動態が絡む大宰府機構の整備過程には、文献史学の成果と考古学の成果との相互検証を経たより一層の実証研究が求められる。

そこで、本章では、大宰府官衙の建設を支えた必須物資である「鉄」に焦点を当て、考古学の視点から大宰府機構の検討を進める。なお、鉄（Fe）は自然状態では「鉄鉱石・砂鉄」という鉱石に多く含有されており、これを炉で製錬することで「原料鉄（銑鉄・鋼・軟鉄）」を生成する。原料鉄は炭素分を調整する精錬により「鉄素材（鉄鋌等）」となり、さらに鍛冶・鋳造を経て、ようやく鉄釘や鉄鏃等の「鉄製品」へと姿を変える。以下では、主に「原料鉄」と「鉄製品」という二つの鉄の形態に、それぞれ軸を据えて検討を行う。

１．原料鉄から見た大宰府官衙

律令国家を支える物資（財源）は、中央集積と現地調達を基本路線に据える。大宰府の場合、西海道全体を所管とし、付札木簡「久須評」等の存在により、評制段階（７世紀後半）には所管国からの物資輸送が確実視できる。また、『日本書紀』では西海道諸国外からの物資供給記事も認められる。とは言え、大宰府官衙の建設時期である７世紀後半は、西海道諸国でも国衙・評衙・古代山城・寺院・官道等の整備が相次ぐ時期（古代の大開発時代）であり、遠方からの物資輸送のみに依存していたとは考え難い。大宰府官衙の建設も、他の官衙と同様に輸送コストが少なく、管理が容易な現地調達に比重が置かれていたと考えられる。

その実態を示す遺跡の一つが、大宰府政庁から南西約1.7㎞に位置する太宰府市・佐野地区遺跡群である（図1）。本遺跡群は水城西門官道（古墳時代以前からの主要交通路）に沿い、二日市地峡帯内でも物資輸送に長けた立地となる。同地は須恵器を生産した牛頸窯跡群の一角をなすとともに、木炭・鉄・鉄器生産（製炭→製鉄→鍛冶・鋳造）も複合的に行われていた。製鉄炉の遺存状態は悪いが、九州北部では珍しい鉄鉱石を始発原料とする点が特筆される。また、この製鉄炉に隣接して竪穴建物13棟が検出されており、建て替え回数から見て、大宰府官衙の整備期（７世紀後半～８世紀前半）を通じて工房が維持されていたことが分かる。この工房群の斜面下にある流路からは、７世紀後半の漆付着土器（パレット利用）や付札木札も出土しており、同工房群が原料鉄の確保（製錬）だけでなく、製品への加工（鍛冶・鋳造・付属具の取り付け等）も担っていたことが分かる。このような異業種の工房を一箇所にまとめた工房（「律令的複合冶金工房」）運営は、同時期の筑後国府先行官衙や鞠智城でも確認でき、大宰府

官衙を含む西海道の主要官営工房を担った。その淵源は日本列島では奈良県・飛鳥池遺跡、朝鮮半島では百済・王宮里遺跡に求められる（図3）。

大宰府官衙の整備完了後、佐野地区遺跡群の工房は解体され、燃料利用・建築部材確保のための樹木伐採による低草木化が進んだ低丘陵地が残された。この低丘陵地は後に官人墓地（宮ノ本遺跡等）として、大宰府の都市設計に組み込まれた。つまり、大宰府官衙建設に伴う樹木伐採は、条坊内外の植生を改変するとともに、都市建設（条坊制施工）の基盤も整えたと評価できる。

次に鉄の主要消費地である大宰府官衙内の工房、具体的には前面官衙跡に着目する。区画整備以前（7世紀第4四半期以前）の前面官衙域では、御笠川に向かう緩斜面と自然流路の存在が確認された。後の整地層等の存在により工房自体は未検出だが、部分的に掘削した自然流路（SX2480）の埋土には、鉄滓・坩堝・取瓶・漆付着土器（パレット・貯蔵容器）が複数含まれる（図2）。また、蔵司丘陵南端の整地層（SX1406）を部分的に掘り下げた場所でも、同様の遺物群が腐植土層や炭層から出土した。その遺物組成は「律令的複合冶金工房」に相応しい内容だが、とくに鉄滓では椀形滓が注目できる。椀形滓は溶解を含む高温操業（精錬）がなされたのを意味し、その数量から見て、十分な精錬を経ないまま運ばれてきた原料鉄（鋤状鉄素材等）も含むと予測される。なお、金属学的分析では、7世紀後半の段階で「廃鉄器の脱炭下げ精錬（再溶解）」・「高温沸し鍛接」による操業が確認でき、精錬・鍛冶工程の双方が実証されている。

以上の遺跡形成状況から見て、大宰府官衙造営期の工房群は政庁等の建設地点に隣接する形で操業されており、遅くとも7世紀第4四半期には原料鉄・廃鉄器や漆等の組織的な物資集積も認められる。

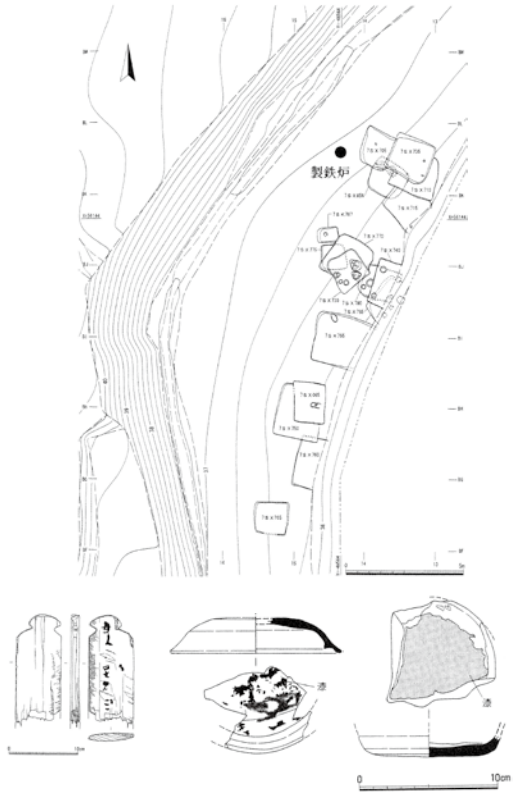


図1　佐野地区遺跡群の冶金工房と廃棄品

図2　大宰府前面官衙跡の工房廃棄品（7c後半）

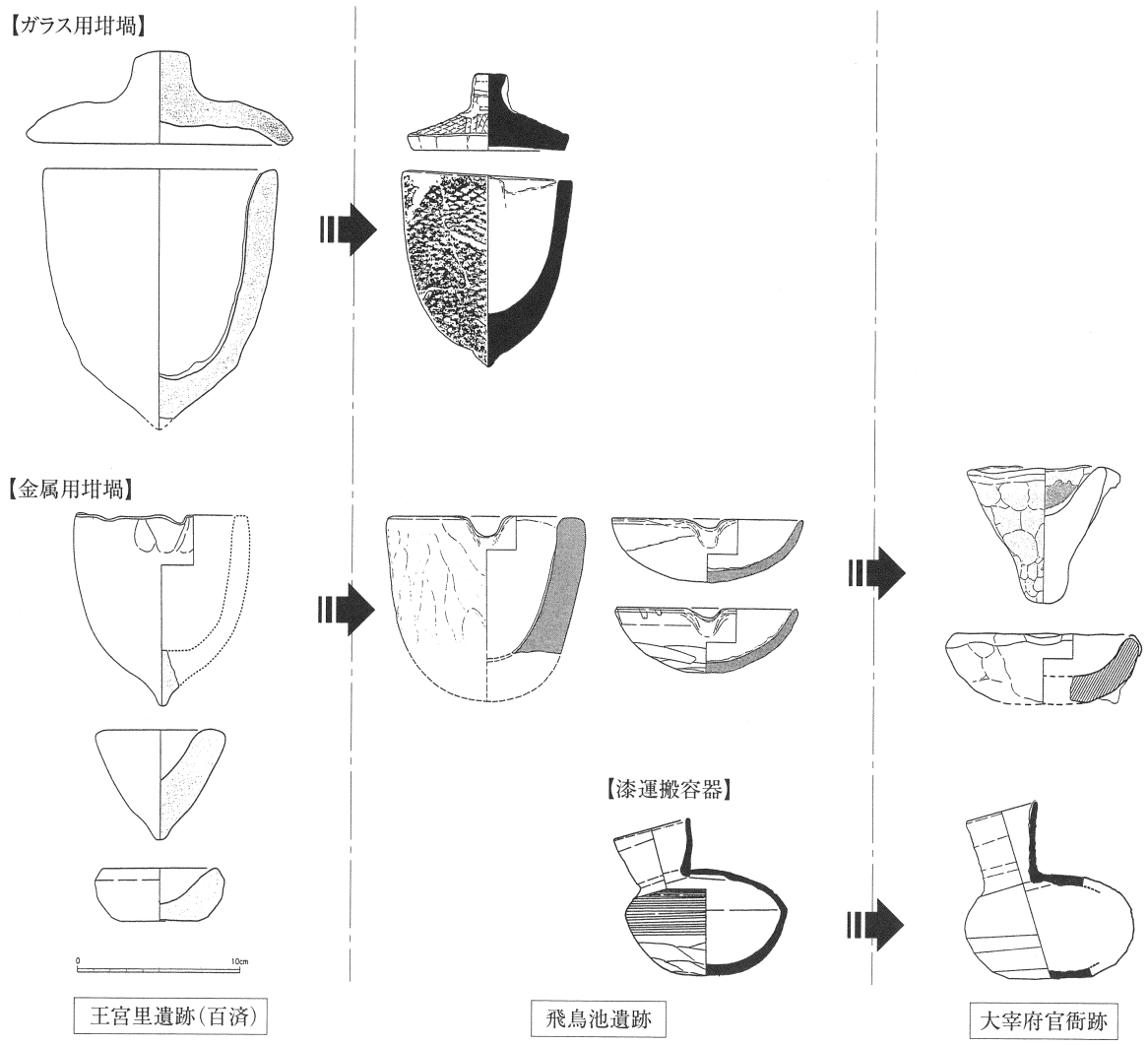


図３　廃棄品の組成から見た律令的複合冶金工房の系譜

２．鉄製品から見た大宰府官衙

日本各地における官衙の発掘調査で、最も多く出土する鉄製品は鉄釘である。日本列島での鉄釘の使用は、遺体を納める棺や装飾品等を収納する木箱にはじまり、官衙や寺院の建設により建築部材へと比重が移った。大宰府官衙の発掘調査でも鉄釘は、鉄製品の主体として存在し、前面官衙跡で確認された冶金工房（区画整備以前）の主要な生産品と考えられる。ところが、蔵司丘陵の発掘調査の開始により、その状況が一変した。鉄製品組成の半数以上を占めていた鉄釘をはるかに凌駕する数量の鉄鏃片、小札片が出土したためである。その全体像はいまだに見えないが、日本各地の官衙遺跡で出土する武器・武具（以下、兵器と呼ぶ）の総量をすでに圧倒し、全国最多の規模となっている。ただし、これらの大半は高熱を受けた「被熱遺物」であり、厳密には製品から変形したものが遺存する点には注意が必要である。

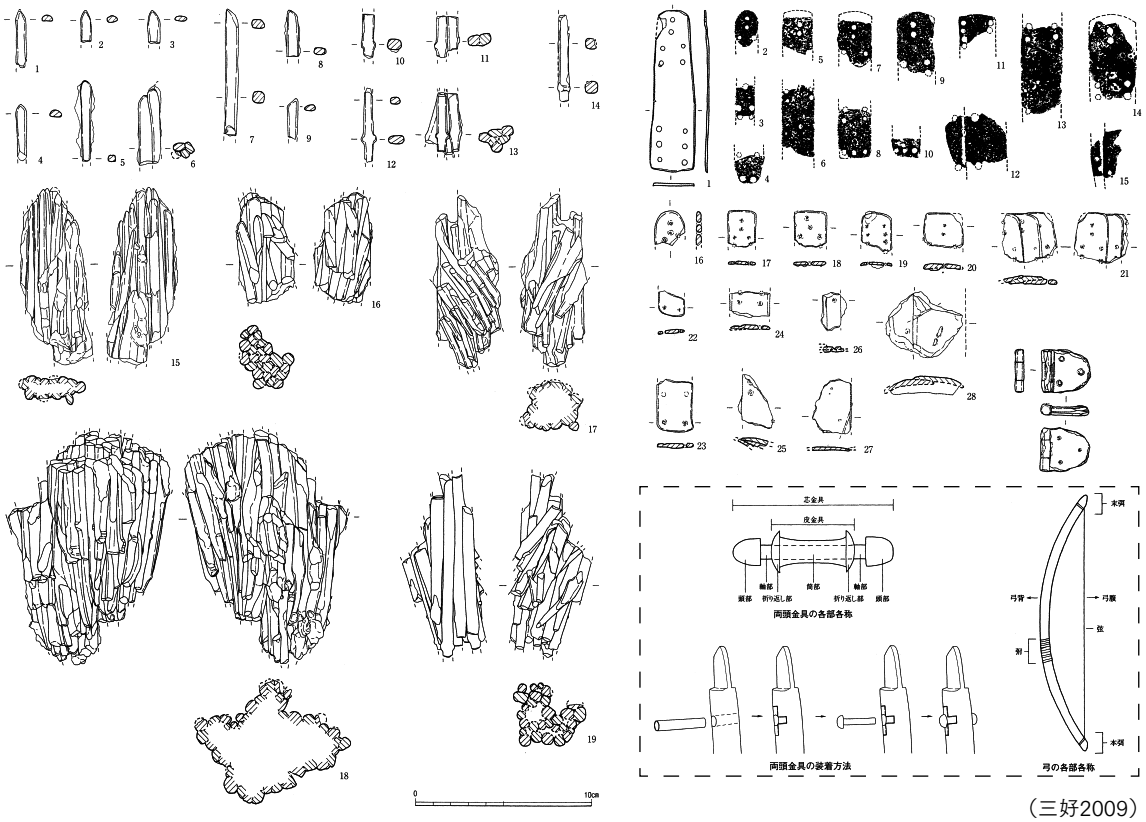
なぜ、大宰府政庁の隣接地でこれほどの兵器が出土するのだろうか。

まず、考古学の基本である資料観察から考える。二次的に高熱を受けた被熱遺物の種類は、兵器である「矢（鉄鏃・矢柄）、弓（弓金具）、甲冑（小札）」、服飾具である「ベルト金具（銙帯金具）」、結合部材である「鉄釘」に大別できる（図4）。このうち、数量が最も多いのは矢の部材である鉄鏃で、他の個体と溶着する資料が目立つ。残りのよい資料では、約90個体もの鉄鏃が軸をほぼ揃えた状態で溶着していた。鉄鏃は単体では意味をなさず、矢羽がついた矢柄に装着して、はじめて道具として機能を発揮す

る。この基本構造をふまえると、矢の先端にある鉄鏃が複数個体で軸を揃えて溶着する現象は、被熱した段階で矢が束ねられていたことに要因が求められる。資料数は少ないが、矢柄も軸を揃えた状態で遺存する点も、その傍証となる。鉄鏃に次いで資料数の多い小札は、小札同士を繋ぐための綴孔が重なった状態で溶着し、甲冑に組み上げられた製品が被熱したと分かる。簡略ながら、以上を要約すれば、兵器は「保管」された形態で被熱したと判断でき、兵庫火災による焼失の可能性が最も高い。

次に歴史的動態から考える。大宰府は多面的な組織であるが、その主要な役割の一つに軍事がある。『日本書紀』に記された筑紫大宰・栗隈王の発言「筑紫國者、元戍邊賊之難也。其峻城深隍臨海守者、豈爲内賊耶。（筑紫国は以前から辺賊の難に備えている。そもそも城を高くし溝を深くし、海に臨んで守るのは、内の賊のためではない。）」は、律令国家形成期における大宰府の軍事機能を端的に示す。日本の律令軍団を戦術面で把握すると、軽装歩兵を主力とし、弓矢と置盾を利用した陣地戦を基本戦術とする。また、戦略面で把握すれば、能力や装備を同一水準に整えた兵士を統一命令系統の部隊に編成し、物量的に優位な状態で戦場に投入するのを基本戦略とする。つまり、戦術面と戦略面の双方で軽装歩兵部隊を効果的に運用するためには、弓矢の確保、とくに消耗品となる矢の量的確保が絶対条件になる。弓矢は「軍防令」において、兵士自備が規定される基本装備だが、東大寺正倉院における弓矢の備蓄と同様に、大宰府管理下の兵庫においても弓矢の備蓄がなされたと想定できる[1)]。

以上を総括すると、大宰府政庁隣接地の蔵司丘陵で兵器が多数出土する理由は、「大宰府による兵器の備蓄（兵庫）」にあると考えられる。備蓄対象の主体である弓矢（鉄鏃・弓金具）の製作時期は７世紀後半が主体で、８世紀以降の製品を少量含む。兵庫自体は未発見だが、製品の特徴から備蓄が開始された時期は７世紀後半と見られ、「筑紫國者、元戍邊賊之難也」（『日本書紀』壬申紀）の記事との整合性は高い。また、同天武十四年（685）の「筑紫大宰、請儲用物、絁一百匹・絲一百斤・布三百端・庸布四百常・鐵一萬斤・箭竹二千連、送下於筑紫。（筑紫大宰が儲用の物として、絁100匹・糸100斤・布



（三好2009）

図４　大宰府史跡出土被熱鉄製品（S＝１/４）

300端・庸布400常・鉄１万斤・箭竹（矢柄の素材）2,000連を請願したので、筑紫に送り下した。）[2)]」記事や、大宰府官衙における「律令的複合冶金工房」の導入時期（７世紀第３四半期以降）とも合致する。

おわりに

二日市地峡帯で鉄生産が盛行した時期は７世紀後半～８世紀第１四半期で、古代山城や大宰府官衙の整備時期（Ⅱ期政庁、筑紫之役）と重複する。また、大宰府官衙における「律令的複合冶金工房」も、７世紀後半に出現契機があり、その後の前面官衙の区画整備を受けて、範囲や規模の変動があったと考えられる。この前面官衙の区画整備は、大宰府機構の整備過程における重要な画期であり、大宰府官衙と官司との整合が遺跡で追えるようになる。逆説的に言えば、区画整備以前における工房群の所管については検証が必要である。

当該期の代表的工房である奈良県・飛鳥池遺跡では、寺院付属の工房というよりも「官司（造飛鳥寺司）」として組織された可能性が指摘されている（吉川2001、堀部2005）（**図４**）。同遺跡では飛鳥寺の建築部材や装飾品等の生産に加えて、兵器（鉄鏃）生産も担っていた。区画整備以前の大宰府工房も官衙建設を担った工房であり、筑紫大宰の要請さえあれば、兵器生産も担ったと考えられる。つまり、区画整備以前の大宰府工房は、規模が大きいだけでなく、その製品も多様性に富んでいたと予測される。また、大宰府政庁の整備は、水城・大野城や条坊区画等の都市整備（７世紀第４四半期～８世紀第１四半期）とも連動する。これらの整備は、既定の官司と言うよりも、筑紫大宰体制下での「造大宰府司」のような新規のプロジェクト組織が担った可能性があり、その中核が大宰府工房であったと考えられる。

註

１）東大寺正倉院に備蓄された兵器は、764年「藤原仲麻呂の乱」に際し、造東大寺司長官・吉備真備の指揮下で実戦投入された実績がある。

２）１斤＝670ｇで換算すると、１万斤は6,700,000ｇ。つまり、6.7ｔもの鉄素材を筑紫に輸送している。この鉄素材に続くのが、矢柄の素材である箭竹2,000連であり、矢の素材と解釈するのが妥当である。「連」であるため複数本をまとめているのは確かだが、その単位は不明。仮に束と同じ20本や、軍防令の兵士自備の矢50本に当てはめると、40,000 ～ 100,000本の箭竹に相当する。いずれにせよ、本輸送は筑紫大宰下での兵器生産の存在を前提としている。

参考文献

小嶋篤「大宰府の兵器と工房」（『大宰府の研究』高志書院、2018年）

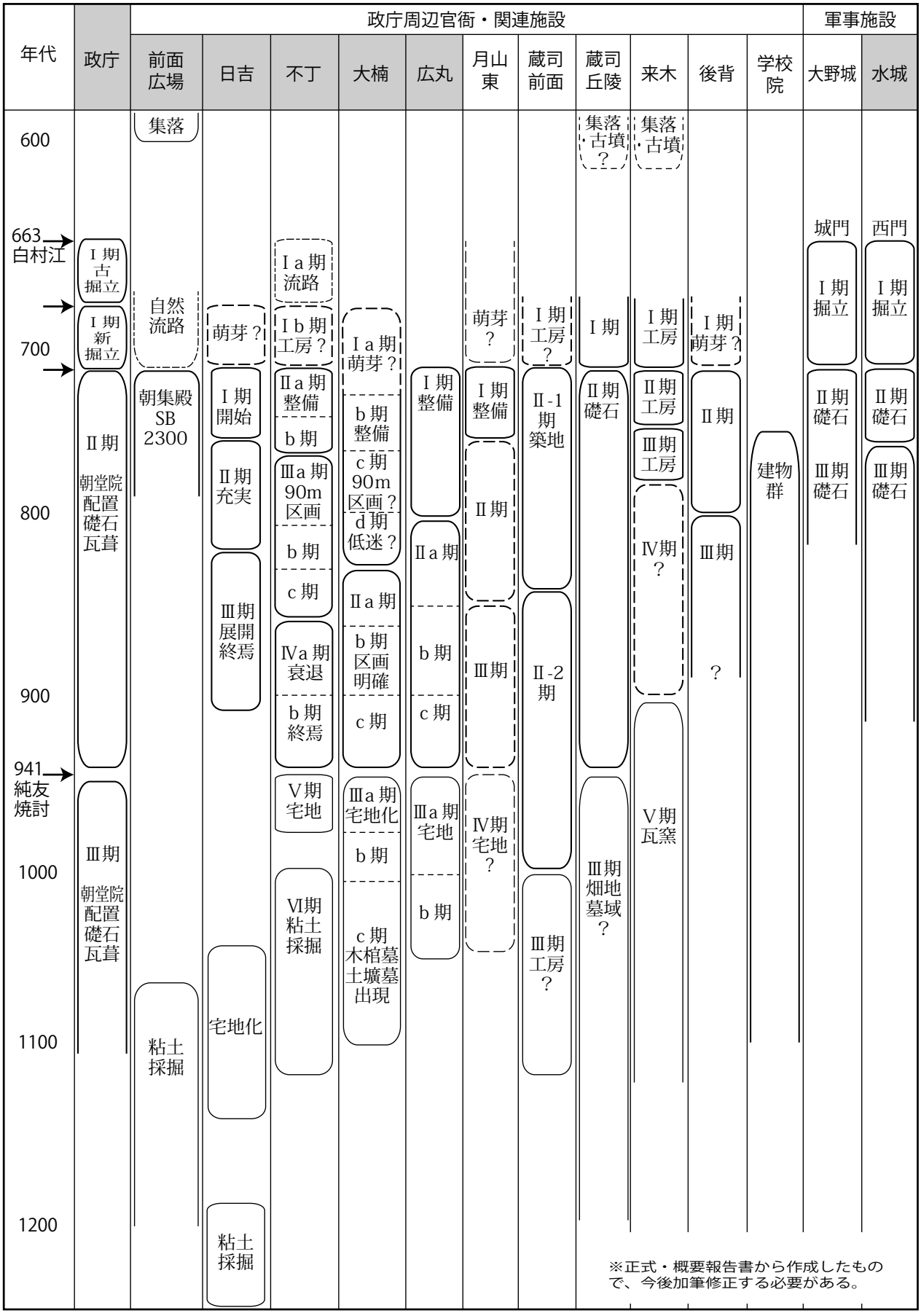
堀部猛「工房の運営－飛鳥池遺跡を中心に－」（『文字と古代日本』３ 吉川弘文館、2005年）

三好栄太郎「両頭金具の構造と奈良県における出土例」（『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程における基礎的研究』熊本大学文学部、2009年）

吉川真司「飛鳥池木簡の再検討」（『木簡研究』23 木簡学会、2001年）

column

大宰府官衙跡等の時期変遷表



（下原　幸裕）

第5部

大宰府の客館と響銅

客館跡の発掘調査

第５部　大宰府の客館と饗銅

第１章　新羅王子がきた時代	小嶋　篤	243
第２章　「西の都」大宰府と外交施設	井上　信正	247
第３章　輸入陶磁器と喫茶文化	井上　信正	259
第４章　大宰府出土の饗銅	井上　信正	263
第５章　饗銅でつながる大宰府と東アジア	川村　佳男	267
第６章　現代の鋳金作家からみた極薄青銅器	赤沼　潔	271

第５部では、大宰府の外交機能を取り上げ、とくに外交使節と饗宴に着目する。第１章～第３章では、平成26年（2014）に「特別史跡 大宰府跡」に追加指定された推定客館跡を基点として、時代背景・都市機能・国際交易を検討する。第４章～第６章では、饗宴でも用いられた饗銅（佐波理・極薄青銅器含む）を基点に、文化交流・製作技術を検討する。

なお、第１章は、平成27年（2015）11月３日に、九州国立博物館・太宰府市教育委員会が合同開催した講演会「新羅王子がみた大宰府」の当日配布資料を再掲載（一部加筆）したものである。

第２・３章は、平成27年（2015）９月22日～11月29日に、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催したトピック展示「新羅王子がみた大宰府」解説図録を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

第４章～第６章は、平成30年（2018）11月23日に九州国立博物館が開催したシンポジウム「饗銅でつながる大宰府と東アジア」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

トピック展示「新羅王子がみた大宰府」
ポスター

シンポジウム「饗銅でつながる大宰府と東アジア」
当日配布資料表紙

第１章

新羅王子がきた時代

小嶋　篤

はじめに

平成27年に開催した九州国立博物館トピック展示「新羅王子がみた大宰府」は、太宰府市で新たに発見された推定客館跡を起点に構成した展覧会である（小嶋2015）。推定客館跡は現在の西鉄二日市駅の北にあり、古代においては大宰府条坊のほぼ中央に位置する。推定客館跡が造営された奈良時代（８世紀）を代表する外国使節団の一つに、天平勝宝四年（752）に来日した新羅使節団がある。本展覧会では、この新羅使節団の代表である新羅王子・金泰廉の足跡をたどることで、「古代日本と新羅の交流」や「古代都市・大宰府」の実像に迫っていった。

なお、推定客館跡は遺跡の重要性が認められ、平成26年10月６日に「特別史跡大宰府跡」に追加指定された。特別史跡は、国が指定する史跡のうち特に価値の高い史跡のみが指定されるものであり、「遺跡の国宝」と評するに相応しい。全国では、三内丸山遺跡や登呂遺跡等の61件が指定されており、福岡県には「大宰府跡」・「大野城跡」・「水城跡」・「王塚古墳」・「基肄城跡（福岡県・佐賀県）」の５つの特別指定史跡がある。

１．白村江の戦い以後の日羅交流

日本と新羅は、661年（百済王子・余豊璋の護送）～ 663年（白村江の戦い）にかけて旧百済領内で戦火を交えたが、668年には互いに使節団を派遣して国交の回復を図った。同668年は、唐と長年の抗争を続けてきた高句麗が滅び、唐による東アジア支配がいよいよ現実味を帯びてきた時期でもあった。日本との国交を回復した新羅は、670年～ 676年にかけて旧百済領と旧高句麗領の支配権を巡って唐との交戦を繰り返した。唐と新羅の軍事的緊張関係は、696年の渤海による唐侵攻まで断続的に継続していく。

このように百済・高句麗滅亡後の東アジア情勢は、唐と新羅の軍事的緊張関係の下で推移していった。７世紀後半における日本と新羅の友好関係の背後にも、唐と新羅の軍事的緊張関係があったとみるべきだろう。日本と新羅の交流がいかに良好であったかは、７世紀後半～８世紀前半における両国の仏教交流からも推し量れる。白稚四年（653）に入唐した大唐学問僧は、持統天皇四年（690）に新羅使に送られて帰国した。そして、日本に法相宗をひろめた新羅僧の智鳳は大宝三年（703）に「日本の学問僧」として入唐を果たしている。とくに、新羅僧の審祥や智鳳の弟子である良弁（東大寺初代別当）がひろめた「華厳宗」は、奈良時代の主流宗派として発展していった。「奈良の大仏」で著名な「国宝・東大寺盧舎那仏坐像」が華厳宗の本尊であることからも分かるように、聖武天皇が進めた鎮護国家は、新羅仏教界との交流の中で育まれてきたのである。

日本と新羅の交流に変化が生じたのは、旧高句麗領北半に建国された渤海の存在が大きい。新羅は渤海に対する唐への軍事的支援を通じて、735年に唐から正式に朝鮮半島（鴨緑江以南）の領有が認められ、朝鮮半島支配を確固たるものとした。そして、天平七年（735）に平城京に入京した新羅使節団による国号「王城国」改称の告知は、日羅外交の転換点となった。新羅を属国とみなす日本と従来の対日外交からの脱却を図る新羅の外交軋轢は、二国間を隔たる深い溝として永く横たわっていく。日本は天平一〇年（738年・147名）・天平一四年（742年・187名）・天平一五（743年・不明）に来日した新羅使

使節団に対して、いずれも入京を認可せず、大宰府にて放還する強硬姿勢をとった。新羅王子・金泰廉は、日羅関係が冷え込んだ天平一五年（743）から９年後の天平勝宝四年（752）に来日したのである。

２．天平勝宝四年の新羅使節団

天平勝宝四年に来日した新羅使節団については、『続日本紀』に複数の記事が確認でき、日本側の関心度の高さを物語る。まずは、新羅使節団に関する記事の要所を絞って、宇治谷孟氏による現代語訳を列挙する（宇治谷1992）。

記事①（天平勝宝四年）三月二二日

大宰府が次のように奏上した。

「新羅の王子で韓阿飡（官位一七等の第五位）である金泰廉、貢調使で大使である金暄、および王子を送る使いの金弼言ら七〇〇余人が、七艘の船に乗ってきて、那の津に泊まりました」と。

記事②三月二八日

使者を大内（天武・持統両天皇陵）・山科（天智天皇陵）・恵我（応神天皇陵か）・直山（奈保山。元明・元正両天皇陵）などの陵に派遣して、新羅の王子が来朝したことを報告させた。

※夏四月九日　東大寺の盧舎那大仏の像が完成して、開眼供養をした。…（後略）

記事③六月一四日

新羅の王子金泰廉らが天皇にお目にかかり調を献上した。そして次のように奏上した。

「新羅の国王から、日本に君臨する天皇の朝廷に言上します。…（中略）…王子の韓阿飡の泰廉を遣わして、王に代る名代とし、使いの者三七〇余人を率いて入朝させ、その上種々の御調を貢進させます…（後略）」

この日、新羅の使者を朝堂で饗応し、天皇は次のように詔した。

「（前略）…前国王の承慶（孝成王）や大夫の思恭らは言行が怠慢で、常に守るべき礼儀を失ってきた。…（中略）…今後、新羅王の軒英（承慶の弟。景徳王）は、以前の過ちを悔いて、みずから来朝したいとこいねがったが、国政を顧みなければならぬので、そのため王子泰廉を遣わして代わりに入朝させ、兼ねて御調を貢進するという。朕はこれを聞き大へん嬉しくよろこばしく、使者に位をおくり物を賜わる。」

また次のようにも詔した。

「これから後は、国王がみずから来朝して、直接ことばで奏上するように。もし代りの人を派遣して入朝するのであれば、必ず上奏文を持参するように」と。

記事④六月二二日

泰廉たちは大安寺と東大寺に赴いて、仏を礼拝した。

記事⑤七月二四日

泰廉らは帰途について、難波の客館に泊まった。天皇は勅して使者を遣わし、絁・麻布・酒や肴を賜った。

以上が、天平勝宝四年に来日した新羅使節団に関する『続日本紀』の記録である。まず、記事①から新羅使節団の規模と構成が分かる。また、三月二二日以前に新羅使節団が那の津に来航（大宰府と接触）していることが分かる。そして、記事③の六月一四日には、金泰廉が天皇（幸謙天皇）に奏上していることから、新羅使節団の入京が六月一四日以前になされたことが確実視できる。三月二二日から六月一四日の約３ヶ月間には那の津から難波津にいたる旅程（瀬戸内海航路）も含まれるが、七〇〇余名の使節団は、約１～２ヵ月間も大宰府に滞在したと考えられる。加えて、記事③の六月一四日の入朝では三七〇余人しか記されておらず、残りの三三〇余人は大宰府に滞在し続けていた可能性もある。つま

り、諸外国の関門となった大宰府は、七〇〇余名の使節団を長期間受け入れる準備（「客館」等の施設建設含む）が事前になされていたと見るべきである。確たる証拠はないが、史上最大規模となった天平勝宝四年の新羅使節団の来日のために、水面下で日本と新羅の交渉が進められていた可能性がある。

記事③に見られる幸謙天皇の詔には、天平勝宝四年以前の日羅関係の冷え込みが反映されるとともに、新羅の対日外交姿勢の軟化に対する日本の歓迎姿勢が読み取れる。とくに、記事②に見られる歴代天皇陵への報告は、日本の歓迎姿勢を示す最たるものであろう。しかし、記事③にも見られる「新羅の従属」に固執する日本は、天平勝宝四年以降も新羅に対してさらなる強硬策を推し進め、天平宝字三年（759）の藤原仲麻呂による「新羅征討計画（兵士約40,000人の派兵計画）」の立案にいたった。

3．東大寺と新羅使節団

天平勝宝四年の新羅使節団の記事に挟まれて、夏四月九日の東大寺盧舎那大仏の開眼供養の記事がある。上述したように、盧舎那仏は華厳宗の本尊であり、新羅との関係が深い。華厳宗は新羅王族の信仰も集めており、新羅王子・金泰廉も強い関心をもっていたと考えられる。実際に、金泰廉は記事④に大安寺と東大寺への参拝が記録されている。大安寺には、日本に華厳宗をひろめた新羅僧・審詳が在寺しており、金泰廉も面会を果たしたとみられる。このように、新羅使節団の来日は仏教交流の側面ももつことがうかがえる（近藤2012）。

また、盧舎那大仏の造立は聖武天皇が推し進めた鎮護国家（仏教による国家守護・安定）を象徴する事業であった。聖武天皇が「盧舎那大仏造立の詔」を発した背景には、治世の中で直面した「長屋王の変（729年）」・「天然痘の流行（藤原四兄弟の病死）（735 ～ 738年）」・「大宰府での藤原広嗣の乱（740）」をはじめとした政情不安・人心の荒廃がある。加えて、735年以降は日羅関係の冷え込みも顕著となり、政情不安に拍車をかけた。このような状況を打破する目的で、鎮護国家が国策に採用されたのである。つまり、盧舎那大仏の造立がなった直後に入京した新羅使節団は、聖武天皇・幸謙天皇が進めた鎮護国家の成功を印象づける存在にもなっただろう。

写真１　トピック展示「新羅王子がみた大宰府」

４．シルクロードと新羅

新羅使節団の入京は、日本の外交戦略に迎合するだけでなく、多くの新羅物や唐物をもたらした点においても、日本の朝廷を歓喜させた。金泰廉一行は、来日時に大規模な交易も行っていたのである。新羅使節団の交易の実態は、正倉院御物の「鳥毛立女屏風」の下貼りに使われていた反故文書「買新羅物解」から判明する。新羅使節団は佐波理（白銅）をはじめとした新羅物だけでなく、唐の工芸品や東南アジア産の香料・薬品を大量にもたらした。これらの品目は、当時唐で取引されていた交易品のほぼすべてを網羅している（石井2003）。新羅は唐との友好関係を回復することで、東アジア交易を通じた経済活動をおおいに展開していた。総勢700余人にもなる新羅使節団には、対日交易を主目的とした商人も多く含まれていたと見るのが自然である。日本は、新羅使節団がもたらした新羅物・唐物を購入する対価として、綿や絁等の絹製品を支払った。対価として支払われた絹の綿は、大宰府との縁が深い品目とても注目できる。筑紫の綿は良質であることが知られており、『万葉集』336番にも「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖かに見ゆ」と詠まれている。

つまり、唐物・新羅物を入手したい日本と良質な繊維原料を入手したい新羅は、国家間の対立とは裏腹に、経済活動においては限りなく利害が一致していた。海を越えたシルクロードは、遣唐使だけでなく、新羅を介しても日本へと繋がっていたのである。

５．新羅国内の様相

上記では、新羅使節団派遣にいたる歴史と日本側の対応を中心に整理した。次に、新羅使節団の派遣を決定した新羅側の事情にも目を向けて見る。

752年の新羅国内では、新羅王・景徳王を筆頭とした王党派（専制主義勢力）と、それに対抗する反王党派（反専制主義勢力）の対立構造が形成されていた（近藤2012）。王党派は貴族勢力の抑圧による王権強化と漢化政策を進め、周辺国に対する中華意識高揚の主体となっていた。これに対し、反王党派は交易（手工業製品（佐波理・毛氈）の輸出等）を通じて財源を貯えていたことが指摘されており、対日外交にも強い関心をもっていたと見られる。要約すれば、反日姿勢の王党派と新日姿勢の反王党派による政治的な駆け引きの一つに、752年の新羅使節団の派遣も存在したと見られる。

また、直接の要因ではないが、渤海の外交戦略も注目できる。渤海王・大欽茂は、親唐政策を進めるとともに、日本に対する遣使を積極的に行った。無論、752年にも渤海使節団の来日が記録されている。日本と渤海に南北を挟まれる新羅にとって、日本と渤海の動向も注視すべき事案の一つであった。

おわりに

トピック展示「新羅王子がみた大宰府」の展示物は、東アジア各国の動向や立場の異なる人々の思惑や祈りが幾重にも連なり、幾多の偶然を経て、九州国立博物館に集結した。それぞれの展示物に秘められた歴史を読み解くとき、古代日本と新羅の交流が実像を結んでいくのである。

参考文献

石井正敏 2003『東アジア世界と古代の日本』日本史リブレット14　山川出版社
宇治谷孟 1992『続日本紀（中）』講談社
小嶋篤 2015「総論　新羅王子がみた大宰府」『新羅王子がみた大宰府』 九州国立博物館
近藤浩一 2012「景徳王代・王子金泰廉の日本派遣と新羅国内政治」『京都産業大学論集』第45号　京都産業大学

第2章

「西の都」大宰府と外交施設

井上　信正

はじめに

平成27年４月、太宰府地域の歴史を語るストーリー「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」が、大宰府跡をはじめとする19件の構成文化財とともに「日本遺産」として国から認定をうけた。日本遺産は国が進める地方創生・観光立国に対応した文化庁の文化財活用事業で、世界に発信し地域活性化を図るため、申請にあたっては、地域の文化財群を総合的に捉えるこれまでにない切り口（ストーリー）が求められたのであった。

この「西の都」という言葉。響きがよく、九州国立博物館ホームページにも「西都大宰府」などと使われている。ただ、大宰府は天皇が住まう都ではなかった。「遠の朝廷」「天下之一都会」とは呼ばれたが、ここを「都」だったとする記録はない。このため違和感を覚える方も多いかもしれない。

たしかに大宰府は本当の意味での「都」ではなかった。しかし大宰府の調査研究が進むにつれ、その姿は古代宮都とよく似ており、しかも宮都造営の動向が大宰府造営にも如実に反映されていることがわかってきている。

このことを後押しする、画竜点睛となる一大発見があった。大宰府条坊内の「推定客館跡」である（以下、客館跡）。この発見は大宰府の都市構造が古代宮都と基本的に同じであることを追認するものである。天皇不在ではあるが、正式な外交を行う大宰府には舞台装置としての「都」が必要とされたのだろう。こうした見解をもとに、大宰府を「西の都」として日本遺産に申請したのであった。

「西の都」の姿がどのようなものであり、いかに東アジアを向いたものであったか。ここでは大宰府の都市整備と歴史経緯をふまえ、客館の構造や機能、そして大宰府饗宴の場についても、類例をもとに推測してみたい。

１．「西の都」の成立

大宰府の初現については諸説あるが、その名が『日本書紀』に現れるのは推古朝からで、百済僧来泊という対外機能に関わって登場する。当時は筑紫大宰とよばれ、のちに律令制下の大宰府に引き継がれた。大宰府は西海道九国三嶋の管轄と外交・軍事といった対外機能を担う特別な官司で、朝廷さながらの組織と機能を備えていた。その長官である「帥」は、天智朝以降は皇族（王）や重臣の赴任が相次ぎ、これをある意味継承するように、大宝以降は従三位・中納言クラスを前後する公卿（高位者）が赴任した。遷都にともなう旧都の留守官に同様の高位者任命例がみられるが、「遠の朝廷」（『万葉集』巻３-304）と呼ばれるように、天皇不在ながらも大宰府は朝廷そのものであった、という見方もできよう。

これと関連して、大宰府には他の一般官司にない大きな特徴がある。それは官司整備とともに、早くから本格的に都市整備が推し進められたことである。しかもそれは、日本の古代宮都の動向・造営契機と連動したことが垣間見える。

白村江敗戦（663年）を契機に太宰府地域には、水城・大野城・基肄城で構成される百済系都城を模した要塞ができた。筆者は、このころの遺跡が平野部にはみられないことを踏まえ、百済系都城の系譜、築城が敗戦後の有事である点、百済系瓦の出土等から、天智朝の筑紫大宰は大野城内に拠点をおいたと推測する。その後、天武・持統朝（673年以降）になると各国との外交も増え、有事から平時へと時代

が推移することで、拠点が麓や平野部に移ったとみている。大野城南麓の都府楼地区一帯には官衙が広がり、「久須評」（豊後国玖珠郡。当時は郡を「評」と表記）の付札木簡など出土している。南西麓の国分地区では、庚寅年籍（690年）に基づくとみられる戸籍計帳に関する木簡などが出土し（国分松本遺跡）、筑前国府等の存在がうかがえる、南東麓の三条地区でも７世紀の軒先瓦が複数採集されている（九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房 昭和56年、他）。おそらく大野城の登城路沿いに筑紫大宰や筑前国の官衙が築かれていったのだろう。

同じころ、平野部には古代都市・大宰府条坊が造営された。造営時の整地や条坊道路の側溝など見つかっており、飛鳥の都で使われた暗文土師器も散見される（飛鳥Ⅳ期）。このころ飛鳥では「新城」とも呼ばれた藤原京造営が進められていたが、筑紫でも、朝廷が派遣した使者に「新城を監（み）」させている（『日本書紀』持統天皇３年（689）９月庚辰朔乙丑条）。用語の一致と遺構の広がりから、「筑紫新城」は大宰府条坊を指し、造営のきっかけは６年前の天武天皇の「複都制の詔」に端を発するとみている（『日本書紀』天武天皇12年（683）12月庚午条）。この持統天皇３年には、飛鳥浄御原令が発布され（６月）、筑紫では皇親の河内王が筑紫大宰の長官（帥）に赴任し（閏８月）、すぐに「監新城」が行われた（９月）。その後の人事を経て、飛鳥浄御原令制下の筑紫大宰府がスタートする。この流れをみると「監新城」とは都市の竣工に伴う監査だろう。このときの政庁はもしかすると藤原宮のように条坊中心部にあったかもしれない。この「筑紫新城」造営には、河内王前任の筑紫大宰帥・粟田真人が関わったとみられる（いわゆるⅠ期大宰府）。

粟田真人はその後、遣唐執節使に任命され、大宝２－４年（702－704）に渡唐する。唐の聖暦３年（700）３月６日勅（『唐会要』巻100）で日本が絶域とされた直後のタイミングで派遣され、かつ白村江敗戦後以来の画期的な遣唐使であるが、彼らが持ち帰った情報によって律令制の改革が行われ、また北の中心に宮殿をおく「北闕型都城」への転換を図り平城京遷都が実行されたとの評価がある。粟田真人は中納言として改革にたずさわり、和銅元年（708）平城遷都詔が出た直後、中納言兼任のまま再び大宰帥に赴任する。706年から、平城京造営の「百姓身役」とともに大宰府再整備の「筑紫の役」が始まっていたが（『類聚三代格』慶雲３年（706）２月16日格）、粟田真人の再赴任によって事業が本格化した。観世音寺造営督促の詔（『続日本紀』和銅２年（709）２月戊子条）や、御笠郡大領の「益城連」賜姓（同年６月乙巳条）は、それを裏付けるものだろう。霊亀元年（715）５月、次の大宰帥に平城遷都詔直後から造平城京司長官として活躍した多治比池守が任命された。こののち大宰府整備が完了したとみられ、彼は養老元年（717）２月に善政を褒賞され、また翌２年（718）は「筑紫の役」の終了に

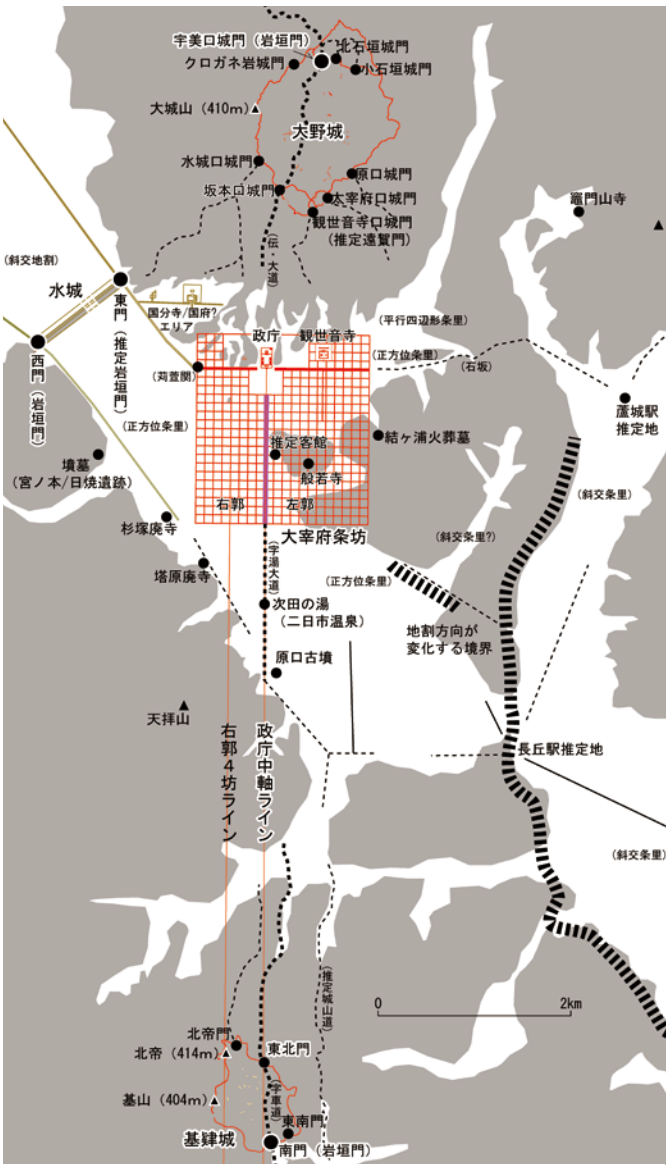


図１　大宰府都城図

伴い西海道の庸の全免が諸国並みに解消されている。こうして完成した古代都市・大宰府は、平城京に似た姿だったことが明らかとなっている（いわゆるⅡ期大宰府）。

このように、平城京と大宰府は、粟田真人や多治比池守らの指揮により、唐長安城に代表される東アジア都城制に基づく都市として誕生した。そうした中、二度も長官（帥）として大宰府造営に関わった粟田真人の動向は、遺跡だけではわからない時代背景、街や施設の設計理念や変遷をうかがう上で参考となる。

2.「西の都」の姿

8世紀の大宰府は、天智朝築造の水城・大野城・基肄城を外郭（外城）とし、天武持統朝の条坊区画を利用して、「北闕型」に姿を変えたものだった。条坊と大宰府政庁・朱雀大路・観世音寺など主要施設とは配置上のズレが認められるが、これは天武持統朝の条坊が北闕型を前提としていないため、あらためて基準線や配置が設定されたものとみている。

大宰府政庁は条坊の北辺におかれ、建物は宮殿に類して配置された（朝堂院形式）。正殿は瓦葺礎石建ちの四面庇建物で、前には宮都大極殿前の龍尾壇に類する石敷きの高まりも備えている。その南は庭となり、東西両脇に2棟づつ瓦葺礎石建ち二面庇の脇殿を設けている。これらを回廊が囲み、南中央には門（中門）を設けた。回廊の北側は築地塀で囲って正殿の背後に後殿を設け、回廊の南側も築地塀で囲い南中央に楼門（南門）が設けた。南門の前は比較的大きな段差となり、その南は空間（広場）となっている。広場の中央西脇には4×10間の掘立柱四面庇南北棟があり、これを朝集殿とみる意見もあるが定かではない。この広場の東西には、大宰府の実務を行う官衙域が広がっている。

政庁の東は漏刻台が置かれたとの伝承がある月山（辰山）があり、周辺にも官衙と目される建物が点

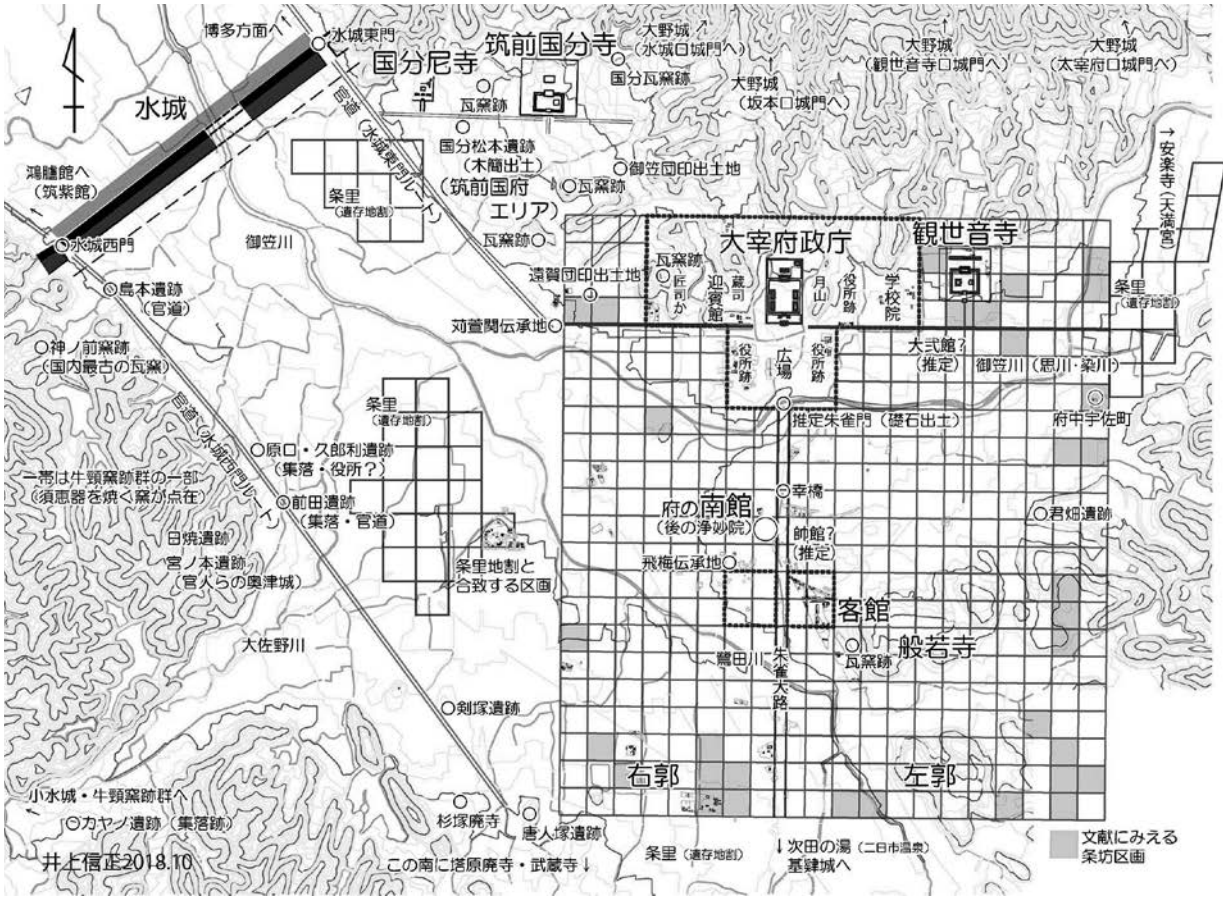


図2　大宰府条坊図

在する。さらに東は府学校（大宰府学校院）が設けられ、府の大寺・観世音寺と境を接している。政庁の西は蔵司と呼ばれ、丘陵上には政庁正殿より大きな巨大礎石建物跡の存在が知られている。近年の調査で、これは蔵跡ではなく南北二面に庇をもつ正殿的な建物跡と判明した。この周囲から大量の鉄鏃・武具など採集されているが、建物や地下遺構との関係を示すものはなくその性格については謎が多い。この西側は金属工房跡・瓦窯跡が点在しており、匠司と推定されている。なお、政庁南門前広場の南の御笠川底から巨大な礎石が発見され、平城京朱雀門に相当する門があったと推定される（以下、朱雀門）。朱雀門より北が政庁・官衙域となるのは、宮都と同じ構造である。

このエリアを北に配すように、周辺にはグリッドプランの条坊都市が広がっている。条坊一区画は、史料では「坪」と呼ばれ、設計線に基づいて90m四方（250大尺・300小尺）となるよう区画された。その範囲は、考古資料と文献史料の一致から、南北22条、東側（左郭）12坊、西側（右郭）８坊と復元される（東西約1800m、南北約1980m）。条坊道路は幅５～８ｍほどある。「坪」を囲う築地塀の有無は不明だが、中は建物・井戸・土坑・小穴・整地が密度高く広がり、土器・瓦・金属製品・木製品等とともに出土する多種多量の国内外の陶磁器が、対外関係を司った大宰府の特徴を物語っている。

朱雀大路（郭心南北大路）は、朱雀門前から南に延びている。これは政庁に至る正式な道であり、平城京朱雀大路の１/２幅という、当時国内２位の広さをほこる大道だった。朱雀大路沿いには、大宰権帥として左降した菅原道真（845–903）が住んだ「府の南館」（現、榎社）や、大宰大弐・藤原高遠（949–1013）が和歌を詠んだ「幸橋」伝承地があり、後述する客館跡も並ぶ。大宰権帥・大宰大弐ら現地官長が着用した白玉帯（平安時代頃）の出土も集中している。朱雀大路南端の羅城門は未発見だが、おそらく宮都同様に設置されただろう。道はここからさらに南へ延び、万葉歌人として知られる大宰帥・大伴旅人（665–731）の和歌を伝える二日市温泉（次田の湯）に至る（『万葉集』巻６–961）。さらに南へ向かって登山道から基肄城東北門に至り、城内を南門（水門）へと進んでいる。これに沿って、「湯大道」（筑紫野市湯町）「車道」（基肄城内）という小字も残っている。都市中軸に沿った南北道は、平城京、また長安・洛陽といった中国の都城にもみられることから、これも粟田真人がもたらした中国系都城の一要素とみてよいだろう。

大宰府に至る官道も整備された。外国使節は、博多湾岸に設けられた筑紫館（鴻臚館）から水城西門－条坊南西端－羅城門と経由し朱雀大路に入った（水城西門ルート）。また都から赴任する官人は「大宰府道」と呼ばれた山陽道を通り水城に至るが、水城では境迎儀式が行われ（『大弐高遠集』『小右記』）、水城東門－苅萱関－政庁南門前の条坊路（四条路）と進んだとみられる（水城東門ルート）。都からは田河道（豊前方面）から米ノ山峠を越え、蘆城駅（『万葉集』巻４–568、８–1530、筑紫野市阿志岐）を経由して東から入る道もあった。筑後および肥前方面から大宰府に入る道は、基肄城付近を通っていた。基肄城内を通過する道（前述の東北門道や北帝門道）や基肄城東側の峠道があり、筑後守葛井連大成が和歌に詠んだ「城山道」（『万葉集』巻４－－576）との関連が指摘されている。豊後方面（南東）からの道もあり、長丘駅（『延喜式』、筑紫野市永岡が推定地）を経由し大宰府に入った。

これらの道を通じて大宰府には多くの人・物が集まった。都のように市が設けられたことも推定されており、鷺田川の南には「市ノ上」などの小字も残る。これが「人物殷繁、天下之一都会」大宰府の姿である（『続日本紀』神護景雲３年（769）10月甲辰条）。

３.「西の都」の機能

以上、７～８世紀の激動のなかで誕生した都市大宰府を概観したが、その姿は「都城的」であり、藤原京・平城京といった宮都造営とも密接にかかわっていたことがうかがえる。ではなぜ大宰府に、都城機能を備える必要があったのだろうか。

その理由について白村江敗戦（663年）を契機とする有事（防衛）要因から論ずるものもあるが、天

武持統朝以降の整備は、要塞というより都城的であることが明らかとなった今、有事対応ではなく、むしろ平時の大宰府の役割をもとに構想されたと考えたい。

当時の都城には、礼制機能がそなわっていた。つまり、都城は生活の場であるとともに儀礼的な場でもあった。それは、北を上位として主従主客を示す方位や中軸線を重視するもので、互いにそのことを認知した上で、配列し挙動した。中国ではじまったこうした礼制は東アジアで通有するものとなり、内政・外交で機能し、都城・官衙はその舞台として整備された。このため７～８世紀の各国の宮都は、これに則った中国系都城（隋唐長安城）を国際標準モデルとしたとみられる。これを日本では平城京・大宰府が採用した。内政面は地方では国府が担ったことを踏まえると、大宰府の場合、内政的要因よりも外交舞台を備えるという意味合いの方が強いだろう。そうとみると、日本という国が大宰府という場所で外交を行うため、その舞台として礼制機能を備えた「都城」を設けた、と考えられる。このことを強く印象づけたのが、朱雀大路沿いに置かれた客館跡の発見である。

４．推定客館跡の概要

西鉄二日市駅北側の操車場跡地一帯では、１万数千㎡にわたって埋蔵文化財発掘調査が行われ、数面にわたって建物・井戸・畑・区画溝などが展開しており、また多くの遺物が出土した。条坊区画も明確に検出され、道路の改廃や土地利用変遷の情報についての知見が増えるとともに、条坊成立期（Ⅰ期。７世紀末）の道路や区画溝も確認されている。

ここに展開する８世紀第２四半期から９世紀前半にかけての遺構が客館跡である。朱雀大路の東に隣接する左郭14・15条１・２坊の４坪を占有したとみられ（南北約170m、東西約150m）、西は朱雀大路、東は古代寺院・般若寺から延びる丘陵で区切られている。南の道路際には塀が設けられたことを示す痕跡があり、おそらく四周は遮蔽されていたのだろう。敷地南半東側（左郭15条２坊）には大型の掘立柱南北棟２棟が南北に並んで見つかった。北棟は身舎16×３間で西側に２間庇がつく（29.5×8.8m、約260㎡）、南棟は身舎が11×３間で同じく西側に２間庇がつく（23.6×8.6m、約200㎡）。この２棟は条坊内最大の建物で、政庁脇殿に類する配置・規模を有した公的施設である。この西側は広い庭となっているが、さらに西側の朱雀大路との間に建物が存在した可能性もある（未調査）。大型建物群の東側には３×５間掘立柱東西棟２棟・倉庫等が配されている。性格は不明だが、客館管理の施設と推測している。

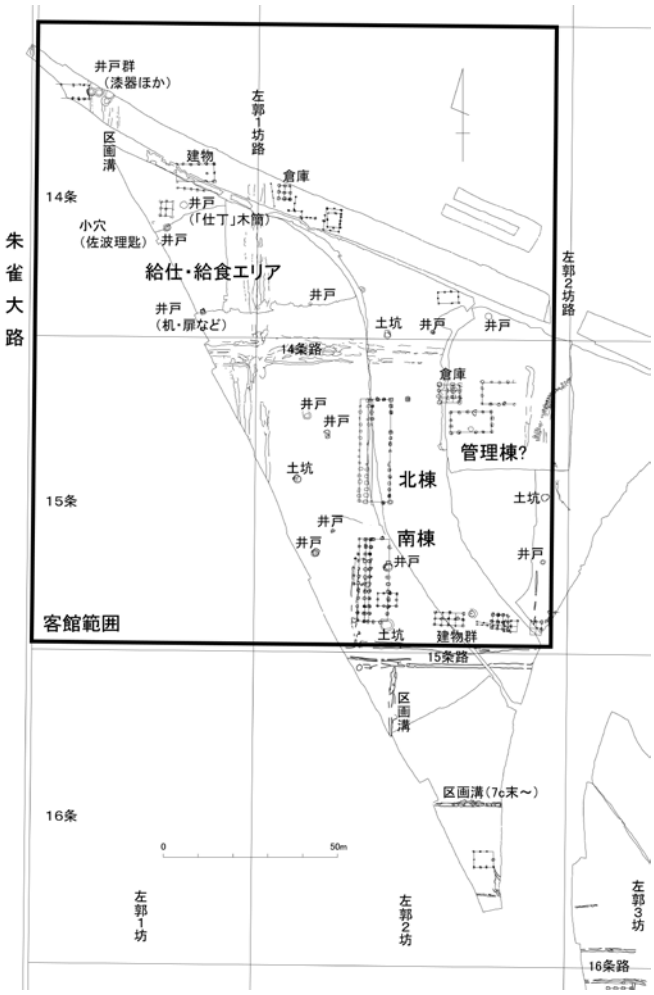


図３　推定客館跡主要配置図

この一帯から、唐の陶磁器、新羅の佐波理・新羅土器、日本の奈良三彩、漆器などの国際色豊かな高級食器・容器が出土した。これらと条坊内の位置とが客館推定のきっかけとなったが、敷地北半（左郭

14条）にこうした特殊品が集中する。奈良時代の井戸は条坊内でも事例が少ないが、数基まとまっており、給食・給仕に関係するエリアとみられる。「仕丁」と記した木簡やその出役日数を記した歴名木簡なども、ここから出土している。

5．このころの客館事例

客館は、外国使節に宿泊・食事を提供した施設である。博多湾岸の鴻臚館跡が有名だが、畿内にも古くから難波津（大阪湾岸）に客館が置かれ、瀬戸内海を渡ってきた外国使節を安置した。難波館は奈良・平安時代にも引き継がれるが、このころ宮都の朱雀大路沿いに客館・鴻臚館が設けられたことが知られている。平安京鴻臚館は朱雀大路沿いの左右京七条に設けられた。平城京客館（『続日本紀』天平４年（732）10月癸酉条）は詳らかではないが、朱雀大路沿いに置かれた可能性が指摘されている（岸俊男1988）。

京の中央南北道沿いの客館は、唐長安城の鴻臚客館（皇城内、朱雀門と含光門の間）や、古くは北魏洛陽城の四夷館（朱雀大路の延長両脇と推定）などの例もある。北に坐す皇帝に至る南北道に客館を置くという形式は、礼制機能に基づくとみてよいだろう。つまり京内客館は中国系都城の一要素といえ、大宰府の客館もこの例に当てはまる。

ここで一つ、大宰府と比較されることもある陸奥国府・多賀城によく似た遺跡がある。多賀城城下の中央南北大路沿いの東西に大型南北棟が２列づつ並ぶエリアがあり、その東側東端には11×２間（33×６ｍ）という城下最大の建物が南北２棟並んで見つかった（市川橋遺跡）。出土品に特筆すべきものがなく、倉庫・市・馬関連施設など推測されていたが、この遺跡は、都市内の位置、見つかった建物の大きさや配置のあり方が大宰府例と共通している。このことを踏まえ蝦夷饗応の客館説を呈示したところ（井上信正2010）、これを支持する意見も出ている（鈴木琢郎2013、鈴木拓也2015）。

図４　多賀城・市川橋遺跡（報告書より引用）

6．客館の機能と構成

こうした事例を踏まえ比較検討することで、遺跡の理解をもう一歩進めてみたい。客館の構造や使用のあり方を記す日本の史料・資料はなく、発掘調査が行われた博多湾岸の鴻臚館跡でさえこの時期（Ⅱ期）の建物はほとんどわかっていない。ただ、当時の日本が国際標準であった唐の賓礼（賓客をもてなす礼式）を導入し、その舞台として中国系都城を取り入れたのであれば、客館構造もそれに基づくことが想定される。

日本の京内客館が手本としたと考えられるのが唐長安城の鴻臚客館である。発掘調査は行われていないが、唐の賓礼を詳細に分析した石見清裕氏は、客館での儀礼復元にあわせてその内部構造の一端を示された（石見清裕1998。以下、唐の賓礼復元はこれによる）。それによると、鴻臚客館の正門は北門であり、客館内には階段で上がる建物があったようだ。面白いことに、館の主人は鴻臚客館に入った外国使節（蕃主・蕃使）であり、皇帝の使でさえ客人であったという。それを示すのが、ここで行われた唯一の儀礼、「皇帝が使を送り蕃主（蕃使）と対面する日を伝える儀礼」である（『大唐開元礼』「皇帝遣使戒蕃主見日」）。

鴻臚客館の北門から入った皇帝の使は階段を上って建物に入り、西側に立って、東の外国使節と東西で対面した。唐では、東西南北の方位は儀礼と深く関わっており、相手と対峙する方位とそこでの所作（礼のあり方）が問題とされた。外交の場ではこれは国際的な立場・面目につながる大事となるが、その舞台の一つである鴻臚客館では、主従関係で南北に向き合うのではなく、東を主人、西を客人とする主客関係で対面が果たされたのだ。それが客館に必要とされた礼制機能であれば、この東西対面は、客館施設の空間構成を考える上で重要な要素となる。

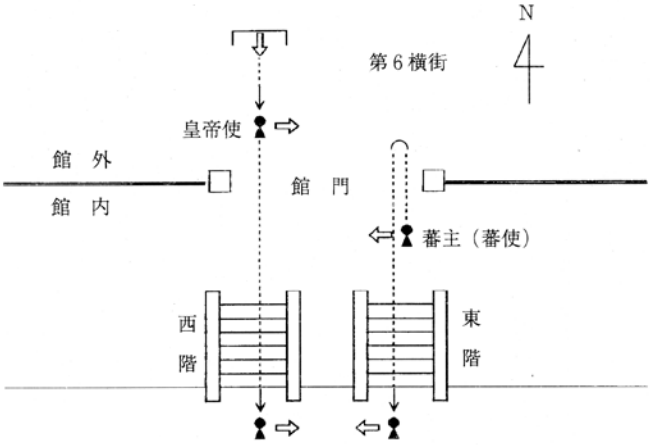


図５　唐鴻臚客館「皇帝遣使戒蕃主見日」儀式概念図
（石見清裕1998より）

石見氏は、両使が建物に入る際の「東階」「西階」を一つの建物（おそらく東西棟）に設けられた二つの南北方向に向く階段とみて、この中で主客が対面する想定図を示された（図5）。ただ、これを東西に向きあう２棟の建物があるとみて、それぞれの階段を上って対面したという解釈も可能だろう。互いの距離の問題はあるが、ここが礼的空間であればこそ、施設配置もそれに基づいたのではなかろうか。

この想定は、見つかった客館跡の建物配置をよく説明できる。

検出された２棟の大型南北棟は、敷地の東側に並んでいる。また西側は朱雀大路まで十分空間があり、そこに多賀城例のように南北棟が並んでいる可能性はあろう。儀礼で建物を使用したかどうかはわからないが、中央の空間を利用して対面儀礼を行うことも十分可能である。

なお、大宰府例・多賀城例いずれもこれら南北棟に見合う大型東西棟をもたない。官衙や邸宅では、一般に主殿・正殿としての東西棟（通常、北に配置）が設けられるが、それが無いということは、ここが上下主従関係を確認する場、つまり正式な外交儀礼の場ではなかったことを示している。

このようにみると、検出された南北棟群は東側にあるため、客館の主人たる外国使節が入る主殿と想定される。二間庇と荘厳されているのもその故だろう。８世紀末になると、このうち南棟が先に廃される。廃された理由は不明だが、北棟が残ったということから北の優位性を読み取ることもできよう。唐の鴻臚客館の賓礼でも北を上としていることを踏まえると、使節の長となる人物は北棟に入ったと想定される。

次に門を考えてみよう。本史跡では推定される門の位置に調査が及んでおらず未確認ではあるが、宮都がそうであるように門が朱雀大路（西側）に開いていたとは考え難い。東側も丘陵であり、南北棟という建物配置からも、東西には門はなかったと想定するのが自然だろう。加えて、鴻臚館跡（福岡市）では東門のみが確認されているように、隔離施設でもある客館に門は複数必要ない。少なくとも正門は南北いずれかと想定されるが、唐の鴻臚客館例から北門を正門と仮定すると、敷地の奥側となる南半に中枢建物があり、門に

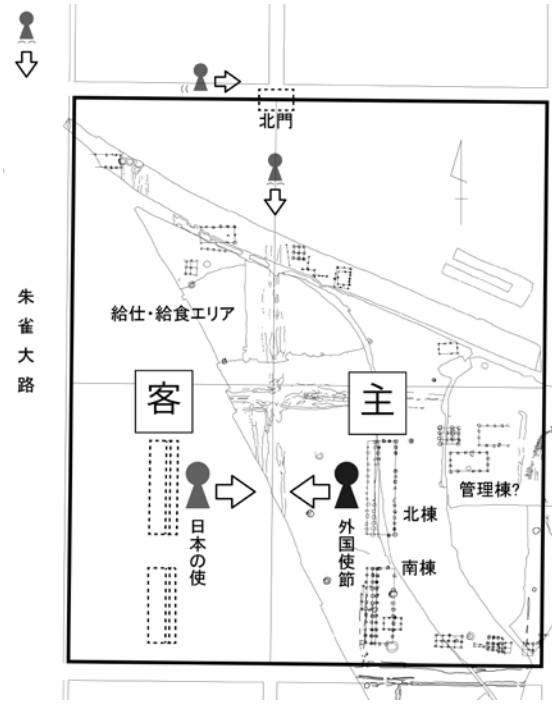


図６　客館跡の建物配置推定

近い北半が給仕施設に利用されている状況は説明しやすい。また、中国では皇帝の所有物は北に置くという考え方があるそうで（石見氏のご教示による）、大宰府であっても提供するものは天皇が供給するものとみなされるならば、北の給仕施設も一理あるといえる。

北に正門や給仕機能を持たせることなど通常の官衙施設では考えにくいが、北闕型都城の礼制機能を考えると、宮殿・政庁から出向くための門は北門でなくてはならず、南門からの出入りは外交問題にもなりかねない。となると、それに合わせた客館内の建物配置がとられることに蓋然性を感じる。

このようにこの施設の特徴を、巨大で荘厳な南北棟を備えること、一般的に設けられる主殿的な東西棟を持たないこと、中枢が敷地南にあること、とみたが、それは唐の鴻臚客館構造復元と親和性が認められた。推測も多いが、国際標準だった京内客館の構造がここに採用されたと想定する。

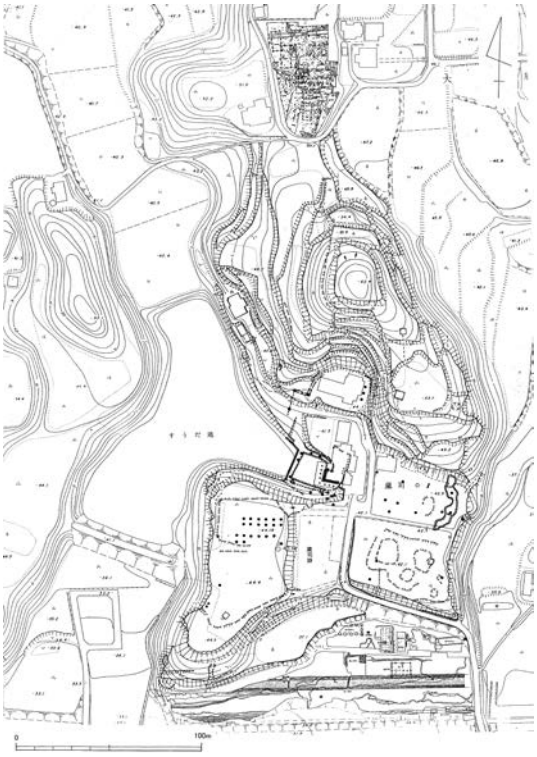


図７　蔵司丘陵　地形図

７．外交儀礼と饗讌の場

さて、高級な出土品の数々は、客館でのもてなしを推測させる十分な証拠となっているが、正殿的な東西棟がないことから、ここは正式な外交儀礼・饗宴を行う場ではなかった。その場はやはり大宰府政庁一帯であろう。

大宰府政庁は客館跡の約１㎞北にある。客館を出た外国使節は、幅広い朱雀大路をおそらく隊列を組んで北進し、朱雀門－政庁南門－政庁中門と進み、政庁正殿前の庭で外交儀礼に臨んだと想定される。仮に唐の皇帝謁見儀式が参考にできるなら（石見清裕1998）、外国使節は正殿に対して南西側におり、東面あるいは北面し、儀式に臨んだと想定されよう。

使節が入京しない場合でも、大宰府で饗応し帰国させた記録は複数ある。また「大宰府に召す」とあることから、大宰府が直接やりとりすることもあったとみられる。さらには、外国使節が持参した国書を開封するようにもなる大宰府だが、基本的には、外交の主たる部分は朝廷（国家）が使者を派遣し執り行ったとみるべきだろう。大宰府官司が担ったのは、外交の一場面となる「饗讌」（饗宴）であった（養老職員令）。

この饗宴は、宮都では宮内で行われている。ただ、儀式と饗宴とでは場所を変えており、平城宮では大極殿閤門や南苑で、平安宮では朝堂院の西側の豊楽院で行われた。唐長安城でも、大宝の遣唐使・粟田真人が大明宮で受けた饗宴は、宮域西側の麟徳殿で行われたことが知られており（『旧唐書』巻199東夷伝）、外交儀礼の場ではなかった。こうしたことから、大宰府での饗宴の場も政庁とは異なる場所だったことが推測される。

図８　蔵司丘陵　大型建物周辺地形図

ここで注目するのは、大型礎石建物が見つかっている政庁西側の蔵司丘陵である。この丘陵西端にある大型礎石建物跡が蔵ではないことは建築史の研究者からすでに指摘があっていたが（澤村仁1998年）、調査を行っている九州歴史資料館は2014年秋、身舎９×２間、南北に各１間の庇をもつ官舎建物と公表した（東西９間、南北４間）。これで蔵説は否定されたが、政庁正殿（東西７間、南北４間）と比べると、南北（梁行）はほぼ一致し、東西（桁行）は２間上回る壮大な官舎ということが明らかとなった。見晴らしのきく丘陵上という立地からも、大宰府にとってかなり特別な施設だったにちがいない。

筆者はこれが、大宰府の饗宴施設ではないかと考える（井上信正2010）。ここで唐での饗宴儀礼「皇帝宴蕃国使」と饗宴施設の事例を参考に検討してみたい。

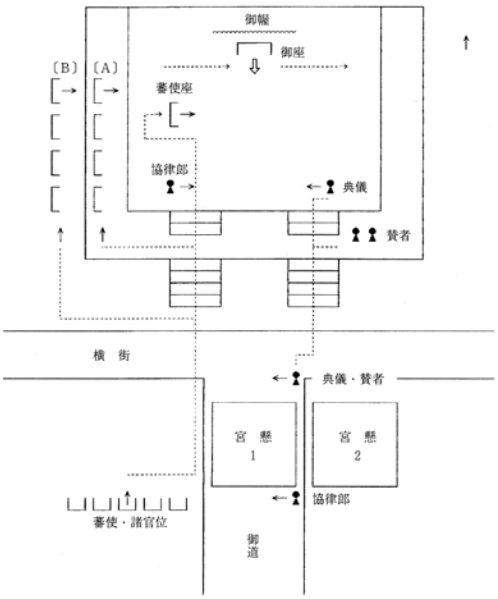
石見氏の研究によれば、皇帝が饗宴の場となる殿舎に出御し、北坐し南面すると、蕃国使（外国使節）は、建物の階段下（南）から昇殿して西に坐し東面した。使節の配下は昇殿せず、その後ろ（西側）で東面した。

このことを唐長安城大明宮の饗宴施設に当てはめてみよう。

麟徳殿は大明宮内の西端にある。皇帝が私的に利用する殿舎であり、粟田真人が皇帝・武則天の饗をうけたことが知られるように饗宴施設でもあった（『旧唐書』巻199東夷伝）。ここは発掘調査が行われ、前殿・中殿・後殿の三殿からなる巨大な建築物だったことが知られている（図10）。そこで饗宴儀礼の復元を麟徳殿に当てはめてみると、西側に空間を有する前殿を皇帝が出御し外国使節が昇殿した建物とみることができよう。前殿は、東西９間、南北４間の主空間をもつ東西棟であり、大きさなど違いはあるものの、蔵司大型建物と同じ柱間である。また遺構図や復元図をみると、麟徳殿前殿の周囲を巡る空間はさほど広くなく、回廊のほか目立った建造物もみられない。つまり饗宴の場が主殿たる東西棟と多少の庭で構成されたのであれば、蔵司丘陵の大型建物とその周囲の空間で十分機能する。蔵司の大型建物前面空間の西南隅では、溝２条が平行しL字に曲がることが確認されているが、これは空間を画する回廊遺構の可能性もあろう。現在も調査が進められているが、こうした観点からの検討を期待したい。

８．筑紫館との関係

大宰府におかれたもう一つの客館、すなわち博多湾岸に設けられた客館の遺跡が、史跡・鴻臚館跡（福岡市）であ



〔A〕…「廊下」を回廊と解した場合　〔B〕…「廊下」を廊の下と解した場合
（殿庭の協律郎・典儀・賛者位は宮懸２の場合は東に移動）

図９　唐「皇帝宴蕃国使」儀礼概念図
（石見清裕1998より）

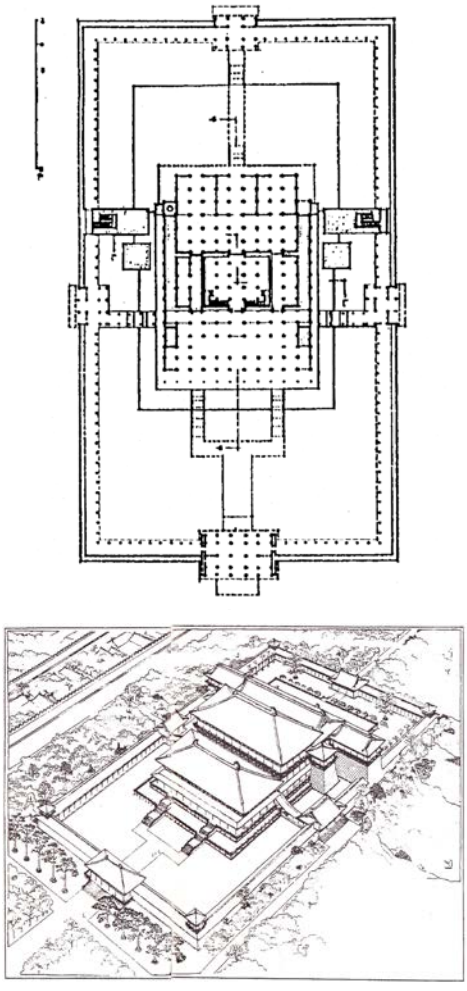


図10　唐大明宮麟徳殿 平面図（上）・復元図（下）
（劉到平・傅熹年「麟徳殿復元的初歩研究」『考古』1963－7 より。一部改変）

る。交易が中心となる９世紀中頃以降は「鴻臚館」と呼ばれたが、外交が盛んな７～８世紀は「筑紫館」と呼ばれ、古代日本の外交・交易の玄関口であった。ここは外国からの使節だけでなく、遣新羅使（『万葉集』巻15）や、唐からの帰国者（円仁『入唐求法巡礼行記』ほか）の利用など伝えられている。

図11　鴻臚館跡Ⅱ期（筑紫館）の復元（福岡市教育委員会）

鴻臚館跡の調査では、７世紀末から11世紀にわたる５期の遺構が確認された。このうちⅡ期（８世紀前半）・Ⅲ期（８世紀後半～９世紀前半）が大宰府条坊内の客館跡と同時期となる。ここは、谷をはさんで同一規格の北館と南館が設けられ、東門（八脚門）を正門とした。北館の北側には築地塀もめぐらす。Ⅱ期は各館とも塀で囲われるが（南北約56m、東西約74m）、残念ながら建物は確認されていない。Ⅲ期はともに拡張され、回廊が大型の礎石建物（南北棟）を囲んでいる。

筑紫館は日本の窓口であった。このことは、日本を訪れる外国使節はまず筑紫に入るよう要請されていたことから理解される（『続日本紀』宝亀４年（773）６月戊辰条）。使節が来着すると、大宰府は所持品（交易品）や容貌などを付して朝廷へ報告する。すると中央から使者が派遣され、来日理由を尋ねた。こののち入京が決まると、使節は筑紫館を発ち、難波館を経由して京の客館（鴻臚館）に入った。一連の外交日程を終えると、再び筑紫に戻り、風待ちをして帰国の途についたとみられる。

筑紫館は大宰府の海辺の客館でもあった。既述のように、外国使節は筑紫館から水城西門を経由して、大宰府に入った。大宰府で外交日程を終えると、筑紫館に戻り、帰国したと復元される。

筑紫館と条坊内客館との関係は、難波館と京内客館との関係に比定され、両者がともに機能したのだろう。なお条坊内客館の北棟は260㎡、南棟は200㎡程度であり、数百人規模の受入は困難である。実際に大宰府へ入るのは使節の一部で、他は筑紫館に滞在したと推測される。これらの客館は遣唐使などの利用も想定されよう。

９世紀中ごろになると、国内の外交関連施設の廃止が相次ぐ。難波鴻臚館（難波館）、平安京東鴻臚館、そして条坊内の客館も終焉を迎えた。このころすでに新羅使は来なくなり、来訪するのは渤海使と商客だけで、外交よりも貿易に主体が移っていった。鴻臚館跡でもⅣ期（９世紀後半）から海外の多種多様な陶磁器類が大量に出土するようになり、外交のあり方の変質がうかがえる。

おわりに

大宰府の外交・饗応のスタイルは、都と同様、東アジアの国際標準に則ったものだったと考え、それを行う舞台として条坊制都城が備えられたとみた。そして同時代の類例と比較することで、大宰府の客館や迎賓施設に関する所見を述べた。平成27年（2015）に九州国立博物館で開催した『新羅王子がみた大宰府』展でも使用したイラストは、この検討をもとに下図をおこし、毛利清隆氏にイラスト化していただいたものである。

大宰府の都市や施設が明らかになるにつれ、古代日本がいかに東アジアを向き、筑紫を重要視していたかがうかがわれる。ただ、外交・交易自体、莫大な費用がかかるものである。これを支える意味でも、大宰府には都市機能が必要だったのかもしれない。

「西の都」大宰府。それは東アジアとの交流のため古代日本がもうけた一大都市であった。

参考文献

岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『日本古代宮都の研究』岩波書店1988年
橋本義則「平安宮草創期の豊楽院」『平安宮成立史の研究』塙書房1995年
山村信榮「大宰府成立論－政庁第Ⅱ期における大宰府の成立」『牟田雄二君追悼論集』同刊行会1994年
石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院1998年
森公章「大宰府および到着地の外交機能」『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館1998年
澤村仁「大宰府政庁の官衙」『太宰府市史　建築美術工芸資料編』太宰府市　1998年
千葉孝弥・武田健市・鈴木孝行『市川橋遺跡－第23・24次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第55集　多賀城市教育委員会　1999年
『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第67集　多賀城市教育委員会 2002年
井上信正「大宰府条坊区画の成立」『考古学ジャーナル』No.588ニューサイエンス社　2009年
井上信正「大宰府朱雀大路沿いの大型建物群と出土品」『都府楼』第42号　（財）古都大宰府保存協会　2010年
井上信正「大宰府周辺の大型建物について」第162回九州古文化研究会〜最近の大型建物遺跡調査例とその性格　発表原稿　2012年
鈴木琢郎「蝦夷の朝貢・饗給と多賀城－南北大路隣接地の大型建物群の理解をめぐって－」『福大史学』82　福島大学史学会　2013年
井上信正『大宰府条坊跡44－推定客館跡の調査概要報告書』太宰府市の文化財第122集　太宰府市教育委員会　2014年
井上信正「大宰府」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編　吉川弘文館　2015年
鈴木拓也「多賀城」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編　吉川弘文館　2015年
小鹿野亮「古代大宰府への道」『海路』第12号　海鳥社　2015年
菅波正人「鴻臚館への道」『海路』第12号　海鳥社　2015年

column

トピック展示「新羅王子がみた大宰府」

古代都市・大宰府の中央、朱雀大路に面した場所（西鉄二日市駅北側）で南北に連なる大型の建物跡が、太宰府市教育委員会による発掘調査で確認された。外国使節を迎えた『客館』とみられる本遺跡の発見は、大宰府の歴史に新たな光をもたらすことになった。本遺跡の重要性は高く評価され、平成26年10月６日に「特別史跡 大宰府跡」に追加指定された。

トピック展示「新羅王子がみた大宰府」では、奈良時代の天平勝宝４年（752）に来日した新羅王子・金泰廉の目線で古代都市の姿を描き、現代の町並みと重なる歴史を視覚的に認識させることに重点を置いた。

下記の復元イラストは、太宰府市教育委員会の井上信正が作画した原案を基に、イラストレーターの毛利清隆がイラスト化したものである。写真手前の調査地が推定客館跡の北側で、古代都市・大宰府の上に現在の太宰府市が重なっている。復元イラストは、写真をもとに九州歴史資料館や太宰府市教育員会の調査・研究成果を加えて描かれた。

（小嶋　篤）

奈良時代の大宰府（毛利清隆、井上信正（監修））

現代の太宰府

※イラストと画像は、太宰府市教育委員会所蔵

第3章

輸入陶磁器と喫茶文化

井上　信正

1．国際交流の最先端「客館」

大宰府条坊内の客館跡では、佐波理・新羅土器など新羅製品が注目を集めたが、日本の漆皿・奈良三彩壺・銅製容器、また唐の白磁・青磁といった、各国を代表する高級品がそろって出土している。

その希少性は、比較的出土例が多い唐の陶磁でさえ、京や大宰府といった大都市をのぞくと官衙・寺院・館など限られた場所でしか出土しないことからもうかがえる。大宰府でもその種類は椀・皿が中心となるが、客館跡ではさらに、壺・水注・香炉・合子・托・唾壺などが出土した。これほど多様な品が複数出土するのは政庁周辺や観世音寺などに限られており、ここが大宰府でも特別な場所だったことを物語っている。これらは外国使節が滞在する館でのもてなしの用具、あるいは交易品だろう。

こうした、「客館」に彩りを添えるこうした品々の中に、8世紀に唐で広まった喫茶の器なども含まれている。火舎や越州窯青磁（秘色青磁）の茶碗など、喫茶を推測させる用具の出土は、ここが国際的な文化・交流の最先端にあったことを伝えている。

さまざまな種類の越州窯青磁
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土　8世紀末～9世紀前半

2．唐からもたらされた陶磁器

唐代の陶磁器は、高級品として珍重された。

なかでも白磁（邢窯）は希少で、青磁ほど多くは伝わっていない。大宰府でも出土例はあるが数は非常に少ないという状況に変わりはない。客館跡では現在確認できているのは椀・皿のみだが、その量は

大宰府条坊内においても比較的多い傾向にある。

唐の青磁には「秘色」と呼ばれ珍重された越州窯青磁（浙江産）や、西域風のデザインをもつ長沙窯青磁（湖南産）などがある。古代日本にも高級品としてもたらされ、官衙・館・寺院など特別な場所で使われた。越州窯青磁は、日本でも「秘色（ひそく）」と呼ばれ、緑釉陶器など国産の食器がその形を模倣したことが知られている。

邢窯白磁（椀の破片）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
８世紀末? ～９世紀前半

長沙窯青磁（水注・壺の破片）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
8世紀末～ 9世紀前半

越州窯青磁（皿・浅形椀）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
８世紀末～９世紀前半

茶碗・茶托（越州窯青磁）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
８世紀末～９世紀前半

※写真の茶托は復元品だが、同じものが客館跡から出土している。

唐からもたらされた陶磁器は、日本の食文化にも大きな影響を与えたといえよう。

3．「越州」（秘色）の喫茶

茶は中国では古くから飲まれていたが、唐の陸羽（？－804）が記した『茶経』によって茶の知識がまとめられ、喫茶文化へと発展した。日本にも９世紀初めまでには伝えられ、僧や貴族など一部に広がったと考えられている。

『茶経』には茶道具についても詳しく記されているが、「盌（わん）」（茶碗）のうち最上とされたものが「越州」（越州窯青磁）であった。器の色が「玉（ぎょく）」に似ており、茶の色も緑色に見えるため、「邢州」（白磁）よりも優れていると、陸羽は記している。

客館跡からは、越州窯青磁の茶托（ちゃたく）４点、茶托とセットになると考えられる小椀などが出土した。国際交流の最前線であるこうした場所に、唐の喫茶文化すなわち国際文化の最先端がいち早くもたらされたことがうかがえる。

火舎（右：須恵器、左：奈良三彩）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土　８世紀

奈良三彩火舎の類例
（京都府木津川市・馬場南遺跡出土）
写真提供：公益財団法人京都府埋蔵文化財
調査研究センター

4．火舎（かしゃ）

火舎は、大きな皿に獣脚（じゅうきゃく）がつく火を入れる容器で、寒い時に暖をとる手あぶり、香炉などの用途がある。

須恵器火舎は、大宰府ではあまり出土例がなかったが客館跡では数多く出土した。直径が30㎝以上となる大型のものが多く、皿の側面に透かし穴を入れたものもある。

写真の奈良三彩火舎は、皿の体部破片である。釉薬（うわぐすり）の剥離が進んでいるが、緑・茶色の鮮やかな釉が当初の面影をのこしている。客館跡の隣接地から出土したもので、奈良三彩火舎は大宰府では初の事例である。奈良三彩は、茶道具の種類がそろっていることから、唐の喫茶文化が８世紀には伝わっていたとする説がある。

陸羽の『茶経』には、茶器「風炉（ふろ）」は「三足」で「昔の鼎（かなえ）の形のようにし」とある。おそらく火舎に似たものだろう。『茶経』が述べるような銅鉄の鋳造品ではないが、こうした火舎が喫茶で利用されたことも考えられよう。

参考文献

布目潮渢・中村喬編訳『中国の茶書』東洋文庫289　平凡社1976年
巽淳一郎「日本における茶法の開始」『新版古代の日本』6（近畿Ⅱ）角川書店1991年

第4章

大宰府出土の響銅

井上　信正

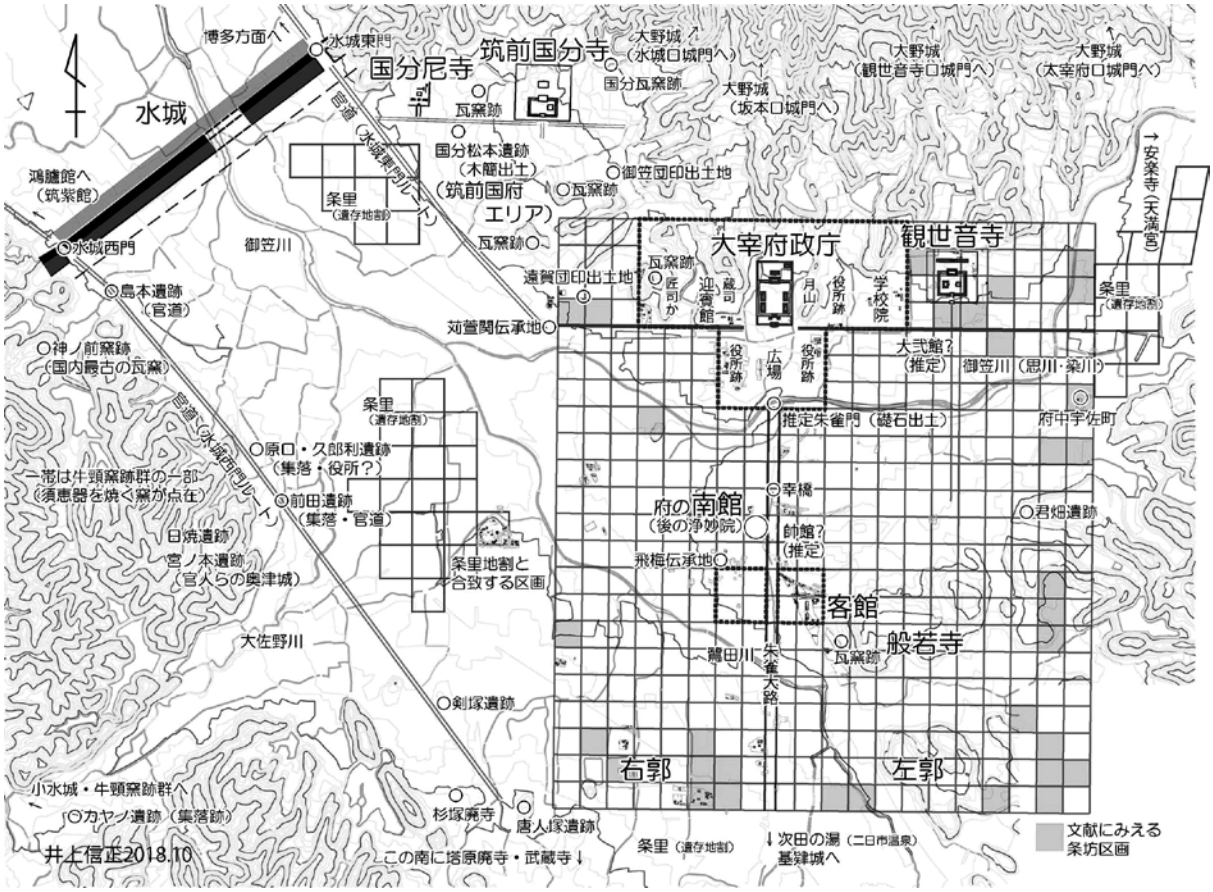
7世紀中葉から8世紀初頭は、激動する東アジア情勢・国内情勢を踏まえ、東アジアと向き合う国家づくりがなされた時代である。大陸・半島に近い北部九州・太宰府地域でもこれに呼応して、親百済の施策を行った天智朝には百済系の要塞群が築かれ、中国・唐を意識した制度設計や藤原京を設けた天武・持統朝には条坊都市が整備され、そして8世紀に入り現在知られる政庁域などが設けられている。

白村江での敗戦から40年後の703年、唐との国交樹立を目指す遣唐使の一行が皇帝・武則天を拝謁した。この使節団には遣唐大使と別に、天皇からの大権委任を意味する節刀を授けられた執節使・粟田真人が同行していたが、皇帝は彼をたいそう気に入り厚遇したことを歴史書『旧唐書』が伝えている。この粟田真人は大宝律令の編纂にも関わった人物だが、680年代は筑紫大宰の帥（長官）としてこの地に赴任し、新羅使の応対や大宰府条坊造営にも関わっていた。704年に帰国した彼らがもたらした情報で、朝廷はさらに改革を進め、和銅元（708）年正月に詔を発し、唐の都長安に似た北を上位とする平城京を造営したと評価されている。その和銅元年三月、粟田真人は中納言のまま帥に任命され再び大宰府に赴任した。この後大宰府の再整備が本格化し、政庁や朱雀大路が備えられた（筆者は718年完成説を支持する）。こうした経緯を経て、大宰府の街は世界の宮都と共通する要素を備えた本格的な都市となったのである。

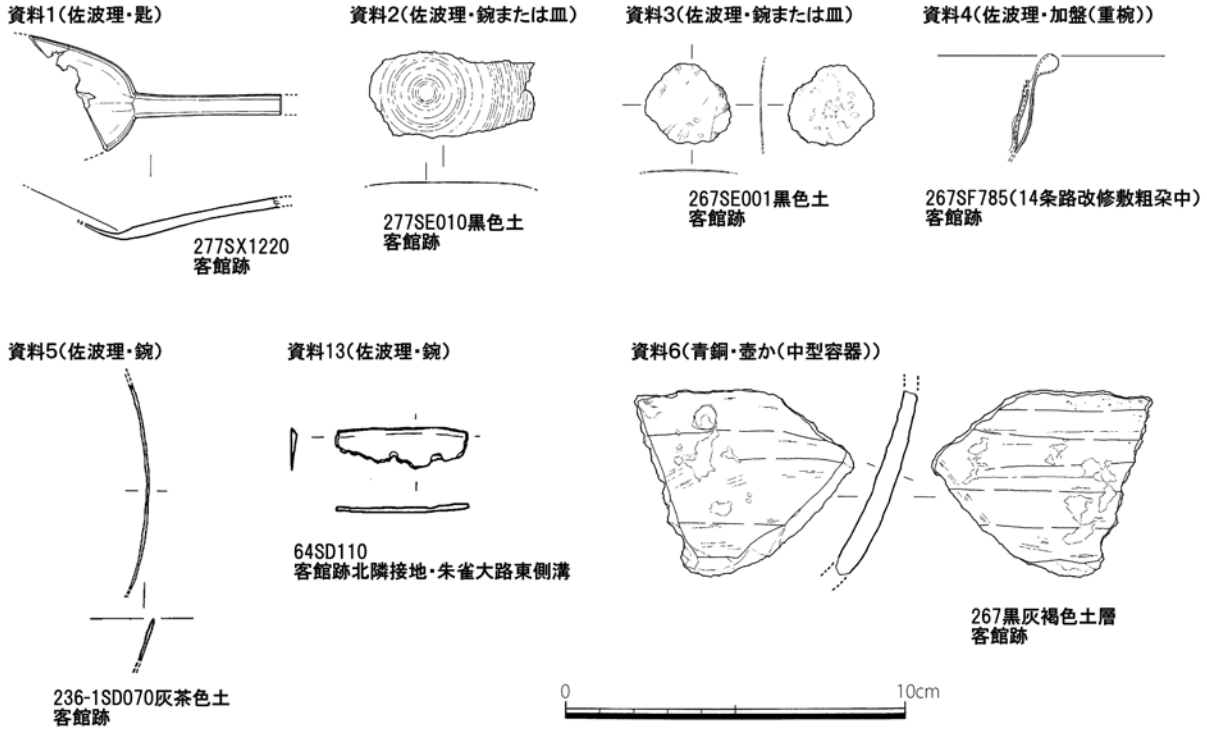
日本はその後も唐・新羅に使節を派遣し、また外国使節を受け入れ、東アジア世界と関わりをもちつつ、その接点となる国内での外交の場も整えていった。それを示す遺跡が見つかった。2012年、西鉄二日市駅北側（朱雀大路東側）で条坊跡の調査を進めていた太宰府市教育委員会は、奈良時代の大型南北建物2棟を含む建物群や当時の高級品出土が相次ぐこの遺跡を外国使節が滞在した大宰府条坊内の客館跡と公表し、国も2015年10月に特別史跡大宰府跡に追加指定した。中国でも京内客館は概ね朱雀大路沿いにあり、日本でも平安京の七条の朱雀大路に面した東西に鴻臚館が置かれたことが知られている。京内客館の遺跡調査例はほとんどないが、唐の賓礼研究から復元された客館構造と大宰府客館跡の施設配置は類似点が多い。当時の国際標準ルール（唐の賓礼）に基づく外国使節の受け入れを行う場合、礼制、施設、都市などを整える必要があり、それが8世紀の大宰府再整備を行う際の基本理念の柱の一つであったと考える。

さて、大宰府の職掌には外国使節の「饗讌」（饗宴）が律令で規定されている。他例を参考にすると正式な饗宴は政庁付近（西側丘陵上の大型建物と推定）であり、客館で行われた可能性は低い。ただ客館での豪華なもてなしが、数々の高級品・特殊品の出土で明らかとなった。注目するのが新羅の製品とされる高錫青銅食器・佐波理である。匙1点、椀皿類4点の出土は、客館推定へのきっかけともなったが、この素材分析を九州国立博物館で行い（**別表参照**）、類例調査を多くの佐波理を所蔵する宮内庁正倉院事務所等で行った。素材分析は地金ではなく錆の分析であり、また錫は錆に溶出しやすい性質があるため数値は本来の成分比を示すものではないが、かなり高い値で錫が含まれており、佐波理と判断される。またこのとき、市が保管する出土金属製品の一部を分析にかけたところ、新たに佐波理と判明したものがあった。このうち朱雀大路東側溝から出土した資料13（9世紀中～後葉以前）は、形態が類似する資料5（客館出土佐波理鋺）の時期推定を補強し、客館の時期推定にも寄与している。

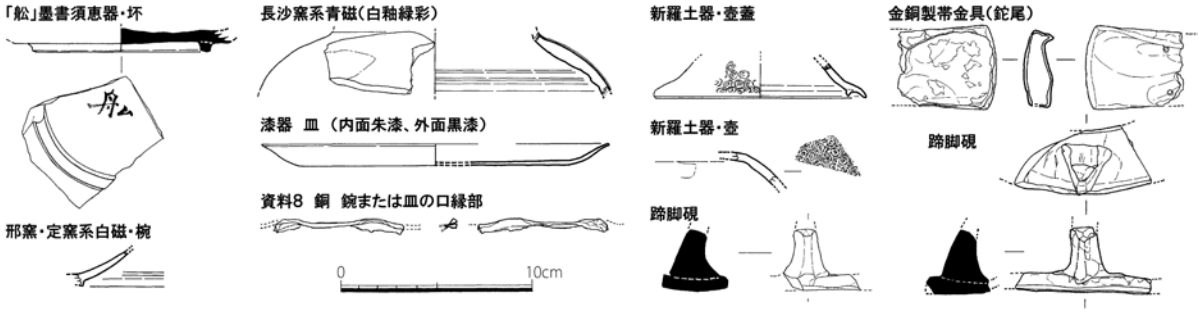
大宰府条坊の利用実態を示す記録がほとんどない中、佐波理の出土をきっかけに歴史の断片がつながり、汎東アジア的な古代都市構造の解明や、外交舞台の解明に寄与する成果となっている。



《大宰府条坊図》



《客館跡および条坊跡出土金属製品》

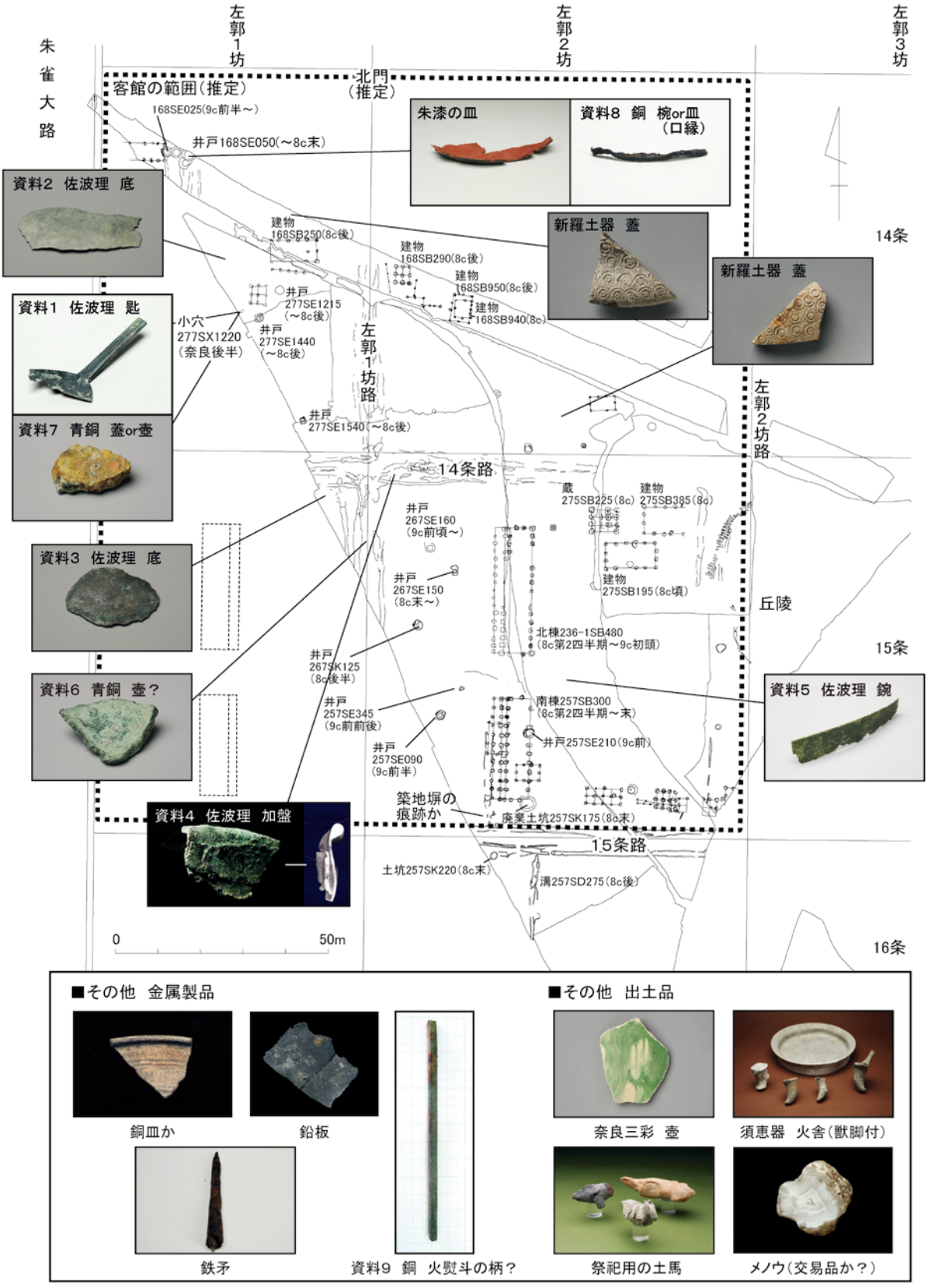


《その他の客館跡出土品》

	器 種	残存部	遺 物 推定制作時期	計測部位 分析結果	備 考	遺跡・次数 遺構名 遺構種別	遺 構 埋没時期
客館跡							
1	高錫青銅(佐波理) 匙	柄・受け	奈良(8c) (遺構の時期より)	匙面中央 Sn71.63%、Cu24.9%、 Ag1.62%、Fe1.85%	正倉院新羅招来品に類例あり。なお、正倉院の匙よりも本製品の方が制作が優良との指摘あり(正倉院事務所西川明彦氏ご教示)。	条277 SX1220 小穴	奈良後半
2	高錫青銅(佐波理) 鋺または皿	底	奈良(8c) (客館の時期を参考)	中央 Sn45.1%、Cu54.22%、 Pb0.24%、Fe0.45%	正倉院佐波理同様、デントライト(樹枝状偏跡)が見られる。なお、正倉院の皿底は少し厚みがあるが(上記、西川氏ご教示)、これは薄底である。	条277 SE010黒色土 井戸	平安後期
3	高錫青銅(佐波理) 鋺または皿	底	奈良(8c) (客館の時期を参考)	内面中央 Sn38%、Cu57%、Fe2%、 Pb2.5%。Ag1%以下		条267 SE001黒色土 井戸	11c中葉？
4	高錫青銅(佐波理) 加盤	口縁	奈良(8c) (客館の時期を参考)	中央 Sn13.72%、Cu85.34%、 Fe0.94%		条267 SF785 14条路路面下層	9c中～後葉
5	高錫青銅(佐波理) 鋺	口縁	平安(9c) (口縁形態、錆色より)	内面中央 Sn86%、Cu7%、Fe7%	遺物時期は、奈良県立橿原考古学研究所小栗明彦氏より類例のご教示を頂く。これは、資料13の出土遺構時期とも合致する。	条236-1 SD070灰茶土 溝	平安後期
6	青銅 壺？(中型の容器)	胴部	—	中央 Sn15.83%、Cu45.61%、 Ag1.41%、Fe1.67%、 Pb26.71%		条267 黒灰褐土層 整地層	平安後期
7	青銅 蓋または壺	破片 壺なら肩部	奈良(8c) (遺構の時期より)	内面中央 Cu83%、Fe13%、Sn3%、 Ag・Pb1%以下	佐波理匙と同遺構から出土。	条277 SX1220 小穴	奈良
8	銅 椀×皿	口縁	奈良(8c) (遺構の時期より)	中央 Cu94%、Fe6%		条168 SE050灰黄粘 井戸	奈良末
9	銅 棒状製品	片	—	中央 Cu99%、Fe・Pb1%以下	火熨斗の柄(組合せの角部)？との意見もある。	条236-1 灰茶土層 整地層	平安後期
10	銅 製品の一部	リベット接合部	—	内面中央 Cu98%、Fe0.5%	火熨斗の柄取付部、皮製品等の金属取付部、等の意見もある。	条267 SF715 14条路路面上層	9c末～10c初
11	鉄 盤	皿部破片	—	内面中央 Fe100%	大型容器の一部とみられる。	条267 茶褐土層 整地層	平安後期
12	不明(鉛・鈴・アンチモン) 鋺か	口縁	—	内面中央 Pb58%、Sn24%、Sb13%、 Fe4%、Cu1%、		条277 黒茶土層 整地層(左郭一坊路上)	平安後期
客館北側(朱雀大路沿い)							
13	高錫青銅(佐波理) 鋺	口縁	平安(9c) (口縁形態より)	内面中央 Sn72%、Cu18%、Fe8%、 Pb1%、Ag1%以下	資料5と類似。	条64 SD110 朱雀大路東側溝	9c中～後葉
14	不明(銅と鉛) 火熨斗	口縁	平安	内面鍔中央 Cu43%、Pb56%、 Fe0.5%		条170 S-33黄灰土 土坑か	10c以降
15	青銅 火熨斗	体部	平安	内面体部中央 Cu22%、Pb40%、 Sn29%、Fe7%		条170 S-7黒灰土	—
その他							
16	高錫青銅(佐波理) 鋺	口縁	平安 (口縁形態より)	内面中央 Sn51%、Cu40%、Fe4%、 Pb5%		条88 SX116 小穴	中世
17	高錫青銅(佐波理) 小鋺	口縁	—	外面中央 Sn80%、Cu5%、Fe10%、 Pb4%		条88 SD294 大溝か	12c末 ～13c初頭

◎ 客館跡出土品その他の金属製品の素材分析を、平成22(2010)7月に九州国立博物館にて、蛍光X線回折により実施。分析には鳥越俊行氏の協力を得た。
◎ 錆に覆われた表面の分析で、分析結果は素材の組成を示すものではない。錫(Sn)は湧出しやすい元素だが、極めて高値のものは素材の錫含有量が多いこと示唆している。

《金属製品分析一覧》



《客館跡主要遺構配置図、および金属製品ほか遺物出土状況》

第５章

響銅でつながる大宰府と東アジア

川村　佳男

はじめに

「西の都」と謳われた大宰府には朝鮮半島や中国大陸からさまざまな人・モノ・情報がもたらされた。そのなかには響銅の器物（以後、「響銅」と記す）も含まれる。本稿では大宰府を含む響銅の国内外の出土地点を概観するとともに、東アジアにおける響銅の広がりを捉える。そのうえで、響銅の用途に着目しながら、響銅を用いることの意味を読みとく。その意味に迫ることができれば、大宰府において響銅を必要とした理由がより鮮明に見えてくるだろう。

１．響銅とは

銅に錫その他の金属を加えた合金の器物は、ひろく青銅器と呼ばれ定着している。これはもともと近代の歴史学あるいは考古学の用語であり、人類が石器時代、青銅器時代、鉄器時代という三つの時代を経て発展したとする三時代区分法の概念とともに広まったと考えられる。言い方を替えれば、いわゆる青銅器は地域や時代ごとに、とりわけ近代以前においては、さまざまな呼び方がなされていた。響銅もまた青銅器を表す呼称のひとつである。

しかし、響銅がこんにちの青銅器のように青銅製の器物全般を指すわけではない。響銅は近世以来中国で用いられた言葉で、打つとよく響く澄んだ音を出すという性質に由来している。『箋注倭名類聚鈔』にある「佐波利（さはり）」や買新羅物解の「迦羅（そうら）」は「鈔鑼（そうら）」という中国の青銅製打楽器に由来する名称と考えられ、やはり打つとよく響く音を出す青銅の材質の一種を表すものとされている。このような性質をもつ青銅器は蠟型鋳造後に轆轤で回転する器面を削ったり、板金を加熱しながら鎚で敲いて成形する鎚鍱という技法で通常作られている。また、響銅は表面の成分を分析すると、青銅のなかでも錫を20パーセント前後と比較的多く検出する傾向が認められるという研究もある。これらの製作技法、ないしは一定の錫の含有率ゆえに、打つと音がよく響くという性質が得られるのか、因果関係は必ずしも十分に明らかにされたとは言いがたい。

図１　八重鋺 奈良時代・８世紀
東京国立博物館所蔵（法隆寺献納宝物）

とはいえ、少なくとも轆轤挽きや鎚鍱によって製作された痕跡をもつか、これらの技法による製作が適切な器形、たとえば轆轤挽きなら円形や楕円形を呈する青銅器が響銅であると視覚的に認定されている。このような技法で製作された響銅は、比較的薄造りで手取りの軽いものが多く、器表は無文か、せいぜい弦文をめぐらせる程度の簡易なものが大部分を占める（図１）。複雑な文様をもつ例もまれに存在するが、器体が薄いため、その場合も蹴り彫りで浅く彫り表すのが常である。打つと音がよく響く

という響銅の第一義的な性質は、寺院の伝世品や保存状態のよほど良好な出土品に限り、確かめることができる。

2．響銅の広がり

東アジアにおける響銅の初出は中国に求めることができる。上限時期を何世紀まで遡らせるかは、響銅の定義の仕方によって変わってくる。たとえば、上述した鎚鍱という技法や鋳造後の青銅器の器表を削る技法だけを見れば、紀元前５～前３世紀の戦国時代には確実に存在する。しかし、轆轤挽きによって器表を削った明瞭な痕跡をもつ例は、管見の限り、西暦６世紀の南北朝時代まで下る可能性がある。このように轆轤挽きの開始だけやや遅れる可能性があるものの、響銅の基本的な器種の組成、つまり、鋺（碗）・承盤・鐎斗・匙などから構成されるセットに注目すると、遅くとも西暦５世紀には成立している。目下、中国における響銅の本格的な出現時期は５世紀ないしそれ以前、とするのが穏当な言い方である。

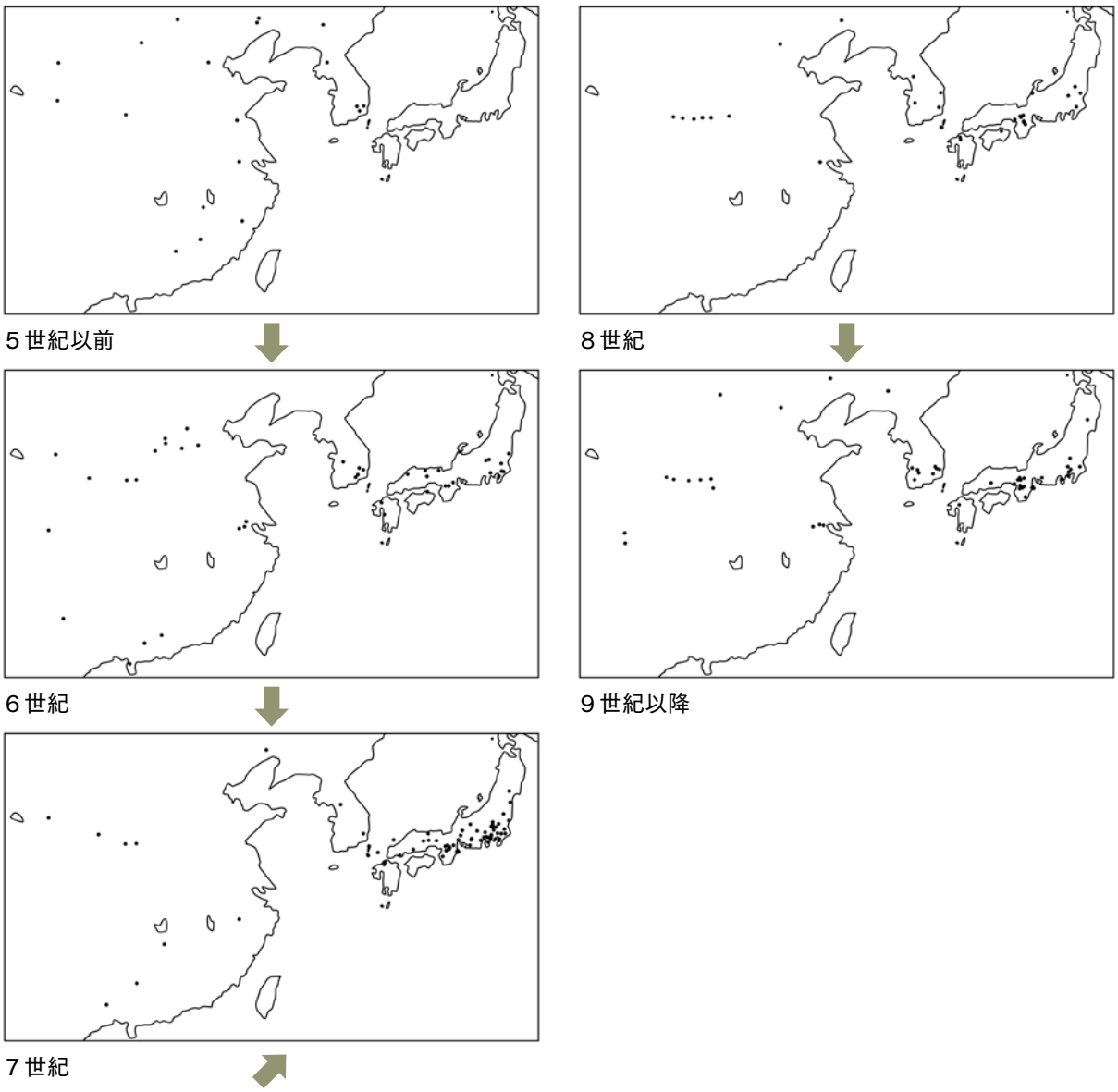


図２　東アジアにおける響銅のおもな出土地（もしくは伝世地）とその変遷

中国における響銅のおもな出土地に着目すると、5世紀以前は黄河流域のいわゆる中原に集中するのではなく、北方の草原地帯から長江流域以南にかけて広く散在していることが分かる（図2）。6世紀の南北朝時代には、南朝の中心地である南京およびその周辺のほかに、山西省・河北省など北朝の重要拠点からの出土が顕著である。北朝は鮮卑が支配したいわゆる征服王朝であり、草原の道を経てササン朝やビザンティン帝国とも交流があった。5、6世紀における響銅の出土地に見られる傾向は、中国の響銅が既存の青銅器から独自に内的な発展を遂げたものではなく、西アジア・中央アジアから伝播したとするこんにちの一般的な考え方の妥当性を示唆するように映る。しかし、西アジアから中国にいたる響銅の具体的な伝播経路はなお不明であり、その究明は今後の課題である。7世紀以降の遺跡では唐王朝の首都だった西安近辺、副都の洛陽近辺、ならびに水運の要衝・揚州近辺などから響銅が継続的に出土している。

朝鮮半島に目を移すと、5世紀に早くも高句麗は響銅を受けいれていたことが知られる。隣接する遼寧省北票からは響銅が早くからまとまって出土しており、そこから高句麗へ伝わったことが推測される。そのほか、半島東南部の辰韓や弁韓と呼ばれた地域からも響銅が出土している。どのような経路で伝わったものかは不明ながら、6世紀に日本で出現する響銅との関連が注目される。6世紀以降の出土例は半島の南半分に集中している。とくに10世紀の高麗になると、響銅は工芸がさらに発達し、これまでに出土した量から推して、数量の面でもより多く製作されたようである。

日本の響銅は、佐賀県唐津市島田塚古墳や熊本県宇城市国越古墳など九州から出土した例に6世紀のなかでも比較的古いものがあり、最初期に相当するものと考えられる。その後、7世紀にかけて、大和王権の中枢があった近畿、水陸交通の要地のほか、とりわけ関東地方に出土地が集中する。8世紀になると、出土地は近畿、および大宰府などの地方でもとくに重要な政治的拠点のあった場所に絞られていく。9世紀以降はそれまでの政治的な拠点に加えて、和歌山県の那智、伊豆の修善寺、岩手県の中尊寺などの宗教的聖地からの出土が目立って増える。

3．響銅の用途―東アジアに共通する聖俗両用の宝器―

中国における響銅の成立時期を西暦5世紀に求めるとすれば、先述した通り、鋺・承盤・鏒斗・匙などの器種組成の確立をその根拠のひとつとして挙げることができる（図3）。言うまでもなく、これは食器としてのセットである。その後、水瓶や箸などもこのセットに加わっていく。

漢時代において、高級な食器のセットは漆器であった。5、6世紀の南北朝時代になって、鎚鍱や轆轤挽きなどを駆使して製作した金属製の食器セットが漆器に取って代わった。もっとも高級なものは銀器であり、とくに唐時代にいたって目覚ましい発達を遂げたが、響銅はそれに次ぐ高級な食器のセットとして長く珍重された。

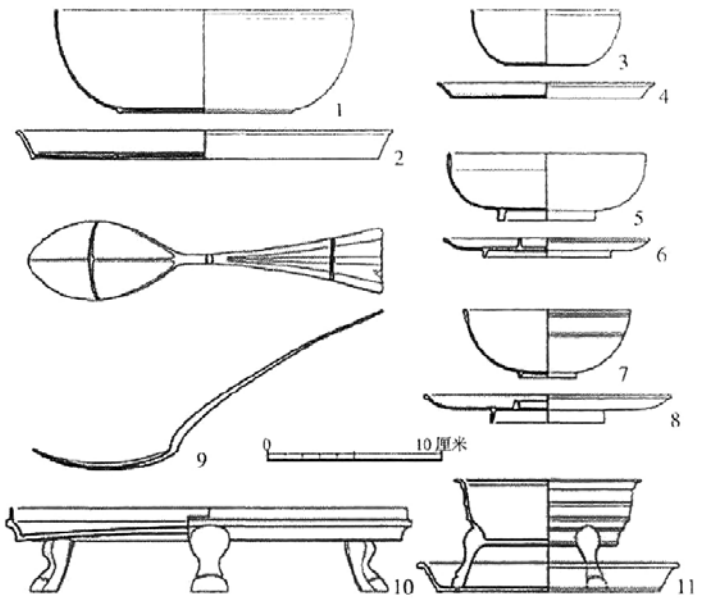


図3　江蘇省句春で一括出土した響銅の容器
（鎮江博物館他「江蘇句容春城南朝元嘉十六年墓」『東南文化』2010年第3期より引用）

５、６世紀は仏教が中国で定着し、初めて隆盛した時期でもあった。これにともない、仏像や仏教儀礼にかかる空間を当時の人々にとっての最高級のもので飾りつける「荘厳」の風習も普及していった。仏像への供物を最高級の食器セットである響銅に盛ろうと考えたのは、至極当然の発想だったと言えよう。こうして響銅は仏具のなかにも取り入れられ、柄香炉のように俗生活よりも、むしろおもに仏教儀礼に使用されたと考えられる器種も響銅のなかに含まれていった。また、水瓶のように、観音菩薩の持物として仏像表現のなかに組みこまれた響銅まであった。そもそも響銅は仏教と始めからセットで中国に伝来した、という指摘もある。仏教が先か、響銅が先か、前後関係をただちに証明することは難しい。ただ、少なくとも中国では王侯貴族の華やかな日常生活と仏教の荘厳という聖俗両面において響銅が重用されたことに疑いはない。この両面性は響銅が朝鮮半島や日本に伝播したとき、響銅そのものと同時であったかは分からないが、それでも最終的には伝わった。その様子は響銅が寺院跡からも古墳からも出土する６、７世紀の日本でもうかがえる。もっとも古墳被葬者にしてみれば、仏教の情報をどれほど知っていたのか分からない。もっぱら世俗面での宝器性が強調されたか、既存のマツリに用いる新しい道具として響銅を古墳に副葬したのかも知れない。

４．まとめ

器皿・杯・匙・箸はもちろん、それらを載せる盆まで金色に光輝くセットで銘々に食事が運ばれて来る光景は、古代の日本人にとって衝撃だったに違いない。しかし、響銅を使った新しい食文化は、仏教とならんで、唐や新羅といった東アジアの国々と交流するうえで欠かすことのできない重要なファクターのひとつだった。礼を失することのないよう、また、侮られることのないよう、当時の東アジアにおける通有の慣習や儀礼にのっとって、外国の使節団を応接する大宰府でも響銅が必要とされた。客館跡という同一の遺構から、匙と加盤が出土したことは、これらがもともと食器のセットとして保管・使用さていた可能性を示唆する。発掘の進展により、今後さらに多くの響銅が大宰府史跡で発見されることだろう。

図４　重要文化財 十一面観音龕と持物の水瓶（赤丸の囲い）　東京国立博物館所蔵

第６章

現代の鋳金作家からみた極薄青銅器
―響銅製作技術解明の予察として

赤沼　潔

極薄青銅器の鋳造実験と、響銅の製作を2013年から実施した。その製作記録をまとめた。

普段は、美術系の鋳物の作品制作を実施しており、鋳物の厚みも３㎜前後での鋳造が多いが、極薄青銅器の再現鋳造のために薄い鋳物の製作を試みた。また、響銅に関しても錫（Sn）の含有量が高い銅合金を用いて鋳造と鍛造を繰り返し展開した内容を報告する。

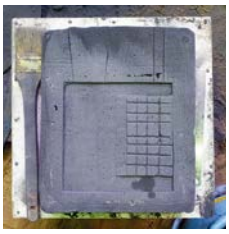
１．古代中国紀元前５世紀の極薄青銅器の製作技術の解明を目的としての鋳造実験

厚さ１㎜に満たない青銅製容器が、戦国時代（前５世紀）以降の中国で急速に普及したが、この極薄青銅製容器の製作を可能にした技術について鋳造実験を通して検証した。実施した内容は、鋳型の種類、鋳造法案、合金熔解、金属加工等当時と現代の状況も加味して行った。

鋳型については、真土（まね；鋳型用の土）を用いて補強材を入れない鋳型①、粘土に炭粉を加えた補強材を入れない鋳型②、型枠を陶土で素焼して補強材とし、その内側に真土を使用した鋳型③、筋金で補強を加えた真土の鋳型④、生型鋳造法の鋳型⑤で実施した。

①

②


③

④

⑤

①については、鋳造性は良かったものの鋳型自体が脆く、安定して実施することは困難であった。②は粘土質が焼結して強度は出るが、最初の成型性に問題が多く時間がかかりすぎる欠陥があった。③は①の型に枠で強度を持たせたものであるが、鋳型成型時はやり易さもあったが、焼成段階で鋳型の収縮のため中央部に亀裂が入り補修が多く必要であり、多数製作するには適していなかった。④は現代でも使用している筋金の補強を入れた真土の鋳型である。全体的に優れており安定して良好な鋳造ができるが、鋳型の成型、焼成に時間がかかる。⑤は生型鋳造で短期間に鋳型ができ、ある程度鋳物の成功率も高い鋳型である。今回は多くの種類の合金を鋳造する必要があり、⑤の鋳造法で実施した。

鋳造した枚数は100枚以上になり、合金（Cu,Sn,Pb）の種類は錫の含有量が多いものが多く30種類近くに及んだ。また、鋳造の肉厚は困難であったが１㎜厚を基本として実施した。

合金地金

①の結果

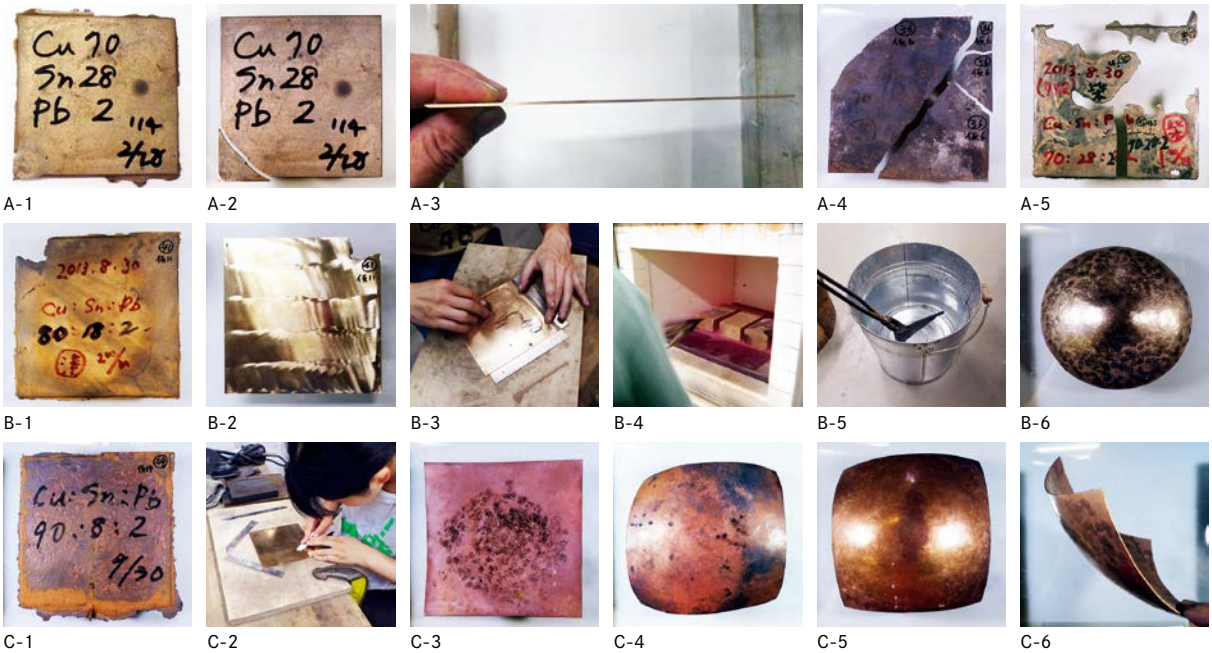
②の結果

⑤の結果

肉厚については、２㎜で実施した場合は、ほとんど鋳造は成功したが、１㎜での鋳造は５割以上失敗

で、湯（溶けた金属）が流れ切らず、穴が開いたり、半分しか流れない状況であった。それでもそれぞれの異なった合金で最低１枚以上は欠損のない鋳物を製作した。また①～④までの鋳型は鋳型を焼成して、型が熱いうちに鋳造するので湯流れは良かったが、⑤の場合は鋳型の温度は常温で、鋳型の粘性を出すために多少の水分があるため、湯の流動性は悪くなり、１㎜厚では失敗する確率も高いが、湯の圧力がかかり勢いよく流れる法案で鋳造を実施し、ある程度は欠損のない鋳物ができた。

対象とした古代中国の極薄青銅器は器の縁の部分は１㎜以上あるが、底部は１㎜を切っているところもある。内側には線刻された文様があるものもある。外側はヤスリ等による擦過痕が見受けられ、内側はキサゲ（金属を削る道具）等で鋳肌を削ぎ落とし、滑らかな面を作り上げてから線刻しているように見える。線刻の線はかなり細くケガキ状のもので引っ掻いて作った線のように見受けられる。外側のヤスリ跡から、ある程度の厚みを持った鋳物を削って１㎜以内の厚みにしていると思える。底部は、一部穴が開いており、そこから見える厚みは0,5㎜を切っている。またその底部の穴の破れ方が、鍛金加工（金槌状のもので金属を叩いて成型する技法）のような形状を感じさせられる。これは、器の底部近辺を金槌状のもので叩いて成型し、極薄の器を製作したものと思われるが、同時に叩くことによって薄くてもある程度の強度を獲得でき、実用に耐えられるものにしたと思われる。このことから、１㎜で鋳造した鋳物の板をより薄くするために研磨し、１㎜以下としてそこから高錫青銅が破れにくくなるように650℃以上で熱処理してから急冷し、焼き鈍しをした。その板を今度は金槌で鍛造し器状の丸みを与えるところまで実施した。



A-1　A-2　A-3　A-4　A-5
B-1　B-2　B-3　B-4　B-5　B-6
C-1　C-2　C-3　C-4　C-5　C-6

Ａ－１は、(Cu70,Sn28,Pb2）の合金で、錫の含有量が一番多い。これは鋳造して湯道を落としたもの。その後は表面にサンドブラストをかけ酸化膜を落とし、縁を綺麗にしたところで亀裂（Ａ－２）が入った。錫の含有量が多いほど脆くなり、少しの刺激で割れが入りやすい状態になる。Ａ－３は鋳造実験の鋳物の厚みを見ているところで、鋳造時でほぼ１㎜厚にしている。Ａ－４は、Ａ－２を焼き鈍すために650℃で加熱し急冷したものであるが、あまりうまくいかず割れが拡大してしまった。
Ａ－５は、鋳造時に湯が流れ切らなかったもの。１㎜厚での鋳造はこのような失敗が多い。

Ｂ－１は、(Cu80,Sn18,Pb2）の合金で、一部湯が回らないところもあったが概ね１㎜厚の板状になっていたので加工を展開した。Ｂ－２は鋳肌の表面を削り落として薄くし、表面を滑らかにしたもの。Ｂ－３は、Ｂ－２をさらに細かく研磨しているところで、それを熱処理（Ｂ－４）して、急冷（Ｂ－５）し、

焼き鈍したところである。Ｂ－６はそれを鍛造加工し、器状にして成功した例。

Ｃ－１は、（Cu90,Sn8,Pb2）の合金で、Bと同様に加工した。Ｃ－２は荒削りの後キサゲをかけているところ。Ｃ－３は焼き鈍しの後、鍛造加工を始めたところで、焼き鈍しが効いていることと錫の含有量が少ないためにほとんど割れは起きなかった。Ｃ－４はそれを何度か繰り返したもの。Ｃ－５は鍛造加工で表面を滑らかにし、Ｃ－６はそれを側面から見たも状態である。

このような鋳造実験と鍛造加工により、古代中国の極薄青銅器に近いものは作成できた。また、鋳造時に最終形に近い器状の形体からスタートして研磨し、鍛造加工で完成形とする方法も可能であると思える。

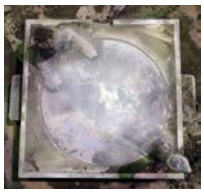
２．響銅の製作技術解明の鋳造実験

東アジアの響銅の製作技術はどのようになっているのか鋳造実験を通して解明を計った。

合金地金は、Cu75%,Sn25%をベースとして薄板を鋳造し、熱処理を加え、鍛造で銅鑼の形状に絞り込む計画で実施に入った。鋳造法は前回の薄肉鋳造で実現可能性の高い生型鋳造法でまずは試みた。

D-1

D-2


D-4

D-5

D-6

E-1

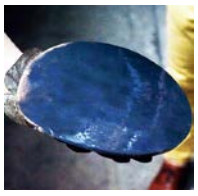
E-2

E-3

E-5

E-6

薄肉での響銅で銅鑼を製作するためのベースとして、２㎜と３㎜厚で鋳造を実施した。円盤状に鋳造し、これを基本として、鍛造加工で成型していく計画での実施であった。Ｄ－１は生型鋳造法での型込めの様子で、Ｄ－２は両面の鋳型が完成したところである。これを上下に合わせて横面から鋳造する。Ｄ－３は鋳造後鋳型の片面を開いて中を確認したところで、綺麗に湯が流れていた。Ｄ－4,Ｄ－５では鋳物を型から取り出し欠陥がないことを確認した。ただし、Ｅ－１のように湯が回り切らず穴が開くことが多すぎたため、縦注ぎ（Ｅ－２）に変更した。これは鋳物部分により圧力がかかって、穴が開かないようにするための対応である。結果は良好で、Ｅ－4,Ｅ－５のように欠陥のない鋳物ができた。ただし、


F-1

F-2

F-3

F-4

F-5

F-6

F-7

F-8

F-9

F-10

F-11

F-12

Ｅ－３のように鋳造後に亀裂が入る場面が多く、これもSnの割合が多いことにより割れやすい状況になっているためである。この後、鍛造工程に移行したが、２、３㎜厚ではほとんど初期段階に割れが入り、肉厚を変更しての再スタートとなった。

熱処理の温度管理がうまくいっていないことも影響したと思えるが、肉厚を４㎜、５㎜、６㎜、10㎜で実施した。合金地金は、Cu75%,Sn25%で２、３㎜厚と同様の配合であるが、かなりの高錫青銅である。

Ｆ－１は、熱処理を加え焼き鈍した状態である。それを再加熱（Ｆ－２）して熱間鍛造（Ｆ－３）で成型していく。Ｆ－４は４㎜厚、Ｆ－5,Ｆ－６は６㎜厚、Ｆ－７は径の大きい４㎜厚であったが、いずれも鍛造の初期に割れが入った。鍛造の方法に問題があったと思われた。Ｆ－８は５㎜厚で、折り曲がってきた途中で割れた。多くの枚数を鍛造した後、Ｆ－９とＦ－10は４㎜、Ｆ－11は10㎜、Ｆ－12は15㎜であるが、これらについては折り曲がって立ち上がり、ほぼ完成という時に割れが入った。

他に多角的に鋳造実験を試みた。

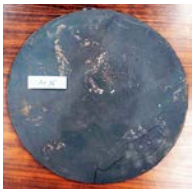
G-1

G-2

G-3

G-4

G-5


G-6

Ｇ－１は、惣型の鋳型を作っているところで、これは鏡を製作する場合の鋳造法である。Ｇ－2,3は鋳型に湯道を切っているところである。湯を下方に回し下方からゆっくりと湯を満たしていき、最後に中央上部に上げていく方法である。Ｇ－４は、注湯直前の完成した鋳型であるが、上部の２本の円筒は掛堰（かけぜき）という湯に圧力をかける方法である。鋳造は綺麗な鋳物（Cu80%,Sn20%）ができ良好であったが、結果として鍛造初期に亀裂が発生し割れてしまった。

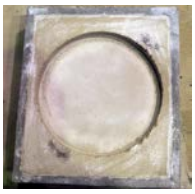
H-1

H-2

H-3

次に平板からではなく、ある程度銅鑼の形状に近づけた石膏原型から、真土込型鋳造法で型取りし鋳造した。Ｈ－１が真土込型の鋳型である。鋳型を焼成して鋳造するが、いろいろな形体に対応でき、優れた鋳造法である。今回は鋳型を簡略化させるために銅鑼の立ち上がり部分を抜け勾配にして鋳造し、鋳物になってから鍛造で内側に寄せる試みをした。結果としては、鋳造は綺麗に上がったが、やはり、鍛造処理の場面で初期に割れ（Ｈ－2,3）が入ってしまった。形体の変化で歪みがでて割れやすい状況にあったように思える。

また、韓国で製作されている銅鑼の技法を参考に実施した。


I-1

I-2

I-3

I-4

I-5

I-6

Ｆ－12でだいぶ的が絞れてきていると思えたが、厚みを多くとっての鍛造が効果的と判断し、ここでは開放吹きで10㎜以上になるように鋳造した。合金は各種実施した。また金属が空気に触れている上面が荒れやすいので、注湯後素早くおが屑をかけて荒れを防止した。ただし、これも熱処理が難しく早期の割れが多く出て、良好な結果は得られなかった。

他に合金に鉛（Pb）を加えたものでも実験を試みた。

実験は全て違う比率の合金とし4,5㎜厚で実施した。鋳造法は生型鋳造法を用いた。結果として熱処理時の急冷した時点での割れが多く発生し、二元合金よりも割れやすいことがわかった。鍛造でも立ち上がりまでは成型できなかった。

再現鋳造はある程度までは確認でき、合金比率と熱処理の関係が重要であることが理解でき今後の展開の予察となった。

column

遣唐使船の船上

九州国立博物館の４階にある文化交流展は、文字通り「交流」をコンセプトにした展示室である。その中でもひときわ異彩を放つのが、８室に常設している「遣唐使船の交易品」である。本展示物は正倉院御物等を参考に製作した復元品と、現代でも入手できる香料や真綿等の現物で構成し、「見る」、「触る」、「匂う」という体感型の展示となっている。

当展示室では、耳も澄まして欲しい。博多湾の小波と、カモメの声も聞こえてくる。目を開けば夕闇が迫るように、照明がゆっくりと切り替わる。遣唐使が見た情景を模擬体験できることも、本展示の魅力の一つと言えよう。

（小嶋　篤）

遣唐使船が運んだ香料

博多湾に浮かぶ遣唐使船の姿（復元）

第6部

山岳信仰と宝満山

霊峰・宝満山

第６部　山岳信仰と宝満山

第１章　山岳信仰の考古学　菅谷　文則 …… 279
第２章　考古学からみた宝満山信仰の始まり　小田 富士雄 …… 283
第３章　宝満山の歴史と信仰　森　弘子 …… 287
第４章　宝満山と古代大宰府　酒井　芳司 …… 291
第５章　宝満山の最新発掘調査成果　山村　信榮 …… 295
第６章　宝満二十五坊の姿　岡寺　良 …… 299

第６部では、大宰府の北東（鬼門）に位置する宝満山の歴史と信仰を検討する。第１章では、「山の考古学」を中心に山岳信仰研究の動向と課題を整理する。第２章～第６章では、宝満山調査のはじまり（昭和30年代）から、平成25年（2013）の国指定史跡の指定にいたる調査と研究過程を、考古学・文献史学・民俗学という多角的視点から記し、今後の展望を明らかにする。

なお、第１章～第６章は、平成21年（2009）11月13日～12月20日に九州国立博物館・財団法人太宰府顕彰会が合同開催したトピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

トピック展示「祈りの山 宝満山」ポスター

第１章

山岳信仰の考古学

菅谷　文則

１．山の考古学

日本列島のおよそ70パーセントが山地である。海抜3788ｍの富士山を最高所とし、海岸までに、さまざまな山地が発達している。

地理学や地質学の区分では、単純に「山」を論じることは難しい。そこで生活感に立脚して山をとらえると、高山がある。富士山のように平地に屹立している山もあるが、多くの山は、山なみを形成して、その高く突出しているところを山と言っている。日本海岸から急激に高度をあげて、日本列島を横断するかの山脈を形成している立山連峰と後高山連峰（うしろたてやまれんぽう）は、一般には北アルプスと言われている。その山脈には3000ｍクラスの山々が連なっている。剣岳、立山、薬師岳、白馬（しろうま）岳、針木岳などがよく知られている。それらの著名な山々は各々平安時代以来の登山の歴史をもっているが、白馬岳のように平野部から農事暦（のうじごよみ）の基準にもなる雪形（ゆきがた）といわれる雪田（せつでん）などの出現などでよく知られている山もある。両連峰が合わさる三股蓮華山（みつまたれんげざん）から、さらに南下して槍ヶ岳、穂高岳へと高峰が続いている。槍ヶ岳と穂高連峰、五竜岳などに囲まれた上高地（古くは神高地とも表示されていた）では、明治年間に放牧場が設置されたこともあり、石鏃の検出が続いていた。現在では登山基地、日本有数の観光地として知られている上高地は考古遺跡でもある。

上高地出土の石鏃については松本平などで狩猟のために弓矢が使用され、大形鳥に射込まれた矢鏃が、ついに上高地で命つきて落下し、鳥の体は腐敗し、石鏃のみが残され出土したとされる。もちろん、このような可能性もあるが、古い時代とは言え、土器出土の有無を確認する必要があった。これは、もちろん、一種のないものねだりにすぎず、私たちが把握している山の考古学では、日本有数の高山も、その研究対象であることを指摘したい。分布調査、つまり踏査が必要有なのである。その成果を示しておきたい。

それは山梨県と長野県の県境で、南アルプスの北端の名山である甲斐駒ケ岳頂からの縄文土器の出土である。山の考古学研究会の櫛原功一氏が、『山の考古学通信』20号（2008年）に発表された「山頂から窟へ　山梨県内の研究動向」である。2599ｍの山頂近くを分布調査された成果である。2599ｍの山頂付近は現在では樹林限界を過ぎていて、狩猟にはむかない。狩猟はもう少し低海抜でなされている。この縄文土器はある意図をもって縄文人が登山していたことを示していると言ってよい。

海抜の低い山も居住や信仰の対象となった。また、旧石器時代から近現代遺物を山頂や山麓部にもつ山も多い。一例のみをあげるとすると、奈良県と大阪府にまたがる二上山をあげることになる。

二上山は、火山による山で、その基部は凝灰岩や安山岩の露頭も多い。火山活動によってサヌカイトを噴出しているので、その石材を旧石器人以来、弥生時代まで連綿として石器制作原石として用いている。このため、遺跡が形成されている。古墳時代をへて、飛鳥時代になると、仏教寺院が山麓に営造される。当麻寺、石光寺、加守寺、叡福寺などであり、終末期から初期火葬墓葬の墓所も多い。

いま、私たちが提唱し、実践している山の考古学は、このような二上山の山麓の遺跡群は含めてはいない。

この区分―線引は、やっかいな問題で、里山、低山、高原、高山などの区分は、一般的に水田農耕による集落形成がなされている地点は、それが高海抜の土地であってもそこは山の考古学の対象ではない。

しかしながら、奈良盆地や琵琶湖を巡る500 ～ 1200ｍの海抜の山嶺は、人が日常的に農耕などを行

う集落地以外は、山の考古学の対象である。

古代以来の三輪山信仰、琵琶湖畔の三上山信仰などはそのことをよく示している。もちろん、三輪山の禁足地の松茸株が経済的側面をもって発行されていたこともあったが、それは日常的農業的経済行為ではなかったとしてよい。

2．山の考古学と、祭祀考古学、仏教考古学、山岳修験学考古との関係

大場磐雄が提唱した神道考古学は、近年はその晩年の弟子である椙山林継によって「祭祀考古学」という名称で活動を続けている。神道の用語は鎌倉期に編述された『神道要語集』まで、用いられていなかったことが改称の理由である。もちろん、『日本書紀』にも、神道の単語があるが、今日の神道の用語とはまったく一致しない。

仏教考古学では、石田茂作によって大きく提唱され、現在も延用されている。キリスト教圏では、キリスト（教）考古学の用語も古くからあり、ともにある宗教の教理と、その普及の状態を知ることに主眼を置いている。ところが、遺跡と遺物は、ともに普遍性と凡要性をもっている。極端な一例を想像してみると、次のような状況さえ出現する。

日本の織豊期に多くの宣教師が来航し、布教に努めた。その結果として十字（十字架）をモチーフとする器物が多く日本で制作され、あるいは海外から持ち込まれた。これが発掘調査あるいは偶然の機会に出土することがある。この場合、その場所を充分に考証しないと、それはキリスト教自体の『場所』からの出土となってしまう。時には珍奇なものとして珍重され、あるいは弾圧の道具（例えば「踏み絵」用の器具）であったかもしれない。仏教も同じである。昭和40年代ぐらいまでは、古代瓦の出土地を寺院跡とすることが多かった。ところが、地方の国衙、郡衙、時には駅家にまで瓦が使用されていることが発掘調査の進展とともに明らかになってきた。以前の瓦は仏教という概念の修正が必要となった。この概念は平安初期以来の、忌み言葉である『寺』を示す『瓦葺』あるいは「僧」を『あららぎ』などとすることから来ているようである。

山での遺物や遺跡をただちに、仏教と神道に区分することはなかなか困難である。なかでも、８世紀初頭の神仏習合思想の開始以降は、両者の区分はきわめて難しくなる。

瓦に戻ると、奈良県の山寺である室生寺の江戸時代後期以前の建築ではまったく瓦を使用していなく、平安後期の『粉川寺縁起絵巻』に描かれている初期の観音堂も瓦葺ではない。昭和40年代以前の仏教考古学が瓦の出土を重視しすぎていたので奈良時代寺院の縁起流記資財帳に記す雑舎群の認識や調査を進展させなかったのであろう。

山と関係の深い修験についても、修験的解釈が中心となるので、修験の資料が増加する11世紀以前を、正しく認識することができない。従前の奈良県大峯山（金峰山）の研究においても、11世紀以前には研究の及ぶことはなかった。また、山形県山寺立石寺の研究においても円仁金棺入定窟にとらわれすぎ、12世紀以前を的確に見ることができない。このため霊場化を ９世紀にまで単純に遡らさせるあやまちをおかしている。重文の円仁金棺さえもがもう少し下る時代の制作であるかもしれない。

以上のように、わたしたちは遺跡とそこに散布（分布）している遺物をある特定のカテゴリーでくくることは、資料の絶対量のきわめて少ない山では、その全体像を取り違える可能性が高いので、あえて総括的な名称を提唱しているのである。

3．わたしの研究の具体像

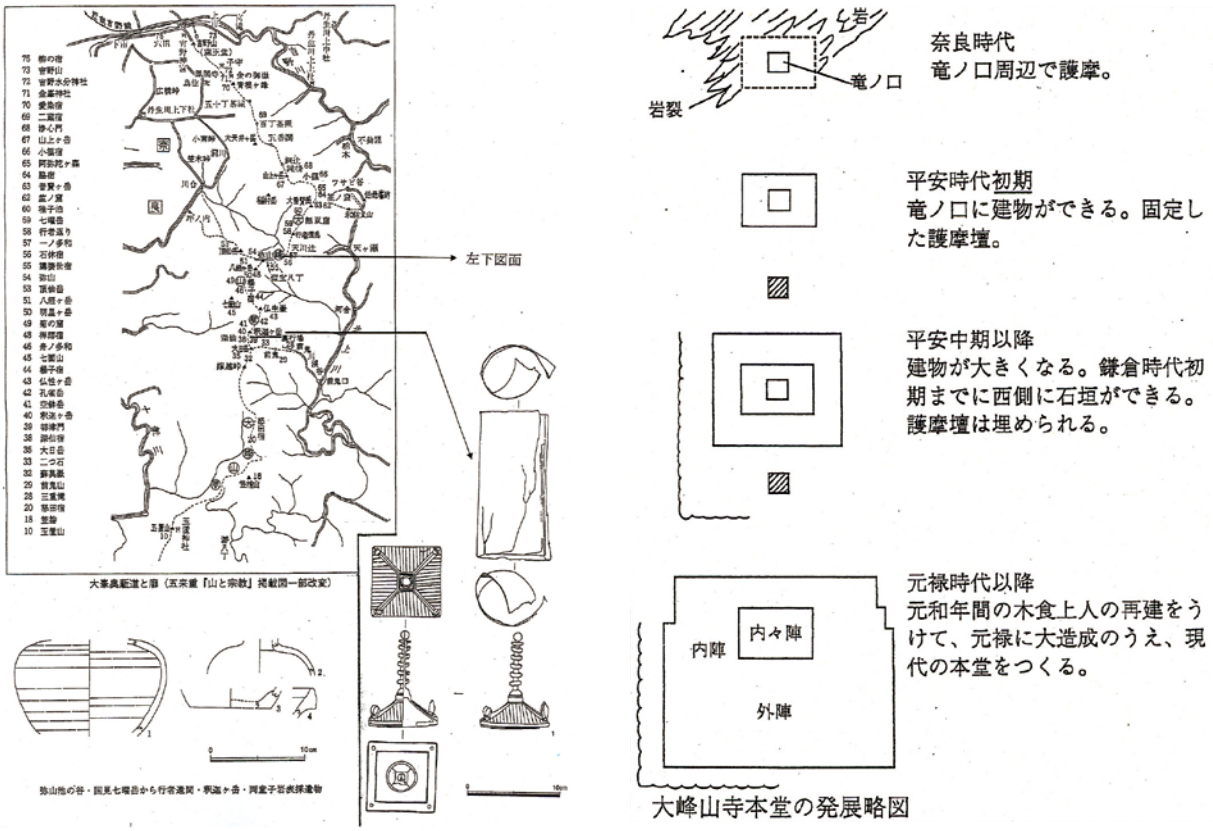
わたしは、昭和30年代前半に、いく度か大峯登山をした。この時に山頂に大量の赤茶けた土器片が散布していることに気づいた。この時は、この土器片がどの時代のものかも知らなかった。きわめて単

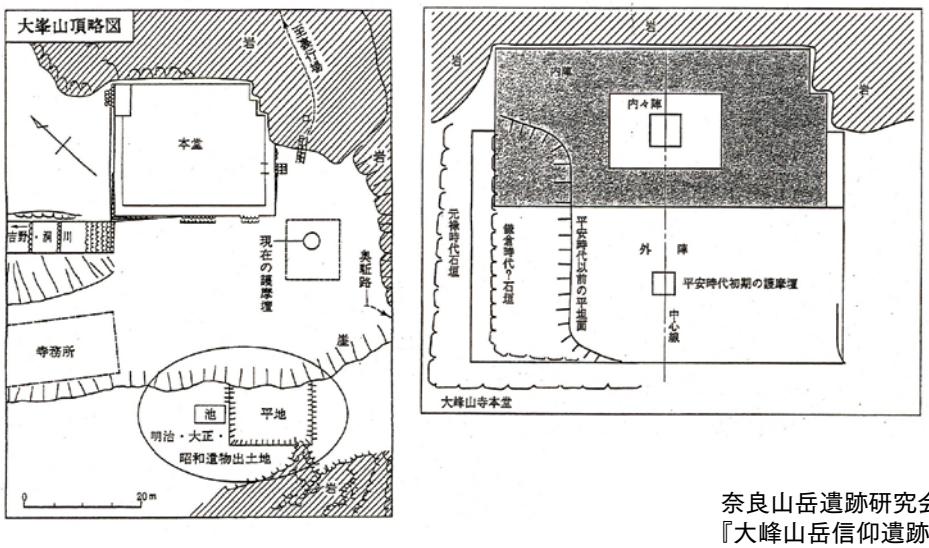
純な好奇心のみの記憶であった。現在ではこれらの土器は９世紀末から10世紀初頭にかけて、京都（平安京）で制作された黒色土器であることを知っている。

その後、奈良県遺跡地図の分布調査で大峯山系の北半部分を登山し踏査し、大峯山頂などを遺跡として登録することが出来た。

昭和58・59年に大峯山頂の大峯山寺本堂の解体修理を行なう発掘調査を実施し、結果的に奈良時代から現在までの大峯山頂の宗教建築の変遷を明らかにすることが出来た。

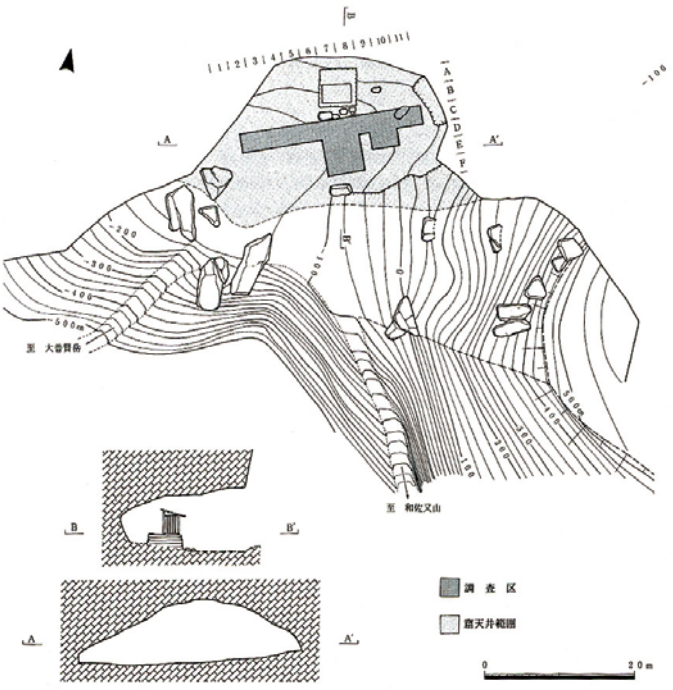
また、昭和61年には、山の考古学研究会を結成し、同時に下部組織として奈良県山岳遺跡研究会を立ち上げることになった。前者は全国の山の遺跡を再踏査し、後者は奈良県の山を中心として多くの成果をあげている。現在は福岡県宗像大社の沖ノ島は山の遺跡か海の遺跡かの命題を考えている。



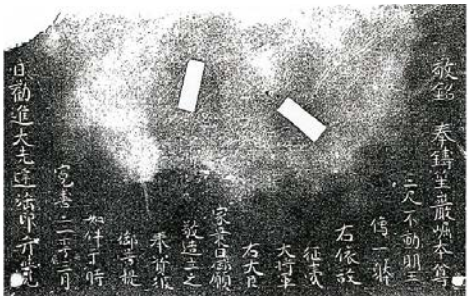


奈良山岳遺跡研究会編
『大峰山岳信仰遺跡の調査研究』2003年より

奈良県指定文化財　笙ノ窟　銅像不動明王像



笙ノ窟平面図・立面図（S＝1/250）



不動明王像框刻名（拓本）

笙ノ窟発掘調査団編『笙ノ窟発掘調査概要報告書』
上北山村教育委員会、1995年より

那智参詣曼荼羅

和歌山県立博物館編集・発行
『熊野三山の至宝
―熊野信仰の祈りのかたち―』
2009年より

第２章

考古学からみた宝満山信仰の始まり

小田　富士雄

１．宝満山調査の始まり

大宰府政庁の北東に望まれる宝満山（標高約830m）は古来竈門神社の鎮座する霊山である。その秀麗な山容が青空に浮かぶたたずまいは、見る者をして一種荘厳の気につつまれる。『延喜式』神名帳に「竈門神社一座明神大」と記載された式内社である。貝原益軒の著『筑前国続風土記』の中で次のように述べている。

「此山は、国の中央にありて、いと高く、造化神秀のあつまれる所にして、神霊のとゝまります地なれはにや、筑紫の国の惣鎮守と称す。凡国土には、鎮守となれる山あり。是を鎮山と云。神霊ありて、其国をしつめ守り給へり。（中略）祭る所の神社は、海神の女玉依姫也。鸕鷀草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）の御后也。日向国高知尾岳にて、神武天皇を産給ひて後、竈門山に入り玉ふたかや。相殿の神二座あり。左は神功皇后、右は八幡大神なり。」（巻之七・御笠郡上）

宝満山の山容は山岳崇拝の対象にふさわしいものである。神霊が山中の巨岩に宿り、また天に最も近い山頂には神が臨降してくるという古代人の思考は、８世紀代の常陸や出雲の風土記からもうかがわれる。巨岩、奇岩の景観に恵まれた宝満山もまた例外ではない。

宝満山の綜合調査が企画されたのは昭和35年（1960）８月、同年９月４日第１回会合が長沼賢海・干潟龍祥・西高辻信貞（太宰府天満宮・竈門神社宮司）の発起のもとに召集された。ここに「宝満山文化綜合調査会（代表・西高辻信貞）」が発足した。そして遺跡・遺物、文献、民俗、祭祀、石造美術、修験道関係の６部門が設けられた。筆者は遺跡・遺物関係部門に属し、鏡山猛教授のもと調査に従事した。考古学の調査は昭和35年２回、同36年１回実施した。第１次調査は竈門宮下宮所蔵の宝物館記録作成・山中遺跡踏査（10月６～９日）、第２次調査は山頂上宮に近い法城窟発掘・上宮背後の岩棚祭祀遺物包含層発掘・下宮礎石群の測量（10月16～19日）、第３次調査は下宮礎石群の一部発掘（４月５～12日）を行なった。下宮礎石群の調査では８世紀代に始まり、中世に及ぶ遺物から竈門神社に始まり大山寺に至る仏教関係遺跡、上宮岩棚遺跡では８世紀後半から10世紀代に至る神道祭祀関係遺跡であることが明らかになった。これらの経緯は、宝満山に初めて考古学の発掘調査の鍬が入り、世の関心を集めることとなった。しかし諸事情により20年後の昭和57年（1982）に筆者編『宝満山の地宝 ―宝満山の遺跡と遺物― 』（太宰府天満宮文化研究所刊）としてまとめられた。

２．山頂上宮地区の遺跡と遺物

宝満山の別称「竈門山」の由来は貞享年中（1684～87）に旧記を集めた『竈門山旧記』に、いま中宮跡から上宮に向う途中にある三岩鼎立した「仙竈岩」について、「鼎ノ如三ツ立立タル石有。高さ一丈余三石ノ間一丈、今道にシテ其の中間を通ル。爰ヲカマト石トモ竈門岳トモ申也。此石に釜をスヘ湯ヲワカシ玉ウト申」と記されている。

山頂の上宮社祠は巨岩上に位置し、その背後（東面）は切り立った絶壁をなす。ここを10mほど下ったところに西と南を巨岩で囲まれた岩棚状テラスがある。この北側はさらに絶壁をなして下る。地表には土師器杯の破片が散布する。登山者のロック・クライミングの練習地となり土師器や皇朝銭が発見されていた。筆者らはテラスの中央に東西トレンチを設定して発掘した。平坦面で60㎝の深さまで、東寄

りでは約40度の傾斜で岩盤まで約１ｍに及ぶ。主として土師器杯類が堆積し、その下半部50㎝の厚さの黄色土中に稠密な集積がみられた。これらは山頂で祭祀のあと投棄堆積したのであろう。遺物の主体をなすのは口縁から内面に油煙の付着した燈明用に供された土師器杯類で、糸切底出現以前に位置づけられる。採集資料には底部に「上宮」銘墨書のものがある。このほか碗・皿・蓋も若干あり、須恵器の杯・椀・長頸瓶・壷・灰釉陶片などがみられる。これらの特徴の示すところから上限は８世紀後半、下限は９世紀末～ 10世紀前半頃と推察された。この後も登山者らに採集された資料を追跡調査して、重要な資料もみられるところから、それらを報告し、あわせて宝満山の初期祭祀について考察を加えた『太宰府・宝満山の初期祭祀』（1983年）を公表した。

これまで上宮周辺で収集された遺物は上述した奈良～平安時代の土師器・須恵器に加えて、貨幣・滑石製品・銅製儀鏡・施釉陶・中国陶磁・仏像・仏具などがある。

貨幣はすべて皇朝銭である。筆者の調査時には表１で示す45枚が知られた。そして848年から890年までの鋳造銭が皆無である点が注意をひいた。このほか滑石製有孔円板・銅製儀鏡・施釉陶（二～三彩小壷・緑釉の皿・壷）などとあわせ考えると、８世紀代に始まる山頂祭祀は神道祭祀であり、その内容からみて、国家型祭祀に近い性格のものであったと思われる。その後仏像・仏具類が登場するまでの間にかなりの空白期を経て、仏教色の強い祭祀形態に変化したことがうかがわれる。以上の遺物からみた分期観をまとめてみると表２のようになる。

３．宝満山信仰の始まり

これまでの考古学調査や収集遺物を通じて、上宮祭祀遺跡の活動期には８世紀後半から10世紀代に及ぶ古代前半期（第Ⅰ期）と、11世紀後半から16世紀頃に及ぶ古代末期から中世を主体とする時期（第Ⅱ期）が設定できることが知られてきた。前者は歴史神道期の祭祀、それも律令祭祀的性格を示す内容であり、後者は仏教的色彩の強い神仏習合的祭祀の様相を読みとることができよう。さらに一歩すすめて前者の内容を検討するならば、まずはさきにも指摘した皇朝銭にみる奉賽空白期である。鋳造年で示せば835

種別	和同開珎	萬年通宝	神功開宝	隆平永宝	富寿神宝	承和昌宝	長年大宝	饒益神宝	貞観永宝	寛平大宝	延喜通宝	乾元大宝
鋳造年（西暦年）	和銅元年（七〇八）	天平宝字四年（七六〇）	天平神護元年（七六五）	延暦一五年（七九五）	弘仁九年（八一八）	承和二年（八三五）	嘉祥元年（八四八）	貞観元年（八五九）	貞観一二年（八七〇）	寛平二年（八九〇）	延喜七年（九〇七）	天徳二年（九五六）
数量	6	4	10	11	7	4	0	0	0	0	1	2

表1　宝満山出土皇朝十二銭一覧
（1983年集計）

分期	貨幣	滑石製品 銅製品	仏像・仏具	施釉陶	中国陶磁	土器		
						土師器	須恵器	黒色土器
1 8C 中～末	和同開珎 萬年通宝 神功開宝 隆平永宝	有孔円板 儀鏡				甕・皿 坏ａ 埦ａ 脚付盤	瓶・坏ａ 埦ａ・ｂ 蓋・皿・盞托	
2 9C 代	富寿神宝 承和昌宝			二彩陶 緑釉陶		坏ｂ 埦ｂ	埦ｃ 坏ｂ	
3 10C 初～後半	延喜通宝 乾元大宝					小皿ａ 坏ｃ		
4 11C 後半～			懸仏・付属品 仏頭		把手付 水注	小皿 ｂ・ｃ		埦

表2　上宮祭祀遺跡収集遺物の分期

祭祀分期		遺物分期	貨幣（皇朝銭）	滑石製品 銅製品	仏像・仏具	施釉陶（国産）	陶磁器 中国産	陶磁器 国産	土器 土師器	土器 須恵器	土器 黒色土器
Ⅰ	A	1 8C 中～末	760	有孔円板 儀鏡		三彩陶					
		2 9C 代	835			二彩陶 緑釉陶					
	B	3 10C 初～後半	907 958			灰釉陶					
〈空白期〉											
Ⅱ		4 11C 後半～									

表3　上宮地区祭祀の変遷
（－印は上宮祭祀遺跡、－印は竈門岩付近遺跡を示している。）

年（承和昌宝）から907年（延喜通宝）までの約70年間であり、祭祀の空白としては９世紀後半から10世紀初めに至る半世紀程度であったかと思われる。Ⅰ・Ⅱ期の約１世紀間に及ぶ大空白期にくらべれば、小空白期と称してよいものである。以上のような祭祀の流れを整理すると表３のように要約される。

ＩＡ期祭祀は宝満山祭祀の草創期であり、最古段階の祭祀である。竈門神信仰の起源は、大陸における竈を神聖視して家門の反映を祈る家神として祀る信仰に由来し、それが大宰府の創設期にその東北（鬼門）を鎮める大宰府鎮護の神として国家神的性格を有するに至ったのであろう。祭祀遺物にみる律令祭祀的性格は、７～９世紀代の宗像沖ノ島の第３～第４段階祭祀（半岩陰・半露天祭祀～露天祭祀）とも共通する。遣唐使派遣などの国家的事業や大宰府管内の有事に際して行なわれる国家祭祀的性格が付託されていたと考えられる。『続日本後紀』承和９年（842）７月３日条にみえる筑前国宗像神・竈門神らに崇りを払うべく奉幣使が派遣された記事などはこれを証するものであろう。つづくＩB期祭祀では皇朝銭や施釉陶が姿を消し、律令的祭祀が後退していることに気付かされる。９世紀後半以降は遣唐使が廃止され（894年）、新羅海賊の出没が沿海諸国の脅威を増大していた。また国内における天災・怪異もひきつづくなどの世情不安から、国内を鎮静すべく諸社への奉幣が行なわれた。筑前国の国神でもあった竈門神も承和７年（840）の叙位から、式内社に列し、嘉承元年（1106）正一位に叙せられるまで叙位昇格が続いた。ＩＢ期からⅡ期に至る時期にはこのような背景も考えておくべきであろう。

11世紀後半以降に顕現化してくるⅡ期祭祀は、北部九州では英彦山・求菩堤山・国東半島の六郷満山などとも規を同じくする原始修験信仰の草創期ともいうべき時期であった。

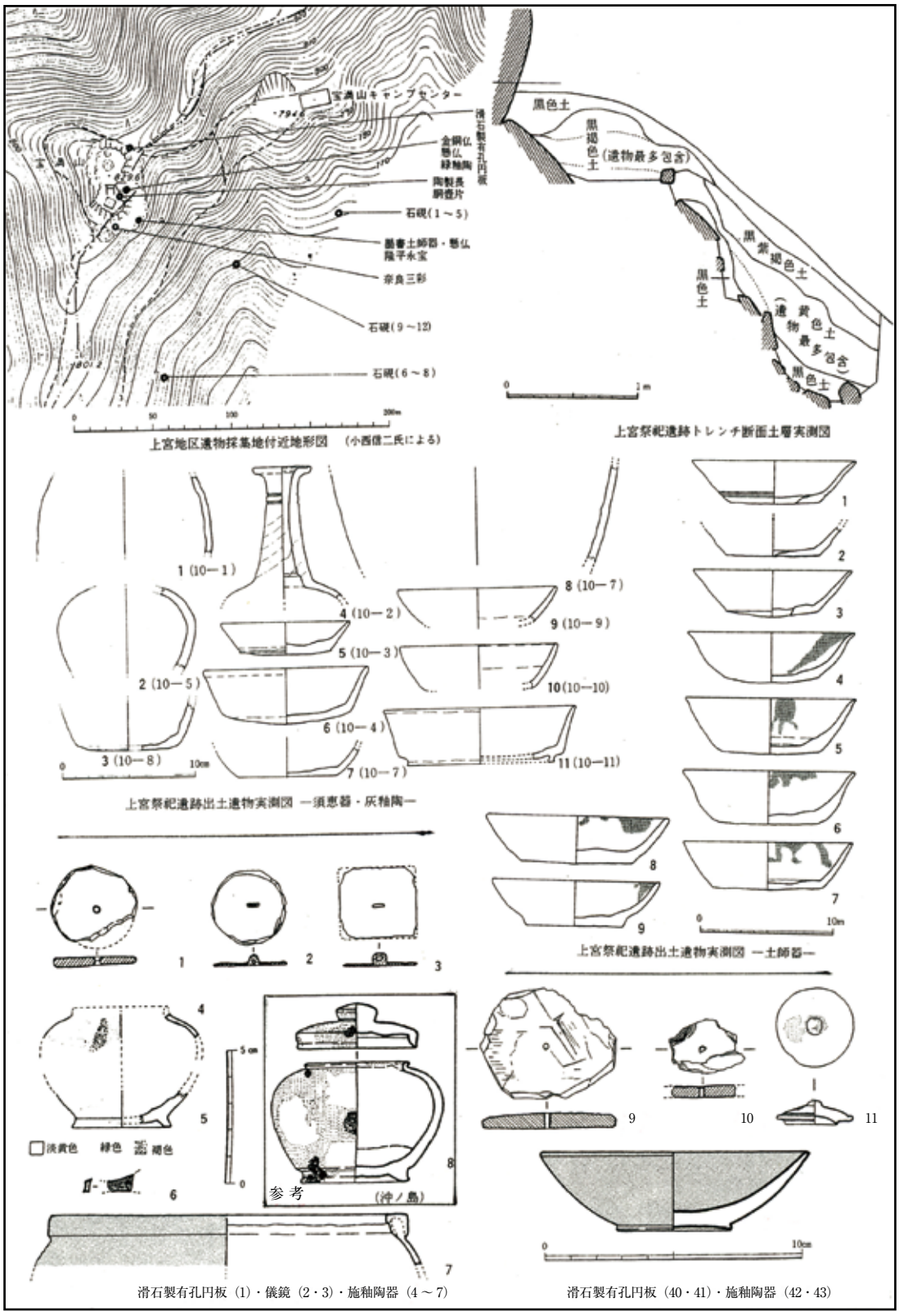
宝満山における仏教信仰はすでにＩＡ期にさかのぼって胚胎していた。下宮礎石群堂舎から発見された８世紀代の鴻臚館式古瓦一組から、史料にみえる竈門神社の神宮寺「竈門山寺」に比定できる。９世紀代には「大山寺」の寺号を有する山寺に発展する。この竈門山寺が全国的に知名度をあげる契機となったのは最澄の参籠であった。最澄は第16次遣唐使船で渡唐するに先立ち、その前年の延暦22年（803）閏10月23日、「大宰府竈門山寺」で、渡海の無事を祈って白檀像薬師仏四躯を造ったと伝えている（『叡山大師伝』・『扶桑略記』）。さらに帰朝後は全国にまたがる六所宝塔の一つをここに建立することを発願したが、その遺跡も最近太宰府市の調査によって明らかにされた。Ⅱ期以降に盛行してくる神仏習合信仰としての山岳修験の隆盛によって、先行する歴史神道祭祀は忘れ去られゆく運命をたどることになったが、考古学調査によってその歴史的推移を再確認した意義は大きいであろう。

参考文献

中野幡能 1980『筑前国宝満山信仰史の研究』太宰府天満宮文化研究所
森　弘子 1981『新版・宝満山歴史散歩』葦書房
森　弘子 2008『宝満山の環境歴史学的研究』太宰府顕彰会
小田富士雄 1977「筑前・竈門山寺」（『九州考古学研究・歴史時代編』）学生社
小田富士雄編 1982『宝満山の地宝－宝満山の遺跡と遺物－』太宰府天満宮文化研究所
小田富士雄・武末純一 1983『太宰府・宝満山の初期祭祀』太宰府天満宮文化研究所
小西信二編 1984『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書』財団法人太宰府顕影会
山村信榮 2007「発掘調査からみた宝満山について」（『都府楼』39号）財団法人古都大宰府保存協会

高瀬重雄 1969『古代山岳信仰の史的考察』角川書店
宮家　準 2004『霊山と日本人』（NHKブックス990）日本放送出版協会
大場磐雄 1970『祭祀遺蹟－神道考古学の基礎的研究－』角川書店
鏡山　猛 1972「日唐交通と新羅神の信仰」（『九州考古学論攷』）吉川弘文館
重松敏美 1969『豊州求菩堤山修験文化攷』豊前市教育委員会
中野幡能編 1977『英彦山と九州の修験道』（山岳宗教史研究叢書13）名著出版
北九州市立歴史博物館編 1977『研究紀要１・特集豊前修験道』北九州市
小田富士雄 1985「豊前求菩堤山とその信仰」（『九州古代文化の形成』下巻）学生社
小田富士雄 2005「北部九州の霊山」（『シンポジウム　山と地域文化を考える　資料集』）第20回国民文化祭越前町実行委員会

広瀬正利 1994『英彦山信仰史の研究』名著出版
第三次沖ノ島学術調査隊編 1979『宗像沖ノ島』吉川弘文館
小田富士雄編 1988『古代を考える・沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館



宝満山上宮地区遺跡と遺物

第３章

宝満山の歴史と信仰

森　弘子

１．神の山

太宰府の東北鬼門を扼して聳える宝満山は、標高829.6m、福岡県の北部中央に南北に連なる三郡山系の主峰三郡山（標高935.9m）から西南方向に張り出した先端部分に位置する山である。そのため見る方角によっては独立峰に見え、その山容は堂々として他を圧している。約9300万年前の白亜紀後期に、地下数kmの深所でマグマがゆっくりと冷え固まって形成された北部九州主部花崗岩類の早良花崗岩が隆起し、浸食をうけて形成された山であり、貝原益軒をして「満山岩石多くして、其形勢良工の削なせるが如し。誠に奇絶の境地也」と言わしめた。古い昔から、人びとはこの山を神と仰ぎ見、分け入っては磐座（いわくら）や尾根の先端などで祭祀を行い、あるいは窟や堂社に籠もっては、ひたすら悟りを求めて修行に励んだ。

この山は古く、御笠山、竈門山（かまどやま）とも称された。「御笠山」の名はその神南備型（笠型）の山の姿から生じたものであり、水分（みくまり）の神としての性格を現している。「竈門山」は９合目付近にある三石鼎立した竈門岩によるという説、雲霧が立ち登りカマドで煮炊きしているように見える山容によるという説、大宰府成立とともに道教の竈神が導入されことによるとする説などがあり、「宝満山」は祭神の神仏習合的名称の宝満大菩薩による。山名の変遷がとりもなおさずこの山の信仰の歴史を物語っているのである。

この山に鎮座する竈門神社は頂上に上宮、山麓に下宮、８合目（標高723m）付近に中宮跡がある。延喜式内社、旧官幣小社であり、平成25年に御鎮座1350年の慶賀の年を迎える。『竈門山宝満宮伝記』等の縁起は、この山での祭祀の始まりについて、大宰府ができた時、その鬼門除けのために山頂で八百萬神の神祭をしたことによると伝えている。それを物語るかのように上宮が建つ巨岩の断崖などで、古代の祭祀遺跡が発見されている。前掲小田富士雄氏の論考を参照ありたい。

竈門神社の祭神は玉依姫命。相殿に神功皇后、応神天皇を祀る。この山の開山は法相僧心蓮。天武天皇の白鳳２年２月10日、心蓮修行中に玉依姫が示現し、天皇の命によって上宮が創建されたと伝える。また鎌倉期の縁起『竈門山宝満大菩薩記』には、祭神宝満大菩薩が神功皇后の姉であり、竈門上下宮の創建が神功皇后を祀る香椎社の創建と同じ神亀元年（724）であると、両者の深い関係を強調している。これらの伝承は、この山が古く官寺僧などの山林修行の場であったことや、鎮護国家を祈る山として八幡教学のなかで重要な位置を占めていたことを物語るものであろう。これら縁起類には竈門大神あるいは宝満大菩薩にたいして、「九州惣鎮守」、「鎮西鎮守」、あるいは「本朝鎮守」であるとする宣旨等が下された平安末期隆盛の歴史をも記している。

竈門岩

２．鎮西の比叡山

延暦22年（803）閏10月、入唐請益天台法花宗還学生（にっとうしょうやくてんだいほっけしゅうげんがくしょう）として唐への渡海を志す最澄は、大宰府竈門山寺において遣唐使四船の渡

海の平安を祈って薬師仏４躯を彫った（『叡山大師伝』等）。この山が中央の史書に登場する最初の出来事である。竈門山寺の跡は、鴻臚館式瓦１組が採取された下宮参道南側の南北８列東西６列（７間×５間）の礎石群がある場所だと考えられているが、現在地表に見える礎石は平安後期に整地して再建された講堂か金堂クラスの大型建物である。山中東院谷には江戸初期の絵図に「伝教屋敷」の注記があり、そうした伝承があったことや、山林修行者の居所を意味する「山寺」という呼称と考え合わせれば、さらに広範囲の発掘調査等が必要と考えられる。

最澄は帰国後、大乗戒壇（だいじょうかいだん）の設置と六所宝塔建立の二大願を発する。六所宝塔は、奈良時代の国分寺・国分尼寺の制に替わって、法華経の功徳によって日本国の平安な治国を実現しようとするもので、多宝塔の上層に日本国で書写した法華経一千部を安置し、下層で法華三昧法を修して鎮護国家を祈った。設置場所は比叡山の近江国域と山城国域、上野国緑野（みとの）郡、下野国都賀（つが）郡、豊前国宇佐郡、そして筑前国であった。

筑前に建設予定の塔は、最澄生前には場所さえ決まっていなかったようだが、弘仁５年（814）、無事渡海ができたことを渡海前に祈願した神々に報謝するため筑紫に下った最澄は、檀像千手観音菩薩１躯をつくり、法華経一千部八千巻を書写した。三代座主円仁が唐から帰国後半年も大宰府に滞在し続けたのは、最澄の遺志の実現のためではなかっただろうか。円仁は承和14年（847）11月28日から５日間をかけて、竈門山大山寺に於いて、観世音寺講師の助力のもと、諸神に報謝の転経をしている（『入唐求法巡礼行記』）。沙彌證覚によって実際に宝塔が建立されたのは、承平３年（933）であった。その４年後承平７年には宇佐弥勒寺に建立予定であった安南宝塔が筥崎宮に建てられた（『石清水文書』）。内外ともに政情不安な時代、ことに海外の脅威の高まった時代であった。

相次ぐ天台の高僧の来山、そして六所宝塔の建立などを経て、宝満山は鎮西の比叡山ともいうべき様相を呈していった。最盛期、平安後期から鎌倉期にかけて、大山寺、有智山寺（うちやまでら）は、中国人の「船頭」を寄人として抱え対外貿易をさかんに行い、『両巻疏知礼記』（西教寺蔵）などの注釈書ももたらされた。法会としては百箇日法華六十巻談義や有智山三十講等が厳修され、台密の祖谷阿闍梨皇慶に両部の大法を授けた慶雲阿闍梨などの高僧が住み、山麓に営まれた別所では経塚造営、民衆教化などの活動が行われ、背振山の彼方を西方極楽浄土と目して往生した僧の名が中央の「往生伝」に散見する。

平安末の一時期大山寺別当は石清水八幡宮の関係者が補されるが、長治年間の都をも揺るがす事件の陣定によって、比叡山の末山と裁定された。そうした中にも九州各地に末寺・末社は増大していった。

３．金剛宝満

中世に於ける最大の出来事は蒙古襲来であろう。このことによって日本社会は大きく変動するが、宝満山信仰史上に於いても大きな転換期であった。

北部九州の守護職と大宰府の少弐の職を兼務した少弐氏は、宝満山に本城有智山城を築いた。この時期の宝満山に関する史料は乏しいが、中宮跡付近には両界の大日如来の種字を彫った大岩があり、文保２年（1318）の銘がある。その対面には梵字は削り取られているが、元応元年（1319）、元亨３年（1323）の銘のある十一面観音・釈迦・阿弥陀・大日四仏の種字を彫刻したと伝える岩壁が続き、中宮跡には正中２年（1325）に法華経一万部を転読した記念の碑が建っていた（『筑前国続風土記拾遺』）。これらはいずれも蒙古襲来の後の

自然石梵字（財団法人古都大宰府保存協会提供）

わずかな期間に造立されており、『大悲王院文書』から知られる雷山の状況、彦山の文書等を勘案すれば、蒙古襲来後の社会不安の中にあって、より強い験力が希求され、宝満山の修験化が図られ、修験の中心道場として「中宮」が開発されたものと考えられる。とともに彦山を胎蔵界、宝満山を金剛界とする入峰の儀軌も整えられていった。

中世宝満山の命運は少弐氏とともにあった。建武３年（1336）、少弐頼尚が都落ちした足利尊氏を迎えに行った留守を衝かれ有智山城が落城した。その後、少弐氏は度々有智山城の奪還を図り、文明３年（1471）には竈門神社に木造狛犬（県指定）を奉納するなどのこともあったが、天正４年（1528）の少弐政興の文書を最後に歴史上から姿を消した。山麓の内山・南谷・北谷に、学問を専らにした衆徒方300坊、修行を専らにした行者方70坊があったという坊舎も、行者方25坊のみとなり、永禄元年（1558）浄戒座主に願い出て、山上、西谷松の尾嶺・東院谷に移り住んだと伝えられている（『筑前国続風土記』等）。

戦国期には大友氏の幕下高橋氏が宝満城に拠った。宝満城は実像の明らかでない「幻の城」とされていたが、近年の研究では、山岳寺院を接収し上宮や中宮がそのまま城となり、麓に内山城、隣峰の愛嶽山に枡形城、頭巾山（とっきんさん）に頭巾山城など中心を守るべく周囲に城塞を配置した「宝満城塞群」ともいうべき城であったと考えられている。山伏の山上移住は、「大友氏の課役を逃れるため」と縁起は伝えるが、山上は城塞化されており、むしろ大友氏が山伏を被官化し、彼らの住処を城の施設として利用するため強制的に移住させたものと考えられる。このため、宝満山は山も人心も荒廃し、衰微の一途を辿った。

江戸期、宝満山の堂社の復興は福岡藩によって行われた。しかし浄戒座主没落後は山の組織が不安定で、座主が定まらない状況が続いていた。三代藩主黒田光之の時、父忠之に追腹（おいばら）した山伏明厳院秀栄の倅を国中山伏の惣司に任命した。この事に反発した宝満山は財行坊・山仲坊を彦山に遣わし彦山の助力を得ようとしたが、それ以来彦山は、「宝満山は彦山の末山である」と主張し、かえって両山の本末争いに発展した。宝満山は「古来宝満山は金剛界、彦山は胎蔵界、役行者以来双び立ちたる峯と承り候」と主張し、寛文５年（1665）、聖護院（しょうごいん）の末山となった。

その急先鋒が若くして衆頭となった平石坊弘有である。弘有は天正の兵火に焼失した縁起の再編集に着手し、国学者松下見林の校閲をうけ、五条大納言菅原為庸に本文の揮毫を、外題并和歌は鷹司右大臣兼熙に依頼するという格式高い『竈門山宝満宮伝記』乾坤二巻として成立させた（『竈門山宝満大菩薩縁起』奥書）。本縁起編集の目的は、宝満山が「彦山より格の高い山」であると実証することにあり、それ故、内容も伝説的部分は少なく編年体に史実が述べられ、体裁は当代きっての格式をもって整えられた。弘有は戦乱で荒れた山の復興に邁進したが、元禄元年（1688）離山禁錮を命じられ、彦山・宝満山の本末論争は一応の和解をみた。

弘有離山後の宝満山には座主楞伽院（りょうがいん）がたてられ、山中二十五坊、筑前一円に組下三十数坊の一山組織が確立し、黒田藩の祈祷社として入峰、雨乞い祈祷などが行われた。入峰修行は修験道においてもっとも大切な修行であるが、古来の彦山・宝満山間の大峯（秋峰）修行に加えて、元禄十二年（1699）、宗像孔大寺山を胎蔵界とし、三郡山系に展開する古代以来の寺院等を巡り、帰路は宗像・香椎・筥崎等の古来の大社、博多市中・福岡城内を経巡る葛城峯（春峰）が「再興」された。

４．明治維新、そして現在（いま）

明治初年に相次いで出された所謂「神仏分離令」は、宝満山にとって南北朝期の合戦、戦国期の一山を城塞化した宝満城の戦いに巻き込まれたことにまさる危機であった。明治５年（1872）修験道が廃止され、山伏には離山の命令が出され、吉祥坊吉田広輝一人を祠掌として残し、６年には全員宝満山を離れた。山中では廃仏毀釈が徹底的に行われ、仏教的建造物、仏像、仏具等が払拭され、山伏が手を入れ育成してきた山林は上地（あげち）となった。

このような時代にあって宝満二十五坊が、座主をはじめとする改革派（廃仏派）９坊と亀石坊を中心

とする守旧派（奉仏派）16坊に分裂したことが、この山の衰亡に拍車をかけ、竈門神社上宮は内山村の村社、下宮は無格社、中宮にあった講堂は神祇殿とされ別社と扱われたが、間もなく廃止となった。福岡裁判所判事として赴任した原田直敦の指摘により、吉嗣拝山等地元の人びとが官幣社昇格運動をおこし、官幣小社に昇格したのは明治28年（1895）のことであった。

宝満山採灯護摩供

古来、人びとは様々な願意をもってこの山の神に祈ってきた。歴史の表舞台では「鎮護国家」を祈ることが中心的なこの山の役割として印象づけられるが、庶民の信仰も地下水の如く、この山に息づいている。夏の夜間に山中をめぐる大巡行（おおめぐりぎょう）では、行中蝗封（いなごふう）じの呪が唱えられたことや、今もなお正月行事として行われる「作試し」は、水分の神と崇められた農耕神としての性格が連綿と続いていることの証であり、４月のえんむすび大祭は、成人儀礼として登拝した十六詣りの流れをくむものであり、女神の優しさを慕う人びとの集いである。

今日、九州一の登山者を集めるという宝満山。リピーターが多いのもこの山の魅力故であろう。山に分け入る人々は、意識するとしないとにかかわらず、この山の神の恵みをいただいているのである。

春はもえ秋はこがるる竈門山　霞も霧も煙とぞみる

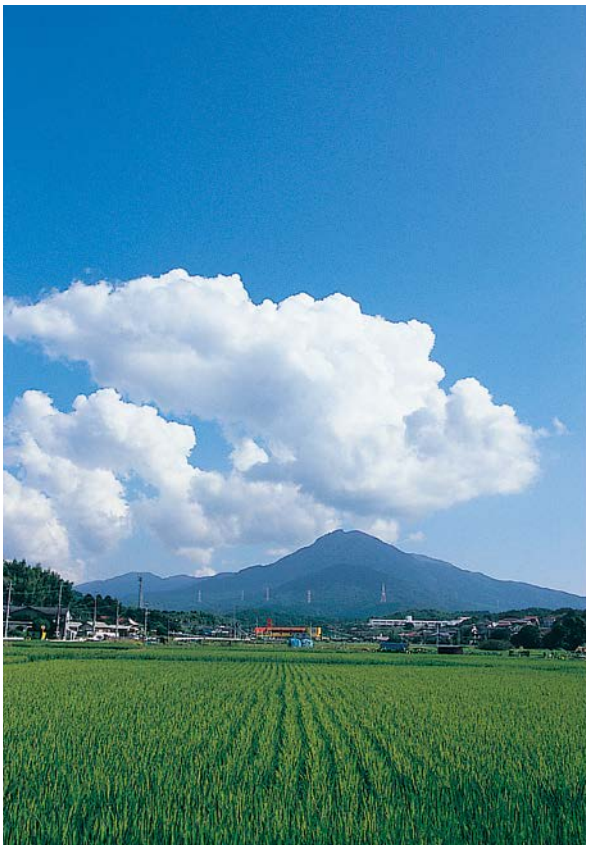
古歌に詠まれたこの山の自然がいつまでも豊かで、人びとに安らぎを与え続けてくれることを祈る日々である。

参考文献

中野幡能編 1980『筑前国宝満山信仰史の研究』太宰府天満宮文化研究所・名著出版

森弘子 2008『宝満山の環境歴史学的研究』（財）太宰府顕彰会・岩田書院

中西義昌 2002「戦国期筑前中南部における領主権力の動向」『福岡地方史研究』40



宝満山全景（太宰府市高雄から）　栗原隆司氏 撮影

第4章

宝満山と古代大宰府

酒井　芳司

はじめに

『竈門山宝満宮伝記』、『竈門山宝満宮縁起』、『竈門山旧記』など、近世における宝満山の縁起は、天智天皇が都府楼（大宰府政庁）を建てた時に、鬼門（東北）にあたる竈門山（宝満山）で鎮護のための祭りを行ったと伝える。宝満山は大宰府がその麓に置かれるにあたって、その鎮護の山となったというのである。

このような記述は古代の文献にはみられない。はたして宝満山は大宰府の鬼門を護る山であったのか。このことを考えてみたい。

「神」銘墨書土器　写真提供：九州歴史資料館

「寺」銘墨書土器　写真提供：九州歴史資料館

「蕃」銘墨書土器　写真提供：九州歴史資料館

1．宝満山の祭祀と大宰府

すでに考古学的調査の成果から明らかにされているように、宝満山では8世紀の初めから遺跡がみられ、とくに8世紀後半以降の土師器や皇朝銭、滑石製品が多くみつかるようになる。これらは国家的な性格を持つ祭祀であり、大宰府が置かれたことと無関係ではないだろう（第6部第2章・第5章を参照）。太宰府市大字内山の辛野遺跡では、観世音寺と国分尼寺など寺院でしかみつからない土師器の鉢や祭祀に使われた製塩土器とともに、「神」や「寺」という銘文がある墨書土器がみつかっている。また「蕃」銘墨書土器の存在から、異国を降伏させる祭祀が行われたのではないかという推定もあり、この時期の新羅との関係悪化と関わるのだろう。これまで日々、地域の人びとは、宝満山から流れる河川から農耕の恵みをいただき、宝満山を見上げて信仰していたことだろう。しかし、宝満山は、国防と外交、九州の統治を職掌とする大宰府が行う国家的祭祀の場となり、そこに神社や寺院が建てられていった。それが竈門神社であり、竈門山寺であったとみてよいだろう。縁起が伝えるように、大宰府との関わりが7世紀まで遡るかどうかは確かな史料がないものの、宝満山における国家的祭祀が大宰府の関与をもって開

始されたことは確実である。

2．宝満山と八幡神

天平勝宝７歳（755）、八幡神は竈門神がわが姨であるという託宣を下した（『宇佐八幡宮御託宣集』）。竈門神社に八幡神（応神天皇）が祀られているように、宝満山と八幡神は密接な関係を持つ。８世紀、隼人征討や東大寺大仏造営の援助を通じて、八幡神は急速に国家との結び付きを強めて成長していく。神亀２年（725）には現在の宇佐神宮の鎮座地に小倉山社が造営され、13 ～ 14世紀に成立した宝満山最古の縁起『竈門山宝満大菩薩記』は、神亀元年に応神天皇の母、神功皇后を祀る香椎廟と竈門神社の上宮・下宮が創建されたと伝える。加えて、宝満山の東、豊前方面に向かって、米ノ山峠を越えた旧筑穂町にある大分八幡宮の創建も江戸時代の縁起によれば、神亀３年と伝えられる。宇佐八幡宮のある豊前国から博多湾沿岸にいたるルート上の神社が同時期に画期を迎えた伝承を持つことは注意してよい。

3．宝満山の神に期待されたもの

７世紀以前、御笠郡地域は、那津から内陸に進んだ場合、664年に水城が築かれた二日市低地帯を過ぎて、肥国（肥前・肥後方面）、豊国（豊前・豊後方面）に道が分かれていく要衝である。御笠郡地域には、物部や大伴部、壬生部、山部など軍事的な部民が分布し、宝王女（斉明天皇）が領有する財部も居住していた。大宰府が置かれる以前から、倭王権はこの九州における要衝の地を掌握していたのである。このような交通の拠点に位置することから、宝満山は、豊前国にあって大宰府との結び付きを強めようとして、今日の筑豊地域に勢力を伸ばしてきた八幡神や、さらにはその母である神功皇后とも結び付き、８世紀後半になると、外敵から国土を護る神として、また大宰府の所在地の鎮護の神として期待され、大宰府によって祭祀が行われるようになったのではないだろうか。９世紀になると、最澄や円仁、円珍などの入唐僧が、さかんに宝満山に渡海の安全を祈るようになる。外敵からの守護が期待されるようになったことから、さらに航海の安全を保証する神としての性格も獲得していったのであろう。

大宰府政庁跡からみた宝満山　栗原隆司氏 撮影

4．中世における宝満山の信仰と対外交流

中世における宝満山は修験道と結び付き、新たな様相をみせる。蒙古襲来を契機として、外敵に備えて修験道の力への期待が強まり、14世紀頃までに宝満山は修験道が導入され、金剛界の山と認識されるようになる。これに対し、豊前国の彦山（英彦山）は胎蔵界とされた。修験道では神仏習合の傾向が顕著であり、宝満山においても磨崖梵字や懸仏など神仏習合思想を表現した遺物がみつかっている。また、輸入陶磁器や中国から伝わった経典、中国で制作されたとみられる菊目石（サンゴ）の塊から掘り出された珍しい獅子、近年、九州西部の対外交流の要

衝を中心として分布が確認され、12世紀から14世紀に南宋からもたらされた薩摩塔のうちの一基など、かつての宝満山の盛んな対外交流を物語る遺品が存在する。

しかし宝満山では、14世紀に北部九州を支配する少弐氏の本城である有智山城が南谷に築かれ、15世紀まで有智山城は落城と少弐氏の奪還を繰り返した。また、16世紀には豊後の大友氏により、宝満山は城塞化され、宝満城と呼ばれるようになる。宝満城は高橋紹運が城主に任じられたが、天正14年（1586）の岩屋城の落城と紹運戦死の後、島津軍に降伏し、多くの建物が焼失した。

5．近世の宝満山と修験道

中世末の戦乱で被害を受けた宝満山は、豊臣秀吉や小早川隆景によって米の施入や建物の造営が行われ、復興されていった。慶長5年（1600）に黒田長政が筑前国を受領した後は、黒田藩（福岡藩）による復興が行われた。近世初頭の宝満山は座主も定まらず、戦国時代以来の混乱が続いた。万治元年（1658）に平石坊弘有が衆頭となり、祭事や法会の復興、講堂の再建を行うなど、復興に努めた。しかし、彦山との本末争論を経て、弘有が失脚すると、福岡藩により座主として楞伽院兼雅が任じられた。その後も彦山との争いは続き、元禄9年（1696）、福岡藩の裁定によって和睦がなり、混乱に終止符が打たれた。

宝満山は、彦山を胎蔵界とするのに対して、金剛界の修験の山とされ、近世においては、宝満山の山伏が秋に英彦山に駈ける峰入り（大峯）、春に宗像孔大寺山を胎蔵界として駈ける峰入り（葛城峯）、夏に山内を巡る大巡行が行われた。

明治元年（1868）の神仏分離令の布告を契機に、宝満山では廃仏毀釈が行われ、山内の建物や仏像、仏具、経典などが徹底的に破壊された。25坊あった山伏も山を降りていき、後に修験道も廃止された。しかし山伏は地域社会の中で命脈を保ち、峰入りも次第に復興されていった。1982年、開山心蓮上人の1300年遠忌を記念して宝満山修験会が結成され、峰入りが本格的に復興された。2013年は宝満山から英彦山への峰入りも再興され、宝満山も国の史跡に指定されるなど、その歴史を未来に伝える地域の人びとの努力が実を結びつつある。

竈門神社の七夕まつり（2017年8月7日）

参考文献

中野幡能1975『八幡信仰史の研究（増補版）上・下』吉川弘文館

小田富士雄編1982『宝満山の地宝―宝満山の遺跡と遺物―』財団法人太宰府顕彰会

五来重編1984『山岳宗教史研究叢書18修験道史料集〔Ⅱ〕西日本編』名著出版

財団法人神道大系編纂会編・中野幡能校注1989『神道大系神社編四十七 宇佐』

森弘子2008『宝満山の環境歴史学的研究』財団法人太宰府顕彰会

九州国立博物館編2009『トピック展示 祈りの山 宝満山』財団法人太宰府顕彰会

column 宝満山の山容

「此山は、國の中央にありて、いと高く、造化神秀の集まれる所にして、神霊のとどまります地なれはにや、筑紫の國の惣鎮守と称す。」
「此山は峯高くそひえ、雲霧ふかくおほひ、烟気つねに絶えす。故に竈門山と云。」
「滿山岩石多くして、其形勢良工の削なせるか如し。誠に奇絶の境地也。篤信かつて諸國の名山を多く歴観せしに、かかる所はいまた見す」

『筑前國續風土記』貝原益軒

福岡藩稀代の儒学者・貝原益軒は、宝満山の山容と由来を上記のように記している。本記述で繰り返し出てくる「峯高く」は、宝満山の形容として相応しい。下の写真では、左に大野城跡がある四王寺山（標高410m.)、右に宝満山（標高830m）を写している。見る角度にもよるが、宝満山の高さは数値以上に際立つ。宝満山の別名「竈門山」も、北の玄界灘と南の有明海から流れ込む気流が、背丈のある宝満山の山肌に突き当たり、雲霧が発生し易い地理的性質に由来する。

太宰府の人々が宝満山を仰ぎ見る様は、今も昔も変わりなく、まさしく「霊峰」と呼ぶに相応しい。

（小嶋　篤）

四王寺山と宝満山

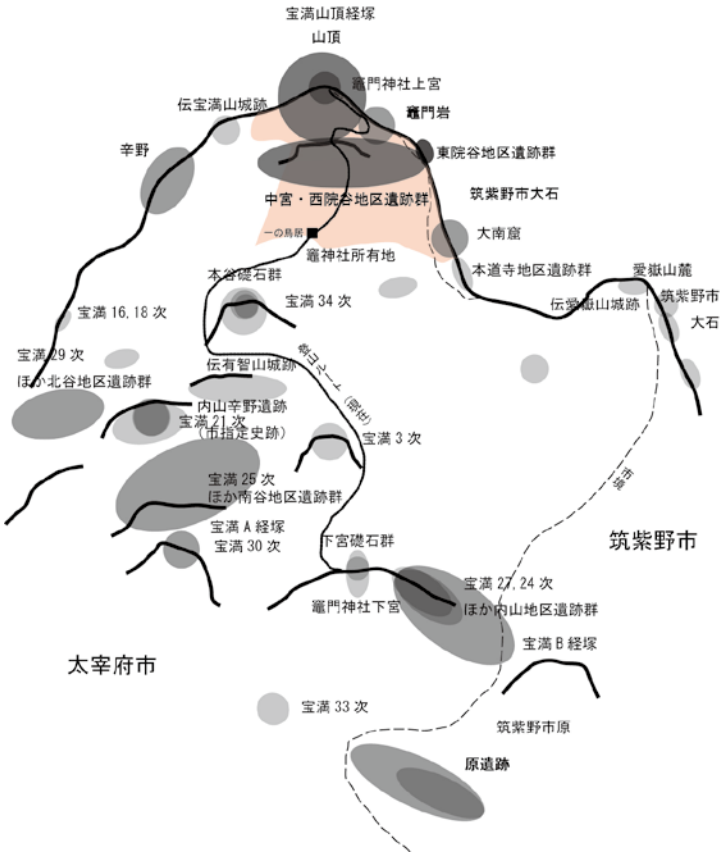
第５章

宝満山の最新発掘調査成果

山村　信榮

はじめに

宝満山遺跡群と称するこの遺跡は太宰府市大字北谷の一部、大字内山、筑紫野市大字原、大石、本道寺に展開する広域の遺跡で、さらに北の宇美町側にも広がる可能性を持つ。太宰府市と福岡県がおこなってきた宝満山での埋蔵文化財の調査は、平成31年２月現在で調査次数は44次を数え、悉皆調査を除く調査総面積は39,714㎡となっている。調査原因は学術調査から農地改良、鉄塔・ダム・道路・博物館建設、宅地建設、土取りなど多岐にわたっている。古くは1961年の小田富士雄氏ら宝満山文化綜合調査会による山頂、下宮礎石群、法城窟などの調査を嚆矢とし、1970 ～ 80年代には太宰府天満宮文化研究所による遺跡分布調査、地元行政による調査は昭和61年（1986）以降、現在も続いている。近年は開発に先立って、山中の遺跡の状況を把握するための調査が平成17年から５ヶ年間実施しており、太宰府市側の325,000㎡の悉皆調査と作図をおこなった。遺跡の山頂や山中、下宮地区などの一部は平成25年10月に「宝満山」として国の史跡となった。



宝満山遺跡概念図

１．黎明期の宝満山

内山辛野遺跡や筑紫野市本道寺の東院谷では悉皆調査や平成15年７月の水害調査で遺物が採取されているが、その中に８世紀初頭に位置づけられる須恵器の坏が見られる。８世紀も中頃以降になると、山裾では原遺跡で「薗」銘の墨書土器を含む生活跡が、至近の36次調査では二彩陶器が出土している。下宮地区では瓦を伴った包含層が、さらにその上の内山辛野での21次調査では煮炊具としての甕を含む土器群と整地層が見つかり、その眼上に祭祀遺跡である辛野、山頂遺跡が展開している。その他、下宮から中宮に至る間の独立峰である３、30、34次地点の頂部付近で須恵器の坏や蓋の破片が採取されて

いる。このような状況を総合的に判断すると、宝満山での遺跡の形成は７世紀後半にはじまり、８世紀中頃には原遺跡などの山裾で一定期間の滞在を可能にする生活空間が形成され、21次地点のような山中でのキャンプサイトがそれに連動して展開し、現在の登拝ルート沿いの独立峰の頂部で小規模な土器を用いた祭祀が連鎖的におこなわれて、北西面では辛野遺跡、南西面では山頂遺跡が最大の祭祀場となっていたことが理解される。山頂で出土した墨書土器に「寺」銘のものがあり、祭祀のために山中に入っていた者の中に仏教を背景とした人間が含まれていたことは考えられる。なお、下宮地区周辺での奈良時代の瓦の出土から、この時期に堂舎の存在した可能性が指摘されているが、大宰府系鬼瓦片も出土しており、平安時代に先きだって堂舎が存在した可能性がある。

宝満30次の経塚埋納坑

宝満34次の
経塚埋納坑と
金銅仏

２．平安前期

９世紀に入ると遺跡の数は激減する。下宮地区周辺や本谷地区、愛嶽山山頂などで少量の土器が出土するに留まるが、山頂だけは特別で祭祀に用いられたと考えられる土器の大半はこの時期のものである。多くの土器の縁に油煙の跡が残され、闇の中で土器に油を注いで日を灯して巨岩の上で祈りがささげられていた光景が想像される。模造鏡や滑石製の形代、皇朝銭、緑釉陶器などの一連のものはこの際に奉げられたものであろう。墨書土器には、山頂のものに「岳」が、辛野遺跡のものには「蕃」の文字があり、山岳において異国の何がしかに対して祭祀がおこなわれたことが理解される。

９世紀後半から10世紀になると下宮と中宮の中間の独立峰に３間四方で総柱の礎石建物が忽然と現れる。瓦を所要したもので柱の芯心の幅は両外が2.7m、中央が３mの一辺が7.4mのもので山を削り出して作った方形の基壇を伴っている。石で築かれた階段の位置から南を正面とした建物で、北には玄界灘、東には山頂を仰ぐ好位置に立地している。建物の位置から平安時代の様式とされる小金銅仏が出土している。この施設が近年、天台宗を開いた最澄が企画した六所宝塔のうちの日本の西端に置かれた「安西塔」であったのではないかと指摘されている建物である。この時期は、この遺跡を除けば山中では遺跡の形成は極端に少ない。

宝満29次の石垣による区画

３．平安後期から鎌倉時代

11世紀後半になると山中では爆発的に遺跡が形成されだす。内山、南谷、北谷、本道寺地区は現在の段々になった田んぼや畑、宅地の各所で土器が分布し、遺構が確認されており、山の緩斜面を段造成して生活面を次々に確保していった様子がうかがえる。北谷の宝満29次では

宝満21次遠景（南東より）

土地を10数ｍごとに低い石垣を用いて区画した様子が確認され、その区画の中で鍛冶炉が数基展開して刀剣や鎧などの残片が出土している。内山の21次調査地点では幅10ｍにわたる鍛冶作業をおこなう作業面が確認され、開発された空間が生活のためのみならず工房を含むものであったことが判明した。この様子は大宰府観世音寺境内の様相と酷似しており、平安後期以降、寺社の坊にたくさんの修行僧や商人や職人が雑居していた様子が復元される。山中が一種の寺内町のような都市的な場となっていた。竈門神社境内の37次で調査した下宮礎石群は12世紀に東西23ｍ、南北32.5ｍの整地を行った上で建設された礎石建物で、７×５間、23.3×17.8ｍの規模であることが確認され、大宰府観世音寺講堂跡、宇佐弥勒寺講堂跡に次ぐ九州屈指の建造物であった。おそらくはこの時期においては山内での中心建物であったと考えられる。

宝満Ｂ経塚とした筑紫野市大字原字山崎の丘で出土した経筒には天永元（1110）年の銘があり、文書の内容から肥前国松浦郡の僧「観尊」が「大南　沙門堂」に止宿し修行したことがわかる。この経塚が出土した東側の水田に「ビシャモン」という呼称が残っており、周辺から古代の瓦が出土することから、ここに「毘沙門堂」があった可能性が高い。展開する坊の中に小規模な堂社が含まれていたことがわかる。これら開発された坊から見上げた峰の上に「キョウヤマ」などの名称があり、如法によって聖地となった丘の周辺に聖なる坊や堂社が開かれるというストーリーが描ける。この聖なる丘は眺望として隣の「キョウヤマ」と連鎖して山頂までつながっている。山頂も中国陶器製の経筒が出土しており経塚が形成されたことがわかっている。山頂は同じく経塚のある脊振山頂、英彦山頂などと連鎖して広大な仏教世界を展開していた。これらの山々は水配の山として周辺の耕地を潤し、地域開発にとっては欠くことのできない要所であり、そこをこのような山岳寺院が占拠していた様子が徐々に明らかにされている。

４．それ以降の宝満山

鎌倉時代後期から南北朝前半頃が展開する坊跡のピークと考えられ、内山辛野の21次調査地点では前面に２段の石垣と階段、奥に土塁と枯山水の庭園、数寄屋風建物を備えた館的な建物が成立している。この建物は焼失して終焉を迎えたのち、その上に墓が穿たれている。発掘調査では14世紀後半以降の顕著な生活を伴う遺構の確認が現状ではなされていない。墳墓は内山、北谷地区に存在することから、現在まで調査対象になっていない現在の集落や西院谷や東院谷といわれる山中の近世の坊跡群に重なっているものと思われる。有智山城と呼ばれ

宝満32次の伝「有智山城」土塁

てきた南谷の九重原にある巨大な土塁は、内側に守るべき主たる郭がなく、明時代の染付磁器などが分布することなどから戦国時代後半期の宝満山頂を中心とした宝満山城を防備するための大城戸の機能が付された施設であった可能性が考えられるようになってきた。

このように近年の調査によって、ある部分では新見地が、ある部分では今までの説を覆す所見が提示され、徐々に遺跡としての宝満山が過去を少しずつ語りはじめている。

第6章

宝満二十五坊の姿 ―近世坊跡の平面構造調査―

岡寺　良

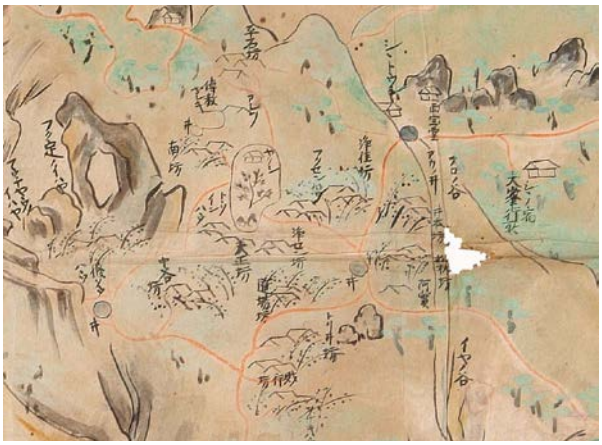
はじめに

竈門神社に伝わる『竈門山旧記』によると、宝満山の坊舎は元々山麓に展開していたが、弘治（こうじ）２年(1557)、豊後国守護・大友宗麟の検地により壊滅的な打撃を受け、その翌年（永禄元年)、修験を専らとする行者方の二十五坊が、宝満山の山上に坊舎（日常的な居住空間）を構えることになったとされている。これが「宝満二十五坊」であり、明治５年（1872）の修験宗廃止による下山まで、近世宝満山の中心を形成することになる。この「宝満二十五坊」は、座主（ざす）跡の他、山上の東側に展開する東院谷（とういんだに）に16の坊、中宮跡の西側、百段ガンギの両側に展開する西院谷（さいいんだに）に９つの坊が知られていたが、その詳細な平面構造についてはこれまで不明とされてきた。

１．山上坊跡の調査と坊名称の特定

2007 ～ 08年、筆者は宝満二十五坊の平面構造を調査すべく、既往図を元に現地調査を行い、座主跡・東院谷と西院谷の坊跡の平面図を作成した。東院谷は座主跡を頂点に、南東側へ下る尾根上を中心に、10m×20mほどの広さで石垣を持つ坊舎の平坦面群が確認された。西院谷もまた、中宮跡を頂点に参道の両側に坊舎の平坦面群が確認された。そしてこの平面図を元にして坊名称の特定作業を行った。坊名称の特定にあたり、その手がかりとなる文献史料として重視したのが『竈門山水帳』である。これは、寛文11年（1673）から文化５年（1808）までの坊の寺内（境内)、山林等の所有財産の範囲を、四囲（東西南北の境界)を明示する形で記載されたものである。また『筑前國続風土記附録』「竈門神社」の項には、境内の施設について順を追って列記されており、手がかりとなった。絵図としては、先程の『筑前國続風土記附録』の挿図（竈門山神社圖）や、江戸時代前期の様子を描いたと推定される『宝満山絵図（東・西)』(福岡県立美術館)を援用した。特に『宝満山絵図』は、東院谷ではほぼ特定された配置で描かれており(写真)、絵図の正確さが窺われた。その結果は西院谷では一部不明確な点を残すが、次頁下段の図示するとおりである。

宝満二十五坊の石垣と参道（東院谷）



宝満山絵図（東・部分）〈福岡県立美術館所蔵〉

2．坊跡群の平面構造から読み取れること

坊跡群は山中を束ねる位置にある座主を頂点に、他の25の坊が、東院谷と西院谷に並列的に配置されている。中でも特徴的なのは、座主や東院谷坊跡群が主要伽藍である講堂の置かれていた中宮跡よりも山頂側に所在する点である。他の類例として豊前・求菩提（くぼて）山の配置を見ると、座主が坊群の頂点に位置することについては宝満山と同様であるが、中宮（護国寺跡）・上宮（山頂）は、その坊跡群から結界石や禊場（みそぎば）を隔てて上位に位置し、「聖（＝伽藍）」と「俗（＝坊）」の上下関係を明確に区別しており対照的である。宝満山の「聖と俗の混在」が生じた背景には、やはり弘治・永禄年中の混乱を発端にする山上坊群の成立という特殊事情が考えられるのでは無かろうか。今後、同じく永禄年中に築城された「宝満城」の検討ともあわせて考えていく必要があろう。

おわりに ―今後の展望―

近年、山岳寺院を始めとする山岳宗教遺跡が、考古学の調査･研究対象として注目を集め始めている。しかし、伽藍を中心とする発掘調査や石塔・墓石等の石造物調査が中心であり、境内全体を包括的に調査検討する段階までにはなかなか至っていないのが現状である。実際、今回判明した宝満二十五坊の構造が、他の事例に比べて普遍的であるのか否か、即断できる状況ではない。今後、他の調査事例を収集し、比較検討に至る段階を創出するのが急務であると言えよう。

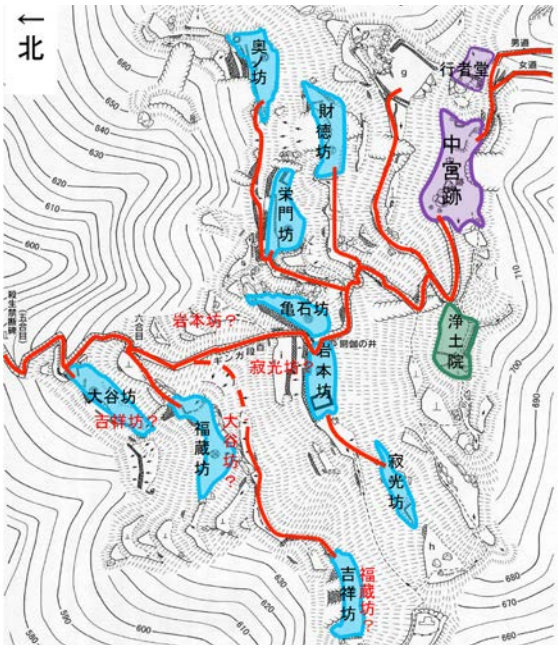
本稿では紙数の関係上、現地での調査方法や、坊名称の特定作業過程などについては割愛せざるを得なかった。それらについては下記の筆者の文献（岡寺2008）を参照願いたい。

参考文献

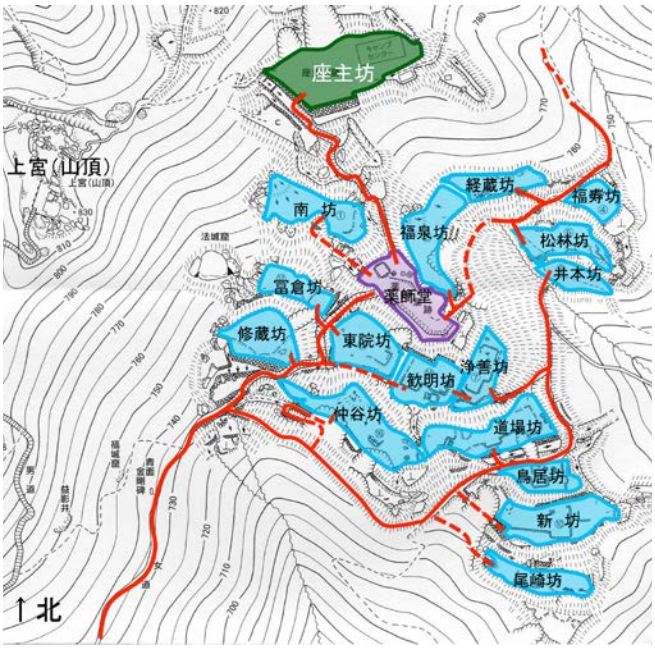
岡寺　良「宝満山近世僧坊跡の調査と検討―山岳寺院の平面構造調査―」（『九州歴史資料館研究論集』33、2008年）

小西信二編『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布報告書』（財）太宰府顕彰会、1982年

森　弘子『宝満山歴史散歩』葦書房、1975年



中宮跡・西院谷地区境内平面図



座主坊・東院谷地区境内平面図

※上図は岡寺2008文献掲載図を加工して作成した。水色は各々の坊跡の範囲を示し、座主と浄土院（滅罪寺）は緑、主要堂宇は紫で示す。
赤線は主要参道及びそこから坊跡等に続く道を示す。坊名称は、『竈門山水帳』基本としながら、明治初年段階のものを掲載した。
また、他の坊として候補があるものは、赤字で「?」を付して掲載している。

第7部 大宰府管内の信仰

神宿る島・沖ノ島

第７部　大宰府管内の信仰

第１章　宗像・沖ノ島と胸肩君　小嶋　篤 …… 303
第２章　宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果　小田 富士雄 …… 311
第３章　宗像・沖ノ島祭祀の実像　笹生　衛 …… 321
第４章　巨岩と社殿　小嶋　篤 …… 331
第５章　沖ノ島祭祀と遣唐使の航海　大高　広和 …… 337
第６章　御長手神事と沖ノ島　岡　崇 …… 343
第７章　マツリの記録　今井　涼子 …… 349

第７部では、大宰府管内の信仰を取り上げ、とくに平成29年（2017）に世界文化遺産となった「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群」に注目する。本遺産の構成資産は、古代には筑前国宗形郡に属していた。宗形郡は西海道唯一の「神郡」であり、大宰府管内でも特異な地域となる。第１章では、本遺産群と関係の深い胸肩君に関する研究動向を整理する。第２章～第６章では、考古学・文献史学・民俗学から多角的に沖ノ島祭祀の実像に迫る。第７章では、九州国立博物館が実施してきた無形文化財の記録（デジタルアーカイブス）の概要を紹介する。

なお、第１章・第７章は新稿である。

第２章は、平成29年（2017）１月21日に九州国立博物館・「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議が合同開催した講演会「神宿る島と祈りの記憶」の当日配布資料を再掲載したものである。

第３章～第６章は、平成30年（2018）１月20日に九州国立博物館・「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議が合同開催したシンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

「神宿る島と祈りの記憶」当日配布資料表紙

「知られざる沖ノ島祭祀」ポスター

第１章

宗像・沖ノ島と胸肩君

小嶋　篤

はじめに

『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』は、2017年７月に世界遺産に登録された。関連遺産群には、胸肩君が造営したと考えられる新原・奴山古墳群も含まれる。胸肩君と沖ノ島の関係は、現存する日本最古の文献史料『古事記』・『日本書紀』から窺える。

> 故其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之奥津宮。次市寸嶋比賣命者、坐胸形之中津宮。次田寸津比賣命者、坐胸形之邊津宮。此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也。
>
> （『古事記』上巻）
>
> 是時、天照大神勅曰「原其物根、則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也。故、彼五男神、悉是吾兒。」乃取而子養焉。又勅曰「其十握劒者、是素戔嗚尊物也。故、此三女神、悉是爾兒。」便授之素戔嗚尊、此則筑紫胸肩君等所祭神是也。
>
> （『日本書紀』巻第一　神代上）

本記載は胸肩君の名を記した初出記事でもあり、宗像三女神を奉る一族として両者の分かち難い関係を端的に示す[1)]。また、『日本書紀』では三女神を「胸形大神」（応神41年条）、「胸方神」（雄略９年条）とも記すことから、神名と奉斎氏族名の一致も認められる（亀井2011）。文字史料で胸肩君と沖ノ島の関係がより明確になるのは、「神郡」設置以降である。胸肩君の後裔氏族である「宗形朝臣」一族は、奈良時代を通じて宗形郡の郡司および宗形社の神主を独占的に世襲したことが、『続日本紀』から把握できる（亀井2011）。

以上の文字史料から胸肩君と沖ノ島の繋がりは把握できるものの、胸肩君がどのような豪族であったかの具体的な姿までは描写できない。本論では考古資料を軸に、沖ノ島と胸肩君の有機的関係の論証を視野に入れながら、胸肩君の実像を探る。

１．胸肩君の墓域形成

胸肩君が遺した代表的な考古資料の一つは「古墳」であり、世界文化遺産の新原・奴山古墳群がその代表格として評価されている。新原・奴山古墳群の調査事例は限られるが、５号墳に見られる古墳築造技術や墳丘祭祀は、後述する宗像型石室の初現的かつ典型的事例であるため、胸肩君一族を被葬者とする仮説は指示できる。より踏み込んだ評価をすれば、新原・奴山古墳群は、胸肩君とその部曲である胸肩部等によって築かれたと考えられる（小嶋2018a）。また、大型古墳築造の際には、他地域の集団（服属・婚姻・協力関係にある豪族の部曲）も、古墳づくりに参画した場合もあった。宗像市・桜京古墳の石室に見られる石屋形や装飾壁画、福津市・須多田天振天神社古墳の形象埴輪等からは、胸肩君と肥君等（有明海・八代海沿岸の集団）とのつながりが見出せる[2)]。

新原・奴山古墳群では、現在までに前方後円墳５基を含む59基の古墳が発見されている。隣接する古墳群も含めると、前方後円墳のみで16基が確認でき、西都原古墳群（西都市）や八女古墳群（八女市）とならぶ前方後円墳密集地域となる（重藤2011）。また、津屋崎古墳群内の前方後円墳には「基壇」と称される、広いテラス状平坦面が存在することも注目できる（池ノ上2018）[3)]。この基壇は、勝浦峯ノ畑古墳、新原・奴山12号墳、須多田ミソ塚古墳、在自剣塚古墳という津屋崎古墳群を構成する各有力支群にまたがって採用されており、同族集団による古墳群造営という仮説を補強する考古資料である。古墳時

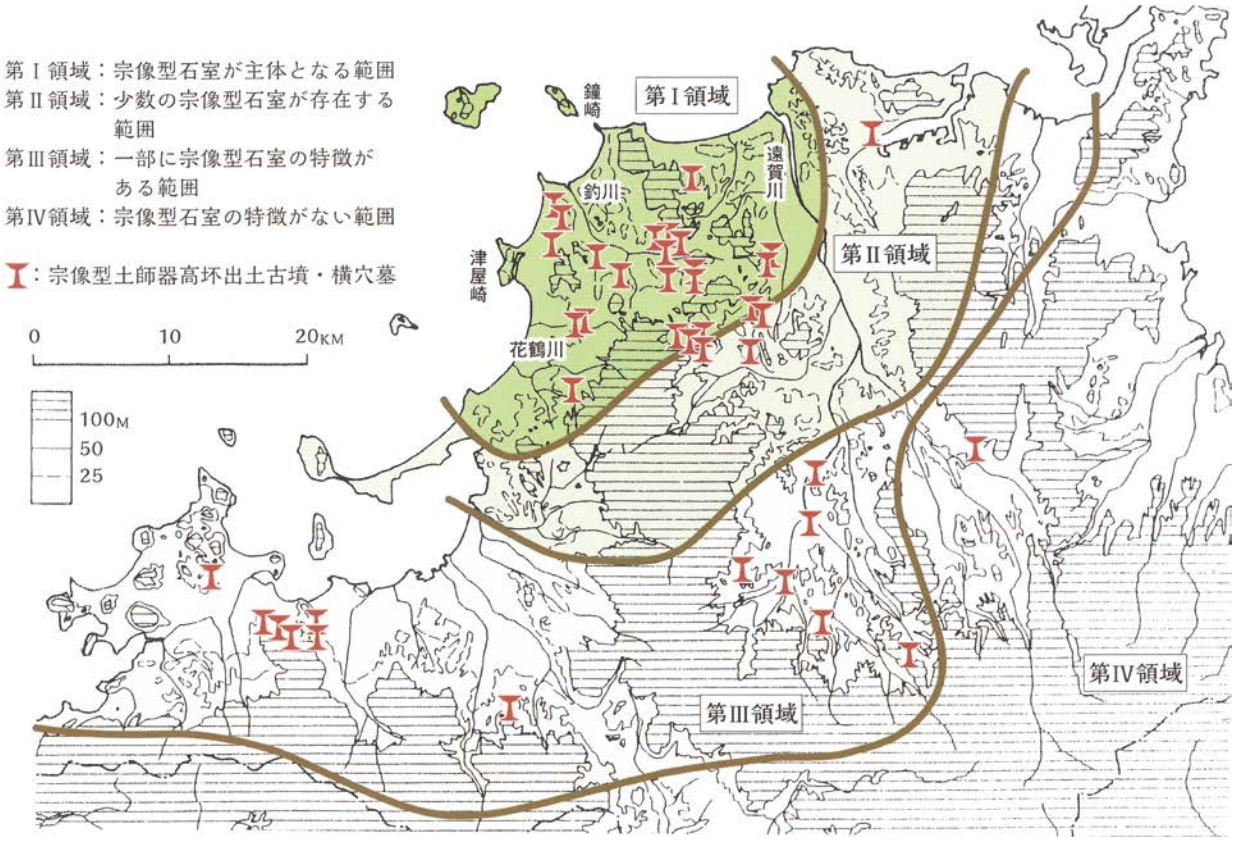
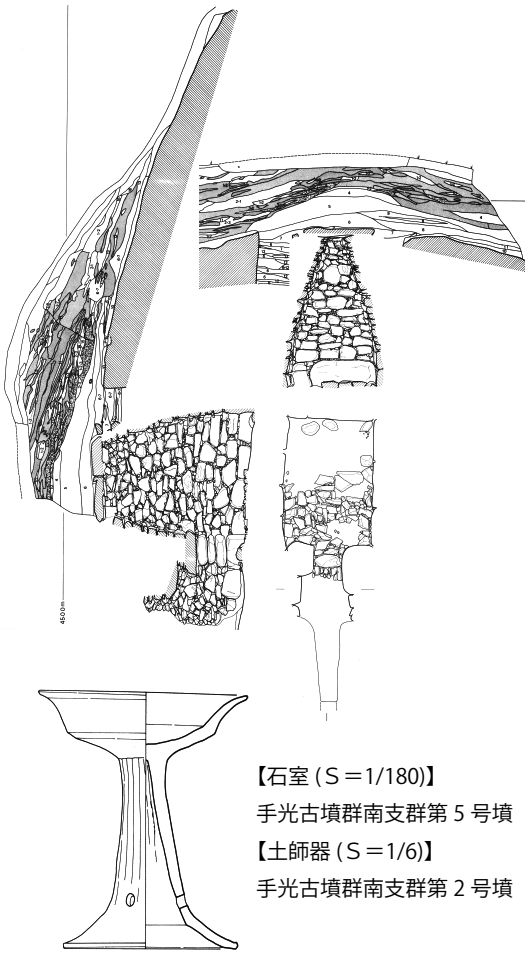


図１　宗像型石室の分布域と宗像型土師器高坏の分布　（小嶋2012・2017a）



【石室（S＝1/180)】
手光古墳群南支群第５号墳
【土師器（S＝1/6)】
手光古墳群南支群第２号墳

図２　宗像型石室と宗像型土師器高坏

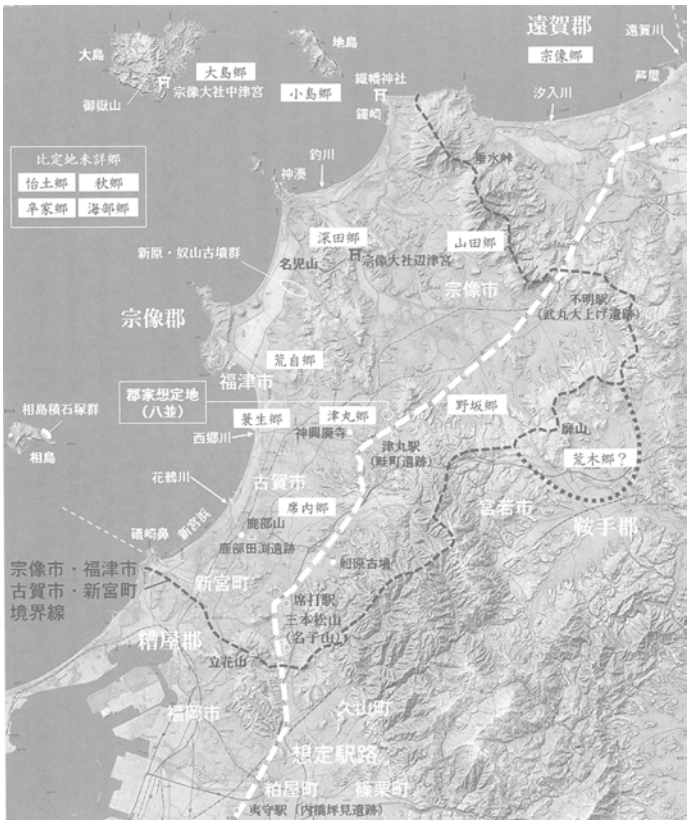


図３　古代宗像郡の地形と範囲　（大高2017）

代（6世紀）の様子を想像すれば、複数の前方後円墳や円墳・方墳が谷を挟んだ複数の丘の上で、同時併行で築造されている光景が思い浮かぶ。このような墓域形成から、胸肩君の古墳築造は、「突出した規模の大型古墳を築く、造墓労力を集約した古墳築造」ではなく、「複数の古墳を同時併行で築く、造墓労力を分散した古墳築造」であったと判断できる。この現象は、首長（胸肩君の家長）のみが、前方後円墳に埋葬されたのではなく、首長と同世代の兄弟や従兄弟、叔父・叔母等も前方後円墳に埋葬されたことと同義である。つまり、胸肩君とは単一系列ではなく、複数系列の同族集団で構成されていたと考えられる。大型前方後円墳が特定の墓域に集中せず、複数の墓域に分散する状況は、胸肩君の家長が特定系列から輩出されるのではなく、各世代の有力者が家長に就く集団構成の流動性を反映すると考えられる（小嶋2017）。

胸肩君の個人名が特定できる初現は、「胸形君徳善」である。徳善は、壬申の乱（672年）で活躍した高市皇子の外祖父であり、飛鳥時代の胸肩君の家長と判断できる。奈良時代の宗形郡では、記録にあるすべての郡司・神主が、宗形朝臣（胸肩君の後裔氏族）で構成されており、「等抒・鳥麻呂・与呂志・深津・大徳・池作・秋足」の名が残る（亀井2011）。古墳時代以来の有力豪族である胸肩君は、飛鳥時代以降も政教一致の同族集団による宗形郡の支配を継続する実態が窺える。

2．胸肩君の古墳築造技術

筆者は宗像地域に広がる特異な古墳築造技術に対し、「宗像型（宗像後期型）」という範型を見出した（小嶋2012）[4]。宗像型に関する研究は、すでに複数の論文等で発表しているため、以下では、要点を絞って説明する。

宗像型の古墳築造技術では、深い墓坑内で石材を積み上げるため、壁面の積み上げ作業は墓坑内で実施せざるを得ない（図1・2）。このため、壁面石材は総じて小型石材を用いる傾向にある。壁面構造においても裏込め量が少ないため、壁面維持における石材自重への依存度が高く、各石材の積み上げに際しては、相対的に丁寧に極小石材を詰める。以上のように、深い墓坑は作業姿勢や作業空間を制限する短所を有するが、その反面、墓坑内に石室大部分が収まるため、大型石材の天井石の搬入や据付が容易になる長所を有する。

墓域形成で見られた「複数の古墳を同時併行で築く、造墓労力を分散した古墳築造」は、造墓集団に幾多の古墳築造の機会を与え、特定地域での長期間におよぶ古墳築造技術の共有という現象を生じさせた。特定地域に古墳築造技術が共有される背景には、同地域に居住する人々の造墓動員があり、その中心軸には胸肩君 － 胸肩部の主従関係が存在したと考えられる。この特定地域こそが、後の宗形郡の母体となった領域（拙稿の第Ⅰ領域）であり、宗形郡の母体が古墳時代には形成されていたことを示す論拠である（小嶋2012・2018a）（図1・3）。

また、胸肩君の古墳築造技術を把握する上で、手光波切不動古墳の調査に端を発する石材産地同定の成果も重要である（井浦2013、井浦・森・石橋2015、井浦2017）。その成果に基づくと、勝浦峯ノ畑古墳、新原奴山1号墳、手光波切不動古墳、宮地嶽古墳の石材には、相島産オパサイト玄武岩を用いられる状況にある。各支群に向けた通時的な相島産石材の海上輸送は、上記でも述べた同族集団による津屋崎古墳群の造営を示す状況証拠の一つである。加えて、相島産石材は花鶴川流域の永浦古墳群にも供給されていることが判明しており、その供給域が律令期の宗形郡と重なる点も注目できる。

3．胸肩君の儀礼

九州北部の後期古墳を対象に葬送儀礼を検討すると、宗像地域の古墳には特異な痕跡を見出すことができる。その特異性とは、「石室内からほとんど土器が出土せず、墳丘上から多量の土器が出土する」

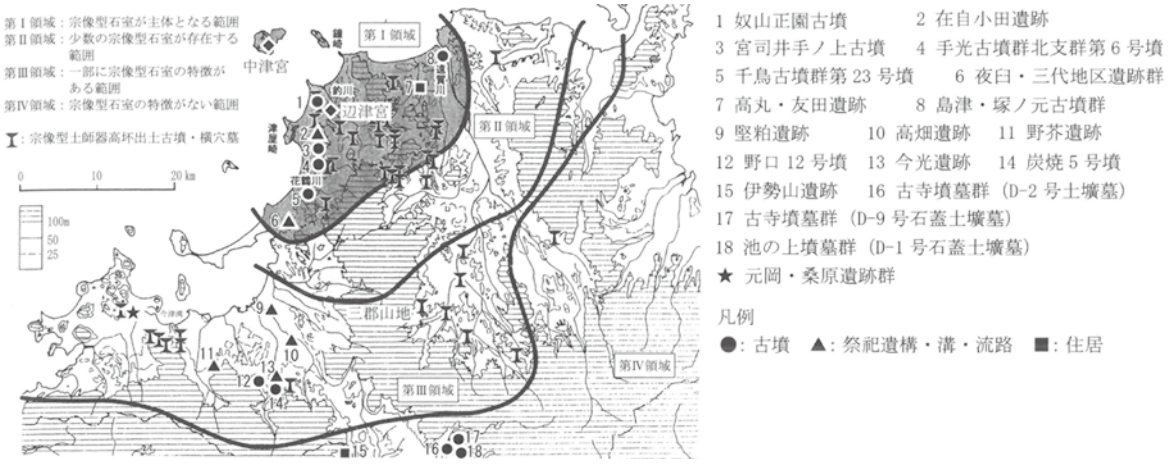


図４　古墳時代後期の胸肩君（ムナカタ氏）の領域と有孔円板導入期の範囲（清喜2018）

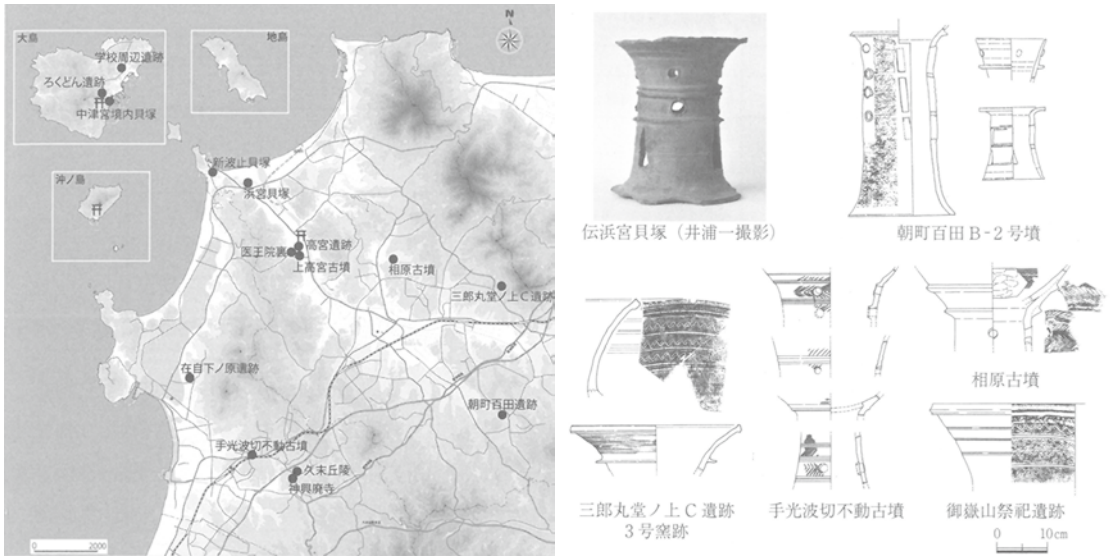
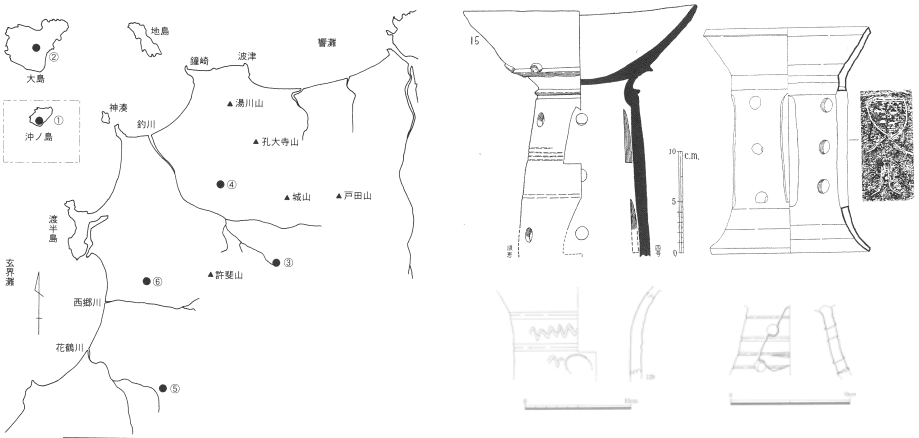


図５　沖ノ島系祭祀遺物関連遺跡分布図（白木2018）



番号	遺跡名	所在地	遺構	出土位置	遺構等の年代
①	沖ノ島祭祀遺跡	福岡県宗像市大島	祭祀跡	4号遺跡	5ｃ後半～7世紀（岩陰祭祀期）
				5号遺跡	7ｃ後半～8世紀前半（半岩陰・半露天祭祀期）
②	大島御嶽山遺跡	福岡県宗像市大島	祭祀跡	社殿壁崩落土	7ｃ末～9c後半（須恵器の年代幅）
③	朝町百田B－2号墳	福岡県宗像市朝町	古墳	石室前庭部	6c後半～７ｃ（追葬含む）
④	相原古墳	福岡県宗像市河東	古墳	前室、羨道	6c後半～７ｃ（追葬含む）
⑤	船原3号墳	福岡県古賀市谷山	古墳	周辺採集	7c初頭～中頃
⑥	手光波切不動古墳	福岡県福津市手光	古墳	羨道、墓道	7c前半

図６　有孔器台出土遺跡分布図（井浦2013）

点にある（小嶋2012）。古墳時代中期の渡来文化の導入を経て、日本列島の古墳文化にも、埋葬施設内における食料副葬・土器副葬が急速に普及し、古墳時代後期には普遍的に石室内から土器が出土する。このような広域的動態の中にあって、宗像地域の古墳では、古墳時代前期～後期を通じて土器副葬が浸透しない。つまり、宗像地域の古墳では、横穴式石室という新来の墓制を積極的に導入し、改変していく一方で、古墳時代前期以来の伝統的な墳丘祭祀を踏襲し続ける状況にある。この葬送儀礼は胸肩君が維持し続けてきた、遺体埋葬の適切な手段である。

このような古墳時代後期における墳丘祭祀を象徴する土器が、土師器高坏Ｅａ（重藤分類）であり、筆者は特別展等で一般的に認知し易いように「宗像型土師器高坏」と呼んだ（重藤2009、小嶋2012・2017）（図２）。この土師器高坏は長い脚部をもち、裾に小さな円形透孔を三方向に穿つ。器面は光沢をもつほどの丁寧なミガキ調整を施す。この三方向の円形透孔と緻密なミガキ調整を組み合わせたデザインは、古墳時代前期の日本列島でひろく採用されていたデザインとなる。一般的には古墳時代中期には廃れてしまうデザインだが、宗像地域のみは古墳時代後期において、旧来のデザインを復古的に採用して増産する。この「復古調デザイン」となる土師器高杯は現在までに110点を確認しているが、その約８割が古墳の墳丘上から出土しており、墳丘祭祀と強い相関関係が認められる。

次に、宗像型土師器高坏を用いた墳丘祭祀の分布域を見ていく。宗像型土師器高坏も、やはり後の宗形郡領域（拙稿の第Ⅰ領域）に明らかな集中分布を見せる（図１）。また、飛び地的に今津湾沿岸に集中する他、洞海湾沿岸にも分布する。洞海湾沿岸は調査事例が少ないため、実態は不明だが、今津湾沿岸では宗像型石室との併存も確認でき、古墳築造と墳丘祭祀の両面で繋がりが見出せる。また、宗像型土師器高坏は瀬戸内海の山口湾沿岸でも出土事例があり、やはり港湾を中心に飛び地的に広がる（小嶋2018c）（図７）[5]。

宗像型土師器高坏よりも数量は少ないが、有孔器台須恵器も特殊な形状と特定の分布域を有する（図５・６）。この有孔器台須恵器は、沖ノ島祭祀遺跡や大島御嶽山遺跡で出土しており、三女神を奉る際に用いられた祭具として確実視できる。このため、近年ではこの特異な有孔器台須恵器に対し、「沖ノ島系祭祀遺物」という呼称も用いられる（白木2018）。井浦一氏や小田富士雄氏、白木英敏氏等の研究成果に基づくと、沖ノ島系祭祀遺物の有孔器台須恵器は、沖ノ島と大島の他に宗像市域の浜宮貝塚・新波止貝塚・三郎丸堂ノ上Ｃ遺跡３号窯跡・朝町百田Ｂ－２号墳・相原古墳、福津市域の手光波切不動古墳・神輿廃寺の北方丘陵、古賀市域の船原古墳で出土する（井浦2013、小田2013、白木2018）。白木氏が指摘するように、有孔器台須恵器は前方後円墳や大型円墳などの上位階層墓から出土する点が注目できる（白木2018）。出土遺跡の性格から見ても、分布域形成の中心軸に、三女神を奉る胸肩君の存在を想定してよいだろう。

上記の有孔器台須恵器とならんで、沖ノ島祭祀を代表する祭具の一つが滑石製品である。この滑石素材の多くは三郡山系産と見られ、その製作地は宗像から糟屋にかけての範囲で想定されている（清喜2018）。また、清喜裕二氏の研究に基づくと、導入期（古墳時代中期）の有孔円板・剣形品の出土遺跡は、後の宗形郡（拙稿の第Ⅰ領域）の範囲で面的に広がる（清喜2018）（図４）。

おわりに

以上、考古資料を軸に胸肩君の実像を探った。沖ノ島と胸肩君との関係を直接的に示す考古資料としては、沖ノ島系祭祀遺物である有孔器台須恵器があり、葬祭にまたがる利用を確認できる。また、沖ノ島祭祀にも用いられる有孔円板と剣形品の面的な導入状況は、間接的な証拠と言えるだろう。同様の状況証拠には、津屋崎古墳群の造営期と沖ノ島祭祀の盛行が合致するという研究成果がある（重藤2011・2018）。とくに、勝浦峯ノ畑古墳を画期と捉える研究が多く、辻田淳一郎氏は同古墳出土の同型鏡の構成が、沖ノ島21号遺跡出土品と一致することから、ヤマト政権下での宗像地域の集団の主体的関与を想定する（小田2017、重藤2018、辻田2018）。

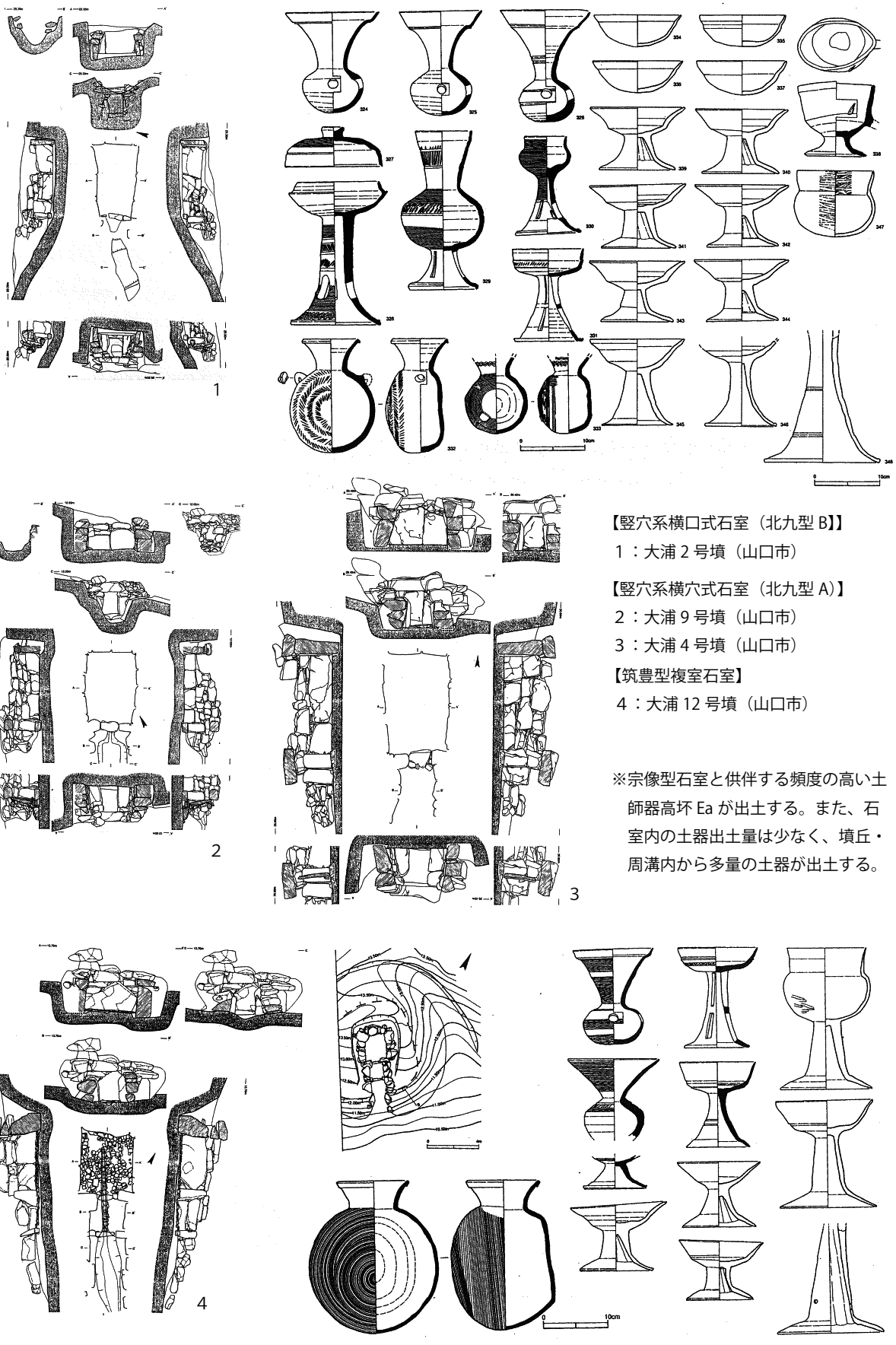


図７　宗像との関係が注視されている大浦古墳群の石室と土器供献の様相（小嶋2018c）

胸肩君の実像、とくに活動領域を論証できる考古資料は複数提示でき、「**①横穴式石室墳の築造技術**（花田1991、筌瀬1996、田村1999、小嶋2012・2018ad、池ノ上2018）、**②墳丘祭祀**（小嶋2012）、**③土器類の非副葬**（小嶋2012）、**④前方後円墳終焉の地域差**（小嶋2018a）、**⑤相島産石材の海上輸送**（井浦・森・石橋2015）、**⑥有孔器台須恵器**（井浦2013・小田2013・白木2018）、**⑦有孔円板・剣形品の導入状況**（清喜2018）」が挙げられる。加えて、筆者は港湾での集中分布と飛び地的な分布に注目する。古代の遠距離航海では、風待ち・補給のための寄港、夜間の停泊が必須であり、港を保有する集団間の連携・協力・許容・従属関係が存在する。胸肩君を核とする考古資料の広がりには、古代の航海を結んだ基本構造も反映すると見る。つまり、胸肩君は九州北部の複数の港を押さえ、諸豪族と協力関係を構築することで、実質的に玄界灘航路で幅を利かせていたと考える。

なお、本章では詳述しなかったが、文献史料を軸にした歴史地理学等の研究では、郷名・駅名・山名の比定から「**古代宗形郡の範囲は、近世の宗像郡よりも広く、現在の宗像市・福津市に加えて、古賀市と新宮町、宮若市の一部を含む**」との研究成果もある（渡辺1985、木下1999、大高2017）。この文献史学の研究成果は、時間差をふまえた上でも、考古学の研究成果と大部分で矛盾しない。つまり、古代宗形郡の母体には、古墳時代における胸肩君の領域形成があったと結論できる。以上のように、今日の胸肩君に関する研究は、複数の学問領域での「多者多重分析」を経て、より精度の高い成果を挙げている。

本章は、九州国立博物館で実施した特別展『宗像・沖ノ島と大和朝廷』の図録に掲載した原稿（小嶋2017）を基に、近年の研究動向をふまえて再構成した内容となっている。

註

1）ムナカタの表記は、胸肩・胸形・胸方・宗形・宗像がある。本論では正史である『日本書紀』の初出記事に従って、氏族名では胸肩を用いる。また、三女神を奉る一族には、胸肩君以外にも水沼君の名も『日本書紀』に記される。

2）阿蘇溶結凝灰岩製石棺の輸送実験からも明らかなように、古墳時代の遠距離航海では、港への寄港は必須であった。肥君の航海も、玄界灘沿岸では胸肩君等の掌握下にある港を利用する必要があり、古墳文化の融合を生じさせた協力関係が窺える。なお、宗像地域の埴輪の様相は、小嶋2018bで整理している。

3）律令期の宗形郡内（拙稿の第Ⅰ領域）に立地する船原古墳は、墳丘盛土と埋納土坑群との間に２～３ｍの段差を内包する（小嶋2018a）。自然丘陵を視覚的な墳丘段構成に取り込む古墳構築技術は、九州北部では宗像地域を中心に玄界灘沿岸域に広がる。

4）筆者が用いる範型とは、「人間が物をつくる際の集団行動方式」を意味する。横穴式石室墳を対象にすると、「どのような手順で、どのように石と土を積むのか」といった行動や思考を分類の柱としている。横穴式石室墳の分析にあたっては、構造物として遺された石積や盛土等の『形』から、用いられた範型を検討するとともに、葬送儀礼にも関わる古墳の空間設計も把握する。このような過程で各古墳を検討した結果、時系列における連続性や地理的なまとまりが抽出される場合があり、古墳という構造物に内包される歴史を垣間見ることができる。この歴史を評価する手段の一つとして、各古墳の連続性を『系列』として認識する方法がある。本論が主対象とする宗像型という範型に当てはめれば、「宗像型の系列」という表記で古墳相互の繋がりが表現される。

先行研究では、花田勝広氏による「竪穴系横穴式石室」の設定で、宗像地域の横穴式石室の特異性は見出されてきた（花田1991）。その後、筌瀬明宏氏は宗像地域に見られる古墳構築墓壙の深さについて、客観的数値を示して実証した（筌瀬1996）。藏富士寛氏は北部九州系横穴式石室の地域色として「宗像型」を設定し、宮原佑治氏は藏富士氏の定義を基に新たな条件（玄門立柱石の使用、天井高が低い点等）を加え、「宗像型石室」という分類を用いる（藏富士2011・宮原2017）。藏富士氏・宮原氏が述べるように、古墳時代中期の宗像地域に独自色の強い石室群が存在することに異論はない。古墳時代中期と後期の連続面と不連続面をともに評価するために、発表者は「宗像中期型」・「宗像後期型」という分類を提案する。

5）大浦古墳群をはじめとした山口湾沿岸の群種墳では継続的に「竪穴系横穴式石室」として把握される石室群が展開する。これらの石室群については、宗像との関係が注目されている。ただし、先行研究でも指摘されるように、袖部に立柱石を用いる点や玄室空間を正方形にする等の相違点があり、宗像でも釣川流域や津屋崎沿岸の中枢域（第Ⅰ領域）との直接的な関係は乏しい。直接的な系譜関係は、その隣接地域である遠賀川流域や洞海湾沿岸域（第Ⅱ領域）に求められると考えられる。

山口湾沿岸と宗像との関係は、古墳構築技術（古墳のつくり方）だけでなく、葬送儀礼（古墳のつかい方）からも論証できる。本古墳群では玄室内の土器出土点数は少なく、墳丘・周溝から小形器種や高坏類が集中的に出土する特徴がある。加えて、墳丘出土土器類には宗像特有の土師器高坏Ｅａを含む脚付器種が多数含まれる。このような石室外での儀礼痕跡については、調査担当者の豊島正行氏も注目しており、「墓道や墳丘祭祀に伴う供献土器等の出土量がとりわけ顕著」であり、「県内におけるこ

れまでの調査例の中では突出したあり方」として、その特異性を総括している（豊島1998）。この特異性こそが、宗像との共通要素であり、山口湾沿岸の人々と宗像周辺の人々が、古墳構築技術だけでなく、葬送儀礼においても部分的に共有関係にあったことを示す（小嶋2018c）。

参考文献

井浦一 2013『津屋崎古墳群Ⅲ』福津市文化財調査報告書第７集 福津市教育委員会

井浦一 石橋英巳 森康 2015「福岡県津屋崎古墳群に用いられた玄武岩石材の供給地」『九州考古学』第90号 九州考古学会

井浦一 2017「胸肩君の領域」『季刊邪馬台国』132号 梓書院

池ノ上宏 2018「胸形君の古墳と新原・奴山古墳群」『考古学ジャーナル』№707 ニューサイエンス社

筌瀬明宏 1996「古墳墓壙構築の歴史的意義－筑前地域を中心に－」『福岡大学大学院論集』28巻２号 福岡大学

小田富士雄 2013「沖ノ島祭祀遺跡の再検討３」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅲ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

小田富士雄 2017「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」『神宿る島と祈りの記憶』九州国立博物館 ※本書の第７部２章に再録

亀井輝一郎 2011「古代の安像氏と宗像信仰」『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

藏富士寛 2011「玄界灘沿岸」『九州における古墳埋葬施設の多様性』第14回九州前方後円墳研究会

小嶋篤 2012「墓制と領域－胸肩君一族の足跡－」『九州歴史資料館研究論集』37号 九州歴史資料館

小嶋篤 2017「宗像君の実像」『宗像・沖ノ島と大和朝廷』特別展図録 九州国立博物館

小嶋篤 2018a「「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君」『沖ノ島研究』第４号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

小嶋篤 2018b「嘉穂型埴輪の研究」『埴輪論叢』第８号 埴輪検討会

小嶋篤 2018c「横穴式石室の構築技術－瀬戸内海西端・横穴式石室墳の様相－」『第185回九州古文化研究』発表資料 九州古文化研究会

小嶋篤 2018d「古墳時代後期における横穴式石室墳の展開－日韓交流の視点から－」『海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会第13回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会

重藤輝行 2009「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生論文集刊行会

重藤輝行 2011「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

重藤輝行 2018「宗像氏と宗像の古墳群」『季刊考古学・別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

清喜裕二 2018「沖ノ島の滑石製品」『季刊考古学・別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

豊島正行 1998「大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群の石室外祭祀儀礼について」『浦辺古墳群 大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 小郡開作経塚』山口県埋蔵文化財センター調査報告第１集 山口県埋蔵文化財センター

花田勝広 1991「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第20号上 地域相研究会

宮原佑治 2017「おじょか古墳の横穴式石室の起源に関する一試論」『海の古墳を考えるⅥ』学術研究集会「海の古墳を考えるⅥ」実行委員会・海の古墳を考える会

第２章

宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果

小田　富士雄

１．宗像三女神の誕生と鎮座

玄界灘に近い福岡県宗像市田島の宗像大社（辺津宮）、その北西海上11㎞に大島（中津宮）、60㎞に沖ノ島（沖津宮）がある。各宮には市杵島姫・湍津姫・田心姫が祀られ、この三女神を祀る三宮を総称して宗像大社といわれている。三女神の名称から推定される神格についてはつぎのように理解されている[1)]。

タギ（ゴ）リヒメノミコト　「多紀理毗賣命」（古事記)・「田心姫命・田霧姫命」（日本書紀）と書かれ、平安初期には同一神とみなされていた。水の逆巻き涌き上る様子に擬らえた神格とみられる。

タギツヒメノミコト　「多岐都比賣命」（古事記)・「湍津姫命」（日本書紀）と書かれ、タギツは水の沸き上り、逆巻く様に擬らえた神格を表現した。

イチキシマヒメノミコト　「市寸嶋比賣命」（古事記)・「市杵嶋姫」（日本書紀）と書かれ、イチキ・イツキはあい通じて行われ、齋き＝霊を祀る意であるから、海島・海辺に憑り斎く姫神の信仰が古くから存在したことが考えられる。

三女神の誕生については『日本書紀』神代・上にみえる。天照大神に対して弟素戔嗚尊が邪心なきを誓った剣珠の「誓約」神話に示されている。すなわち大神が尊の剣を三つに打折り、天真名井に浸して噛み吹き出した狭霧のなかから三女神が生まれたという。書紀は「此則ち、筑紫の胸肩君等が祭る神、是なり」と述べている。一方、書紀は三つの書を引いて三女神誕生のことを記す。第１の書では筑紫に降った三女神に対して大神は「汝三の神、道の中に降り居して、天孫を助け奉りて天孫の為に祭られよ」と教えた。また第３の書では三女神は「今、海の北の道の中に在す。號けて道主貴と曰す。此筑紫の水沼君等が祭る神、是なり」と記す。「海北道中」とは筑紫の北部、朝鮮への海路途上の意であり、「道主貴」とは道中の神の意である。「水沼君」は筑後国三潴郡を本拠とする豪族である。宗像大神は航海の目印として沖ノ島に坐す神として、多くの海人族の信仰するところから、両氏の間にはやくから交渉があったこと。ヤマト王権の初期九州統治に、水沼君は物部氏の軍事力として組織されていたことなどに求める説[2)]に従っておく。

２．考古学調査による沖ノ島祭祀の変遷[3)]

島の南側標高80ｍあたりに鎮座する沖津宮付近から上方90ｍ付近に累積する巨岩群（Ａ～Ｍ号）とかかわりながら２～23号遺跡が、また沖津宮の南々西50ｍの下手に１号遺跡がある。1954年から1971年にかけて計３次10回、これら祭祀遺跡群の発掘調査が実施されて、以下に記すような４段階の古代祭祀形態の変遷が明らかにされた。

【Ⅰ、岩上祭祀段階（４世紀後半～)】

16号～19号（Ⅰ号巨岩周辺）と21号（Ｆ号巨岩頂上）が該当する。Ⅰ号巨岩の上端部（18号）とその基礎巨岩上に、16・17・19号遺跡が設けられた。裂石片や砂利を混えて安定面（祭壇）をつくり奉献品を並べ置く。17号遺跡では鉄刀類と21面もの銅鏡を重ね置いていた。そして、これらは中・小の割石で覆われていた。

なかでも、Ｆ号巨岩の頂上（地上高５～８ｍ）には割石を積み並べた方形祭壇（磐境＝いわさか）を設け、その中央には神霊が降臨する依代（よりしろ）となる岩石（磐座＝いわくら）を据えた祭式が成立していた。

沖ノ島祭祀の開始期にあたるこの段階の祭祀形態や、九州の古墳でも類をみない銅鏡の数などからも、ヤマト王権主導のもとに持ちこまれた国家型祭祀であったことは疑いないであろう。

【Ⅱ、岩陰祭祀段階（５世紀後半～）】

祭場が地上に降り、巨岩の立ち上がりが内傾して奥深い庇状を形成した直下に奉献品を並べ置く形態。６号（Ｃ号巨岩北側）、７・８号（Ｄ号巨岩の南・北側）、22号（Ｍ号巨岩南側）が該当する。庇部直下の祭場は、平坦な地表を利用し、あるいは傾斜面では割石で長方形輪郭をつくり、砂利や小裂石片で平坦面を構成する祭場設定がみられる。

奉献品の内容は、Ⅰ段階にみられた銅鏡や鉄鋌などが急減し、武器武具・工具やその雛形品などが急増する。なかでも半島新羅系の金銅製馬具・金製指輪・鋳造鉄斧（７号）やササン朝ペルシャ系の浮出円文ガラス碗（８号）などが注目される。なお、土器類は祭場の外郭付近に置かれていた。

以上、Ⅰ・Ⅱ段階の奉献品には古墳時代前期後半から後期の様相と重なるところが多いが、一方では後続するⅢ段階以降に顕著となる金属製雛形品の出現も注意される。すなわち金銅製の人形、紡織関係品、容器など（６・22号）である。

【Ⅲ、半岩陰・半露天祭祀段階（７世紀後半～）】

岩陰部が少なくなり、露天部が多くなる状態である。原始的な巨岩信仰の状況を脱してゆく過渡段階に位置づけられる。20号（Ｌ号巨岩東側）、５号（Ｃ号巨岩西側）が該当する。

なかでも５号は大規模で奉献品も豊富である。その内容は中国系遺物（金銅製龍頭１対・唐三彩長頸瓶１）、玉類、鉄製武器、金銅製雛形五絃琴、金銅製雛形紡織具関係、金属製雛形品（金銅製や鉄製の人形・円板・鐸・鉄製の武器・斧）、金銅製雛形容器や須恵器が主体となり、中国系舶載品の出現が注目される。

【Ⅳ、露天祭祀段階（８世紀後半～９世紀）】

沖津宮の南西、参道階段を登りつめた東側緩斜面一帯に須恵器類が大量に散布している。南北10m、東西９ｍほどに及び、東南隅部にあたる地点には大形石材を寄せかけ、その南側東西方向と東側南北方向には角礫を葺石状に配していて、この区域が一種の大型祭場を呈していることが推察できる。１号露天遺跡を構成している。

ここでは皇朝銭「富寿神宝」（818年初鋳）１枚が発見されていて、９世紀代にまで継続していた祭祀遺跡である。金属製雛形品では紡織機関係品が継承されるほか、金銅製舟形品が出現する。

さらに形代（かたしろ）といわれる滑石製の人形、馬形、舟形が盛行する。また、多量の須恵器は供膳形態が主体で、加えて有孔短脚器台、多孔小壺などの祭祀専用品も少なくない。さらに畿内から将来された奈良三彩小壺11個などは国家型祭祀を代表するものであり、その祈願するところは、航海の無事を祈り、神の加護を願う攘災招福にあった。

３．沖ノ島祭祀方式の二大画期

４世紀後半に始まり、９世紀代に至るまで数百年間継承された沖ノ島祭祀は、大別して古墳時代前期から後期の祭祀段階（Ⅰ～Ⅱ段階）と、歴史時代（古代）段階（Ⅲ～Ⅳ段階）に分けられる。祭祀の性格からはともに国家型祭祀に属するものであるが、また古代史の立場からすれば後者は律令型祭祀に位置づけられ、前者はその前史的祭祀ということになる。また祭祀形態の面からは前者では沖ノ島祭祀の出現から確立に至る過程、後者では律令型祭祀の萌芽から成立期への過程が祭祀考古学の立場から最も

関心の持たれるところである。

（1）成立期の沖ノ島祭祀

まず前者では、4世紀後半から5世紀前半代に至るⅠ段階＝岩上祭祀の形態推移が注意される。これまでの遺跡や奉献品からの考古学的検討によれば、18号→17号→16・19号→21号のような推移状況をうかがうことができる。このうち三角縁神獣鏡が奉献されたのは18号（舶載鏡）・17号・16号（仿製鏡）である。三角縁神獣鏡については、近年舶載・仿製両鏡について福永伸哉氏の詳細な分類・編年研究[4]が公表されている。一方、この成果を援用して沖ノ島鏡にも言及された田中晋作氏の研究[5]がある。研究の出発点は近畿地方とその周辺において古い段階（A・B段階）の三角縁神獣鏡が、前期後半から中期に入って築造された古墳に副葬されている事例に注目して、「畿内という限られた地域の中に、三角縁神獣鏡の伝世を必要としない勢力と伝世を必要とする勢力が併存していた」ことを指摘した。そして「一定量の舶載三角縁神獣鏡が大和盆地東南部地域の勢力のもとに残され、規模は小さいが、何らかの理由によって、前期後半以降に新たに供与された」とする解釈を示された。そしてこの参考事例として沖ノ島18号遺跡がとりあげられた。すなわちC段階の舶載鏡とⅢ・Ⅳ段階の仿製鏡が共伴している。沖ノ島最古段階の祭祀時に、Ⅰ号巨岩上面に奉献されて小岩（丙岩）を被せていた状況から、鏡の編年観のみで複数回の奉献を想定することはむづかしい。さらに17号遺跡で21面の銅鏡が重ね置かれた状況からも複数回の奉献は考え難い。複数回の奉献を主張する立場をとる人々には、通じて鏡の編年観のみに固執し、現地における出土状況などを全く無視している様子がみられる。一方、宗像地域の古墳では沖ノ島調査の開始段階にほぼ並行する東郷高塚古墳をはじめとして、三角縁神獣鏡は舶載品も仿製品も出土していない現状であることも上述した田中説を支持するには好都合であろう。

つぎに巨岩上に奉献場所（以下祭壇とする）を設ける場合、巨岩上面に平坦面をつくらねばならず、小割石や砂利を用いて応じている。祭壇の範囲は奉献品の分布域となるが、基礎となる巨岩面（露天部）とさらにその上に被っている巨岩を屋根とする岩陰部（あるいは隙間）の両者にまたげて構成されている。その範囲は規模に大小あるものの、ほぼ長方形の範囲で占められ、奉献行為が終れば祭壇上の全面を中・小の石材で覆い、奉献品が外部から見えなくして祭儀は終了するのである。このような長方形に復元できる祭壇域は、17・16・19号で遺跡実測図上に示したごとくである。この長方形祭壇域はやがて次のⅡ段階＝岩陰祭祀形態では、巨岩の岩陰地上に形成されるので規模も大型化して、6号遺跡で典型的に示されているように祭壇の輪郭を明確にする縁石も見られる長方形へと継承発展していった。そしてこの段階では奉献品上の覆石は省略されるにいたった。

岩上祭祀の最終段階は5世紀中頃前後の21号遺跡である。巨岩上面のやや傾斜する中央部に小裂石を積み並べて祭壇の輪郭を構成し、その中央に降神の依代となる一塊石を据えて祭壇上に奉献品を並べ置く、後世に云うところの磐座（いわくら）・磐境（いわさか）を設営する祭式の成立をみるに至った。

21号遺跡祭祀の成立は、沖ノ島祭祀の性格が「国家型祭祀」と称される中の転換期であった点でも重

遺　跡　名	A	B	C	D	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	Ⅴ
16号遺跡														1		
17号遺跡							1								1	1
18号遺跡			1								1		1	1		
18号遺跡（推定）										1						
御金蔵遺跡（推定）				1												
沖ノ島遺跡（推定）																1

沖ノ島遺跡出土三角縁神獣鏡の構成（5）（A～Dは舶載鏡、Ⅰ～Ⅴは仿製鏡の分布を示す）

要である。21号遺跡と並行する時期の宗像宗家の古墳として勝浦峯ノ畑古墳があげられる。全長100mに及ぶ前方後円墳で当地方最古の横穴式石室を採用し、副葬品には朝鮮半島ともふかい関係がみられる宗像氏の画期的首長墓であることも知られている[6)]。この両遺跡の間には倭の五王とも交渉があった中国南朝系の画文帯神獣鏡の同型鏡を分有しているところから、同古墳の首長が21号祭祀に関与したであろうことを指摘した[7)]。ヤマト王権が主宰する国家型祭祀には大別して２つのタイプがあった[8)]。１つは**大王直祭型**、もう１つは**委託祭祀型**である。国家型祭祀の中心は銅鏡群であり、最初のうちはこの新しい祭祀方式を直祭するために勅使などが派遣されてきた。雄略紀９年２月条にみえる凡河内直香賜（おおしこおちのあたひかたぶ）と采女（うねめ）の派遣などは直祭方式が実修されていたことを示すものであろう。21号祭祀に到って国家型祭祀についてもようやく習熟してきた宗像宗家の首長に委託されるに至ったことを示しているのであろう。ヤマト政権の対外交渉にパイロット役を果し、また海神を奉ずる宗像宗家の政治的地位・司祭者的地位の向上などの情況にも配慮した措置であったと思われる。

古墳時代相当の沖ノ島Ⅰ・Ⅱ段階祭祀では、奉献品の内容が古墳副葬品と共通するところ多いので、調査時には「葬・祭未分化」という表現にしておいたが、一方では古墳時代成立時から両者の分化は明らかであるとする主張も存在していた。そして第３次調査の調査報告書刊行後30年余を経過して再びこの問題が浮上してきた。廣瀬和雄氏は両者の遺物における共通様相を、「祖霊」（古墳被葬者）を「カミ」と同一視して共同体の守護神としての性格を付加するに至ったと説明された[9)]。また穂積裕昌氏はその著書[10)]のなかで、古墳時代中期の葬送と祭祀（カミマツリ）の分離主張説に対して両者の分離ではなく、「カミマツリ」思想が顕在化してきたことを評価すべきであるとされた。そして前期にはまだ「天から山などの高い場所にカミが依ると観念されるような垂直臨降型の祭祀形態は一般的には未成立であったとみられる」（以上258 ～ 259頁）として、４世紀後半における沖ノ島祭祀や奈良県の三輪山祭祀の成立など、このころ「上位の祭祀」から成立した可能性に言及している。すなわち、国家型祭祀にランクされるような、ヤマト王権による直祭型の特定祭祀遺跡の出現と推移の実態を示すこととなった。伝統性の強い在地型祭祀や地域豪族クラスの祭祀を基層に持ちながら、さらに異なる次元の東アジア型思考に拠る祭祀形態が創出されたといってもよいであろう。そしてそれは、東アジアの国際的な軍事的・平和的交渉とかかわる海上交通に代表される国家型祭祀であったところにその特異性が認められる。

（２）律令型祭祀への展開

沖ノ島祭祀のⅢ～Ⅳ段階は古墳時代の終焉に続く歴史時代（古代）初期から奈良～平安時代前半期に相当する。祭祀形態では巨岩とのかかわりを脱しはじめ（Ⅲ期）、完全に露天祭場に移行した段階（Ⅳ期）である。

Ⅲ期を代表する５号遺跡は、傾斜度の顕著な巨岩の岩陰に依存していたⅡ期とは対照的で、巨岩への依存度が減少して、奉献品の大半は露天部分に置かれる。そして奉献品の主体は須恵器で占められ、金属品では雛形品の急増してくる点が目立ってくる。外来品ではⅡ段階にみられた朝鮮半島新羅系金属製品が姿を消し、代わって中国系の金銅製龍頭や唐三彩容器などが現れる。前段階までの古墳遺物的様相は一掃されて、次段階まで継承される律令型祭祀の様相が現れてくる。雛形品の増加は新しい神マツリ方式が生まれてきたこと、伊勢神宮関係の儀式帳や『延喜式』など９世紀以降の史料、現存する伊勢神宮御神宝などにつながることなど、律令国家型祭祀の萌芽形態ともいうべき祭祀段階に位置づけられる[11)]。また中国系遺物のうち、金銅製龍頭２個は、東魏時代（534 ～ 550A.D.）の特徴を示し、欽明紀23年（562）８月条にみえる大伴狭手彦（おおとものさでひこ）が大将軍として高句麗王宮に攻め入って持帰った珍宝類中の「五色幡二竿」に比定された。竿頭に装着して幡や蓋を取りつけるための吊り金具としての用法が敦煌石窟の壁画などから知られる[12)]。唐三彩長頸瓶についても、近年の中国側研究から７世紀後半代の「初期唐三彩」に比定され[13)]、この頃両国間を往来した人々によってもたらされたものと推察される。これらはヤマト王権から５号遺跡祭祀のために運ばれたのであろう。

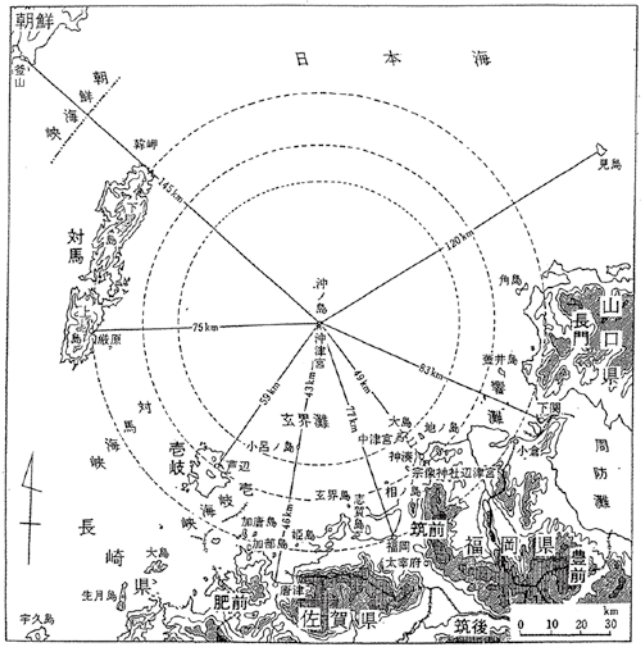
Ⅳ段階の露天祭祀遺跡は、沖津宮の南々西50m余の参道階段を登りつめた東側緩斜面に在り、須恵器類が大量散布する雑木林と化している。土器類の散布範囲は９～10m四方に及び、その裾部にあたる東西と南北方向には角礫を葺石状に配する構造がみられ、沖ノ島祭祀遺跡中で最後にして最大の祭壇が構成されていて、複数回の祭祀が実修されたことを示している。Ⅲ段階から継続する雛形金属器もあり、金属製品・滑石製品・土器に大別される。なかでも皇朝銭１枚（「富寿神宝」＝818年初鋳）の発見はⅣ段階祭祀の実年代の一端を知る上で貴重である。Ⅲ・Ⅳ段階の祭祀品中で主体を占めるようになる金属製雛形品はすでにⅡ段階後半期にさかのぼって登場していた酒食や紡織機関係に加えて、Ⅱ段階には金銅製人形（22号）、Ⅲ段階には金銅製・鉄製の人形・金銅製五弦琴（５号）、Ⅳ段階には金銅製舟形など後続する伊勢神宮神宝の紡織具・楽器に継承される種類の品目が注目された。さらに１号遺跡で注目されるのは人形・馬形・舟形のいわゆる滑石製形代（かたしろ）や有孔円板（鏡）・扁平大形勾玉などの滑石製品が多くみられることである。さらに須恵器類にも宗像地方で生産された独自の長脚式器台（５・１号）・短脚式器台・多孔式小壺など、独自形態の祭器を出現させたことも注意される。人形祭祀の起源は中国漢代までたどられ、道教祭儀にも関連しつつ原始神道に受容された[14]。沖ノ島祭祀におけるこれら雛形品類の奉献の意図するところは、畿内産の奈良三彩有蓋小壺・銅鏡ともあわせて航海における人・舟の安泰を祈り、海神の加護を期し、あるいは帰国後の奉謝も含めての攘災招福にあったといえよう。Ⅰ・Ⅱ段階に続く国家型祭祀であるが、その祭祀形態には律令型祭祀方式が、奉献品の内容ともあわせて適用されていることを示している。そしてⅣ段階祭祀はその後半期には、祭祀終了後の奉献品の廃棄場となったと推察される。社殿の成立などはその有力な転化要因になったであろう。

おわりに ―沖ノ島祭祀の史的意義―

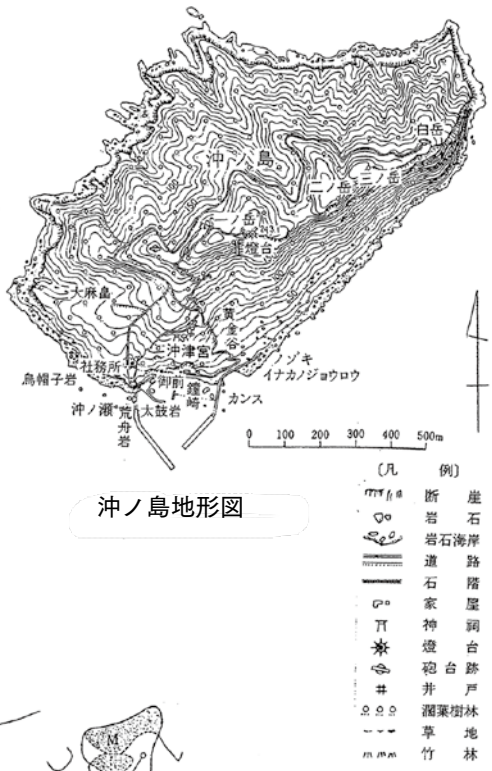
今日から沖ノ島祭祀の歴史的意義について考えるならば、日本の古代祭祀遺跡で数百年にもわたって継続し、その変遷が明らかにできる唯一の遺跡であること。その祭祀内容はヤマト政権が関与した国家型祭祀にランクされること。さらにそのことを如実に示す海外からの貴重な将来品が奉献され、“海の正倉院”のキャッチフレーズを生むに至ったことなどがあげられる。

註

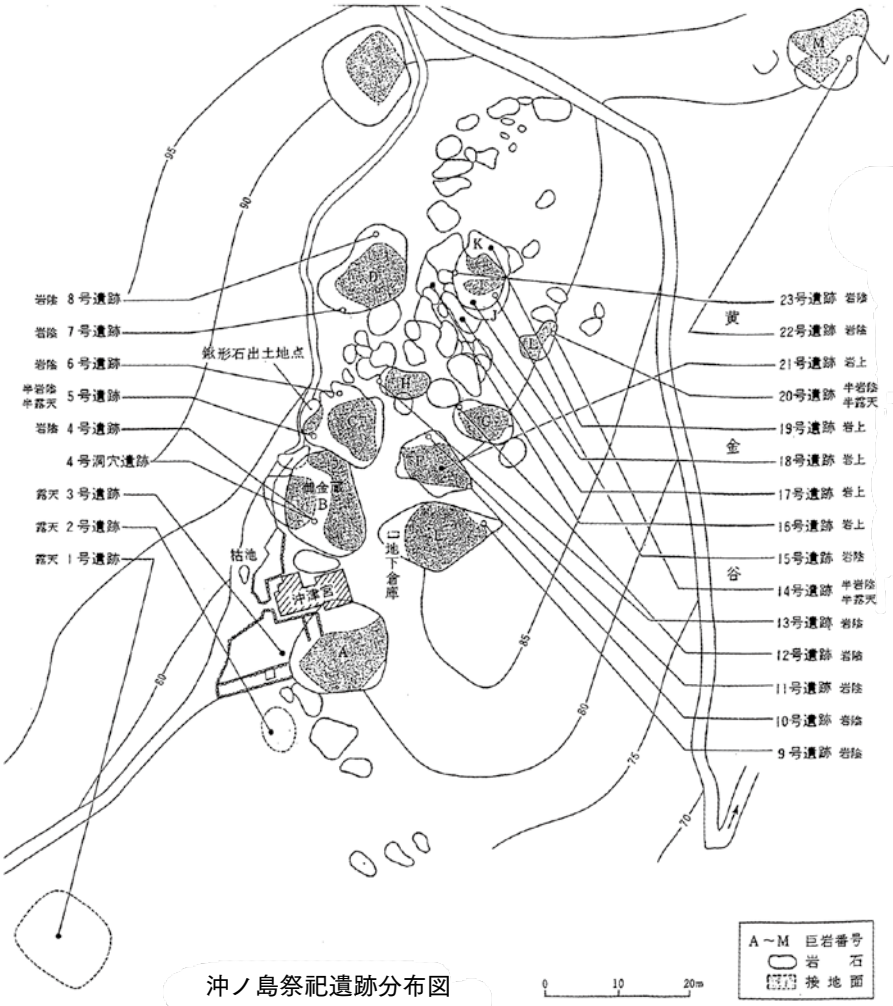
1）宗像神社復興期成会編 1961『宗像神社史』上巻（第四章第一節第三）
2）正木喜三郎 1988「宗像三女神と記紀神話」（小田編『古代を考える・沖ノ島と古代祭祀』）
3）〔A〕『沖ノ島』（1958）・『続沖ノ島』（1961）・『宗像沖ノ島』（1979）の正式学術調査報告書のほか、〔B〕小田富士雄 2012・2013・2014「沖ノ島祭祀遺跡の再検討」２・３（『宗像・沖ノ島と関連遺産群：研究報告』Ⅱ-１・Ⅲ）：「祭祀遺跡からみた宗像信仰」（『悠久』136号）など。
4）福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』
5）田中晋作 2008「三角縁神獣鏡の伝世について―畿内およびその周辺地域の有力勢力の動態―」（『古代学研究』第180号）
6）池ノ上宏・吉田東明編 2011『津屋崎古墳群Ⅱ』（福津市文化財調査報告書第４集）
7）註３）－〔B〕小田論考
8）三橋正 2010『日本古代神祇制度の形成と展開』第一篇第一章第一節
9）廣瀬和雄 2010『カミ観念と古代国家』第４章
10）穂積裕昌 2012『古墳時代の喪葬と祭祀』
11）井上光貞 1988「古代沖の島の祭祀」（吉村武彦編『天皇と古代王権』Ⅳ王権と祭祀：岩波現代文庫）
12）杉村勇造 1970「金銅製龍頭」（『沖ノ島Ⅰ―宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報』Ⅳ―１）
13）弓場紀知 1995『三彩』（中国の陶磁３）
14）泉武 1982「人形祭祀の基礎的考察」（『橿原考古学研究所紀要』第８号）



沖ノ島位置図



沖ノ島地形図



沖ノ島祭祀遺跡分布図

発掘遺跡区分

Ⅰ 岩上祭祀…計５
16・17・18・19・21

Ⅱ 岩陰祭祀…計12
４・６・７・８・９・10・11
12・13・15・22・23

Ⅲ 半岩陰半露天祭祀…計２(＋１)
５・20 (＋14)

Ⅳ 露天祭祀…計３
１・２・３

『続沖ノ島』
『宗像沖ノ島』より

遺跡の種類	遺跡	鏡鑑															
		方格規矩文鏡	三角縁神獣鏡	獣帯文鏡	盤龍鏡	変形きほう文鏡	変形方格規矩文鏡	変形内行花文鏡	変形三角縁神獣鏡	だ龍鏡	変形獣帯文鏡	変形画象鏡	珠文鏡	変形文鏡	素文鏡	その他(型式不明)	八稜鏡(和鏡)
巨岩上	16号						1	1	1						1		
	17号					1	7	3	3	2	2	2		1			
	18号	1	1			1			3								
	19号							1								1	
	21号			2						1					1	1	
岩陰	4号	(1)									(1)		(1)	(1)			
	6号																
	7号												1			1	
	8号				1		1							1			
	22号																
半岩陰・半露天	5号																
	20号																
露天	1号																1

遺跡の種類	遺跡	装身具														
		勾玉(硬玉・碧玉・こはく)	管玉(碧玉)	なつめ玉(硬玉)	切子玉(水晶・ガラス)	丸玉・小玉(ガラス)	黄金指輪	金銅釧	銀釧	銅釧	鉄釧	車輪石(碧玉)	石釧(碧玉)	銅鈴	帯先金具	有孔あわび貝
巨岩上	16号	○	○			○				○	○		○			
	17号	○	○			○						○	○			
	18号	○	○	○		○							○			
	19号	○	○			○					○					
	21号	○	○	○							○					
岩陰	4号														○	
	6号					○										○
	7号				○	○	○	○	○						○	○
	8号	○	○		○	○		○	○	○					○	○
	22号															○
半岩陰・半露天	5号	○				○										
	20号															
露天	1号													○		

遺跡の種類	遺跡	武器								工具					
		鉄刀・刀装具	鉄剣	鉄矛	鉄槍	鉄鏃	衝角付冑	挂甲	盾	わらび手刀子	鉄刀子	鉄鉇	鉄斧	鉄鎌	鉄針
巨岩上	16号	○	○	○	○	○					○		○		
	17号	○	○								○				
	18号									○					
	19号	○	○	○							○				○
	21号	○	○			○	○			○	○	○	○	○	
岩陰	4号	○	○										○		
	6号										○				
	7号	○	○	○	○	○		○	○				○		
	8号	○	○	○	○	○							○		
	22号														
半岩陰・半露天	5号	○	○								○		○		
	20号	○									○				
露天	1号	○				○					○				

遺跡の種類	遺跡	馬具						容器								
		鞍	歩揺飾雲珠	辻金物	金銅製杏葉	轡	鈴	銅鋺	銅皿・盤	土師器(壺・高杯)	須恵器器台	須恵器壺・甕など	須恵器有孔坩	唐三彩	奈良三彩	切子ガラス碗
巨岩上	16号															
	17号															
	18号									○						
	19号									○						
	21号									○						
岩陰	4号	○	○	○		○			(○)		(○)	(○)	(○)			
	6号		○					○		○	○	○				
	7号	○	○	○	○	○	○				○	○		(○)		
	8号	○	○	○								○				○
	22号									○						
半岩陰・半露天	5号									○	○	○		○		
	20号											○	○			
露天	1号							○	○	○	○	○	○		○	

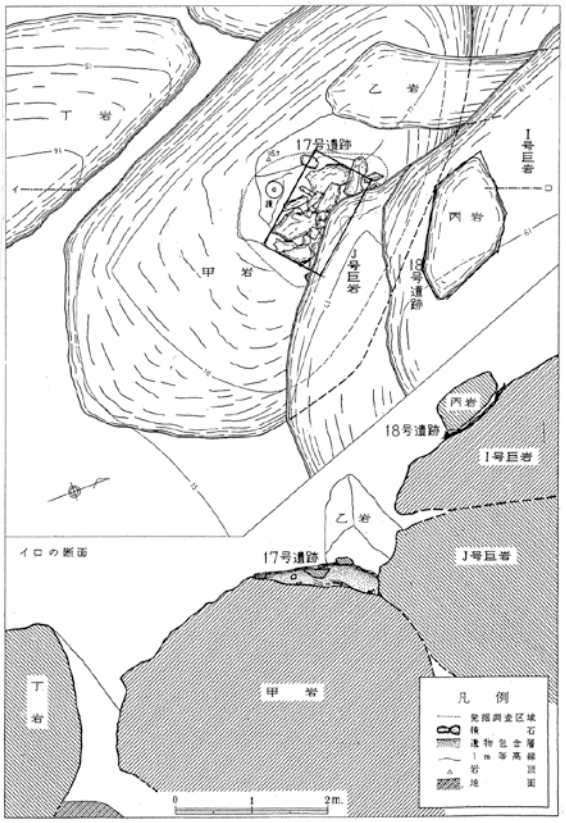
遺跡の種類	遺跡	雛形祭祀品								
		刀子・刀(鉄)	斧(鉄・金銅)	矛(鉄)	鐸(鉄・銅)	儀鏡(鉄)	琴(金銅)	紡織具(金銅)	横櫛(金銅)	銅容器(細頸壺・鋺)
巨岩上	16号	○								
	17号									
	18号									
	19号									
	21号		○			○				
岩陰	4号	○	○							
	6号	○			○					○
	7号	○								
	8号	○	○							
	22号	○	○			○		○		○
半岩陰・半露天	5号	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	20号									○
露天	1号				○	○		○		

遺跡の種類	遺跡	滑石製祭祀品									
		子持勾玉	大形扁平勾玉	勾玉	管玉	臼玉・平玉	なつめ玉	小玉	剣形品	円板(有孔・無孔)	石釧
巨岩上	16号			○	○	○	○	○			○
	17号			○	○		○	○			
	18号				○	○					
	19号			○	○		○	○			○
	21号	○			○	○	○	○	○	○	
岩陰	4号	(○)				○		○		(○)	
	6号					○			○		
	7号					○		○			
	8号	○				○				○	
	22号					○					
半岩陰・半露天	5号					○				○	
	20号		○			○				○	
露天	1号	○	○			○				○	

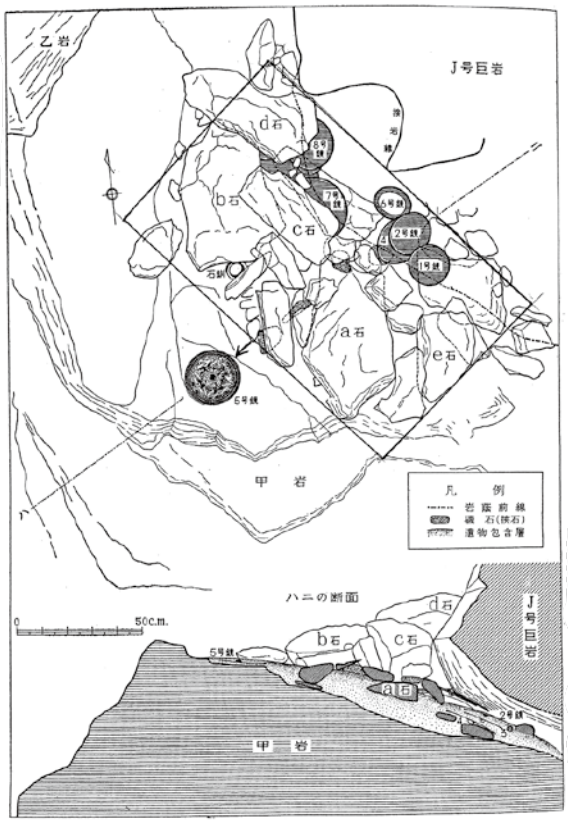
遺跡の種類	遺跡	形代					特殊遺物			その他					
		人形(金銅製)	人形(滑石製)	馬形(滑石製)	舟形(銅製)	舟形(滑石製)	金銅製龍頭	皇朝銭(富寿神宝)	鉄鋌	近世陶磁器	近世素焼皿	寛永通宝	宋銭	鰐口(銭)	三叉矛(鉄)
巨岩上	16号								○						
	17号														
	18号														
	19号														
	21号								○						
岩陰	4号									○	○	○			
	6号								○						
	7号														
	8号														
	22号	○													
半岩陰・半露天	5号	○					○						○	○	○
	20号														
露天	1号		○	○	○	○		○							

（小田作成）

沖ノ島祭祀遺跡　出土品種類一覧（但し発掘調査分のみ）



17・18号遺跡付近の地形図



17号遺跡の積石の状態

『続沖ノ島』図面に加筆

昭和53年２月13日昭和天皇に沖ノ島御進講の後、記念撮影（東京・出光美術館）

後列（左より）　阿久井長則・佐田茂（佐賀大学名誉教授）・末松良介・神島定
前列（左より）　葦津義之（宗像大社宮司）・岡崎敬（九州大学名誉教授）・
出光佐三（宗像大社復興期成会会長）・古田紹欽（出光美術館理事）・小田富士雄

昭和45年10月14日沖ノ島１号遺跡の記念撮影（左端・小田富士雄、中央・大場磐雄）

おびただしい数の土器と滑石製祭祀品

写真による記録

図面による記録

沖ノ島１号遺跡の調査風景

半岩陰・半露天祭祀遺跡の調査

検出作業と併行して進める記録作業

岩陰に遺された祭祀品

沖ノ島５号遺跡の調査風景

第3章

宗像・沖ノ島祭祀の実像
―古代の祭式からみた沖ノ島祭祀遺跡―

笹生　衛

はじめに

宗像・沖ノ島の祭祀遺跡は、４世紀後半にはじまり、９世紀代まで続いた神祭りの跡で、島の南側斜面、標高約85ｍにある巨岩群とその周辺に残る（宗像大社復興期成会　1958・1961・1979）。

その祭祀の形は、発掘調査の成果にもとづき、次の４段階で変遷したとの解釈が定説となっている。つまり、最も古い巨岩の上の「岩上祭祀」（４世紀後半から５世紀）から、巨岩のもとの「岩陰祭祀」へ、そして巨岩から少し離れた「半岩陰・半露天祭祀」（７世紀後半から８世紀）となり、最終段階には、巨岩から離れた「露天祭祀」（８・９世紀）へと変化したという（小田　1979）。

これは、祭祀で捧げ使用した品々が出土した場所は、そのまま祭祀の場であるとの前提に立っている。はたして、そう考えてよいのか。また、この解釈では、いかに神を祀ったのか、祭祀の実態とは、どのようなものだったのか明らかにはされていない。そこで、ここでは、古代の神の考え方（神観）と祭祀の構成「祭式」から、宗像・沖ノ島祭祀遺跡を残した古代祭祀の実像を考えてみたい。

１．古代の神観と祭祀の意味

古代の神観　そもそも、人々は、なぜ神を信じ祭祀を行うのだろうか。そこには、人間の脳の認知機能が大きく関係している。最近の認知宗教学の研究によると、人間は、特定の現象の背後に、それを起こし司る「行為者（Agents）」を直観的に感じ、自らの姿や性格と同じように人格化して考えるという（ボイヤー　2008、ガスリー　2016）。

これは、『記紀』や『延喜式』祝詞などが記す古代日本の神々にも当てはまる。それが「坐す・居す（ます）神」の考え方である。特定の現象が現われる環境・場所には、それを起こし司る神が居られると直観するのだ。『延喜式』の「祈年祭」や「大忌祭」祝詞にある「水分（みくまり）に坐す皇神（すめがみ）」、「山の口に坐す皇神」は、その典型例である。

『記紀』が伝える沖ノ島（沖津宮）、大島（中津宮）、釣川河口の海浜（辺津宮）に坐す宗像三女神も同じである。玄界灘の自然環境の働き、海上にでる霧や激しい潮流の動きにもとづく神名「タゴリヒメ（タギリヒメ）・タギツヒメ」、玄界灘のただ中で真水が湧く神聖な島の女神を意味する「イツキシマヒメ」の神名は、それを示す。

祭祀の意味　では、このような神々への祭祀とは、どのような考え方で成り立っているのだろか。人々は、神が坐す（居られる）場所で、自らが貴重とする品々、美味しいと感じる酒食を供え、人々が望む神の働きを願う。すると、神は返礼として、それを聞き入れ叶えてくれると直観するのだ。これが、祭祀の基本的な形である。ここにも、脳の認知機能が働いている。神を人間と同じ姿・性格を持つと考えるため、何かを提供すれば、何かが返されるはずとの人間関係の直観が当てはめられている。

その一方で、神の意に沿わぬ非礼な行為、穢れた品や酒食を捧げ供えれば、怒り祟るという危険への直観も同時に働く。だから、非礼とならぬため、祭祀には厳重な潔斎と厳格な作法・祭式の遵守がもとめられる。古代の神祇祭祀に伴う潔斎・祓と、細かな祭式の規定は、これに対応するといってよい。

2．古代の祭式と『皇太神宮儀式帳』

古代日本の神祇祭祀の祭式は、延暦23年（804）に成立した『皇太神宮儀式帳』（以下、『内宮儀式帳』）に残る（胡麻鶴・西島　1979）。成立年代から考えて、８世紀代の神宮祭祀の実態を伝えているといってよい。その年代は、宗像・沖ノ島祭祀遺跡の５号遺跡（半岩陰・半露天祭祀）、１号遺跡（露天祭祀）と重なる時代である。この神宮の古代祭式を整理し、古墳時代の祭祀遺跡などと比較することで、その歴史性や祭祀としての普遍性について検証してみよう。

祭祀の場　祭祀の場となる神宮内宮の建物と施設の配置は、概ね次のように整理できる（福山　1940）。

①御形（みかた・神を象徴するもの）の宝鏡を奉安し、神宝・幣帛を収納する高床倉構造の「正殿」「東・西宝殿」を板垣（瑞垣）で区画・遮蔽して大宮院（内院）の中核とする。

②その南に儀礼空間の「第三重」が位置し、そこには斎王と女孺（にょじゅ）の侍殿が建つ。

③建物配置は、南北の中心軸上に正殿を置き、東・西宝殿、侍殿等は東西にシンメトリーに配置、五重の板垣で区画・遮蔽される。

④垣内への出入り口は、主に中心軸上に設けられた門〈於葺御門（うえふくごもん）、於不葺御門（うえふかざるごもん）＝鳥居の原形〉となる。外と接する門の前には蕃垣が立つ。

これら４つの要素のうち②から④までの建物配置と儀礼空間の特徴は、『日本書紀』が白雉３年（652）に完成したとする難波長柄豊碕宮（前期難波宮）に対応させた形であり、７世紀中頃、倭国が律令国家へと転換する過程で整備された結果と考えられる（笹生　2015）。

これに対し、①の高床倉と区画・遮蔽施設については、古墳時代の祭祀遺跡で確認できる要素である。列島内の５世紀から７世紀代の複数の祭祀遺跡で、閂穴付きの扉材と楣（まぐさ、扉を装着する部材）、梯子材といった部材が出土する。このことから、多くの祭祀の場には、高床建物、特に閂で扉を固定し封ができる高床倉が建っていた可能性が高いと考えられる（笹生　2012）。

また、高床建物を塀などで区画・遮蔽した遺跡が存在する。４世紀代の奈良県御所市秋津遺跡（米川2014）、５世紀代の兵庫県神戸市松野遺跡（神戸市教委　1983）のほか、５世紀末期から６世紀初頭頃の群馬県渋川市金井下新田遺跡（原　2017）があり、いずれも、祭祀・儀礼との関連が指摘できる。高床倉と塀・垣などの区画・遮蔽施設は、４世紀以来、祭祀・儀礼の場と密接に関係していたのである。この区画・遮蔽施設は、人間の認知機能、特に危険への直観に対応するもので、神や祭祀へと穢れなどの悪影響が及ばないようにする一方で、神霊の強い霊威が周囲へと悪影響を与えないようにする機能を果たしていたと考えられる。神を象徴する御形を奉安した高床倉を、塀・垣で区画・遮蔽した形が、神宮の原形「神籬（ひもろき）」の実態と考えられる（笹生　2015）。そして、それは古墳時代の４・５世紀以来の伝統をもち、古代祭祀に広く当てはまる要素といってよいだろう。

祭祀の構成　次ぎに、祭祀の流れ・構成「祭式」を、主に内宮の「三節祭（６・12月16日の月次祭と９月16日の神嘗祭）」で確認してみよう。『内宮儀式帳』が記す、９世紀初頭当時の三節祭の祭式は、次の三段階の構成となっている。

①祭祀は「祭祀の準備」から始まる。祭祀で使う祭具や供献品の作成、御饌（神饌）の調理が行われる。禰宜、土師器作物忌、御笥作内人、忌鍛冶内人、陶器作内人などが、鍛冶、木工、土師器・須恵器の製作、養蚕と紡織を行い、大御饌（おおみけ）の調理具や供膳用の食器類など祭具、大神に捧げる神御衣を製作する。

大神に供える大御饌は、禰宜たちが磯に出て食材を調達するとともに、神田で収穫された米を臼・杵で舂き炊飯し、酒作物忌（さかとくのものいみ）、清酒作物忌による酒の醸造、御塩焼物忌（みさきものいみ）による製塩などが行われ準備された。

②続いて「祭祀」となる。禰宜たちは御饌を持ち内院に入り正殿前に供え、拝と拍手の後に退出する。神嘗祭の翌日（９月17日）、斎王が参拝、驛使（勅使）により朝廷の幣帛が捧げられる。斎王は内院

の第三重（だいさんのえ）へ参入し瑞垣御門に太玉串を捧げ拝・拍手。忌部は第三重で幣帛と神馬を捧げる。勅使の中臣と大宮司は告刀（祝詞）を奏して、太玉串を捧げる。

③祭祀の後、「祭祀後の対応」がとられる。三節祭で正殿前に供えた大御饌は、夜に夕大御饌を供えた後、未明に改めて朝大御饌が供えられているので、禰宜たちの拝・拍手後の退出に伴い撤下されていたと考えられる。

神嘗祭の翌日、第三重で捧げた朝廷の幣帛は正殿内へ、神馬の鞍（馬具）は正殿に隣接する東宝殿へ、それぞれ禰宜たちの手により納められる。

まず、①「祭祀の準備」については、5世紀以降の列島内各地の祭祀と関連する遺跡・遺構で共通点を認めることができる。この種の遺跡・遺構は、多くの場合、祭祀で使用した模造品（石製・鉄製・木製・土製）などと飲食を供えたと考えられる土器類が、まとめられ集積した状況で確認される。これら遺物とともに、鍛冶、石製模造品の製作、紡織、調理に関係する遺物が出土している。このことから、祭祀で使用したり、捧げたりした鉄製品や石製模造品、布帛類を製作し、神へ供えた食膳の調理が行われたと推測できる。日本列島内、各地の祭祀遺跡を残した祭祀は、地元の人々の手により、神祭りの場の近くで準備されていたと考えられる。これは、古代の神宮祭祀が、禰宜・内人・物忌など地元の祭祀者により、最終的に準備されていたことと一致し、その伝統は、祭祀遺跡と共通するため、5世紀代まで遡るといってよいだろう。この「祭祀の準備」の目的は、神のための品々を特別に製作し、その清浄性を確保することにあったと考えられる。

続く、②「祭祀」では、地元の祭祀者である禰宜たちが、直接、大御饌を神前に供える。これは、①「祭祀の準備」と直接つながるものであり、やはり伝統的な要素と考えられる。

一方、朝廷の幣帛の奉献では、神宮の第三重で大宮司、中臣・忌部氏による祝詞奏上、幣帛・神馬の奉献が行われる。この部分は、新旧、二つの要素から構成されるといえる。一つは、第三重の祭祀では、版位（へんい、宮廷儀礼で参加する官人の位置を示す）を使用する点である。大宮司以下の祭員（祭祀の参加者）は版位に付き整列して祭祀は行われる。これは宮廷儀礼と共通し、神宮の建物配置が前期難波宮の配置にもとづき整備された7世紀中頃に導入された形と考えられる。

もう一つは、朝廷から供与された幣帛を奉献することで、これは伝統的な要素と考えられる。列島内各地の5世紀代の祭祀遺跡からは、当時、大和王権で集積・管理していたと考えられる鉄鋌、新しい技術で焼成された初期須恵器が出土しており、大和王権からの貴重で先進的な物品が、地方の祭祀の場へと供与されていたことが推測できる（笹生　2012）。朝廷の幣帛の供献は、この5世紀以来の伝統にもとづくものといってよいだろう。

最後の③「祭祀後の対応」には、やはり、5世紀代以来の要素が色濃く認められる。まず、夕・朝大御饌は、神前へと放置されたのではなく、撤下されていたと推測できるが、それは同時に、神前から下げられた大御饌の食器が特定の場所にまとめられたことを示唆する。5世紀以降の祭祀遺跡は、多くの場合、土器類などの集積遺構として確認される。これは祭祀で使用された祭具や供えられた食器類が、最終的にまとめられた状態と考えてよいだろう。

また、神宝類、幣帛や神馬の馬具など、貴重な御料、奉献品を高床倉構造の正殿や宝殿へと収納している点は、5世紀以来、複数の祭祀の場に存在した高床建物（高床倉）に対応する。

以上のように、神宮の三節祭の祭式を見ると、第三重での儀礼の形は、7世紀中頃から後半、宮廷儀礼の影響を受けて新たに加わった要素である。その他の要素は、多分に5世紀以来の古い系譜をひくといってよさそうである。この伝統的な要素は、地元の祭祀者が主体的に係わる大御饌を供える部分と、朝廷から供与される幣帛を捧げる部分の二重構造となっていた点が特徴である。そして、このような祭祀の構成は、古墳時代の祭祀遺跡との対応関係から、決して、神宮の特有なものではなく、日本列島の各地で行われた古代祭祀が共有する要素であったと考えよいだろう。

３．宗像・沖ノ島祭祀の復元

これまで見てきた古代祭祀の構成（祭式）と沖ノ島祭祀遺跡とを比較することで、古代の宗像・沖ノ島での祭祀の具体的な姿を復元してみよう。

巨岩へ納めた神宝　沖ノ島祭祀遺跡では各段階の祭祀で共通した状況が認められる。特定の場所に、奉献品と考えられる遺物が、まとめられた状態で出土するのである。岩上祭祀の17号遺跡（４世紀後半）では、I号巨岩の隙間に銅鏡・刀剣・石製腕輪などが、まとめられ差し込まれた状態で出土。同じく21号遺跡（５世紀）ではＦ号巨岩上の石で区画した中に鉄製の武器・武具、鉄鋌などが集中して置かれていた。岩陰祭祀の７号遺跡（６世紀）では、Ｄ号巨岩の岩陰に馬具、胡籙、弓矢、倭系飾り大刀･剣、鉾、盾、挂甲などが整然と並べられており、南側は緩やかな斜面しなっている。いずれも祭祀を行うには狭い場所であり、出土した品々は、祭祀で奉献したままの状態というよりは、捧げた品々を祭祀後にまとめ納めた状況と考えるほうが妥当だろう。

また、岩陰祭祀の22号遺跡（７世紀）では、M号巨岩の岩陰に石で囲みを作り、その中に金銅製雛形の紡織具や高杯･壺などがまとまって出土。半岩陰･半露天祭祀の５号遺跡（７世紀後半～８世紀）では、Ｂ号・Ｃ号巨岩の隙間、最も奥まった部分から鉄刀、金銅製雛形の琴、紡織具、高杯・壺がまとまって出土した。神宮の神宝と共通する刀剣､紡織具､琴は､巨岩のもとへ納めるという意志が明らかに窺える。

沖ノ島祭祀において巨岩群は、沖ノ島に坐す神を象徴する「御形（みかた）」であり、そこへ神宮の神宝と共通する品々が納められていたのである。これは、神宮で神宝と朝廷の幣帛、神馬の馬具を、天照大神の御形の宝鏡を奉安する正殿、隣接する宝殿へ、祭祀の後に納めることと共通する。神へと捧げた貴重な品々は、最終的に神を象徴する御形の近くへ納められたのである。神宮の祭祀の構成は、古代祭祀の一般的な形であり、神宝と共通する品々が捧げられた沖ノ島の古代祭祀においても同様であったと考えてよい。

つまり、神宮の古代祭祀を参考にすれば、古代の沖ノ島祭祀では、神の御形の巨岩群を仰ぎ、一定の広さが確保できる場所での祭祀において奉献品を捧げた後、貴重な奉献品は宗像氏などにつながる地元の祭祀氏族の人々の手により、神の御形の巨岩群へと持ち込まれ納められた。巨岩群からの出土品の多くは、このようにして残されたと推定できる。そして、祭祀で捧げた貴重品を収納するという意味で、５世紀以降の祭祀の場に建っていた高床倉の存在に対応するといってよいだろう。

祭祀と土器生産　酒食を供えたと考えられる土器類にも、神宮祭祀との共通点が認められる。沖ノ島祭祀で使用する土器は、圧倒的に須恵器が多数を占める。この傾向は、７世紀後半頃から始まる５号遺跡や、ほぼ同時期と考えられる22号遺跡で明確となる。須恵器には特殊な鉢や有孔土器といった祭祀用の器種が含まれ、特定の須恵器の工人が祭祀用に作った土器が、沖ノ島の祭祀の場で使われていたのである。これは、神宮の古代祭祀で、大御饌を供える須恵器・土師器を、陶作内人と土師作内人が作ることと一致する。

神宮の土師作内人の土器製作の伝統は、三重県明和町（神宮の土器を製作する地域）の北野遺跡で６世紀代に土器焼成土坑が成立するため(三重県埋文　1995)、６世紀後半まで遡る。宗像･沖ノ島祭祀の場合、神宮の陶作内人のような特定の工人が、祭祀用の須恵器を生産し祭祀の場へと供給する体制は、５号遺跡が始まる７世紀後半頃に確立したのだろう。

祭祀と製塩　さらに、５号遺跡と露天祭祀の１号遺跡からは、玄界灘式の製塩土器が出土している。地元の製塩の場から、直接、塩が沖ノ島祭祀の場に持ち込まれていたことを示唆する。神宮の月次祭などの大御饌に添えられる塩は御塩焼物忌が特別に焼いたもので、製塩の場から持ち込まれていた。これと、玄界灘式の製塩土器の存在は一致する。

このように、７世紀後半を画期として、神宝・祭具だけでなく、土器・塩の供給といった祭祀の準備の形まで、宗像・沖ノ島祭祀は神宮祭祀との共通性を高めていったのである。

祭具・土器の撤下・集積　神宮と沖ノ島祭祀に多くの共通点があるならば、宗像・沖ノ島の女神に供えた神饌（食膳）も、神宮と同様、祭祀の後に撤下されたと推定できる。そうすると、撤下した土器は一定の場所へとまとめて集積されたはずである。これに対応すると考えられるのが露天祭祀の１号遺跡である。１号遺跡では、多量の土器と石製模造品や金属製雛形などが混在して出土しており、金属製雛形などと土器類が分別されて出土し、年代も近い５号・20号・22号遺跡とは明確な違いがある。５号・22号遺跡と同時代か続く年代の祭祀で供えた土器類、さらに交換・廃棄された祭具類を集積した結果、１号遺跡は形成されていたのではないだろうか。１号遺跡を、そのまま祭祀の場とするのは、その雑然とした遺物の出土状況からは難しいと考えられる。

沖ノ島祭祀の祭式　宗像・沖ノ島における祭祀は、次の三段階からなる古代祭祀の基本的な祭式で行われていたと考えられる。三段階とは、まず①「奉献品・祭具を製作し神饌を調理する祭祀の準備」、続いて②「奉献品と神饌を供え、神へと願意を伝えて拝礼する祭祀」、最後に③「奉献品を神の近くへと収納・安置し、神饌を撤下する祭祀後の対応」である。

初期の岩上祭祀や続く岩陰祭祀の遺跡での遺物出土状況は、祭祀の後、最終的に奉献品を収納・安置した結果と理解でき、三段階の祭式の流れは、沖ノ島祭祀の初期から行われていたと考えられる。また、祭祀遺跡が集中する巨岩群から距離を隔てた正三位社前遺跡では、鉄素材の鉄鋌16枚がまとまって出土している。ここは、５世紀代の「祭祀の準備」に関連する遺跡だった可能性を考えることができる。

そして、７世紀後半、金銅製雛形類が成立するのと同時に、地元から神饌用の特別な須恵器や塩を生産し供給する、神宮の祭祀と共通する体制が沖ノ島祭祀でも整えられたのである。

まとめ ―国家形成と『記紀』神話との関連―

４世紀後半以来の歴史をもつ宗像・沖ノ島祭祀。その祭式を考える上で大きな画期となるのが７世紀後半である。それは、沖ノ島祭祀のみの問題ではない。７世紀中頃、皇祖神を祀ってきた「神籬」は、前期難波宮の建物配置にならい「神宮」が成立。650年代から660年代には出雲の神と香島（鹿島）の神の祭祀の場は「神宮」として整備された。いずれも、神宮とともに神郡が設置され、国家的に重要とされた神々である。

宗像の神々にも神郡の宗像郡が置かれており、５号・22号遺跡からうかがえる７世紀後半頃の祭祀体制の整備は、年代が近似するため、同じ歴史的な背景のもとで行われたと考えられる。この時代、倭国が律令国家「日本」へ、大王が「天皇」へと転換する古代国家の形成期である。この過程で、皇祖神と列島内の主要な神々の祭祀は整備され、その神々の物語は、７世紀後半に編纂が始まった『記紀』神話の中核部分として位置づけられたのではなかろうか。宗像三女神と宗像・沖ノ島祭祀も、その一つであった。沖ノ島の古代祭祀は、日本の国家形成のプロセスと密接に関係していたのである。

参考文献

小田富士雄 1979「報告編第４章　沖ノ島祭祀遺跡の時代と祭祀形態」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
神戸市教育委員会編 1983『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会
胡麻鶴醇之・西島一郎校注 1979『神道体系　神宮編一　皇太神宮儀式帳・止由氣宮儀式帳・太神宮諸雑事記』神道体系編纂会
笹生　衛 2012『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館
笹生　衛 2015「神の籬と神の宮－考古学からみた古代の神籬の実態－」『神道宗教』第238号
スチュアート E ガスリー（藤井修平訳）2016「神仏はなぜ人のかたちをしているのか　擬人観の認知科学」『〈日本文化〉はどこにあるのか』春秋社
パスカル ボイヤー（鈴木光太郎＋中村潔訳）2008『神はなぜいるのか？』NTT出版
原　雅信 2017「金井下新田遺跡の囲い状遺構と祭祀遺構について」『平成29年度遺跡発表会　金井下新田遺跡の謎にいどむ』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

福山敏男 1940『神宮の建築に関する史的調査』造神宮使廳
宗像大社復興期成会編 1958『沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像大社復興期成会・吉川弘文館
宗像大社復興期成会編 1961『続沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像大社復興期成会・吉川弘文館
宗像大社復興期成会編 1979『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
三重県埋蔵文化財センター編 1995『北野遺跡（第２・３・４次）発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター
米川仁一 2014「奈良県御所市秋津遺跡の祭祀関連遺構」『考古学ジャーナル№657　特集祭祀考古学の現状』ニューサイエンス社

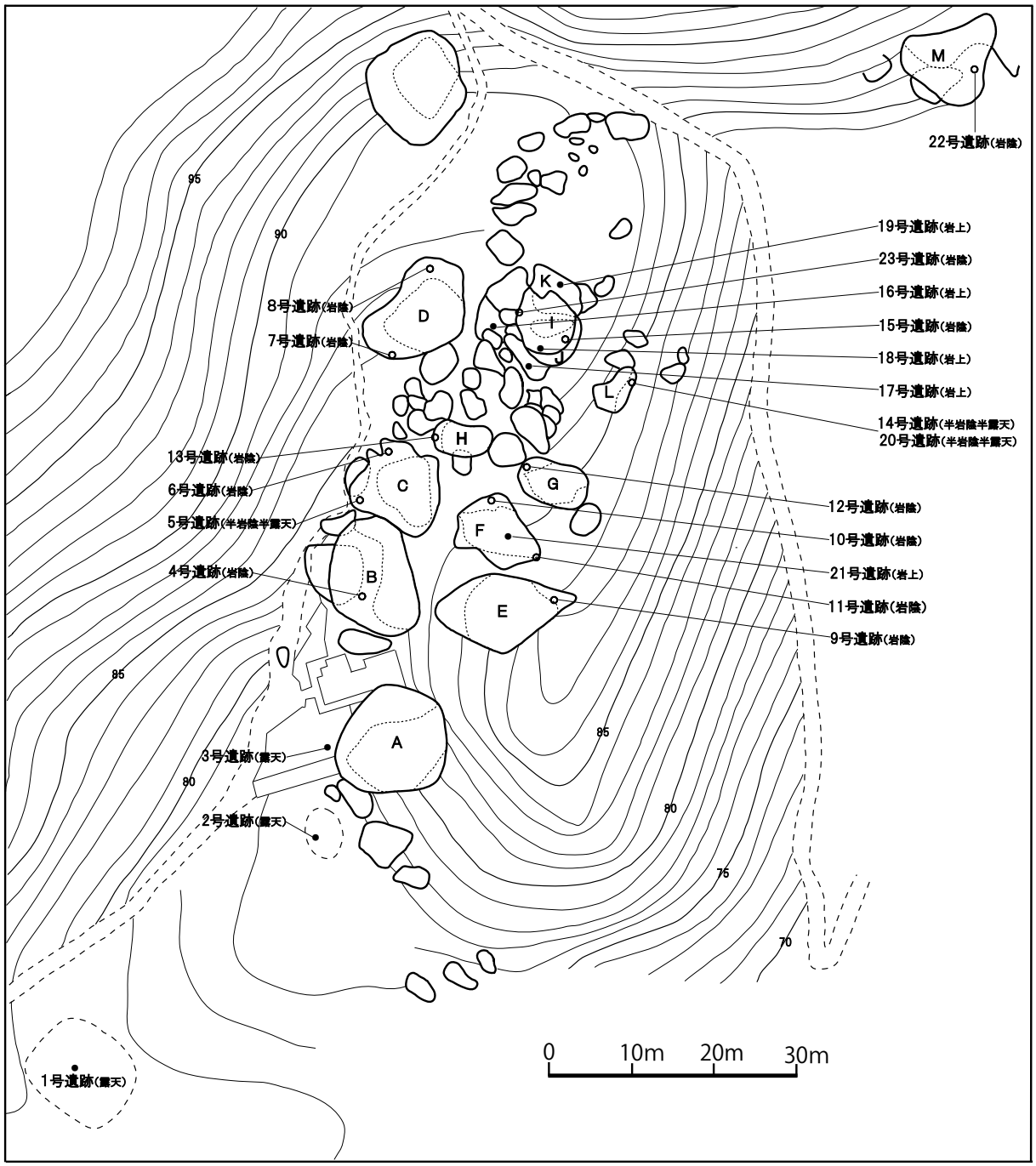


図１　沖ノ島祭祀遺跡全体図　〔報告書『宗像沖ノ島』(1979) から作成〕

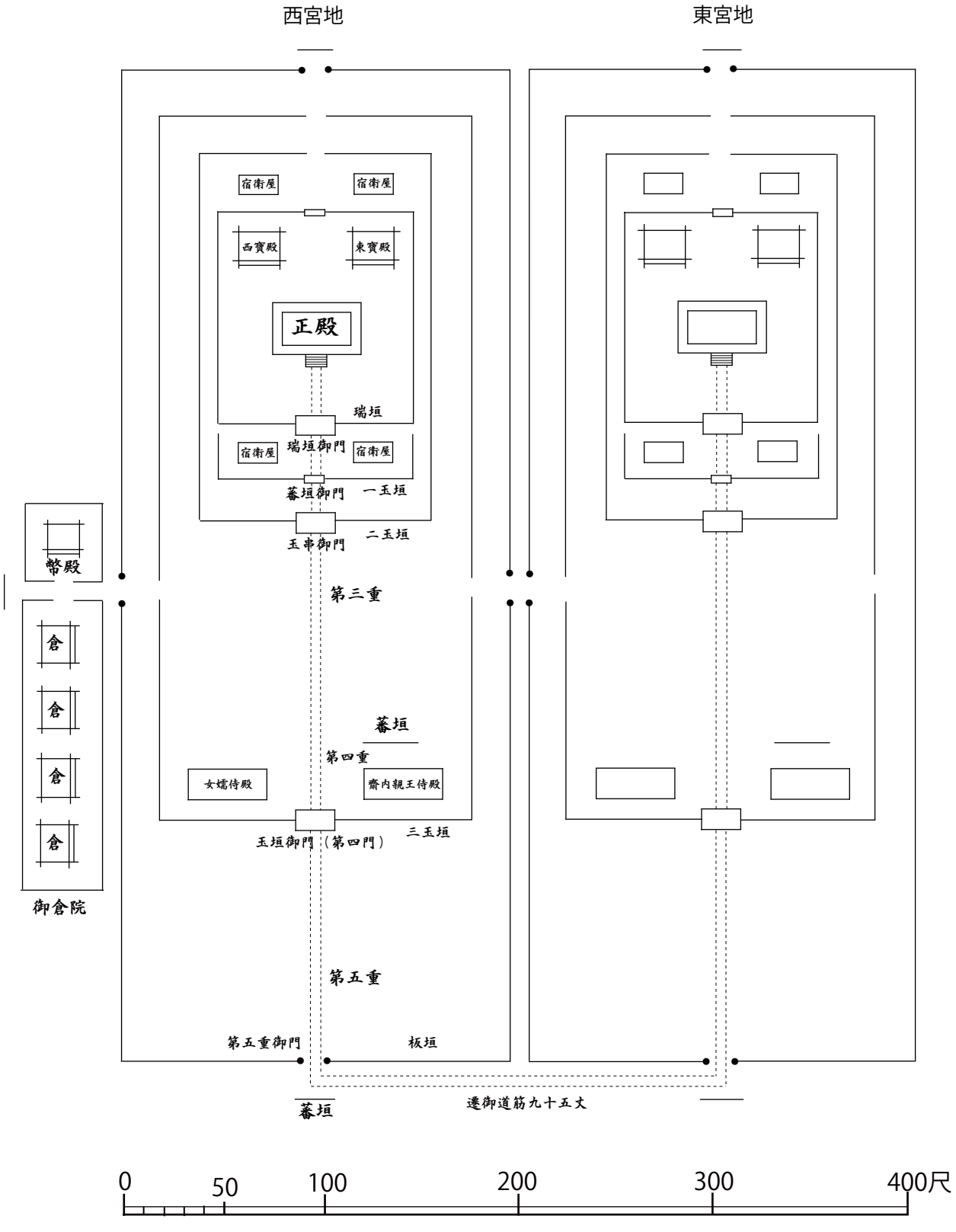


図２　皇太神宮大宮院建物・垣配置推定図　（『皇太神宮儀式帳』による。福山敏男『神宮の建築に関する史的調査』）

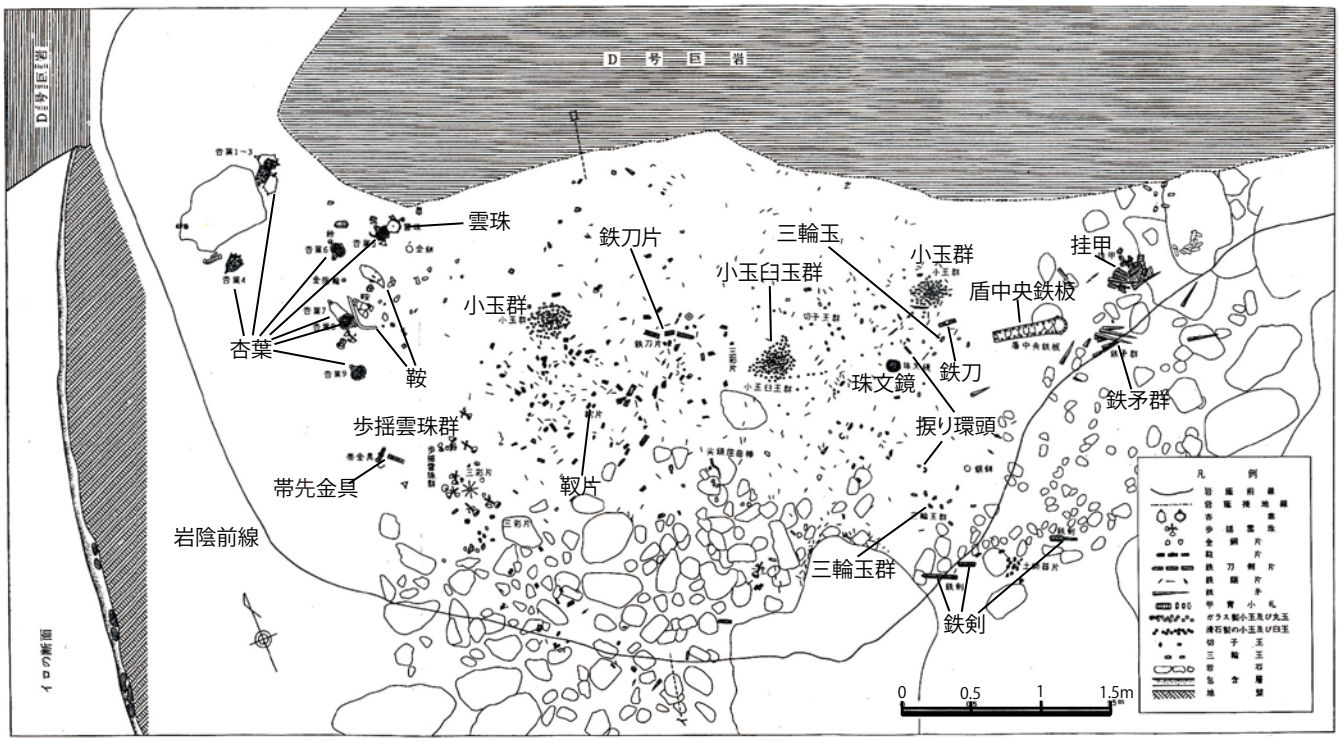


図３　７号遺跡遺物出土状況　〔報告書『沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』（1958）に加筆〕

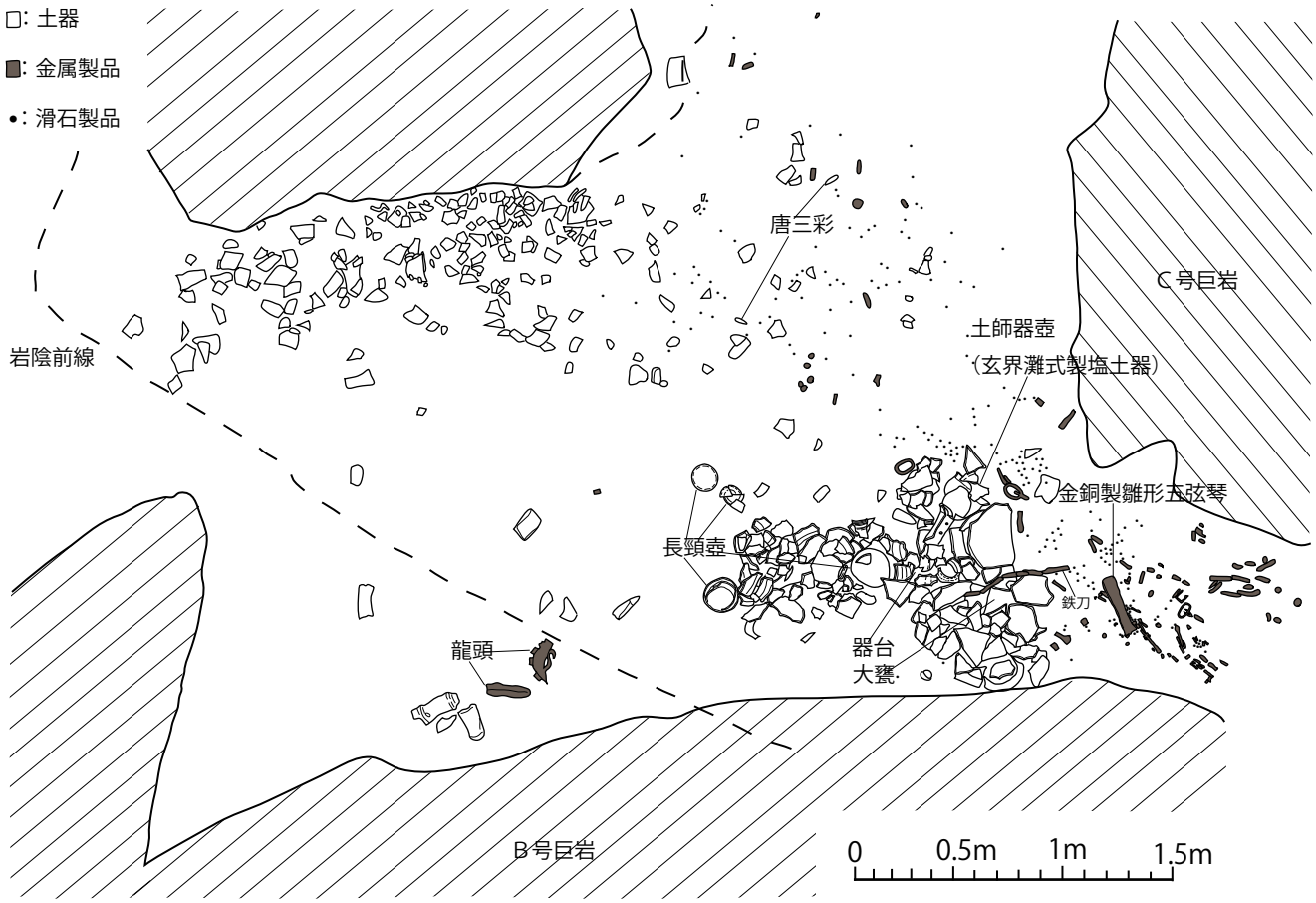


図４　５号遺跡遺物出土状況　〔報告書『宗像沖ノ島』（1979）の出土状況図を合成して作成〕

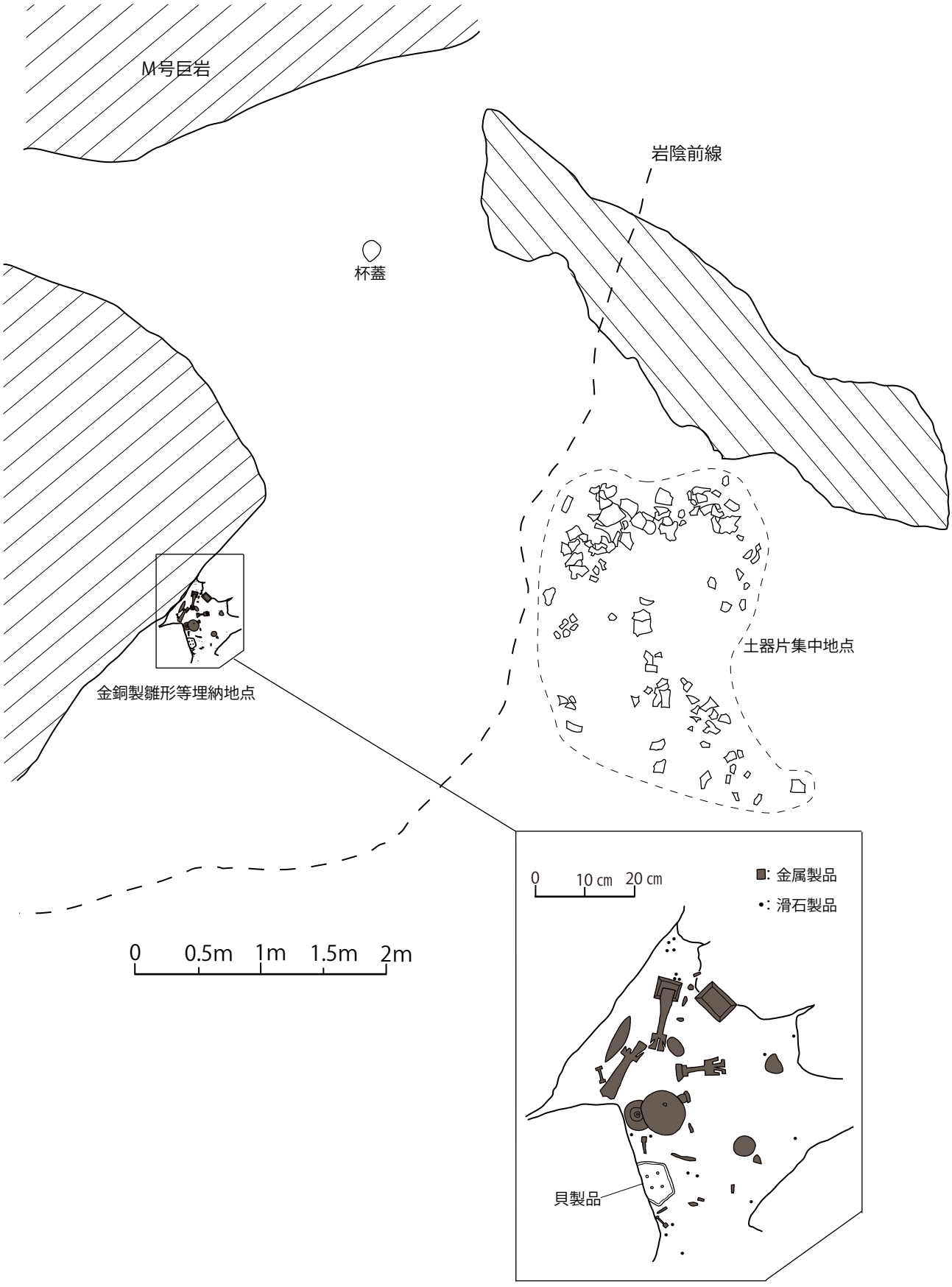


図5　22号遺跡遺物出土状況　〔報告書『宗像沖ノ島』(1979) の出土状況図を合成して作成〕

column　特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」

「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、平成29年（2017）７月に世界文化遺産に登録された。本登録に先立つイコモス（国際記念物遺跡会議）の勧告が、宗像大社沖津宮のみを登録すべきという内容であっただけに、７月の審議での「構成資産全体が一体となって、はじめて資産の価値が証明される」との意見は、登録への大きな後押しとなった。

九州国立博物館では、７月の審議に先立ち、地元の人々とともに「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界文化遺産登録を応援する企画として、平成29年１月１日から３月５日にかけて、特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」を開催した。本展は、『古事記』・『日本書紀』の記述と発掘調査の出土品を交差させることで、日本古来の神まつりに焦点を当てた。あわせて、海路で結ばれた大和・筑紫・韓国の各地の出土品を読み解き、沖ノ島出土品とともに、構成資産である新原・奴山古墳群の位置づけも図った。つまり、沖ノ島を取り巻く歴史的背景や思想的背景を説明することで、「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」を相対評価できる展覧会を目指したのである。

なお、九州国立博物館の４階文化交流展では、宗像大社とともに沖ノ島出土品を通年（展示品の入れ替え有）で展示しており、世界文化遺産登録後の公開・活用事業も、関係機関と連携して継続的に進めている。

（小嶋　篤）

特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」解説図録

第４章

巨岩と社殿

小嶋　篤

はじめに

九州国立博物館では、平成29年初春に特別展『宗像・沖ノ島と大和朝廷』を開催した（九州国立博物館2017）。本展は、古墳時代に軸を据えた内容であったため、奈良～平安時代（律令期）に形成された沖ノ島１号遺跡を十分に紹介できなかった。そこで、本章では「沖ノ島１号遺跡がどのように形成されたのか」を研究課題とし、巨岩と社殿の関係を検討する過程で律令期の祭祀像について紹介したい。

１．沖ノ島１号遺跡と「遺跡形成過程」

１号遺跡は、巨岩群・沖津宮社殿から南方にのびる緩斜面に形成された祭祀遺跡で、巨岩のまわり南北10ｍ×東西９ｍの範囲に遺物が広がる。発掘調査の結果、巨岩の南側と東側で角礫を敷いた石敷状遺構が検出された。出土遺物は金属製雛形品、金属製・滑石製形代、皇朝銭、奈良三彩小壺に加えて、多種多量の土器片が確認されている。とくに土器片は、おびただしい数量が雑然と堆積しており、祭祀跡と捉えるか、祭祀後の廃棄場と捉えるかについて、議論が分かれていた。

このような状況下で、中津宮が鎮座する大島にて「大島御嶽山遺跡」の発掘調査が実施され、露天状の祭祀遺跡で須恵器大甕を据え置いた痕跡が見出された。この成果をふまえ、小田富士雄氏は「（沖ノ島１号遺跡を祭祀の場とするのは）１号遺跡の形成当初までで、その後半期には廃棄場所に変貌した公算が大きい。その転換期はおそらく社殿が出現してそこで祭事が行われるようになったからであろう」との見通しを示した（小田2013）。

また、笹生衛氏は『皇太神宮儀式帳』（延暦23年（804年））に記された祭祀の全体構成を「①供献品や神饌を用意し、祭祀の場を清め装飾する準備段階」、「②幣帛や神饌を捧げ告刀（祝詞）を奏上する祭祀の中核部分」、「③幣帛等を収納したり直会を行ったりする祭祀後の対応」の三段階に分け、１号遺跡の再評価を行った（笹生2011）。その成果を基にすると、「巨岩の傍（５号遺跡）は、神宮における大神の御前と同様、神霊近くで神饌を供する場」であり、「巨岩から離れた場所（１号遺跡）では、祝詞奏上後の直会との関わりや使用した祭祀具の整理・集積がなされた」と整理できる。

小田氏・笹生氏の研究成果は、沖ノ島研究における今後の指針を示しており、『祭祀遺跡の形成過程』を具体的に追究することが求められている。しかし、１号遺跡は200年以上も続く祭祀行為が蓄積された全国屈指の祭祀遺跡であり、闇雲に検討を行っても、導き出された仮説は砂上の楼閣に等しい。そこで、本研究では１号遺跡と同時代に形成された大宰府管内の祭祀遺跡を研究対象とし、律令期の祭祀遺跡の空間構成を整理した上で、改めて沖ノ島祭祀遺跡について検討する。

２．後野・山ノ神前遺跡群の巨岩（福岡県那珂川市）

後野・山ノ神前遺跡群は、福岡平野を見下ろす片縄山の山頂付近（山頂標高253.9m、遺跡標高221～230m）に位置し、奈良～平安時代（８世紀後半～９世紀）に祭祀遺跡が形成された。祭祀遺跡は巨岩群を中心に広がり、発掘調査報告書に基づくと23基の祭祀遺構と参道状遺構１条が確認されている。巨岩中最大の大岩（長さ約３ｍ×高さ約1.5m）の周囲に広がる３号祭祀遺構では、岩陰部分に完形の

土器が据え置かれた状態で出土した。加えて、巨岩の周囲に小片となった須恵器（坏・皿・壺）と土師器（坏・鉢・高坏・甕・甑・製塩土器・手づくね土器）が出土した。とくに、製塩土器と甑を含むことが注目できる。

甑の存在は付近での調理を想起させるものであり、実際に15号祭祀遺構では炉跡（支脚と焼土）も検出されている。つまり、23基の祭祀遺構には、「①神饌の調理」を行った場所も含むと判断できる。また、出土遺物の９割以上を占める土器類は、「②巨岩の前面で神饌を捧げる」際に用いたものを中心に「③巨岩の岩陰に収納」したものであろう。そして、３号祭祀遺構では、これらの土器とは他に、巨岩からやや離れた位置で土師器甕と須恵器坏の埋納が確認できる。埋納土坑の前面には灯明皿が置かれ、夜間に祭具の収納・埋納がなされたと推定できる。

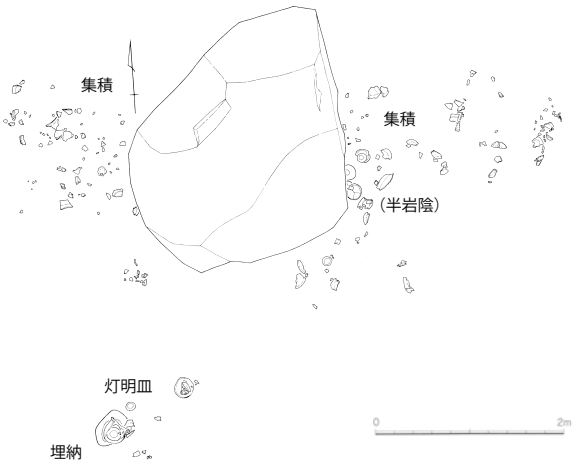


図１　後野・山ノ神前遺跡群３号祭祀遺構

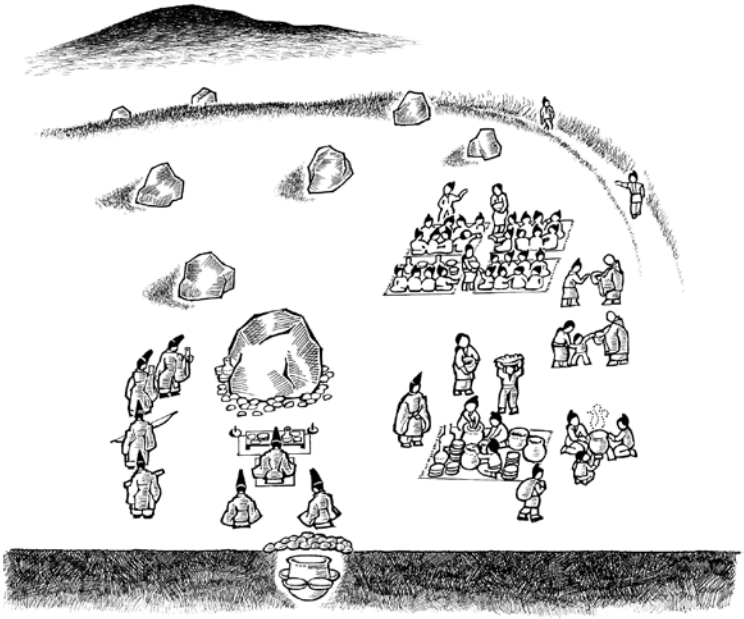


図２　後野・山ノ神前遺跡群をモデルにした社の想定図
（異時同図法で描写）

本遺跡は巨岩祭祀の典型的事例である一方で、灯明皿という原始神道にはもともと見られなかった祭具も加わる。同遺跡では灯明皿に加えて、香炉状の土師器蓋や鉄鉢形須恵器も出土し、古代寺院跡出土遺物とも類似する。実は、後野・山ノ神前遺跡群に隣接する大薮池遺跡群では複数の瓦片が発見されており、周囲に小規模な山林寺院が存在すると見られる。つまり、古代の片縄山山頂付近では、社と山寺が一体となった宗教空間が形成されていたと考えられ、巨岩祭祀の場でも祭具の一部が習合する実態が窺える。

３．金武城田遺跡の社殿（福岡県福岡市早良区）

金武城田遺跡は飯盛山山麓に発達する扇状地に位置し、眼下に福岡平野が一望できる。また、北西の方角には飯盛山山頂が段丘を挟んで遠望できる。本遺跡は現在の水田にいたる複合遺跡であり、社殿が検出された調査地点では、現地表面から下層に第１面（10世紀前後・水田）、第２面（８世紀後半～９世紀・社殿と官衙）、第３面（７世紀後半～８世紀前半・官衙）、第４面（６世紀末～７世紀・集落）の４つの遺構面が確認された。このうち、第２面と同時期の別の調査区では、官衙建物の存在が確認されており、役所と社が隣接して存在する。

本殿と見られる中心建物（SB30）は、南北約18m×東西約10mの基壇状盛土上に築かれた２間３間

の総柱建物で、南北に独立棟持柱をもつ。柱径は約15㎝と把握でき、総柱建物と言っても、倉庫のような過大な重量負荷がかかる用途は考え難い。基壇状盛土の四方は幅0.5m×深さ0.2mほどの区画溝(内溝）が巡り、さらにその外側にも幅0.5m×深さ0.2mほどの二つ目の区画溝（外溝）が「コ」の字状に巡る。そして、これらの二重の溝の外側には、柵列が西側と北側の二方向で検出されている。東側は削平により遺構が失われているが、外溝との対応関係から柵列も「コ」の字状に巡った可能性が高い。以上の様相をふまえると、本殿は南面設計で建てられたと判断できる。

本殿を巡る区画溝の内側は、玉砂利風に花崗岩礫等を敷き詰めており、現代の我々がイメージする「境内」に近い空間が形成されている。この「境内」の南端（社殿から南に約４m）には人為的な礫積み（方形祭壇、南北約1.8m×東西約2.4m）がつくられ、この礫積みの内部から多くの土器片・鉄器片、さらに礫積みの下からは土器埋納遺構８基が検出された。土器埋納遺構８基のうち６基は平底の須恵器瓶を単体で埋納したもので、酒・水等の液体を入れた状態であったと見られる。残りの２基は、土師器甕と土師器坏を埋納したものである。

最も大規模な埋納事例（SP555）を見ると、土坑の中心に土師器甕を埋設し、その周りを囲むように土師器坏を重ねて配していることが分かる。土師器甕の器面には煤が付着し、底部内面には焦げ付いた炭化物が確認できるため、確実に調理（煮炊き）を行っている。さらに調理状況を追究すれば、内面の器面の荒れや焦げ付きは胴部下半のみに見られ、加えて口縁部に吹きこぼれの痕跡がないことから、調理物の体積は甕容量の１/３程度であったと判断できる。次に周囲に重ねられた土師器坏を見ると、１個体に油煙痕と灯芯痕があり、灯明皿が確認できた。灯芯痕は２箇所あり、計２回の着火が確認できる。また、油煙痕に先後関係が認められることをふまえると、１度消えかけた灯明に再度燃料を補充して新たな灯明芯を足したことが窺える。つまり、数長時間にわたって灯明を用いる必要があったと推測できる。なお、この灯明皿以外の土師器坏については、器面に確実な使用痕跡がないため、新品にちかいものが埋納されていることが分かる。そして、本遺構（SP555）については、もう一つの重要な痕跡が確認でき、土坑の縁に灯明皿２点が置かれたまま埋められていた。土坑縁の灯明皿の存在を素直に評価すれば、これらの埋納は夜間に実施されたと想定できる。つまり、この埋納土坑に関わる遺物は、「①神饌の調理、②神饌の奉納、③祭具の埋納」の３つの場面に由来したものを含む。

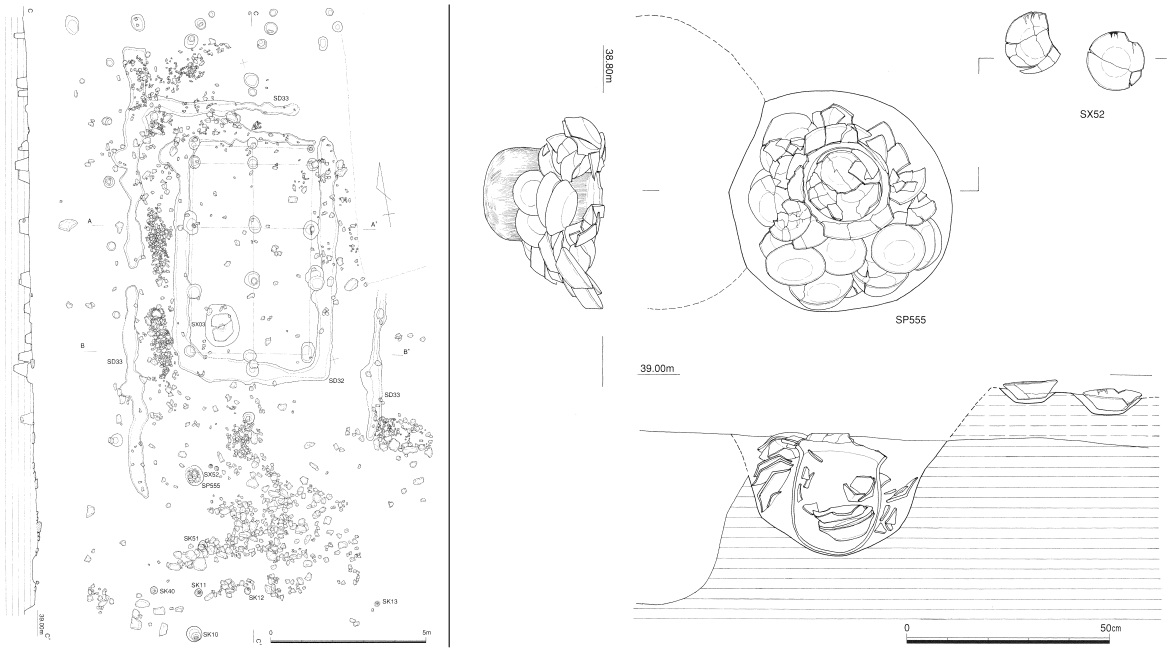


図３　金武城田遺跡で確認された社殿跡と土器埋納土坑（SP555）

次に本殿周囲の施設に注目するが、第１面（10世紀の水田）の削平により、各堀建柱建物の存続期間・先後関係を層位的関係から厳密に特定することは難しい。しかし、本殿の西隣に２間２間の総柱建物が存在したことは確かであり、本殿に伴う「神庫」の存在が想定できる。また、遊離資料であるため評価が難しいが、奉納品に多い鉄鋌や調理に用いる移動式竈・製塩土器、供膳具の耳皿等も出土している。

以上の情報を統合して、本遺跡における祭祀の実像を描写すると、社殿の周囲において「①神饌の調理」が実施され、境内と目される玉砂利（礫敷）において「②社殿の前面で祝詞や神饌が奉納」がなされた。祭祀執行後は、本殿西隣にある神庫に奉納品（刀や琴等）を納め、さらに境内の南端に築かれた方形祭壇には、神饌の調理や神饌の奉納に用いた土器を埋納した。「③祭具の埋納」には灯明皿が伴うことから、夜間に実施されたと想定される。また、埋納された祭具にも灯明皿が確認できるため、「①神饌の調理」や「②社殿前面での祝詞や神饌を奉納」の一部も、夜間に実施された可能性がある。

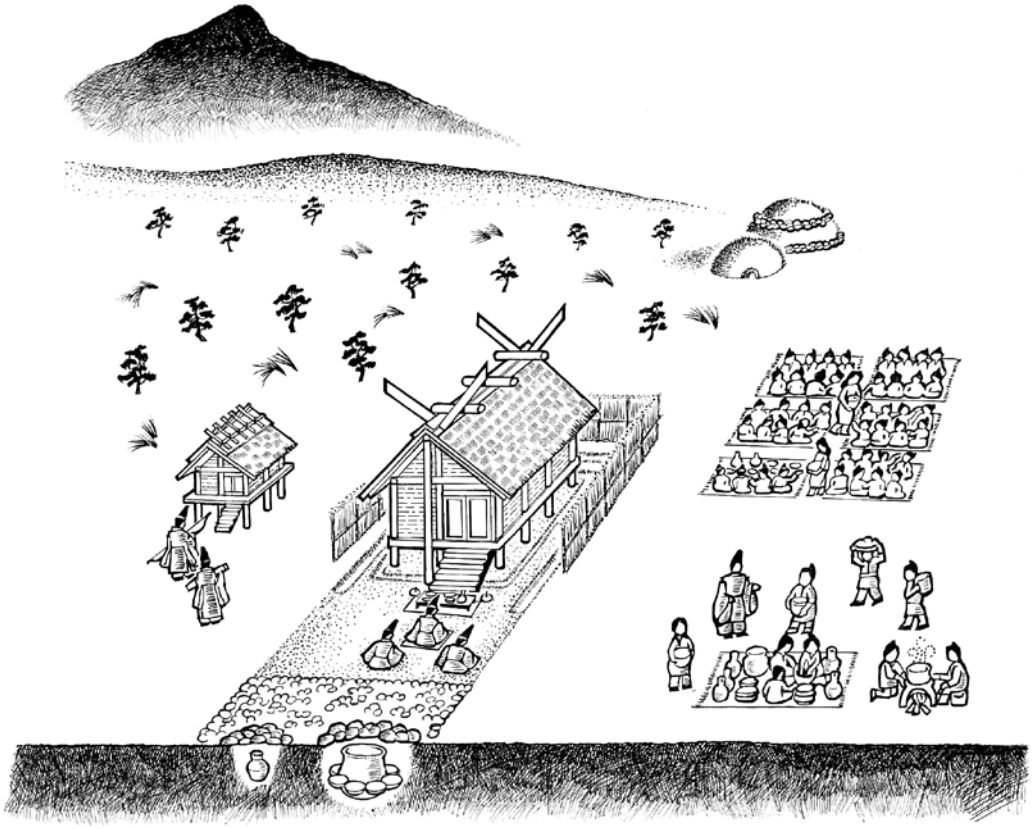


図４　金武城田遺跡をモデルにした社の想定図（異時同図法で描写）

４．律令期における大宰府管内の社

後野・山ノ神前遺跡群での巨岩祭祀遺構、金武城田遺跡での神社遺構をそれぞれ検討した。両遺跡の土器型式・組成は一致しており、同時代の遺跡との評価は揺るがない。このうち、金武城田遺跡の神社遺構は、調査担当者の吉留秀敏氏が調査当初から「神社」であることを想定し、後の論証・研究につながるよう、許された調査条件の下で詳細な調査記録を残した（吉留他2007）。これまでに発掘調査で確認された推定神社跡（本殿跡）は全国的にも８例しかなく、本遺跡の評価も現在でも明確に下されていない（宮井2017）。しかし、本章でも検討したように、後野・山ノ神前遺跡群の巨岩祭祀遺構との類似（土器埋納状況・土器使用痕跡等）から、金武城田遺跡には「神社」が存在したと結論できる（小嶋2013）。この結論は、他の推定神社遺跡の構成要素（建築様式・施設構造・祭祀遺物等）との比較からも傍証できる（松尾2016）。また、何重もの区画・遮蔽施設の存在は、笹生氏が提言する「神籬（ひもろぎ）」の

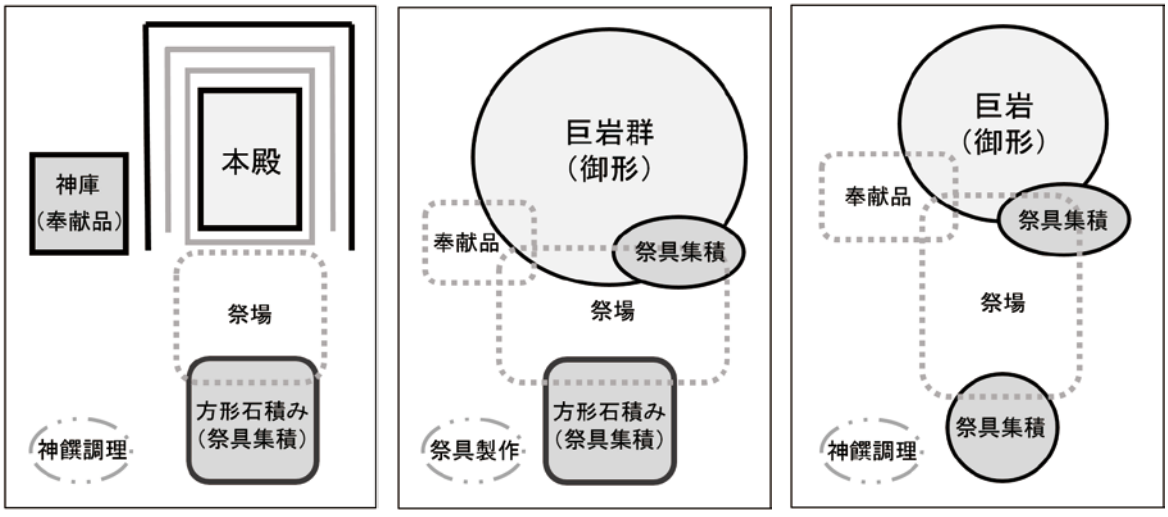
評価とも矛盾しない（笹生2016）。

以上を総括すると、奈良時代の大宰府管内には、「神の存在を象徴する巨岩」と「神の占有空間である本殿」をそれぞれ核とする『社』が同時並存していた。巨岩と本殿の前面において類似した痕跡が確認できることから、双方で行われた祭祀行為（神事）も共通点が多い。また、この祭祀行為には灯明皿を用いる等の仏教的要素が習合されている。古くから人々の暮らしに寄り添ってきた福岡平野周囲の山林には、生活林や墓域だけでなく、国神が鎮座する聖域も存在する。この聖域に仏僧が修行の場を求めて入山し、奈良時代以降に次々と山林寺院が造営されていくのである。片縄山山頂付近の巨岩祭祀・山林寺院の存在は、その初期の事例と評価できる。そして、同じ聖域に神仏が同居する宗教空間は、地域の有力者である郡司・郷長の承諾により成立し、聖域維持の秩序・人材・財源についても担保されていたと考えられる。

5．沖ノ島祭祀遺跡の空間構成

後野・山ノ神前遺跡群と金武城田遺跡の様相から、律令期における大宰府管内の社の空間構成を明らかにする。上述したように、両遺跡の社は存続期間が限られ、相対的に累積した情報量も限られる。また、後野・山ノ神前遺跡群は山頂付近に位置することから、遺物の紛れ込みが少ない好条件も備える。

社は「神の存在を象徴する巨岩・神の専有空間である本殿」を核とし、その前面に「祭祀執行の空間」が存在する。そして、祭祀執行の空間に接する形で「祭具収納施設（神庫・石敷状遺構・埋納土坑）」がある。この祭具収納施設のうち、方形祭壇・埋納土坑には土器類のみが納められており、奉納品（弓矢・馬具等）については社殿がある場合には神庫、巨岩のみの場合は岩陰に収納されたと判断できる。また、集積された土器には、神への供膳具に加えて、調理や直会で用いたものも含まれる。



社殿と祭祀空間
（金武城田遺跡）

巨岩と祭祀空間
（沖ノ島祭祀遺跡）

巨岩と祭祀空間
（後野・山ノ神前遺跡群）

後野・山ノ神前遺跡群、沖ノ島祭祀遺跡、金武城田遺跡を素材とした、奈良時代の大宰府管内における社の空間模式図である。物質資料で確認できる巨岩や本殿、祭具集積の位置関係から、祭場の位置を想定している。考古資料では、金武城田遺跡のタイル状礫敷（本殿と方形石積みの間の区画）が祭場の傍証である。祭具集積は考古資料からおおよその配置を特定でき、明確な遺構をもつ「埋納」は、本殿や巨岩と有機的関係をもちつつも、やや離れた場所でなされる。神饌の調理は、後野・山ノ神前遺跡群で炉と調理具が確認できるため、祭場の近傍でなされたと判断できる。沖ノ島でも神饌の調理がなされた可能性はあるが、現状で確実な物証はない。沖ノ島祭祀遺跡の祭祀空間は巨岩と社殿の双方の要素をもつが、古代の社殿の有無は未確定である。

図５　大宰府管内における社の祭祀空間

以上をふまえて、律令期に形成された沖ノ島１号遺跡を中心に律令期の祭祀空間を考えてみたい。廃棄場所とも評価される沖ノ島１号遺跡は、他を圧倒する規模であるが、大宰府管内の社にも見られる「本殿・巨岩から離れた祭具収納施設」と同じ空間配置にある。とくに１号遺跡の下層にある石敷状遺構は、社殿をかまえる金武城田遺跡でも類似遺構が確認できる。金武城田遺跡では石敷状遺構を全掘しており、石積み内部に複数の鉄器片・土器収納、石積み下には土器埋納（調理具・供膳具・照明具）が確認された。１号遺跡での祭祀執行の判断は下せないが、律令期において巨石・石敷状遺構を基点に祭具収納がなされたとの仮説は、大宰府管内の社の様相から裏付けられる。このような石積みを用いた区画・収納は、古くは巨岩上に設けられた沖ノ島21号遺跡でも認められ、古墳時代以来の伝統を踏襲していると考えられる。

巨岩から離れた祭具収納施設の存在は、社における社殿（建物）の有無を決定づけない。しかし、沖ノ島祭祀遺跡において沖津宮本殿直下から１号遺跡に挟まれた空間が、他の大宰府管内の社にも見られる「祭祀執行の空間」であったことを証明する。つまり、現在の沖津宮社殿は古代の祭祀遺跡と無関係に存在しているのではなく、古代からの伝統（祭祀場）の上に存在していると結論できる。

おわりに

沖ノ島祭祀遺跡には、さまざまな人々の想いと永い歴史の歩みが厚く積み重なっている。その文化的・歴史的価値は、世界文化遺産として次世代に引き継がれ、これからも新たな想いと歴史が重なっていくだろう。本章では、宗像・沖ノ島に重なった歴史の一つである律令期の祭祀遺跡に着目した。沖ノ島１号遺跡は神郡・宗形郡内で形成された最大の祭祀遺跡であり、古墳時代に続き、奈良時代以後も重きを置かれていた。１号遺跡に残された、おびただしい数の祭具の一つ一つには、より豊かに古代史を描く魅力が秘められている。

※本章に関する詳論は、小嶋2019で公表しているので参照頂きたい。また、本章の要旨は小嶋2018に掲載している。

参考文献

小田富士雄 2013「沖ノ島祭祀遺跡の再検討３」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

九州国立博物館 2017『宗像・沖ノ島と大和朝廷』九州国立博物館特別展図録

小嶋篤 2013「山岳霊場と山林利用の考古学的研究」『首羅山をとりまく聖なる山々』九州山岳霊場遺跡研究会

小嶋篤 2018「大宰府管内の巨岩と社殿」『季刊考古学・別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

小嶋篤 2019「遺跡形成過程から見た巨岩と社殿」『沖ノ島研究』第５号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

笹生衛 2011「沖ノ島祭祀遺跡における遺物組成と祭祀構造－鉄製品・金属製品を中心に－」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

笹生衛 2016『神と死者の考古学』歴史文化ライブラリー 417 吉川弘文館

松尾充晶 2016「古代神社の立地環境と構造」『古代祭祀と地域社会』島根県古代文化センター研究論集第16集　島根県古代文化センター

宮井善朗 2017「都地遺跡 乙石遺跡 金武城田遺跡 浦江遺跡 都地泉遺跡－飯盛山麓の官営製鉄所－」『福岡市史 資料編考古１ 遺跡からみた福岡の歴史-西部編-』福岡市史編集委員会

吉留英敏 阿部泰之 宮井善朗 田上勇一郎 2007『金武４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第927集 福岡市教育委員会

第5章

沖ノ島祭祀と遣唐使の航海

大高　広和

はじめに

沖ノ島における古代祭祀は、４世紀後半に始まり９世紀末頃まで継続して行われたことが明らかとなっている。岩上―岩陰―半岩陰・半露天―露天という祭祀遺跡の位置の移り変わりは、祭祀に用いられた奉献品の変遷とともに、長く続く祭祀の中にも祭式などの変化があったことを窺わせ、日本固有の信仰の原型である神祇信仰の成立過程を考察する上で多大な知見を我々に与えるものである。

しかし一方で、なぜそのような変遷が生じたのか、そこに大陸との対外交流もしくは対外関係上の出来事の影響があったのかといった問題を科学的・客観的な形で証明することはなかなか難しい。とは言え、それはこれらの問題に関して研究の余地がないということではない。本報告では、特に大きな変化があったとみられる７世紀における対外情勢の推移と日本列島から海外に派遣された使者の航路の変化について着目し、沖ノ島の古代祭祀の変遷を考えるための基礎作業としたい。

１．画期（過渡期）としての７世紀

沖ノ島の古代祭祀上、最も大きな変化があったのはほぼ７世紀代のことと言ってよい。７世紀と言えば、厩戸皇子（聖徳太子）や蘇我馬子が政治の刷新を図り、遣隋使を派遣した推古朝に始まり、645年の所謂「大化の改新」、663年の白村江での唐・新羅連合軍への敗戦を経て、中央集権化策が進められた天智朝･天武朝などの時代があり､律･令ともに完備した日本初の法典とみられる大宝律令の制定（701年）に至る、名実ともに激動の時代であった。

沖ノ島祭祀遺跡においては、岩陰祭祀の最終段階に位置づけられ、７世紀に入るとされる22号遺跡において、それまでみられなかった金銅製の雛形紡織具や人形等が奉献されるようになり、古墳の副葬品とは異なる品が祭祀に用いられるようになる。22号遺跡は岩陰を外れた部分へ須恵器が並べられるなど、次の半岩陰・半露天祭祀遺跡に近い様相を見せている。そして８～９世紀の露天祭祀への過渡期と評価されてきた半岩陰・半露天祭祀とされる５号遺跡は、７世紀後半頃に位置づけられ[1)]、中国産の唐三彩長頸瓶片や金銅製龍頭とともに、五弦琴や紡織具類などの金銅製雛形品や土器類などが発見されている。沖ノ島出土品とされる宗像大社神宝館所蔵の金銅製高機もあわせ、これらは伊勢神宮の神宝として鎌倉期の絵図に見えるものや現代も神事に用いられているものと共通性をもっており、かつて井上光貞が沖ノ島祭祀を「“律令的祭祀”ないしその“先駆的形態”」が現れていると評価したところである[2)]。また、金子裕之は、沖ノ島や神宮神宝などにみられる金銅製紡織具を女神との関わりで理解しており[3)]、この見方に従えば、７世紀に入った段階で確実に女神に対する祭祀が行われるようになっていたとみなすことも可能である。こうした新たな奉献品が現れてくる７世紀に、沖ノ島祭祀において大きな変化が起きていることは疑いない。

７世紀においては、沖ノ島のみにとどまらないさらに大きな変化があったと想定される。大島御嶽山の山頂（標高224m）に位置する御嶽山祭祀遺跡（大島御嶽山遺跡）は、2012年に発掘調査が行われ、奈良三彩小壺や八稜鏡、滑石製形代や土器類などが出土し、沖ノ島の露天祭祀遺跡と共通性をもつ祭祀が行われていたことが明らかとなった。宗像大社中津宮の本殿は御嶽山の麓に位置するが、16世紀の史料（1556年の「大島第二宮年中御神事次第」）に中津宮の「上宮」と記される御嶽神社の背後に位置するこ

の遺跡が、中津宮の起源にあたることは疑いない。宗像大社辺津宮境内の丘陵上、高宮祭場の周辺にあたる下高宮祭祀遺跡においても、未調査ながら沖ノ島や御嶽山と共通する滑石製舟形などが採集されており、『古事記』『日本書紀』に記される宗像三女神への祭祀がこれら三か所で行われていたことが確認される。御嶽山祭祀遺跡の古代祭祀の時期は７世紀末から10世紀前半と報告されていて、これを三女神への祭祀の考古学的な下限とすることができる。また、宗像三女神が沖津宮・中津宮・辺津宮の三宮に降臨し、地元豪族宗像氏（胸肩君氏）が三女神をまつっているということは、８世紀前半に成立した『古事記』『日本書紀』の神話に記されるところだが、その内容は記紀の編纂が進められた天武朝までは遡るとみなすことができる。ここから、沖ノ島の神に対する信仰は、遅くとも７世紀後半（第４四半期）には三女神への信仰として展開していたと結論づけられる[4)]。

以上のように、７世紀においては沖ノ島での祭祀の内容、祭式にかかわる変化、および宗像三女神に対する三宮での祭祀の開始といった、沖ノ島祭祀の変遷を考える上で非常に重要な現象がいくつも起こっている。しかしながら、それらが具体的にいつ、どのように起こったことなのか、７世紀のうちいつを画期とみなすべきなのかということについては、上記以上に明らかにすることは難しい状況である[5)]。これらは沖ノ島で行われていた祭祀とその変遷がどのようなものだったかを明らかにしていく上で基本となる問題であり、様々な角度から検討が深められる必要がある。

７世紀の対外関係史において特筆すべきトピックとしては、遣隋使および遣唐使の派遣と、白村江の戦いが挙げられる。特に遣唐使などの海外への遣使との関係は、沖ノ島の位置や唐三彩などの大陸より将来された豊富な奉献品により、調査当時より重視されてきたところで、以下、その具体的な様相を航路の変化に着目しながら見ていきたい。

２．７世紀前半の遣隋使・遣唐使の航路

中国王朝への遣使は、５世紀の倭の五王による南朝への遣使以降、およそ一世紀の間行われることはなかったが、589年に約350年ぶりに南北朝統一を果たした隋に対して、推古天皇は遣使を行った。600年に派遣された遣隋使は『隋書』（東夷伝倭国条）にしか記録がなく、恐らく倭国にとって不都合な出来事があったとみられるが、607年には小野妹子が煬帝に謁見し、不興を買いながらも翌608年に使者裴世清を伴って帰国している（『隋書』、『日本書紀』推古天皇16年４月条）。また同年、裴世清を送るため、小野妹子は留学生らとともに再度隋へ渡海した（同年９月辛巳条）。

遣隋使の航海ルートは、裴世清が百済経由で南に耽羅（済州島）を望みつつ対馬・壱岐を経て筑紫に至っていることが『隋書』にみえるので[6)]、所謂「魏志倭人伝」の記述以来の壱岐・対馬ルートで朝鮮半島に渡り、半島西岸を北上し黄海を渡海して山東半島に至るルートが採られていただろう[7)]。なお、615年（推古天皇23年）９月には前年に隋に派遣された犬上御田鍬らが百済使とともに帰国しており、この時も百済経由であることが確実である。

618年に唐が隋に代わった後、623年（推古天皇31年）７月には、隋に留学していた僧らが来朝した新羅の大使とともに帰国し、唐は「法式備定之珍国」であって常に通交すべきであることを述べ、630年に犬上御田鍬らが初めての遣唐使として派遣された（舒明天皇２年８月丁酉条）。彼らは二年後に唐の送使高表仁と新羅の送使らとともに対馬に来着し、高表仁は難波津まで行って[8)]翌年にやはり対馬経由で帰国している。

以上のような日本列島と中国大陸との交通について、地乗り航法で朝鮮半島を経由する比較的安全なルートは一般に「北路」と呼ばれ、『日本書紀』白雉５年（654）２月条には「新羅道」という表現がある。しかし、新羅との関係が悪化する８世紀、つまり大宝２年（702）の遣唐使以降は、五島列島から直接東シナ海を渡って中国の長江河口付近を目指す「南路」に代わったと考えられている[9)]。地形的・海流的に安全なルートとは異なるルートが選択された理由としては、南路の方が煬帝の築いた大運河の

利用も可能で、中国の都、長安や洛陽までの行程が短縮できるといったメリットがあり、造船や航海の技術の進歩が背景にあった可能性もあるが、「南路」で唐へ向かった使節はほとんどが遭難・漂流の憂き目を見ていることからすると、やはり朝鮮半島情勢によるものだろう。

7世紀前半の東アジア情勢としては、高句麗が隋による数度の遠征を退け、朝鮮半島では高句麗・百済・新羅の三国による抗争が続いた。そのため、朝鮮三国は互いに優位に立とうとして倭国の歓心を買うための外交をそれぞれ展開し、百済王子が人質として倭国に送られていたことや、加耶諸国を併合した新羅が「任那調」と称して倭国に貢調使を派遣したことなどはその一環である。それらと関連して、この頃には多くの知識人や技術者が倭国へ渡ったことも『日本書紀』から窺われる。したがって、三国同士の緊張関係はあっただろうが、日本から中国までの海域の政治的情勢は比較的安定していたものと考えられる。ただし、中国と高句麗との関係は未だ決着しておらず、7世紀半ば頃からはその緊張が大きく高まっていく。

7世紀前半においては、およそ一世紀ぶりの中国大陸への使節である遣隋使や遣唐使の派遣に関連して沖ノ島で祭祀が行われたことが想定されるが、その航海は前時代からの朝鮮半島へ渡る航海の延長線上にあった。したがって、この頃に金銅製雛形品などの使用開始といった変化を認めるにしろ、それは遣隋使を派遣するために起こったと言うよりは、国内的な理由（対外交流の影響を含む）によるのであろう。推古朝における政治改革との関連が想起されるが、具体的には今後の課題としたい。

3．白村江の戦いと遣唐使の航路

既に述べたように、当初の遣唐使の航路は「北路」で、8世紀には「南路」となったとされるが、「南路」への変化は航海の危険性の増大を意味しており、沖ノ島での航海安全の祈りに影響を与えた可能性がある。そのため、変化がいつどのように生じたのかを詳細に見ていきたい。

653年、1隻約120人が乗った遣唐使船が2隻派遣されたが（白雉4年5月壬戌条）、そのうち高田根麻呂を大使とする1隻は薩摩半島と竹島（鹿児島県三島村か）の間に沈没し、5人しか助からなかった（同7月条）。翌654年には、もう1隻の帰りを待たずに高向玄理を押使とした遣唐使が新たに派遣されており、こちらは2船で「新羅道」をとって山東半島北岸の莱州を経て京（長安）で高宗に謁見したという（白雉5年2月条。帰国は斉明天皇元年（655）8月戊戌朔条）。一方、653年に出発したもう1隻の大使である吉士長丹らは、654年7月に新羅・百済の送使とともに筑紫に帰着しており、唐の皇帝と謁見して文書・宝物をもたらした。

問題は彼らの採ったルートだが、654年派遣の一行の「新羅道」については、対馬から始めに朝鮮半島に到着するのが新羅の領域であったことからこう呼ばれ、所謂「北路」を指すものと考えられる。朝鮮半島西海岸でもソウル周辺の漢江河口は6世紀後半以降新羅の勢力下にあったから、百済が健在な当時でも新羅との関係は重要であったろう。なお、舒明天皇11年（639）9月には新羅の送使とともに、舒明天皇12年（640）10月には新羅を経由して新羅・百済の朝貢使とともに留学僧らが帰国している。

653年出発の2隻については、大使を務めた吉士長丹が帰国の際に褒賞として「呉氏」に賜姓されており、『日本書紀』では「呉」は中国の特に南朝（江南地方）を示すから、2隻とも東シナ海を横断して江南の地に上陸する「南路」を採ったという岸俊男の解釈がある[10]。また東野治之は、『日本書紀』白雉元年（650）是歳条に安芸で建造されたことがみえる「百済舶」2隻がこの遣使に対応し、2隻にそれぞれ付けられた「送使」は百済へ送り届けるための使者であるとして、両船とも百済沿岸から長江河口付近を目指したと想定している[11]。魅力的な説ではあるが、大使と「送使」とが2隻それぞれに任じられていることからすれば別ルートだった蓋然性も高く[12]、帰国時に吉士長丹らに対して用いられている「西海使」という表現（7月丁酉条・同是月条）も、百済から帰国した使者に用いられている例があるため（斉明天皇2年是歳条・同3年是歳条・同4年是歳条）、長丹らは「北路」をとったとも考えられる。た

だしもう１隻の方は、南島路の開発を行おうとして失敗したという見方もあるように[13]、「北路」とは異なる航路をとっていたことには変わりない。この頃、朝鮮半島西海岸を経由せずに東シナ海を渡る航路を試す必要があったのだろう。五島列島から出発する８世紀の「南路」とはやや異なるが、広義の「南路」の始まりと言ってよい。

645年からの唐による高句麗出兵は失敗に終わったが、647・648年にも征討を行うなど、その後も唐は高句麗への攻撃を企図しており、654年に高宗と謁見した遣唐使は、倭国は新羅・高句麗・百済と近接しているから、危急の際には新羅を救うようにとの言葉を受けている（『善隣国宝記』白雉５年条所引『唐録』永徽５年条）。百済はこの頃新羅の旧加耶地域に侵攻を繰り返しており、唐からの和解命令にも応えず、高句麗・百済が連合し、唐・新羅と敵対するという形で朝鮮半島情勢の緊迫が高まっていった。こうした状況が倭国による新たな航路の模索と関連していたと考えられる。

次の659年の遣唐使は、655年から唐による高句麗出兵が再開され、高句麗・百済に攻め込まれた新羅から救援を求められた唐が百済討伐を準備する中で派遣された。『日本書紀』に載せられた「伊吉連博徳書」によれば、２船は「呉唐之路」に遣わされ、「筑紫大津之浦」（那津）を出発して「百済南畔之島」に至り、そこから「大海」（東シナ海）に出て、１船が越州（浙江省）に到着している（斉明天皇５年７月戊寅条）。彼らは百済征討計画が漏れないよう洛陽で幽閉され、660年の百済滅亡後に帰国することになるが、その帰路は「南路」で、越州を出発して檉岸山（舟山列島か）より「大海」に出て漂流し、なんとか耽羅（済州島）に辿り着いたようである（斉明天皇７年５月丁未条）。

その後663年に倭国は百済の復興を助けて唐・新羅と戦うものの大敗し、その戦後処理に追われることとなる。その過程で往来した使節、665年に高宗の泰山封禅の儀に参列するために唐使劉徳高とともに渡海した遣唐使、669年に唐の高句麗平定を賀すために派遣された遣唐使などは、北路によって唐の都へ向かったらしい。当時高句麗・百済の旧領は唐の領土であり、それが当然の措置であった。その後は新羅が676年に唐を追い出して朝鮮半島の統一を成し遂げていく中で、702年に到るまで遣唐使が派遣されることはなくなった（新羅との間には盛んな使者の往来があった）。

上述したように大宝の遣唐使からは五島列島から渡海する狭義の「南路」が一般的になるが、その前提として、７世紀半ば過ぎ頃の朝鮮半島南岸辺りからの航海（広義の「南路」）があったことが分かる。緊迫した半島情勢がもたらした、この東シナ海を横断する危険な航海に臨むことを迫られた人々は、以前にも増して熱心に航海安全の祈りを行おうとしただろう。航路の歴史、そして祈りの歴史として注目すべき画期は、８世紀初めではなく７世紀の半ば過ぎにあるのではないだろうか。

おわりに

７・８世紀の遣唐使と沖ノ島・宗像大社との関連を直接に示す史料は残されていないが、その航海安全の祈りの対象に重要な海路の守り神である沖ノ島や三女神が含まれていた可能性は当然考えられる。７世紀後半に位置づけられる半岩陰・半露天祭祀遺跡の登場や、沖ノ島、大島および九州本島の三宮での共通する古代祭祀の開始と、上記のような東シナ海を渡らなければならないという状況の出現とが関わる可能性について、選択肢の一つとして提示して、今後の批判を待ちたい。

註

１）小田富士雄「沖ノ島祭祀の再検討３」（『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅲ、2013年）。

２）井上光貞「古代沖の島の祭祀」（『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会、1984年、初出1978年）。沖ノ島で先駆的に〝律令的祭祀〟が行われていたという意味ではなく、〝律令的祭祀〟として現在研究者が律令と関連づけて理解している祭祀の形態が、実際には日本律令の編纂より早い段階から行われていたものだったという意味合いである。

３）金子裕之「アマテラス神話と金銅製紡織具」（『古代都城と律令祭祀』柳原出版、2014年、初出2006年）。ただし、必ずしも雛

形紡織具が女神だけに捧げられているわけではなく、更なる検討を要する。

4）下高宮周辺や御嶽山麓の中津宮境内付近からの採集遺物により、三宮での祭祀が5世紀まで遡るという想定も可能である（花田勝広「宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会実行委員会、2012年）。ただし、それらの遺物はそこで祭祀が行われていたこと、ひいてはそれらの場所が特別な場所であったことまでは物語るが、ただちに三女神への祭祀・信仰の存在を証明するものではない。

5）このほかに7世紀の沖ノ島祭祀に関する問題点を挙げれば、御嶽山や下高宮の祭祀遺跡は沖ノ島では8世紀からとされている露天祭祀の形態と理解されるが、御嶽山祭祀遺跡の出土品の一部（金銅製の雛形琴の破片など）は沖ノ島の5号遺跡（半岩陰・半露天祭祀）と共通している点がある。

6）『三国史記』百済本紀、武王9年3月条にも、裴世清が百済の「南路」を通って倭国に使したという記述がある。

7）倭の五王の時代も百済の領域である朝鮮半島西海岸から山東半島に渡り、南朝の都建康（南京）に至っていたとみられる。倭の五王による南朝への通交開始自体、宋が山東半島を領有するようになって、百済が南朝への遣使を始めたことが契機と考えられる（川本芳昭「倭の五王による劉宋遣使の開始とその終焉」『魏晋南北朝時代の民族問題』汲古書院、1998年、初出1988年）。

8）『旧唐書』倭国伝には、高表仁が倭の王子と礼を争い、朝命を宣べずして帰国したと記されており、ここでも『日本書紀』に記されない不都合な事案があったと考えられる。

9）『万葉集』（1－62番）および『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷条。東野治之『遣唐使』（岩波新書、2007年）および森公章「遣唐使の時期区分と大宝度の遣唐使」（『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、2008年、初出2006年）などを参照。このほか渤海国を経由する「渤海路」の事例もあるが、臨時のルートと考えられるので割愛する。また、「南島路」については正式に遣唐使の航路として用いられたとは考えにくい。

10）岸俊男「「呉・唐」へ渡った人々」（大林太良編『海をこえての交流』日本の古代第3巻、中央公論社、1986年）。

11）前掲東野治之『遣唐使』。

12）榎本淳一「遣唐使の役割と変質」（『岩波講座日本歴史』3（古代3）、岩波書店、2014年）。

13）前掲森公章「遣唐使の時期区分と大宝度の遣唐使」。

※本報告をもとに『沖ノ島研究』第4号（2018年、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議発行）に「七世紀における遣唐使の航海と沖ノ島祭祀の変遷」と題した一文を発表しており、引用にあたってはそちらを参照されたい。

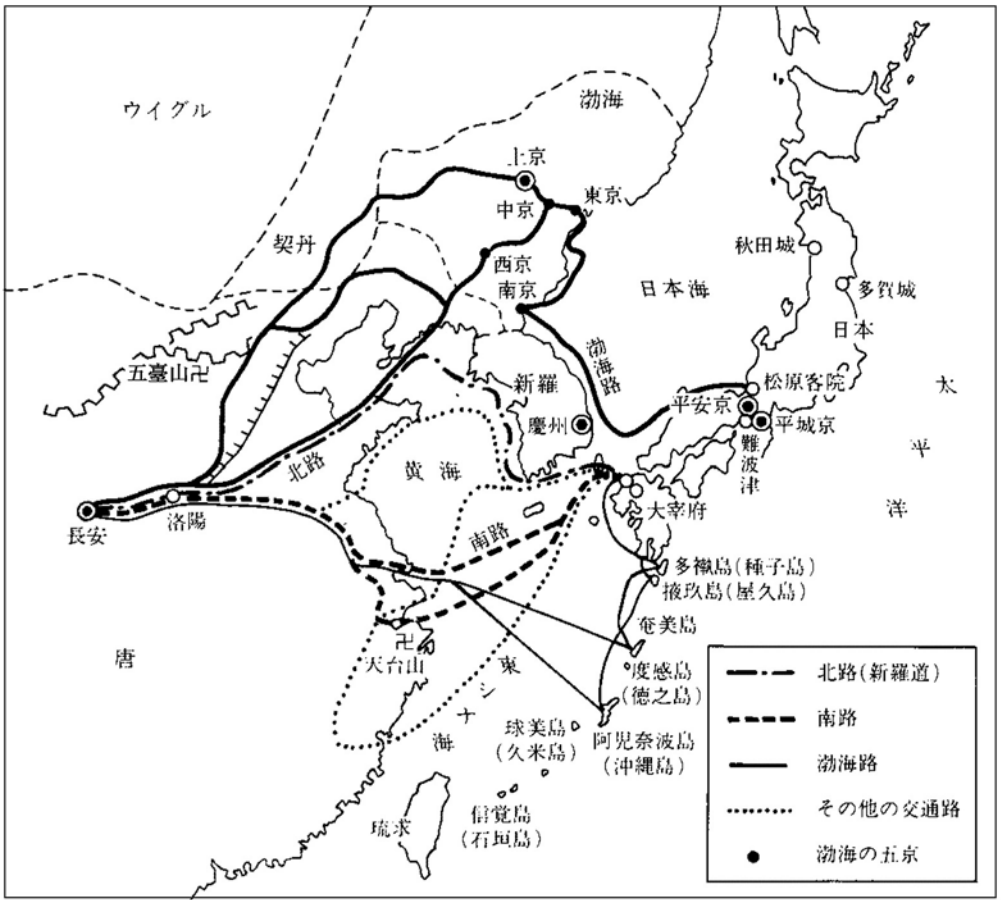


図　遣唐使航路図（佐藤信編『律令国家と天平文化』吉川弘文館、2002年より）

遣隋使・遣唐使年表

「入京年月」欄の○印は正月に在京したことを示す。史料で確認できない箇所は空欄のまま。「出発」「帰国」欄に入れた月は、史料で確認できる九州での発着月。

次数	出発　西暦（和暦）	使人	航路	船数	入京（長安・洛陽）年月	帰国	航路	備考
1	六〇〇（推古天皇八）		北路？			（不明）	北路？	隋使裴世清ら来日
2	六〇七（推古天皇一五）	小野妹子	北路？			六〇八・四	北路	裴世清を送る
3	六〇八（推古天皇一六）	小野妹子（大使） 吉士雄成（小使） 鞍作福利（通事）	北路？			六〇九	北路？	高向玄理、僧旻、南淵請安ら留学
4	六三四（推古天皇四二）	犬上三田耜 矢田部造某	北路？			六三五	北路	百済使とともに帰る
一	六三〇（舒明天皇二）	犬上三田耜 薬師恵日	北路？			六三二・八	北路	唐使高表仁ら来日
二	六三二（白雉四） 同　七月？	吉士長丹（大使） 吉士駒（副使） 高田根麻呂（大使） 掃守小麻呂（副使）	北路？	1 1		六三四・七	北路	往途、薩摩竹島付近で遭難
三	六三四（白雉五）	高向玄理（押使） 河辺麻呂（大使） 薬師恵日（副使）	北路	2		六三五	北路？	高向玄理、唐で没
四	六三九（斉明天皇五） 八月	坂合部石布（大使） 津守吉祥（副使） 伊吉博徳	北路	2	六三九（顕慶四）閏一〇月〔○〕	六四一・五（第二船）	北路	第一船は往途南海の島に漂着、大使らは殺される
五	六五五（天智天皇四）	守大石・坂合部石積・吉士岐弥・吉士針間（送唐客使）	北路			六六七・一二	北路	唐使劉徳高を送る。唐使法聡来日 六六三　白村江の戦
六	六六七（天智天皇六）	伊吉博徳（送唐客使） 笠諸石（送唐客使）	北路			六六八	北路	唐使法聡を百済に送る 唐には行かず
七	六六九（天智天皇八）	河内鯨	北路？			（不明）	北路？	
八	七〇二（大宝二）六月	粟田真人（執節使） 高橋笠間（大使） 坂合部大分（副使） 巨勢邑治（大位） 山上憶良（少録）	南路		七〇二（長安二）一〇月〔○〕	七〇四・七（粟田真人） 七〇六・三（巨勢邑治） 七〇八・一〇（坂合部大分）	南路	六六三　新羅、朝鮮半島統一 道慈留学
九	七一七（養老元）	多治比県守（押使） 大伴山守（大使） 藤原馬養（副使）	南路？	4	七一七（開元五）一〇月〔○〕	七一八・一〇	南路？	玄昉・阿倍仲麻呂・吉備真備・井真成ら留学 道慈帰国

表　８世紀初めまでの遣唐使（東野治之『遣唐使』岩波新書、2007年より抜粋）

第6章

御長手神事と沖ノ島

岡　崇

はじめに

沖ノ島祭祀遺跡といえば、4世紀後半から9世紀末までの約500年間かけて執り行われていた祭祀の痕跡を示す古代祭祀の場であったことは、これまでも周知のとおりである。昭和29年から昭和46年にかけて実施された3次にわたる沖ノ島の考古学調査によって、古代祭祀の変遷や東アジアの交流を示す物証など、日本の考古学会のみならず神道祭祀の研究や対外交流史の分野においても大きな成果となったことは疑う余地もない。このことは、宗像大社復興期成会が発行した「沖ノ島」「続沖ノ島」「宗像・沖ノ島」の三冊の報告書にその詳細が収められている。

では、9世紀以降の沖ノ島における祭祀や神事はどうであったのか、これについては、沖ノ島だけでなく、大島の中津宮も同様、古代の御嶽山山頂での祭祀が終焉する10世紀以降、御嶽山の麓に社殿が建つ16世紀までの約700年間は、祭祀や神事を示す考古学上の根拠が極めて少ない。

ユネスコ世界遺産委員会の諮問機関であるイコモス「国際記念物遺跡会議」は、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産の価値を調査するにあたり、日本が主張していた古代から現在まで続く信仰について、古代祭祀終焉後の信仰は断絶しているのではないかという疑念をいだいたのである。つまり、日本の中世（以下、ここでは概して鎌倉期・室町期とする。）と呼ばれる期間に、沖ノ島での祭祀や神事が実際に行われていた証拠が物証としてあるのかどうなのかということが問われたのである。

この疑念に対して、今回は沖ノ島の中世の時期に行われていた祭祀がどのようなものであったのか、その一旦を報告するものである。

1．中世の宗像大社

先に断わっておくが、中世には宗像大社という呼び名はなく、専ら「宗像宮」若しくは「宗像社」が使われている。また、現在の宗像大社（辺津宮）に建つ鳥居の扁額には宗像神社と刻まれている。宗像大社という社名は、1972年に宗像神社から宗像大社へと名義変更したことによる。ここでは、名前が既に広く通っていることからあえて沖津宮・中津宮・辺津宮の三宮を指す場合は宗像大社という名称を使う。

さて、本題に入る前に宗像の中世において、宗像大社と海、信仰に関わることについて、宗像市史の通史編を参考に整理してみた。

（1）第一宮、第二宮、第三宮

九州本土にある現在の辺津宮境内には、鎌倉期において第一宮が（総社）として位置づけられ沖津宮（田心姫神）を中心に祀られ、第二宮を（中殿）とし中津宮（湍津姫神）を中心に祀られ、第三宮を（地主）として地元に祀られる辺津宮（市杵島姫神）を中心に祀られていた。現在神宝館に保管されている重要文化財の宋風狛犬の背中に刻まれた銘文には、建仁元年（1201）藤原支房という人物が第三宮に奉納したことが記され、第三宮を示す最古の物的資料であることがわかる。このころの大宮司家は、南宋の交易に深くかかわっており、宋の商人の娘と婚姻関係を結んだ大宮司もいたことが、重要文化財に指定されている阿弥陀経石に記されている。

（2）鎮国寺の建立

それ以前に境内にあったとされる神宮寺に代わり、弘長３年（1263）宗像大宮司氏長の支援で真言宗の皇鑑によって鎮国寺が建立される。その２年後の文永２年（1265）８月に朝廷や幕府の祈祷を行うため、宗像五社本地仏を安置する本堂ができる。この五社本地仏のなかに第一宮(大日如来)第二宮(釈迦如来）第三宮（薬師如来）このほかに許斐権現社（阿弥陀如来）織幡社（如意輪観音菩薩）が安置されている。

（３）元寇

鎮国寺に本堂が建つ翌年、文永３年（1266）から元は、高麗を通じてたびたび日本に服属を求めてきた。文永11年（1274）ついに元は高麗軍とともに壱岐対馬を攻め、博多湾に上陸、筥崎宮や博多のまちを焼きつくしたにもかかわらず勝敗を決さず、元軍は自主撤退した。その時、暴風雨に遭ったとされる弘安の役。その７年後の弘安４年（1281）に再び元と高麗軍が江南軍と東路軍の２軍にわかれて攻めてきたようだが、先に東路軍は、壱岐対馬を攻めた後、宗像沖に５月22日から６月６日まで留まっていた。博多湾周辺に防塁を築くなど抵抗を高めたため約１週間にわたり上陸が拒まれ、遅れていた江南軍は７月にようやく東路軍と合流し、７月27日両軍は鷹島沖に移った。両軍は再び博多湾を攻めようとしたが30日夜から暴雨風に遭い、連合軍14万人を乗せた船の大半は沈没した弘安の役である。この２回の神風は、その後神国思想の高まりによって、再び神功皇后伝承のいわゆる三韓征伐が脚光を浴びることとなる。

（４）島・浦のこと

正和２年（1313）「宗像氏事書条々」の十条に「浦･島の事」という箇条があって、宗像大宮司が浦（宗像七浦鐘崎・神湊・勝浦・地島・大島・津屋崎・福間）の海産物を含む海を実質独占していた。古くから海の物はすべて神のもの、神への供物として扱われ、海は宗像大神の司祭者である宗像大宮司が直轄地と定められていたという。

（５）隆盛を極める祭礼行事

８月15日の宗像宮放生会で船闘神事（ふなくらべしんじ）が行われていた。いわゆる宗像五社の神輿を載せた５隻の神船によって、釣川の御前の浜で漕ぎ比べをする神事である。御前の浜は、現在の辺津宮の第二駐車場側の釣川付近を指し、近世の絵図にも御前の浜に伸びる参道が描かれている。

南北朝に入ると世は戦乱の時期ではあったが、宗像大社においては、祭礼の数や規模、華やかさもさることながら、神事関係の史料も集中して作られる。「正平二十三宗像宮年中行事」「宗像宮年中諸神事御供下行事」「応安神事次第」「宗像年中神事目録」などがその類である。宗像大社の祭礼数は、正平二十三宗像宮年中行事に五千九百二十一度あったと記されている。これを一日あたりに換算すると16あまりの神事が毎日行われていたことになる。この史料のなかには、本題の御長手神事が記されているが、御長手という文字の初見は、鎌倉期末期に成立した「宗像大菩薩御縁起」に記される。ちなみに、正平は、大覚寺統側いわゆる南朝側の元号で23年は西暦1368年である。応安は、持明院統側のいわゆる北朝側の元号で1368年から1375年の間の年代である。

（６）倭寇

日本の南北朝が統一された明徳３年（1392）朝鮮半島では、高麗から李成桂によって朝鮮王朝が建国された。また、すでに1368年に朱元璋によって明を建国していたが、共に日本への通交の際に倭寇による妨害や被害が問題となっていた。倭寇に関わる記述は、「朝鮮王朝実録」の「世宗実録」世宗11年・永享元年（1429）の条にある。倭寇を取り締まるため、赤間関を境に大きく西と東に分けている。赤間関より以西は、対馬・壱岐・内外大島・志賀・平戸に分けられた。志賀島の倭寇は、大内氏が、豊後州の倭寇は大友氏が掌握としたなかで、宗像氏は、内外大島を掌握していた。内外大島とは大島、地島を指す。

（７）宗像氏と朝鮮王朝の通交

宗像氏と朝鮮王朝との通交に関する史料は、「朝鮮王朝実録」のほかに「東海諸国紀」がある。「東海

諸国紀」は、成宗２年・文明３年（1471)、申叔舟（シンシュクシュウ）が王の命によって作った、日本と琉球の国情と通交の沿革、さらに使人接待に係る規定を定めたものである。宗像氏が初めて朝鮮側の史料に出てくるのは、太宗12年・応永19年（1412）からでその後文正元年（1466）まで計15回の通交を行っている。

２．沖ノ島（沖津宮）第一宮のこと

（0）・「平家物語」厳島次第事五　　御賀島
・「厳島の御縁起」→筑前国続風土記拾遺宗像郡上十七　沖津嶋
筑前国恩賀島より遷し祭る　　オンゴウ島＝御神島

（1）「宗像大菩薩縁起」鎌倉期末頃

記紀神話になぞらえ宗像三女神の出現から西海道風土記、出雲神話などを紐解きながら、再度、三女神が祀られる地が紹介される。

第一神者、集海淡築島、示居（玉）於遠海之息、未来際可降伏異国由、有御誓、留件嶋給、則號息御嶋、是日本與高麗中間也、居遠瀛、是奉號田心姫、

第二神者、示居（玉）於中海之息、今號大嶋是也、厳重之奇瑞多之、居中瀛（玉）、是奉號湍（於）、

第三神者、示居海邊（於）、今號田嶋是也、居海濱（玉）、是奉號市杵嶋姫（於）、

強石将軍　今宗像大菩薩　神功皇后の勅命による三韓征伐の事
仲哀天皇（日本書紀　巻第八）　神功皇后（日本書紀　巻第九）　応神天皇（日本書紀　巻第十）
この部分を引用しつつ、強石将軍　今宗像大菩薩の活躍ぶりを紹介している。

今宗像大菩薩捧御長手来給（惠利）、仍大将六人（宗像、住吉、高良、諏訪、武内、河上）、立艫舳、四十八艘（仁）三百七十五人乗給（惠利）、梶取（波）安曇磯良也、對馬島着給（天）、

この時にはじめて、御長手の文字が見える。

余談だが
味方僅かに48艘に375人　　１艘当たり7.8人
敵は108000艘に496000人余り　１艘当たり4.6人

強石将軍（今宗像大菩薩）白旗赤旗（於）立置（玉惠利）、於今者、其跡（於）一所者號赤旗之社、一所者號旗鉾之御堂、其後強石将軍根本御影向之地、息御嶋（仁）御手長（於）、立置（玉惠利）、是則（異國征伐御旗杆也）、毎年不絶、三竹之瓶中（仁）、無増減生長須留不思議有之、

神功皇后、強石将軍、藤大臣、竹内大臣等の神達、まず、対馬に着く。

この島は、元々、夷州の内であったが、この時日本国に取り返す。

早良郡姪浜に着いて、さらに筥崎に着く。

御長手＝御手長

（2）「正平二十三宗像宮年中行事」

正平23年（1368年）6月に年中行事が収録される。沖ノ島に関わる神事の記載は、左記に抜き出す。

（十月）此月仁波御長手之竹従瀛参、
日波不定也

（3）「宗像宮年中目録」

1375年頃

沖ノ島に関わる神事の記載は、右記に抜き出す。

一息御嶋日本與高麗之堺
一第一大神宮佛神事　云々、
三月廿日　御長手御鍛冶屋御入神事　社務役
六月廿日　御長手神事　社務役
九月廿日　御長手御鍛冶屋御入神事　社務役
一息御嶋神事　第一宮本社
春　御長手神事　夏　同神事
秋　同神事　冬　同神事
一政所社神事
十二月十六日　御長手神事　社務役

一第一宮　同日（正月朔日）御供宮師
大御供三膳内吉田高向忌子　御鏡三枚　同人小神供無
界物三膳　護灯三人　小神供無
小神供三十六膳　殿上衆池浦山口　今末力丸　禰宜十膳
大宮預御供　小宮預三膳
残御供　御酒　幣　祝詞給。同かわらけ〜土器〜

（4）「東海諸国紀」

西海道九州図のなかに沖ノ島が小崎於島という名で地図上に示される。

（5）「鎌倉期御供下行事」

年代は不詳であるが、宗像大宮司氏国の在任中に定められたものである。

内容は、祭事で使用された供物の撤下について記したもの。

ここに、かわらけ（土器）が出てくる。

3．考古学的検知での中世遺構の把握

（1）調査の経緯

昭和44年から46年にかけて行われた沖ノ島三次調査では、中世の祭祀遺物として4号遺跡や5号遺跡から出土した鰐口や三叉鉾などが報告されている。その後、考古学的な調査は実施されていないが、平成24年10月9日から12日にかけて国指定史跡「宗像神社境内」の保存管理計画策定を目的とした沖ノ島の現地踏査を実施した。

この現地踏査では、あらためて島内の建築物、工作物、土木構造物の悉皆調査をはじめ、全遺跡の現状把握、戦時遺構の調査を合わせて実施した。そのなかで1号露天祭祀遺跡の遺物散布範囲や第三次調査時に設定されたトレンチの範囲を確認するなどの調査を行いながら、新たな測量図の作成を行った。この作業のなかで、1号露天祭祀遺跡の東南東約10mの地点に、これまでまったく報告されていなかった中世の土師器小皿のみが集積する新たな遺跡が発見されたのである。

本遺産のイコモス現地調査が終わった直後に、イコモスから古代の祭祀から現在の信仰の継続を証明する資料の提示を求めてきたことから、平成28年10月26日に沖ノ島へ渡島し、現地での中世遺構についての詳細な調査を行ったのである。

（2）調査の方法

発掘調査ではないため、個々の小皿を取り上げることはできないことから、遺物の堆積状況は把握できなかったものの、ほぼ完形に近い土師器の小皿を3つサンプルとして、現地に置かれたままの状態で動かさずにコンベックスを当て計測を行った。

：土師器小皿サンプル1は、外径七.八㎝、低径六.〇㎝、立ち上がりの長さ〇.七から一.二㎝と一応ではなく、底部は糸切で見込みは浅く回転撫であげ調整で仕上げている。

：土師器小皿サンプル2は、外径7.5㎝、立ち上がりの長さ0.6㎝程度で、底部は糸切で見込みは浅く回転撫であげ調整で仕上げている。

：土師器小皿サンプル3は、完形品ではないため外径は不明だが、底径約4.0㎝、立ち上がりの長さは約3.0㎝で復元すると外径7.0㎝前後となる。底部は糸切で見込みは他の小皿に比べると深く、回転撫であげ調整で撫で調整によってできた大きなうねり一回と小さなうねり二回が､胴部側面に観察できた。

（3）調査の結果

土師器小皿が散布する範囲は、南北1.2m、東西0.8m四方にわたって特に密度が濃く集積していることが確認でき、小皿のほとんどが伏せた状態で確認できた。数多くある土師器小皿の平均として計測した3つのサンプルから得た知見として、口縁部の外径は、平均7.4㎝で、見込みからの立ち上がり、つまり胴部側面の長さは、0.8㎝から3.0㎝と一応ではないことから、小皿の全体の形状やプロポーションとしては、統一した形ではないことがわかる。サンプルとして調査した小皿を含め底部はどれも糸切仕上げであり、外径の大きさや底部の仕上げなどから推測すると平安期を遡るものは含まれないと思われる。また、近世以降の土師器小皿に特徴的な径や立ち上がりに均整のとれたものとも異なることから、サンプルで示した小皿は、概して中世の特徴を示す土師器の小皿であると推測される。サンプル以外の小皿も同じ特徴であり、その土師器小皿が多量に集積して散布されている状況からこの遺跡は、中世の祭祀遺跡であると考えられる。ここでは、祈りの場や御供の廃棄場も含め、一連の祭祀行為が行われた場所として祭祀遺跡と呼んでいる。

まとめ

宗像大社文書に記される神事と土師器小皿の集積地は、直接結び付ける証拠にはならないが､『鎌倉期御供下行事』に記された「かわらけ」が沖ノ島ではないが撤下品目として示されていることや、沖ノ島（息御嶋・瀛）に参って竹を従えて行ったという御長手神事など、時期的にも祭祀行為自体も極めて近いことから勘案して、まったく無関係だとも言い切れないだろう。蛇足ではあるが、沖津宮社殿へ向かう参道の中腹に生えている真竹は、御長手神事で使われていた竹である可能性も考えられる。この点は今後のモニタリングの調査で結論を出したいと思っている。

結果､沖ノ島での中世祭祀遺構の発見によって､九世紀末以降も継続して祭祀が行われていたことが､文献史料からだけではなく証明されたことで、今日まで続く信仰を説明するうえで世界遺産の価値に貢献する1つの重要な物証となったわけである。

今回は、サンプルとして応急的に調査したにすぎないが、平成28年度から行っている宗像大社の宝物館に所蔵されている1号露天祭祀遺跡から出土した遺物の整理のなかにも実は、中近世の遺物が多く含まれていることが判明してきている。今後の遺物実測調査などを踏まえ調査研究の進展によって、9世紀から16世紀までの信仰の考古学的な空白時期が点から線へと埋まることに期待したい。

参考文献

宗像神社復興期成会 1961『宗像神社史』上巻
宗像市市史編纂委員会 1995『宗像市史』資料編及び通史編
坂本太郎 家永三郎 井上光貞 大野晋校注 1967『日本書紀』上　日本古典文学大系67
宗像市教育委員会 2014『国指定史跡「宗像神社境内」国指定天然記念物「沖の島原始林」保存管理計画』

第７章

マツリの記録 ―九州国立博物館デジタルアーカイブス―

今井　涼子

はじめに

九州国立博物館の建物に入ると、躍動感あふれる人形が配置され、華やかに飾りつけられた大きな山笠が目をひく。国の重要無形民俗文化財「博多祇園山笠行事」の飾山である。福岡を代表する夏の祭り博多祇園山笠を来館者にご紹介しようと、役目を終えた飾山を当館で展示させていただいている。

また、神に奉納する舞、神楽を、１階エントランスで披露する機会も設けている。神楽は全国各地に伝承されているが、福岡県東部、大分県、宮崎県など、九州では東側の地域が特に盛んで、国の重要無形民俗文化財に指定されている神楽も多い。

祇園山笠や神楽のような神事や民間で受け継がれている行事・芸能は、無形民俗文化財とよばれる、人びとの暮らしの中で生まれ、育まれてきた文化財である。その無形民俗文化財を通じて、当館がその名に戴く九州の、その拠って立つ福岡の、人びとの暮らし、文化の一端を伝えることも、当館の役割のひとつだろう。

また、無形民俗文化財は社会や担い手の変化に伴って形が変わる文化財であり、それが本質でもある。変化する文化財とは不思議に聞こえるかもしれないが、例えば、祭りの日を人が集まりやすい休日に変えることも変化である。こうした変化には理由があり、その時の担い手の事情を映し出している。その変化もまた大切にすべきことで、映像や写真での記録が重要になってくる。ここで、当館が取組んできた無形民俗文化財の映像による記録保存について紹介したい。

九州国立博物館デジタルアーカイブス

九州国立博物館デジタルアーカイブスとは、当館で活用するデータベース構築の一環として行なっている事業で、具体的には、無形民俗文化財のデジタルハイビジョン映像及びデジタル静止画像の制作と資料の蓄積である。撮影した映像は視聴できるように編集し、公開している。平成15年度から28年度までの間に、49本の記録映像を制作している（表１）。

当館が取り組んでいる調査研究活動の基幹テーマのひとつに、大宰府を基点に形成された歴史的環境を研究対象とする「大宰府学研究」がある。そこで、デジタルアーカイブスの制作も大宰府と関係する無形民俗文化財から着手することになった。まずは、当館に隣接している太宰府天満宮の神事から始め、太宰府市周辺の無形民俗文化財へと撮影対象を広げた。平成15・16年度の２ヵ年でとり急ぎ撮影すべきものは撮り終えたので、平成17年度以降は当館文化交流展示のテーマと関わりが深いもの、それまでに撮影した無形民俗文化財に関連するものを撮影対象としてきたところである。

表１　九州国立博物館デジタルアーカイブス映像一覧

番号	映像名称	製作年度	備　考
1	炎の祭　鬼すべ　太宰府天満宮	平成15年度	
2	さいふ詣りの道	平成15年度	
3	道真公を偲ぶ　秋思祭	平成15年度	
4	悠久の命をつなぐ　太宰府天満宮　更衣祭	平成15年度	
5	山家宝満宮に伝わる　山家岩戸神楽	平成15年度	☆
6	武蔵寺経塚と　写経埋納法会	平成15年度	☆
7	武蔵寺・地蔵会　武蔵寺の虎麿伝説	平成15年度	☆
8	太宰府市水城　老松神社の宮座	平成15年度	
9	王城神社の宮座　真魚箸神事	平成15年度	
10	筑紫野市古賀　扇祇神社の宮座	平成15年度	☆
11	筑紫神社の宮座	平成15年度	☆
12	福徳招来を願う　宰府のえびすさま	平成15年度	☆
13	筑紫路の　正月行事	平成15年度	
14	筑紫神社の　粥卜	平成15年度	☆
15	曲水の宴　太宰府天満宮	平成15年度	
16	節目の厄よけ（節分祭・梅あげ）　太宰府天満宮	平成15年度	☆
17	神功皇后伝説と子安祭　宇美八幡宮	平成16年度	☆
18	霊峰　宝満山の修験道	平成16年度	☆
19	筑紫野の瓜封じと丑湯まつり	平成16年度	☆
20	無病息災を願う　だざいふの夏祭り	平成16年度	☆
21	戦国の花　高橋紹運	平成16年度	☆
22	渡唐天神伝説　光明寺と崇福寺	平成16年度	☆
23	細男舞・神相撲　吉富町八幡古表神社	平成16年度	☆
24	神幸式大祭　太宰府天満宮	平成16年度	☆
25	正行寺の　報恩講と雅楽	平成16年度	☆
26	筑前に伝わる　荒神琵琶	平成16年度	☆
27	春日の婿押し　春日神社	平成16年度	☆
28	筑紫平野の稲作行事	平成16年度	☆
29	太宰府天満宮の農耕神事	平成16年度	☆
30	伝説に彩られた　天拝山の歴史	平成16年度	☆
31	伝統を受け継ぐ　筑前里神楽	平成16年度	☆
32	ふくおかに伝わる　成育儀礼と成人儀礼	平成16年度	☆
33	志賀海神社　歩射祭	平成17年度	☆
34	志賀海神社の　神幸祭	平成17年度	☆
35	志賀島に伝わる　由緒深き舞	平成17年度	☆
36	志賀島の四季	平成17年度	☆
37	大分の獅子舞　大分八幡宮	平成17年度	☆
38	志式神社の　早魚神事	平成17年度	☆
39	大善寺玉垂宮の鬼夜	平成18年度	☆
40	北野天満宮の御神幸行事	平成19年度	☆
41	稚児風流　水田天満宮	平成19年度	☆
42	廣田八幡宮神幸祭　どんきゃんきゃん	平成20年度	☆
43	八女津媛神社の浮流	平成21年度	☆
44	高千穂の夜神楽	平成22年度	☆
45	豊前の岩戸神楽	平成23年度	☆
46	市川の天衝舞浮立	平成24年度	☆
47	山野の楽	平成25年度	☆
48	豊前感応楽	平成26年度	☆
49	岩戸寺修正鬼会	平成28年度	☆

＊備考欄に☆印がある映像はこちらから視聴できます。http://www.kyuhaku.jp/dazaifu/v-archives.html

ここで主だった記録映像について紹介しておこう。カッコ内の数字は表１中の番号である。

九州国立博物館デジタルアーカイブス最初の記録映像は、太宰府天満宮で正月７日に行なわれる「鬼すべ」である。同じく正月７日に行なわれる「大善寺玉垂宮の鬼夜」（№39）とともに、寺院で行われる正月行事・修正会に由来をもつ、疫鬼を祓う追儺行事である。九州地方では、正月７日に鬼があらわれるという信仰がみられるのだという。

写真１ 大善寺玉垂宮の鬼夜

明治時代以前の日本では神と仏は同一のものとみなされていた。平安時代には仏が民を救済するために神の姿をとって現れると考えられるようになっていたため、神社と寺院は非常に近しい関係にあったが、明治初年（1868）の神仏分離令によって分かたれることになった。それまで神仏を同一の存在として行なわれてきた多くのマツリは変化を余儀なくされた。「鬼すべ」、「鬼夜」がともに、寺院で行われる法会に由来しながら、現在は神事として催行されているのはこのためである。

一方、寺院の法会として行なわれ、より古い姿を伝えているといわれているのが「岩戸寺修正鬼会」（No.49）である。大分県・国東半島の六郷満山とよばれる多くの寺院で正月７日頃に催行されてきたが、現在は岩戸寺、天念寺（豊後高田市）、成仏寺（国東市）の三ヶ寺に受け継がれている。こちらの鬼は寺院を飛び出して集落の家々を回り接待を受けながら、人びとに加持をする。「鬼すべ」や「鬼夜」に登場する鬼は祓われ、退治されるべき悪しき存在だが、「修正鬼会」の鬼は山深い里に春とともに福を招く神聖な存在とされている。

写真２ 岩戸寺修正鬼会

太宰府天満宮は、もとは菅原道真の菩提を弔うために建立された安楽寺という寺院である。古代の役所・大宰府の役人達の信仰を集め、九州各地に荘園をもつ一大荘園領主でもあった。その太宰府天満宮と九州を二分する勢力を誇った荘園領主が宇佐神宮（大分県宇佐市）である。宇佐神宮は八幡宮の総本社で、武運の神として武士に篤く信仰

写真３ 志賀海神社御神幸祭の八乙女の舞

されてきた神社である。この宇佐神宮の祭神の一柱、神功皇后にまつわる伝承が九州各地に残っている。

神功皇后は、志賀海神社（福岡市）が祀る海の守護神綿津見三神に三韓征伐の戦勝を祈願し、朝鮮半島の国・新羅へ渡る水先案内のため、海中に住む海の精霊・阿曇磯良を呼びだす神遊びの場を設けたという。ここで８人の乙女たちが神楽を舞ったのが「八乙女の舞」で、「八乙女の舞」に誘われて姿を現した磯良が、貝殻や海草がついた醜い顔を隠すために覆面をし、首から鞨鼓をかけて舞ったのが「細男舞」である。今も志賀海神社において御神幸祭などで奉納されている。無事、三韓征伐より戻った神功皇后は、戦勝祈願のお礼にと船の舵の柄（椎）を勝山の山中に差し立て奉納したところ、のちにこれが芽吹いたという。以来、この椎の小枝は「事なき柴」と呼ばれ、その葉は外出の際のお守りとされている。（№34～36）

写真４ 宇美八幡宮　湯方社

写真５ 八幡古表神社の神相撲

三韓征伐から戻った神功皇后が、応神天皇（宇佐神宮の主祭神）を出産した場所に建つのが宇美八幡宮（福岡県糟屋郡）である。宇美という地名は「産み」からきており、安産の神様として信仰を集めている。毎年４月中旬に、子どもの無事な成長を祈る春の大祭「子安祭」（№17）が行われる。また、神功皇后がその下で産湯をつかい、産衣をかけたというクスの大樹、湯蓋の森、衣掛の森が今日もなお境内で枝を広げている。

写真６ 感応楽

日本の人形劇の源流ともいわれている傀儡子も、宇佐神宮との関連の中で伝えられている。『八幡宇佐宮御託宣集』によれば、養老４年（720）に起きた隼人の乱を鎮圧するため八幡神が従軍したが、隼人の抵抗が強くなかなか討つことができなかった。そこで、傀儡子の舞を演じて隼人を油断させ、討ち果たしたという。八幡神は多くの隼人を殺めた罪を懺悔するために放生会を始めさせたという。その際、宇佐神宮の末社であった八幡古表神社（福岡県築上郡）と古要神社（大分県中津市）がそれぞれ船を出して海上で傀儡子を舞わせた。こうした由来を持つ、傀儡子の舞を奉納する神事が両神社に伝わっている。船上で行われる神舞（細男舞）と境内で行なわれる神相撲とからなる。（№23）

さて、マツリと聞いて多くの人が思い浮かべるのは、神社で行なわれる祭礼だろう。春に行なわれる五穀豊穣・豊漁を祈願するマツリや秋の収穫感謝のマツリなどで奉納される民俗芸能の印象が強い人も

いるかもしれない。

「楽打ち」は太鼓踊りの一種で、神幸に伴う芸能である。胸につけた締太鼓を打ち鳴らしながら、五穀豊穣、雨乞、家庭円満、無病息災など、様々な願いをこめて踊られる。旧豊前国・豊後国にあたる福岡県東部、大分県西部、国東半島によく伝承されており、この地域では「楽打ち」を「楽」とよぶ。大富神社（福岡県豊前市）の春の御神幸祭で奉納される「感応楽」（№48）は２ｍほどの高さの御幣を中心に輪になって踊る。大団扇がふられるのは豊前地方の特色である。福岡県筑前地域では唯一「山野の楽」（№47）が伝承されている。

「楽打ち」同様、御神幸の際に奉仕する芸能に「ふりゅう」がある。福岡県筑後地方では「風流」、佐賀県一帯では「浮立」の字をあてる。また、「浮流」と書く場合もある。太鼓と鉦、笛による囃子に合わせて、色鮮やかな衣装を身につけた踊り手が舞い踊る、目にも耳にもにぎやかな芸能である。御願成就、収穫感謝のお礼として秋祭りで奉納されることが多く、子どもによって奉納されることもある。九州では佐賀県を中心に福岡県、長崎県によく伝承されている。（№40・41・43・46）

写真７ 水田天満宮の稚児風流

写真８ 豊前岩戸神楽の湯立神楽

神楽は全国各地に伝わっているが、近年、人が多く集まる場で、あるいは定期的に公演が行なわれることが増え、多くの人が鑑賞するようになったのではないだろうか。

神楽の語源はカミクラ（神座）で、本来は神がおわします場を意味したという。神楽は神霊を鎮めたり、あるいは励起したりする神事芸能である。宮中に伝わる神楽を「御神楽」といい、その他の神楽は「里神楽」という。里神楽はさらに、その特長や伝来の系譜によっていくつかに分類される。また、舞い方によって、採物を手に直面（面を着けない素顔）で舞う「舞神楽」と、面をつけて多くの神々に扮して演じる「面神楽」とに分けられる。そして、アマテラスオオミカミが閉じこもってしまった岩戸を開かせる「岩戸開き」の神話を演じることから、「岩戸神楽」と称するところもある。

宮崎県高千穂町一帯に伝わる「夜神楽」（№44）は、氏神に収穫を感謝し、翌年の五穀豊穣を祈願して奉納される。年毎に、ある民家や公民館を神楽宿とさだめ、そこに氏神様をお招きし、三十三番の神楽を夜を徹して舞うのである。

旧豊前国にあたる地域に伝承されている豊前岩戸神楽（№45）は、華やかで活発な所作と、面神楽の演目が多く演劇性が高いこと、そして湯立神楽が行われることが特長である。豊前岩戸神楽の湯立神楽では、神楽の会場となる境内を斎庭と呼び、中央に高さ10mを超す斎鉾と呼ばれる柱を立て、その傍らに大きな湯釜を据える。湯釜でたぎらせた湯でもってその場を清め、熟練した舞手が斎鉾に登って御幣を投げ、アクロバティックな舞を披露する。最後に、湯釜の火をおとして火渡りを行う。

修験道は、山へこもって厳しい修行を行い悟りを開くことを目的とする日本古来の山岳信仰と仏教とが融合した宗教である。九州では、宝満山、英彦山、求菩提山が修験道の中心道場、霊山とされた。（№18）うち、二峰の霊山を要する豊前地域に伝わる神楽には、修験道の影響が色濃い。

一方、筑前岩戸神楽は「磯羅」、「異国降伏」など神功皇后伝説を題材にした演目や筑前の国号起源説話を取り入れた演目「荒振神」が特長である。（№5）

写真９ 山家岩戸神楽「荒振神」

マツリとは本来、目に見えない神霊が顕れるのをマツ（待つ）こと、出現した神霊にマツラフ（奉仕する）ことだという。神霊を招き迎え、供物や歌舞を捧げてもてなし、慰撫し、祈願したり感謝の意を捧げたりする儀式を指している。神霊を招くため、招いた神霊を喜ばせるため、人びとは工夫をこらして、様々なマツリ、芸能を生みだし伝承してきた。神楽や風流、神幸行列など、神霊だけではなくマツリの場に集まる人びとをも楽しませる側面が次第に強くなっていったものもあった。これに対して、マツリの原点ともいえるものが宮座である。村の社に神をねぎらいもてなすための座を設け、供物を捧げて祈願、感謝を込める儀式だが、宮座に参加できるのは氏子の中でも一定の資格をもつ者に限られる。福岡県は特に宮座がよく行なわれている地域だが、神社を支える地域社会の変化に伴い、宮座の維持は難しくなってきている。老松神社、王城神社、筑紫神社、扇祇神社の宮座（№8～11）を記録したが、宮座自体が行われなくなる日もそう遠くはないのかもしれない。

おわりに

無形民俗文化財の記録は変化の一瞬間を切り取ったものである。マツリだけでなく、準備の様子や使用する道具類なども記録していく。マツリの場に居合わせても見えてこないものが写し撮られる。一方で、写真や映像では写し撮れないもの、マツリの場の空気感のようなものがある。それは、その時その場にいなければわからないもので、だからこそマツリの本質に深く関わる重要な要素といえるだろう。

見物したこと、参加したことがあるマツリならば記録映像を、記録でしか知らないマツリであれば現地で、是非両方のマツリの姿を見ていただきたい。きっと、これまで知らなかったマツリの姿を見ることができるだろう。

参考文献

アクロス福岡文化誌編纂委員会編 2010『福岡の祭り』アクロス福岡文化誌４　海鳥社
社団法人全日本郷土芸能協会編 2006『日本の祭り文化事典』東京書籍

終論

大宰府学研究の成果と展望

往時の大宰府政庁

終論　大宰府学研究の成果と展望

第１章　研究の成果　　小嶋　　篤 …… 357
第２章　研究の展望　　楠井　隆志・小嶋　　篤 …… 367

終論では、第１部～第７部の研究成果を取りまとめ、九州国立博物館が実施してきた大宰府学研究の総括を行う。本総括をふまえ、大宰府学研究の今後の展望を示し、さらなる飛躍のための出発点とする。

太宰府の森に囲まれる九州国立博物館

第１章

研究の成果

小嶋　篤

はじめに

本書では、九州国立博物館と関係機関、地元市民が連携して進めてきた大宰府学研究のうち、講演会・シンポジウム資料、展示図録の論考および新稿を、各執筆者の協力を得て掲載した。再掲載した論考は、掲載時の原稿を活かしているが、加筆・修正等が新たに加わっていることを改めて明記しておく。以下では、各論考の概要を整理しながら、大宰府学研究の成果をまとめる。

１．大宰府の器と編年

第１部では、考古学研究の基盤の一つである土器編年を集中的に検討した。第１章「西海道の土器編年研究」は、長直信が進めてきた土器研究のエッセンスが濃縮された内容となっている。「はじめに」でも丁寧に説明するように、シンポジウム当日も土器編年の手続きをシンポジウム参加者と共有する形で研究発表が進められた。本章は九州北部の土器編年の到達点を要約しており、その成果と課題は多岐に及ぶ。その中でも今後の研究動向を示唆する課題として、「遺跡性格差と土器編年」の問題が印象的である。大宰府管内の体系的時間軸の把握には、「大宰府周辺の編年とは別に周縁地域用の消費地編年構築」が求められる。この遺跡性格差の問題は、図らずも松﨑大嗣による第３章「西海道南部の土器生産」で、より端的な事例が挙げられた。松﨑は成川式土器の学史を追体験する形で議論を進め、薩摩・大隅国の国府周辺とその外縁地域では、土器様式の変化に違いが生じていることを明快に整理した。その背景には、「土器様式転換の背景には、移民政策や律令制によるヒト・モノ・情報の流入量に大きな地域差があった」ことを想定する。弥生時代の伝統が色濃い成川式土器の存在は、考古学研究による大宰府管内の地域実態を探る上で、大きな可能性を秘めた研究素材と言えよう。

上記では遺跡性格、とくに消費地の様相に注目したが、次に土器編年のもう一つの柱である生産地の様相を取り上げる。第２章「西海道北部の土器生産」では、石木秀啓が牛頸窯跡群（牛頸須恵器窯跡）を中心に土器生産体制の時系列変化を検討した。本章では、牛頸窯跡群の様相を「大野城・水城築造以前」、「大野城・水城築造時期」、「大野城・水城築造以後」の三段階で整理し、窯の基数や窯構造・器種などの変化を追った。石木がとくに注目したのは大野城・水城築造時期にあたる牛頸窯跡群編年Ⅴ期の様相で、窯数・生産器種の減少に須恵器工人の軍事動員の可能性を提示した。また、水城築造による地域の軍事的要塞化による土地利用・交通路・景観・住民の心情という多面的な影響も想定する。これらの可能性・多面的影響の是非は、さらなる相互検証が必要とは言え、今後の研究を見据えた仮説と評価できる。

２．大宰府と古代山城の年代論

第２部では、第１部の議論をふまえ、大宰府と古代山城の築造時期に焦点を当てた。第１章「大宰府と古代山城の誕生」では、赤司善彦が時代背景とともに、各遺跡の年代決定の論拠（考古資料・文字史料）を個別に整理し、各資料の歴年代比定を相互検証することで年代論を論じた。とくに注目できる資料は大野城跡太宰府口城門出土木柱である。赤司自身も慎重を期す650年の伐採年は、『日本書紀』の665年

築城記事を検証する素材である。本章では、『続日本紀』記載の怡土城築城期間（13年）を傍証とし、古代山城の築城期間を長く見積もることで、650年と665年の年代差に一定の整合性があることを見出している。第２章「大宰府造営の年代論」でも、杉原敏之が考古学的手法に沿って年代論を積み上げた。杉原の年代論の骨子は、遺跡発掘調査時における層位的検出と記録であり、旧石器研究者としての矜持が表れている。本章では、大宰府政庁からはじまり、政庁周辺官衙、水城、大野城の築造時期が整理されており、各遺跡で７世紀第４四半期から８世紀第１四半期が画期であることが再確認できる。その中で異質なのが、水城東門地区木樋掘方SX051埋土上層出土須恵器群で、他の遺跡出土土器に比べて著しく古相であることが改めて強調された。本土器群は遺跡間での相互検証から水城築造時期と直結できない状況にあるが、第１部で着目された「遺跡性格差」や、水城築造の作業実態（土器の埋没過程）等の複合的研究課題を内包する。本課題の解消には、さらなる論理的手続きの相互検証と発掘調査記録の精度向上が求められる。

水城跡と牛頸窯跡（水城土塁奥の低丘陵地に分布）

水城跡の土塁（博多湾側）

第３章「日韓古代山城の年代論」では、向井一雄が東アジア的視点から日本古代山城の年代論を論じた。本章では、朝鮮半島の古代山城を高句麗・百済・新羅・伽耶諸国に分けて整理するが、単なる地理的区分でなく、出土遺物や城郭構造をふまえた論証を経る点が特筆できる。近年の研究動向がまとめられており、朝鮮半島での調査研究の進展が日本古代山城の把握に繋がることが実感できる。他方では、神籠石や先行説・後出説等の学史的整理がなされ、日本古代山城の年代論の推移が示されており、日韓の研究到達点が俯瞰できる。これらの整理をふまえた上で、向井は日本古代山城の新年代として、年代決定論拠を積み上げた上で、先行説の中でも７世紀前半築造説を明快に否定した。問題となるのは、鬼ノ城（鬼城山城）の評価である。向井は鬼ノ城出土遺物500余点に坏Hが全く見られない点を重視し、白村江敗戦を築造契機に求めることはできないと説く。一方、第５章「瀬戸内海沿岸における古代山城

の築城年代」では、南健太郎が鬼城山城の築城時期を７世紀第３四半期と把握する。南は７世紀第４四半期の土器溜まりが上方からまとめて廃棄された出土状況であることをふまえ、城門出土木材の炭素14年代測定と古い土器型式、屋島城・金田城の城門構造の類似から築城年代を論じた。なお、南も古代山城の存続期間と占地論から、鬼城山城等の山城を天智期の対外・対内に向けた複合機能を想定しており、白村江敗戦のみに築造契機を求めてはいない。両者の結論の違いは、鬼ノ城（鬼城山城）出土土器の評価に起因する。第１部「大宰府の器と編年」の問題提起をふまえると、鬼ノ城（鬼城山城）出土土器の検証には、吉備における「遺跡性格差と土器編年」という課題も横たわる。

鬼ノ城と同じく、城内の発掘調査が進んでいる遺跡は他に鞠智城跡がある。第４章「有明海沿岸における古代山城の年代論」では、矢野裕介が鞠智城を中心に存続年代と機能を整理した。本整理に基づくと、鞠智城Ⅲ期前半（８世紀第１四半期）までは鞠智城と大宰府政庁の変遷の連動が認められる。この連動を重視する矢野は「大宰府防衛の一翼を担う軍事的役割とともに、その維持管理の面でも大宰府が大きく関与していた」と想定する。あわせて、『肥前国風土記』と『延喜式』の記述を基に、７世紀の有明海に古代山城・官道・烽による情報伝達網が存在したと考えた。

３．筑紫の大城

第１部・第２部の年代論をふまえ、第３部では「筑紫の大城」と称される大野城について、考古学・文献史学・土木工学・地域史から多角的に検討する。第１章「古代山城とＧＩＳ」は赤司善彦が進めてきた考古学におけるＧＩＳ活用研究の軌跡がまとめられている。航空レーザー計測による広域の微地形把握は、古代山城研究の研究水準を底上げする成果である。赤司は本地形データを素材として、眺望や可視領域、自然地形と城壁構造等を対象とした今後の研究推進を説く。第２章「大野城の研究成果」では、赤司が大野城の歴史的評価と課題を、城壁・城門・築城年代・役割の変化・立地と分布の項目に分けて整理し、第３章以降の議論の前提を整えている。

重藤輝行は第３章「糟屋屯倉と怡土城からみた大野城」において、考古資料と文献史料を併用しながら大野城築城の経緯を探った。本章では、シンポジウムの趣旨でもある糟屋（宇美町側）と大野城の関係に着目する。重藤は古代山城築城にかかる期間や労働力、資材等を念頭に長期的な視点で大野城にかかわる人々の動きを把握する必要を説く。具体的には、古墳時代中期後半以降の馬韓・百済系土器の分布から、糟屋地域や基肄城周辺に渡来人の居住を想定し、彼らが古代山城築城に参画したと想定する。また、糟屋屯倉が大野城築城期の物資・兵の集積地であった可能性も提示した。第３章と同様に、長期的な視点で大野城と渡来人の関係に着目するのが、第８章「大野城築城と新羅」である。上田龍児は自身が担当した大野城市乙金地区の調査成果を基に、大野城と新羅の関係に焦点を当てた。四王寺山に接する乙金地区では、半径１㎞圏内に約15点の新羅土器出土が見られ、かつ６世紀末前後～７世紀後半まで途切れることなく搬入が認められる。乙金地区の集落動態では７世紀中頃に居住痕跡が希薄となることもふまえ、新羅との関係を有する本地区の集団が、大野城築城に関与したと想定する。本想定は、対岸に位置する牛頸窯跡群の検討結果（第１部第２章「西海道北部の土器生産」）とも通じており、牛頸窯跡群編年Ⅴ期の評価とあわせて、さらなる検証が期待される。糟屋地域と大野城の繋がりについては、第７章「大野城と宇美の歴史的繋がり」で、松尾尚哉が通時的に整理し、大宰府・水城がある御笠郡（太宰府市・大野城市側）からの視点とともに、大野城跡の約８割が属する糟屋郡（宇美町側）からの視点も必要と説く。本章で象徴的なのは、近世・近代における四王寺山・大野城跡に対する地元民の認識で、大野城と四王寺を基点とした歴史的景観（信仰の場、観光事業）の形成が認められる。

第４章「文献史料からみた大野城」では、松川博一が大野城関係の文献史料を、築造・地名・倉庫・兵士の項目に分けて整理する。地名に関する成果では、四王寺山の山名が「大野山」→「大野城山」→「大城山」→「城山」→「四王山」と変遷することを指摘する。また、本章では大野城の守衛について、筑

前国や大宰府の管轄というおおまかな理解ではなく、大宰府管轄時には府下六国からの上番兵士（大宰府常備軍）という具体像を提示する。大野城の城庫は８世紀以降も機能しており、平安時代の太政官符に「大野城器杖」・「大野城衛卒粮米」の収納物関連記事があることは本文のとおりである。これらは平安時代にはじめて収納されたものではなく、奈良時代以前の収納物を踏襲するものと考えられる。松川は『日本書紀』天武天皇元年（672）の筑紫大宰・栗隈王の発言「城を峻くし隍を深くして、海を臨みて守らするは」から、白村江の敗戦から約10年が経過してもなお、大野城や水城が対外防衛施設として強く意識され、筑紫大宰の下で維持管理されていたことを指摘する。第２部「大宰府と古代山城の年代論」でも指摘されるように、古代山城が複合的な機能を有していたことは確かだが、対外防衛機能（防御施設）を本質的機能から除外することはできない。第６章「大野城と古代日本の戦争」では、小嶋篤がこの対外防衛機能（防御施設）を支える兵器から、大野城の防衛設計を探った。小嶋は戦時下の大野城では大宰府保有兵器の運用が構想されていたと考える。政庁周辺官衙跡出土品を含む奈良時代以前の兵器備蓄事例を俯瞰すると、弓矢の量的確保とともに、古墳時代武装様式の踏襲が把握できる。この実態とともに、古代山城の造営期と編纂時期が重なる『日本書紀』記載の集団戦闘形態をふまえ、大野城眼下にある官道、とくに峠や渡河地点が開戦時における防衛設計上の要所であったと指摘する。第５章「大野城の土木技術」では、入佐友一郎が土木工学の視点から、防御施設の根幹をなす古代の技や工夫を検討した。入佐の計測によると大野城の城壁（土塁）角度は55 ～ 60°で、現代の安定基準の２倍にも迫る急角度に達する。この急角度の城壁を維持する盛土技法を、版築１層の厚さ・施工方法・盛土管理方法から検証する。本検証では、入佐が実施してきた復元整備の経験が如何なく反映されており、締固めの回数や水分量の管理の「感覚」という考古学研究の技術論ではたどり着きにくい見解を導き出す。本研究成果と発掘調査成果の相互検証は、古代の土木技術の解明に向けて、着実な歩みを進めることができるだろう。

４．大宰府の官衙と諸司

第４部では、西海道の中枢である大宰府政庁周辺の官衙を取り扱う。佐藤信は第１章「大宰府の機能と律令国家」において、大宰府史跡の調査・研究の歩みを振り返りながら、大宰府の特質と機能を俯瞰的に整理し、大宰府をめぐる遺跡群を総体として『大宰府史跡群』とらえることを提言する。本提言は、大宰府を基点に「古代国家における中央と地方との関係を立体的にとらえ直す」ことを視野に入れている。大宰府は地方最大の官衙として、文字通り中央と地方を繋ぐ役割を担った。その役割を物証する資料の一つが木簡であり、平城宮・京跡では大宰府作成の荷札が出土する。酒井芳司は第４章「大宰府史跡出土の付札木簡」で、不丁地区出土の付札を国毎に整理し、その書式や形態を検討した。本検討により「付札は郡が主体となって作成したものが多く、郡が税の納入に責任をもつ」実態が明らかとなった。また、郡名のみの表記は、大宰府の前身である筑紫大宰や筑紫総領が地方豪族を直接の支配下に置き、８世紀以降も郡の人事権を掌握していたことに関係するとの見通しを示した。大宰府運営の実務を担った官員については、森公章が第２章「大宰府の官衙」で整理した。養老令文に基づくと、大宰府の官制は中央の太政官組織のミニチュア版の様相を呈するが、防人司や主船という独自部署も存する。これらの部署を実質的に支えていたのは、使部と府書生であったことが木簡や太政官符から見え、筑前国を中心に管内諸豪族の出仕が伺える。

第３章「大宰府の諸司」では、松川博一が文献史料を軸に蔵司地区の遺構と機能について検討した。「蔵」という字は、本来「大蔵」や「正蔵」のような中央のクラに用いるべきものだが、大宰府のクラは地方にありながら、中央の大蔵に準じて「筑紫大蔵」と呼ばれる。松川はこの用例から、蔵司の名が筑紫大蔵に由来するとし、その成立が奈良時代以前に遡る可能性が高いと考えた。また、大宰府の蔵司が中央の大蔵省に相当する官司である点をふまえ、大蔵省の建物配置と蔵司地区の遺構配置を比較検討した。その結果、蔵司地区の遺構は蔵司の曹司庁と筑紫大蔵院と把握でき、西海道諸国の調庸物の勘会・出納・

保管にともなう政務や賜禄儀礼を担ったと想定した。加えて、大蔵省の官下には、典鋳司・掃部司・漆部司・縫部司・織部司があり、官工房の一部も職掌に入ることをふまえ、蔵司地区前面にある不丁地区についても、蔵司の管轄下にあると考えた。不丁地区は、第４章「大宰府史跡出土の付札木簡」でも紹介されるように、紫草の付札木簡が集中的に出土し、かつ漆工や冶金関連遺物も豊富に出土する。不丁地区の工房的性格については、第５章「前面官衙跡の調査研究成果」で小田和利も、陶硯（定形硯・転用硯）の出土量の比較検討から、不丁地区に工房的官司が存在したと指摘する。また、不丁地区の付札木簡と墨書土器「政所・□司」の存在をふまえ、事務的官司も同地区に併存したことも想定する。

蔵司地区の中枢とも言える丘陵平坦部の調査成果については、第６章「蔵司地区官衙跡の調査研究成果」で、下原幸裕が平成21年から平成30年までの成果を整理した。本整理に基づくと、丘陵上の蔵司地区は大きく二段階に別れ、掘立柱建物群が展開する段階（蔵司Ⅰ期・７世紀末～８世紀初頭を中心）と、礎石建物群が展開する段階（蔵司Ⅱ期・８世紀～ 10世紀）に区分できる。両段階とも西群と東群という２つの区画からなり、建物配置の概略が分かる蔵司Ⅱ期では、倉庫を主体に儀礼・作業空間を備えた東群と、それを統括する政務・儀礼空間を備える西群という機能の違いが想定されている。なお、蔵司地区の遺物には、大量の武器・武具片が含まれるという特徴がある。第７章「鉄から見た大宰府官衙」では、小嶋篤が蔵司地区出土鉄製品の遺存状態を整理し、保管状態のまま被熱したと判断した上で、被熱要因として「兵庫火災」が最も可能性が高いことを指摘した。蔵司丘陵上での兵庫については、前掲の第３章でも松川が触れており、難波・平安宮の大蔵省の側に兵庫が置かれることから、大宰府においても蔵司に隣接して兵庫があった可能性を指摘する。また、倉庫と兵庫の隣接には、警備上の利点と、倉庫群が立ち並ぶ威圧的効果があると想定する。第７章では鉄製品だけでなく、その前段階の鉄素材や冶金工房からも大宰府官衙を検討した。律令国家を支える物資（財源）は、中央集積と現地調達を基本路線に据えており、大宰府官衙の建設は遠方からの物資輸送に依存するのではなく、輸送コストが低く、管理が容易な現地調達にも比重が置かれていたと想定した。遠方輸送と現地調達で確保した鉄素材は、大宰府官衙建設期においては、大宰府政庁西隣の谷筋に展開する工房群で製品に加工する。生産された製品は鉄釘等の建築部材・調度品を主体とするが、『日本書紀』における筑紫大宰への武器素材輸送記事等から、武器・武具生産も担ったと想定した。

５．大宰府の客館と響銅

第５部では、大宰府の外交機能と都市整備の鍵を握る客館に焦点を当てる。小嶋篤は第１章「新羅王子がきた時代」で、大宰府で客館が整備された飛鳥・奈良時代の国際環境を日羅関係から整理した。大宰府都城整備の契機となった白村江の戦いの後、日本と新羅は668年の国交回復を経て、735年の新羅国号改称の告知にいたるまで良好な関係が保たれた。この間になされた新羅仏教界との交流は、華厳宗の発展を促し、聖武天皇が推進した鎮護国家思想へと繋がった。735年以後の日羅関係の軋轢は深刻で、738年・742年・743年と新羅使を大宰府で放還する強硬姿勢をとった。文字通り、大宰府が外交の最前線であった。このような日羅関係の冷え込みのなか、752年に総勢700名を超える新羅使が来日したのである。放還・入京のいずれの判断をするにせよ、外国使節団に対し、文明国としての対応が求められる。この「文明国としての対応」を象徴するのが、都市整備とも深く関わる客館の存在である。第２章「「西の都」大宰府と外交施設」では、井上信正が大宰府条坊内で発見された客館跡の構造や機能を検討した。井上は、大宰府と平城京が唐長安城に代表される東アジア都城制に基づく都市として整備されたと説く。東アジア都城は礼制機能を備える存在であり、生活の場とともに儀礼的な場としても機能した。つまり、「日本という国が大宰府という場所で外交を行うため、その舞台として礼制機能を備えた「都城」を設けた」と考えたのである。加えて、大宰府条坊内の客館は博多湾岸の筑紫館（後の鴻臚館）とともに機能し、その関係は難波館と京内客館との関係と類似すると捉えた。当然、客館内では来客をもてな

すための備えが求められる。条坊内の客館でも、政庁周辺と同様に新羅の佐波理・新羅土器、唐の白磁・青磁といった高級品がそろって出土した。第３章「輸入陶磁器と喫茶文化」では、井上が客館跡出土品の陶磁器組成を整理し、その中でも「喫茶の器」について紹介した。唐代に体系化された喫茶は、当時の最先端文化であり、国際交流の最前線にいち早くもたらされたと想定する。

752年の総勢700名超の新羅使節団は、来日時に大規模な交易も行っており、その売買記録は「買新羅物解」として伝わっている。本文書には正倉院御物としても現存する白銅（佐波理）の名が記されており、高級食器として東アジア諸国で流通する実態がうかがえる。第４章「大宰府出土の響銅」では、井上が客館跡出土佐波理を紹介しつつ、このような特殊品の検討が大宰府条坊内部の利用実態把握につながるとの見通しを示した。第５章「響銅でつながる大宰府と東アジア」では、佐波理とも呼ばれる響銅について、製作・分布・用途の項目に分けて検討した。本検討に基づくと、大宰府が整備されていく７世紀では、響銅の出土地は、唐の首都である西安近辺、副都の洛陽近辺、水運の要衝である揚州近辺などに集中する傾向にある。一方、日本では伝来初期の古墳時代（６－７世紀）には古墳出土品が目立つが、８世紀になると大宰府などの限られた政治的拠点に集中するようになる。この状況は同時代の唐と連動しており、響銅（佐波理）が大宰府の都市機能を検証する一つの素材になり得ることを示す。９世紀以降、響銅は政治的拠点に加えて、和歌山県の那智等の宗教的聖地でも用いられるようになる。川村は、その背景に響銅が「東アジアに共通する聖俗両用の宝器」であることを想定した。

岩屋城跡から眺めた大宰府政庁跡（写真右下）以南の景色

大野城跡から望む宝満山

響銅は文字通り銅製品であるが、鋳造工程のみでは「打つとよく響く澄んだ音を出す」という性質は得られない。鋳造後に轆轤回転で器面を削り、板金を加熱して鎚で敲いて成形する等の加工が求められる。第６章「現代の彫金作家からみた極薄青銅器」では、赤沼潔が2013年から実施する鋳造実験の結果をまとめた。実施内容は、鋳型の種類、鋳造法案、合金熔解、金属加工である。本実験は、合金の比率を変更する等の細やかな工程を幾度も試みる。本文のとおり、ほぼすべてが失敗の履歴だが、この履歴

こそが重要な研究成果であり、製作技術解明への道筋を着実にたどっている。

6．山岳信仰と宝満山

第6部では、大宰府の北東（鬼門）に位置する宝満山に着目する。日本列島は約70パーセントが山地で構成されており、信仰面でも大きな構成要素として存在する。第1章「山岳信仰の考古学」では、菅谷文則が、「山の遺物・遺跡」を研究対象として捉える上での理論的手続きと、資料解釈の妥当性判断について、自身の研究歴から提言を行った。とくに、「資料の絶対量のきわめて少ない山では、その全体像を取り違える可能性が高い」との指摘は重要で、山を研究対象とする際の総括的研究の必要性を説く。

第1章における菅谷の指摘を宝満山に当てはめると、宝満山における信仰の変遷は縁起等の文字史料に加えて、考古学調査による実証研究が進んでおり、総括的研究の水準は極めて高いと評価できる。それは、第2章「考古学からみた宝満山信仰のはじまり」で触れられるように、昭和35年（1960年）の段階から、総合調査を視野に「宝満山文化綜合調査会」が発足していることに由来する。第2章では、第1次調査から研究を担った小田富士雄が、山頂付近に位置する上宮祭祀遺跡の調査成果をまとめた。その成果に基づくと、宝満山信仰の草創期に属する資料は律令祭祀的性格を有し、遣唐使派遣などの国家的事業や大宰府管内の有事に対する国家祭祀的性格が付託されていたことが窺える。

その後の様相は、森弘子が第3章「宝満山の歴史と信仰」で通時的にまとめた。本章でも遣唐使と宝満山の関係が『叡山大師伝』等から述べられており、とくに国家祭祀的性格は入唐僧の一人でもある最澄の二大願が象徴的である。その一つ六所宝塔建立については、第5章「宝満山の最新発掘調査成果」で山村信榮がその候補地を紹介する。六所宝塔は、奈良時代の国分寺・国分尼寺の制に替わって、法華経の功徳で日本国の平和な治国を実現しようとするもので、宝満山には日本の西端に配する「安西塔」が建立されたと伝わる。この安西塔の基壇と見られるものが、太宰府市教育員会の発掘調査で下宮と中宮の中間の独立峰で発見された。また、これら大宰府・遣唐使・天台宗に加えて、古代の宝満山信仰を構成する要素には、八幡神も存在することを第4章「宝満山と古代大宰府」で酒井芳司が指摘する。八幡神は隼人征伐や東大寺大仏造営の援助を通じ、急激に国家との結びつき強めた。対外防衛の役割を担った大宰府でも、鎮護の神として期待され、宝満山と八幡神、母の神功皇后が結びつきを強めたことが窺える。

第6章「宝満二十五坊の姿」では、岡寺良が山中に残る坊跡群の平面図（平面構造）と『竈門山水帳』、『筑前國続風土記附録』、『宝満山絵図』の文字・絵画史料から、具体的な坊名称の特定を試みた。その結果、宝満山では座主や東院谷坊跡群が主要伽藍である講堂の置かれていた中宮跡よりも山頂側に位置し、「聖と俗の混在」が生じていることを指摘する。加えて、その背景に弘治・永禄年中の混乱を発端にする山上坊群の成立を想定しており、やはり総合的研究に基づく資料解釈が求められている。

7．大宰府管内の信仰

第7部では、大宰府管内唯一の「神郡」である筑前国宗形郡を取り上げ、とくに沖ノ島祭祀の実像に迫る。第1章「宗像・沖ノ島と胸肩君」では、小嶋篤が沖ノ島祭祀と胸肩君の関係を実証する考古資料を整理しつつ、豪族としての胸肩君の実態に迫った。沖ノ島祭祀での胸肩君の関与を実証する資料としては、宗像地域の上位階層墓からも出土する有孔器台須恵器（沖ノ島系祭祀遺物）がある。他の傍証としては、宗像地域における有孔円盤と剣形品の導入状況や、沖ノ島21号遺跡と勝浦峯ノ畑古墳で出土する同型鏡組成の一致、沖ノ島祭祀の盛行と津屋崎古墳群の造営期の重なりが挙げられる。また、九州北部の古墳築造技術や葬送儀礼を検討した結果、律令期の宗形郡の範囲へと繋がる分布域の形成を確認

した。本結果もふまえ、胸肩君は「九州北部の複数の港を押さえ、諸豪族と協力関係を構築することで、実質的に玄界灘航路で幅を利かせていた」と想定した。

第２章「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」では、小田富士雄が発掘調査成果を軸に祭祀の変遷過程を整理した。本論考には、発掘調査およびその後の調査研究を牽引してきた小田の集大成ともいうべき内容が整理されており、沖ノ島祭祀方式の二大画期が見出されている。小田はヤマト王権が主宰する国家型祭祀を「大王直祭型」と「委託祭祀型」に整理した上で、成立期の沖ノ島祭祀が前者から後者へと移行すると指摘する。その画期とも言えるのが沖ノ島21号遺跡であり、勝浦峯ノ畑古墳（津屋崎古墳群）との繋がりも同型鏡組成から窺える。第３章「宗像・沖ノ島祭祀の実像」では、笹生衛が第２章で整理された沖ノ島祭祀遺跡の変遷（岩上→岩陰→半岩陰・半露天→露天）に対し、古代の神の考え方（神観）と祭祀の構成（祭式）から祭祀の実像に迫った。その成果に基づくと、沖ノ島祭祀は「①奉献品・祭具を製作し神饌を調理する祭祀の準備」、「②奉献品と神饌を供え、神へと願意を伝えて拝礼する祭祀」、「③奉献品を神の近くへと収納・安置し、神饌を撤下する祭祀後の対応」という三段階を基本的な祭式としていたと把握できる。本成果は、沖ノ島祭祀遺跡に留まらず、これまで漠然と「祭祀」として認識されていた調査記録に対し、『祭式』を見据えた再検討を促すものと言えよう。その再検討の一つとも言えるのが、第４章「巨岩と社殿」に掲載した後野・山ノ神前遺跡群と金武城田遺跡の分析である。小嶋は遺構の時空間的分析と遺物の使用痕跡分析を統合することで、祭式を見据えた遺跡形成過程を研究した。その結果、「神の存在を象徴する巨岩・神の占有空間である本殿」を核とし、その前面に「祭祀執行の空間」、さらに「祭具収納施設（神庫・石敷状遺構・埋納土坑）」が接するという社の空間構成とともに、祭祀が行われた時間帯や所作の復元に関わる情報を抽出した。また、巨岩と社殿において類似した祭祀痕跡を見出し、両者の連続性に対する具体的論拠を提示した。

第５章「沖ノ島祭祀と遣唐使の航海」では、大高広和が祭祀の変遷要因を、大陸との対外交流・対外関係から検討した。大高は祭祀の内容、祭式にかかわる変化、三宮での祭祀開始の画期として７世紀に注目する。本章では遣唐使航路の北路から南路への変更に対し、７世紀半ば過ぎに朝鮮半島南岸辺りから東シナ海を横断する中間的航路（広義の南路）の利用が見出されている。この点を重視し、航路の歴史、祈りの歴史としての画期を、８世紀初めではなく、７世紀の半ば過ぎに求めた。

第６章「御長手神事と沖ノ島」では、岡崇がイコモスの「古代祭祀終焉後の信仰は断絶しているのではないか」という疑念に対し、文献史料と考古資料の双方から、祭祀継続の物証を提示した。具体的には、「宗像宮年中目録」（1375年頃）等に記される、沖ノ島（息御嶋・瀛）に参って竹を従えて行ったという御長手神事や、沖ノ島で新たに発見された中世遺構（土師器皿集積）等を挙げ、双方の有機的繋がりも視野に入れる。御長手神事の内容は文字史料にも遺されていることから、沖ノ島出土遺物の再整理とともに、今後の調査研究でさらなる進展が期待できる。

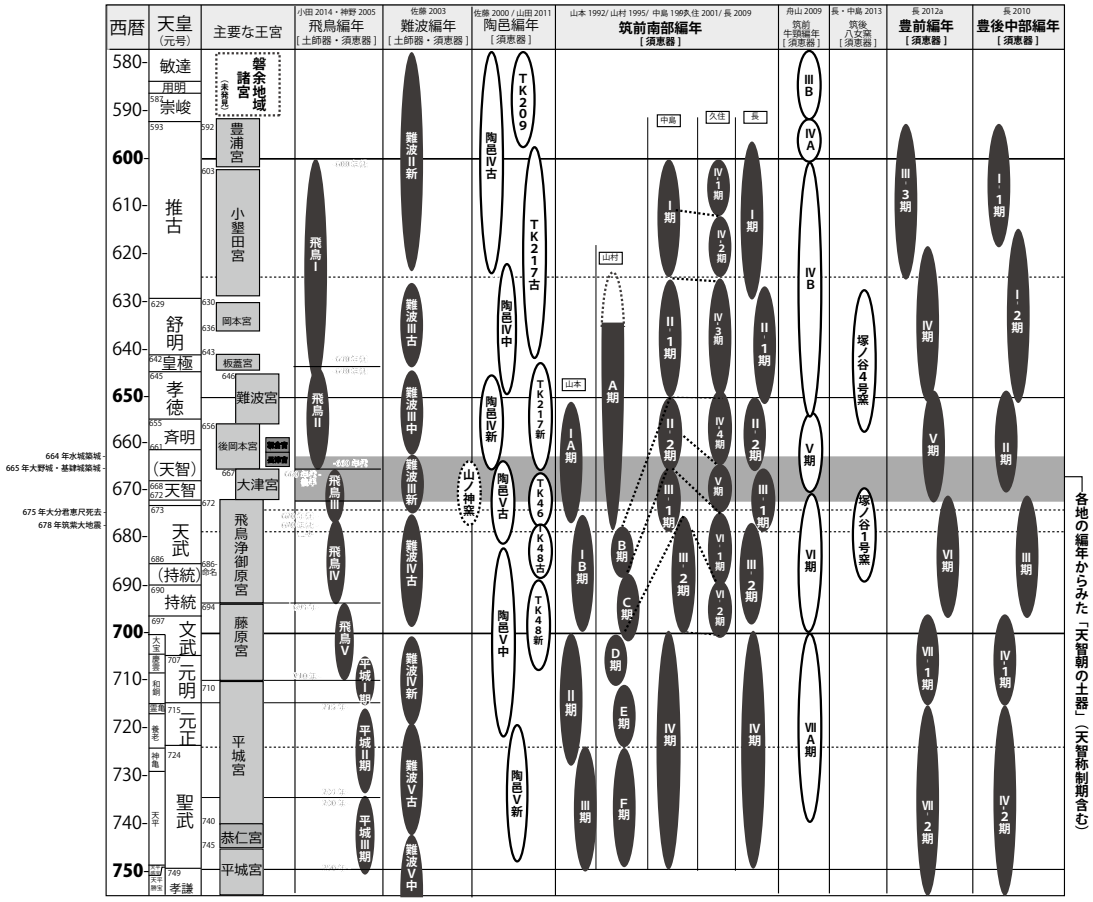
第７章「マツリの記録」では、今井涼子が大宰府学研究の一環として記録蓄積してきた「九州国立博物館デジタルアーカイブス」の概要を紹介した。本アーカイブスでは、当館隣接地の太宰府天満宮を筆頭に九州の無形民俗文化財のデジタルハイビジョン撮影・デジタル静止画像撮影を実施してきた。これらの動画は九州国立博物館の展示事業に利用する他、九州国立博物館ホームページ上でも公開し、ひろく視聴できる状態になっている。アーカイブスの記録を眺めた後に、第７部で主体的に取り上げた古代祭祀を振り返れば、遺跡に残る情報量の背後に、痕跡が残らない膨大な情報量が存在することを改めて認識できる。

おわりに

以上、各論考をテーマ毎に整理し、大宰府学研究の成果を概略的にまとめた。本整理が筆者自身の関心に偏ることは否定しないが、各論考を横断する共通見解と方法論的課題が見えてきた。共通見解につ

いては、調査研究のみならず、展示公開・教育普及活動でも大いに参考としたい。今後の大宰府学研究を進める上で、より重要なのは方法論的課題である。この方法論的課題を克服する過程を通じて、大宰府学研究はさらなる飛躍が期待できる。続く第２章「研究の展望」では、方法論的課題を足掛かりに大宰府学研究の展望をまとめたい。

「大宰府史跡群」という視覚



土器編年比較図（第１部第１章「西海道の土器編年」より引用）

第２章

研究の展望

楠井　隆志　　小嶋　篤

はじめに

本書を総括するにあたり、大宰府学研究の展望を「調査研究」と「博物館活動」に分けて明示する。

調査研究の展望では、第１章「研究の成果」で見出された方法論的課題を基に、今後の展望を記す。博物館活動の展望では、大宰府学研究の過程を再確認し、博物館としての課題を記す。

１．調査研究の展望

本書では大宰府学研究の展望を見通す上での重要な提言が、複数の論考で横断的になされている。本提言を端的に示すのは、第４部第１章「大宰府の機能と律令国家」で佐藤信が提唱した「大宰府史跡群」という視角である。本視角は、大宰府官衙・古代山城・寺院・交通路等の各遺跡を総体として大宰府史跡群と捉えようというものである。第１部第２章「西海道北部の土器生産」において、石木秀啓より牛頸窯跡群の操業が地域動態（軍事要塞化）と相関関係にあるとの仮説が提示されたが、本仮説も大宰府史跡群という視角の有効性を示す。また、第２部第３章「日韓古代山城の年代論」では、向井一雄が古代山城研究の次のフェーズとして、７世紀の地域支配体制の確立過程を課題に挙げており、やはり関連学問を含めた広域的視野が求められている。

大宰府史跡群という視角は、大宰府の景観復元と大きく重なる。第４部「大宰府の官衙と諸司」では大宰府官衙の配列や範囲、第５部「大宰府の客館と響銅」では古代都市の姿に迫ったが、宝満山等の山地も含めた大宰府の全体像を探る試みは、今後の大宰府学研究の学術的基盤となり得る。大宰府の全体像を明らかにするには、個別研究の統合、すなわち各研究間での批判検証を前提としており、自ずと方法論的練磨が図られるからである。

佐藤が明示したように、大宰府学研究には「遺跡だけでなく、史料・建造物・美術工芸などの多様な文化遺産からなる歴史資料を、総合的・学際的に調査・研究することが求められる」。その点において、第６部「山岳信仰と宝満山」は、森弘子の研究蓄積を軸に、通時的かつ総合的に研究成果が整理されており模範的内容となっている。また、第２部「筑紫の大城」では、赤司善彦がＧＩＳを利用した広域遺跡の把握方法を示した。第３部と第４部にかけては、小嶋篤が木炭・鉄生産と鉄器製作・使用・保管・再利用・廃棄の研究成果を統合し、大宰府の軍備の実態に迫った。第５部「大宰府の客館と響銅」では、井上信正により学際的視野から客館を中心とした古代都市の姿が論じられた。これらは一定の成果を挙げているが、歴史研究における個別研究の統合には、年代論という大きな壁が立ちはだかる。本書の冒頭、第１部・第２部に年代論を据えたのは、大宰府学研究の基盤を整えるとともに、基盤自体が抱える問題・脆弱性を直視するためであった。

第１部「大宰府の器と編年」は、文献史学・自然科学とならんで、古代史研究の一翼を担う考古学の年代論に取り組んだ。その中で年代論の精緻化・再検討に繋がる課題として、「遺跡性格差と土器編年」が取り上げられた。遺跡性格差を編年研究に組み込むことで、時間軸の整理がより精緻になることが期待できる。本課題については、第１部第１章「西海道と土器編年」で長直信が理論的枠組、第１部３章「西海道南部の土器生産」で松﨑大嗣が具体的事象を提示し、土器様式が著しく変遷する７－８世紀において、遺跡性格差と土器編年に有機的な関係があることは明らかとなった。ただし、遺跡性格差と土器編

年の関係を明らかにし、より普遍的な編年案を提示することは容易な作業ではない。本作業は個別分析による検証を積み上げつつ、同時に方法論的整備に向けた議論が求められる。遺跡性格差と土器編年の問題は、第２部「大宰府と古代山城の年代論」をはじめ、第３部～第７部の各論考の多くに波及する根幹的問題と言えよう。

この根幹的問題の解決を下支えするのは、発掘調査時の記録である。第２部第２章「大宰府造営の年代論」で杉原敏之が強調するように、層位的検出の記録が重要である。その調査記録を前提に、小田和利・下原幸裕が第４部第５・６章「前面官衙跡の調査研究成果」「蔵司地区官衙跡の調査研究成果」をまとめた。また、小田富士雄が記す第６部第２章「考古学からみた宝満山信仰の始まり」、第７部第２章「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」では、今日の研究基盤となった学術調査の成果がまとめられるとともに、最新研究からの再検討・再評価がなされている点で重要である。とくに沖ノ島祭祀遺跡の学術調査は、平成29年の世界文化遺産登録にいたる事実上の出発点となった。第７部第３章「宗像・沖ノ島祭祀の実像」では、上記の発掘調査成果を土台に「祭式」からの再検討がなされ、沖ノ島祭祀の具体的な姿が描写されるに至った。笹生衛が新たに示した「祭式」の視角は、これまで漠然と祭祀遺物・祭祀遺構と捉えられていた資料に対する再検討を促すとともに、遺跡調査手法のさらなる練磨を促進するものとなる。小嶋は第７部第４章「巨岩と社殿」で遺構の時空間的把握と遺物の使用痕跡分析を統合することで、祭祀の具体的所作に迫った。

上記の考古資料とともに、暦年代比定、さらには機能等を把握する上で重要となるのが、文献史学からの検討である。大宰府の文字史料では、政庁周辺官衙跡の不丁地区出土木簡が年代論および機能論で重要な役割を果たしている。第４部第４章「大宰府史跡出土の付札木簡」では、酒井芳司が大宰府の文書行政のあり方を「平城京－大宰府－国－郡」という機構の中で位置付けた。また、第４部第２・３章「大宰府の官衙」・「大宰府の諸司」では、森公章・松川博一によって、発掘調査で明らかになった各官衙に対し、文字史料から官衙の機能と諸司比定の提示がなされた。

以上、大宰府学研究の展望として、年代論も含めた大宰府史跡群の研究、大宰府の景観復元が重要と位置付けた。そのためには、重藤輝行が示した古墳時代も含めた「長期的視野での検討」、上田龍児が実践した「周辺集落の実態把握」、小嶋篤が指摘する「大宰府官衙・古代山城造営による環境改変」等も課題となってくる。これらを批判統合して、ようやく古代大宰府の一場面にたどり着くのである。大宰府学研究のさらなる飛躍のためには、松尾尚哉が第３部第７章「大野城と宇美の歴史的繋がり」で実践したような、「大宰府を基点に形成された歴史的環境」の追究も求められる。

２．博物館活動の展望

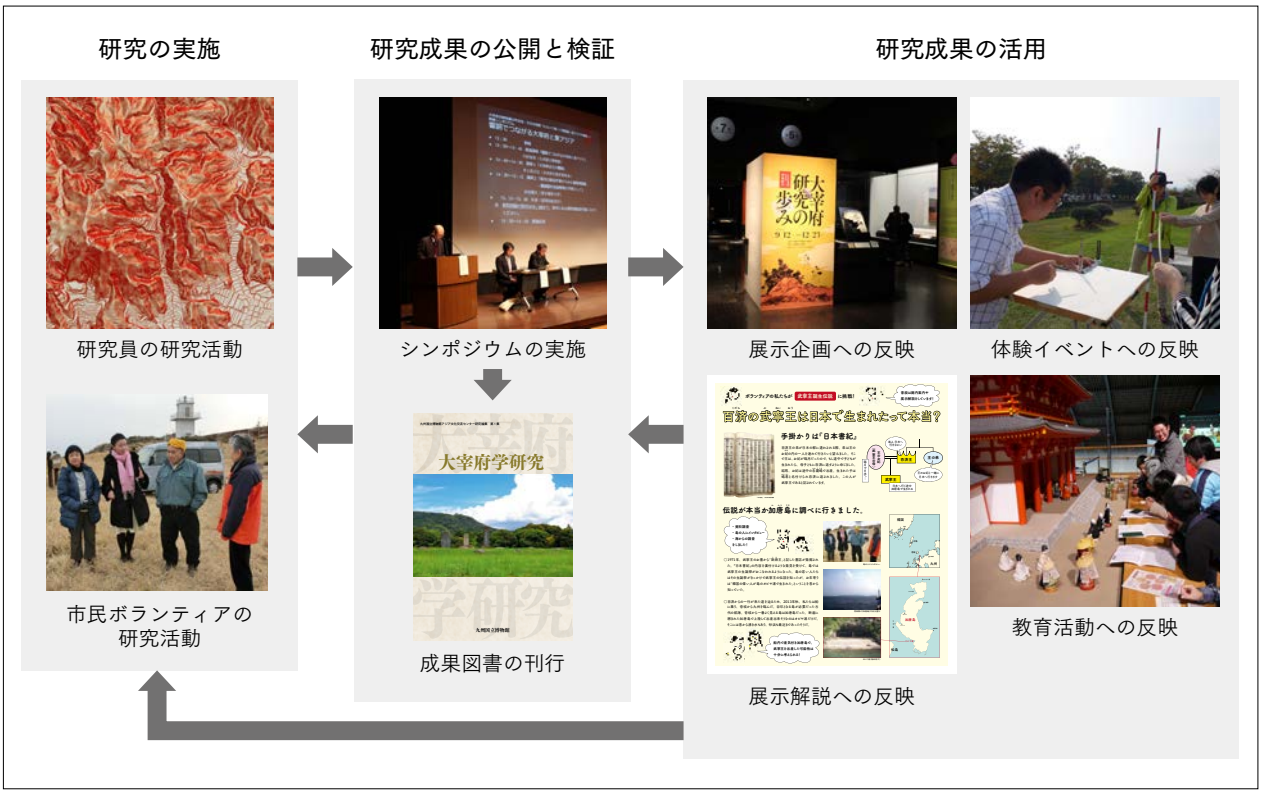
大宰府学研究の目的は、市民とともに「大宰府を基点に形成された歴史的環境」を研究し、その成果の公開・活用を考えることにある。今後の博物館活動の展望を記すにあたり、以下では、大宰府学研究の流れを再確認する。

まず、「研究の実施」は九州国立博物館の研究員を中心に、外部研究者および市民ボランティアが行う。研究員が研究テーマを設定する場合が多いのが実態だが、講演会・シンポジウムで会場から出た意見や、展示に対する質問、文化財指定等で市民の関心が高い内容を積極的に組み込んでいる。

「研究成果の公開と検証」は、学会発表や学術雑誌への投稿に加え、講演会やシンポジウムを実施している。これらの実施にあたっては、九州国立博物館が単独で行うのは稀で、研究テーマと深く関わる地元の関係機関と連携実施することで、成果の公開・検証に際しての多面的な相乗効果を図っている。また、今回はじめて『九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集』を編んだ。その理由は、論考の多くが当日配布資料に掲載されたものであり、主催者として成果の公開と検証が不十分であったとの反省からである。

研究成果の公開と検証を経て、「研究成果の活用」にいたる。九州国立博物館では、特別展に加えて、常設展示にあたる文化交流展で一年に約300回の展示替えを実施していることもあり、スピード感をもって最新の成果を展示企画に反映することができる。また、「学校よりも面白く、教科書よりもわかりやすい」をスローガンに、展示解説・体験イベント・教育活動等を市民ボランティア等の協力の下、実施している。

以上が大宰府学研究の一連の流れであるが、本事業は一方向的な流れで完結するものではない。「大宰府を基点に形成された歴史的環境」から「学んだものを活かし、新たな問いを生み出す」という過程こそに本質があるからである。つまり、大宰府学研究は循環型の事業と言えよう。現在、本事業は九州国立博物館の研究員を主体に進めているのが実情であるが、この循環の環をより広くする環境を整えることが、今後の博物館活動に求められる。



大宰府学研究の過程

おわりに

大宰府学研究の射程は広く深いが、その歩みは着実に進んでいる。本書は主に古代の大宰府に焦点を当てた内容だが、古代都市・大宰府の上には太宰府市・筑紫野市が、西海道の上には九州が重なっている。さらにその先には、アジアが広がっている。そのような重層的な繋がりについては、本書の成果も学術的基盤としながら、「平成」の次の時代に取り組んでいきたい。

九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集　第１集

大宰府学研究

平成31年（2019）３月31日

編集・発行　九州国立博物館
福岡県立アジア文化交流センター
〒818-0118　福岡県太宰府市石坂４－７－２
www.kyuhaku.jp

印刷・製本　株式会社 西日本新聞印刷

KYUSHU NATIONAL MUSEUM

九州国立博物館